国道 438 号道路改築事業 (飯山工区) に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

第 8 冊

岸の上遺跡 Ⅱ

第 1 分冊

2023.3

香 川 県 教 育 委 員 会

国道 438 号道路改築事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告
第 8 冊

岸の上遺跡 Ⅱ

第 1 分冊

2023.3

香 川 県 教 育 委 員 会

序　文

本書には、国道 438 号道路改築事業（飯山工区) に伴い発掘調査を実施した、香川県丸亀市飯山町川原に所在する岸の上遺跡（きしのうえいせき）の報告を収録しています。

岸の上遺跡では、古墳時代後期の集落跡、古代の大規模な掘立柱建物群と溝群を検出しました。

特に、古代の遺構については、当遺跡を東西に横断する古代の基幹道路である南海道推定ラインに想定されており、南海道の側溝が検出されたほか、規格的に配置された大規模な倉庫群や掘立柱建物群が検出され、古代の讃岐国鵜足郡のなかで重要な施設が所在したことが想定され、大きな成果を上げることができました。

また、古墳時代後期の遺構群については、比較的短期間に営まれた集落で多量の鍛冶関連遺物が出土し、鍛冶に関わる集落であることがわかり、貴重な成果となりました。

本報告書が、本県の歴史研究の資料として広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理、報告書の刊行に至るまでの間、関係諸機関、地元関係者各位には、多大なご協力とご指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

令和５年３月

香川県埋蔵文化財センター
所長　高原　康

例　言

1　本報告書は、国道 438 号道路改築事業 (飯山工区) に伴い実施した、岸の上遺跡（香川県丸亀市飯山町川原）の発掘調査の本報告である。

2　発掘調査及び整理作業は香川県教育委員会が調査主体となり、香川県埋蔵文化財センターが実施した。

3　本報告書で報告する範囲の発掘調査期間と担当者は次のとおりである。

期間　平成 25 年 4 月～ 5 月
担当　主任文化財専門員　森下英治　　文化財専門員　小野秀幸　　文化財専門員　長井博志
　　技師　真鍋貴匡
期間　平成 26 年 11 月～平成 27 年 3 月
担当　主任文化財専門員　西村尋文　　文化財専門員　小野秀幸　　技師　真鍋貴匡
期間　平成 28 年 4 月～平成 29 年 3 月
担当　主任文化財専門員　森下英治　　技師　真鍋貴匡　　技師　竹内裕貴　　技師　大山裕矢
期間　平成 30 年 11 月～平成 31 年 3 月
担当　技師　竹内裕貴　　技師　益崎卓己

4　発掘調査及び整理作業においては、次の方々、機関の協力を得た。
香川県産業技術センター、地元自治会、地元水利組合

5　報告書の作成は香川県埋蔵文化財センターが実施した。第 4 章以外の執筆・編集は山元が行った。第 4 章の執筆者については、本文を参照されたい。

6　本書で用いる座標系は世界測地系 (国土座標第Ⅳ系) で、標高は東京湾平均海水面を基準とした。

7　遺構は、次の略号により表示した
SA：柵　SB：建物　SD：溝　SF：炉跡　SH：竪穴建物　SK：土坑等　SP：柱穴
SR：自然河川　ST：墓　SX：その他の遺構

8　遺構断面図の水平線状の数値は水平線の標高線 (m) である、

9　遺構断面図中の注記の一部については、色調に小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』を参照した。

10　土器観察表の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』を参照した。同表中の残存率は遺物の図化部分に占める割合であり、完形品に対する割合ではない。

11　遺物の時期は以下の文献に拠った。

中村浩 1995「須恵器集成図録」雄山閣出版株式会社

佐藤竜馬 1993「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『関西大学考古学研究室開設 40 周年記念考古学論叢』関西大学文学部考古学研究室

佐藤竜馬 2016「讃岐における古代～中世土器編年をめぐる基礎作業 (1)　9 世紀後葉～ 11 世紀前葉の供膳器種」『香川県埋蔵文化財センター年報　平成 26 年度』

佐藤竜馬 2000「高松平野と周辺地域における中世土器の編年」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第 4 冊　空港跡地遺跡Ⅳ』香川県教育委員会・㈶香川県埋蔵文化財調査センター

松本和彦 2003「西の丸町地区出土の陶磁器について」『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第 5 冊　高松城跡（西の丸町地区）Ⅲ』香川県教育委員会・㈶香川県埋蔵文化財調査センター

12　本文中の須恵器の時期は、中村浩 1995「須恵器集成図録」に拠った。

本文目次

第1章　調査に至る経緯と経過

第1節　調査に至る経緯……1
第2節　調査の経過……2
第3節　整理作業の経過……3

第2章　立地と環境……5

第3章　調査の成果

第1節　調査の方法……8
第2節　土層……8
第3節　遺構・遺物……47

（第2分冊）

第4章　自然科学分析

第1節　碧玉製管玉の石材産地・遺物群同定……377
第2節　岸の上遺跡に係るガラス玉類の蛍光X線分析……406
第3節　植物珪酸体分析・樹種同定……409
第4節　鉄滓分析……416
第5節　金属器保存処理（1）……487
第6節　金属器保存処理（2）……500

第5章　まとめ

第1節　古墳時代後期の集落について……503
第2節　古代の遺構群（7世紀末～9世紀）について……513
第3節　中・近世の遺構……529

挿図目次

第1図　遺跡の位置……1
第2図　周辺の遺跡……6
第3図　調査区割図、土層断面図位置図……9
第4図　調査区西壁土層断面図（現市道より南）1……10
第5図　調査区西壁土層断面図（現市道より北）2……11
第6図　①1区東壁土層断面図1……13・14
第7図　②1区東壁土層断面図2……15・16
第8図　③2区東壁土層断面図……17
第9図　④2区西壁土層断面図……19・20
第10図　④2区西壁土層注記……21
第11図　⑤2区南壁土層断面図……23・24
第12図　⑥2区北壁土層断面図……25・26
第13図　⑦2区南北あぜ土層断面図……27・28
第14図　⑧3区西壁土層断面図……29
第15図　⑨3区・10区北壁土層断面図……30
第16図　⑩7・8・10区西壁土層断面図1……31・32
第17図　⑩7・8・10区西壁土層断面図2……33・34
第18図　⑩7・8・10区西壁土層注記……35
第19図　⑪7区南壁土層断面図……37
第20図　⑫7区北壁土層断面図……38
第21図　⑬8-2-3区・8-2-4区東壁土層断面……39・40
第22図　⑭8-2-3区西壁土層断面図……41
第23図　⑮8-2-2区・8-2-4区北壁土層断面……41
第24図　⑯8-3区南壁土層断面図、⑰8-2-3区・9区北壁土層断面図……42
第25図　⑱9区東壁土層断面図……43
第26図　古墳時代後期遺構配置図……45・46
第27図　SH1005平・断面図、SH1008平面図……48
第28図　SH1005出土遺物……49
第29図　SH1015平・断面図、出土遺物……50
第30図　SH1104平・断面図、竈遺物出土状況……51
第31図　SH1104出土遺物……52
第32図　SH1106・SH1107平面図……54
第33図　SH1106・SH1107断面図……55
第34図　SH1106・SH1107出土遺物……56
第35図　SH1501平面図、竈遺物出土状況……57
第36図　SH1501断面図……58
第37図　SH1501出土遺物……59
第38図　SH1502・SH1503平・断面図……60
第39図　SH1502・SH1503出土遺物1……61
第40図　SH1502出土遺物2……62
第41図　SH1504平・断面図、出土遺物……64
第42図　SH1505平・断面図、出土遺物……65
第43図　SH3001平・断面図1……66
第44図　SH3001断面図2……67
第45図　SH3001出土遺物……68
第46図　SH3002平・断面図……70
第47図　SH7002平・断面図……71
第48図　SH7003平・断面図……72
第49図　SH7002・SH7003出土遺物……73
第50図　SH7007平面図、竈遺物出土状況……74
第51図　SH7007断面図……75
第52図　SH7007出土遺物……76
第53図　SH7008平面図、竈遺物出土状況……77
第54図　SH7008断面図……78
第55図　SH7008出土遺物1……79
第56図　SH7008出土遺物2……80
第57図　SH7009平・断面図、出土遺物……81
第58図　SH8001平面図……82
第59図　SH8001断面図、出土遺物……83
第60図　SH8002平・断面図、出土遺物……84
第61図　SH8003平・断面図……85
第62図　SH8004平・断面図……86
第63図　SH8005平面図……87
第64図　SH8005断面図、出土遺物……88
第65図　SH8007平・断面図1……90
第66図　SH8007断面図2、竈遺物出土状況、出土遺物……91
第67図　SH8008平・断面図1……92
第68図　SH8008断面図2、出土遺物……93
第69図　SH9001平・断面図……94
第70図　SH9001出土遺物……95
第71図　SH11001平面図……96
第72図　SH11001断面図1……97
第73図　SH11001断面図2……98
第74図　SH11001出土遺物1……99
第75図　SH11001出土遺物2……100
第76図　SH11002平面図……101
第77図　SH11002断面図……102
第78図　SH11007平面図……103
第79図　SH11007断面図、出土遺物……104
第80図　SH11008平面図……105
第81図　SH11008断面図……106
第82図　SH11010平・断面図、出土遺物……106
第83図　SH12002平面図……107
第84図　SH12002断面図、出土遺物……108
第85図　SH12003平・断面図……109
第86図　SH12003出土遺物……110
第87図　SH12004平・断面図……111
第88図　SH12004断面図、出土遺物……112
第89図　SH12005平面図……113
第90図　SH12005断面図……114
第91図　SH12005出土遺物1……115
第92図　SH12005出土遺物2……116
第93図　SB1002平・断面図……117
第94図　SB2003平・断面図……118
第95図　SB2004平面図……119
第96図　SB2004断面図、出土遺物……120
第97図　SB2005平・断面図、出土遺物……121
第98図　SB3001平・断面図……122
第99図　SB3002平・断面図、出土遺物……124
第100図　SB7001平面図……125
第101図　SB7001断面図、出土遺物……126
第102図　SB7002平面図……127
第103図　SB7002断面図、出土遺物……128
第104図　SB7004平面図……129
第105図　SB7004断面図、出土遺物……130
第106図　SB7005平・断面図、出土遺物……131
第107図　SB7006平・断面図、出土遺物……132
第108図　SB7007平・断面図……134
第109図　SB7007出土遺物……135
第110図　SB7008平・断面図……136
第111図　SB7009平・断面図、出土遺物……137
第112図　SB7010平・断面図、出土遺物……138
第113図　SB7011平・断面図、出土遺物……139

第 114 図　SB8004 平面図……140
第 115 図　SB8004 断面図……141
第 116 図　SB8006 平・断面図、出土遺物……142
第 117 図　SB8007 平面図……143
第 118 図　SB8007 断面図、出土遺物……144
第 119 図　SB8014 平・断面図、出土遺物……145
第 120 図　SB8015 平・断面図、出土遺物……146
第 121 図　SB8016 平・断面図……147
第 122 図　SB8018 平・断面図、出土遺物……149・150
第 123 図　SB8019 平面図……151
第 124 図　SB8019 断面図、出土遺物……152
第 125 図　SB9001 平・断面図……153
第 126 図　SK1004 平・断面図 ……154
第 127 図　SK1006 平・断面図 ……154
第 128 図　SK1007 平・断面図 ……154
第 129 図　SK1501 平・断面図 ……155
第 130 図　SK7002 平・断面図、出土遺物 ……156
第 131 図　SK8004 平・断面図 ……156
第 132 図　SK10001 平・断面図 ……156
第 133 図　SK11003 平・断面図 ……157
第 134 図　SK12003 平・断面図、出土遺物 ……157
第 135 図　SK12004 平・断面図 ……157
第 136 図　SK12005 平・断面図、出土遺物 ……158
第 137 図　SK12006 平・断面図 ……158
第 138 図　SF3001・SF3002 平・断面図、出土遺物 ……160
第 139 図　SF7001 平・断面図……161
第 140 図　SF7001 出土遺物……162
第 141 図　ST2001 平・断・立面図 ……163
第 142 図　ST2001 出土遺物 1 ……164
第 143 図　ST2001 出土遺物 2……165
第 144 図　ST2002 平・断面図、出土遺物 ……166
第 145 図　SX1001 平・断面図、出土遺物 ……167
第 146 図　SX3001 平・断面図 ……167
第 147 図　SX3002 平・断面図 ……168
第 148 図　SX7003 平・断面図、出土遺物 ……168
第 149 図　SX7004 平・断面図 ……169
第 150 図　SX7004 出土遺物 1……170
第 151 図　SX7004 出土遺物 2……171
第 152 図　SX8004 平・断面図 ……171
第 153 図　SX8006 平・断面図 ……172
第 154 図　SX8007 平・断面図 ……172
第 155 図　SX8010 平・断・立面図、出土遺物 ……173
第 156 図　SX9001 平・断面図、出土遺物 ……174
第 157 図　SX9003 平・断面図 1、出土遺物……176
第 158 図　SX9003 被熱範囲・崩落土除去後 ……177
第 159 図　SX9003 平・断面図 2……178
第 160 図　SX9003 炭化物範囲・完掘状況 ……179
第 161 図　SX12004 平・断面図 ……180
第 162 図　SX12005 平・断面図 ……180
第 163 図　SX12006 平・断面図 ……180
第 164 図　SX12007 平・断面図 ……181
第 165 図　SX12008 平・断面図、出土遺物 ……181
第 166 図　SD2013・SD2014 平・断面図……182
第 167 図　SD2013 出土遺物 1……183
第 168 図　SD2013 出土遺物 2、SD2014 出土遺物……184
第 169 図　SD2028 平・断面図 ……185
第 170 図　SD2028 出土遺物 ……186
第 171 図　SD2015 平・断面図 ……187
第 172 図　SD2016・SD2017・SD2019 平・断面図 ……189
第 173 図　SD2016 出土遺物 ……190
第 174 図　SD2018 平・断面図 ……190
第 175 図　SD2020・SD2021 平・断面図、SD2020 出土遺物 191
第 176 図　SR2001・SD2022 ～ SD2025・SD2029
　　平面図 ……193
第 177 図　SR2001・SD2022 ～ SD2025・SD2029 断面図、
　　出土遺物 ……194
第 178 図　SD2030・SD2032 平・断面図、SD2032 出土遺物 195
第 179 図　SD7002 平・断面図、出土遺物 ……196
第 180 図　SD7003 平・断面図 ……196
第 181 図　SD7004 平・断面図 ……197
第 182 図　SD8007 平・断面図 ……198
第 183 図　SD10002 平・断面図 ……198
第 184 図　SD10003 平・断面図 ……199
第 185 図　1 区ピット（古墳時代）平・断面図 1、
　　出土遺物 1……200
第 186 図　1 区ピット（古墳時代）平・断面図 2、
　　出土遺物 2……201
第 187 図　1 区ピット（古墳時代）平・断面図 3、
　　出土遺物 3……202
第 188 図　1 区ピット（古墳時代）平・断面図 4、
　　出土遺物 4……203
第 189 図　2 区・3 区ピット（古墳時代）平・断面図……204
第 190 図　7 区・8 区ピット（古墳時代）平・断面図、
　　出土遺物 ……205
第 191 図　8 区ピット（古墳時代）平・断面図、出土遺物
　　9 区ピット（古墳時代）平・断面図 1……206
第 192 図　9 区ピット（古墳時代）平・断面図 2
　　10 区ピット（古墳時代）平・断面図、
　　出土遺物 ……207
第 193 図　11 区ピット（古墳時代）平・断面図 1、
　　出土遺物 1 ……208
第 194 図　11 区ピット（古墳時代）平・断面図 2……209
第 195 図　11 区ピット（古墳時代）平・断面図 3、
　　出土遺物 2……210
第 196 図　11 区ピット（古墳時代）平・断面図 4
　　12 区ピット（古墳時代）平・断面図 1、
　　出土遺物 1……211
第 197 図　12 区ピット（古墳時代）平・断面図 2、
　　出土遺物 2……212
第 198 図　12 区ピット（古墳時代）平・断面図 3……213
第 199 図　12 区ピット（古墳時代）平・断面図 4……214
第 200 図　12 区ピット（古墳時代）平・断面図 5、
　　出土遺物 3……215
第 201 図　古代遺構配置図……217・218
第 202 図　SB1001 平・断面図……220
第 203 図　SB1003 平・断面図、出土遺物……221
第 204 図　SB2001a・b 平面図 ……223
第 205 図　SB2001a 断面図、出土遺物……224
第 206 図　SB2001b 断面図、出土遺物 ……225
第 207 図　SB2002 平面図……226
第 208 図　SB2002 断面図……227
第 209 図　SA2001a・b 平・断面図、出土遺物 ……229・230
第 210 図　SA2002a・b 平・断面図、出土遺物 ……231
第 211 図　SB8001 平・断面図……232
第 212 図　SB8001 断面図 2、出土遺物 ……233
第 213 図　SB8002・SB8003 平・断面図 1……235・236
第 214 図　SB8002・SB8003 断面図 2……237
第 215 図　SB8002・SB8003 出土遺物 ……238
第 216 図　SB8008 平・断面図 1 ……239・240
第 217 図　SB8008 断面図 2 、出土遺物……241

第 218 図　SB8009 平・断面図 1 ……243･244
第 219 図　SB8009 断面図 2 ……245
第 220 図　SB8009 出土遺物……246
第 221 図　SB8010・SB8012 平・断面図 1 ……247･248
第 222 図　SB8010・SB8012 断面図 2……249
第 223 図　SB8010・SB8012 断面図 3、出土遺物……250
第 224 図　SB8013 平面図……251
第 225 図　SB8013 断面図……252
第 226 図　SB8017 平面図、出土遺物……253
第 227 図　SB8017 断面図……254
第 228 図　SB8020 平面図……255
第 229 図　SB8020 断面図、出土遺物……256
第 230 図　SB8021 平面図……257
第 231 図　SB8021 断面図……258
第 232 図　SB8022 平・断面図、出土遺物……259･260
第 233 図　SB8023 平・断面図……262
第 234 図　SB12001 平・断面図……263
第 235 図　SB12001 断面図 2、出土遺物 ……264
第 236 図　SK1002 平・断面図、出土遺物 ……264
第 237 図　SK7001 平・断面図 ……265
第 238 図　SK11002 平・断面図 ……265
第 239 図　SK12001 平・断面図、出土遺物 ……266
第 240 図　SK12002 平・断面図、出土遺物 ……267
第 241 図　SX2022 平・断面図 ……267
第 242 図　SX7002 平・断面図、出土遺物 ……268
第 243 図　SX8001 平・断面図 ……269
第 244 図　SX10001 平・断面図、出土遺物 ……270
第 245 図　SX12001 平・断面図、出土遺物 ……271
第 246 図　SX12002 平・断面図、出土遺物 ……271
第 247 図　SD2001 平・断面図 ……273
第 248 図　SD2002 平・断面図 ……274
第 249 図　SD2001・SD2002 出土遺物……275
第 250 図　SD2004・SD2007 平・断面図……276
第 251 図　SD2004 出土遺物 ……277
第 252 図　SD2005 平・断面図 ……277
第 253 図　SD2008 平面図 ……278
第 254 図　SD2008 断面図 ……279
第 255 図　SD2008 出土遺物 1 ……280
第 256 図　SD2008 出土遺物 2 ……281
第 257 図　SD2010 平・断面図、出土遺物 ……282
第 258 図　SD2011 平・断面図 ……283
第 259 図　SD2011 出土遺物 ……284
第 260 図　SD3001、SD3002、SD3003 平・断面図 1……285
第 261 図　SD3001、SD3002、SD3003 断面図 2、
出土遺物 ……286
第 262 図　SD7001 平・断面図、出土遺物 ……288
第 263 図　SD8001 平・断面図 ……288
第 264 図　SD8002 平・断面図、出土遺物 ……289･290
第 265 図　SD8003 平・断面図 ……291
第 266 図　SD8004 平・断面図 ……291
第 267 図　SD8005 平・断面図 ……291
第 268 図　SD10001 平・断面図、出土遺物 ……292
第 269 図　SR7001 平・断面図、出土遺物……293
第 270 図　1 区ピット（古代）平・断面図、出土遺物 ….295
第 271 図　2 区南部小ピット群検出状況 ……296
第 272 図　2 区ピット（古代）平・断面図 1、出土遺物 1　297
第 273 図　2 区ピット（古代）平・断面図 2、出土遺物 2　298
第 274 図　8 区小ピット群検出状況 ……300
第 275 図　7 区ピット（古代）平・断面図、出土遺物、
8 区ピット（古代）平・断面図 1、出土遺物 1　301
第 276 図　8 区ピット（古代）平・断面図 2、出土遺物 2・302
第 277 図　8 区ピット（古代）平・断面図 3、出土遺物 3・303
第 278 図　8 区ピット（古代）平・断面図 4、出土遺物 4・304
第 279 図　8 区ピット（古代）平・断面図 5、出土遺物 5、
10 区ピット（古代）平・断面図 1……305
第 280 図　10 区ピット（古代）平・断面図 2、出土遺物
11 区ピット（古代）平・断面図 1……307
第 281 図　11 区ピット（古代）平・断面図 2、
出土遺物 1 ……308
第 282 図　11 区ピット（古代）平・断面図 3……309
第 283 図　11 区ピット（古代）平・断面図 4、
出土遺物 2 ……310
第 284 図　11 区ピット（古代）平・断面図 5……311
第 285 図　11 区ピット（古代）平・断面図 6、
出土遺物 3 ……312
第 286 図　11 区ピット（古代）平・断面図 7……313
第 287 図　11 区ピット（古代）平・断面図 8、
12 区ピット（古代）平・断面図 1、
出土遺物 1 ……314
第 288 図　12 区ピット（古代）平・断面図 2、
出土遺物 2 ……315
第 289 図　12 区ピット（古代）平・断面図 3、
出土遺物 3 ……316
第 290 図　12 区ピット（古代）平・断面図 4、
出土遺物 4 ……317
第 291 図　12 区ピット（古代）平・断面図 5、
出土遺物 5 ……318
第 292 図　2 区中世以降遺構配置図 ……320
第 293 図　SB2006・SA2003・SA2004 平・断面図 …321･322
第 294 図　SB2006・SA2003・SA2004 出土遺物 ……323
第 295 図　SB2007 平・断面図、出土遺物……325
第 296 図　SX7001 平・断面図 ……326
第 297 図　SX7001 出土遺物 ……327
第 298 図　SD2006 平面図 ……328
第 299 図　SD2006 断面図、出土遺物 ……329
第 300 図　SD2006 遺物・石出土状況 ……330
第 301 図　SD2007・SX2020 平・断面図……331
第 302 図　SD2007・SX2020 遺物出土状況、出土遺物 ….332
第 303 図　SX2001 平・断面図、出土遺物 ……334
第 304 図　SX2002 平・断面図、出土遺物 ……335
第 305 図　SX2003 平・断面図 ……336
第 306 図　SX2003 出土遺物 ……336
第 307 図　SX2004 平・断面図、出土遺物 ……337
第 308 図　SX2005 平・断面図、出土遺物 ……338
第 309 図　SX2006 平・断面図、出土遺物 ……338
第 310 図　SX2007 平・断面図、出土遺物 ……339
第 311 図　SX2008 平・断面図、出土遺物 ……340
第 312 図　SX2010 平・断面図、出土遺物 ……340
第 313 図　SX2013 平・断面図、出土遺物 ……341
第 314 図　SX2015 平・断面図、出土遺物 ……341
第 315 図　SX2016 平・断面図、出土遺物 ……342
第 316 図　SX2018 平・断面図、出土遺物 ……342
第 317 図　SX2019 平・断面図、出土遺物 ……343
第 318 図　SX2021 平・断面図、出土遺物 ……344
第 319 図　SX2027 平・断面図、出土遺物 ……345
第 320 図　SX2029 平・断面図、出土遺物 ……346
第 321 図　SX8002 平・断面図、出土遺物 ……347
第 322 図　SX8009 平・断面図、出土遺物 ……347
第 323 図　2 区ピット（中世）平・断面図 1、出土遺物 1・349
第 324 図　2 区ピット（中世）平・断面図 2、出土遺物 2・350

第 325 図　8・10 区ピット（中世以降）平・断面図、
　　出土遺物 ……351
第 326 図　1 区　2 層出土遺物……351
第 327 図　2 区・3 区・7 区・8 区 2 層出土遺物……352
第 328 図　10 区 2 層玉・鉄滓出土状況 1……354
第 329 図　10 区 2 層玉・鉄滓出土状況 2（集中部拡大）…355
第 330 図　8-2-3 区・10 区南 2 層出土遺物 1 ……356
第 331 図　8-2-3 区・10 区南 2 層出土遺物 2 ……357
第 332 図　8-2-3 区・10 区南 2 層出土遺物 3 ……358
第 333 図　9 区・12 区 2 層、1c 層・1bt 層出土遺物……359
第 334 図　1 区 1b 層出土遺物 ……360
第 335 図　2 区 1b 層出土遺物 ……361
第 336 図　3 区 1b 層出土遺物 ……362
第 337 図　7 区 1b 層出土遺物 1 ……363
第 338 図　7 区 1b 層出土遺物 2 ……364
第 339 図　7 区・8 区・10 区南 1b 層出土遺物 ……365
第 340 図　9 区・12 区 1b 層出土遺物 ……366
第 341 図　2 区 1a 層出土遺物 ……368
第 342 図　7 区 1a 層出土遺物 ……369
第 343 図　7 区・8 区・10 区 1a 層出土遺物 ……370
第 344 図　2 区 1a 層・1b 層出土遺物 ……371
第 345 図　1 区その他遺構外出土遺物 1……372
第 346 図　1 区 その他遺構外出土遺物 2、
　　2 区・3 区その他遺構外出土遺物……373
第 347 図　7 区その他遺構外出土遺物 ……374
第 348 図　8 区・9 区・10 区・12 区その他遺構外
　　出土遺物 ……375
第 349 図　1 区・12 区攪乱その他遺構外出土遺物……376

表目次

第 1 表　層位対応表……8
第 2 表　報告ピット一覧（古墳時代）1……203
第 3 表　報告ピット一覧（古墳時代）2……204
第 4 表　報告ピット一覧（古墳時代）3……207
第 5 表　報告ピット一覧（古墳時代）4……215
第 6 表　報告ピット一覧（古墳時代）5……216
第 7 表　報告ピット一覧（古代）1……295
第 8 表　報告ピット一覧（古代）2……299
第 9 表　報告ピット一覧（古代）3……306
第 10 表　報告ピット一覧（古代）4……319
第 11 表　報告ピット一覧（中世以降）……350

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

岸の上遺跡は国道 438 号道路改築事業（飯山工区）に伴い発掘調査を実施した遺跡である。当該地区は、古代南海道が想定される東西方向の市道を横断していることから南海道に関連する遺構、また、微高地の縁辺部に立地することから集落の存在が想定された。

平成 24 年度に試掘調査が実施され、古墳時代～古代の集落、南海道に関連すると考えられる溝等を検出した。古代の集落は南海道に係る施設が想定された。これらの結果から、3,578㎡について「岸の上遺跡」として事業に先立ち発掘調査を実施した。

岸の上遺跡の発掘調査が進められていた平成 26 年度には、南海道の道路側溝と考えられる溝群と、

第１図　遺跡の位置

溝群と同じ主軸方位を持つ延長 26m以上の柵列を確認した。柵列は、南海道に隣接した古代官衙に係る施設の南辺の区画施設であることが想定され、柵列の北側に官衙群が広がる可能性が考えられたため、香川県埋蔵文化財センターにより 2 区の北側で試掘調査を実施した。その結果、本調査で検出した遺構群と関わりがあると考えられる古代の遺構や、中世の遺構の広がりが認められたため、岸の上遺跡に含め、あわせて調査を実施した。

なお、平成 29 年 1 月、8 区の調査中に、調査対象地の隣接地で、民地への進入路の施工工事が実施されていた。重要な遺構が検出された隣接地でもあり、施工業者、生涯学習・文化財課へ連絡の後遺構精査を実施したところ遺構を確認したため、文化財保護法上の手続きを行い 8-3 区として調査を実施した。

本報告書で取り扱う範囲の調査期間は、平成 25 年 4 ･5 月、平成 26 年 11 月～平成 27 年 3 月 (「国道 438 号道路改築事業（飯山工区) に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第 6 冊　岸の上遺跡Ⅰ」報告の 4 区部分を含む)、平成 28 年 4 月～平成 29 年 3 月、平成 30 年 11 月～平成 31 年 3 月、該当する調査面積は 4,338㎡である。

第 2 節　調査の経過

発掘調査は平成 25 年度～平成 28 年度、平成 30 年度に実施した。このうち、今回の報告の対象となるのは平成 25 年度（1 区)･平成 26 年度（2･3 区）･平成 28 年度（7 ～ 10 区）･平成 30 年度（11･12 区）調査部分である。

発掘調査の体制は一覧表のとおりである。

平成 25 年度発掘調査体制一覧

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課			香川県埋蔵文化財センター		
総括	課長	増田　宏	総括	所長	真鍋　昌宏
	副課長	木虎　淳		次長	前田　和也
総務・生涯学習推進グループ	課長補佐 (兼)	木虎　淳	総務課	課長（兼）	前田　和也
	副主幹	松下　由美子		主任	宮武　ふみ代
	主任主事	丸山　千晶		主任	俣野　英二
文化財グループ	課長補佐	片桐　孝浩		主任	中川　美江
	主任文化財専門員	山下　平重		主任	高木　秀哉
	文化財専門員	松本　和彦	調査課	課長	森　格也
				主任文化財専門員	森下　英治
				文化財専門員	小野　秀幸
				文化財専門員	長井　博志
				技師	真鍋　貴匡
				嘱託	今井　由佳
				嘱託	井上　加奈子

平成 26 年度発掘調査体制一覧

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課			香川県埋蔵文化財センター		
総括	課長	増田　宏	総括	所長	真鍋　昌宏
	副課長	川上　泰		次長	前田　和也
総務・生涯学習推進グループ	課長補佐 (兼)	川上　泰	総務課	課長（兼）	前田　和也
	副主幹	松下　由美子		主任	俣野　英二
	主事	和木　麻佳		主任	寺岡　仁美
文化財グループ	課長補佐	片桐　孝浩		主任	中川　美江
	主任文化財専門員	山下　平重		主任	高木　秀哉
	文化財専門員	松本　和彦		主任	岩崎　昌平
			調査課	課長	森　格也
				主任文化財専門員	西村　尋文
				文化財専門員	小野　秀幸
				技師	真鍋　貴匡
				嘱託	藤井　菜穂子
				嘱託	今井　由佳
				嘱託	井上　加奈子
				嘱託	名倉　美保
				嘱託	脇　恵
				嘱託	森　后代

平成 28 年度発掘調査体制一覧

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課			香川県埋蔵文化財センター		
総括	課長	小柳　和代	総括	所長	増田　宏
	副課長	片桐　孝浩		次長	森　格也
総務・生涯学習推進グループ	課長補佐 (兼)	愛染　伊知朗	総務課	課長（兼）	森　格也
	副主幹	松下　由美子		副主幹	斎藤　政好
	主事	和木　麻佳		主任	寺岡　仁美
文化財グループ	課長補佐	片桐　孝浩		主任	高木　秀哉
	主任文化財専門員	山下　平重		主任	丸尾　麻知子
	文化財専門員	松本　和彦		主任	西谷　敬司
				主任	岩崎　昌平
			調査課	課長	森　格也
				主任文化財専門員	森下　英治
				技師	真鍋　貴匡
				技師	竹内　裕貴
				技師	大山　裕矢
				嘱託	徳永　貴美
				嘱託	名倉　美保
				嘱託	藤井　菜穂子
				嘱託	脇　恵
				嘱託	角野　勲

平成 30 年度発掘調査体制一覧

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課			香川県埋蔵文化財センター		
総括	課長	白井　道代	総括	所長	西岡　達哉
	副課長	片桐　孝浩		次長	時松　弘志
総務・生涯学習推進グループ	課長補佐	中川　聡朗	総務課	課長（兼）	時松　浩志
	副主幹	長谷川　江里		副主幹	斎藤　政好
	主任主事	京兼　教恵		主任	高橋　範行
文化財グループ	課長補佐	片桐　孝浩		主任	丸尾　麻知子
	主任文化財専門員	信里　芳紀		主任	木村　義信
	主任技師	真鍋　貴匡		主任	横井　隆史
			調査課	課長	古野　徳久
				技師	竹内　裕貴
				技師	益崎　卓己
				嘱託	徳永　貴美
				嘱託	角野　勲

第 3 節　整理作業の経過

岸の上遺跡のうち、平成 26 年度、平成 27 年度に発掘調査を実施した一部については、平成 29 年度に整理作業が実施され、平成 31 年に 3 月に「国道 438 号道路改築事業（飯山工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第 6 冊　岸の上遺跡 1」として報告書が刊行された。本報告書で報告するのはその残りの部分である。

整理作業は令和 2 年 11 月～令和 3 年 9 月まで実施した。遺物実測・トレース・観察表入力のうち 400 点は令和 2 年 11 月～令和 3 年 3 月まで株式会社イビソク香川支店に委託した。また、令和 3 年度に、管玉蛍光 X 線分析を遺物材料研究所　藁科哲男氏に依頼し、植物珪酸体分析・ガラス玉分析は株式会社文化財調査コンサルタント、鉄滓分析は日鉄テクノロジー株式会社へ委託した。金属器保存処理は、平成 25 年度にパリノ・サーヴェイ株式会社、令和 3 年度に株式会社吉田生物研究所に委託した。

整理作業の体制は以下のとおりである。

令和２年度整理体制一覧

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課			香川県埋蔵文化財センター		
総括	課長	渡邊　智子	総括	所長	西岡　達哉
	副課長	愛染　伊知朗		次長	樋口　隆幸
総務・生涯学習推進グループ	課長補佐（兼）	愛染　伊知朗	総務課	課長（兼）	樋口　隆幸
	副主幹	長谷川　江里		副主幹	斎藤　政好
	主事	尾平　俊		主任	高橋　範行
文化財グループ	課長補佐	古野　徳久		主任	石田　こずえ
	主任文化財専門員	松本　和彦		主任	寺尾　一夫
	技師	益崎　卓巳		主任	遠山　豊
			資料普及課	課長	佐藤　竜馬
				文化財専門員	山元　素子
				会計年度任用職員	加藤　恵子
				会計年度任用職員	中野　優美
				会計年度任用職員	土井　美穂
				会計年度任用職員	宮崎　直子
				会計年度任用職員	大山　和子
				会計年度任用職員	大林　真沙代

令和３年度整理体制一覧

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課			香川県埋蔵文化財センター		
総括	課長	渡邊　智子	総括	所長	高原　康
	副課長	佐藤　竜馬		次長	北山　健一郎
総務・生涯学習推進グループ	課長補佐	長谷川　江里	総務課	課長（兼）	北山　健一郎
	副主幹	桑原　秀樹		副主幹	高橋　範行
	主事	安藤　瑞基		主任	石田　こずえ
文化財グループ	課長補佐（兼）	佐藤　竜馬		主任	松浦　佐和
	主任文化財専門員	森下　英治		主任	寺尾　一夫
	主任技師	竹内　裕貴		主任	遠山　豊
			資料普及課	課長	信里　芳紀
				文化財専門員	山元　素子
				会計年度任用職員	池内　妙子
				会計年度任用職員	北濱　敦子
				会計年度任用職員	池田　匠
				会計年度任用職員	山本　基公美
				会計年度任用職員	大山　和子
				会計年度任用職員	大林　真沙代
				会計年度任用職員	佐立　晶子
				会計年度任用職員	小早川　真由美
				会計年度任用職員	小林　奈充子

第２章　立地と環境

岸の上遺跡の立地と環境については、「国道 438 号道路改築事業（飯山工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第６冊　岸の上遺跡Ⅰ」(香川県教育委員会　2019. 3) に詳しいので、同書を参照されたい。ここでは、今回報告する区画で検出した遺構群のおもな時期である古墳時代後期～古代の遺跡について、周辺の遺跡の状況を簡単に触れておきたい。

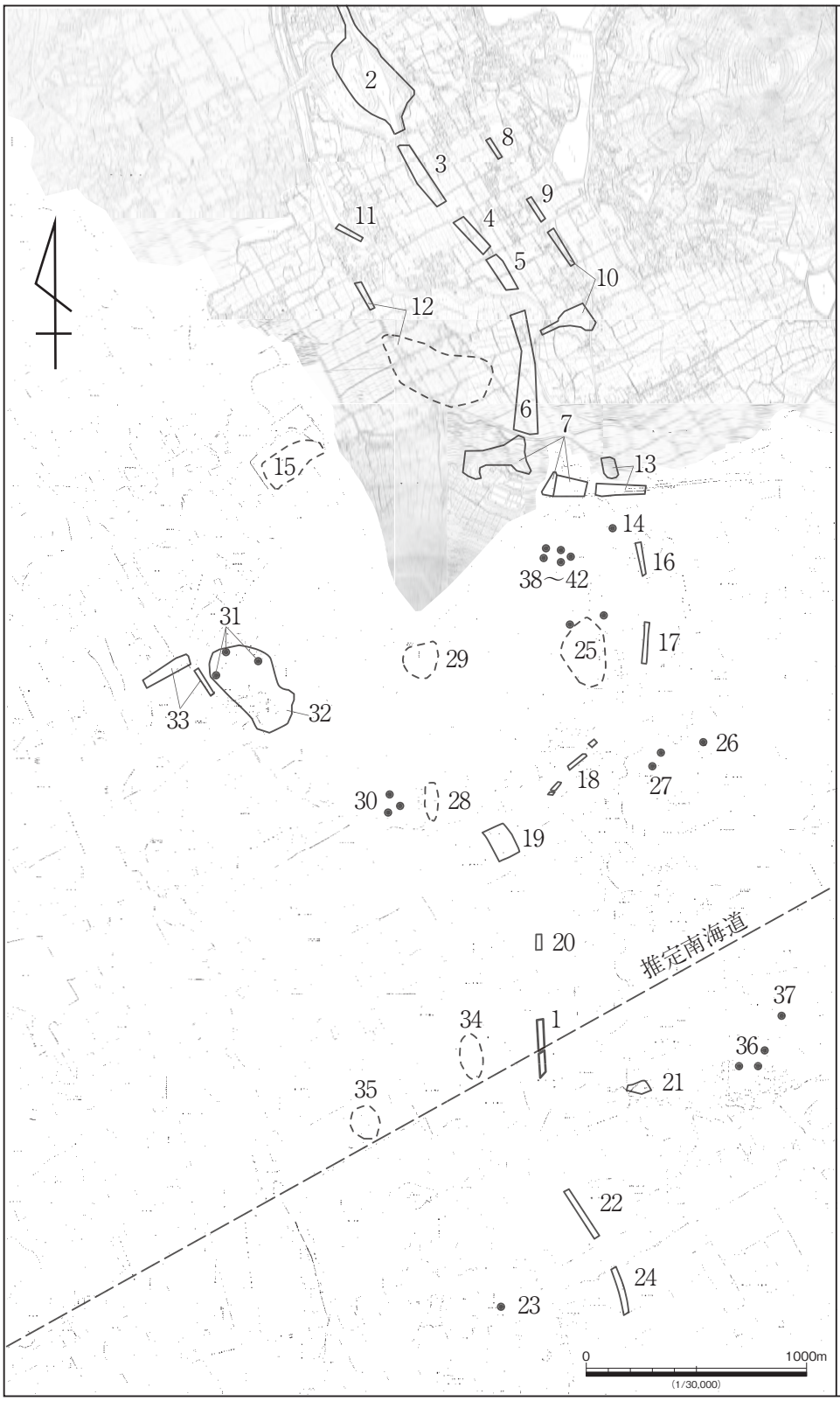
古墳時代後期の古墳については、消失したものが多いが、おもに古墳時代中期～後期以降の古墳群が認められ、特に後期以降、増加するようである。「飯山町誌」(飯山町　1988) によれば、飯野山東側山裾で喜田荒神古墳・やかじ古墳・お四国池西古墳群・西宮古墳・秋常古墳群、飯野山南側山裾で国持 (塚) 古墳・坂元西神社古墳群、飯野山南東部付近で極楽寺古墳・久保大塚・久保大塚北古墳、岸の上遺跡の 1㎞程度東側では十三塚古墳、次郎山古墳群が認められる。大半は消失しており、古墳の詳細は明らかではないが、副葬品として概ね須恵器が出土する他、西宮古墳、久保大塚、十三塚古墳からは鉄器や馬具等が出土した。

岸の上遺跡の約 4.3㎞北側、大束川下流域には古墳時代後期～古代に展開する川津遺跡群がある。下川津遺跡では、古墳時代前期以降途絶えていた集落が 6 世紀後半頃に再び出現する。6 世紀後半～ 7 世紀前半頃は一般集落の在り方を示す建物群であったが、7 世紀中頃～後半には規格的な配置を伴う大型掘立柱建物群が出現し、7 世紀末～ 8 世紀初頭には、下川津遺跡、川津一ノ又遺跡で、正方位を指向する規格的な配置を伴う大型建物群が出現する。古代では、海岸線は現在より内陸に位置していたと考えられる。下川津遺跡は海辺に面しており、出土遺物の特殊性と合わせ、6 世紀後半の有力豪族クラスの居宅から公的な津としての役割を果たした遺跡であったと考えられる。岸の上遺跡では、6 世紀後半頃に竪穴建物群が出現し、7 世紀末頃以降古代において、規格的に配置された規模が大きい建物群が営まれた。南海道に面することと考え併せ、古代には重要な役割を担ったことが想定される。遺跡の出現も川津遺跡群と類似するようで興味深い。

須恵器生産については、岸の上遺跡が所在する丸亀平野東部では、6 世紀後半～ 7 世紀前半頃に青の山１・２号窯、次いで 7 世紀中頃には青の山１号窯に加え、川津地域背後の丘陵部、割子谷周辺では足利池南窯跡が開窯する。足利池南窯跡は 7 世紀後半まで引き続き操業し、7 世紀末～ 8 世紀初頭の前池北窯跡、峠奥窯跡と続く。岸の上遺跡では、土師器の色調を呈する焼成不良品や、他の土器片が溶着する須恵器など焼成失敗品がやや目立った。いずれの窯跡からもやや遠く、窯跡との関連は不明であるが、消費地である岸の上遺跡と生産地との関連も注目されよう。

遺跡の南南西約 1.2km には法勲寺跡がある。周辺は、現在でも条里地割とは異なる正方位の地割を示す。創建期の瓦は他の讃岐古代寺院の瓦当文様とは異なるもので、高句麗の影響を受けたものとの指摘もあり、7 世紀第 3 四半期に遡る可能性も指摘される。この系譜の瓦は 7 世紀末～ 8 世紀初頭の後継瓦まで引き継がれるが、7 世紀後半には、別に川原寺式軒丸瓦も出現し、重弧文軒平瓦と組む。軒丸瓦は那珂郡田村廃寺、三野郡妙音寺と同文である。軒瓦からは、独自色の強い文様から都の影響を強く受けた文様への変化が窺える。伽藍配置は明らかではなく、一部の礎石が残されだけである。鵜足郡では唯一の古代寺院である。法勲寺は 11 世紀代まで存続する。

8 世紀になると、古代の官道である南海道が敷設され、岸の上遺跡を横断して東西方向を向く現市道



1 岸の上遺跡
2 下川津遺跡
3 川津中塚遺跡
4 川津下樋遺跡
5 川津二代取遺跡
6 川津一ノ又遺跡
7 川津東山田遺跡
8 川津下樋東遺跡
9 川津昭和遺跡
10 川津六反地遺跡
11 川津元結木遺跡
12 西又遺跡
13 川津川西遺跡
14 喜田荒神古墳
15 楠且山遺跡
16 東坂元三ノ池遺跡
17 東坂元北岡遺跡
18 東坂元秋常遺跡
19 飯山北土居遺跡
20 北岸南遺跡
21 下法軍寺城
22 名遺跡
23 法勲寺跡
24 沖遺跡
25 秋常古墳群
26 極楽寺古墳
27 久保大塚・久保大塚北古墳
28 坂元神社遺跡
29 飯野山山頂遺跡
30 坂元神社西古墳群
31 飯野古墳群
32 飯野山西麓散布地
33 飯野東二瓦礫遺跡
34 真時遺跡
35 若宮遺跡
36 次郎山古墳群
37 次郎山遺跡
38 三ノ池古墳
39 三ノ池西古墳
40 やかじ古墳
41 お四国池西１号墳
42 お四国池西２号墳

第２図　周辺の遺跡 (1/30,000)

が古代南海道のラインに想定されている。丸亀平野には、広く条里地割の痕跡が認められる。昭和 63 年以降の発掘調査の成果から、丸亀平野の条里地割の施工開始期は７世紀末～８世紀初頭頃であることが明らかになった。岸の上遺跡の周辺は地割の乱れがあり、明確な条里地割は認められないが、南海道の敷設時期との関連が注目される。

＜参考文献＞
藤好史郎・西村尋文・大久保徹也「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ　下川津遺跡」1990　香川県教育委員会ほか
竹内裕貴「国道 438 号道路改築事業（飯山工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第６冊　岸の上遺跡Ⅰ」2019　香川県教育委員会
「飯山町誌」1988　飯山町
佐藤竜馬「讃岐・川津地区遺跡群の動向」『古代文化　52』2000　財團法人古代學教會
佐藤竜馬「7 世紀讃岐における須恵器生産の展開」『財団法人　香川県埋蔵文化財調査センター　研究紀要Ⅴ』1997　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
信里芳紀「讃岐古代集落の類型化の試みⅠ－建物配置を中心に－」『香川県埋蔵文化財センター年報　平成 28 年度』2018　香川県埋蔵文化財センター
川端聰「第 11 回特別展　讃岐の古瓦展」高松市歴史資料館　1996
岡本治代「讃岐における古代瓦の文様系譜」『さぬき野に種をまく』「片桐さん」退職記念論集刊行会
森下英治「丸亀平野条里型地割の考古学的検討」『財団法人　香川県埋蔵文化財調査センター　研究紀要Ⅴ』1997　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

第３章　調査の成果

第１節　調査の方法

発掘調査は直接作業員を雇用する直営方式で行った。

遺構図面の作成は、委託により打設した基準杭の座標・標高をもとに、遺構実測支援システム「遺構くん」および手描きによりに行った。

調査区の設定は、概ね路線の方向に沿って行い、調査工程の都合によりさらに分割した（第３図）。報告書の記載は調査時の区名を踏襲した。

調査時では、遺構番号を付す方法は、１区以外は調査区名を先頭の桁に付し、下３桁を遺構番号とした（2 区の遺構－２●●●、10 区の遺構－ 10 ●●●等）。報告書作成にあたり、遺構番号の付与方法に統一性を持たせるために、１区の遺構番号には当初の遺構番号の先頭に「1」を付け、４桁の遺構番号とし（1 区 SH01 → SH1001 等）、他の調査区の遺構番号の付け方に倣った。

第２節　土層

概要（第４・５図）

各調査区で適宜壁面の土層断面図を作成した。

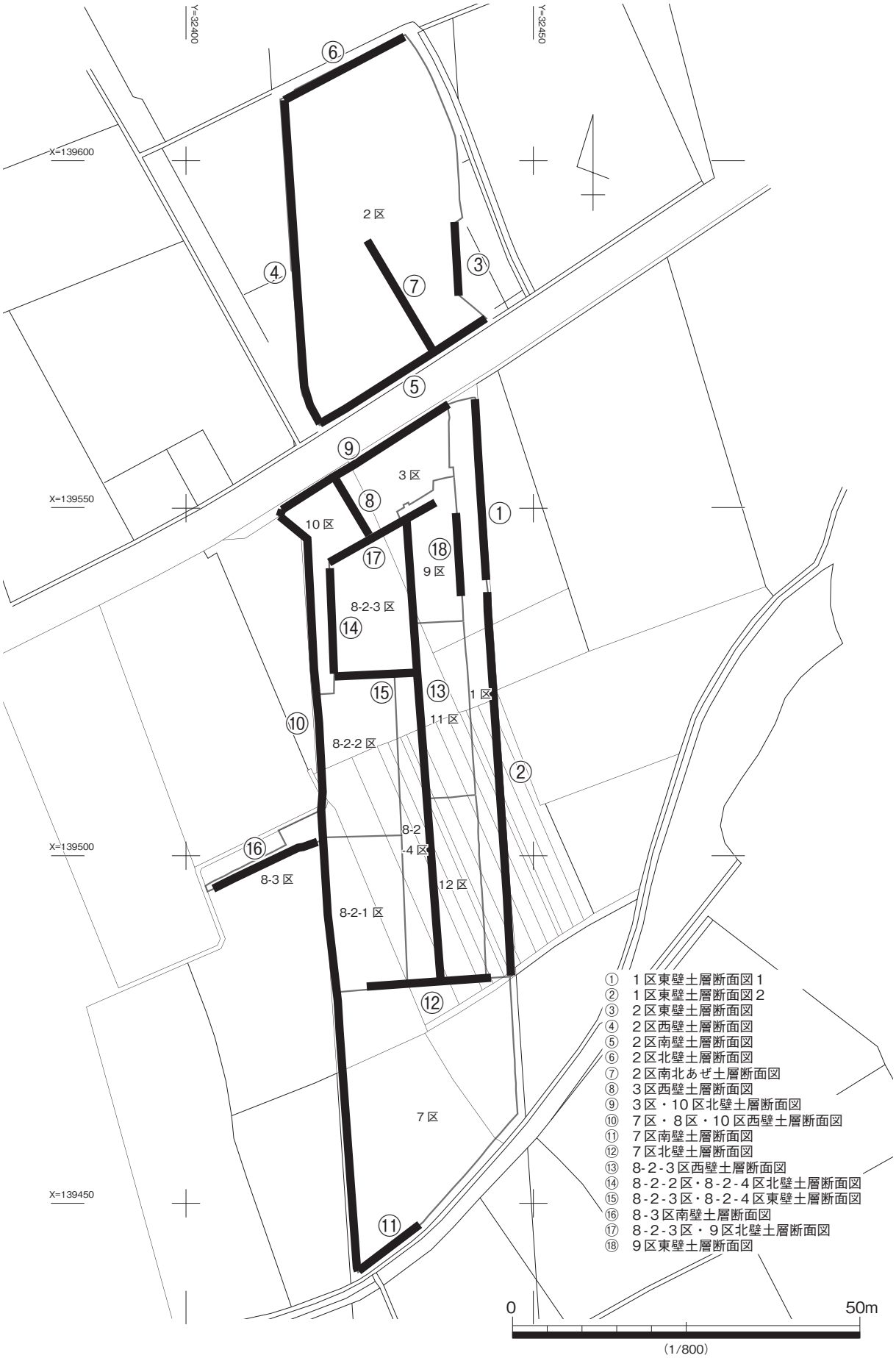
包含層の呼称については、①平成 25 年度、②平成 26 年度、③平成 28･30 年度で呼称の差はあるものの、層位の解釈については、概ね齟齬はない。ここでは、 最も調査面積が広い③に合わせて記述する。
なお、各年度の呼称の対応関係は第１表のとおりである。

基本層序は、造成土・耕作土・床土の下部に黄橙色粘質シルト（１a 層　９～ 14 世紀頃　上面は遺構面０面）、灰褐色砂質シルト（1b 層　７世紀後半～８世紀初頭　上面は遺構面１面）、黒褐色砂質土等（2 層　６世紀後半～７世紀中頃　上面は遺構面２面）となる。

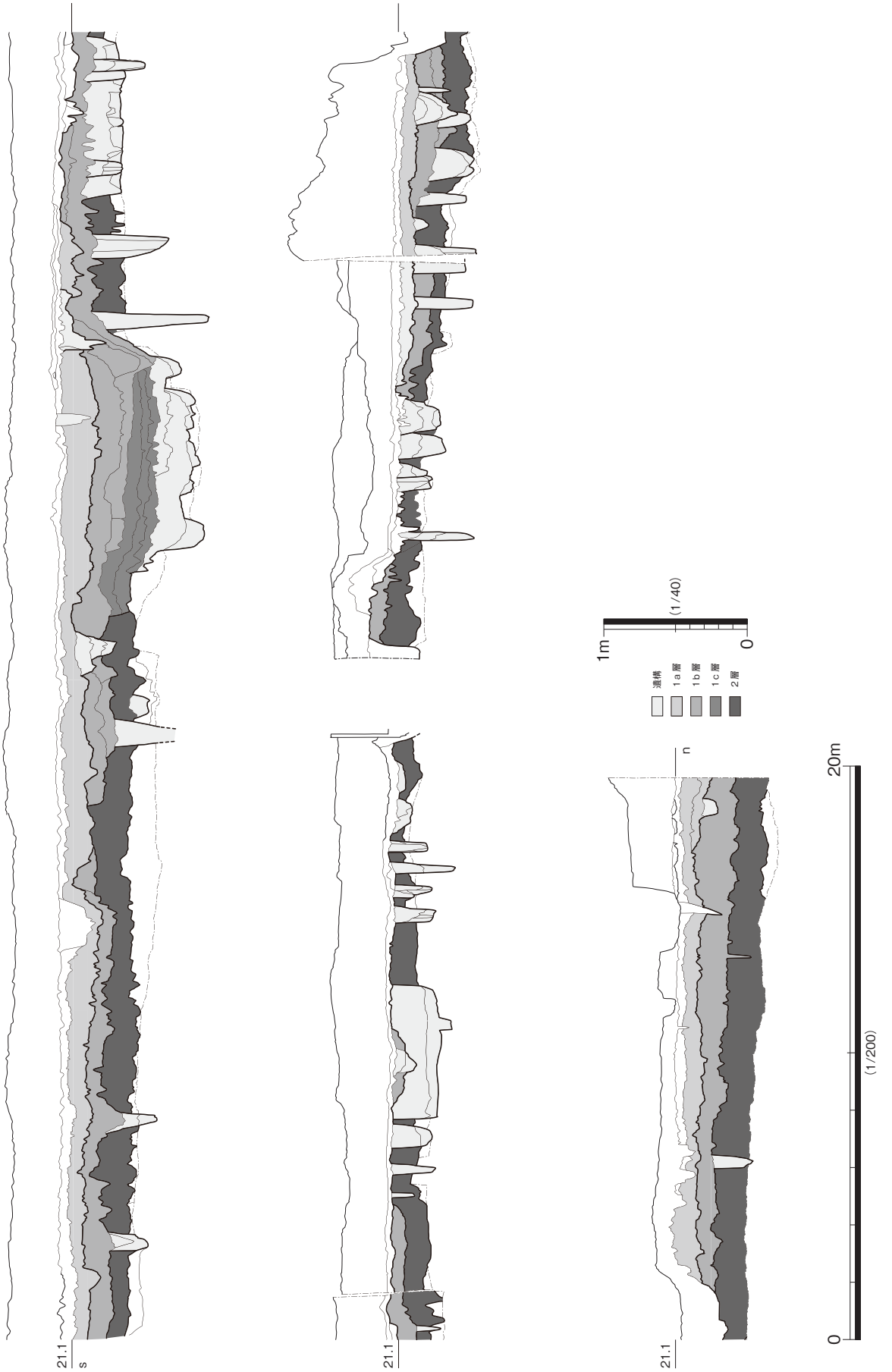
現市道より南側では、１a 層は北から 31m 付近で、1b 層は北から約 40m 付近で一旦消失する。2 層上面は、1b 層が消失する付近から北側へ向けて緩やかに傾斜し、2 層の厚さも北へ向けて厚くなる。1b 層が消失する付近から南へ向けても、2 層上面の標高は徐々に下がり、1b 層は北から 50m 付近、1a 層は北から 56m 付近から南で再び堆積が再び認められる。1b 層上面である古代遺構面上面のレベルは、

第１表　層位対応表

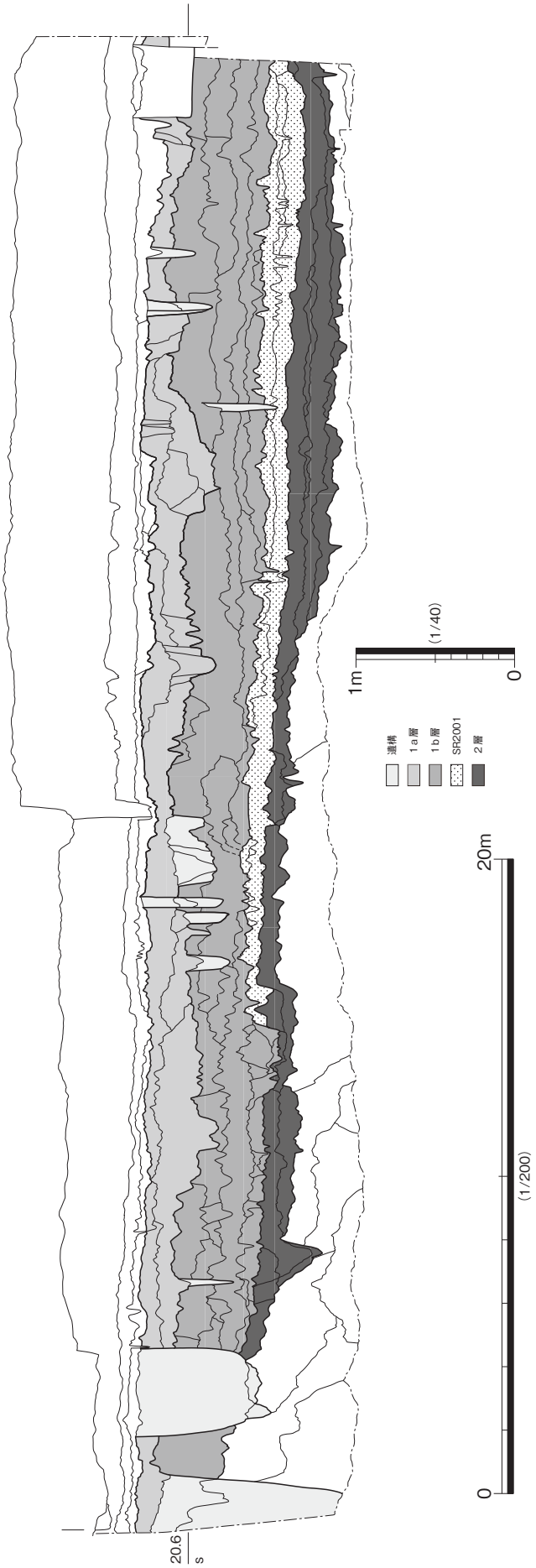
層位（本報告書記載）	平成 25 年度調査（1 区）	平成 26 年度調査（2･3 区）	平成 28・30 年度調査（7 ～ 12 区）	掘り込み遺構	備考
1a 層	―	包含層 1（黄褐色粘質土）	1a 層	0 面　中近世の遺構	
1b 層	3 層（白～黄色粘土質土）	包含層 2（白黄色粘質土）	1b 層	1 面　古代の遺構	
1bt 層	―	―	1bt 層（平成 28 年度のみ）	1 面　古代の遺構	8 区北部で 1b 層下部で堆積
1c 層	―	―	1c 層（平成 28 年度のみ）	1 面　古代の遺構	7 区の狭い範囲で堆積
2 層	4 層（暗褐色砂礫混粘質土）	包含層 3（黒褐色礫混層）	2 層	2 面　古墳時代の遺構	



第３図　調査区割図、土層断面図位置図（1/800）



第 4 図　調査区西壁土層断面図（現市道より南）1（横 1/200，縦 1/40）



第５図　調査区西壁土層断面図（現市道より北）２（横 1/200, 縦 1/40）

1b 層の堆積により概ね一定のレベルを示す。竪穴建物はおもに 2 層上面の標高が高い場所で、古代掘立柱建物群は北側で 2 層が薄く 1b 層の堆積が消失する縁辺付近を中心にして検出した。

現市道より北側の 2 区においては、1a 層は北側でやや薄くなるものの、ほぼ全体にわたって堆積する。1b 層は全体に概ね 50cm 程度で均一に堆積し、1b 層の下部で SR2001 堆積層が認められる。1b 層上面が古代遺構面で、北側が若干高いものの概ね水平である。2 層は 2 区南端より約 4m 北側から出現し、北側へ緩く傾斜する。土層の堆積も北側がやや厚い。ベースは北へ緩く傾斜する。

各土層断面の概要は以下の通りである（番号は第 3 図の番号に同じ）。

①② 1 区東壁土層（第 6・7 図）

1 区東壁で土層図の作成を行った。南北の延長距離は約 83.2m である。

基本層序は、①造成土、耕作土、床土　②黄褐色粘質シルト・にぶい黄褐色粘質シルト・シルト質粘土・粘質シルト（礫や土器細片が混）（1b 層）　③黒色・黒褐色粘土質シルト、黒褐色・暗褐色シルト等（礫混）（2 層）　④にぶい黄褐色・灰黄褐色シルト（ベース）である。

1b 層上面の標高は 20.9 ～ 21.25m で、南から北へ緩く傾斜する。層厚は、おおむね北側で 40cm 程度、南端では 10 ～ 15cm 程度で南側ほど徐々に薄くなる。他の層に比べて土質は均一できめ細かく、整地層と考えられる。

2 層上面の標高は 20.7 ～ 20.9m で、南から北へ徐々に傾斜する。層の厚さは、北側で最大 30cm ほどを測るが、中央付近から南側では認められなかった。

ベースはおおむね灰黄褐色粘質シルト、にぶい黄褐色シルト等であるが、中央付近から南側では暗褐色砂礫であった。ベースの標高 20.3m ～ 20.9m で、南から北へ傾斜する。包含層堆積以前の地形は大きく北へ傾斜していたことが見て取れる。

1b 層の上面から SD3002・SD3003 等南海道側溝に想定される遺構を、2 層上面からは竪穴建物等古墳時代の遺構を検出した。

③ 2 区東壁土層（第 8 図）

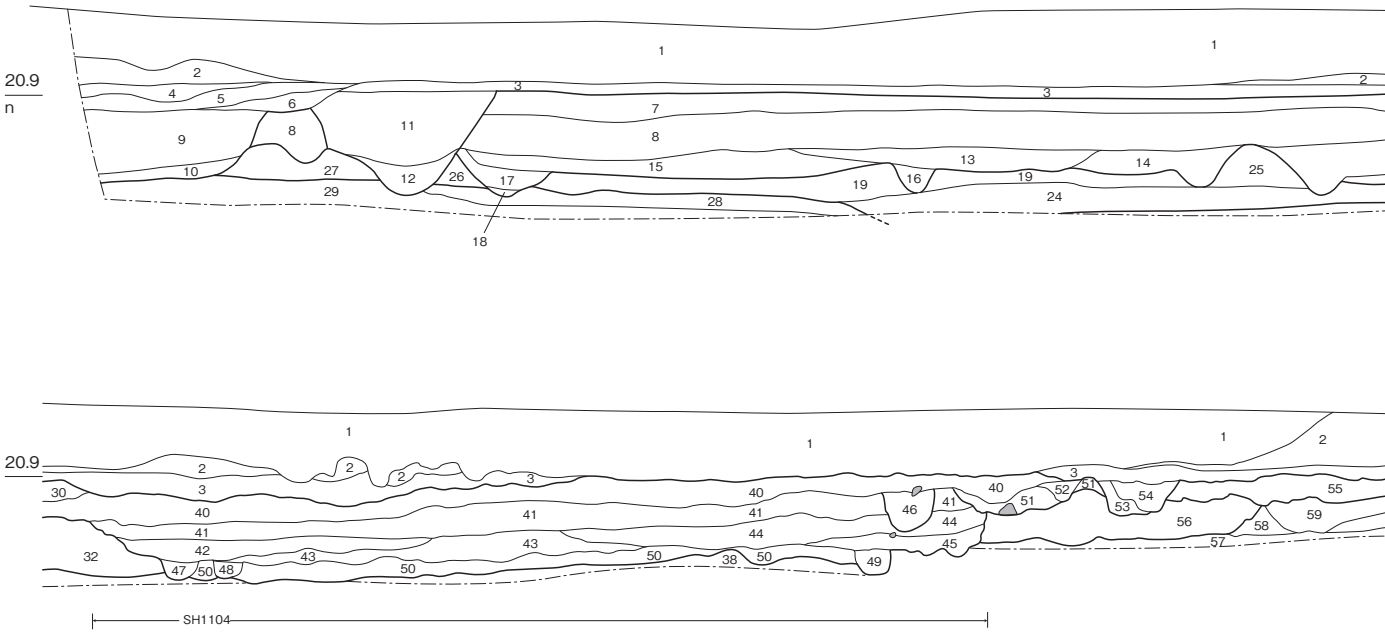
2-1 区東壁土層である。調査区南端から延長約 10.5m 分の土層図を作成した。

基本層序は①耕作土・床土　②にぶい黄褐色極細砂ににぶい黄橙色極細砂が斑に混じる層（1b 層）③黒褐色粘質土と灰黄褐色粘質土層が混じる層、灰黄褐色シルト層など（ベース）である。北半部は 1b 層の下部、標高 20.7m 付近で古墳時代の掘立柱建物の柱穴を検出した。1b 層の層厚は 10 ～ 16cm 程度で、その下部でベースである黒褐色粘質土と灰黄褐色粘質土が斑に混じる層が認められる。2 層は認められなかった。南半部は近世の土坑 SX2001 により床土の下部は大きく壊される。SX2001 の下部で古墳時代の遺構である SD2016・SD2017 を検出した。

④ 2 区西壁土層（第 9・10 図）

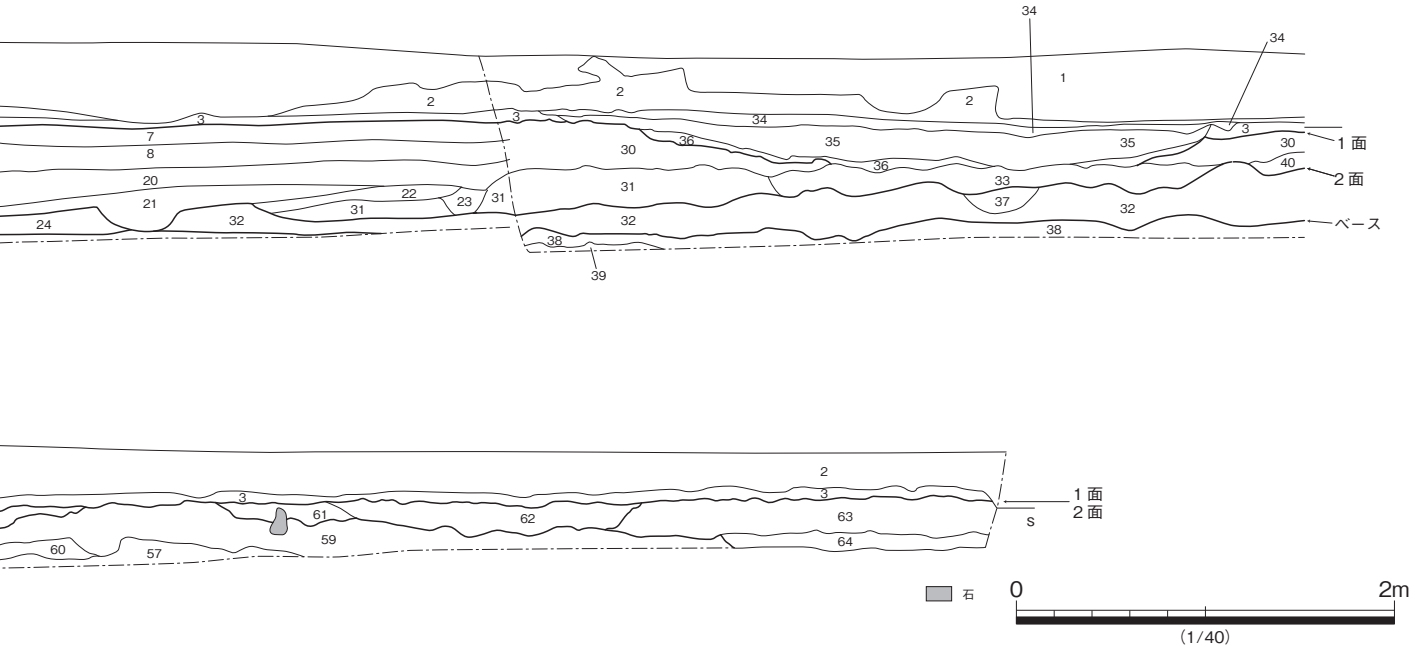
2 区西壁で作成した土層図である。

基本層序は①耕作土・床土　②黄褐色粘質土・黄褐色シルト等（1a 層）　③灰黄褐色粘質土等（1b 層）　④灰黄褐色粘質土と褐色粘質土が混じる層と褐色細砂層が主体になる層（SR2001 埋土）　⑤黒褐色砂礫混り粘質土層（2 層）　⑥黄褐色・にぶい黄褐色粘質土混り粗砂層（ベース）である。



1　花崗土　＜造成土＞
2　耕作土
3　10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト　＜床土＞
4　10YR5/1 褐灰色に 10YR6/6 明黄褐色がブロック状に含む粘質シルト
5　10YR4/1 褐灰色粘質シルト（1 ～ 3cm 大の礫含む）
6　10YR6/6 明黄褐色に 10YR4/3 にぶい黄褐色がブロック状に含む粘質シルト
7　10YR5/6 黄褐色粘質シルト
8　10YR5/4 にぶい黄褐粘質シルト 5cm 大の礫含む
9　7.5YR4/2 灰褐色粘土質シルトごく少量の礫（1 ～ 10cm 大を含む）
10　10YR4/4 褐色粘質シルト　<SD3003>
11　10YR5/6 黄褐色粘性シルト
12　10YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルト　<SD3002>
13　10YR5/3 にぶい黄褐色粘質シルト（1 ～ 2cm 大の礫多量に含む）
14　10YR5/3 にぶい黄褐色シルト
15　10YR4/4 褐色粘質シルト（1 ～ 3cm 大の礫含む）
16　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト
17　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト（1 ～ 3cm 大の礫含む）
18　10YR4/2 灰黄褐色シルト
19　10YR3/2 黒褐色粘質シルト（2 ～ 5cm 大の礫含む）
20　10YR5/3 にぶい黄褐色シルト（2 ～ 5cm 大の礫少量含む）
21　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（1 ～ 3cm 大の礫少量含む）
22　10YR4/1 褐灰色シルト
23　10YR5/3 にぶい黄褐色シルト
24　10YR3/4 暗褐色シルト（1 ～ 10cm 大の礫少量含む）
25　10YR4/2 灰黄褐色（1 ～ 2cm 大の礫含む）
26　10YR4/4 褐色シルト（1 ～ 4cm 大の礫少量含む）
27　10YR5/3 にぶい黄褐色シルト
28　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
29　10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト（2 ～ 5cm 大の礫含む）
30　10YR5/4 にぶい黄褐色シルト質粘土（礫 1 ～ 2cm 大、土器細片を
他の土層と比べて土質は均質できめ細かい）
31　33 層よりやや黒く、礫の量が多い
32　10YR3/3 暗褐色シルト質粘土（多量の礫 1 ～ 3cm 大を含む）
33　10YR3/2 黒褐色シルト質粘土（土器片、礫 1 ～ 3cm 大を含む）
34　35 層よりやや暗く、Mn 沈着　＜近世以降の遺構＞
35　7.5YR5/1 褐灰色粘土質シルト（礫 5cm 大を多く含む）
ベースブロックを多く含む＜近世以降の遺構＞
36　2.5Y7/4 浅黄色シルト（Mn 沈着）
37　7.5YR3/2 黒褐色粘土質シルト（黄褐色粘土ブロックを多量に含む）
38　2.5Y4/6 オリーブ褐色砂質シルト（礫 1 ～ 3cm 大を含む）
39　2.5Y6/3 にぶい黄色粘土（礫 1 ～ 5cm 大を含む）
40　10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト（黒褐色粘土ブロックを含む）
41　10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト（少量の礫（1 ～ 3cm 大）を含む
42　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘土質シルト（ごく少量のベースブロック
43　2.5Y3/2 黒褐色粘土質シルト（竈に由来する多量の炭、焼土塊、
ベースブロックを含む）<SH1104>
44　10YR3/3 暗褐色粘土質シルト（礫 1 ～ 10cm 大を含む）<SH1104
45　10YR3/2 黒褐色粘土質シルト（黄褐色粘土ブロックを含む）<SH1
46　2.5Y5/2 暗灰黄色粘土　<SP>
47　2.5Y4/1 黄灰色粘土質シルト（ごく少量の礫 0.5 ～ 1cm 大を含む）
48　10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト（少量の礫 1 ～ 3cm 大を含む）<S
49　2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト（少量の炭を含む）<SH1104 壁溝
50　2.5Y3/2 黒褐色粘土質シルト（黄褐色粘土ブロックを多く含む）<S
51　2.5Y5/6 黄褐色粘土　<SP>
52　51 層に灰色粘土ブロックを含む　<SP>
53　10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト　<SP>

第６図　①１区東壁



含む

54　7.5YR3/2 黒褐色粘土質シルト（少量の礫１～ 3cm 大を含む）<SP>
55　10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト（ごく少量の礫５～ 10cm 大を含む）
56　2.5Y2/1 黒色粘土質シルト（礫１～ 3cm 大を含む）
57　2.5Y5/6 黄褐色粘土質シルト
58　2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土質シルト
59　2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルト（礫１～ 10cm 大を含む）
60　59 層よりやや暗い
61　7.5YR4/3 褐色粘土質シルト（礫３～ 5cm 大を含む）
62　10YR4/3 にぶい黄褐色（礫５～ 10cm 大を含む）
63　10YR3/2 黒褐色粘土質シルト（礫３～ 5cm 大を含む）
64　10YR2/2 黒褐色粘土質シルト（礫 10 ～ 15cm 大を含む）<SK1004>

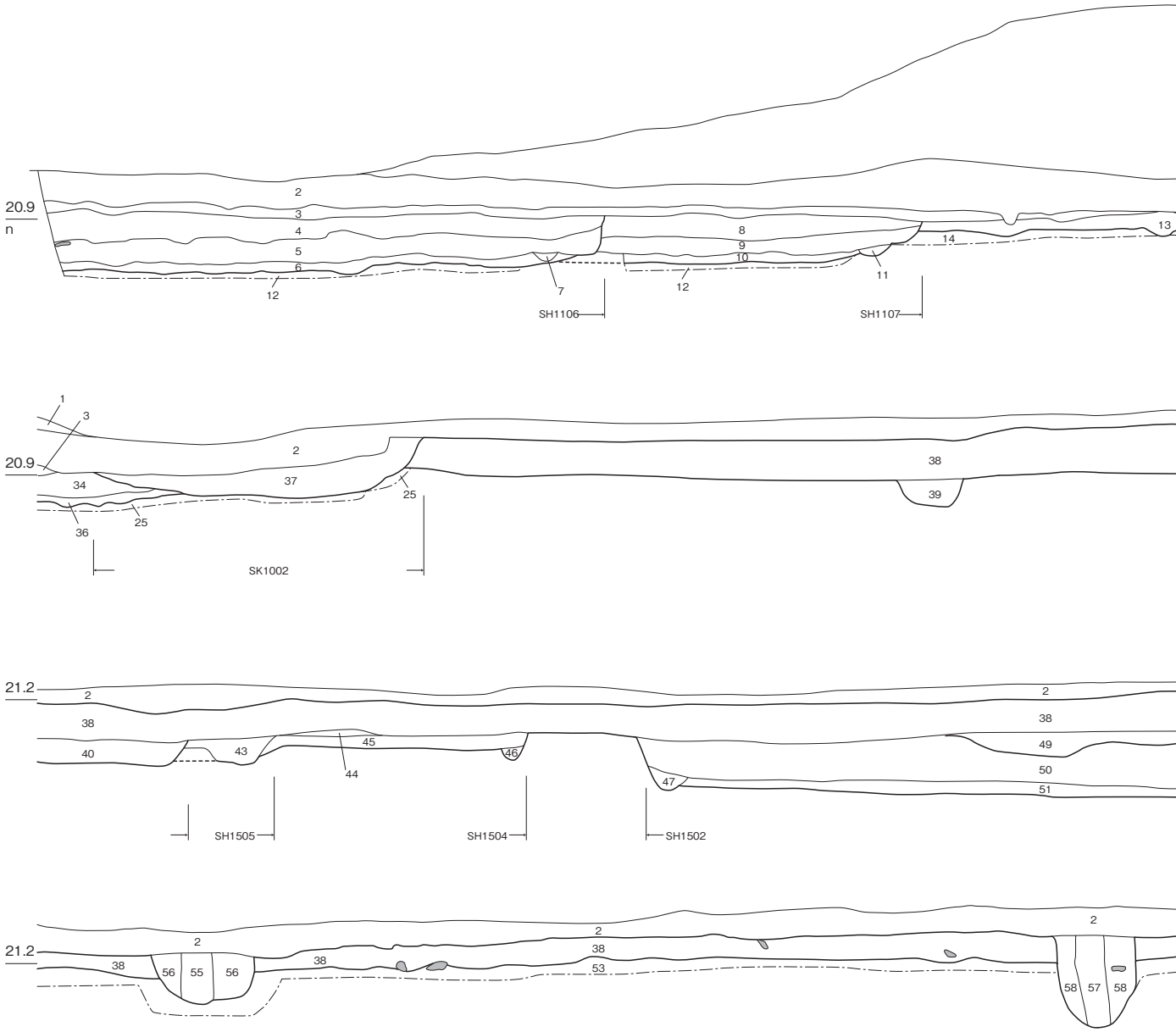
）<SH1104>
を含む）<SH1104>

4>
1104>

<SH1104 壁溝 >
SH1104>
>
SH1104 貼床 >

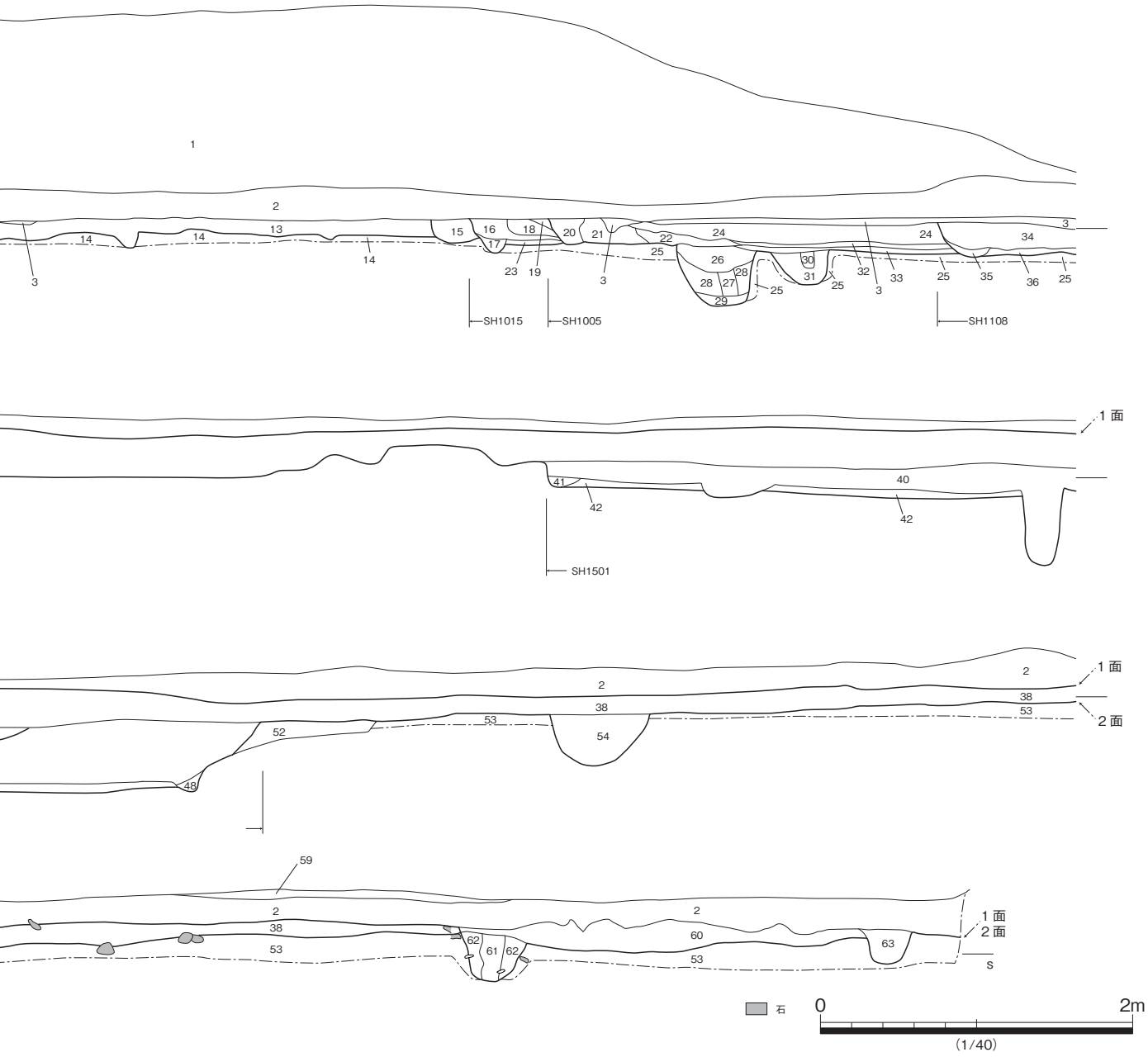
1b 層　　7・8・13・14・15・20・21・22・30・31・33・40・55・61・62
2 層　　19・23 ～ 27・32・37・60・63
ベース　　28・29・38・39・57 ～ 59

土層断面図１（1/40）



1 花崗土
2 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト ＜耕作土＞
3 10YR5/6 黄褐色粘質シルト（1 ～ 2cm 大の礫含む、Mn 沈着）＜床土＞
4 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルト（2 ～ 5cm 大の礫含む）<SH1106 上層＞
5 10YR3/2 黒褐色粘質シルト（3 ～ 6cm 大の礫含む）<SH1106 下層＞
6 10YR4/4 褐色粘質シルト（黄褐色粘土ブロックを含む）<SH1106 貼床＞
7 10YR5/8 黄褐色粘質シルト（2 ～ 4cm 大の礫含む、やや黒く濁る）<SH1106 壁溝＞
8 9 層よりやや黄味が強く、少量のベースブロックを含む <SH1107 上層＞
9 10YR3/3 暗褐色シルト（1 ～ 5cm 大の礫含む）<SH1107 下層＞
10 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト <SH1107 貼床＞
11 5Y5/2 灰オリーブ色粘土質シルト <SH1107 壁溝＞
12 2.5Y6/6 明黄褐色粘土質シルト（灰色粘土ブロック根などを含む）
13 10YR2/2 黒褐色粘質シルト
14 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト ＜ベース＞
15 10YR6/1 褐灰色シルト <SP>
16 10YR5/1 褐灰色シルト（少量の土器片を含む）<SH1015 下層＞
17 10YR2/2 黒褐色粘質シルト <SH1015 壁溝＞
18 10YR6/6 明黄褐色粘質シルト（大きなベースブロック、竈構築土に由来か）<SH1015 下層＞
19 10YR4/1 褐灰色粘質シルト <SH1015 下層＞
20 10YR3/2 黒褐色粘質シルト <SH1005 竈構築土＞
21 10YR6/8 明黄褐色粘質シルト（焼土塊や炭を含まない）<SH1005 竈右袖構築土＞
22 10YR7/6 明黄褐色粘土（焼土塊、炭を多く含む）<SH1005 竈からの崩落土＞
23 10YR2/2 黒褐色粘質シルト（少量の炭を含む）<SH1015 貼床＞
24 10YR4/1 褐灰色粘質シルト <SH1005 下層＞
25 10YR4/4 褐色シルト（14 層よりやや濁るが、土質は類似）
26 7.5YR3/1 黒褐色粘土質シルト（土器片、1 ～ 2m 大の礫を含む）<SP1069>
27 7.5YR2/1 黒色粘土（2 ～ 3cm 大の礫を含む）<SP1069 柱痕＞
28 2.5Y6/4 にぶい黄色粘土質シルト（3 ～ 5cm 大の礫を含む）<SP1069 掘方＞
29 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土 <SP1069>
30 2.5Y4/1 黄灰色粘土質シルト <SP1072 柱痕＞
31 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト <SP1072 掘方＞
32 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト（多量のベースブロック、少量の焼土塊含む）<SH1005 床面＞
33 10YR4/1 褐灰色シルト質粘土（ベースブロックを含む）<SH1005 貼床＞
34 10YR3/2 黒褐色シルト質粘土（炭、少量の土器片を含む）<SH1108 下層＞
35 10YR5/4 に <SH1108 壁
36 2.5Y4/4 オリ <SH1108 貼
37 2.5Y3/3 暗オ <SK1002
38 10YR4/3 に
39 7.5Y R3/1 <SP1540>
40 10YR3/4 暗
41 10YR4/4 褐
42 10YR4/3 に
43 10YR4/3 に <SH1505>
44 10YR3/3 暗 <SH1504>
45 10YR3/3 暗
46 10YR4/3 に 含む）<SH1
47 10YR2/3 黒
48 10YR3/3 暗
49 10YR3/4 暗 <SH1503>

第 7 図 ②1 区東壁土



にぶい黄褐色シルト質粘土（0.5 ～ 2cm 大の礫を含む）
溝 >
リーブ褐色シルト質粘土（1 ～ 3cm 大の礫を含む）
床 >
オリーブ褐色粘土質シルト（1 ～ 5cm 大の礫を含む）
>
ぶい黄褐色粘質シルト（礫混じり）
黒褐色粘土質シルト（1 ～ 3cm 大の礫を少量含む）

褐色粘質シルト（3cm 大の小礫を少量含む）<SH1501>
色粘質シルト　<SH1501 壁溝 >
ぶい黄褐色粘質シルト　<SH1501 貼床 >
ぶい黄褐色粘質シルト（3cm 大の小礫を少量含む）

褐色粘質シルト（1cm 大の小礫をわずかに含む）

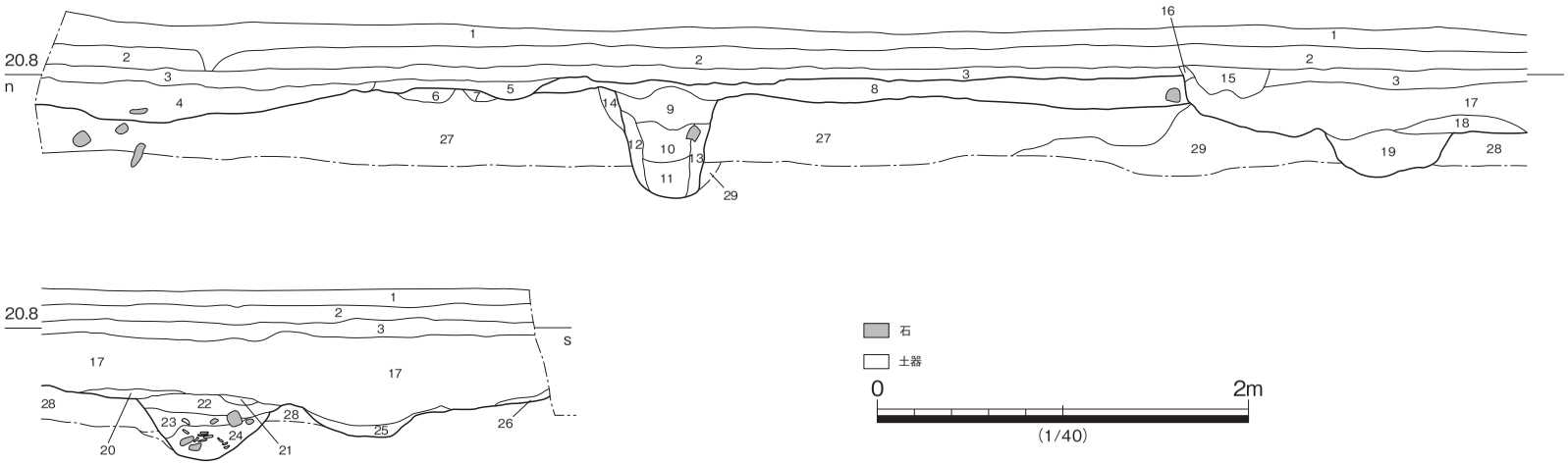
褐色粘質シルト（3cm 大の小礫を少量含む）<SH1504>

ぶい黄褐色粘質シルト（ベース由来の小礫をわずかに
504 壁溝 >
褐色粘質シルト　<SH1502 壁溝 >
褐色粘質シルト　<SH1502 壁溝 >
褐色砂質シルト（1cm 大の小礫をわずかに含む）

50　10YR2/3 黒褐色粘質シルト（1 ～ 5cm 大の小礫を多量に
　含む）<SH1502>
51　10YR3/4 暗褐色粘質シルト　（ベース由来の礫を少量含む）
<SH1502 貼床 >
52　10YR4/4 褐色粘質シルト　<SH1502>
53　10YR3/4 暗褐色砂礫　< ベース >
54　10YR3/3 暗褐色粘質シルト（5cm 大の礫を少量含む）<SP1543>
55　10YR6/4 にぶい黄橙色粘質シルト
56　10YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルト　<SB1003-SP1005>
57　10YR4/4 褐色粘質シルト
58　10YR3/4 暗褐色粘質シルト　<SP1505>
59　10YR3/1 黒褐色粘質シルト（新しい盛土）
60　10YR3/2 黒褐色粘質シルト
61　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト
62　10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト　<SP1501>
63　10YR3/4 暗褐色粘質シルト

1b 層	38
2 層	13・52
ベース	12・14・25・53

土層断面図２（1/40）



1 ┐
2 ┘ ＜耕作土＞
3 ＜床土＞
4 10YR5/4 にぶい黄褐色極細砂に 10YR7/1 灰白色極細砂が筋状に混じる（10YR3/3 暗褐色極細砂が粒状に少量混じる）
5 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土に 10YR6/1 褐灰色粘質土がまだらに混じる
6 10YR4/2 灰黄褐色粘質土に 10YR7/2 にぶい黄橙色粘質土が混じる
7 10YR6/2 灰黄褐色粘質土に 10YR8/1 灰白粘質土が混じる
8 10YR5/3 にぶい黄褐色極細砂に 10YR7/2 にぶい黄橙色極細砂がまだらに混じる（2 ～ 5cm 大の礫含む）
9 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土と 10YR3/2 黒褐色粘質土がまだらに混じる（3 ～ 5cm 大の礫、3cm 大の土器片含む）
10 10YR3/2 黒褐色粘質土と 10YR4/2 灰黄褐色粘質土が混じる（3 ～ 10cm 大の礫少量含む）
11 10YR4/2 灰黄褐色粘質土に 10YR3/1 黒褐色粘質土がまだらに混じる（2 ～ 5cm 大の礫少量含む）
12 10YR3/2 黒褐色粘質土に 10YR6/3 にぶい黄橙色粘質土がまだらに混じる（2cm 大の礫含む）
13 10YR4/2 灰黄褐色粘質土に 10YR4/1 褐灰色粘質土が混じる
14 10YR5/2 灰黄褐色粘質土に 10YR7/2 にぶい黄橙色粘質土がまだらに混じる（5cm 大の礫含む）
15 10YR6/2 灰黄褐色粘質土に 7.5YR5/6 明褐色粘質土がまだらに混じる
16 10YR6/1 褐灰色粘質土と 7.5YR4/6 褐色粘質土が混じる
17 10YR5/2 灰黄褐色粗砂混粘質土（2 ～ 10cm 大の礫中量含む）
18 10YR5/2 灰黄褐色粘質土と 10YR6/2 灰黄褐色粘質土がまだらに混じる（2 ～ 10cm 大の礫含む）

<SB2005-SP2246>
<SX2001>

19 10YR4/2 灰黄褐色粘質土に 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土がまだらに混じる（5 ～ 15cm 大の礫含む）<SD2017>
20 10YR4/2 灰黄褐色粘質土に 10YR6/2 灰黄褐色粘質土が混じる <SX2001>
21 10YR6/2 灰黄褐色粘質土に 10YR6/2 灰黄褐色粘質土が小ブロックで混じる
22 10YR4/2 灰黄褐色粘質土と 10YR5/1 褐灰色粘質土が混じる（1cm 大の炭、2cm 大の土器片含む）
23 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土に 10YR4/2 灰黄褐色粘質土がまだらに混じる（3cm 大の礫含む）
24 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土に 10YR5/2 灰黄褐色粘質土がまだらに混じる（2 ～ 5cm 大の礫、3 ～ 10cm 大の土器片含む）
25 10YR5/2 灰黄褐色粘質土に 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土がまだらに混じる
26 10YR6/4 にぶい黄橙色粘質土と 10YR7/2 にぶい黄橙色粘質土が混じる
27 10YR3/1 黒褐色粘質土と 10YR5/2 灰黄褐色粘質土が混じる（2 ～ 10cm 大の礫多量に含む）
28 10YR5/2 灰黄褐粘質土に 10YR2/1 黒色粘質土がまだらに混じる（2 ～ 5cm 大の礫中量含む）
29 10YR5/2 灰黄褐色シルト

<SD2016>
＜ベース＞

1b 層　　8

第８図　③２区東壁土層断面図（1/40）

1a 層・1b 層は、近世土坑（SX2027）を挟んで調査区南端から約 6mから出現する。1a 層上面のレベルはほぼ平坦で 20.9m程度である。1b 層の上面のレベルは 20.6 ～ 20.7mで、北から南へ緩く傾斜するもののほぼ平坦で、層厚は概ね 50㎝程度でほぼ均一である。

SR2001 は SD2002・SA2001 よりやや南側から出現し、北へ向けてやや厚みを増し、北端では層厚 28㎝程度を測る。上面のレベルは 20.1 ～ 20.3mで、ほぼ平坦である。SR2001 土層の最上層で水田畦畔状の遺構を検出した。西壁では 100 層に相当する層である。畦畔状の盛り上がりの上面が標高約 20.15mで、北壁や SR2001 土層断面と概ね同じレベルである。水田耕作の有無を確認するため、水田耕作が想定される層位を中心に植物珪酸体分析を行った（第 4 章第 3 節）。その結果、水田と判断される十分な量のイネの珪酸体量は検出できず、水田は近隣で営まれたものと考えられた。この結果は「岸の上遺跡 1」で報告された水田と類似する。

2 層は、南端付近では表土のほぼ直下で認められたが、SX2027 より北側では 1a 層・1b 層の下位で、SR2001 出現後はその下位で検出した。上面の標高は、SX2027 より南では 20.4m、北では 20.0 ～ 20.15mで、南から北へ傾斜する。層厚は 15 ～ 30㎝程度である。

⑤ 2 区南壁土層（第 11 図）

2 区南壁で作成した土層である。ほぼ全体で SD2004 縦断面土層が観察できる。

基本層序は①花崗土、耕作土、床土　②灰黄色極細砂混り粘質土で褐色粘質土が混じる層等（近世遺構のベース層）　③暗灰黄色粘質土と褐色粘質土が混じる層等（1a 層）　④灰黄褐色粘質土と暗褐色粘質土が混じる層等（SD2004 埋土）　⑤黒褐色粘質土層等（2 層）　⑥灰黄褐色粘質土等（ベース）である。

近世遺構のベースは、西半部で標高 20.9m付近、厚さ 8cm 程度認められるが、層厚は薄く、範囲も狭い。中世遺構を掘り込む層（1a 層）は標高 20.85m付近、厚さ 12 ～ 16cm 程度認められた。概ね均等の厚さであるが、西側ほど徐々に薄くなる。

古代の遺構面である 1 面は全面が SD2004 及び SD2027 の上面で捉えられる。標高は概ね 20.6mで一定で、深さは 22 ～ 26cm である。古代遺構面を形成する 1b 層は、この断面では全体に SD2004 及び SD2027 により消失したと考えられ、検出されなかった。

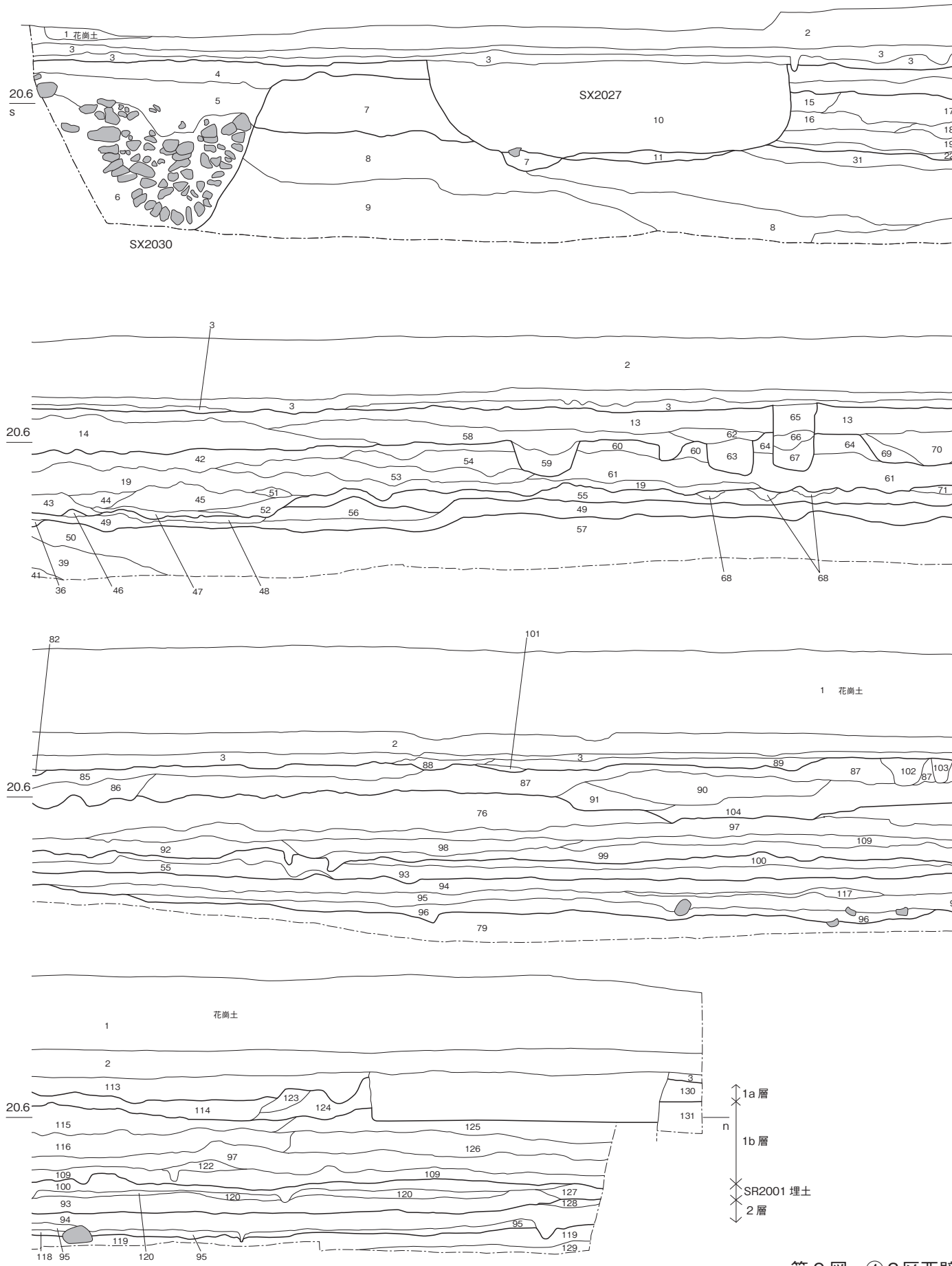
SD2004 の下部では古墳時代の遺構に掘り込まれる 2 層を検出した。SD2004 等により一部が失われた可能性があるが、概ね上面の標高は 20.4m、層厚は西側では 20cm 程度であるが、東へ向け徐々に薄くなる。東端部で検出した SD2018 は 2 層の残存部の可能性もあろう。

⑥ 2 区北壁土層（第 12 図）

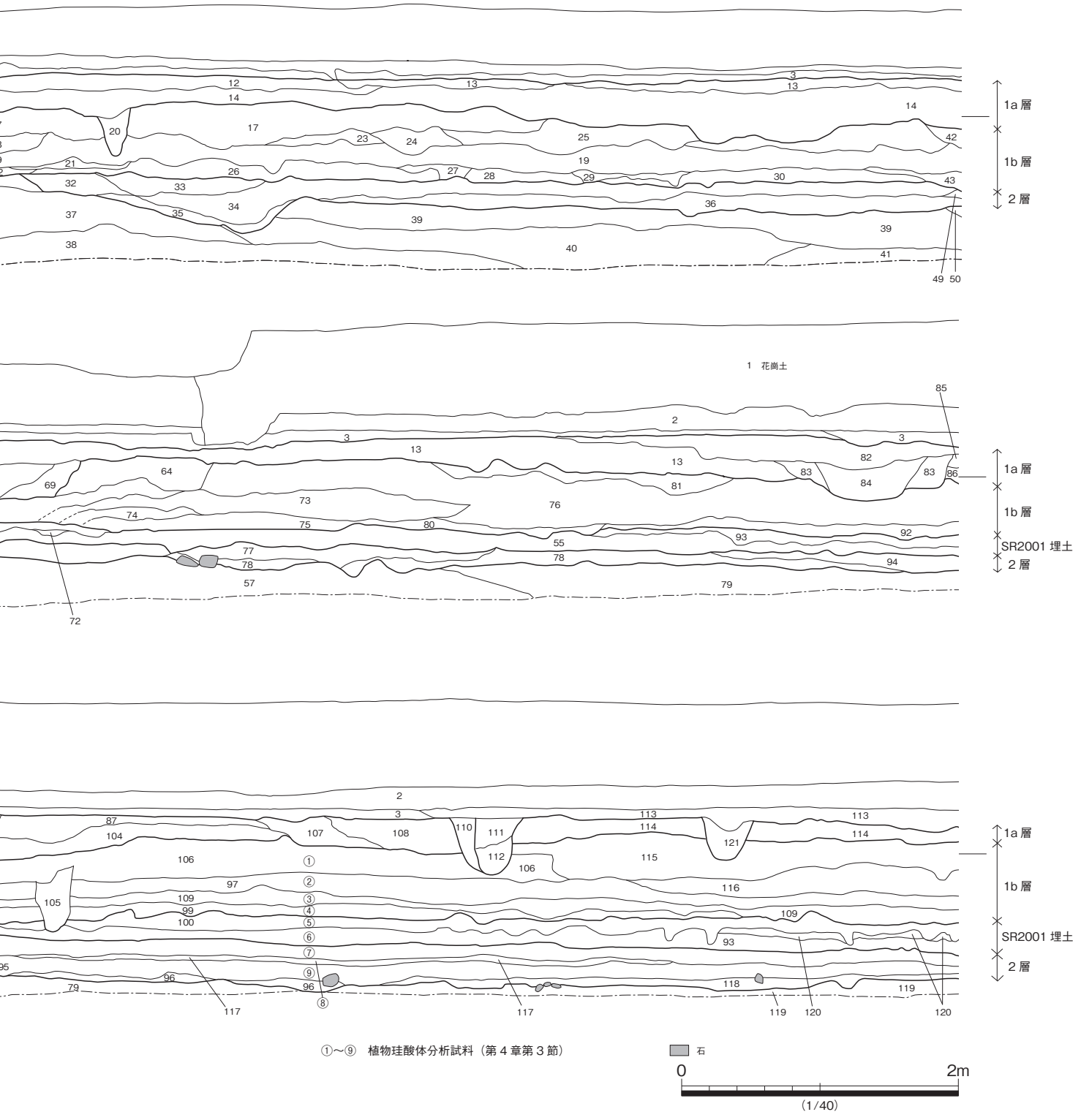
2 区北壁で作成した土層図である。

基本層序は①花崗土、耕作土、床土　②灰黄褐色極細砂混・シルト混粘質土等で褐色・灰黄褐色シルト等が混じる層（1a 層）　③灰黄褐色シルト混り粘質土等（1b 層）　④灰黄褐色シルト混り粘質土に褐色粘質土混り、オリーブ褐色極細砂、褐色極細砂と褐灰色極細砂など灰黄褐色・褐灰色シルト混り粘質土に極細砂層が混じる層（SR2001）　④黒褐色極細砂粘質土（2 層）　⑤灰黄褐色粘質シルト等（ベース）である。基本層序は 2 区西壁北部と同様である。

1a 層は概ね平坦で、標高 20.8m 程度、層厚は 30㎝程度を測る。1b 層の上面の標高は 20.45 ～ 20.7m で、西から東へ緩やかに傾斜する。層厚は 24 ～ 27㎝で中央付近ほど厚い。



第９図　④２区西壁



壁土層断面図（1/40）

1 花崗土
2 耕作土
3 床土
4 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土と 10YR4/4 褐色粘質土がまだらに混じる（10YR3/3 暗褐色粘質土が Mn のブロックが上位に中量混じる）
5 10YR4/2 灰黄褐色粘質土に 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土がまだらに混じる <SX2030>
6 10YR4/4 褐色粘質土（10cm 大の礫多量に含む）
7 10YR3/2 黒褐色砂礫混粘質土（1cm を主体として 10cm 大が稀に含む）<SD2032>
8 10YR5/6 黄褐色粘質土混粗砂
9 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土混粗砂（5 ～ 10cm 大の礫中量含む）
10 2.5Y4/2 暗灰黄色砂礫（10 ～ 15cm 大の礫含む）<SX2027>
11 10YR4/1 褐灰色粗砂混シルト <SD2028>
12 10YR5/6 黄褐色粘質土と 10YR6/2 灰黄褐色粘質土が混じり、Mn が少量混じる
13 10YR5/6 黄褐色シルトに 2.5Y5/2 暗灰黄色シルトが筋状に混じり、Mn のブロックを少量含む
14 10YR5/2 灰黄褐色粘質土と 10YR5/6 黄褐色粘質土が混じる（10YR3/4 暗褐色粘質土の Mn が少量含む）
15 10YR5/3 にぶい黄褐色シルトから極細砂と 10YR4/6 褐色シルトが混じる
16 10YR7/2 にぶい黄橙色シルトと 10YR6/6 明黄褐シルトがまだらに混じる
17 10YR4/2 灰黄褐色粘質土と 10YR4/6 褐色粘質土がまだらに混じる
18 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土と 10YR5/6 黄褐粘質土が混じる
19 10YR5/2灰黄褐色粘質土と 10YR4/6褐色シルト混粘質土がまだらに混じる
20 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト混粘質土 <SP>
21 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土と 10YR5/6 黄褐色粘質土が混じる
22 10YR5/4 にぶい黄褐色極細砂混粘質土と 10YR5/2灰黄褐色粘質土が混じる
23 10YR4/2灰黄褐色粘質土と 10YR4/2灰黄褐色粘質土がブロック状に混じる
24 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土と 10YR5/6 黄褐色粘質土が混じる
25 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土と 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土がまだらに混じる
26 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土と 10YR6/2 灰黄褐色粘質土が混じり、10YR5/6 黄褐色粘質土が混じる
27 10YR4/2 灰黄褐色粘質土と 10YR6/1 褐灰粘質土が混じる
28 10YR3/3 暗褐色粘質土と 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト混粘質土が混じる
29 10YR5/1 褐灰色シルト混粘質土
30 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土と10YR5/2灰黄褐色極細砂混粘質土が混じる
31 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土混極細砂に 10YR5/6 黄褐色粘質土が小ブロックで少量混じる（2 ～ 5cm 大の礫上位に少量含む）
32 10YR3/3 暗褐色極細砂粘質土（3 ～ 5cm 大の礫少量含む）
33 10YR3/4 暗褐色粗砂混粘質土（3cm の礫僅かに含む）
34 10YR2/2 黒褐色極細砂混粘質土（3cm 大の礫少量含む）
35 2.5Y5/2 暗灰黄色極細砂混粘質土と 10YR3/3 暗褐色粘質土が混じる
36 10YR3/3 暗褐色粘質土混極細砂と 10YR5/2 灰黄褐色粘質土が混じる（3 ～ 5cm 大の礫少量含む）
37 10YR6/2 灰黄褐色極細砂混粘質土に 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土が混じる（1 ～ 5cm 大の礫少量含む）
38 10YR5/8 黄褐色極細砂混粘質土と 2.5Y6/2 灰黄色細砂混粘質土が混じる
39 10YR6/3 にぶい黄橙色極細砂混粘質土に 10YR5/6 黄褐色粘質土が混じる（5cm 大の礫少量含む）
40 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土と 10YR5/6 黄褐色極細砂混粘質土が混じる（5cm 大の礫少量含む）
41 10YR5/3 にぶい黄褐色砂礫混粘質土（砂礫＝5 ～ 20cm 大）
42 10YR4/2 灰黄褐色シルト混粘質土と 10YR5/6 黄褐色粘質土がまだらに混じる
43 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土と 10YR6/1 褐灰粘質土がまだらに混じる（10YR6/1 褐灰色シルトから極細砂が僅かに混じる）
44 10YR5/2 灰黄褐色粘質土と 10YR5/6 黄褐色粘質土が混じり、10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土ブロックが少量混じる）
45 10YR4/3 にぶい黄褐色極細砂
46 10YR6/2 灰黄褐色粘質土と 10YR2/1 黒色粘質土がまだらに混じる
47 10YR4/6 褐色シルトから極細砂
48 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土と 10YR2/1 黒色粘質土が混じる
49 10YR2/3 黒褐色粘質土混砂礫（砂礫＝1cm 大を中心に 10cm 大を少量含む）
50 10YR5/2 灰黄褐色極細砂混粘質土と 10YR5/6 黄褐色粘質土がまだらに混じる（2cm 大の礫少量含む）
51 10YR5/2 灰黄褐色シルトから極細砂
52 10YR4/2 灰黄褐色粘質土と同色極細砂がまだらに混じる
53 10YR5/6 黄褐色粘質土と 10YR7/2 にぶい黄橙色粘質土が混じる
54 10YR6/4 にぶい黄橙色粘質土と 10YR6/6 明黄褐色粘質土が混じる
55 61 層と同層
56 10YR3/3 暗褐色極細砂混粘質土（3cm 大の礫下位に少量含む）
57 10YR5/2 灰黄褐色粗砂から砂礫（1 ～ 3cm を主体に 10cm 大の礫少量含む）
58 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土と 10YR5/8 黄褐色粘質土が混じる
59 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土と 10YR4/4 褐色粘質土がまだらに混じる <SD2002>
60 （注記なし）
61 10YR4/1 褐色粘質土と 10YR6/6 明黄褐色シルトがまだらに混じる
62 2.5Y5/3 黄褐色シルトと 10YR5/6 黄褐色シルトがまだらに混じる（Mn を少量含む）
63 10YR4/6 褐色粘質土に 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土がまだらに混じる <SP2189>
64 10YR5/6 黄褐色粘質土と 10YR7/4 にぶい黄橙色粘質土がまだらに混じり、10YR3/4 暗褐色粘質土がブロック状に混じる （3cm 大の礫少量、炭片少量含む）
65 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土に 10YR4/6 褐色粘質土が混じる
66 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトから極細砂
67 10YR4/4 褐色粘質土と 10YR5/2 灰黄褐色粘質土がまだらに混じる（3cm 大の礫僅かに含む） <SP2147>
68 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土と 10YR3/3 暗褐色粘質土が混じる（10YR5/3 にぶい黄褐色極細砂を少量含む）
69 10YR4/6 褐色粘質土と 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトが混じる <SD2010>
70 10YR4/4 褐色シルト混粘質土に 10YR5/2 灰黄褐色シルトがまだらに混じる（3cm 大の礫少量含む、炭片少量含む）<SD2010>
71 10YR4/4 褐色極細砂
72 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト
73 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土と 10YR4/6 褐色粘質土がまだらに混じる
74 10YR4/2 灰黄褐色粘質土と 10YR4/6 褐色シルトがまだらに混じる
75 10YR4/4 褐色シルトから極細砂と 10YR6/1 褐灰色シルトがまだらに混じる
76 2.5Y5/3 黄褐色シルトと 10YR3/4 暗褐色シルトが混じる
77 10YR3/2 黒褐色粗砂混粘質土（2cm 大の礫少量含む）
78 10YR3/2 黒褐色粗砂混粘質土に 10YR5/3 にぶい黄褐色極細砂が混じる（2 ～ 5cm 大の礫含む）
79 10YR4/2 灰黄褐色粘質土混極細砂に 10YR5/8 黄褐色極細砂が少量混じる（1 ～ 5cm 大の礫少量含む）
80 10YR5/3 にぶい黄褐色極細砂と 10YR5/6 黄褐色細砂と混じる
81 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルトから極細砂と 10YR4/6 褐色シルトがまだらに混じる
82 10YR5/2 灰黄褐色シルトに 10YR3/4 暗褐色粘質土が混じる（2cm 大の礫僅かに含む）
83 10YR4/2 灰黄褐色シルトと 10YR4/3 にぶい黄褐色シルトが混じる
84 10YR4/2 灰黄褐色シルト混粘質土に 10YR5/8 黄褐色粘質土がまだらに混じる（炭片を僅かに含む）
85 2.5Y5/3 黄褐色シルトから極細砂と 10YR4/6 褐色粘質土が混じる（Mn がまだらに混じる）
86 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルトに 10YR4/4 褐色粘質土が混じる
87 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土と 10YR4/6 褐色粘質土が混じりる（Mn が 5mm 大で中量混じる）
88 2.5Y5/2 暗灰黄色シルトから極細砂（Mn が少量混じる）
89 10YR6/6 明黄褐色シルト混粘質土（Mn を中量含む）
90 2.5Y5/3 黄褐色粘質土と 10YR4/6 褐色粘質土が混じる（2.5Y5/3 黄褐色極細砂が筋状に入る）
91 10YR4/6 褐色粘質土と 2.5Y5/3 黄褐色粘質土が混じる（鉄分が沈着する）
92 10YR4/3 にぶい黄褐色極細砂
93 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土と 10YR3/2 黒褐色粘質土が混じる（10YR4/3 にぶい黄褐色極細砂が部分的に層状に入る）
94 10YR2/2 黒褐色極細砂粘質土
95 10YR2/1 黒色粘質土
96 10YR5/2 灰黄褐色シルト混粘質土と 10YR3/1 黒褐色粘質土が混じる（5cm 大の礫中量含む）
97 10YR4/2 灰黄褐色粘質土に 10YR4/6 褐色粘質土がまだらに混じる
98 10YR4/2 灰黄褐色粘質土に 10YR4/6 褐色粘質土がまだらに混じる（同色極細砂から細砂が部分的に入る）
99 10YR4/3 にぶい黄褐極細砂から細砂と 10YR4/6 褐色粘質土が混じる
100 10YR4/2 灰黄褐色粘質土下位に 10YR4/6 褐色粘質土がうすく層状に入る
101 2.5Y5/2 暗灰黄色シルトから極細砂に Mn がブロック状に混じる
102 2.5Y5/2 暗灰黄色極細砂混粘質土に Mn が少量混じる
103 2.5Y5/1 黄灰色粘質土に 10YR3/3 暗褐色粘質土が小ブロックで僅かに混じる
104 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土と 10YR4/6 褐色粘質土が混じる（Mn が 5mm 大で多量に混じる）
105 10YR5/2 灰黄褐色シルト混粘質土と 10YR4/6 褐色粘質土が混じる
106 2.5Y5/2 暗灰黄色シルトから極細砂と 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルトが混じる
107 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土と 10YR4/6 褐色粘質土が混じりる（Mn が 5mm 大で僅かに混じる）
108 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト混粘質土と 10YR5/6 黄褐色粘質土がブロック状に混じる
109 10YR4/6 褐色極細砂と 10YR6/1 褐灰色極細砂が混じる
110 5Y4/3 暗オリーブ色シルト
111 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト混粘質土（3cm 大の礫が僅かに含む）
112 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト混粘質土に 10YR5/6 黄褐色粘質土が混じる <SP8023>
113 2.5Y5/2 暗灰黄色シルトから極細砂（5mm 大の礫少量含む）
114 5Y4/4 暗オリーブ色シルトと 2.5Y5/6 黄褐色シルトが混じる
115 5Y4/3 暗オリーブ色シルト
116 10YR4/6 褐色シルトと 10YR4/2 灰黄褐色シルトがまだらに混じる
117 10YR2/1 黒色粘質土と 10YR4/2 灰黄褐色シルトが混じる
118 10YR4/3 にぶい黄褐色極細砂混粘質土
119 10YR6/2 灰黄褐色粘質シルトと 10YR8/1 灰白粘質シルトが混じる（10cm 大の礫僅かに含む）
120 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土に層状もしくは 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土が混じる
121 5Y4/3 暗オリーブ色シルトから極細砂に 10YR5/6 黄褐色粘質土が混じる
122 2.5Y4/4 オリーブ褐色極細砂
123 2.5Y5/3 黄褐色シルトに 10YR5/8 黄褐色シルトが粒状に混じる
124 2.5Y5/2 暗灰黄色シルトに 10YR5/8 黄褐色シルトが粒所に多量に混じる
125 2.5Y5/3 黄褐色シルトと 10YR3/4 暗褐色シルトがまだらに混じる
126 10YR4/2 灰黄褐色シルト混粘質土と 10YR4/4 褐色粘質土がまだらに混じる
127 10YR3/2 黒褐色粘質土に 10YR4/2 灰黄褐色極細砂が粒状に入る
128 10YR3/2 黒褐色粘質土と 10YR5/2 灰黄褐色粘質土がまだらに混じる
129 10YR7/1 灰白色粘質土と 10YR5/6 黄褐色粘質土が混じる
130 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルトから極細砂に 10YR4/6 褐色粘質土が小ブロックで少量混じる
131 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルトと 10YR3/4 暗褐色シルトがまだらに混じる

1a 層（0 ～ 1 面）	1 ～ 6・10 ～ 14・20・58・59・62・63・65 ～ 67・69・70・82 ～ 91・101 ～ 104・107・108・110 ～ 114・121・123・124・130
1b 層（1 ～ 2 面）	15 ～ 19・21 ～ 30・42 ～ 45・47・51 ～ 54・60・61・64・73 ～ 76・80・81・92・97 ～ 99・105・106・109・115・116・122・125・126・131
SR2001	55・68・71・72・93・100・120・127
2 層（2 面～ベース）	31 ～ 36・46・48・49・56・77・78・94 ～ 96・100・117・118・128

第 10 図　④2 区西壁土層注記

1b 層の下部では SR2001 の堆積層を検出した。標高は 20.15 ～ 20.35m で、西へ傾斜する。層厚は 18 ㎝～ 32㎝を測る。SR2001 では、水田耕作の可能性を考え、植物珪酸体分析を実施した。SR2001 土層断面と照らし合わせた結果、17 層（10YR4/6 褐色極細砂と 10YR6/1 褐灰色極細砂が混じる）が水田層に該当すると考えられる。17 層は西側約 1/3 ほどが 5cm 程度低いものの、盛り上がりの標高は概ね 20.15ｍで、水田面が想定される面の標高とはほとんど変わらない。西端から西側 1/3 付近までは上面にオリーブ褐色極細砂が薄く堆積する。植物珪酸体分析の結果は、水田耕作が想定できる量のイネの花粉は検出できず、近隣での耕作の可能性が指摘された（第 4 章第 3 節）。

2 層は標高 19.9 ～ 20.2m で、東から西へ緩く傾斜する。層厚 12 ～ 22㎝で、2 層の堆積は中央付近がやや薄い。

⑦ 2 区南北あぜ（第 13 図）

2-1 区中央付近南端から北へ延長 20ｍで設定したあぜで土層断面を作成した。

基本層序は、①にぶい黄褐色シルト質粘質土に褐灰色シルト混り粘質土が混じる層等（1a 層） ②灰黄褐色粘質土ににぶい黄褐色粘質土が混じる層、にぶい黄褐色シルト質灰白色シルト混粘質土等が混じる層（1b 層） ③暗褐色細砂混り粘質土と灰黄褐色シルト混り粘質土、黒褐色粘質土ににぶい黄褐色シルト混り粘質土が混じる層など（2 層） ④黒褐色シルト混り粘質土に褐色シルト混り粘質土、礫を多量に含む層（ベース） である。

1b 層は調査区南端、SD2004 から 6ｍ付近にかけて堆積し、SD2005 の延長部分、17 層付近でいったん消失する。SD2004 から SD2005 の延長上の間は、小ピットが列状に多数検出された位置に相当し、この位置の 1b 層上面から掘り込まれたものである。SD2005 から SD2013 が想定される 26 層付近までは 1b 層の堆積は認められず、2 層の標高が高くなる位置である。2 層上面の標高差を 1b 層の堆積で平準化していると考えられる。SD2013 より北では再び 1b 層の堆積が認められる。1b 層の上面の標高は約 20.5 ～ 20.6m で、やや南側が高いが、概ね平坦である。層厚は南側で最大 36cm 程度、北側では 27cm 程度を測る。

2 層は 1b 層が消失する付近から出現し、北端部分まで認められる。標高は 20.3m ～ 20.5 ｍで、北から南へ緩やかに傾斜する。層厚は 10cm ～ 20cm で、1b 層が認められない部分は厚く、他では薄い。

⑧ 3 区西壁土層（第 14 図）

3 区西壁で作成した土層図である。

基本層序は①造成土・耕作土・床土　②にぶい黄褐色と褐色の中間色粘土質シルト層（1b 層） ③黒褐色礫混粘質シルト層（2 層） ④褐色礫混り粘質シルト層（ベース）である。

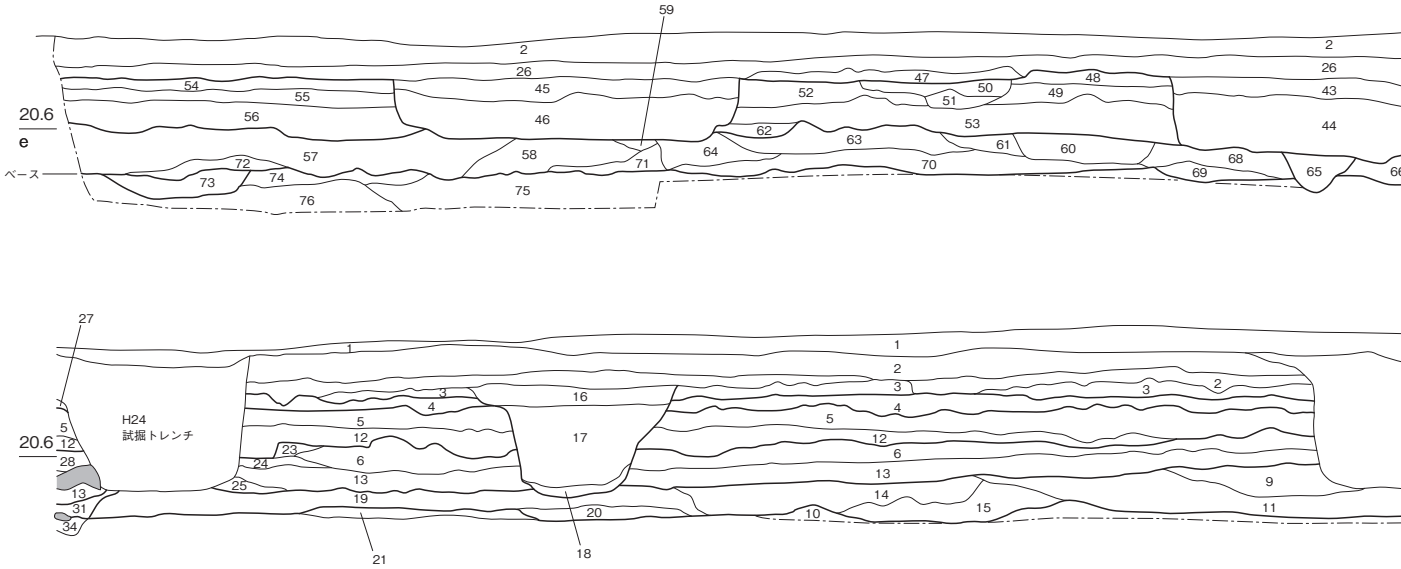
1b 層の標高は 20.9 ～ 21.0m、層厚は 18cm 程度で北西から南東へ僅かに傾斜する。この層上面から南海道側溝である SD3003 を検出した。

2 層の標高 20.8m、層厚は 14 ～ 17cm である。この層の上面から SB3001 柱穴を検出した。

⑨ 3・10 区北壁土層（第 15 図）

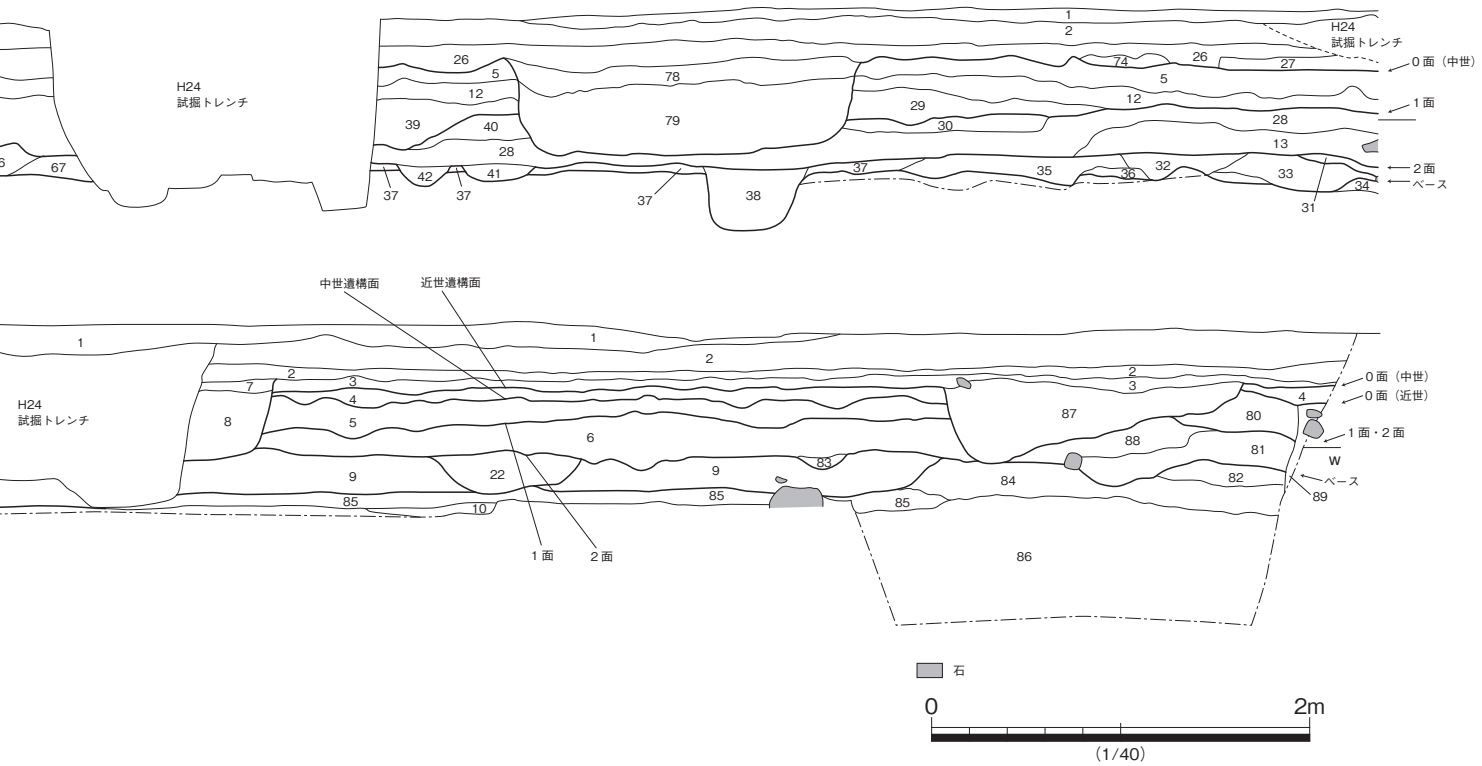
3 区・10 区の北壁で作成した土層図である。全面で SD3001・SD3003 の縦断面が認められた。

基本層序は、①造成土･耕作土･床土　② SD3001･SD3003 土層　③暗褐色礫混･黒褐色粘質シルト層（2



1 花崗土
2 耕作土
3 床土
4 2.5Y6/2 灰黄色極細砂混粘質土に 10YR4/6 褐色粘質土がまだらに混じる
5 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土と 10YR4/4 褐色粘質土がまだらに混じり、10YR3/3 暗褐色粘質土が混じる　Mn のブロックが上位に中量混じる
6 10YR5/2 灰黄褐色粘質土に 10YR3/3 暗褐色粘質土がまだらに混じる
7 10YR5/2 灰黄褐色粘質土と 10YR4/1 褐灰色粘質土が混じり、7.5YR4/6 褐色粘質土がブロック状に入る
8 10YR6/2 灰黄褐色土（3 ～ 5cm 大の礫中量混じる）<SX2011>
9 10YR2/2 黒褐色粘質土に 10YR4/6 褐色粘質土が粒状に少量混じる（3cm 大の礫少量含む）
10 10YR5/2 灰黄褐色粘質土
11 10YR3/1 黒褐色粘質土と 10YR5/1 褐灰色粘質土がまだらに混じる（3 ～ 5cm 大の礫中量含む）
12 10YR6/2 灰黄褐色粘質土に 10YR6/4 にぶい黄橙色粘質土がまだらに混じる
13 10YR6/2 灰黄褐色極細砂混粘質土と 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土がまだらに混じる（5cm 大の礫少量含む）
14 10YR4/1 褐灰色粘質土に 10YR5/2 灰黄褐色粘質土がまだらに混じる（2 ～ 10cm 大の礫少量混じる）
15 10YR3/2 黒褐色粘質土に 10YR5/1 褐灰色粘質土がまだらに混じる（2 ～ 15cm 大の礫多量に混じる）
16 10YR6/6 明黄褐色粘質土と 10YR7/2 にぶい黄橙色粘質土が混じり、10YR5/2 灰黄褐色粘質土が入る
17 10YR5/1 褐灰色粘質土混砂礫（砂礫 2 ～ 10cm 大の円礫、近世～古墳の遺物入る）<SX2004>
18 10YR4/1 褐灰色粘質土に 10YR4/4 褐色粘質土がまだらに混じる（3 ～ 4cm 大の礫少量含む、2cm 大の須恵器含む）
19 10YR3/1 黒褐色粘質土（2 ～ 3cm 大の礫少量含む）
20 10YR3/1 黒褐色粘質土に 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土がまだらに混じる（5cm 大の礫含む）
21 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土に 10YR4/1 褐灰色粘質土がまだらに混じる
22 10YR2/1 黒色砂礫混粘質土に 10YR4/1 褐灰色粘質土が筋状に混じる　<SD2032 か >
23 10YR5/2 灰黄褐色粘質土と 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土がまだらに混じる
24 10YR6/1 褐灰色粘質土に 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土がまだらに混じる
25 10YR4/2 灰黄褐色粘質土に 10YR3/1 黒褐色粘質土が混じる
26 10YR4/2 灰黄褐色粘質土に 10YR4/6 褐色粘質土がブロック状に少量混じる
27 10YR6/2 灰黄褐色粘質土と 10YR5/6 黄褐色粘質土が混じり、10YR5/2 灰黄褐色粘質土がまだらに入る
28 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土に 2.5Y6/1 黄灰色粘質土がまだらに混じる（2 ～ 5cm 大の礫含む）
29 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土と 10YR6/2 灰黄褐色粘質土がまだらに混じる
30 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土と 10YR6/1 褐灰色粘質土が混じる
31 10YR4/2 灰黄褐色粘質土に 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土がまだらに混じる（2 ～ 5cm 大の礫含む）<SP2248>
32 10YR3/1 黒褐色粘質土に 10YR6/2 灰黄褐色粘質土
量含む）
33 10YR4/2 灰黄褐色粘質土に 10YR5/2 灰黄褐色粘質
少量混じる）
34 10YR4/2 灰黄褐色粘質土
35 10YR3/1 黒褐色粘質土に 10YR5/4 にぶい黄褐色粘
量含む）
36 10YR5/2 灰黄褐色極細砂混粘質土（2 ～ 5cm 大の
37 10YR4/2 灰黄褐色粘質土と 10YR5/2 灰黄褐色粘質
38 10YR4/2 灰黄褐色粘質土に 10YR6/2 灰黄褐色粘
5cm 大の礫含む）<SP2258>
39 10YR5/2 灰黄褐色粘質土に 10YR6/2 灰黄褐色粘質
40 10YR6/1 褐灰色粘質土と 10YR5/4 にぶい黄褐色粘
41 10YR4/1 褐灰色粘質土（2cm 大の礫含む）<SP22
42 10YR3/2 黒褐色粘質土に 10YR5/2 灰黄褐色粘質土
43 10YR5/1 褐灰色粘質土に 10YR6/6 明黄褐色粘質土
44 10YR6/2 灰黄褐色粘質土混粗砂（2 ～ 10cm 大の
45 10YR5/2 灰黄褐色粘質土に 10YR3/4 暗褐色粘質土
46 10YR6/2 灰黄褐色粘質土混粗砂（2 ～ 5cm 大の礫
47 10YR5/2 灰黄褐色粘質土に 10YR5/4 にぶい黄褐色
48 10YR5/2 灰黄褐色粘質土と 10YR4/6 褐色粘質土が
49 10YR5/2 灰黄褐色粘質土に 10YR4/4 褐色粘質土が
50 10YR5/1 褐灰色粘質土と 10YR5/6 黄褐色粘質土が
(2cm 大の礫含む）
51 10YR6/2 灰黄褐色粘質土混粗砂（3cm 大の礫含む）
52 10YR7/2 にぶい黄橙色粘質土と 10YR5/4 にぶ
（10YR3/2 黒褐色粘質土が粒状に少量混じる）
53 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土に 10YR6/2 灰黄褐色
54 10YR6/1 褐灰色粘質土に 10YR5/6 黄褐色粘質土が
55 10YR5/2 灰黄褐色粘質土と 10YR5/4 にぶい黄褐色
56 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土に 10YR7/2 にぶい
5cm 大の礫少量含む）
57 10YR3/2 黒褐色粘質土
58 10YR4/2 灰黄褐色粘質土に 10YR5/3 にぶい黄褐色
の礫含む）
59 10YR5/2 灰黄褐色粘質土
60 10YR6/4 にぶい黄橙色粘質土と 10YR3/1 黒褐色粘
の土器片含む）
61 10YR3/2 黒褐色粘質土に 10YR5/3 にぶい黄褐色粘
62 10YR4/2 灰黄褐色粘質土に 10YR5/1 褐灰色粘質土
63 10YR4/1 褐灰色粘質土に 10YR5/3 にぶい黄褐色粘
量含む）
64 10YR3/1 黒褐色粘質土に 10YR5/2 灰黄褐色粘質土

第 11 図　⑤2 区南壁



土がまだらに混じる（2～3cm 大の礫少
質土がまだらに混じる（2～5cm 大の礫
粘質土がまだらに混じる（2cm 大の礫中
礫含む）
質土がまだらに混じる（5cm 大の礫含む）
粘質土が小ブロックで少量混じる（3～
質土がまだらに混じる
粘質土が混じる
57>
土がまだらに混じる　<SP2286>
土がまだらに混じる
礫中量含む）<SX2010>
土がまだらに混じる
少量含む）<SX2009>
色粘質土がまだらに混じる
が混じる
がまだらに混じる
がまだらに混じる
ぶい黄褐色粘質土がまだらに混じる
色粘質土がまだらに混じる
がまだらに混じる（5cm 大の礫含む）
色粘質土が混じる
い黄橙色粘質土がまだらに混じる（2～
色粘質土がまだらに混じる（2～5cm 大
粘質土が混じる（10cm 大の礫、3cm 大
粘質土が混じる
土がまだらに混じる
粘質土がまだらに混じる（2cm 大の礫少
土が混じる（1cm 大の礫少量含む）

65　10YR4/2 灰黄褐色粘質土と 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土が混じり、10YR5/1 褐灰色粘質土が混じる <SD2015>
66　10YR4/2 灰黄褐色粘質と 10YR5/2 灰黄褐色粘質土が混じる
67　10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土と 10YR4/2 灰黄褐色粘質土がまだらに混じる
68　10YR4/2 灰黄褐色粘質土に 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土がまだらに混じる
69　10YR5/2 灰黄褐色粘質土に 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土がまだらに混じる
70　10YR4/2 灰黄褐色粘質土（2～5cm 大の礫少量含む）
71　10YR4/1 褐灰色粘質土と 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土がまだらに混じる
72　10YR3/1 黒褐色粘質土に 10YR6/3 にぶい黄橙色粘質土がまだらに混じる（2cm 大の礫少量混じる）
73　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土に 10YR2/2 黒褐色粘質土が混じる　<SD2018>
74　10YR4/2 灰黄褐色粘質土と 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土が混じる
75　10YR6/4 にぶい黄橙色粘質土（2～5cm 大の礫含む）
76　10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土（3cm 大の礫含む）
77　10YR7/1 灰白色粘質土と 10YR5/6 黄褐色粘質土が混じり、2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土が混じる
78　10YR5/6 黄褐色粘質土と 10YR5/1 褐灰色粘質土が混じり、10YR6/2 灰黄褐色粘質土が混じる
79　10YR5/1 褐灰色粘質土に 10YR5/6 黄褐色粘質土がブロック状に混じる（3～10cm 大の礫中量含む）<SX2003>
80　10YR5/2 灰黄褐色粘質土に 10YR6/3 にぶい黄橙色粘質土がまだらに混じる（5cm 大の礫含む）<SX2030>
81　10YR5/1 褐灰色シルト混粘質土　<SD2027>
82　10YR6/1 褐灰色粘質土に 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土が混じる（2～5cm 大の礫含む）
83　10YR6/2 灰黄褐色粘質土に 10YR4/6 褐色粘質土がまだらに混じる
84　10YR5/2 灰黄褐色粘質土に 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土がまだらに混じる（2～5cm 大の礫含む）
85　10YR5/2 灰黄褐色粘質土に 10YR4/2 灰黄褐色粘質土混じる（3cm 大の礫含む）
86　10YR5/1 褐灰色粗砂と 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂が混じる（3～5cm 大の礫含む）
87　10YR6/2 灰黄褐色砂礫（2～5cm 大の礫含む）<SX2028>
88　10YR5/2 灰黄褐色粘質土に 10YR4/3 にぶい黄褐粘質土がまだらに混じる　<SD2027>
89　10YR4/2 灰黄褐色粘質土に 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土がまだらに混じる　<SX2030>

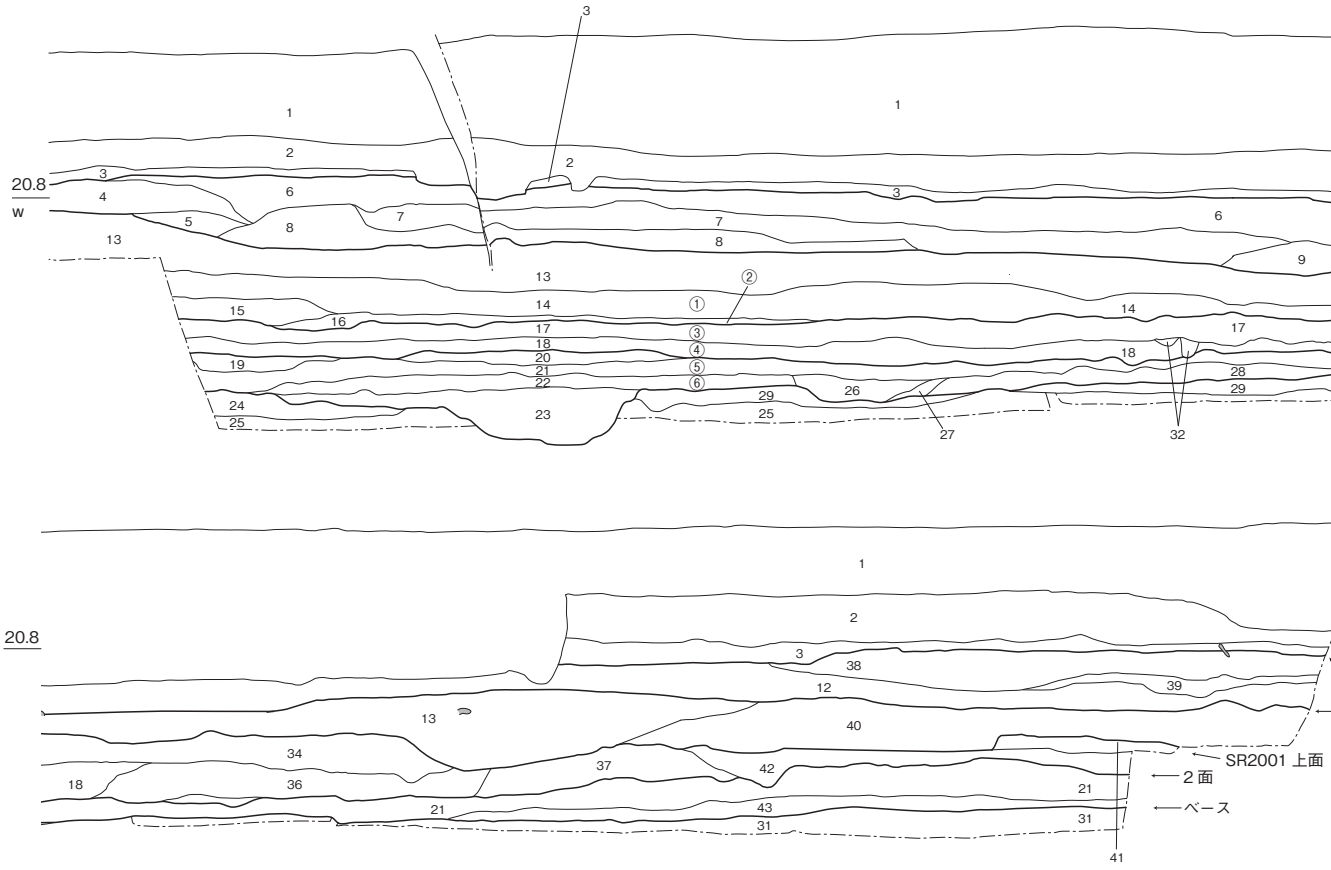
1a 層　5・12・29・39・48～56・62

1b 層　6・13・23～25・28・30・40

2 層　9・11・14・15・19・20・32・33・35～37・57～61・63・64・66～69・71・72

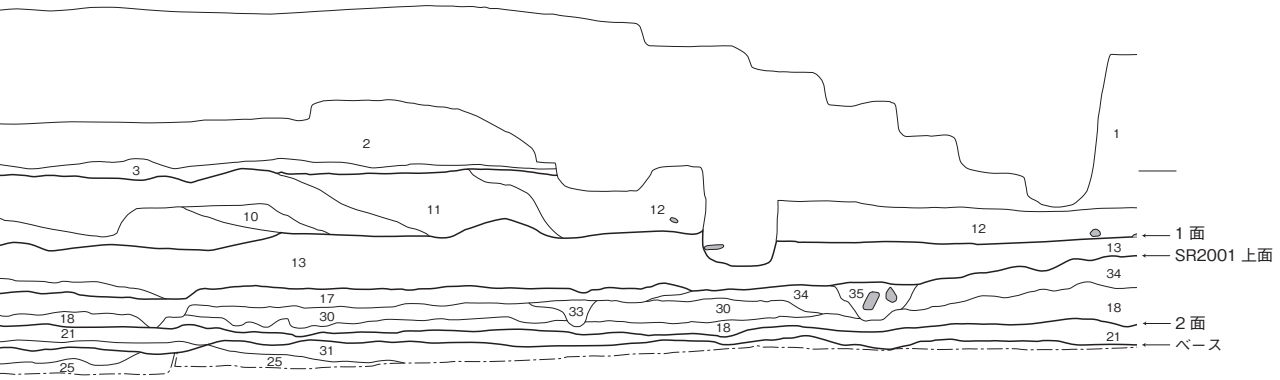
SD2004　6・13・18・23～25・28・30・40

壁土層断面図（1/40）



1　花崗土
2　耕作土
3　床土
4　2.5Y4/3 オリーブ褐色シルトから極細砂に 10YR4/6 褐色粘質土が小ブロックで少量混じる
5　10YR5/2 灰黄褐色粗砂
6　10YR6/2 灰黄褐色極細砂と 10YR4/6 褐色粘質土混極細砂が混じる
（粗砂から 1cm 大の礫を中量含む）
7　10YR5/3 にぶい黄褐色シルトから極細砂と 10YR4/6 褐色シルトがまだらに混じる
8　10YR4/4 褐色シルトから極細砂と 10YR6/2 灰黄褐色シルトが混じる
（1cm 大の礫少量含む）
9　10YR4/2 灰黄褐色シルトと 10YR4/6 褐色シルトがまだらに混じる
10　10YR4/2 灰黄褐色極細砂混粘質土と 10YR4/6 褐色シルトがまだらに混じる
11　10YR5/2 灰黄褐色シルト混粘質土と 10YR5/6 黄褐色粘質土混じる
（1cm 大の礫少量含む）
12　10YR5/2 灰黄褐色極細砂混粘質土と 10YR4/6 褐色粘質土がまだらに混じる
（1cm 大の礫僅かに含む）
13　2.5Y5/3 黄褐色シルトと 10YR3/4 暗褐色シルトがまだらに混じる
14　10YR4/2 灰黄褐色シルト混粘質土と 10YR4/4 褐色粘質土がまだらに混じる
15　10YR4/2 灰黄褐色粘質土に 10YR4/6 褐色粘質土がまだらに混じる
16　2.5Y4/4 オリーブ褐色極細砂
17　10YR4/6 褐色極細砂と 10YR6/1 褐灰色極細砂が混じる
18　10YR3/2 黒褐色粘質土に 10YR4/2 灰黄褐色極細砂が粒状に入る
19　10YR3/2 黒褐色粘質土と 10YR5/2 灰黄褐色粘質土がまだらに混じる
20　10YR3/3 暗褐色粘質土に 2.5Y7/2 灰黄色極細砂混粘質土がブロック所に入る
21　10YR2/2 黒褐色極細砂粘質土
22　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト混粘質土に 2.5Y6/2 灰黄色粘質土が混じる
23　2.5Y6/2 灰黄色シルト混粘質土と 10YR4/2 灰黄褐色粘質土が混じる
24　10YR6/2 灰黄褐色粘質シルトと 10YR8/1 灰白粘質シルトが混じる
（10cm 大の礫僅かに含む）
25　10YR7/1 灰白色粘質
26　10YR3/2 黒褐色粘質
27　10YR3/2 黒褐色粘質
28　10YR5/2 灰黄褐色シ
粘質土がブロック状に
29　10YR5/2 灰黄褐色シ
粘質土がブロック状に
30　10YR5/3 にぶい黄褐
31　10YR6/3 にぶい黄橙
32　10YR4/3 にぶい黄褐
33　10YR4/4 褐色極細砂
34　10YR6/2 灰黄褐色シ
35　10YR5/3 にぶい黄褐
36　10YR4/3 にぶい黄褐
37　10YR5/2 灰黄褐色粘
38　10YR5/2 灰黄褐色シ
（1cm 大の礫少量含む）
39　10YR4/3 にぶい黄褐
（1cm 大の礫少量含む）
40　10YR3/4 暗褐色シル
41　10YR4/2 灰黄褐色粘
42　10YR5/2 灰黄褐色粘
43　10YR3/3 暗褐色粘質
（礫を少量含む）

第 12 図　⑥2 区北壁



①～⑥　植物珪酸体分析試料（第４章第３節）

石

0　2m

(1/40)

土と 10YR5/6 黄褐色粘質土が混じる
土に 10YR6/2 灰黄褐色粘質土が小ブロックで僅かに混じる
土に 10YR6/2 灰黄褐色粘質土がまだらに混じる
ルト混粘質土と 10YR7/2 にぶい黄橙色粘質土が混じり 10YR5/6 黄褐色
入る
ルト混粘質土と 10YR7/2 にぶい黄橙色粘質土が混じり 10YR5/6 黄褐色
混じる
色極細砂混粘質土と 10YR4/6 褐色極細砂混粘質土がまだらに混じる
色シルトと 10YR4/1 褐灰色極細砂混粘質土が混じる
色極細砂

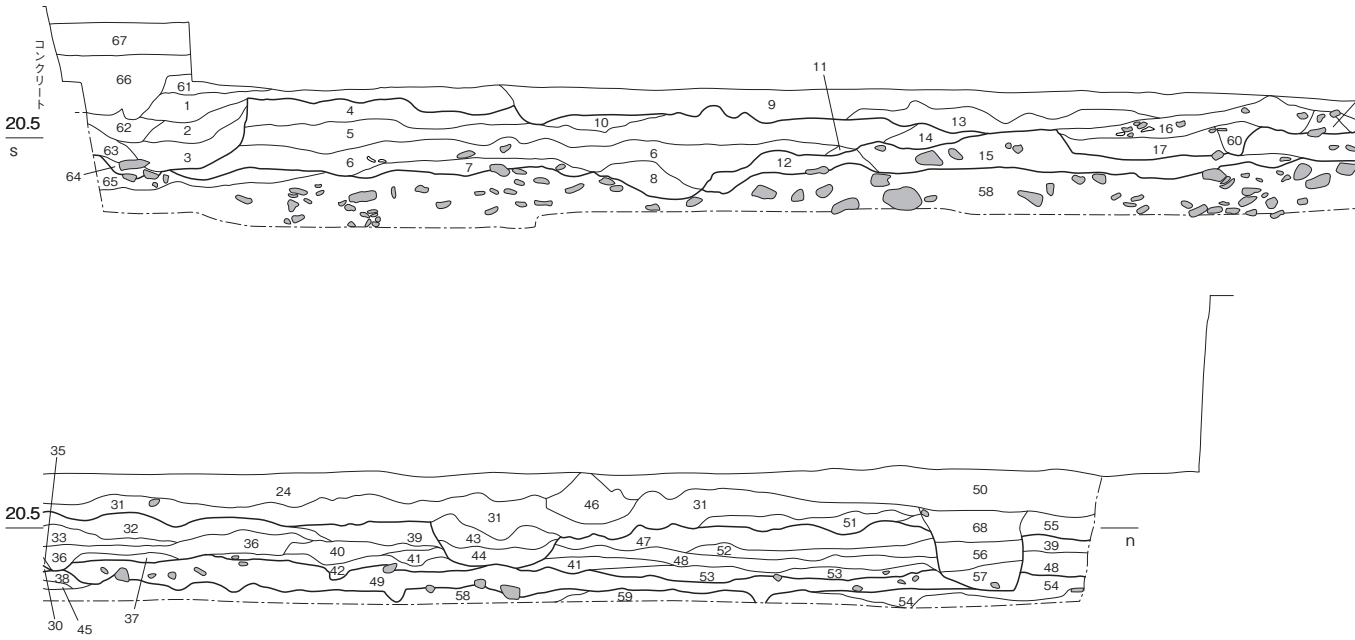
ルト混粘質土に 10YR5/6 黄褐色粘質土がまだらに混じる
色極細砂混粘質土に 10YR5/6 黄褐色粘質土が混じる
色粘質土 10YR4/6 褐色粘質土が混じる
質土に 10YR4/6 褐色粘質土がブロック状に混じる
ルトから極細砂と 10YR5/6 黄褐色粘質土がまだらに混じる

色シルトと 10YR3/4 暗褐色シルトがまだらに混じる

ト混粘質土に 10YR5/2 灰黄褐色極細砂混粘質土が混じる
質土と 10YR4/6 褐色粘質土がブロック状に混じる
質土と 10YR5/6 黄褐色粘質土が混じる
土と 10YR6/2 灰黄褐色極細砂混粘質土が混じる

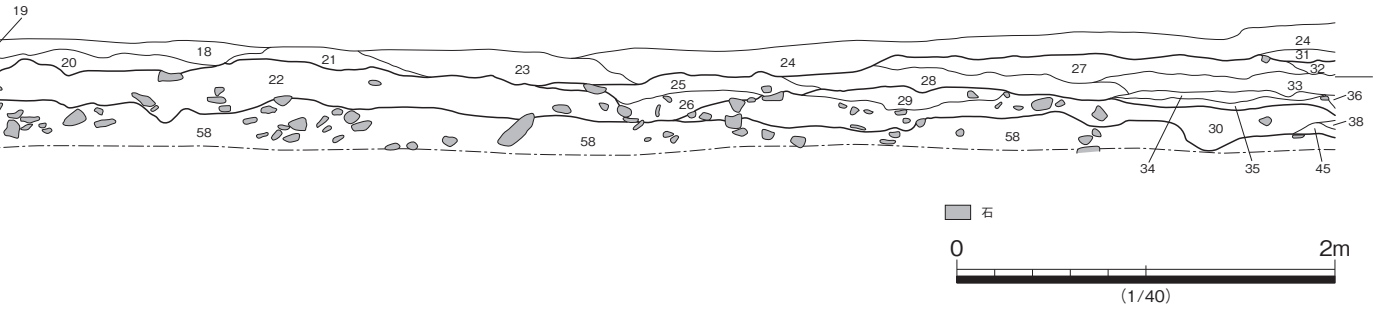
1a 層	4～12・38・39
1b 層	13～16・40
SR2001	17・18・30・32～37・42
2　層	19～23・26～28

壌土層断面図（1/40）



1　10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土に 10YR6/2 灰黄褐色粘質土がまだらに混じる
2　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト混粘質土に 10YR6/1 褐灰色シルト混粘質土がまだらに混じる
3　10YR6/2 灰黄褐色シルト混粘質土に 10YR7/2 にぶい黄橙シルト混粘質土がまだらに混じる
4　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土に 10YR6/3 にぶい黄橙色粘質土がまだらに混じる
5　10YR5/2 灰黄褐色粘質土に 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土が混じる
6　10YR4/2 灰黄褐色粘質土に 10YR7/2 にぶい黄橙色粘質土が小ブロックで少量混じる（1 ～ 3cm 大の土器片含む）
7　10YR5/2 灰黄褐色粘質土（2 ～ 5cm 大の礫含む）
8　10YR5/4 にぶい黄褐色細砂混粘質土
9　10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土に 10YR7/1 灰白色粘質土が筋状に混じる
10　10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土に 10YR5/2 灰黄褐色粘質土が混じる（土器片含む）
11　10YR3/2 黒褐色粘質土と 10YR4/2 灰黄褐色粘質土が混じる
12　10YR5/3 にぶい黄褐色細砂混粘質土に 10YR4/2 灰黄褐色細砂混粘質土がまだらに混じる（2 ～ 5cm 大の礫含む）
13　10YR5/4 にぶい黄褐色細砂混粘質土に 10YR6/2 灰黄褐色細砂混粘質土が筋状に混じる（1 ～ 2cm 大の礫少量含む）
14　10YR4/2 灰黄褐色細砂混粘質土と 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂混粘質土が混じる
15　10YR3/3 暗褐色細砂混粘質土と 10YR5/2 灰黄褐色シルト混粘質土が混じる
16　10YR6/4 にぶい黄橙色シルト混粘質土に 10YR6/2 灰黄褐色シルト混粘質土が混じる（1 ～ 5cm 大の礫、2cm 大の土器片含む）
17　10YR5/3 にぶい黄褐色シルト混粘質土と 10YR4/2 灰黄褐色シルト混粘質土が混じる <SD2005>
18　10YR5/4 にぶい黄褐色シルト混粘質土に 10YR6/1 褐灰色シルト混粘質土が小ブロックで中量混じる
19　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト混粘質土に 10YR7/2 にぶい黄橙色シルト混粘質土が混じる（2 ～ 4cm 大の礫含む）
20　10YR5/4 にぶい黄褐色シルトに 10YR7/1 灰白色細砂混粘質土がまだらに混じる
21　10YR5/3 にぶい黄褐色シルト混粘質土に 10YR7/2 にぶい黄橙色シルト混粘質土が筋状に混じる
22　10YR3/2 黒褐色シルトと 10YR4/2 灰黄褐色シルトが混じる（3 ～ 10cm 大の礫含む）
23　10YR5/4 にぶい黄褐色シルト混粘質土に 10YR7/1 灰白色シルト混粘質土が小ブロックで中量混じる
24　10YR5/4 にぶい黄褐色シルト混粘質土に 10YR6/1 褐灰色シルト混粘質土が筋状に混じる
25　10YR5/4 にぶい黄褐色シルト混粘質土に 10YR6/1 褐灰色シルト混粘質土がまだらに混じる（2 ～ 5cm 大の礫、3cm 大の土器片含む）<SD2013>
26　10YR5/3 にぶい黄褐色シルト混粘質土と 10YR5/1（2 ～ 3cm 大の礫含む）<SD2013>
27　10YR5/4 にぶい黄褐色シルト混粘質土（2cm 大の礫
28　10YR6/3 にぶい黄橙色シルト混粘質土に 10YR7/1
29　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト混粘質土に 10YR6/2（3cm 大の礫含む）
30　10YR3/2 黒褐色極細砂に 10YR5/4 にぶい黄褐色シ（2 ～ 5cm 大の礫少量含む）
31　10YR6/4 にぶい黄橙色シルト混粘質土に 10YR6/1（4cm 大の礫含む）
32　10YR6/3 にぶい黄橙色シルト混粘質土に 10YR7/2
33　10YR4/4 褐色シルト混粘質土に 2.5Y6/2 灰黄色シ
34　10YR5/3 にぶい黄褐色シルト混粘質土と 10YR6/1
35　10YR6/2 灰黄褐色シルト混粘質土に 10YR6/4 にぶ
36　2.5Y6/2 灰黄色シルト混粘質土と 10YR7/1 灰白色
37　10YR6/2 灰黄褐色シルト混粘質土（1 ～ 2cm 大の
38　10YR5/3 にぶい黄褐色極細砂混粘質土と 10YR6/2（2cm 大の礫含む）
39　10YR6/4 にぶい黄橙色シルト混粘質土と 10YR6/1
40　10YR5/4 にぶい黄褐色シルト混粘質土に 10YR7/2
41　10YR5/3 にぶい黄褐色シルト混粘質土に 10YR6/1
42　10YR5/3 にぶい黄褐色シルト混粘質土に 10YR6/2
43　10YR5/4 にぶい黄褐色シルト混粘質土に 10YR6/1（1 ～ 2cm 大の礫少量含む）<SD2002>
44　10YR5/4 にぶい黄褐色シルト混粘質土に 10YR6/2 <SD2002>
45　10YR6/3 にぶい黄橙色極細砂混粘質土に 10YR7/4（2 ～ 3cm 大の礫含む）
46　10YR5/4 にぶい黄褐色シルト混粘質土に 10YR7/2
47　10YR6/3 にぶい黄橙色シルト混粘質土に 10YR5/6
48　10YR6/2 灰黄褐色シルト混粘質土に 10YR5/4 にぶ
49　10YR3/3 暗褐色極細砂混粘質土に 10YR6/4 にぶい（2 ～ 5cm 大の円礫多量に含む）
50　10YR6/6 明黄褐色シルト混粘質土に 10YR7/1 灰白色が粒状に中量混じる（Mn）

第 13 図　⑦2 区南北



褐灰色シルト混粘質土が混じる

礫含む）
灰白色シルト混粘質土がまだらに混じる
2 灰黄褐色シルト混粘質土がまだらに混じる

ルト混粘質土がまだらに混じる

褐灰色シルト混粘質土がまだらに混じる

にぶい黄橙色シルト混粘質土が混じる
ルト混粘質土がまだらに混じる
褐灰色シルト混粘質土が混じる
い黄橙色シルト混粘質土が小ブロックで少量混じる
粘質土が混じる
礫含む）
灰黄褐色極細砂混粘質土が混じる

褐灰色シルト混粘質土が混じる
にぶい黄橙色シルト混粘質土がまだらに混じる
褐灰色シルト混粘質土がまだらに混じる
灰黄褐色シルト混粘質土がまだらに混じる
褐灰色シルト混粘質土が小ブロックで少量混じる

灰黄褐色シルト混粘質土が小ブロックで中量混じる

にぶい黄橙色極細砂混粘質土がまだらに混じる

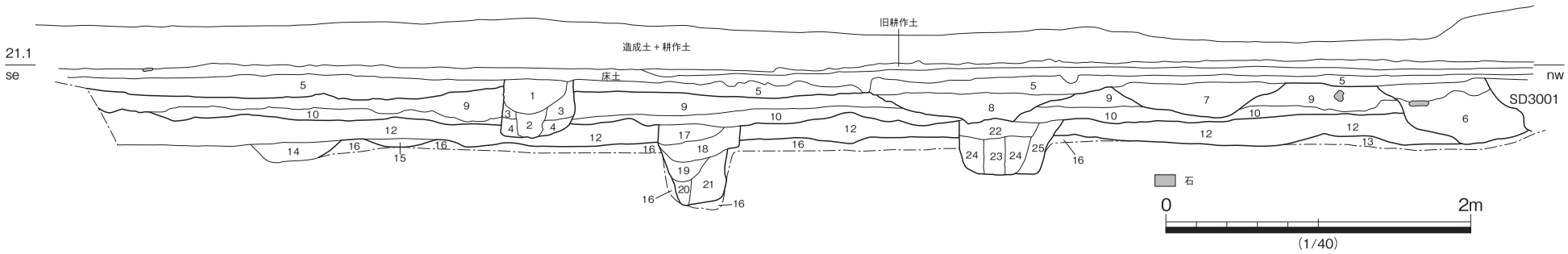
にぶい黄橙色シルト混粘質土がまだらに混じる
黄褐色シルト混粘質土が混じる
ぶい黄褐色シルト混粘質土がまだらに混じる
い黄橙色粘質土がブロック状に混じる

白色シルト混粘質土が筋状に混じり、10YR3/3 暗褐

51　10YR5/4 にぶい黄褐色シルト混粘質土に 10YR7/1 灰白色シルト混粘質土が小ブロックで少量混じる
52　10YR5/3 にぶい黄褐色粘質シルトと 10YR4/6 褐色シルト、10YR7/1 灰白色シルトが混じる
53　2.5Y6/3 にぶい黄色粘質シルトに、10YR5/8 黄褐色粘質土がまだらに混じる
54　10YR6/2 灰黄褐色極細砂に 10YR5/6 黄褐色粘質土がまだらに混じる
55　10YR6/4 にぶい黄橙色シルト混粘質土に 10YR7/2 にぶい黄橙色シルト混粘質土がまだらに混じる
56　10YR5/4 にぶい黄褐色シルト混粘質土に 10YR6/1 褐灰色シルト混粘質土がまだらに混じる　<SD2001>
57　10YR5/6 黄褐色シルト混粘質土に 10YR6/2 灰黄褐色シルト混粘質土がまだらに混じる　<SD2001>
58　10YR3/2 黒褐色シルト混粘質土に 10YR4/6 褐色シルト混粘質土がまだらに混じる
（1 ～ 20cm 大の礫多く含む）
59　10YR5/6 黄褐色シルト混粘質土と 10YR6/1 褐灰色シルト混粘質土が混じる
60　10YR6/8 明黄褐色極細砂混粘質土に 10YR6/2 灰黄褐色粘質土がブロック状に混じる
61　10YR7/2 にぶい黄橙色シルト混粘質土と 10YR7/4 にぶい黄橙色シルト混粘質土が混じり、7.5YR4/2 灰褐色粘質土が粒状に中量混じる
62　10YR6/4 にぶい黄橙色シルト混粘質土に 10YR6/2 灰黄褐色シルト混粘質土がまだらに混じり、7.5YR4/2 灰褐色粘質土が粒状に少量混じる
63　10YR6/3 にぶい黄橙色シルト混粘質土に 10YR6/2 灰黄褐色シルト混粘質土がまだらに混じる
（3cm 大の土器片含む）
64　10YR6/3 にぶい黄橙色シルト混粘質土
（10cm 大の礫含む）
65　7.5YR5/4 にぶい褐色シルト混粘質土に 10YR6/2 灰黄褐色シルト混粘質土と 10YR7/3 にぶい黄橙色シルト混粘質土が混じる（2 ～ 5cm 大の礫含む）
66　コンクリート擁壁の埋戻土
67　耕作土
68　10YR6/4 にぶい黄橙色極細砂混粘質土に 10YR7/1 灰白色極細砂混粘質土がまだらに混じる

SD2004　2・3・62 ～ 64
1ｂ層　4 ～ 8・10・11・14・25・27・28・32 ～ 37・39 ～ 42・47・48・52・53
2 層　12・15・22・26・29・30・38・40・49

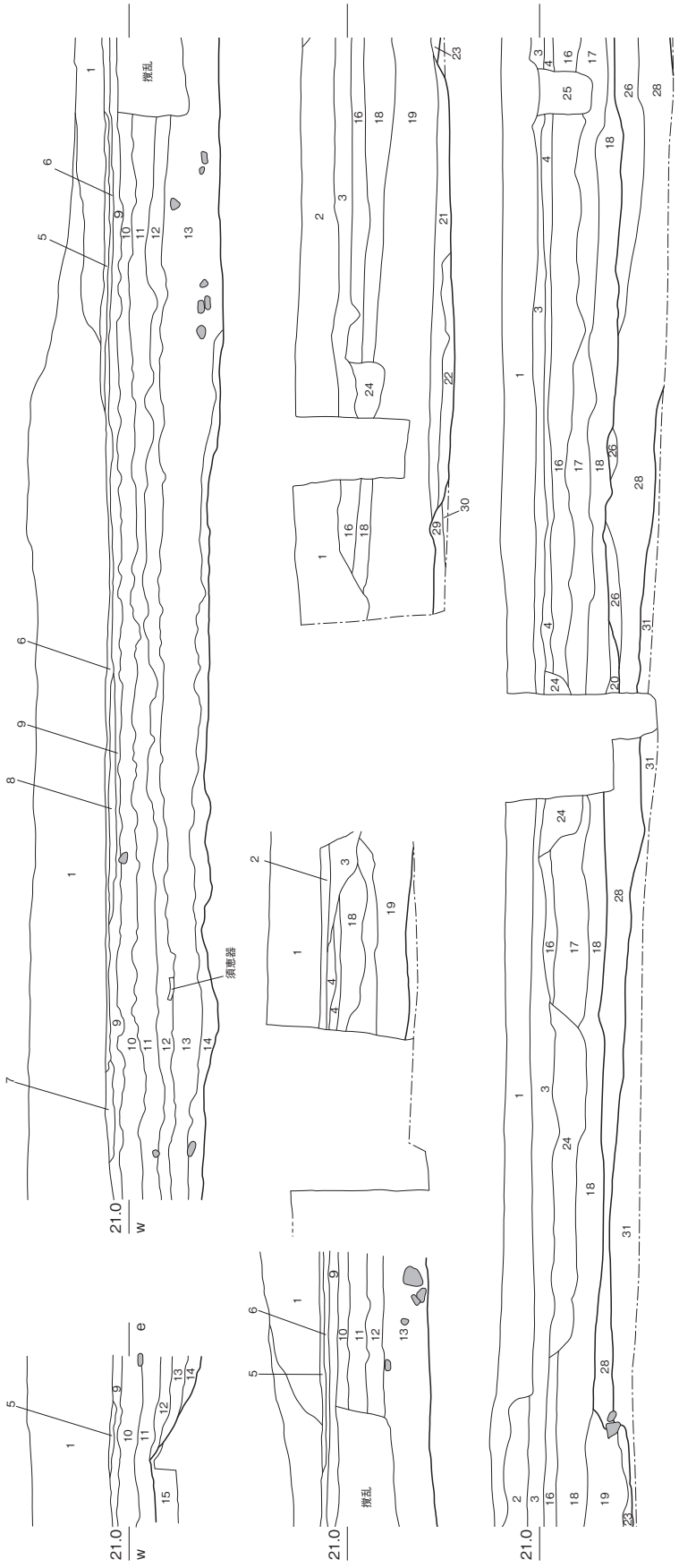
あぜ土層断面図（1/40）



1　10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土シルト（10YR6/3 にぶい黄橙色粘土混砂質シルトの小ブロックを多含する）
2　10YR5/3 にぶい黄褐色礫混砂質シルト（10YR6/4 にぶい黄橙色粘土混砂質シルトの小ブロックを若干含む他 1cm 大程度の小礫を若干含む）
3　10YR6/4 にぶい黄橙色砂質シルト
4　10YR5/2 灰黄褐色粗砂混砂質シルト（10YR3/3 暗褐色粘土質シルトの小ブロックを多含する）
＜柱穴＞
5　10YR6/3 にぶい黄橙色砂質シルト（10YR7/2 にぶい黄橙色砂質シルトの乾痕多く、10YR4/6 褐色に変色した根痕跡多い）（生物じょう乱による汚物層で本来的には 9 層に相当？遺構面はこの層上面の可能性）
6　10YR4/4 褐色粘土質シルト（5cm 大程度の亜円礫を若干含む）<SD3003>
7　10YR4/6 褐色粘土質シルト（5cm 大前後の礫を若干含む。下位がやや暗色を呈する他、礫の量が増える。機能時堆積層がある）<SD3002>
8　2.5Y5/6 黄褐色砂質シルト（浅い落ち込み）
9　10YR4/4 褐色と 10YR5/4 にぶい黄褐色の中間色粘土質シルト（6 層に比べるとやや明るく砂質気味）
10　10YR3/3 暗褐色礫混粘質シルト（10YR5/4 にぶい黄褐色粘土混砂質シルトの小ブロック及び 1cm 大前後の小礫を多含する）
11　10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂混粘土質シルト（10YR3/3 暗褐色粘土質シルトの小ブロック及び 0.5 ～ 2cm 大の小礫を多含する）
12　10YR2/3 黒褐色礫混粘質シルト（1 ～ 5cm 大の亜円礫を多含する）
13　10YR5/3 にぶい黄褐色礫混粘質シルト（1 ～ 5cm 大の亜円礫を多含する）
14　2.5Y4/4 オリーブ褐色粗砂混じり粘質シルト
15　2.5Y4/3 オリーブ褐色粗砂混じり粘質シルト
16　10YR4/6 褐色礫混じり粘質シルト
17　10YR4/3 にぶい黄褐色礫混粘質シルト（10YR3/2 黒褐色砂質シルトを多含する）
18　10YR5/4 にぶい黄褐色礫混じり砂質シルト
19　10YR5/3 にぶい黄褐色
20　10YR5/4 にぶい黄褐色
21　10YR4/3 にぶい黄褐色
＜SB3001-SP3017＞
22　10YR2/3 黒褐色礫混じり粘質土（10YR7/8 黄橙色粘土及び0.5～1cm大の鎖礫を若干含む。包含層３下端を含む？）
23　10YR4/3 にぶい黄褐色礫混じり粘質シルト（0.5 ～ 1cm 大の鎖礫多含）
24　10YR4/3 にぶい黄褐色礫混じり粘質シルト（10YR7/8 黄橙色粘土及び 0.5 ～ 1cm 大の鎖礫を若干含む。包含層 3 下端を含む？）
25　10YR3/3 暗褐礫混じり粘質シルト
＜SB3001-SP3013＞

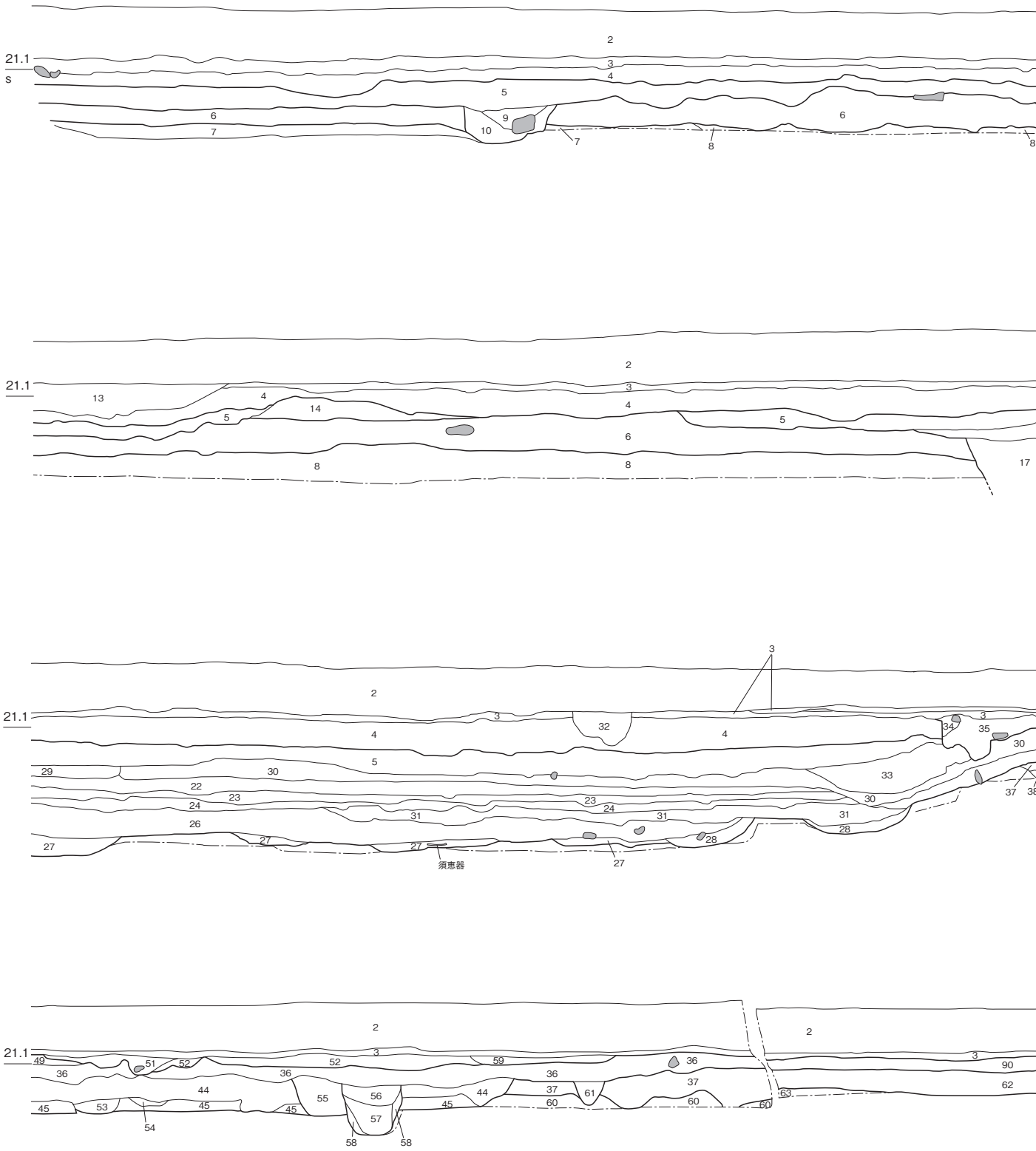
1b層　9・10
2層　12
ベース　13・16

第 14 図　⑧３区西壁土層断面図（1/40）

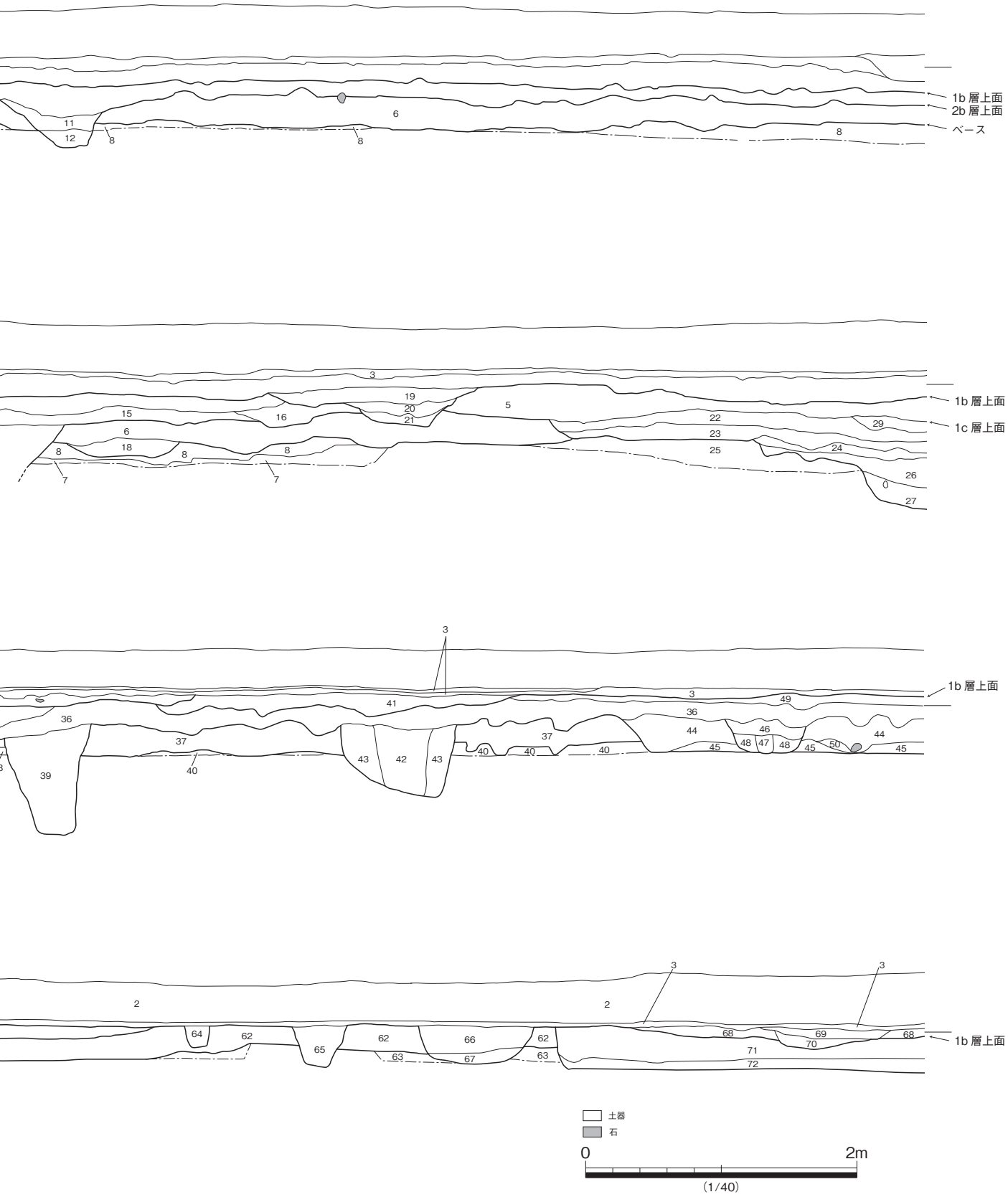


1b 層　15
2 層　26 ～ 30
ベース　31

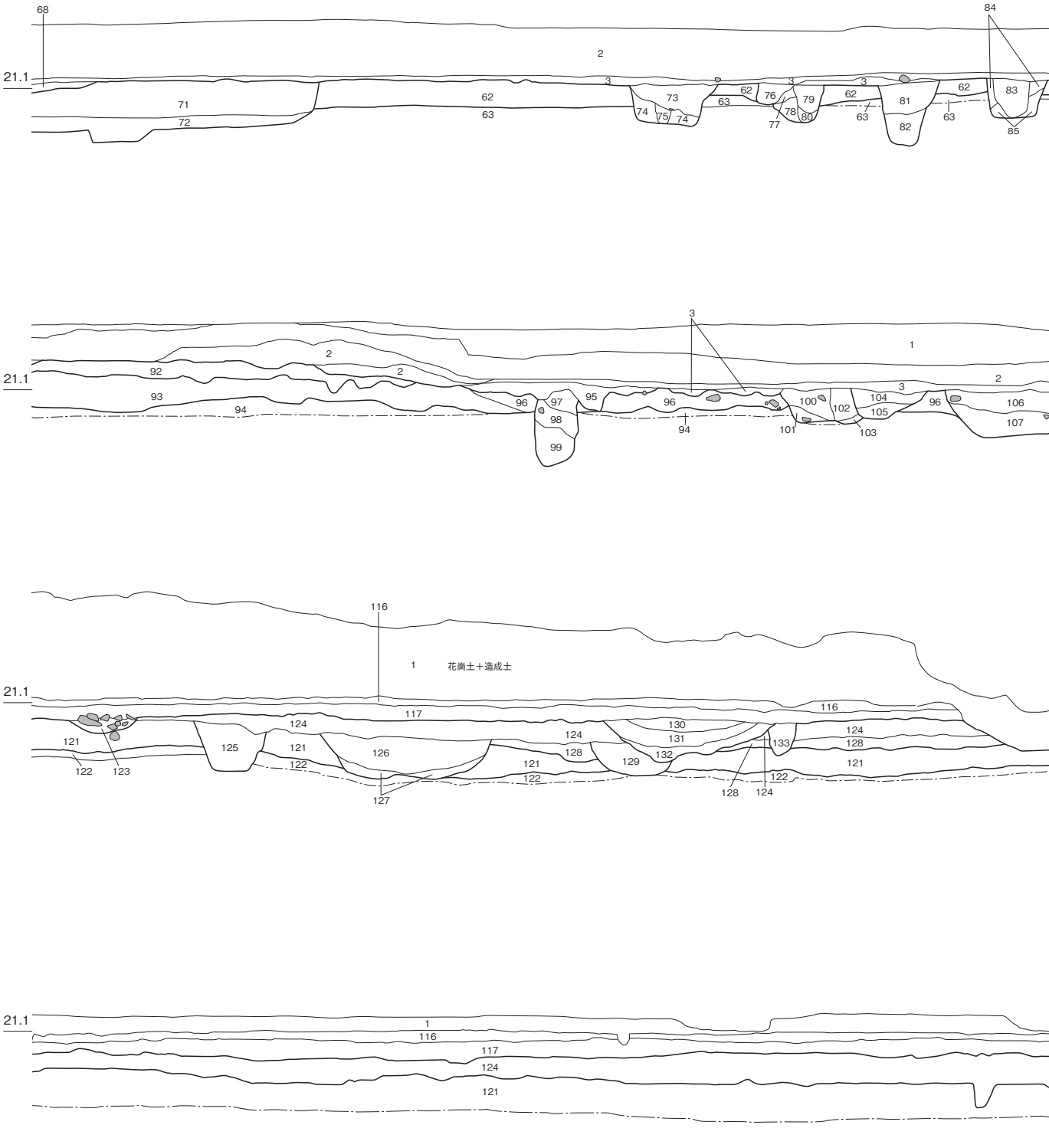
第 15 図　⑨ 3 区・10 区北壁土層断面図（1/40）



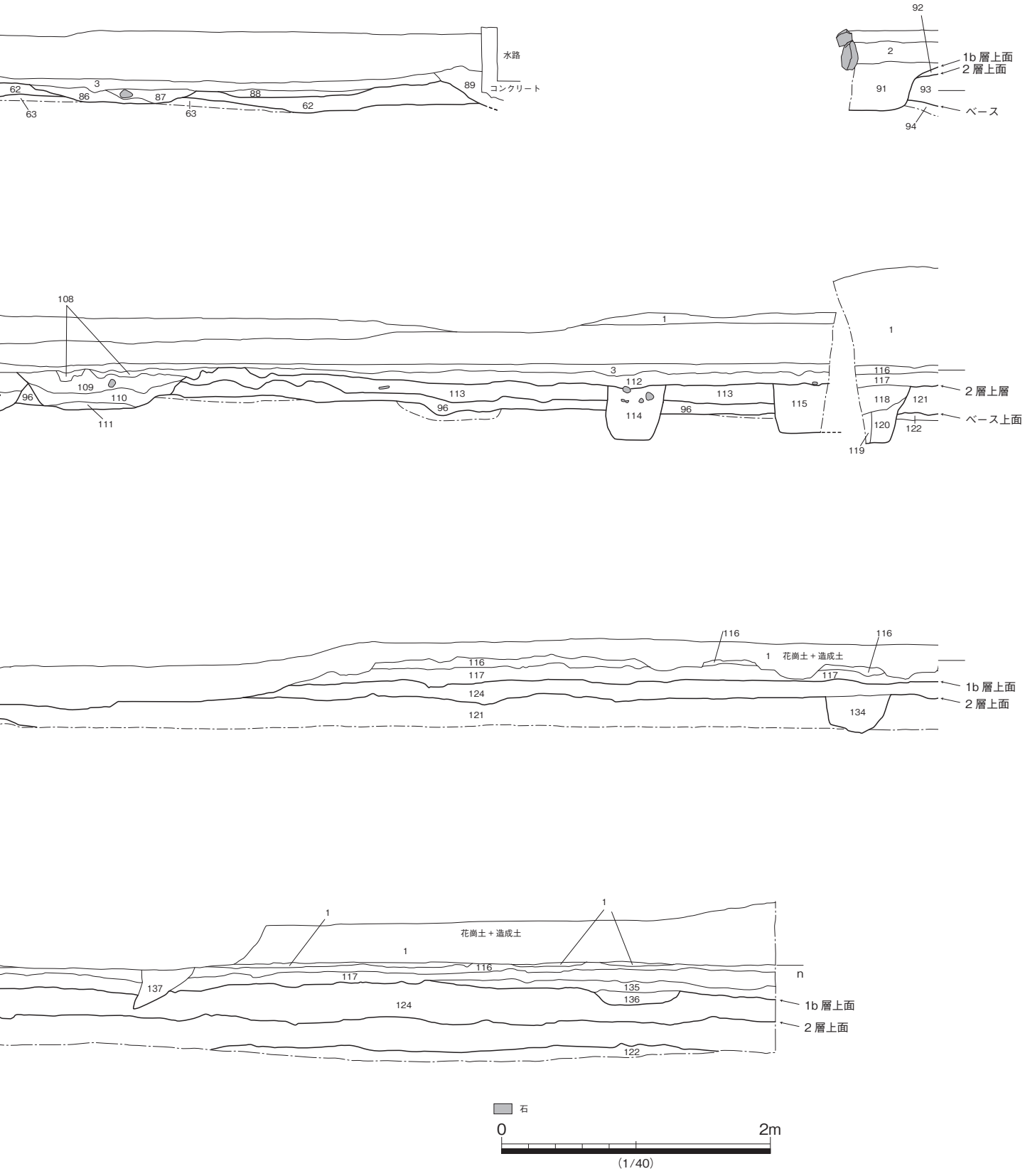
第 16 図　⑩ 7・8・10 区



区西壁土層断面図１（1/40）



第 17 図　⑩ 7・8・10 区



東西壁土層断面図２（1/40）

1　花崗土・造成土
2　耕作土
3　床土
4　10YR6/2 灰黄褐色シルト　<1a 層 >
5　7.5YR5/3 にぶい褐色シルト　<1b 層 >
6　5YR3/3 暗赤褐色シルト（3 ～ 5cm 大程度の礫を多量に含む）<2 層 >
7　10YR8/6 黄橙シルトに 10YR6/8 明黄褐色シルトがまだらに混ざる ―― < ベース >
8　7.5YR7/6 橙と 7.5YR5/2 灰褐色シルトがまだらに混ざる ――
9　10YR5/2 灰黄褐色シルト　10YR3/3 暗褐色シルトを中量まだらに含む ―― <SD7003>
10　10YR4/2 灰黄褐色シルト　10YR5/6 黄褐色シルトが粒状に少量まだらに混じる ――
11　10YR5/2 灰黄褐色シルト　10YR4/3 にぶい黄褐色シルトを粒状に多量に含む ――
12　10YR4/2 灰黄褐色シルト　10YR7/4 にぶい黄橙色シルトをまだらに少量含む ―― <SD7002>
13　近世以降落ち込み
14　<1b 層 >
15　<1b 層 >
16　<1b 層 >
17　5YR3/4 暗赤褐色シルト　< 未検出遺構 >
18　10YR8/6 黄橙粘質土　< 未検出遺構 >
19　10YR6/3 にぶい黄橙色シルト　粒状の 10YR6/8 明黄褐色土と 10YR3/4 暗褐色土を含む　<SX7002>
20　10YR5/2 灰黄褐色シルト　10YR5/6 黄褐色シルトが極少量粒状に混じる ―― <SD7001>
21　10YR6/2 灰黄褐色シルト ――
22　10YR6/1 褐灰色砂質土に 10YR6/8 明黄褐色シルトがまだらに混じる ――
23　10YR 明黄褐色砂質土 ―― <1c 層 >
24　7.5YR5/2 灰褐色砂質土 ――
25　10YR6/2 灰黄褐色シルト　< ベース >
26　2.5YR5/1 赤灰色シルト ――
27　10R5/2 灰赤色シルト ―― <SX7004>
28　2.5YR3/1 暗赤灰色粘質土 ――
29　10YR8/6 黄橙シルト　<1b 層 >
30　7.5YR5/2 灰褐色粗砂
　10YR5/8 黄褐色シルト　10YR3/4 暗褐色シルトがブロックで少量混じる　<1b 層 >
31　7.5YR5/2 灰褐色シルト　<SX7004>
32　5YR8/4 淡橙色粘質土　（3 ～ 5cm 大程度の礫がまだらに混じる）　< 未検出遺構 >
33　10YR7/2 褐色砂質土　<1b 層 >
34　10YR5/6 黄褐色シルト混じり粘質土と 10YR6/2 灰黄褐色シルトが混じる ―― <SX7001>
35　SX7001 ――
36　<1b 層 >
37　10YR3/3 黒褐色砂礫混じりシルト　10YR4/4 褐色シルトが混じる　<2 層 >
38　不明
39　<SB7005-SP7072>
40　10YR6/4 にぶい黄橙色砂礫混じりシルトと 10YR5/2 灰黄褐色シルトが混じる　< ベース >
41　10YR5/8 黄褐色シルト　10YR3/4 暗褐色シルトがブロックで少量混じる　<1a 層 >
42　10YR3/2 黒褐色粗砂混じり粘質土 ―― <SB7004-SP7069
43　10YR3/4 暗褐色粘質土と 10YR4/4 褐色粘質土が混じる（3 ㎝大の礫を少量含む） ―― ・SP7070>
44　10YR2/1 黒褐色砂礫混じり粘質土　<SH8003>
45　10YR4/4 褐色粗砂混じりシルト　10YR3/4 暗褐色粘質砂混じる　<SH8003 貼床 >
46　10YR3/2 黒褐色砂礫混じり粘質土と 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土が混じる　< 未検出遺構 >
47　10YR2/3 黒褐色粗砂混じり粘質土　< 未検出遺構 >
48　10YR3/3 暗褐色砂礫混じり粘質土　< 未検出遺構 >
49　10YR3/2 黒褐色砂礫混じり粘質土と 10YR5/6 黄褐色粘質土が混じる　<1b 層 >
50　10YR2/1 黒褐色粗砂混じり粘質土と 10YR4/4 褐色シルトが混じる　<SH8003>
51　7.5Y4/2 灰褐色シルト　10YR6/3 にぶい黄橙シルト含む　（2 ～ 3 ㎜の礫を多く含む） ―― <SD8001>
52　10YR5/4 にぶい黄褐色シルト　灰白シルトブロック含む ――
53　10YR4/6 褐色粗砂と 10YR2/3 黒褐色砂礫混じり粘質土が混じる ―― <SH8003>
54　10YR3/2 黒褐色シルトと 10YR４/４褐色シルトが混じる ――
55　7.5Y4/2 灰褐色シルト　10YR6/3 にぶい黄橙シルト含む（2 ～ 3mm 大の礫を多く含む）<SP8227>
56　10YR3/4 暗褐色砂礫混じりシルト　<SP8226>
57　<SP8226>
58　<SP8226>
59　10YR7/1 灰白色粘質土　7.5YR6/6 橙の粘質土を少し含む（粒状）
60　< ベース >
61　10YR3/2 黒褐色砂礫混じりシルト　< 未検出遺構 >
62　10YR2/2 黒褐色砂礫混じりシルト　10YR4/4 褐色シルトがまだらに混じる　<2 層 >
63　10YR4/4 褐色砂礫混じりシルト　< ベース >
64　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土　10YR5/2 灰黄褐色粘質土がまだらに混じる　<SP8006>
65　<SP8208>
66　< 未検出遺構 >
67　< 未検出遺構 >
68　10YR4/2 灰黄褐色シルト　10YR4/6 褐色シルトが混じる　<1b 層か >
69　10YR4/4 褐色粘質土か ―― <SP8015>
70　10YR4/4 褐色粘質土　10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土がまだらに混じる ――
71　7.5YR3/1 黒褐色シルト　明褐色のシルトブロックとにぶい黄褐色シルトブロック少し含む　<SH8001>
72　7.5YR5/6 明褐色極細砂に 10YR6/3 にぶい黄橙色シルト含む　（2 ～ 3cm の小礫を多く含む）<SH8001 貼床 >
73　10YR3/4 暗褐色粘質土　10YR5/2 灰黄褐色粘土がまだらに混じる ――
74　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト ―― <SP8023>
75　10YR3/4 暗褐色シルト　10YR4/2 灰黄褐色シルトがまだらに混じる ――
76　10YR4/2 灰黄褐色シルト　10YR3/4 暗褐色粗砂混じりシルトが混じる
77　10YR5/3 にぶい黄褐色粗砂混じりシルト ――
78　10YR3/4 暗褐色砂礫混じり粘土 ――
79　10YR3/4 暗褐色粗砂混じりシルト（3cm 大の礫をわずかに含む） ―― <SP8024>
80　10YR4/6 褐色粗砂混じり粘質土 ――
81　10YR4/4 褐色砂礫混じりシルト　（5mm 大の礫を多量に含む） ―― <SP8237>
82　10YR3/3 暗褐色粗砂混じり粘質土 ――
83　10YR4/2 灰黄褐色シルト　10YR4/6 褐色シルトがまだらに混じる（包含層 1 に由来） ――
84　10YR4/4 褐色シルト　10YR3/2 黒褐色シルトが混じる ―― <SP8027>
85　10YR3/2 黒褐色粗砂混じりシルト　10YR4/4 褐色粗砂混じりシルトが混じる ――
86　10YR4/2 灰黄褐色シルトに 7.5YR3/4 暗褐色シルトが混じる ――
87　10YR5/3 にぶい黄褐色シルト　床土由来の 7.5YR3/4 暗褐色シルトが小ブロックで多量に混じる ―― <SX8002>
88　2.5Y 暗灰黄色シルト　10YR2/3 黒褐色シルトがブロック状に混じる　<SX8003>
89　水路掘方
90　10YR2/2 黒褐色砂礫混じり粘質土　10YR5/1 褐灰色粘質土が混じる（3 ～ 5cm の礫を多量に含む
　床土の影響で汚れ多い）<1b 層 >
91　擁壁掘方
92　10YR5/3 にぶい黄褐色シルト　10YR3/2 黒褐色シルトがまだらに混じる　<1b 層 >
93　10YR3/2 黒褐色砂礫混じりシルト（5mm の礫を多量に含む）　<2 層 >
94　10YR4/4 褐色砂礫混じりシルト　< ベース >
95　10YR2/3 黒褐色粘質土　10YR5/1 褐灰色粘質土がまだらに混じる　< 耕作痕か >
96　10YR3/2 黒褐色粗砂混じりシルト　（1 ～ 3cm の礫を中量含む）<2 層 >
97　10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂混じりシルト　10YR2/2 黒褐色シルト混じる　<SP8139>
98　<SP8139>
99　<SP8139>
100　10YR3/2 黒褐色粗砂混じり粘質土（1 ～ 5cm の礫をわずかに含む） ――
101　10YR3/3 暗褐色極細砂混じり粘質土（5cm 大の礫をわずかに含む） ――
102　10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土と 10YR6/3 にぶい黄橙色粘質土が混じる ―― <SP8240>
103　10YR6/3 にぶい黄橙色粘質土と 10YR3/4 暗褐色粘質土が混じる ――
104　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土と 10YR5/2 灰黄褐色粘質土がまだらに混じる ―― <SP8146>
105　10YR4/4 褐色極細砂混じり粘質土 ――
106　10YR3/3 暗褐色シルトに 10YR4/4 褐色粘質土がブロック状に混じる ――
　（3 ～ 5cm の礫をわずかに含む） ―― <SP8220>
107　10YR4/4 褐色粗砂混じりシルト ――
108　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　Mn 沈着（床土の影響か）
109　<SD8002 上層 >
110　<SD8002 下層 >
111　10YR4/4 褐色粘質土（1 ～ 3cm 大の礫を少量含む）　<SD8002 下層 >
112　10YR4/4 褐色粘質土と 10YR6/1 褐灰色粘質度が混じる　床土の影響で Mn が沈着　<SD8003>
113　10YR5/3 にぶい黄褐色シルト　10YR4/4 褐色シルト混じる　<1b 層 >
114　<SP8214>
115　<SP8215>
116　7.5YR6/8 橙色シルト混じり粘質土に 7.5YR7/1 明褐灰色シルトがまだらに混じる
117　10YR5/6 黄褐色シルトに 10YR6/2 灰黄褐色シルトが混じる　<1a 層 >
118　10YR5/3 にぶい黄褐色シルト　（1 ～ 5cm 大の礫を少量含む）< 抜取痕 > ――
119　10YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルト　< 柱痕 > ―― <SP10001>
120　10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト　< 掘方 > ――
121　10YR3/1 黒褐色細砂　（1 ～ 5cm 大程度の礫を含む）　<2 層 >
122　2.5YR6/4 にぶい橙色粗砂（2 ～ 5cm 大程度の礫を含む）　< ベース >
123　10YR5/2 灰黄褐色シルト　10YR5/6 黄褐色シルトがまだらに混じる　<SP10002>
124　7.5YR6/6 橙色シルトに 7.5YR7/2 明褐色シルトが混じる　<1b 層 >
125　10YR5/3 にぶい黄褐色砂礫混じりシルト（0.5 ～ 5cm 大の礫を含む）　<SP10004>
126　10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト　10YR4/4 褐色砂礫混じりシルトがまだらに混じる ――
　（1 ～ 10cm 大の礫を中量含む） ―― <SP10029>
127　10YR5/4 にぶい黄褐色シルト混じり粗砂礫 ――
128　10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂礫混じりシルト　<1b 層 >
129　10YR4/4 褐色シルト　10YR5/2 灰黄褐色シルトがまだらに混じる　<SP10043>
130　10YR5/4 にぶい黄褐色シルト　10YR6/2 灰黄褐色シルトがまだらに混じる ――
131　10YR5/3 にぶい黄褐色シルト　10YR6/2 灰黄褐色シルトが a 層より少量まだらに混じる ――
　（2 ～ 6 cm 大の礫　須恵器片が混じる） ―― <SD10001>
132　10YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルト ――
133　7.5YR5/6 明褐色粘質土（1 ～ 5cm 大程度の礫が混じる）　<SP10038>
134　10YR3/2 黒褐色砂礫混じりシルト　10YR4/4 褐色シルトが混じる　<SD10002>
135　10YR5/4 にぶい黄褐色シルト　10YR6/3 にぶい黄褐色シルトと 10YR2/3 黒褐色シルトがまだらに混じる
　（2 ～ 15cm 大の礫を含む）　<1a 層 >
136　5YR6/6 橙色シルト　<SD3002>
137　近世以降落ち込み

第 18 図　⑩ 7・8・10 区西壁土層注記

層）、④にぶい黄褐色礫混り粘質シルト（ベース）で、10 区部分には①と②の間に黄褐色シルトに灰黄褐色シルトが混じる層が 10㎝程度認められ、１a 層が堆積すると考えられる。

SD3001 は①造成土・耕作土・床土直下で認められ、SD3003 は SD3001 の下部で検出した。SD3001 の検出面の標高は 20.90 ～ 20.95ｍで、ほぼ平坦である。SD3003 の下部では 2 層である黒褐色粘質シルトが厚さ 25㎝程度堆積し、その下部でベースを検出した。

⑩ 7・8・10 区西壁土層（第 16 ～ 18 図）

現市道から南側の調査対象地を南北に貫く西壁土層図である。

基本層序は①造成土・耕作土・床土　②灰黄褐色シルト、黄褐色シルト（１a 層）　③にぶい褐色・黄褐色シルト層、にぶい黄褐色粗砂礫混りシルト層（1b 層）　④黒褐色粗砂礫混り・砂礫混りシルト、黒褐色細砂（2 層）、⑤黄橙シルトに明黄褐色シルトまだらに混、にぶい黄褐色・褐色砂礫混りシルト、にぶい橙色粗砂礫混り（ベース）である。

1b 層は、8 区南寄り～ 8 区北寄り付近、2 層上面の標高が高い部分では堆積が認められず、北・南へ向けて徐々に層厚を増し､南端付近で 20㎝程度､北端付近では 25㎝程度堆積する。1b 層堆積後の標高は、20.9 ～ 21.1ｍ程度で、8 区中央付近を中心に北・南へ傾斜するが、傾斜の程度は緩やかになる。2 層上面の標高は、ベースの標高が最も高い 8 区中央付近が 21.15ｍ、北・南端付近が 20.8ｍで、ベース同様中央付近から北・南側へ緩やかに傾斜するが、2 層の堆積は、標高の高い中央付近が 10㎝程度であるのに対し、両端は 20 ～ 26㎝程度堆積が認められ、2 層の堆積によりベース上面よりは傾斜はやや緩やかになっている。ベースは、8 区中央付近で最も高く標高 21.0ｍを測り、南端付近は 20.7ｍ、北端付近は 20.5ｍで、北・南へ向けて傾斜する。

SX7004 上面にのみ、1b 層の下部に明黄褐色・灰褐色砂質土層（1c 層）が認められた。

10 区では、条里地割と同じ主軸方位を示す SB8003 を構成する柱穴の上面に 1b 層上位の堆積が認められ、1b 層下位を掘り込む。同じく条里地割の主軸方位を持つ SB8002 の柱穴は 1b 層上位から掘り込まれており、古代遺構面は、掘り込み層位の差から 2 期に細分されると考えられる。

⑪ 7 区南壁土層（第 19 図）

7 区南壁の西端付近から SR7001 付近までの土層図である。

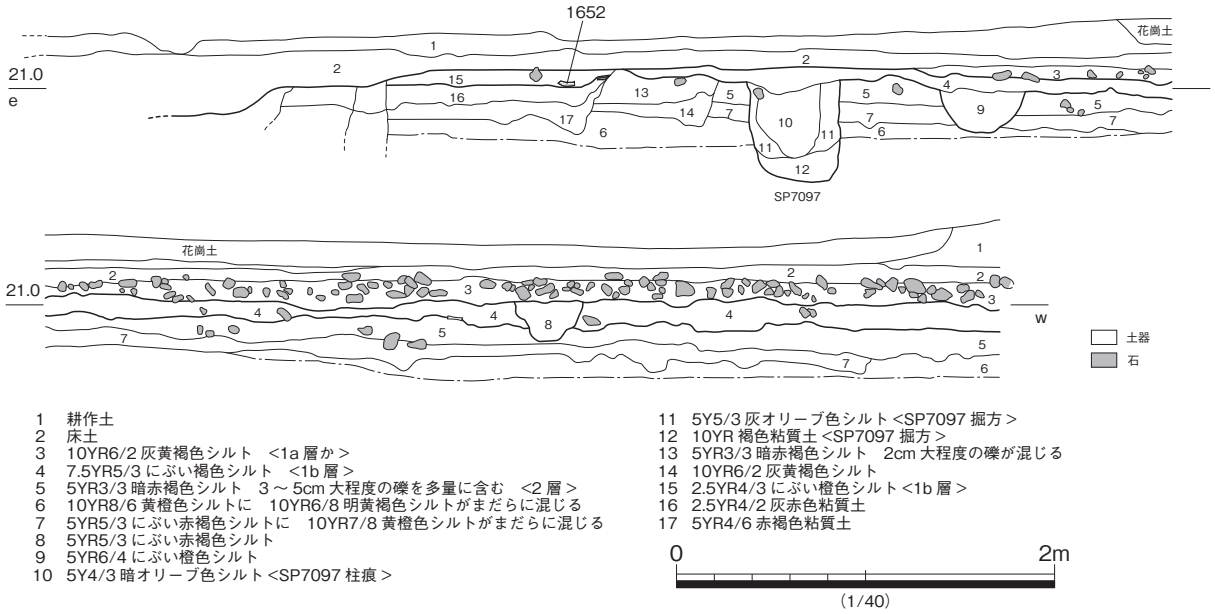
基本層序は①造成土･耕作土･床土　②灰黄褐色シルト礫混り（1a 層）　③にぶい褐色シルト（1b 層）　④暗赤褐色シルト礫混り（2 層）　⑤にぶい赤褐色シルト・黄褐色シルトに黄褐色・明黄褐色シルトがまだらに混じる（ベース）　である。

1b 層上面の標高 21.0 ～ 21.1ｍ付近で、層厚は最大 14㎝程度、2 層上面は標高 20.85 ～ 21.0ｍ付近で、層厚は 12 ～ 15㎝程度である。1b 層、2 層とも西側から東側へ層厚は薄くなる。全体に東から西へ緩く傾斜する。

遺構は 1b 層上面、2 層上面で検出した。SR7001 の掘り込み面については、南壁の土層からは明確ではないが、SR7001 の落ち込みは床土と同じ層位となっており、1 層より上面と考えられる。

⑫ 7 区北壁土層（第 20 層）

7 区北壁のうち延長約 18ｍの土層図を作成した。西は調査区西端から約 5ｍ東側で、SH8002 東半部



第 19 図　⑪ 7 区南壁土層断面図（1/40）

分から東側の土層図を作成した。基本層序は①床土等　②にぶい褐色シルト（1b 層）　③にぶい黄褐色シルト（明黄褐色シルトまだら・礫多量混り）・黄褐色シルト（礫多量）（ベース）で、2 層は認められなかった。ベースは標高 21.1 ～ 21.3m、1b 層の上面は標高 21.3 ～ 21.4m、層厚は 10 ～ 13㎝程度で、東から西へ緩やかに傾斜する。

遺構はベース上面で認められた。

⑬ 8-2-3・8-2-4 区東壁土層（第 21 図）

8-2-3 区及び 8-2-4 区の東壁で作成した土層図である。

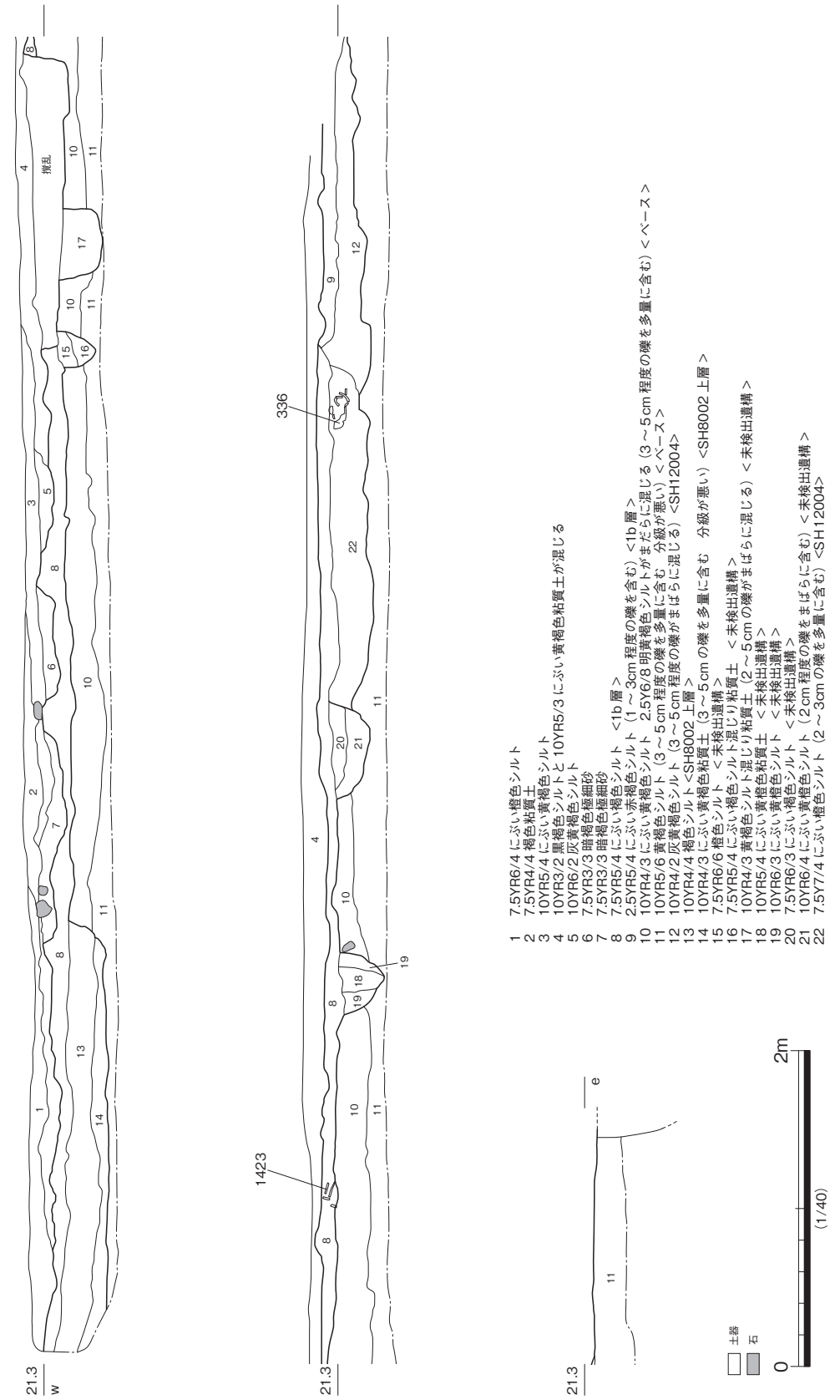
基本層序は①花崗土・造成土　②褐色シルトににぶい赤褐色極細砂が斑に混じる層（1a 層）　③褐色シルト（小礫が疎らに混）（1b 層）　④暗褐色細砂層・黒褐色シルト層（礫が疎らに混）（2 層）　⑤黒褐色細砂（礫が疎らに混）・黄褐色シルト（礫が多量に混）（ベース）　である。

2 層は北端では認められず、1a 層、1b 層、1bt 層の堆積が認められる。厚さは 1a 層が 10㎝程度、1b 層が 26㎝程度、1bt 層が 22㎝程度である。1b 層は北から 0.8m 付近で 1bt 層と置き換わる。1b 層は北から 8.4m付近までと SH8008 付近、南端付近以外では堆積が認められない。2 層は、1b 層に代わり北から 8.4m付近から出現し、概ね 20 ～ 30㎝程度堆積する。2 層上面の標高は 20.9 ～ 21.4 mで、北へ緩く傾斜する。

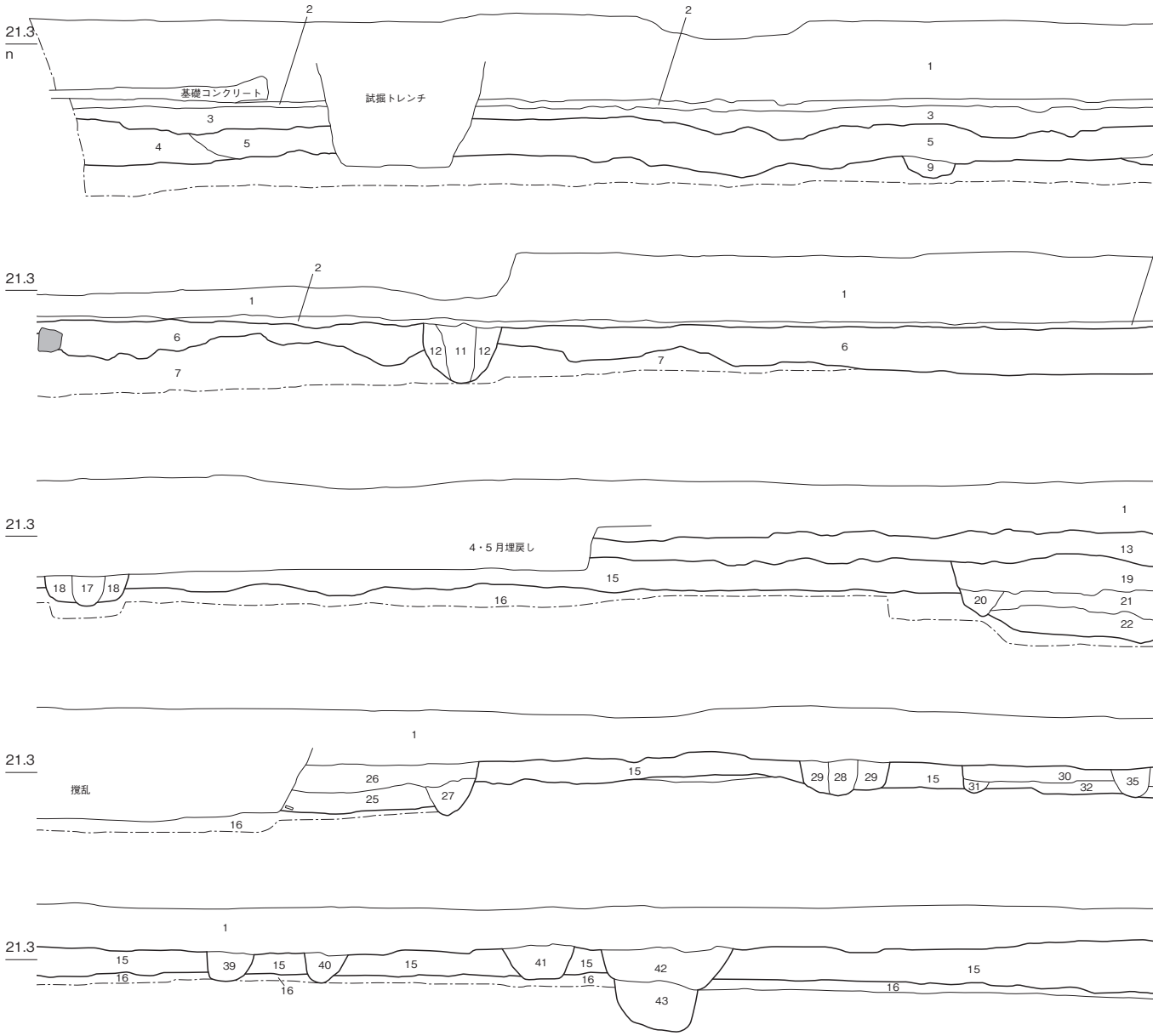
⑭ 8-2-3 区西壁土層（第 22 図）

8-2-3 区西壁で作成した土層図である。

調査区南部では 1b 層の堆積は認められず、1bt 層の堆積が認められるが、南端部分から約 3.6m 付近で 1bt 層は消失する。厚さは南端付近で 15㎝程度認められた。1b 層は、1bt 層の消失と入れ替わって認められ、調査区北部へ向けて厚みを増す。北端付近では 17㎝程度の堆積が認められた。1b 層及び 1bt 層上面の標高は 21.0 ～ 21.05m で緩やかに南から北へ傾斜する。1b 層と 1bt 層の上下関係は、この土層からは明らかではないが、8-2-3・8-2-4 東壁から 1bt 層が下位に堆積することはわかる。2 層の堆積



第 20 図 ⑫ 7 区北壁土層断面図（1/40）

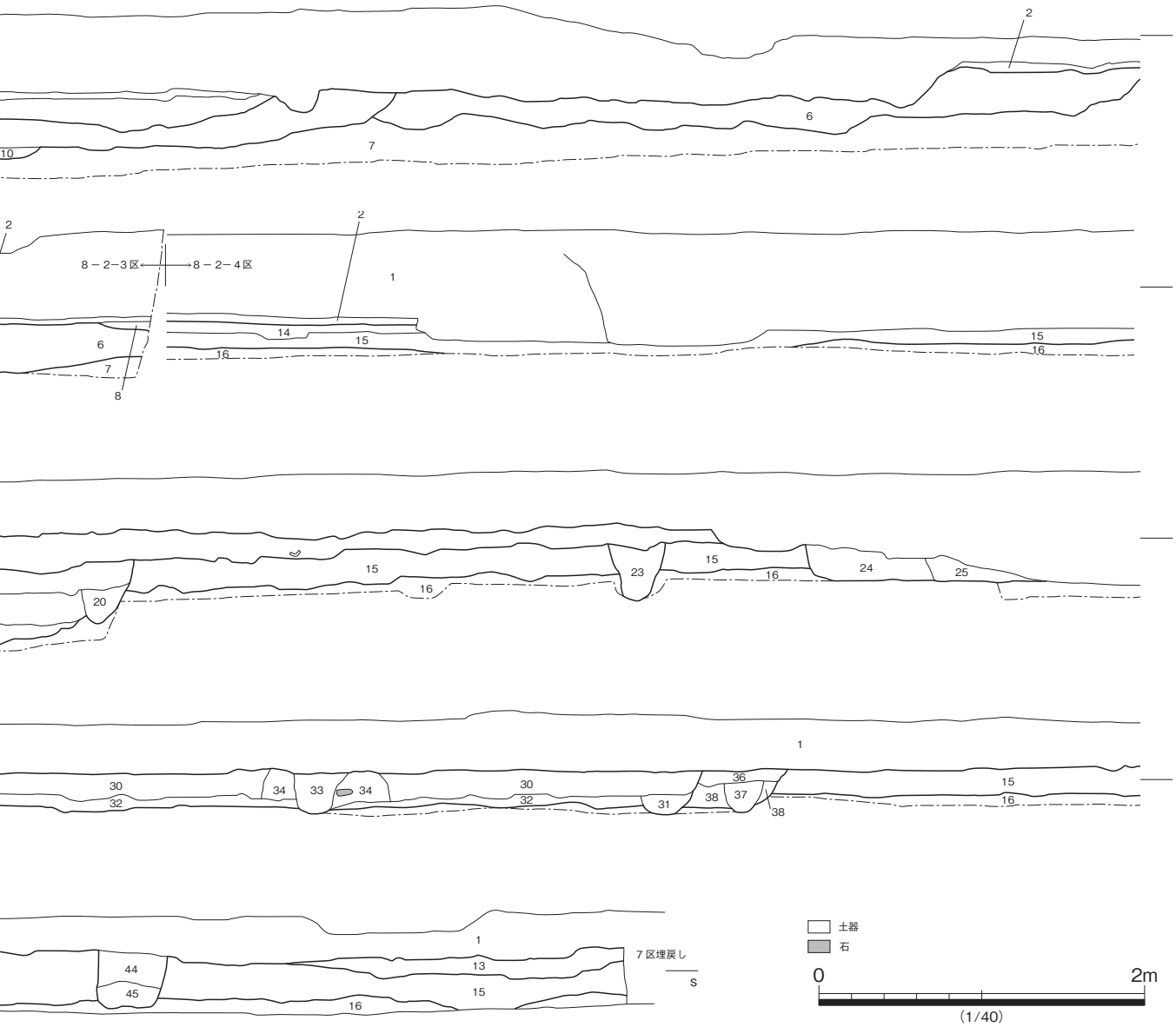


1 花崗土・造成土
2 床土
3 10YR4/4 褐色シルトに 5YR4/3 にぶい赤褐色極細砂がまだら状に混じる <1a 層 >
4 7.5YR4/2 灰褐色シルト <1bt 層 >
5 10YR4/4 褐色シルト （層中に小礫がまばらに混じる）<1b 層 >
6 7.5YR3/3 暗褐色細砂（5 ～ 10cm 大の礫をまばらに含む）<2 層下位 >
7 7.5YR3/1 黒褐色細砂（5 ～ 10cm 大の礫をまばらに含む）< ベース >
8 7.5YR7/2 明褐灰色極細砂 <1a 層 >
9 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト 10YR4/4 褐色砂質シルトがまだらに混じる <SP8685>
10 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト （1 ～ 3cm の礫多く含む）<SD8007>
11 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂混じりシルト <SP8688 柱痕 >
12 10YR4/4 褐色粗砂混じりシルト 10YR6/2 灰黄褐色シルトが少量混じる <SP8688 掘方 >
13 10YR4/4 褐色シルト（小礫をまばらに含む）<1b 層 >
14 7.5YR7/2 明褐灰色極細砂 <2 層上位 >
15 7.5YR2/2 黒褐色シルト（4 ～ 5cm 大の礫がまばらに混じる）<2 層下位 >
16 10YR5/6 黄褐色シルト 分級が悪い （3 ～ 5cm 大程度の礫を多量に含む）< ベース >
17 10YR4/4 褐色粗砂 <SP8429 柱痕 >
18 10YR3/4 暗褐色粗砂（小礫をまばらに含む）<SP8429 掘方 >
19 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 10YR2/2 黒褐色砂質シルトがまだらに混じる（0.5 ～ 3cm の礫多く含む）
20 10YR2/3 黒褐色シルト 10YR4/3 にぶい黄褐色シルトが少量粒状に混じる（壁溝）
21 10YR3/2 黒褐色砂質シルト 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土が極少量まだらに混じる
22 10YR4/2 灰黄褐色砂質土 10YR3/2 黒褐色砂質シルトが少量まだらに混じる
<SH8008>

23 10YR4/4 褐
24 10YR4/3 に
25 10YR4/3 に
26 10YR5/3 に
27 10YR4/2 灰
28 10YR4/3 に
29 10YR4/3 に
30 10YR4/3 に
31 10YR3/2 黒
32 10YR4/3 に
33 10YR4/3 に
34 10YR5/4 に
35 10YR4/3 に
36 10YR4/4 褐
37 10YR4/3 に
38 10YR4/4 褐
39 10YR4/3 に
40 10YR3/2 黒
41 10YR3/2 黒
42 10YR5/4 に
43 10YR4/3 に
44 10YR4/2 灰
45 10YR5/4 に

※ SP8685、S

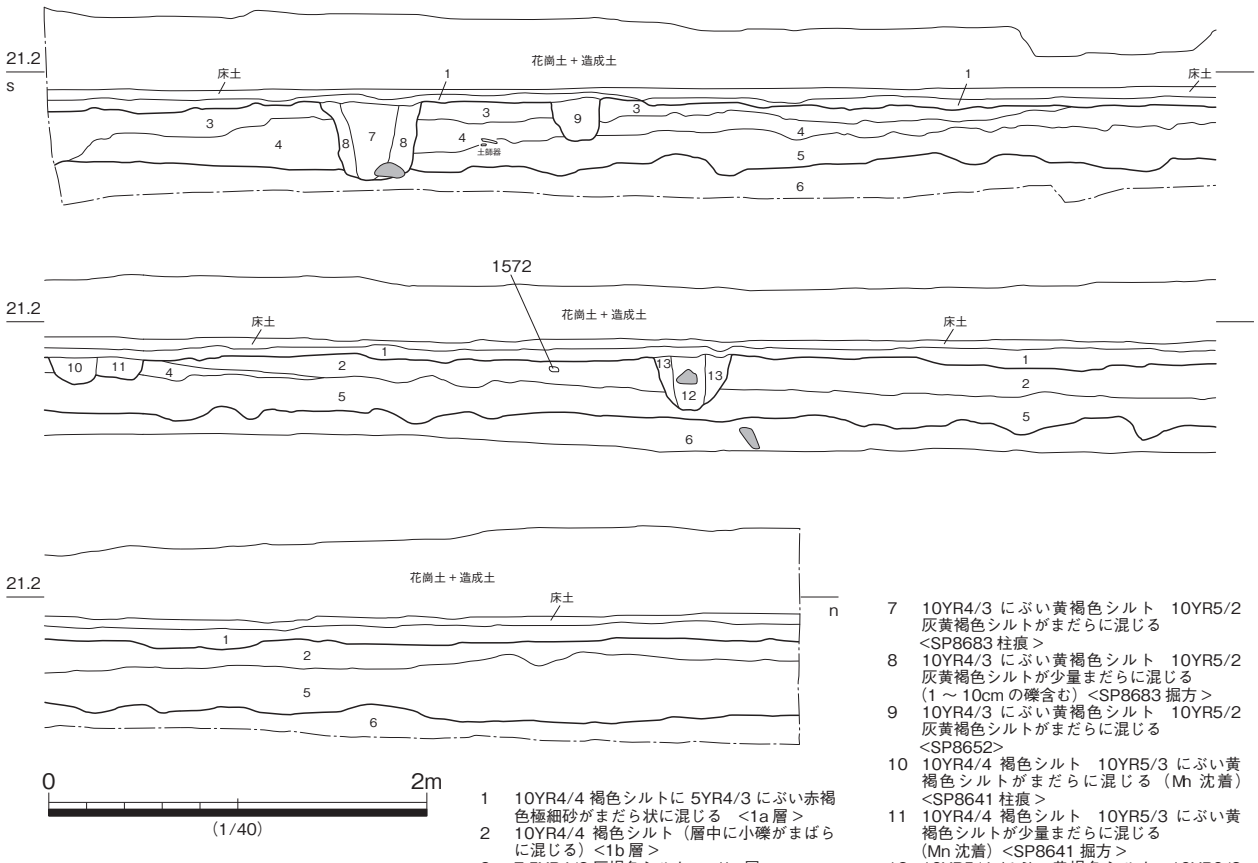
第 21 図 ⑬8-2-3 区・8-2



色シルト　10YR3/2 黒褐色砂質シルトが混じる　<SP8657>
ぶい黄褐色シルトと 10YR3/2 黒褐色シルトがまだらに混じる　2.5Y5/4 黄褐色粘土が極少量混じる
ぶい黄褐色砂質シルト　10YR5/4 にぶい黄褐色シルトが少量まだらに混じる（0.5 ～ 5cm 大の礫多く含む）
ぶい黄褐色シルト　10YR6/2 灰黄褐色シルトがまだらに混じる（0.5 ～ 3cm 大の礫多く含む）
黄褐色シルト　10YR5/4 にぶい黄褐色シルトがまだらに混じる（1 ～ 3cm 大の礫多く含む）（壁溝）　<SH8007>
ぶい黄褐色砂質シルト　（1 ～ 3cm の礫含む）<SP8508 柱痕 >
ぶい黄褐色砂質シルト　10YR3/2 黒褐色砂質シルトが少量まだらに混じる（0.5 ～ 10cm 大の礫多く含む）<SP8508 掘方 >
ぶい黄褐色シルト　10YR3/2 黒褐色粗砂混じりシルトがまだらに混じる
褐色砂質シルト（1 ～ 10cm 大の礫含む）（壁溝）
ぶい黄褐色粗砂　10YR3/2 黒褐色粗砂がまだらに混じる
ぶい黄褐色シルト　7.5YR5/4 にぶい褐色粘質土 (焼土)、7.5YR4/3 褐色粘質土 (焼土) がまだらに混じる　（竈内崩落土）　<SH12002 か（SH12002 とはやや形状が違う）>
ぶい黄褐色粘質シルト　7.5YR4/4 褐色粘土 (焼土) が極少量混じる（竈袖）
ぶい黄褐色粗砂混じりシルト　<SX8011>
色シルト　10YR3/2 黒褐色シルトが少量まだらに混じる
ぶい黄褐色シルト　10YR3/2 黒褐色シルトが少量まだらに混じる　（0.5 ～ 3cm の礫含む）（壁溝）　<SH12002 か（SH12002 とはやや形状が違う）>
色シルト　10YR3/2 黒褐色砂質シルトがまだらに混じる
ぶい黄褐色シルト　10YR3/2 黒褐色砂質シルトが少量混じる　<SP8695>
褐色砂質シルトと 10YR4/3 にぶい黄褐色シルトがまだらに混じる　<SP8694>
褐色砂質シルト　10YR4/3 にぶい黄褐色シルトがまだらに混じる　<SP8693>
ぶい黄褐色粘質シルト　きめ細かく、しまり強い（1 ～ 5cm 大の礫含む）<SD8002>
ぶい黄褐色砂質シルト（0.2 ～ 5cm 大の礫含む）<SP8500>
黄褐色シルト　10YR3/2 黒褐色シルトがまだらに混じる（1 ～ 3cm 大の礫含む）<SP8692>
ぶい黄褐色シルト　10YR4/3 にぶい黄褐色シルトが少量まだらに混じる　<SP8692>

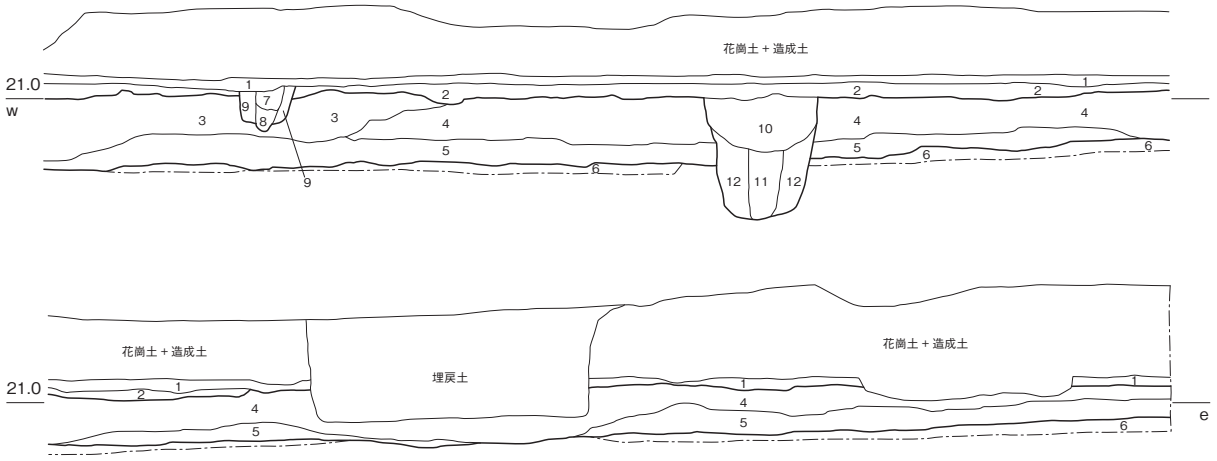
P8688，SP8692 ～ 8695 は、平面では未検出

2-4 区東壁土層断面（1/40）



1　10YR4/4 褐色シルトに 5YR4/3 にぶい赤褐色極細砂がまだら状に混じる　<1a 層 >
2　10YR4/4 褐色シルト（層中に小礫がまばらに混じる）<1b 層 >
3　7.5YR4/2 灰褐色シルト　<1bt 層 >
4　7.5YR3/3 暗褐色細砂（5 ～ 10cm の礫をまばらに含む）<2 層上位 >
5　7.5YR3/1 黒褐色細砂（5 ～ 10cm の礫をまばらに含む）<2 層下位 >
6　<ベース>
7　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　10YR5/2 灰黄褐色シルトがまだらに混じる <SP8683 柱痕 >
8　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　10YR5/2 灰黄褐色シルトが少量まだらに混じる（1 ～ 10cm の礫含む）<SP8683 掘方 >
9　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　10YR5/2 灰黄褐色シルトがまだらに混じる <SP8652>
10　10YR4/4 褐色シルト　10YR5/3 にぶい黄褐色シルトがまだらに混じる（Mn 沈着）<SP8641 柱痕 >
11　10YR4/4 褐色シルト　10YR5/3 にぶい黄褐色シルトが少量まだらに混じる（Mn 沈着）<SP8641 掘方 >
12　10YR5/4 にぶい黄褐色シルト　10YR6/2 灰黄褐色シルトが少量まだらに混じる <SP8599 柱痕 >
13　10YR5/4 にぶい黄褐色シルト　10YR5/2 灰黄褐色シルトがまだらに混じる <SP8599 掘方 >

第 22 図　⑭ 8-2-3 区西壁土層断面図（1/40）

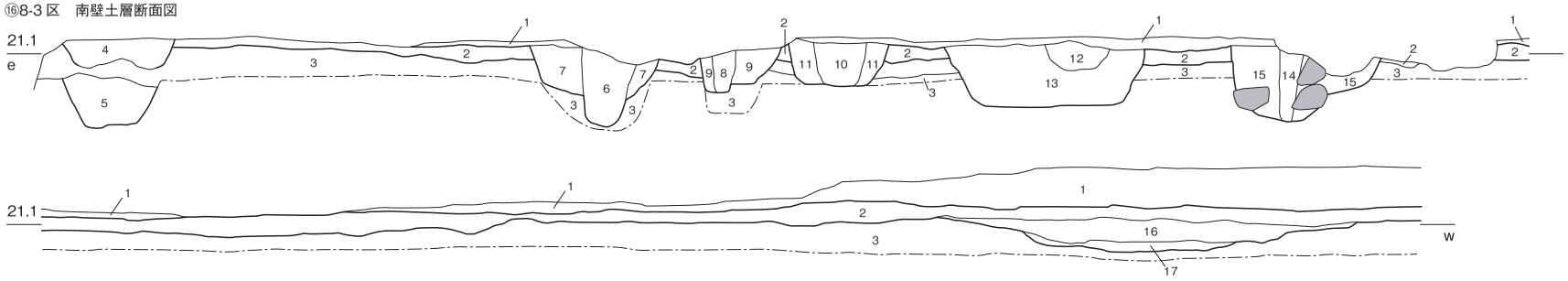


1　床土
2　10YR6/3 にぶい黄橙色極細砂　＜1a 層＞
3　5YR4/3 にぶい赤褐色極細砂　＜1bt 層＞
4　7.5YR3/3 暗褐色細砂（2 ～ 3cm 大の礫含む）＜2 層上位＞
5　7.5YR4/3 褐色粗砂（4 ～ 5cm 大程度の礫を含む）＜2 層下位＞
6　＜ベース＞
7　10YR5/6 黄褐色シルト　10YR2/2 黒褐色シルトがまだらに混じる　＜SP8309 柱痕＞
8　10YR6/3 にぶい黄橙色砂質シルト　10YR5/6 黄褐色シルトがまだらに混じる
9　10YR7/2 にぶい黄橙色細砂　10YR5/6 黄褐色シルトが少量まだらに混じる
10　10YR4/2 灰黄褐色シルト　10YR6/2 灰黄褐色シルトがまだらに混じる　＜SP8436 抜取＞
11　10YR3/3 暗褐色シルト　10YR4/3 にぶい黄褐色シルトがまだらに混じる　＜SP8436 柱痕＞
12　10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト　10YR5/2 灰黄褐色シルトがまだらに混じる（0.5 ～ 10cm 大の礫含む）＜SP8436 掘方＞

0　2m
(1/40)

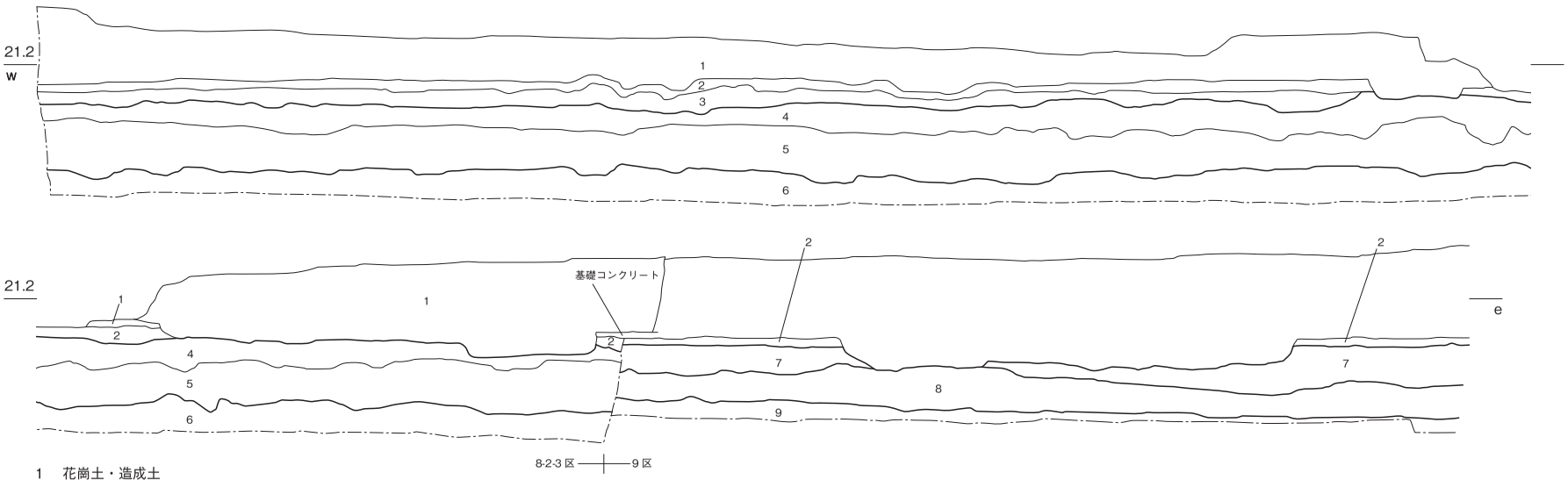
第 23 図　⑮ 8-2-2 区・8-2-4 区北壁土層断面（1/40）

⑯8-3 区　南壁土層断面図



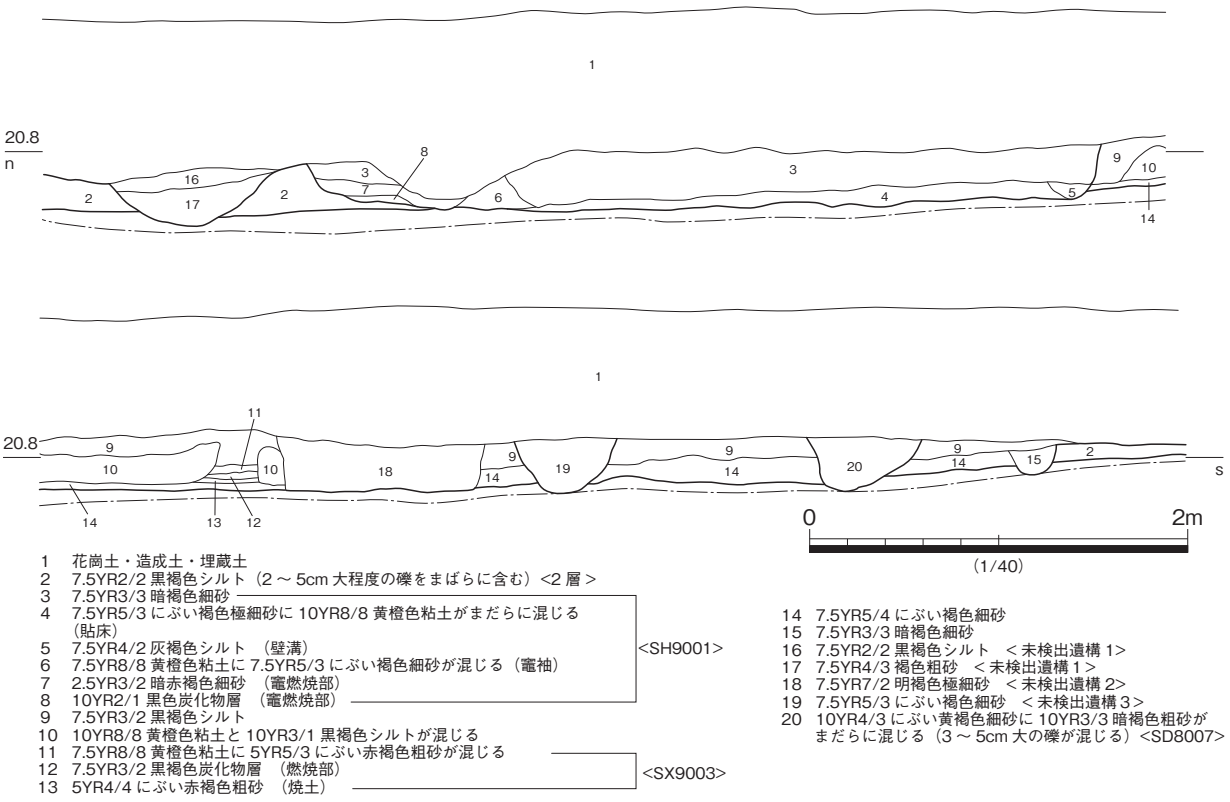
1　耕作土
2　10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト　7.5YR5/6 明褐色シルトが粒状に混じる　<1b 層 >
3　2.5Y5/3 黄褐色シルト混じり細砂　10YR5/4 にぶい黄褐色砂がまだらに混じる　< ベース >
4　10YR5/3 にぶい黄褐色シルトと 10YR6/2 灰黄褐色シルトがまだらに混じる　Mn 沈着
　<SP8676 掘方 >
5　10YR4/4 褐色シルト　10YR6/3 にぶい黄橙色シルトが少量まだらに混じる <SP8676 掘方 >
6　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　10YR6/6 明黄褐色粘質土がブロック状に少量混じる（柱痕）
7　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　10YR5/2 灰黄褐色シルトが帯状に混じる（掘方）　<SP8677>
8　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルトと 10YR5/2 灰黄褐色シルトがまだらに混じる（柱痕）
9　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　10YR5/2 灰黄褐色シルトが帯状にまだらに混じる　（掘方）　<SP8682>
10　10YR4/4 褐色シルト　10YR5/2 灰黄褐色シルトがまだらに混じる　Mn 沈着　（柱痕）
11　10YR5/2 灰黄褐色シルト　10YR4/4 褐色シルトがまだらに混じる　Mn 沈着　（掘方）　<SP8678>
12　10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト　2.5Y6/4 にぶい黄色粘質土が少量ブロック状に混じる（柱痕）
13　10YR5/2 灰黄褐色シルトと 10YR4/3 にぶい黄褐色シルトがまだらに混じる（掘方）　<SP8679>
14　10YR5/3 にぶい黄褐色シルト　2.5Y6/2 灰黄色シルトがまだらに混じる
　10YR5/6 黄褐色シルトと 10YR3/2 黒褐色シルトが少量混じる（柱痕）　<SP8680>
15　10YR5/6 黄褐色シルトと 2.5Y6/2 灰黄色シルトがまだらに混じる
　10YR3/2 黒褐色シルトが少量まだらに混じる（20cm 大の礫含む）（掘方）
16　10YR6/2 灰黄褐色砂質土　7.5YR4/6 褐色砂質土がまだらに混じる
17　10YR6/2 灰黄褐色シルト混じり細砂　10YR5/4 にぶい黄褐色細砂が少量まだらに混じる

⑰8-2-3 区·9 区北壁土層断面図



1　花崗土・造成土
2　床土
3　10YR4/4 褐色シルトに 5YR4/3 にぶい赤褐色極細砂がまだら状に混じる　<1a 層 >
4　10YR4/4 褐色シルト　層中に小礫がまばらに混じる　<1b 層 >
5　7.5YR4/2 灰褐色シルト　<1bt 層 >
6　7.5YR3/3 暗褐色細砂　（5 ～ 10cm 大の礫をまばらに含む）<2 層上位 >
7　7.5YR4/3 褐色粗砂　<1b 層 >
8　7.5YR3/3 暗褐色粗砂　（2 ～ 5cm 大程度の礫をまばらに含む）<2 層 >
9　ベース

第 24 図　⑯8 -3 区南壁土層断面図、⑰8 -2-3 区・9 区北壁土層断面図（1/40）



第 25 図　⑱９区東壁土層断面図（1/40）

は全面で認められ、厚さ 28㎝程度堆積が認められた。

1b 層及び 1bt 層上面から、古代小ピット群の掘り込みが認められた。

⑮ 8-2-2・8-2-4 区北壁土層（第 23 図）

8-2-2 区と 8-2-3 区の境で作成した土層図である。

基本層序は①花崗土・床土　②にぶい黄褐色極細砂（1a 層）　③暗褐色細砂（2 層上位）　④褐色粗砂（礫混り）（2 層下位）④ベース　である。西側約２ｍまでは 1a 層の下部に厚さ最大 30㎝程度のにぶい赤褐色極細砂（１bt 層）が堆積し、西側 2m付近で２層と置き換わる。1bt 層・２層上面の標高は 21.0 ～ 21.1m で、東から西へ緩く傾斜する。２層の層厚は 20 ～ 30㎝程度で西側ほど厚い。1b 層は認められなかった。1a 層は、厚さ 6㎝程度で西から 7m付近まで堆積が認められた。

⑯ 8-3 区南壁土層（第 24 図）

8-3 区南壁で作成した土層図である。

基本層序は①耕作土　②灰黄褐色粘質シルトで明褐色シルトが粒状に混じる層（1b 層）、③黄褐色シルト混り細砂層（ベース）である。

遺構は②灰黄褐色粘質シルトで明褐色シルトが粒状に混じる層で検出した。遺構面の標高は 21.1 ～ 21.2m、層厚は約 8㎝でやや東から西へ傾斜する。

⑰ 8-2-3 区・9 区北壁土層（第 24 図）

8-2-3 区と 9 区西半部の北壁土層図である。9 区西半部の北壁は、8-2-3 区北壁ラインよりは 0.5m 程度北側に位置するが、合成して作図した。

基本層序は①造成土・床土　②褐色シルトににぶい赤褐色極細砂が斑に混じる層（1a 層）③褐色シルト（小礫わずかに混じる）（1b 層）③灰褐色シルト（1bt 層）　④暗褐色細砂（礫疎らに混じる）（2 層）⑤ベース　である。8-2-3 区 1bt 層以下と 9 区 2 層以下について、両者の土層図には齟齬があるが、調査時の層名のま掲載した。

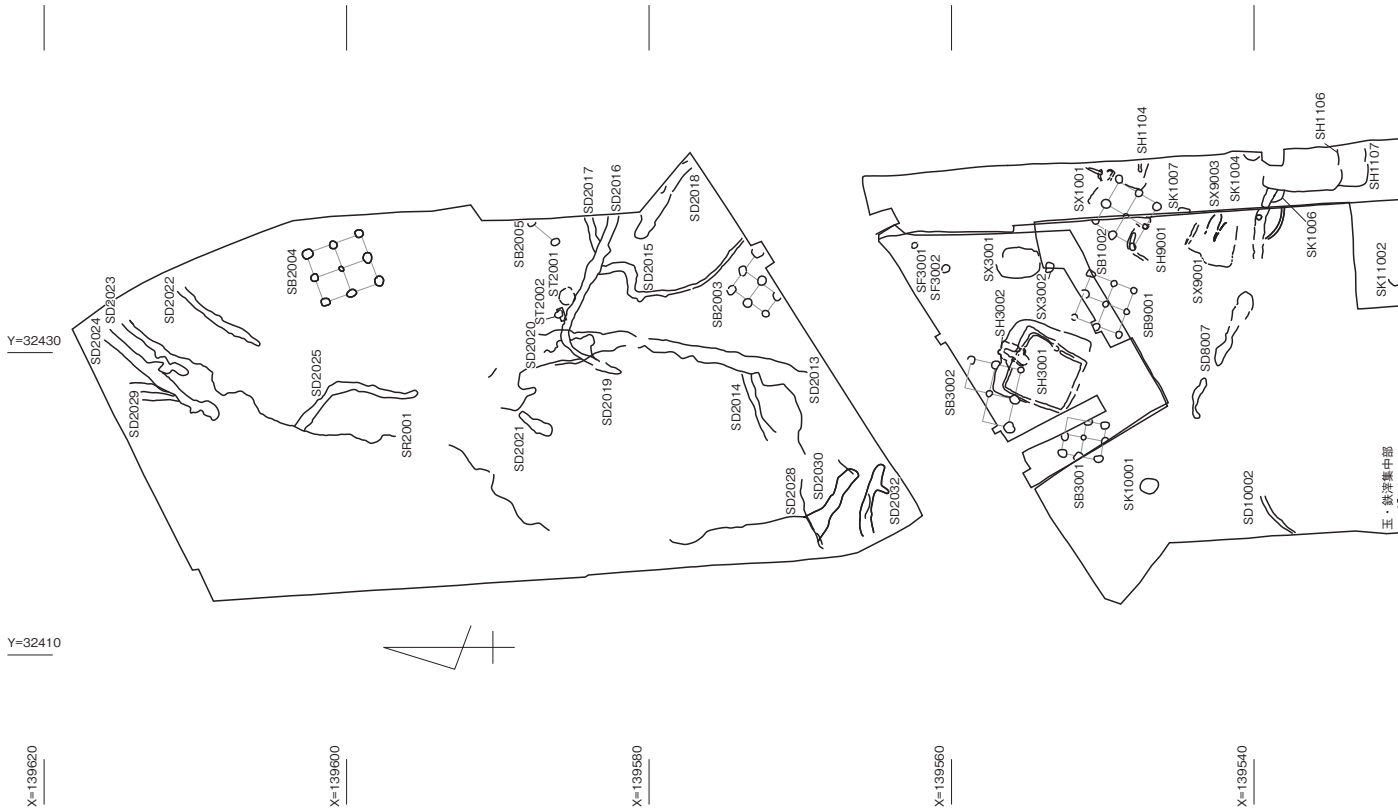
1b 層の上面は 20.9 ～ 21.0m、層厚は 17㎝程度である。8-2-3 区の土層図では、その下部には厚さ 20 ～ 28㎝程度の 1bt 層が堆積する。1b 層上面はわずかに西から東へ傾斜する。2 層は、8-2-3 区では 1bt 層の下部で、9 区からは 1bt 層に対応する標高で認められている。8-2-3 区の 2 層上面は 20.55m、層厚 20㎝以上、9 区では 2 層上面は 20.7 ～ 20.8m、層厚は 20 ～ 25㎝程度で、西から東へ緩やかに傾斜する。8-2-3 区の大部分では厚さ 10㎝程度の 1 a 層の堆積が認められたが、8-2-3 区東部から 9 区にかけては造成土がやや深くまで及ぶため 1a 層を検出していない。

⑱ 9 区東壁土層（第 25 図）

9 区東壁で作成した土層図である。

1 区埋戻土の下部で黒褐色シルト（礫が斑に混）（2 層）を検出した。2 層上面の標高は 20.7 ～ 20.85ｍで、南から緩やかに北へ傾斜する。層厚は 10 ～ 20㎝程度を測り、北側ほど厚い。

2 層上面からは SH9001、SX9003、SD8007 等を検出した。


Y=32430
Y=32410
X=139620
X=139600
X=139580
X=139560
X=139540
SD2024
SD2023
SD2022
SB2004
SD2029
SD2025
SR2001
SB2005
SD2017
SD2016
SD2018
ST2001
ST2002
SD2020
SD2015
SB2003
SD2019
SD2021
SD2014
SD2013
SD2028
SD2030
SD2032
SH1104
SH1106
SH1107
SX1001
SK1007
SX9003
SK1004
SK1006
SK11002
SF3001
SF3002
SX3001
SB1002
SH9001
SX3002
SH3002
SB9001
SX9001
SD8007
SB3002
SH3001
SB3001
SK10001
SD10002

第 26 図　古墳時代後期

SH1015
SH1005
SH11002
SH11008
SH11010
SH11007
SH1501
SH1504
SH1502
SH1503
SX12007
SX12006
SH11001
SX12005
SK12004
SH12002
SH12005
SH12003
SX12005
SH12004
SK1501
SX12004
SX12008
SB8014
SK11003
SH8008
SK12006
SH8007
SK12003
SB8018
SB8019
SH8004
SH8005
SB8016
SH7009
SB7010
SH7002
SB7009
SH7007
SB7011
SH7003
SH7008
SF7001
SB8015
SD10003
SK8004
SB8007
SX8004
SX8007
SX8010
SX8006
SH8001
SB8004
SH8003
SH8002
SB8006
SB7004
SD7004
SB7005
SX7004
SB7002
SK7002
SB7008
SB7001
SB7006
SD7002
SB7007
SX7003
SD7003
X=139520
X=139500
X=139480
X=139460
X=139440
0
20m
(1/500)

期遺構配置図（1/500）

第３節　遺構・遺物

1　古墳時代後期（第 26 図）

包含層 2 層を切り込む遺構群である。2 層上面は、現市道より南側の調査区中央付近が最も高く、北・南へ向けて緩やかに傾斜する。集落は標高の高い部分を中心に南は調査区端まで、北は市道付近まで広がっていた。市道より北側は、北西へ傾斜する低地であり、遺構はほとんど認められなかった。竪穴建物 35 棟、掘立柱建物 25 棟、鍛冶炉跡 3 基程度などを検出した。竪穴建物のうち 21 棟は竈を検出、掘立柱建物のうち 15 棟は総柱建物、 8 棟は側柱建物、2 棟は不明であった。また、遺構としては検出しなかったが、10 区南で鉄滓と滑石製臼玉の集中部分を検出した。この時期の遺構は、鍛冶に関わる遺物の出土量が多く、この時期の大きな特徴と考えられる。

2 区は北西へ向けて傾斜し、北西部は低地が認められた。低地の堆積層には水田層が想定される層位を検出した。

①竪穴建物

1 区 SH1005・SH1108（第 27・28 図）

1 区中央部付近で検出した。SH1015 と重複して検出し、SH1015 より新しい。東半部は調査区外へ延びる。方形を呈し、北辺、西辺に壁溝、北辺に竈を備える。竈の主軸は建物に対して斜交する。

南北方向は 4.6 m、東西 3.6 m以上、遺構面から深さ 17㎝で貼床を検出し、貼床層は 8㎝程度を測る。方位は N5.73° W、面積は 16.76㎡以上である。

竈は北辺に設置される。竈の主軸方向は N30.42° Wで、竪穴建物の主軸方位よりかなり西側へ振れる。長軸は 0.69 m、幅 0.62 mの範囲で燃焼部を検出し、西側竈袖部の痕跡が裾幅 30㎝程度残る。

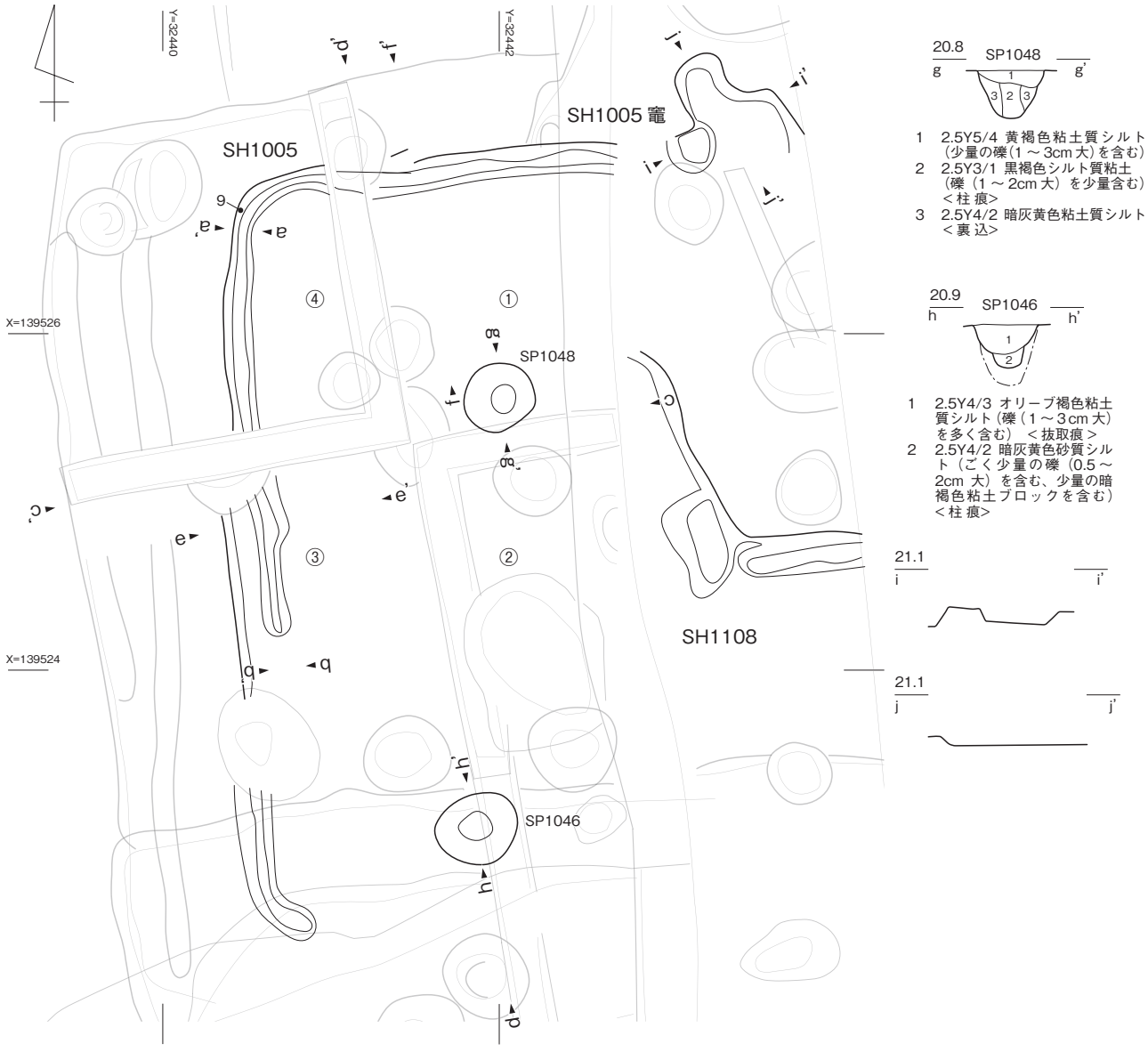
主柱穴は西側に 2 穴を検出した。方形に 4 穴配置すると考えられる。南北柱穴間の距離は 2.54m、東西は 2.68m以上、柱穴は円形で直径 40㎝、深さ 26 ～ 30㎝、柱痕跡の直径は 16㎝である。

壁溝は貼床の上面で検出した。幅８～ 12㎝、深さ 4㎝を測る。

竈からは須恵器提瓶、土師器鉢、埋土中からは須恵器杯身・杯蓋、土師器甕等が出土した。

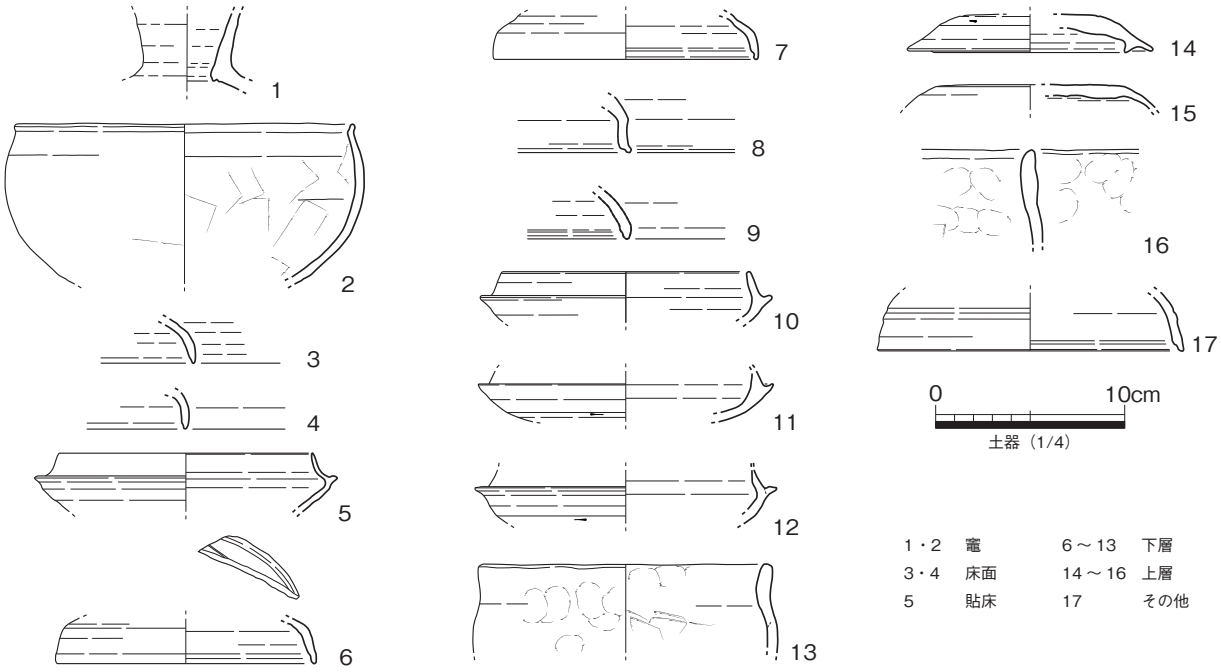
SH1005 東壁際中央付近で、SH1005 を掘り込む竪穴建物の可能性がある遺構 SH1108 を東壁土層及び平面プランで一部確認した。1 区東壁土層によれば、SH1005 を掘り込み SK1002 により壊される。1 区東壁土層・平面プランいずれからも SK1002 より南側では確認できず、南北方向の長さは 3.2m までと考えられる。竈の東側の袖の一部とそれに取り付く東側の側溝の一部を検出した。しかし、それ以外の明確な平面プランを検出することはできなかった。出土遺物は認められなかった。

1・2 は竈から出土した。1 は須恵器提瓶の頸部。2 は土師器鉢か。３・４は床面上から出土した。須恵器杯蓋小片。５は貼床層から出土した。須恵器杯身。6 世紀後半（Ⅱ -3 期）頃。6 ～ 13 は埋土下層から出土した。6 ～ 12 は須恵器。6 ～ 9 は杯蓋。 6 は頂部外面に土器の溶着痕が残る。 9 の出土地点は壁溝上であるが、調査時の取り上げ名称に拠った。10 ～ 12 は杯身。9 は 7 世紀初頭（Ⅱ -5 期）、他は概ね 6 世紀末（Ⅱ -4 期）頃と考えられる。13 は土師器甕。外面は指押さえ痕が残る。14 ～ 16 は埋土上層から出土した。14・15 は須恵器。14 は口縁端部に返りが付く蓋。15 は蓋頂部または杯底部。7 世紀中頃（Ⅲ -1 期）。16 は土師器甕。外面には指押さえ痕が少し残る。17 はトレンチから出土した。須恵器杯蓋。口縁端部内面に段を持ち、肩部にわずかに沈線が巡る。



c-c’ d-d’ e-e’ f-f’
1 10YR4/4 褐色シルト質粘土（ごく少量の礫（1 ～ 5cm 大）を含む）<SP1037>
2 10YR5/2 灰黄褐色シルト質粘土 <SP1038>
3 10YR6/3 にぶい黄橙色シルト質粘土（少量の礫（1 ～ 3cm 大）を含む）
4 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質粘土（少量の礫（1 ～ 2cm 大）ごく少量の黄褐色粘土ブロック（1cm 大）含む） <SH1005 下層 >
5 4 層より黒味強い
6 10YR3/3 暗褐色シルト質粘土（黄褐色粘土ブロック（1cm 大前後）を少量含む）<SH1005 貼床 >
7 7.5YR3/3 暗褐色シルト質粘土（黒味が強く、少量の土器片を含む）<SH1015 下層 >
8 2.5Y3/2 黒褐色粘土質シルト（ごく少量の黄褐色粘土ブロック炭を含む）
9 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘土質シルト（少量の礫（0.5 ～ 2cm 大）を含む）
10 2.5Y6/1 黄灰色砂質シルト（多量の礫（1 ～ 3cm 大）を含む）＜ベース＞
11 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト（ごく少量の黄褐色粘土ブロックを含む）<SH1005 壁溝 >
12 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト（ごく少量の土器片、礫（1 ～ 2cm 大）を含む）<SH1005 壁溝 >
13 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土質シルト（少量の土器片、礫（1 ～ 3cm 大）を含む）<SH1015 下層 >
14 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土（土器片、礫（3 ～ 10cm 大）を含む、ごく少量の炭を含む）<SK1002>
15 10YR4/4 褐色シルト質粘土（ごく少量の礫（1 ～ 5cm 大）を含む）<SP1039>
16 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト質粘土 <SP1037>

第 27 図　SH1005 平・断面図、SH1008 平面図（1/40）



第 28 図　SH1005 出土遺物（1/4）

調査時の所見では、下層は 4 層が該当する。上層出土遺物は、4 層の上位から出土した遺物であろう。

14・15 は 7 世紀中頃と考えられるが、 SH1005 埋土上位から出土したことをから混入の可能性が考えられる。遺構の時期は、SH1015 より新しいことや出土遺物から 7 世紀初頭頃と考えられる。

1 区 SH1015（第 29 図）

1 区中央付近で検出した。SH1005 と重複し、SH1005 より古い。東部は調査区外へ延びる。方形を呈し、北辺に竈を備える。壁溝は検出できなかった。主柱穴は方形に配置すると考えられ、東南側を除く 3 穴を検出した。南側は方形の遺構 SK1002 に壊される。

南北方向は 4.23 m～ 6.22 m、東西方向は 4.54 m以上、遺構面からの深さは 22㎝程度で、貼床は検出できなかった。主軸方位は N9.42° W、面積は 19.60㎡以上である。

竈は、燃焼部が幅 1.2m程度、建物内の奥行き 0.62m、建物外では 0.56m、主軸方位は N22.89° Wを指す。西側の竈袖部残存幅は 0.16m、東側は SH1005 により壊される。竈は断面観察からベース上に設置されていることがわかる。残存している左竈袖の構築土には焼土ブロックが含まれており、検出した竈は再構築したものまたは補修したものの可能性がある。

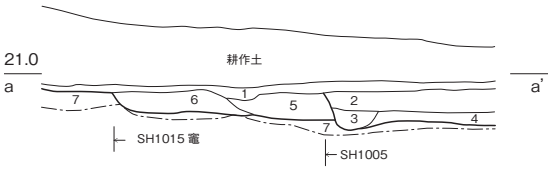
主柱穴の柱穴間の距離は南北 2.23m、東西 2.74m、柱穴は円形で、概ね直径 30 ～ 50㎝、深さ 7 ～ 26 ㎝を測る。床面上から土師器高杯が出土したほかは、須恵器、土師器小片が出土しただけであった。

18 は土師器高杯。6 世紀後半～末頃。

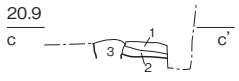
SH1015 の時期は SH1005 より古く、6 世紀後半～末頃と考えられる。

1 区 SH1104（第 30・31 図）

SH9001 の北東方向、南西角をほぼ接して検出した。北東部の大部分は調査区外へ延びる。方形で南

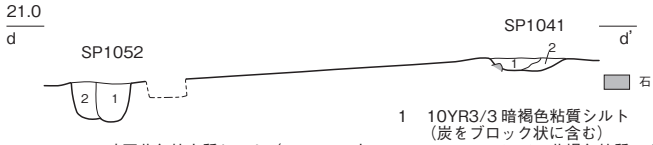


1　10YR4/4 褐色粘土質シルト（Mn 沈着）＜床土＞
2　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質粘土（少量の礫（1 ～ 2cm 大）、ごく少量の黄褐色粘土ブロック（1cm 大前後）を含む）<SH1005 下層＞
3　10YR3/1 黒褐色粘土質シルト（ごく少量の土器片、礫（1 ～ 2cm 大）を含む）<SH1005 壁溝＞
4　10YR3/3 暗褐色シルト質粘土（黄褐色粘土ブロック（1cm 大前後）を含む）<SH1005 貼床＞
5　10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土（ごく少量の焼土を含む）<SH1015 竈内堆積土＞
6　10YR6/4 にぶい黄橙色粘土質シルト（ごく少量の炭、礫（1 ～ 4cm 大）を含む）<SH1015 竈（煙出し）内堆積土＞
7　10YR7/6 明黄褐色シルト質粘土（礫（1 ～ 5cm 大）を含む、やや白味帯びる）＜ベース＞

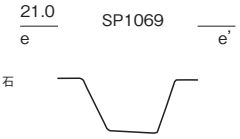


b-b'　c-c'
1　10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土（ごく少量の焼土を含む）
2　10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト（ごく少量の黄褐色粘土ブロックを含む）
＜竈燃焼部内堆積土＞
3　2.5Y7/6 明黄褐色粘土（灰色粘土ブロック、焼土塊を含む）＜竈左袖＞

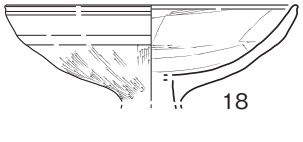
※3層は焼土塊を含むため、竈が再構築、又は補修されたとみられる



1　2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト（1 ～ 2cm 大の礫、黄褐色粘土ブロックを含む）＜柱痕＞
2　2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土質シルト（2 ～ 5cm 大の礫を含む）
1　10YR3/3 暗褐色粘質シルト（炭をブロック状に含む）
2　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト

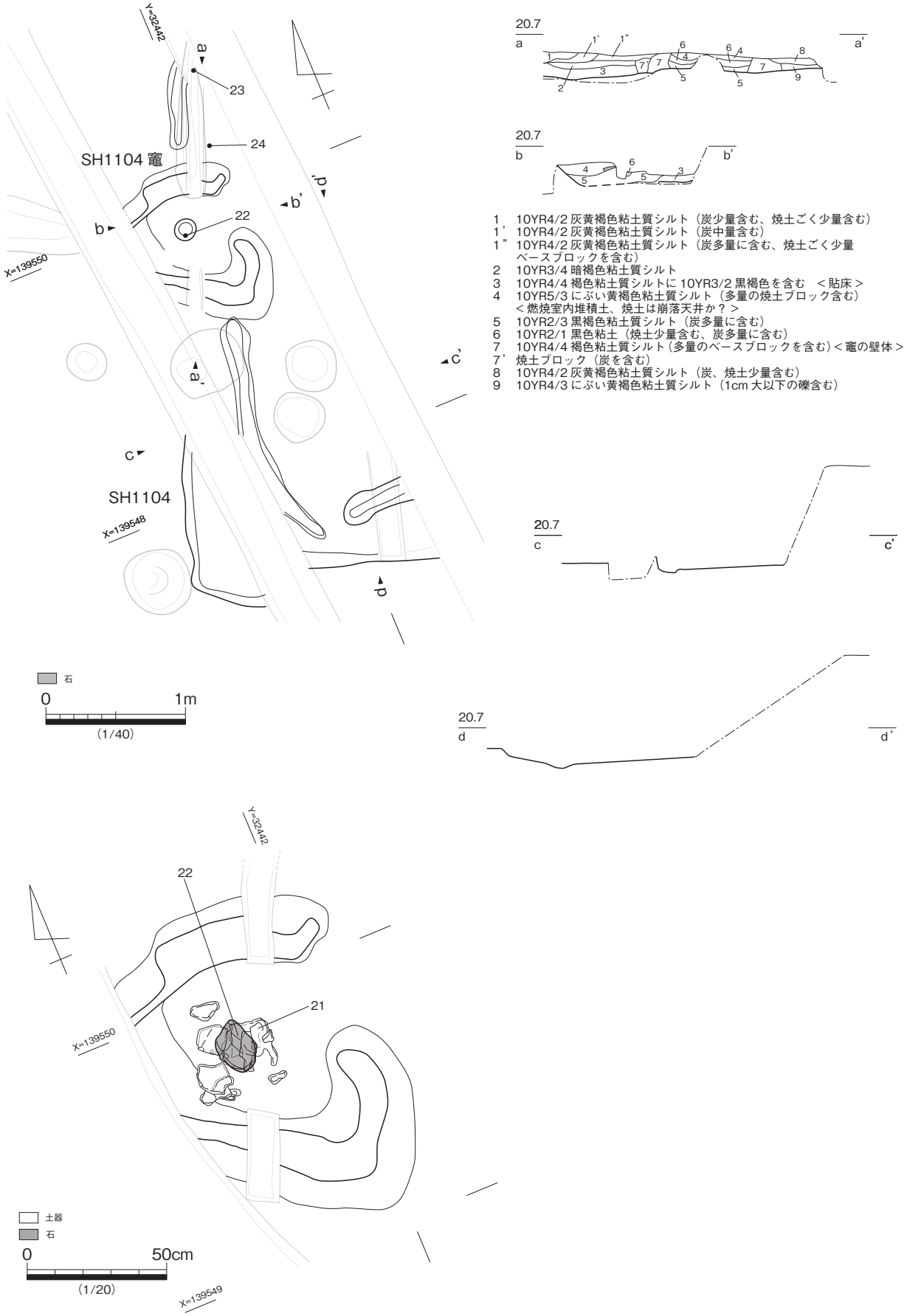


(1/40)

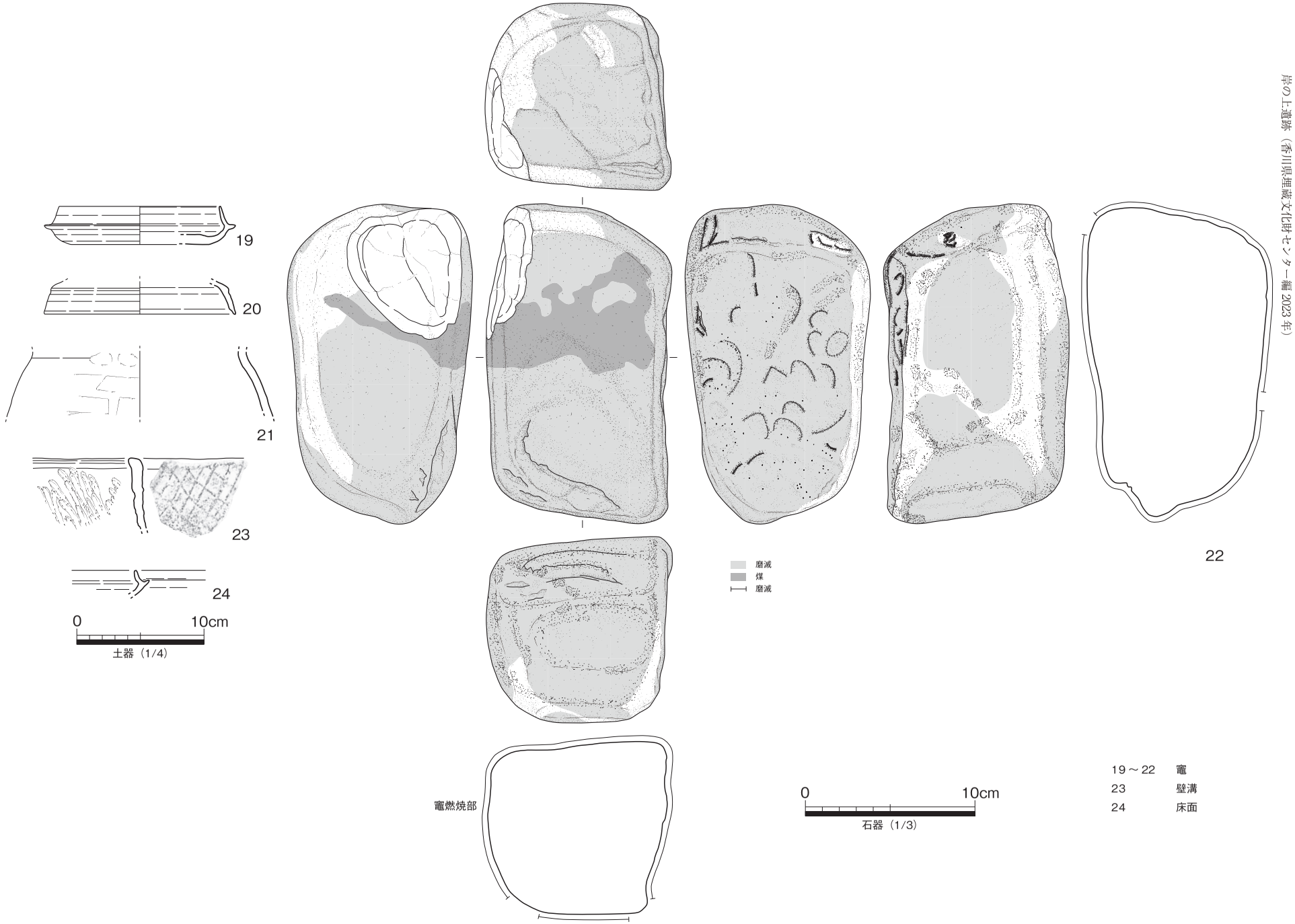


土器（1/4）

第 29 図　SH1015 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）



第 30 図　SH1104 平・断面図（1/40）、竈遺物出土状況（1/20）



第 31 図　SH1104 出土遺物（1/4・1/3）

北方向が 2.99m以上、東西方向は 0.98m以上、主軸方位はＮ 23.37° Ｅで、面積は 4.14㎡以上である。遺構面から深さ 11㎝程度で貼床層を検出し、貼床層は 6㎝程度を測る。

竈は西辺に備える。幅 1.1m、建物内の奥行き約 0.6m、建物外では延長 0.5m、竈袖部の残存裾幅は約 30㎝である。焚口部分は南側半分まで袖部の高まりが認められ、北側半分は袖部分の高まりは認められない。燃焼部は長軸 0.58m、幅 0.52mで、中心部付近、建物のほぼライン上に支柱石を置く。その上部には土師器甕が割れた状態で出土した。a-a' 断面、b-b' 断面により、竈は貼床を施した後に構築されていることがわかる。土師器甕は破損がひどく、全体を復元することはできなかった。他に須恵器杯身・杯蓋・甕片などが出土した。

壁溝は西辺･南辺で確認した。幅 12 ～ 14㎝､深さ 3㎝程度である。埋土中からは製塩土器片が出土した。

19 は竈構築土から出土した。須恵器杯身。20 ～ 22 は竈内燃焼部から出土した。20 は須恵器杯蓋。肩部外面に稜線を持ち、口縁端部内面には段を持つ。6 世紀中～後半（Ⅱ -3 期）頃。21 は竈内に設置された土師器甕である。支脚石の上部に設置された位置関係で出土したが、体部破片の破損は著しく、復元には至らなかった。竈内の煮炊きに使用されたと考えられる。22 は支柱石。全体に摩滅し、部分的に煤が付着する。砂岩。23 は壁溝から出土した。製塩土器。外面には格子タタキ痕、内面には工具で引っ掻いたような縦方向の痕跡を密に残す。24 は床面から出土した。須恵器杯身小片。6 世紀末～ 7 世紀初頭（Ⅱ -4 ～ 5 期）頃。

床面からやや新しい須恵器小片が出土しているものの、遺構の時期は、竈内の遺物の時期である 6 世紀後半頃と考えられる。

1 区 SH1106（第 32 ～ 34 図）

1 区やや北寄りで検出した。東半部は調査区外へ延びる。SH1107 と重複し、これより新しい。方形で南北 4.80m、東西 2.63m以上、主軸方位は真北方向、面積は 11.44㎡以上である。遺構面から 33㎝の深さで貼床面を検出し、8㎝程度の貼床を施す。竈は検出していないが、北辺調査区外に存在する可能性がある。壁溝、主柱穴は貼床後に掘削する。

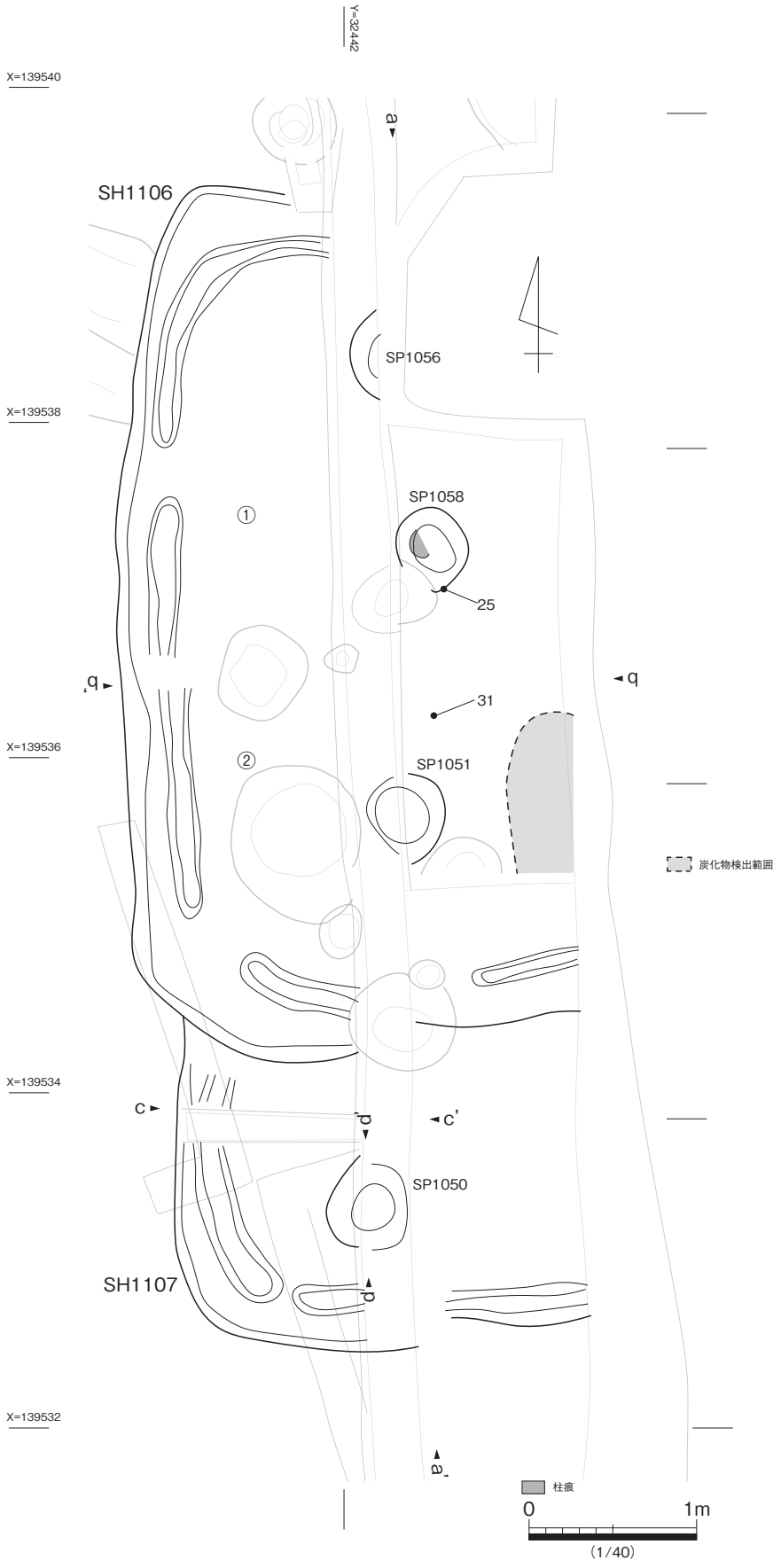
主柱穴は貼床の上面から掘り下げられた。西側に建物のラインと並行して主柱穴を 2 穴検出し、方形に配置する 4 穴が想定される。東側は調査区外に存在する可能性が高い。柱穴間の距離は南北 2.81m、東西 1.27m以上、柱穴は円形で、直径 54 ～ 61㎝、深さ 35㎝程度、柱痕跡の直径は 20㎝程度である。

壁溝は北辺、西辺、南辺で検出した。幅 14㎝、深さ 8㎝を測る。

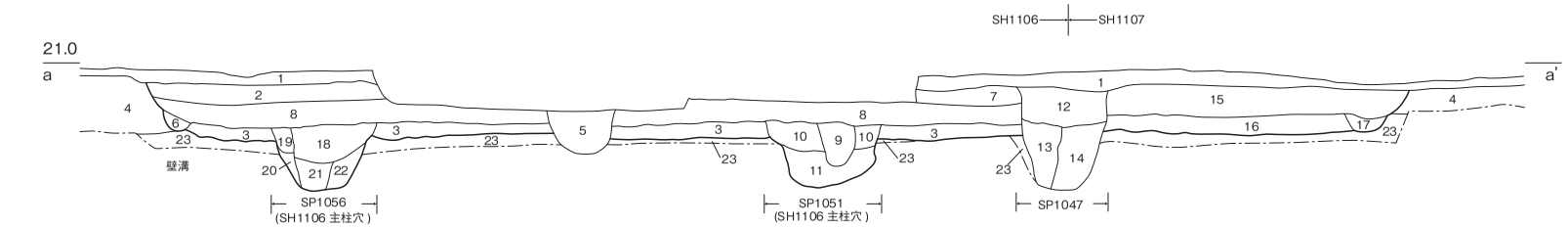
SH1106 南端調査区際で、東壁では認められなかったものの、南北 0.95m、東西 0.40mの範囲で炭の堆積が認められた。SH1107 の竈焚口の炭化物の可能性も考えられるかもしれないが、その場合は SH1107 の南北方向が 3.9m 程度となり、東西が長い長方形の形状になる。

埋土中からは須恵器杯蓋・杯身・甕、土師器片などが出土した。

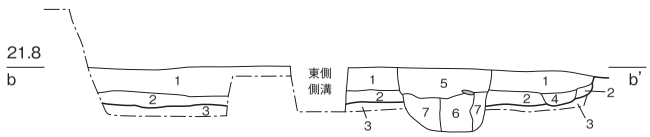
25 ～ 27 は貼床層から出土した。須恵器杯身。6 世紀末～ 7 世紀初頭（Ⅱ -4 ～ 5 期）頃。28 ～ 34 は埋土下層から出土した。28・29 は弥生土器甕。外面に平行タタキ痕を残す。弥生時代後期後半。30 ～ 32 は須恵器小片。30 は杯蓋、31 は杯身。口縁端部はわずかに段を持ち、厚手の印象である。32 は甕口縁部。6 世紀後半～ 7 世紀初頭（Ⅱ - 3 ～ 5）頃。33・34 は土師器甕。ほぼ直立する口縁部で、口縁部内面はハケ調整を施す。35 ～ 37 は出土層位が明らかでない遺物で、いずれも須恵器である。35 は高杯脚部。36・37 は甕。36 は頸部にカキ目を施す。



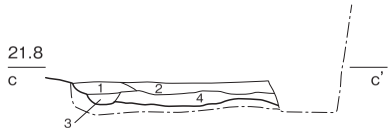
第 32 図　SH1106・SH1107 平面図（1/40）



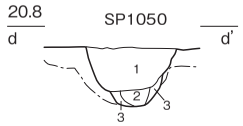
1 10YR5/6 黄褐色粘質シルト ＜床土＞
（1 ～ 2cm 大の礫含む　Mn 沈着）
2 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルト ＜SH1106 上層＞
（2 ～ 5cm 大の礫含む）
3 10YR4/4 褐色粘質シルト ＜SH1106 貼床＞
（黄褐色粘土ブロックを含む）
4 10YR3/3 暗褐色シルト ＜2 層＞
（1 ～ 2cm 大の礫含む）
5 10YR3/2 黒褐色粘質シルト ＜SP1055＞
6 10YR5/8 黄褐色粘質シルト ＜SH1106 壁溝＞
（2 ～ 4cm 大の礫含む　やや黒く濁る）
7 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト ＜SH1106 上層＞
（1 ～ 3cm 大の礫含む）
8 10YR3/2 黒褐色粘質シルト ＜SH1106 下層＞
（3 ～ 6cm 大の礫含む）
9 10YR3/2 黒褐色粘質シルト ＜SP1051 柱痕＞
（黄褐色粘土ブロックを多く含む）
10 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質シルト
（暗褐色粘土ブロックを少量含む）
11 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト
（暗褐色粘土ブロックを含む）
＜SP1051＞
12 10YR3/4 暗褐色粘質シルト
（2 ～ 3cm 大の礫含む）
13 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト ＜柱痕＞
14 10YR2/3 黒褐色シルト ＜裏込＞
＜SP1047＞
15 10YR3/3 暗褐色シルト ＜SH1107 下層＞
（1 ～ 5cm 大の礫含む）
16 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト ＜SH1107 貼床＞
17 5Y5/2 灰オリーブ色粘土質シルト ＜SH1107 壁溝＞
18 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト
19 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト ＜裏込＞
20 10YR3/3 暗褐色粘質シルト ＜裏込＞
21 10YR4/4 褐色粘質シルト ＜柱痕＞
22 10YR3/4 暗褐色粘質シルト
＜SP1053＞
23 2.5Y6/6 明黄褐色粘土質シルト（灰色粘土ブロック、根など？を含む）＜ベース＞



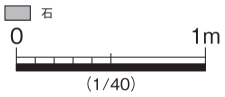
1 10YR3/2 黒褐色粘質シルト ＜SH1106 下層＞
（3 ～ 9cm 大の礫含む）
2 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト ＜SH1106 貼床＞
（2 ～ 3cm 大の礫含む）
3 10YR4/4 褐色粘質シルト ＜ベース＞
（1 ～ 5cm 大の礫含む）
4 10YR3/4 暗褐色粘質シルト ＜SH1106 壁溝＞
（1 ～ 2cm 大の礫をごく少量含む）
5 10YR3/3 暗褐色粘質シルト
6 10YR3/2 黒褐色粘質シルト ＜柱痕＞
（2 ～ 5cm 大の礫含む）
7 10YR3/3 暗褐色粘質シルト ＜裏込＞
＜SP1053＞



1 10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト
（ごく少量の土器片　1 ～ 3cm 大の礫含む）
2 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト
（土器片　3 ～ 5cm 大の礫含む）
＜SH1107 下層＞
3 10YR3/4 暗褐色粘質シルト ＜SH1107 壁溝＞
（灰色粘土ブロックを含む）
4 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト ＜SH1107 貼床＞
（灰黄色粘土ブロックを含む）



1 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質シルト ＜抜取痕＞
（2 ～ 5cm 大礫を含む）
2 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト ＜柱痕＞
（2 ～ 3cm 大礫を含む）
3 10YR5/2 灰黄褐色シルト ＜裏込＞



第 33 図　SH1106・SH1107 断面図（1/40）

遺構の時期は、SH1107 より新しいことと出土遺物から、概ね 6 世紀末～ 7 世紀初頭頃と考えられる。

1 区 SH1107（第 32 ～ 34 図）

1 区やや北寄りで検出した。東半部は調査区外へ延びる。SH1106 と重複し、これより古い。方形で南北方向は 1.88m～ 6.84m、東西方向は 2.35m以上と考えられるが、SH1106 で検出した炭化物の検出範囲が SH1107 竈に関わるものとすれば、南北方向は 3.9m程度、SP1058 を SH1107 の主柱穴と考えれば 5.6m程度と考えられる。主軸方位はＮ 1.33° Ｗ、面積は 4.22㎡以上である。遺構面から 26cmの深さで貼床面を検出した。貼床層は 10cm程度を測る。SH1106 との高低差は SH1107 の方が約 5cm高い程度で、ほとんど差はない。

竈は検出できなかった。SH1106 で検出した炭化物の集中範囲は、SH1107 に由来する可能性があろうが、SP1058 を主柱穴とすれば、竈の痕跡とは考え難い。東側の調査区外に存在する可能性がある。

主柱穴は西南隅の 1 穴を検出した。円形で直径 46cm、深さ 30cmを測る。SH1106 と重複する部分では、検出面の標高や位置関係から SP1058 が北西の主柱穴に該当する可能性がある。埋土中からは須恵器杯蓋・甕片等が出土した。

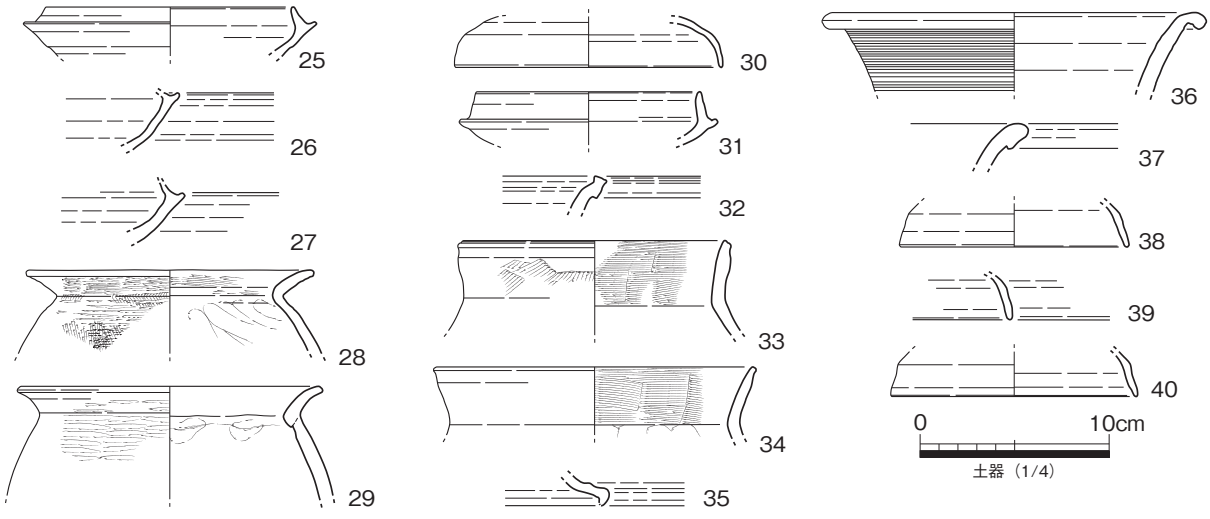
壁溝は西辺、南辺で検出した。貼床層の上面で検出した。幅 20cm、深さ 8cmを測る。SH1106 と重複する部分で、北辺が想定される個所では、壁溝の痕跡は認められなかった。

38・39 は埋土下層から出土した。須恵器杯蓋。40 は上面精査中に出土した須恵器杯蓋。6 世紀後半～末（Ⅱ -3 ～ 4 期）。

遺構の時期は、出土遺物及び SH1106 より古いことから、6 世紀後半～末頃と考えられる。

1 区・11 区 SH1501（第 35 ～ 37 図）

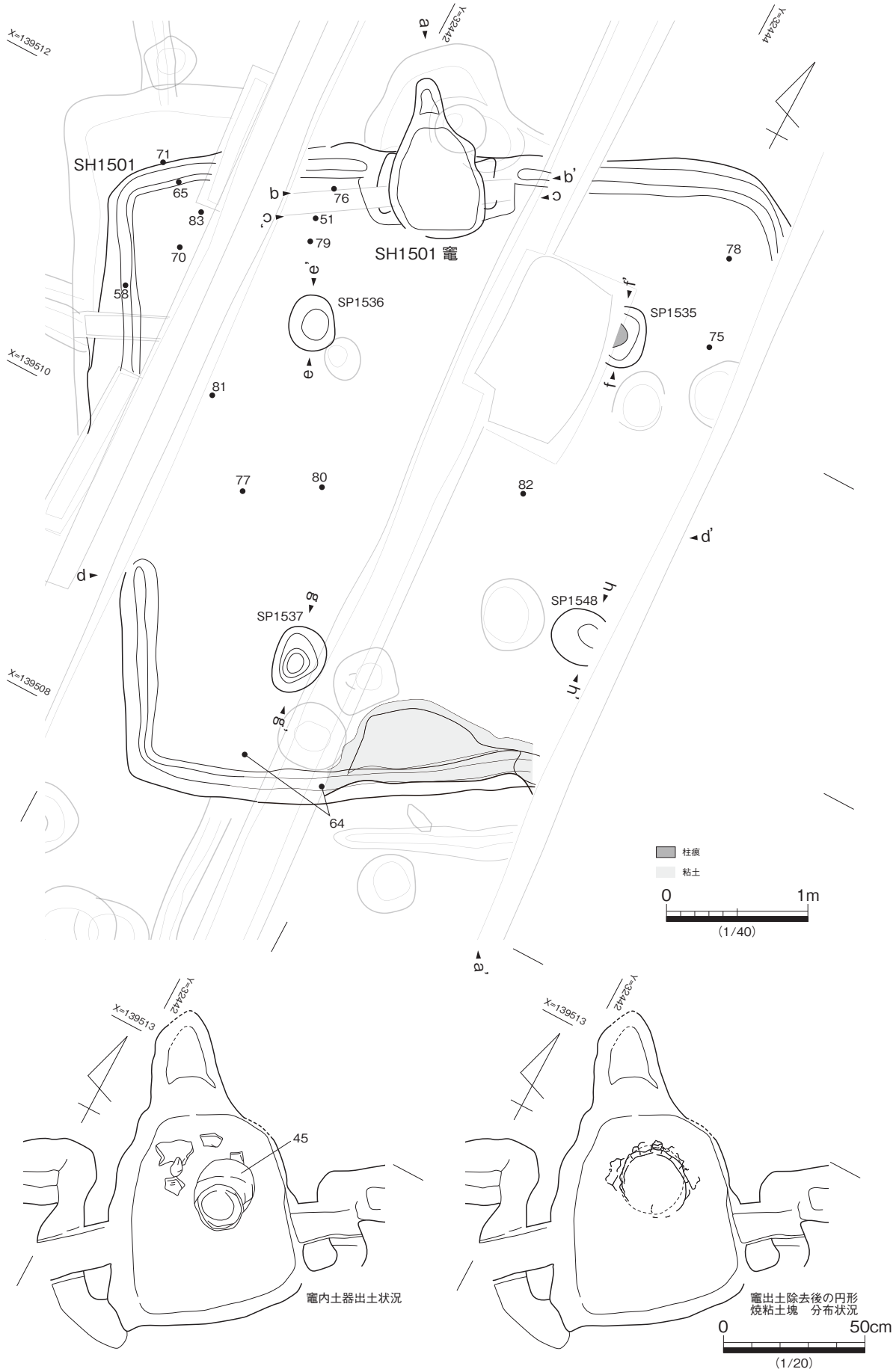
1 区やや南寄りで 11 区にまたがって検出した。SH1504・SH1505・SH11001 と重複し、いずれよりも新しい。東南隅は調査区外へ延びる。方形で南北方向は 4.60m、東西方向は 4.92m程度、主軸方位はＮ 29.9° Ｗ、面積は 18.24㎡以上で、残存範囲から 22㎡程度の規模と考えられる。遺構面から 14cmの深さ



25～37　SH1106　25～27　貼床
28～34　下層
35～37　その他

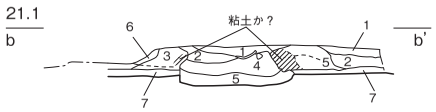
38～40　SH1107　38・39　下層
40　上面精査

第 34 図　SH1106・SH1107 出土遺物（1/4）

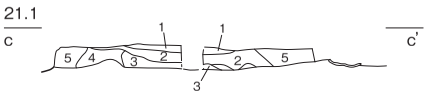


第 35 図　SH1501 平面図（1/40）、竈遺物出土状況（1/20）

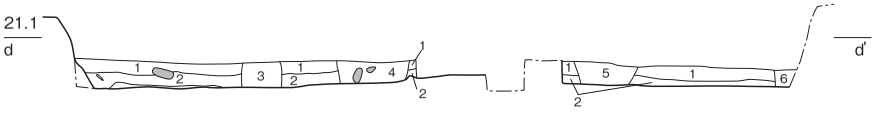
1　10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト＜ベース＞
2　10YR4/4 褐色粘質シルト（竈壁体粘土ブロック多く含む）
　＜下層＞
3　10YR5/6 黄褐色粘質シルト＜竈壁体粘土崩落土＞
4　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
5　10YR2/3 黒褐色粘質シルト（黒色粘土ブロック多く含む）
　＜貼床＞
6　10YR3/4 暗褐色粘質シルト　＜壁溝＞
7　10YR4/4 褐色粘質シルト
8　10YR3/4 暗褐色粘質シルト　<SH1504>
9　2.5Y8/6 黄色粘土
10　10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト
11　焼土ブロック混
12　ベースブロック混
13　粘土
14　焼土混じり粘土



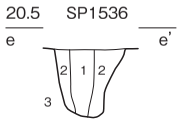
1　a-a' の 4 層
2　a-a' の 2 層
3　10YR5/6 黄褐色粘質シルト　＜竈壁体＞
4　10YR4/6 褐色粘質シルト
5　5YR4/6 赤褐色粘土（赤色化）＜竈壁体＞
6　＜埋土＞
7　＜貼床層＞



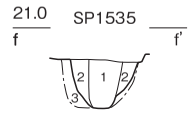
1　a-a' の 4 層
2　a-a' の 2 層
3　5YR3/6 暗赤褐色粘質シルト　＜竈焚口＞
4　10YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルト　＜竈東側壁体＞
5　10YR4/4 褐色粘質シルト



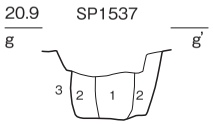
1　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト
2　10YR3/3 暗褐色粘質シルト
3　10YR3/2 黒褐色粘質シルト
4　10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト
5　10YR3/2 黒褐色粘質シルト
6　10YR4/4 褐色粘質シルト



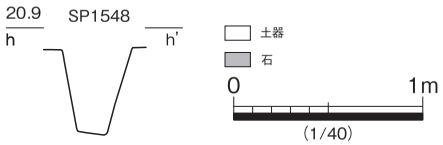
1　10YR3/4 暗褐色粘質シルト
　＜柱痕＞
2　10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト
3　10YR4/4 褐色粘質シルト
　＜ベース＞



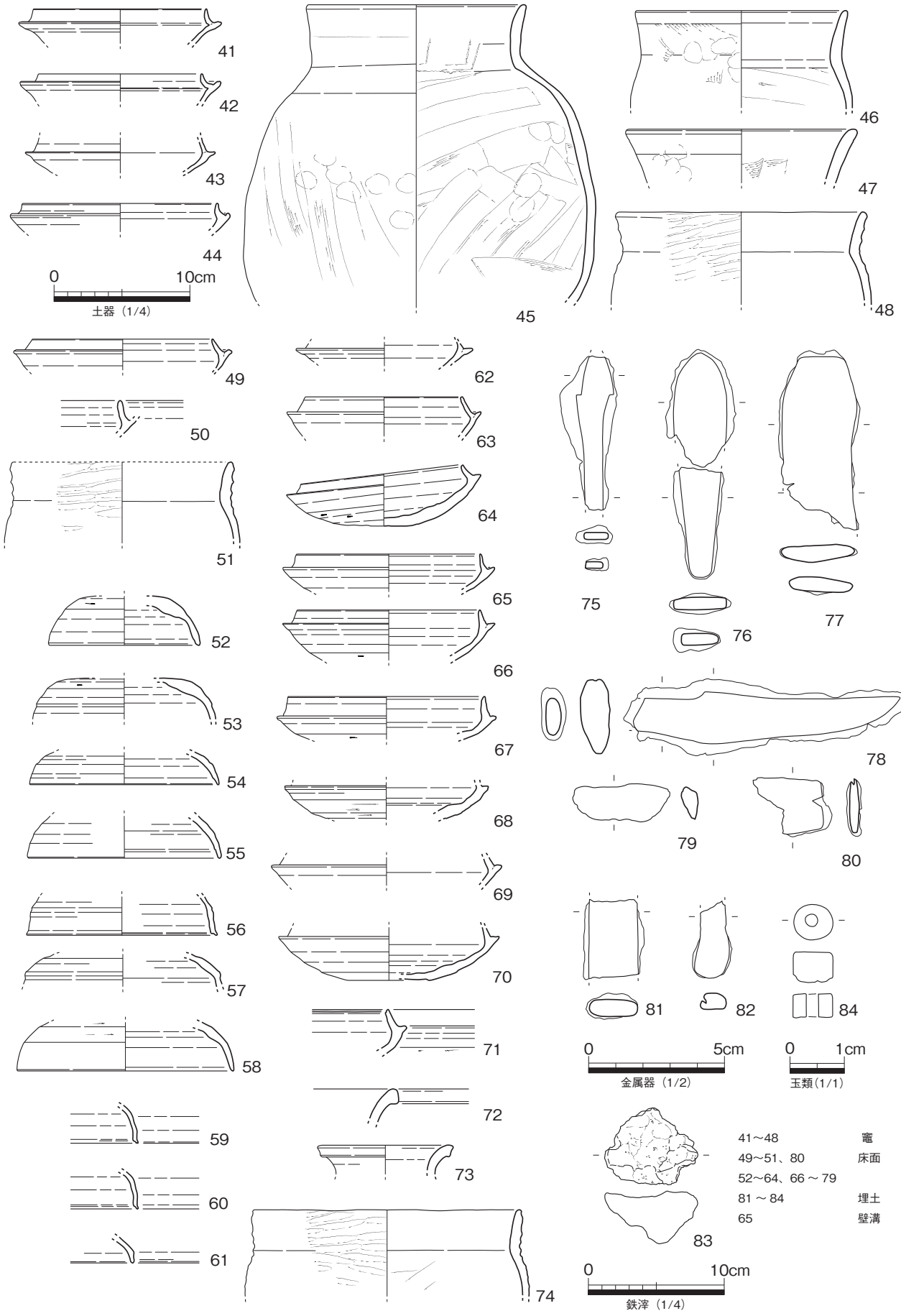
1　10YR3/3 暗褐色粘質シルト
　＜柱痕＞
2　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト
3　10YR3/4 暗褐色粘質シルト
　＜ベース＞



1　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト
　＜柱痕＞
2　10YR3/4 暗褐色粘質シルト
3　10YR4/6 褐色粘質シルト
　＜ベース＞



第 36 図　SH1501 断面図（1/40）



第 37 図　SH1501 出土遺物（1/4・1/2・1/1）

で貼床面を検出した。貼床層は6cmを測る。ただし、竈付近では他の部分の貼床と異なり、壁体粘土ブロックを多く含む貼床が施されていた。

竈部分は SH1505 の竈とほぼ重複する。竈の長軸 1.1m、幅 1.06m、竈袖部の幅は 22 ～ 28cm、燃焼部の幅 0.58m程度である。竈の中央付近からはほぼ完形の土師器甕が口を上へ向けて出土した。甕の除去後は甕の形状に沿って焼土塊が認められた。

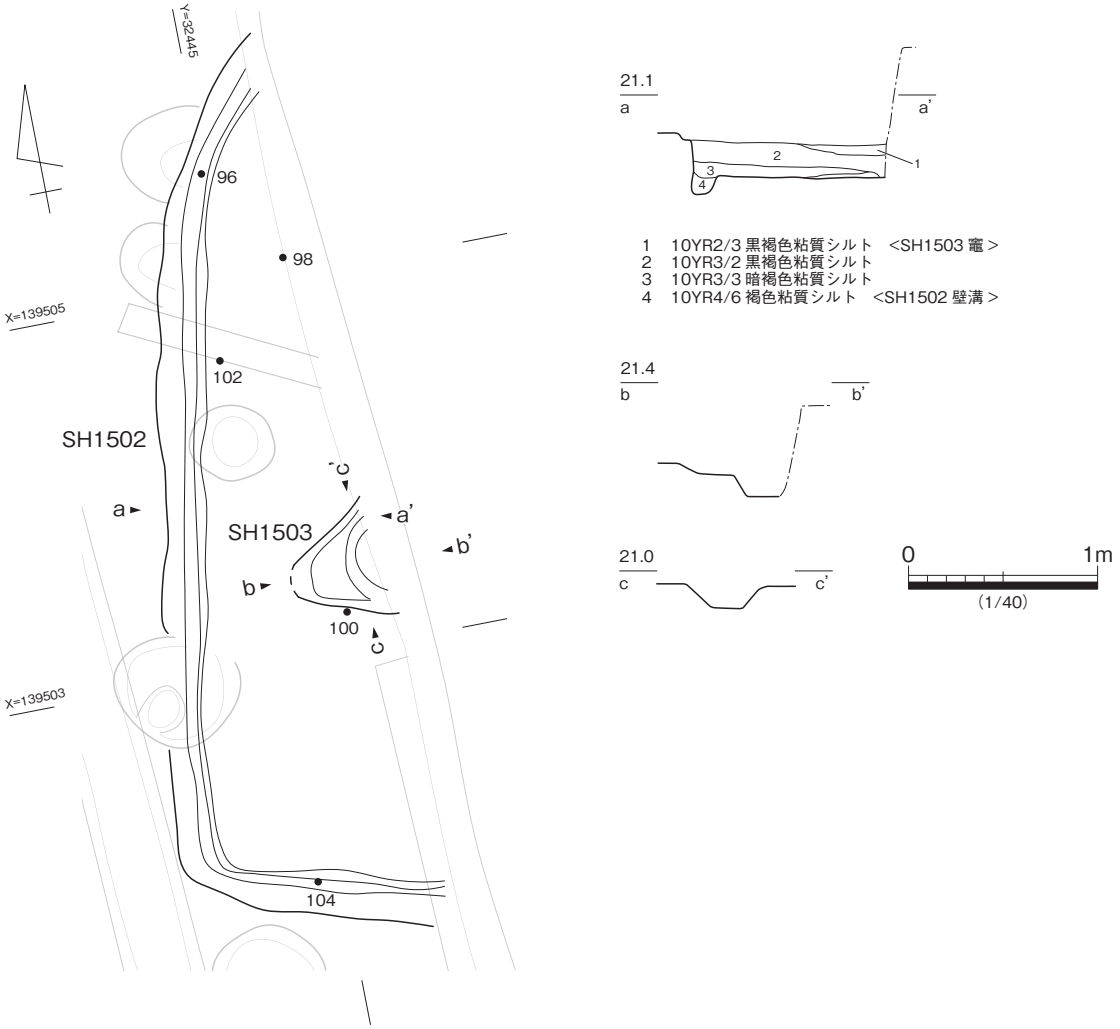
主柱穴は方形に配置する 4 穴を検出した。柱穴間の距離は南北 2.23 ～ 2.45m、東西 2.02 ～ 2.19m、柱穴はほぼ楕円形で、長軸 40 ～ 48cm、短軸 32 ～ 34cm、深さ 24 ～ 50cm程度、柱痕跡の直径は 12 ～ 20 cmである。

壁溝は 4 周で確認された。大部分の位置で外周に沿って検出した。幅 26cm、深さ 8cmを測る。

SH1501 南辺の中央付近、壁溝の上面で舌状に粘土の堆積が認められた。用途は不明である。

竈内からは製塩土器、土師器甕、須恵器杯身・杯蓋、埋土中からは製塩土器、須恵器杯身・杯蓋・提瓶が出土したほか、埋土中からは多くの須恵器のほか、鉄塊系遺物と多くの鉄器が出土した。

41 ～ 48 は竈部分から出土した。42・47 は竈の崩落土、41・45・46 は燃焼部内、43・44 はトレンチ、48 は上面から出土した。41 ～ 44 は須恵器杯身。7 世紀初頭（Ⅱ -5 期）頃。45 ～ 47 は土師器甕。45 は頸部がほぼ直立し、ほぼ全体を板ナデで平滑にする。46 は頸部と体部の境の屈曲が緩い。竈内で使用された甕と考えられる。48 は製塩土器。外面に平行タタキ痕跡が残る。49 ～ 51・80 は床面上で出土し



第 38 図　SH1502・SH1503 平・断面図（1/40）

た。49・50 は須恵器杯身。6 世紀末（Ⅱ -4 期）頃。51 は製塩土器。48 と同一個体の可能性がある。外面に平行タタキ痕が残る。80 は鉄器。刀子又は鉄鏃か。65 は壁溝、52 ～ 84（65・80 を除く）は埋土中から出土した。52 ～ 73 は須恵器。52 ～ 61 は杯蓋。56 は口縁端部に、56・57 は肩部に段を持ち、やや古い様相を呈するが、他は概ね 6 世紀末～ 7 世紀前半（Ⅱ -4 ～ 6 期）頃。62 ～ 71 は杯身。64 は歪みが著しい。6 世紀末（Ⅱ -4 期）頃。72 は甕口縁部小片。73 は提瓶口縁部。74 は製塩土器。外面に平行タタキ痕が残る。48・51 と似た形態で、同一個体の可能性もある。75 ～ 82 は鉄器。75・76 は鉄鏃か。77 は鉄鏃。78 は刀子。79 は刀子か。81･82 は棒状鉄片とした。83 は鉄塊系遺物。分析試料である。84 は滑石製臼玉。

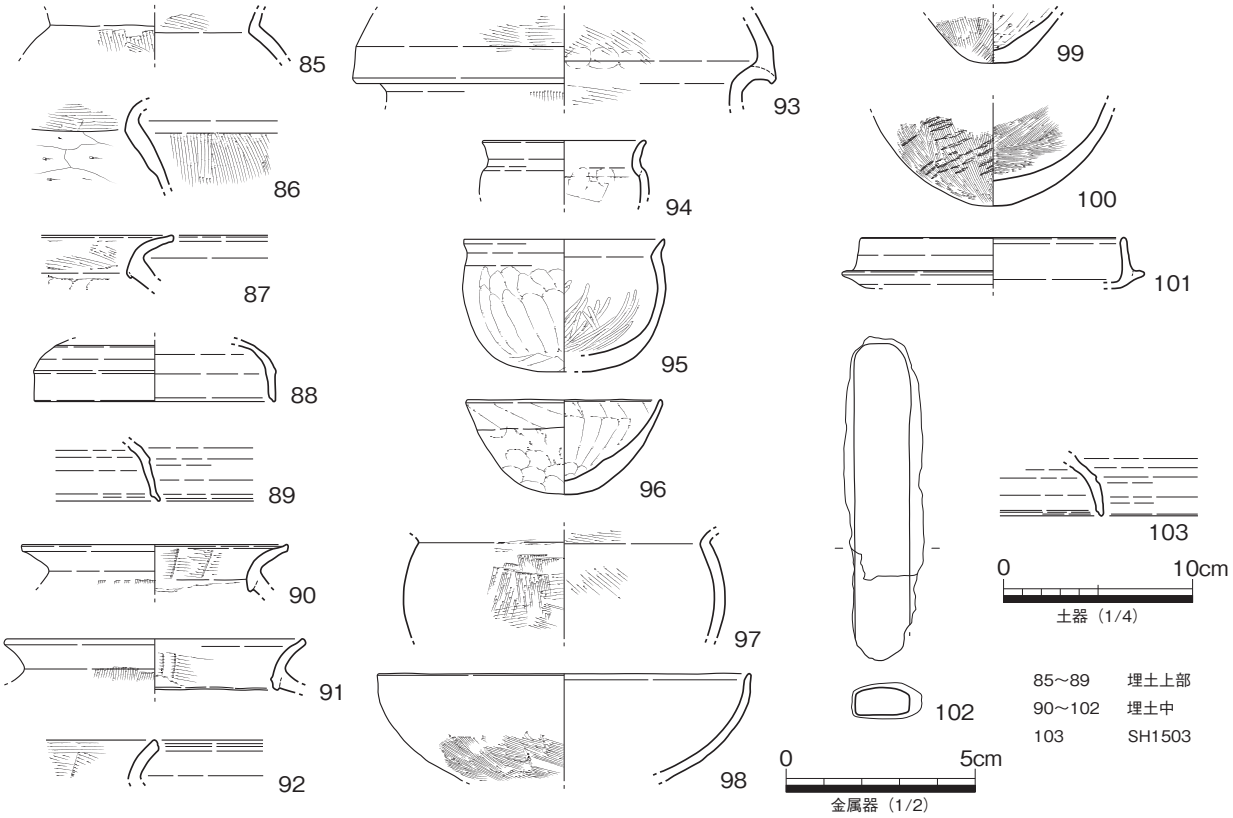
遺構の時期は、出土遺物により 6 世紀末～ 7 世紀前半頃と考えられる。鉄器の出土が多く、鉄塊系遺物は鍛打加工前の鍛冶原料鉄と考えられる。鍛冶行為に関連する竪穴建物と考えられる。

1 区 SH1502（第 38 ～ 40 図）

1 区南部、SH1501 の南側で検出した。東側の大部分は調査区外へ延びる。方形と考えられる。SH1503 と重複し、これより古い。南北方向は 4.58m 以上、東西方向は 1.52m 以上、主軸方位は N9.8° E で、面積は 4.34㎡以上である。

貼床層と考えられる層は認められず、竈・主柱穴は調査範囲内では検出していない。西側・南側には竪穴のラインに沿って幅 14㎝、深さ８㎝の壁溝を検出した。埋土中からは弥生土器小片、須恵器小片が出土した。

85 ～ 89 は埋土上部から出土した。85 ～ 87 は弥生土器甕。弥生時代後期後半。88･89 は須恵器杯蓋。いずれも肩部・口縁端部内面は段を持つ。6 世紀後半（Ⅱ -3 期）頃。90 ～ 102 は埋土中から出土した。



第 39 図　SH1502・SH1503 出土遺物 1（1/4・1/2）

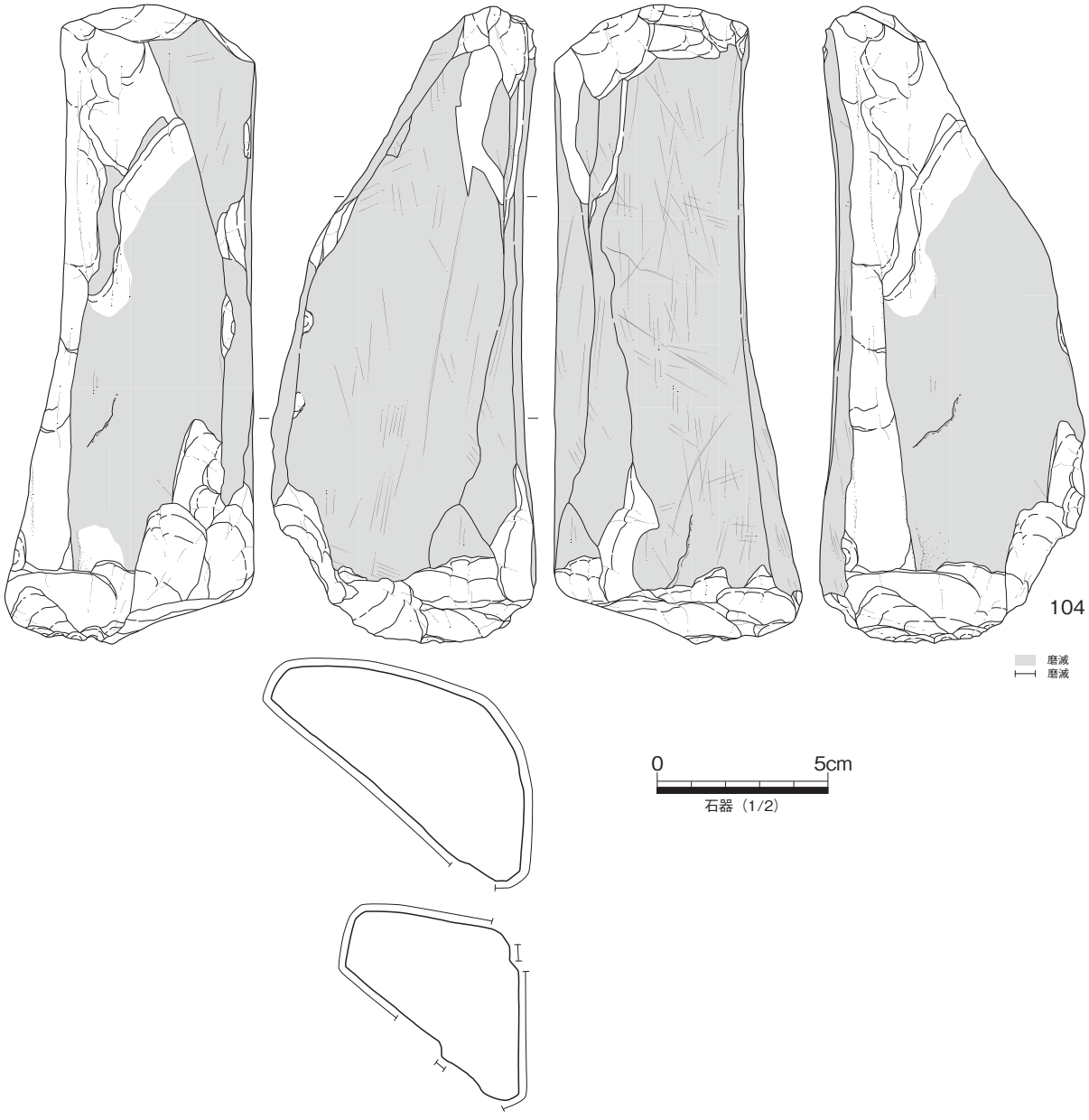
90 ～ 100 は弥生土器。90 ～ 92 は甕。93 は二重口縁壺。口縁部立ち上がり部分に粘土の接合痕が認められる。94 ～ 98 は鉢。94･95･97 は頸部が緩く屈曲する。99･100 は底部。弥生時代後期後半～終末期。101 は須恵器杯身。やや厚手でのものである。102 は鉄器。棒状鉄片。104 は砥石。流紋岩製。

埋土中からは弥生時代後期後半～終末期頃の遺物が多く出土したが、須恵器の他、鉄器・鍛冶行為に関わる遺物の出土も認められた。遺構の時期は、出土遺物から 6 世紀後半頃と考えられる。周辺には弥生時代後期後半～終末期頃の遺構があったと考えられる。棒状鉄片や流紋岩製砥石の出土から、鍛冶に関わる竪穴建物と考えられる。

1 区 SH1503（第 38・39 図）

1 区南部、SH1502 の上面で竈部分を検出した。西向きに設置された竈の一部を検出したのみで、竪穴建物は東側へ展開すると考えられる。

竈の長軸は 0.45m 以上、幅は 0.62m 以上で、焚口に近いほうに地表面からの深さ 22㎝程度の窪みが



第 40 図　SH1502 出土遺物 2（1/2）

ある。窪み部分以外の深さは地表面から深さは5㎝程度である。竈の形状はSH1501に似ると考えられる。竈の主軸方位はE7.08° Nである。竈の埋土中からは須恵器杯蓋・甕片が出土した。

1区東壁土層及び、a-a'断面では暗褐色砂質シルト、黒褐色粘質シルトの堆積が認められ、焼土や炭化物等竈と関連するような堆積物は認められず、SH1502の埋土の一部の可能性も考えられる。

103は須恵器杯蓋片。小片で6世紀末（Ⅱ-4期）頃。

遺構の時期はSH1502より新しく、6世紀末頃と考えられる。

1区 SH1504（第41図）

SH1501の南側に重複して検出した竪穴建物である。遺構の前後関係によりSH1501より古い。方形と考えられるが、SH1501の床面がSH1504より12㎝程度低いことから、北側の大部分はSH1501により削平される。東側は調査区外へ延びる。南北方向は2.13m以上、東西方向は1.97m以上、主軸方位はN6.68° W、面積は3.49㎡以上である。遺構面から5cm程度の深さで貼床面を検出し、貼床層は6㎝程度を測る。

調査範囲内では竈の痕跡は認められなかった。主柱穴は方形に4穴が配置されると想定され、西側の2穴のみを検出した。このうち北側の1穴はSH1501内で検出した。柱穴間の距離は南北2.07m、東西0.79m以上、柱穴は概ね円形で、直径44～50㎝、深さ36～40㎝を測る。

壁溝は、SH1501と重複しない部分で南辺と西辺で検出した。竪穴建物のラインに沿って検出され、幅16㎝程度、深さ6㎝を測る。埋土中からは須恵器、土師器小片が出土した。

105･106は埋土中から出土した。105は須恵器杯蓋。口縁端部には段が認められる。6世紀後半（Ⅱ-3期）頃。106は土師器甕。107は、割れて欠損する部分も多いが、1面の中央付近に摩滅痕が残る。砥石と考えられる。砂岩。

遺構の時期は、出土遺物により6世紀後半頃と考えられる。

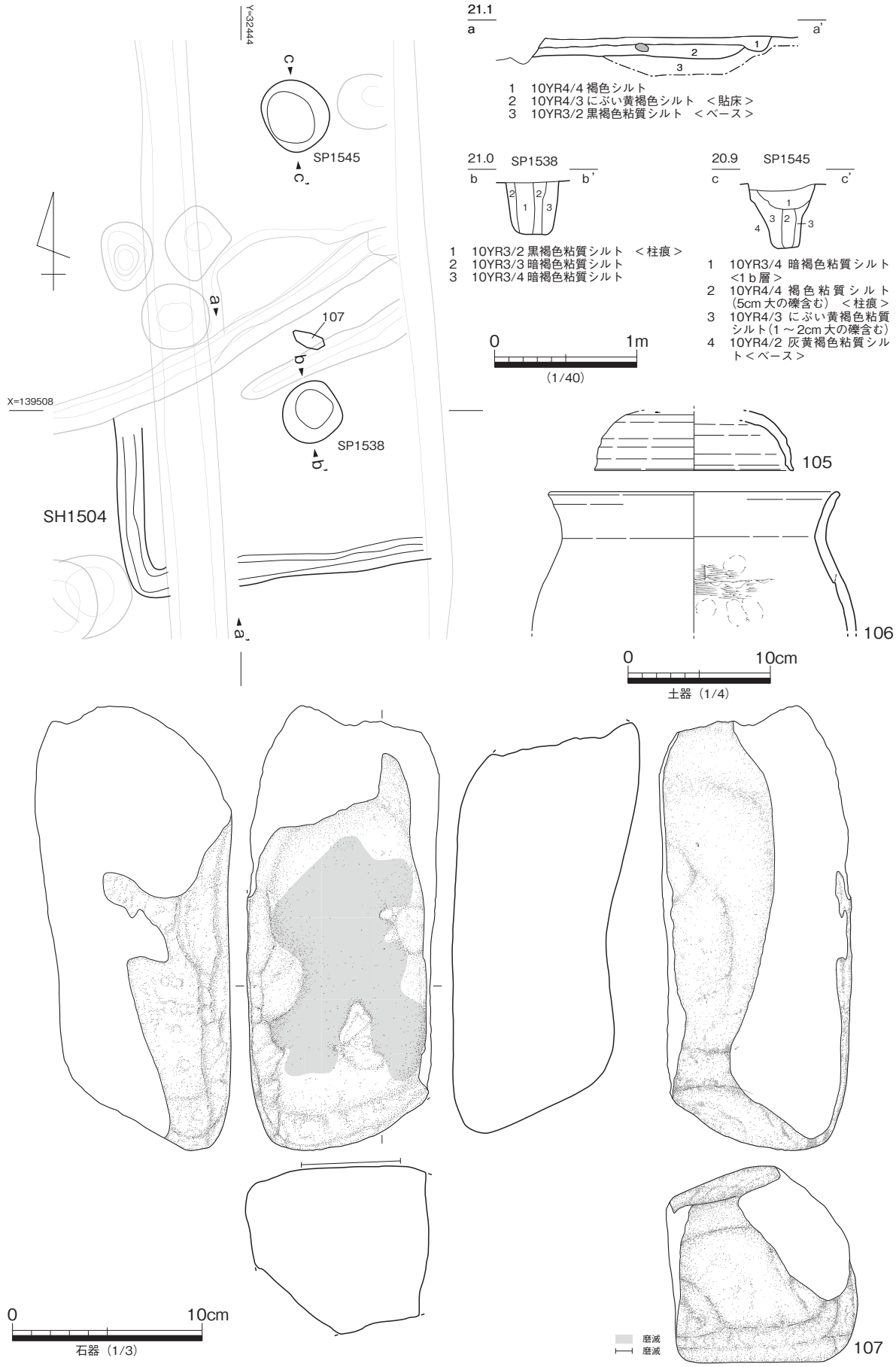
1区・11区 SH1505（第42図）

1区やや北寄りから11区で、SH1501のほぼ全体に重複して検出した。遺構の前後関係によりSH1501より古い。SH1501により大半を壊され、遺構の遺存状況は非常に悪い。竈と東南隅を除く主柱穴、11区側で北西隅付近を検出した。壁溝は検出できなかった。SH1505の規模は、平面形やSH1501を含めた土層断面、1区東壁土層でも確認できないことから、長さ、深さともSH1501の規模の中に収まると考えられる。また、竈の平面形は検出したが、SH1501を含めた土層断面では竈の痕跡は認められず、詳細は明らかではない。

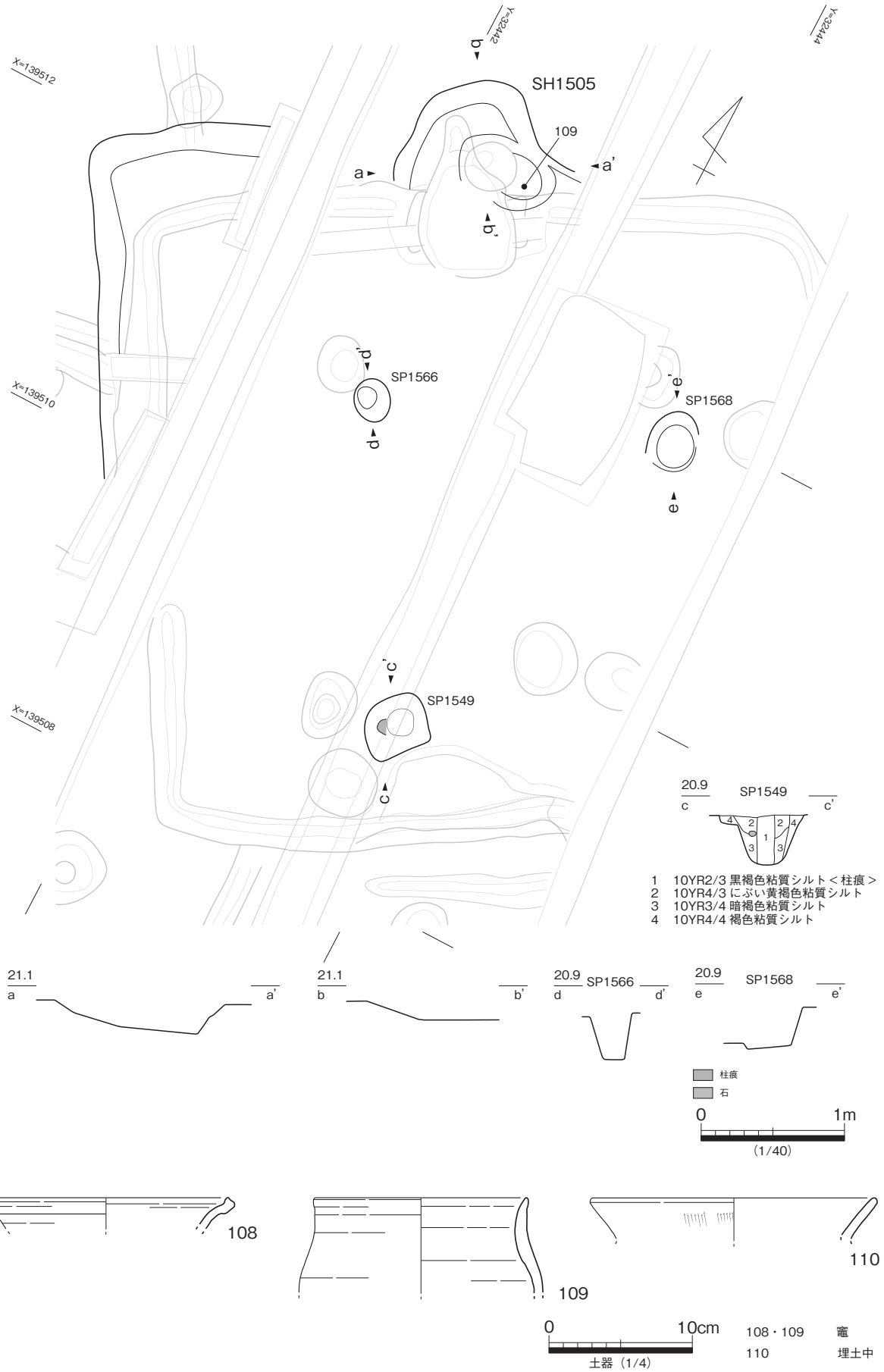
竈の規模は、長軸0.78m、幅1.20m、深さは一段下がった部分が9㎝、建物に近いやや深い窪みが23㎝、主軸方位はN35.58° Wである。竈袖部は残されていなかった。

主柱穴はややいびつであるが、3穴を想定した。柱穴間の距離は南北2.25m、東西2.13m、柱穴は楕円形または隅丸方形で、長軸は30～44㎝、短軸26～38㎝、深さ28～34㎝を測る。竈の埋土中からは須恵器、土師器小片が出土した。

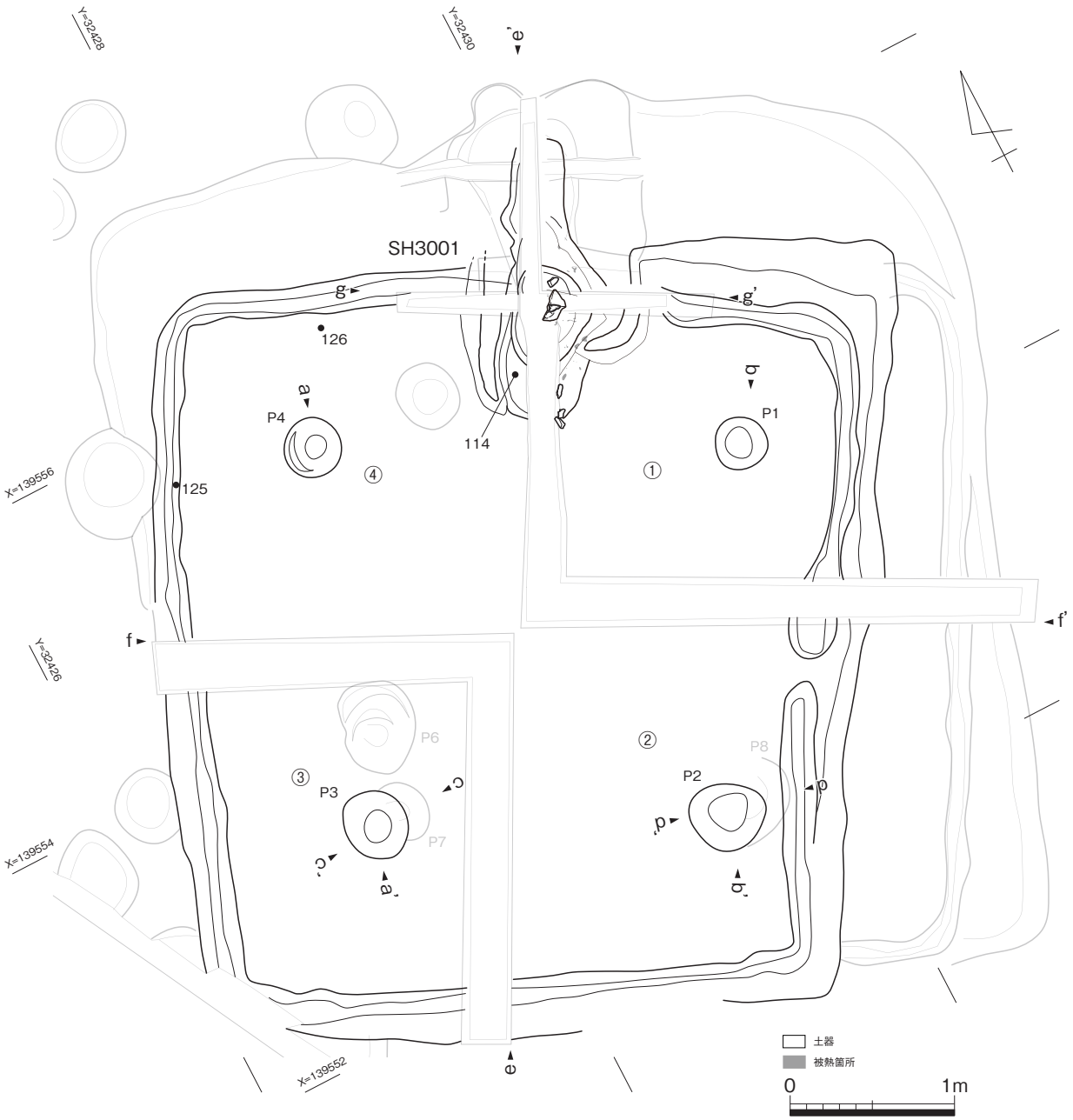
108・109は竈内から出土した。108は須恵器甕。109は土師器甕。110は土師器甕。調査時の出土位置の記録には1区埋土中とあるが、埋土はほぼSH1501により消失しており、SH1501の埋土中である可能性もあろう。

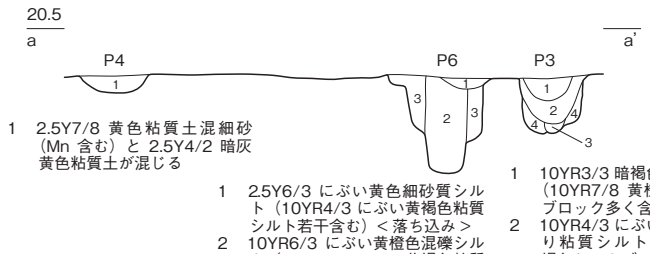


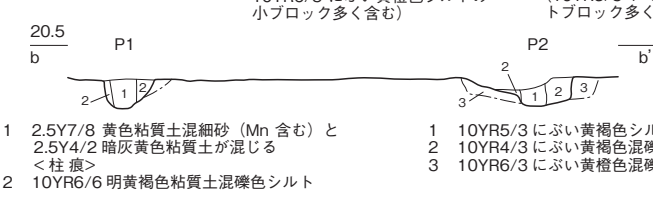
第 41 図　SH1504 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4・1/3）

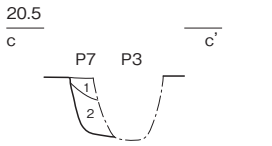


第 42 図　SH1505 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

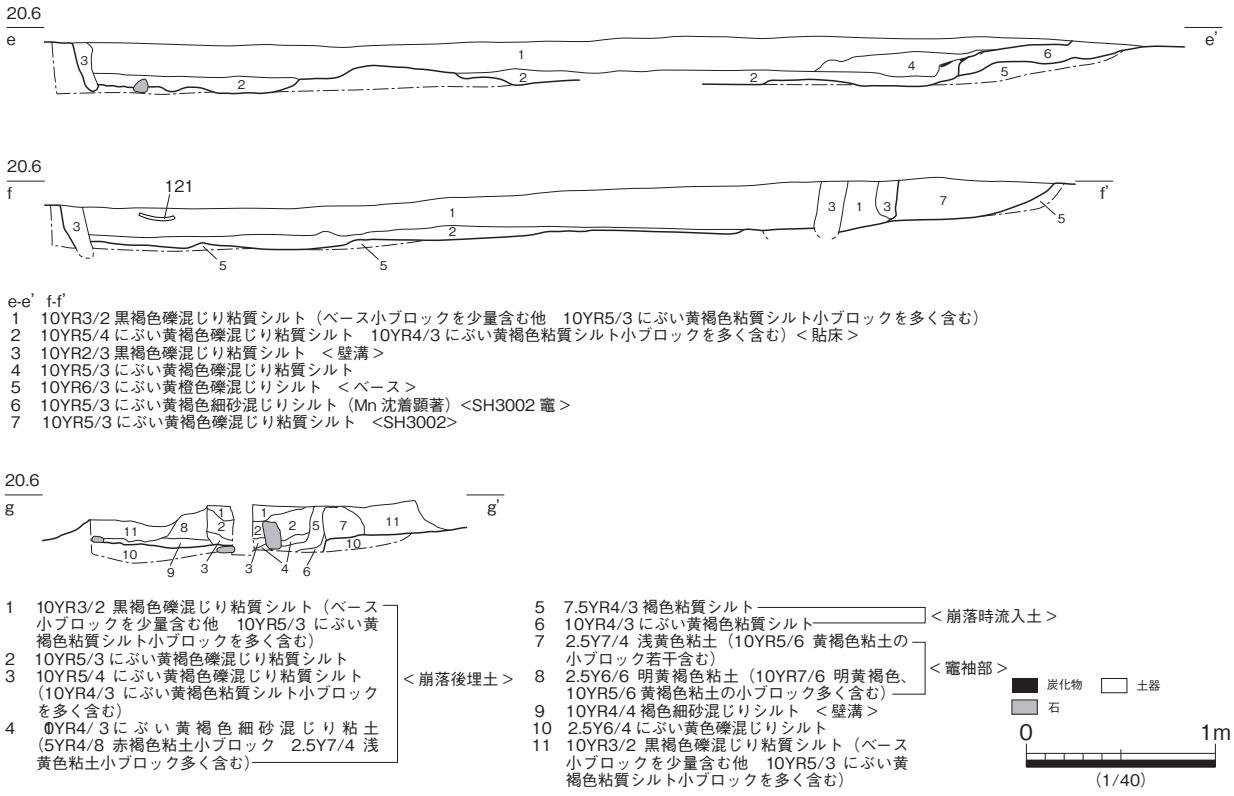








第 43 図　SH3001 平・断面図 1（1/40）



e-e' f-f'
1　10YR3/2 黒褐色礫混じり粘質シルト（ベース小ブロックを少量含む他　10YR5/3 にぶい黄褐色粘質シルト小ブロックを多く含む）
2　10YR5/4 にぶい黄褐色礫混じり粘質シルト　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト小ブロックを多く含む）＜貼床＞
3　10YR2/3 黒褐色礫混じり粘質シルト　＜壁溝＞
4　10YR5/3 にぶい黄褐色礫混じり粘質シルト
5　10YR6/3 にぶい黄橙色礫混じりシルト　＜ベース＞
6　10YR5/3 にぶい黄褐色細砂混じりシルト（Mn 沈着顕著）<SH3002 竈＞
7　10YR5/3 にぶい黄褐色礫混じり粘質シルト　<SH3002>

1　10YR3/2 黒褐色礫混じり粘質シルト（ベース小ブロックを少量含む他　10YR5/3 にぶい黄褐色粘質シルト小ブロックを多く含む）
2　10YR5/3 にぶい黄褐色礫混じり粘質シルト
3　10YR5/4 にぶい黄褐色礫混じり粘質シルト（10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト小ブロックを多く含む）
4　10YR4/3 にぶい黄褐色細砂混じりシルト（5YR4/8 赤褐色粘土小ブロック　2.5Y7/4 浅黄色粘土小ブロック多く含む）
＜崩落後埋土＞
5　7.5YR4/3 褐色粘質シルト
6　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト
＜崩落時流入土＞
7　2.5Y7/4 浅黄色粘土（10YR5/6 黄褐色粘土の小ブロック若干含む）
8　2.5Y6/6 明黄褐色粘土（10YR7/6 明黄褐色、10YR5/6 黄褐色粘土の小ブロック多く含む）
＜竈袖部＞
9　10YR4/4 褐色細砂混じりシルト　＜壁溝＞
10　2.5Y6/4 にぶい黄色礫混じりシルト
11　10YR3/2 黒褐色礫混じり粘質シルト（ベース小ブロックを少量含む他　10YR5/3 にぶい黄褐色粘質シルト小ブロックを多く含む）

第 44 図　SH3001 断面図２（1/40）

遺構の時期は、SH1501 より古いことから７世紀前半以前である。

３区 SH3001（第 43 ～ 45 図）

３区北部で検出した。２面で検出した。SH3002 と重複し、これより新しいことが、e-e'、f-f' 断面からわかる。方形で南北方向 4.62m、東西方向は 3.78 ～ 5.16m で、北辺がやや長い。主軸方位は N24.89° E、面積は 19.61㎡である。遺構面から 24㎝程度の深さで貼床面を検出し、貼床層は 8㎝程度である。壁溝の痕跡は埋土上面から観察でき、貼床設置後に壁溝部分に板等を設置し、埋没過程でもそれが残された様子が窺える。

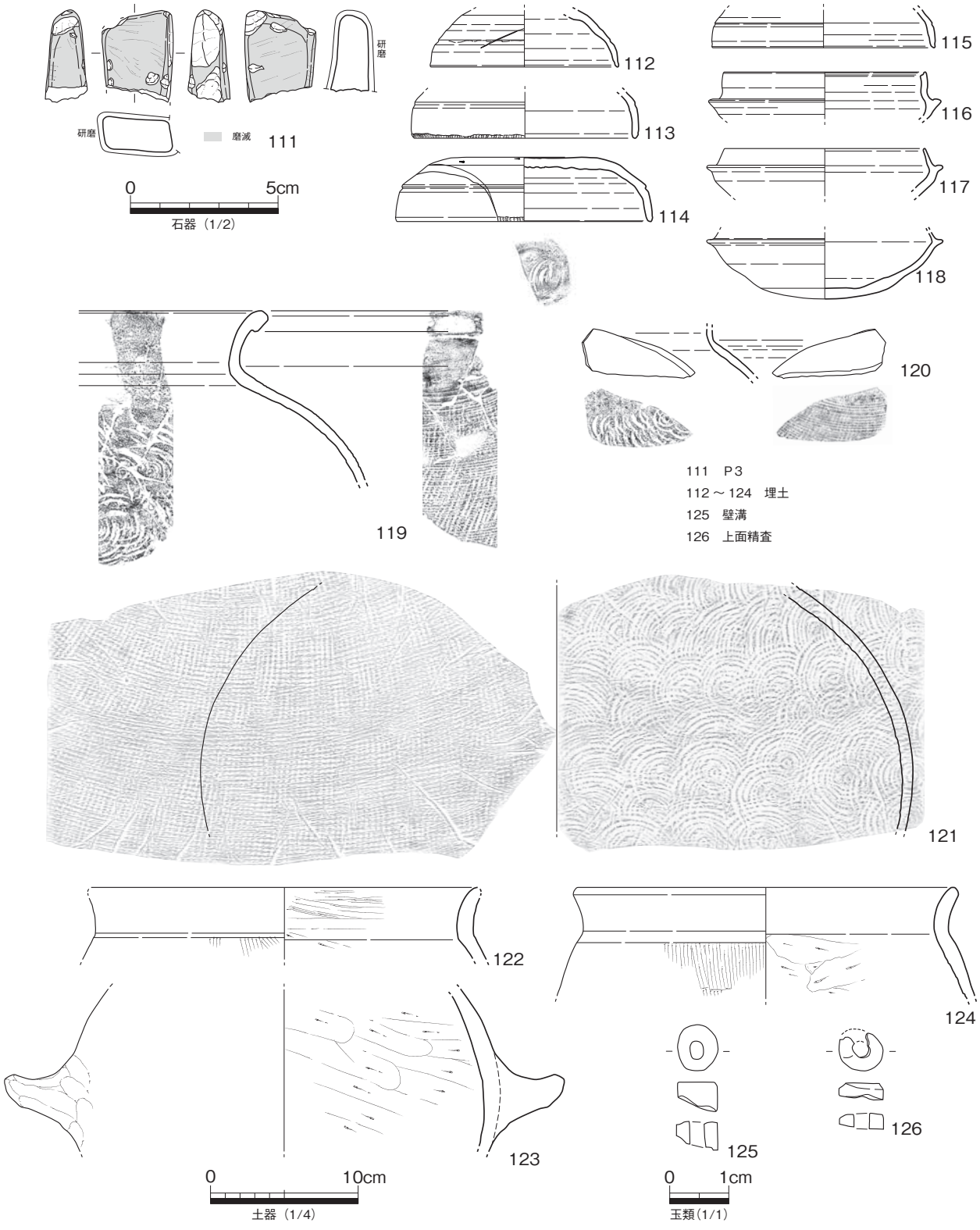
北辺には竈を備える。壁溝埋土の上面で検出した。竈両側の袖部分が残存し、中央付近では支柱石が出土した。竈の幅は 1.14m、建物内での奥行き 1.0m、建物外に 0.8m の煙道が延びる。竈袖の裾の残存幅は 24㎝程度である。東側の竈袖部分は南半部で竈側へ屈曲する。燃焼部は楕円形を呈し、長軸 0.60m、短軸 0.48m を測る。

主柱穴は方形に配する４穴を検出した。竪穴建物のラインに平行で、北側の柱間がやや広い。南側２穴は SH3002 の主柱穴と重複すると考えられる。柱穴間の距離は南北 2.23 ～ 2.33m、東西 2.10 ～ 2.55m、形状は円形で、直径 32 ～ 40㎝、深さ 16 ～ 30㎝、柱痕の直径は 14㎝程度である。

壁溝は四周で検出した。西辺・南辺・北辺側の西半部は竪穴建物のラインに沿って検出した。東辺及び北辺の竈から東部分では、竪穴建物のラインよりやや内側で検出した。幅 7㎝、深さ 4㎝である。

埋土中からは須恵器杯身・杯蓋・甕、土師器甕のほか、砥石、滑石製の臼玉が出土した。

111 は主柱穴 P3 から出土した砥石。流紋岩製。折損するが、残存部分ではほぼ全体に磨滅する。112 ～ 124 は埋土中から出土した遺物。112 ～ 121 は須恵器。112 ～ 115 は杯蓋。112 は外面にヘラ状工具



第 45 図　SH3001 出土遺物（1/4・1/2・1/1）

によると考えられる線刻が残る。114 は残存する口縁端部に刻み目を持ち、頂部内面にも工具痕が残る。116 ～ 118 は杯身。119 ～ 121 は甕。121 は体部破片で傾きと直径は不確か。112 は 6 世紀末（Ⅱ -4 期）、116 は 6 世紀中頃（Ⅱ -2 期）頃と考えられるが、概ね 6 世紀後半～末頃（Ⅱ -3 ～ 4 期）と考えられる。

122 ～ 124 は土師器甕。123 は把手部分。125・126 は滑石製臼玉。125 は壁溝から、126 は上面精査中に出土した。

流紋岩製の砥石が出土し、鍛冶に関わる行為を窺わせる。鍛冶炉と考えられる遺構が近接しており、鍛冶行為に関わる竪穴建物である可能性があろう。

遺構の時期は、出土遺物により 6 世紀後半～末頃と考えらえる。

3 区 SH3002（第 43・44・46 図）

3 区北部で検出した。2 面で検出した。SH3001 と重複し、大部分は SH3001 により壊される。SH3001e-e'・f-f' 断面により SH3001 より古い。方形で、南北方向 5.39m、東西方向 5.15m、主軸方位は N22.57° E、面積は 27.81㎡である。遺構面から 10 ～ 12㎝の深さで貼床面を検出した。貼床層は 6㎝程度を測る。

北辺で竈を検出した。焚口付近は SH3001 により消失するが、幅 1.18m、建物内での奥行は 1 m 程度、建物外へ延びる煙道は 0.2m 程度を検出した。竈袖部は、西側では明瞭ではないが、東側では幅 41.7㎝で広めである。燃焼室の幅は 0.63m程度、長軸 0.91m程度と考えられる。

主柱穴は、南辺で 2 穴を想定した。いずれも SH3001 の主柱穴により大部分を壊されるが、柱穴間の距離は東西 2.18m、概ね円形と考えられ、直径 36 ～ 50㎝、深さ 18 ～ 32㎝を測る。

壁溝は、SH3001 と重複しない東辺及び南辺と北辺の一部で検出した。東辺は、竪穴建物のラインとはやや異なる方向である。北辺は竪穴建物のラインより 1m 程度南側で、東辺から屈曲してわずかに検出した。北辺際では検出していない。a-a' 断面から、貼床を施した後、壁溝を掘り下げたことがわかる。幅 12㎝、深さ 5㎝を測る。

埋土中からは須恵器甕、土師器甕の小破片が出土したのみであった。

遺構の時期は、SH3001 より古い 6 世紀後半以前と考えられる。SH3001 出土遺物の中で比較的古い時期の遺物が SH3002 に相当すると考えれば、6 世紀後半頃と考えられる。

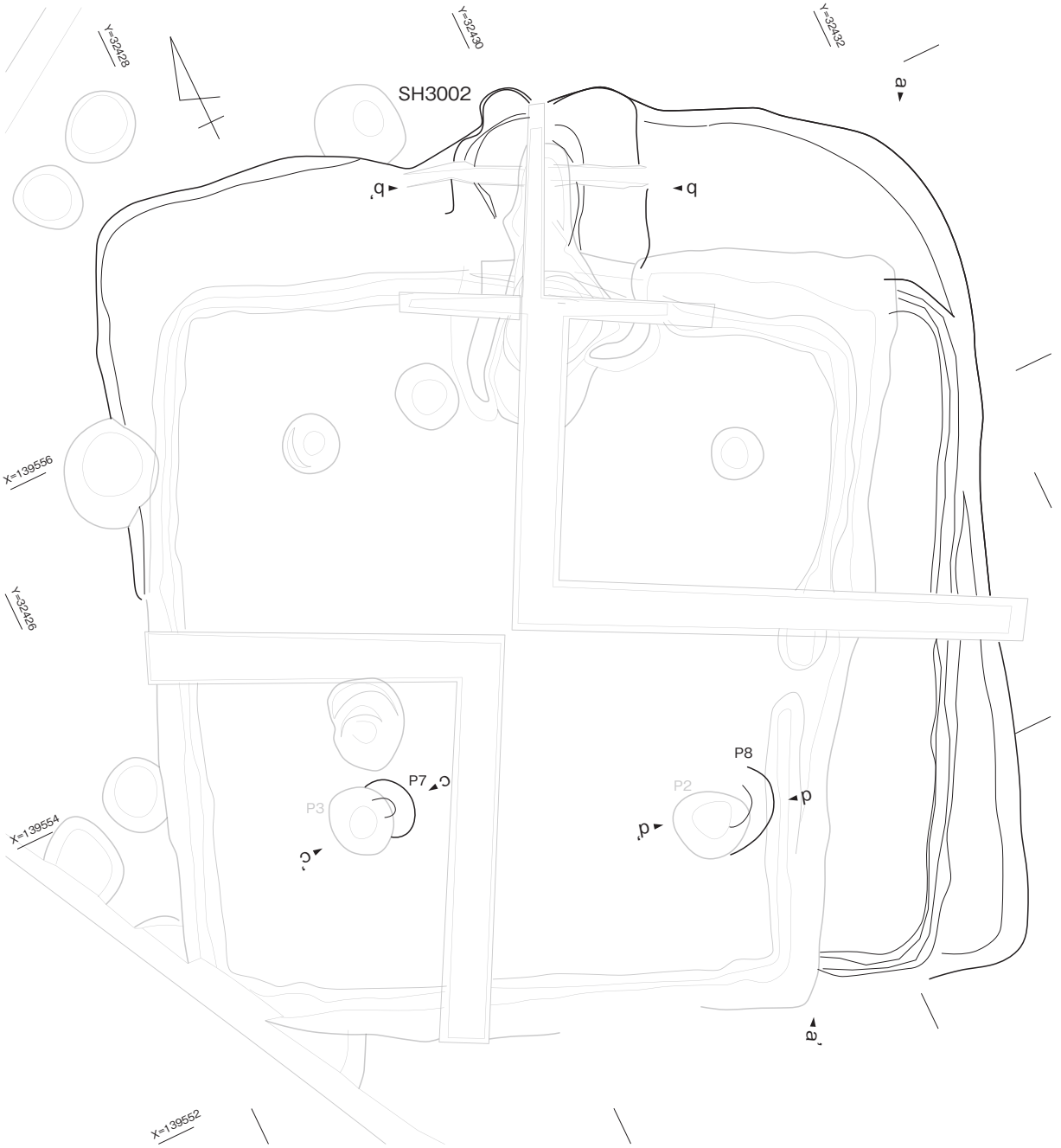
7 区 SH7002（第 47・49 図）

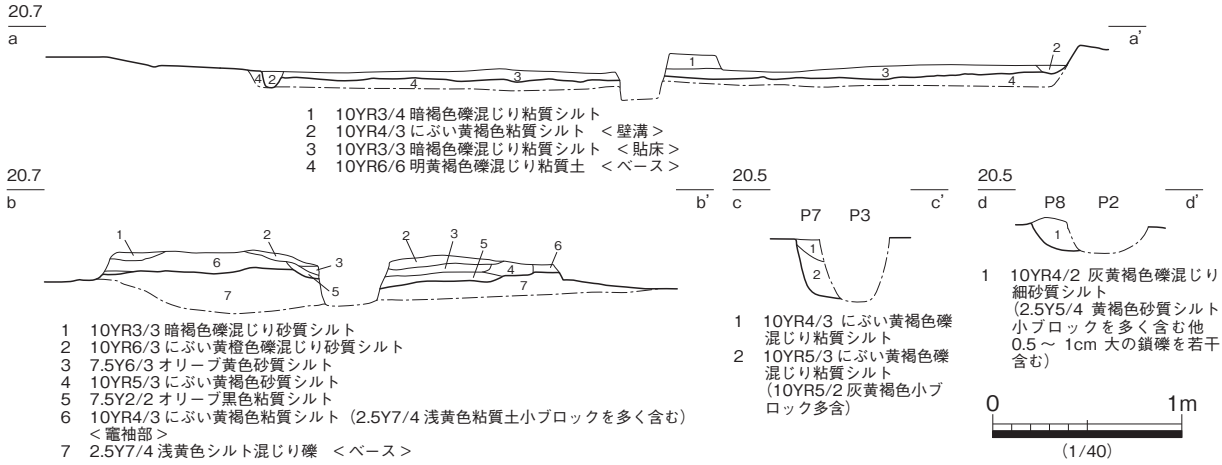
7 区南端付近で検出した。2 面で検出した。西側 1.6ｍには、方位をほぼ揃えて SH7007 がある。SB7009 を構成する柱穴に掘り込まれ、SB7009 より古い。方形で、南北 3.92m、東西 4.12ｍを測る。検出面は貼床面で、貼床層は厚さ 10㎝程度が残る。主軸方位は N40.38° W で、面積は 16.64㎡である。

竈は貼床の上面で構築されていた。北辺中央付近に作り付けの竈を備える。建物の外側では被熱範囲をわずかに検出しただけである。建物内の平面形状は方形に近く、幅 1.56m、奥行きは、竪穴建物の外側のラインから住居内までで 1.32ｍを測る。燃焼部は楕円形で、長軸 9.4m、短軸 6.6ｍでわずかに竪穴建物の外側まで及んだ状態で検出した。建物内部で検出した竈袖部の裾の幅は 40 ～ 50㎝である。竈の構築土は屋内では途切れずに巡っており、焚口部分にも竈の構築土が５㎝程度残されていた。焚口部分下部にも竈の構築土を施し、土手状にしたことがわかる。竈内床面からは土師器甕が出土した。

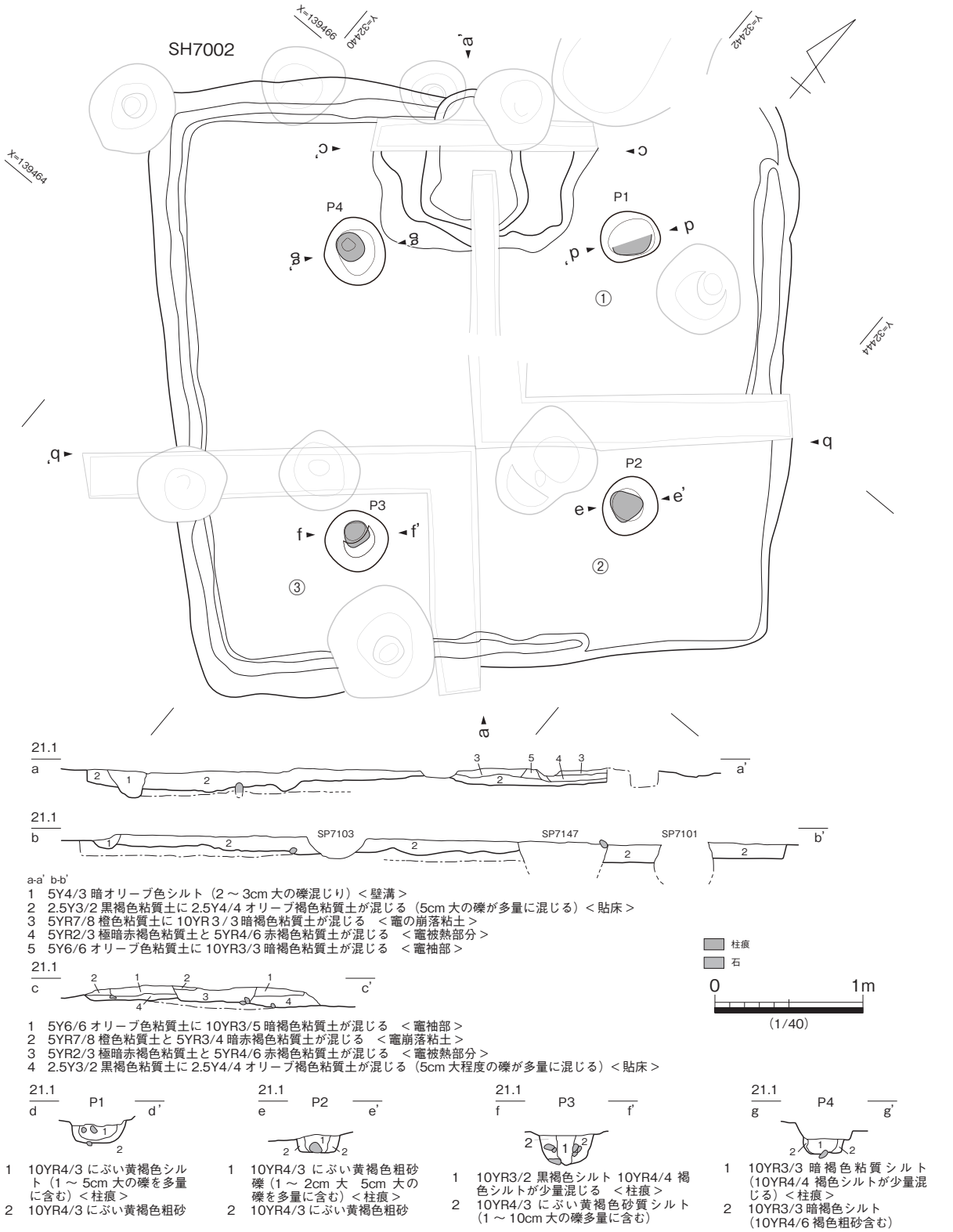
主柱穴は正方形に 4 穴を配する。柱穴間の距離は南北 1.83 ～ 1.98m、東西 1.84 ～ 1.95m、柱穴は円形で、概ね直径 42㎝、深さ 20㎝、柱痕跡の直径は 20㎝を測る。

壁溝は貼床の上面で検出した。南東隅付近、および後世の掘削により消失したと考えられる北東部分では検出されなかったが、他では、建物の外側ラインに沿って検出し、幅 24㎝、深さ 18㎝を測る。





第 46 図　SH3002 平・断面図（1/40）



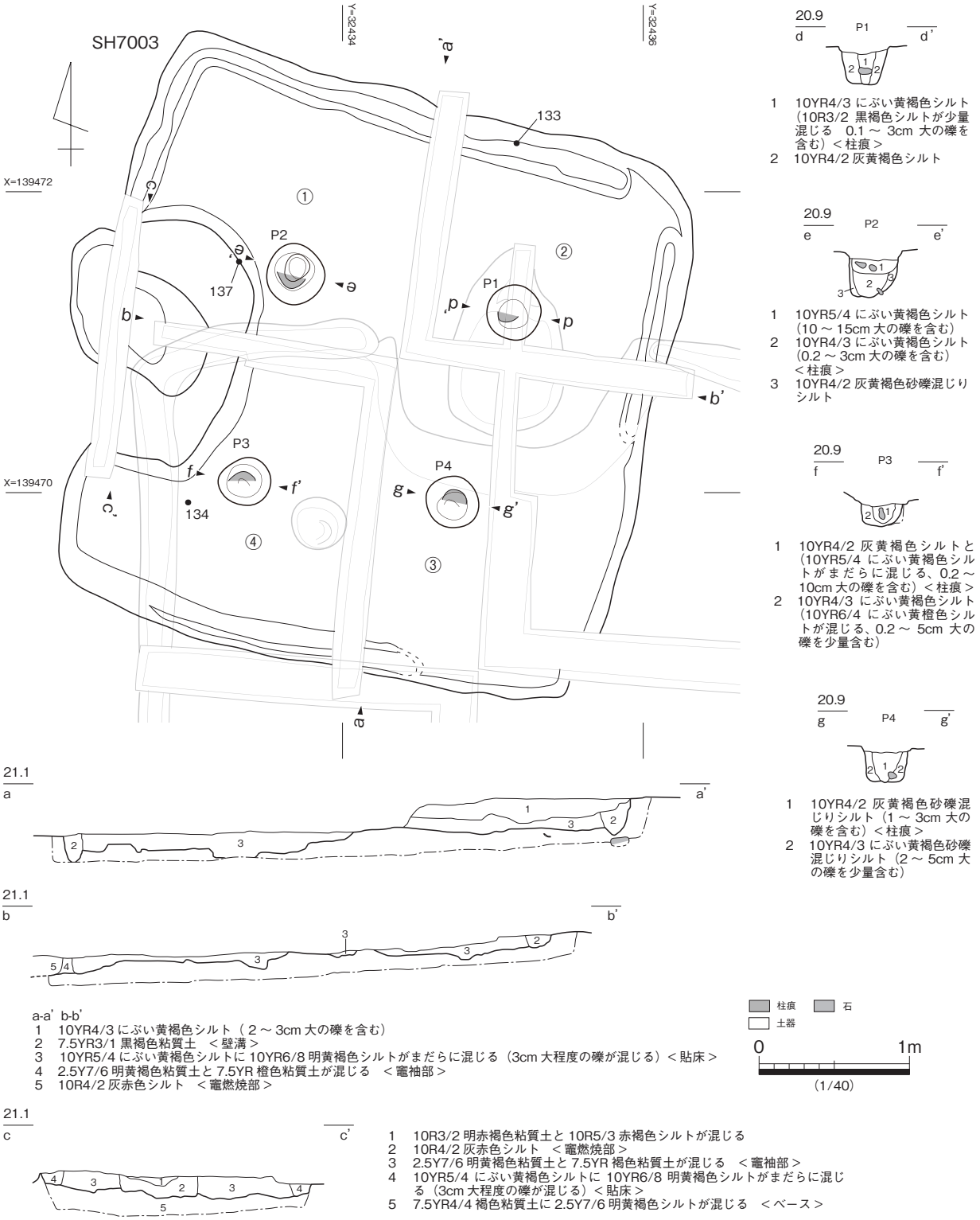
第 47 図　SH7002 平・断面図（1/40）

127・128 は竈内から出土した。土師器甕。竈内で使用されたものと考えられる。129 は貼床から出土した。須恵器提瓶の口縁部。頸部にカキ目が施される。130 は埋土中から出土した。土師器甕小片。

遺構の時期は、出土遺物から 6 世紀後半頃と考えられる。

7 区 SH7003（第 48・49 図）

7 区中央付近で検出した。2 面で検出した。SH7008 と重複し、SH7008 の a-a'・b-b' 断面により、SH7008 より古い。方形で、東西 3.70 m、南北 3.80 m、主軸方位は W13.38° N（N76.62° W）、面積は 13.79㎡である。深さは地表面から貼床上面までは約 16㎝、貼床の厚さは 6㎝～ 10㎝程度を測る。



1 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（10R3/2 黒褐色シルトが少量混じる 0.1 ～ 3cm 大の礫を含む）＜柱痕＞
2 10YR4/2 灰黄褐色シルト

1 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト（10 ～ 15cm 大の礫を含む）
2 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（0.2 ～ 3cm 大の礫を含む）＜柱痕＞
3 10YR4/2 灰黄褐色砂礫混じりシルト

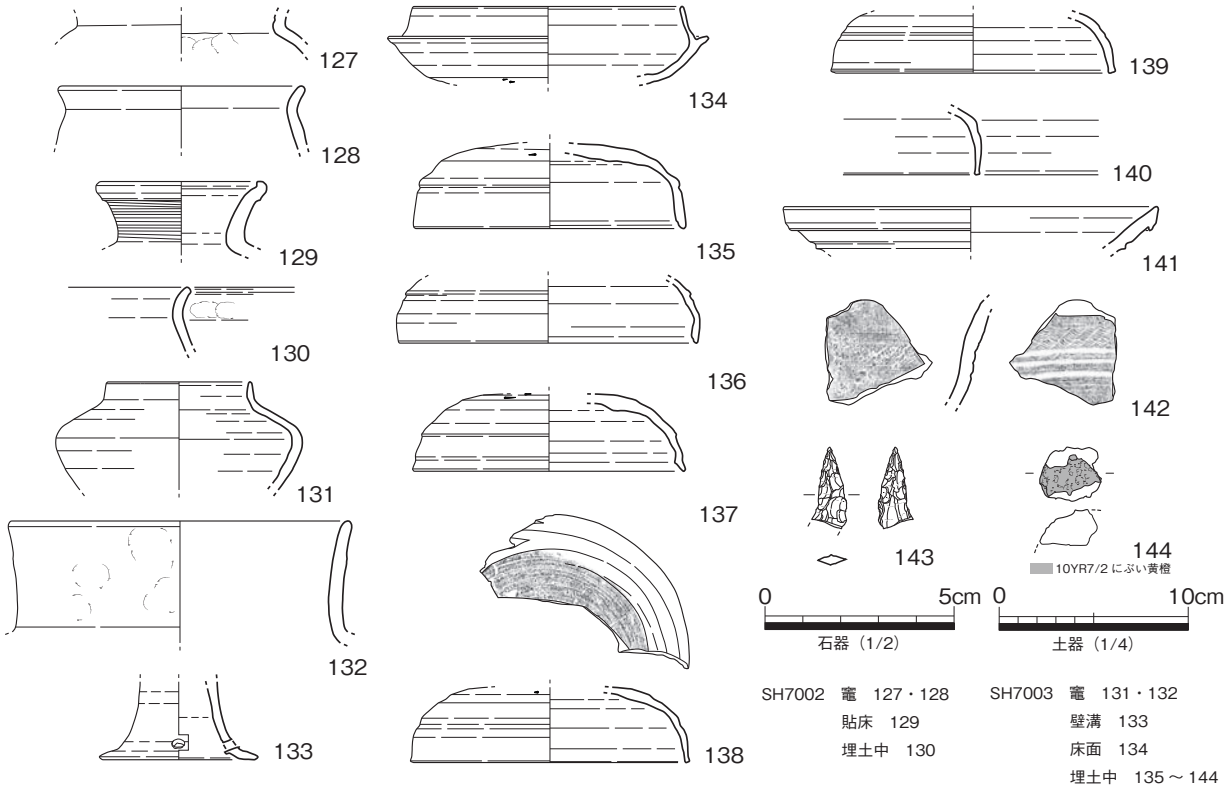
1 10YR4/2 灰黄褐色シルトと（10YR5/4 にぶい黄褐色シルトがまだらに混じる、0.2 ～ 10cm 大の礫を含む）＜柱痕＞
2 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（10YR6/4 にぶい黄橙色シルトが混じる、0.2 ～ 5cm 大の礫を少量含む）

1 10YR4/2 灰黄褐色砂礫混じりシルト（1 ～ 3cm 大の礫を含む）＜柱痕＞
2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂礫混じりシルト（2 ～ 5cm 大の礫を少量含む）

a-a' b-b'
1 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（ 2 ～ 3cm 大の礫を含む）
2 7.5YR3/1 黒褐色粘質土 ＜壁溝＞
3 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトに 10YR6/8 明黄褐色シルトがまだらに混じる（3cm 大程度の礫が混じる）＜貼床＞
4 2.5Y7/6 明黄褐色粘質土と 7.5YR 橙色粘質土が混じる ＜竈袖部＞
5 10R4/2 灰赤色シルト ＜竈燃焼部＞

1 10R3/2 明赤褐色粘質土と 10R5/3 赤褐色シルトが混じる
2 10R4/2 灰赤色シルト ＜竈燃焼部＞
3 2.5Y7/6 明黄褐色粘質土と 7.5YR 褐色粘質土が混じる ＜竈袖部＞
4 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトに 10YR6/8 明黄褐色シルトがまだらに混じる（3cm 大程度の礫が混じる）＜貼床＞
5 7.5YR4/4 褐色粘質土に 2.5Y7/6 明黄褐色シルトが混じる ＜ベース＞

第 48 図　SH7003 平・断面図（1/40）



第 49 図　SH7002・SH7003 出土遺物（1/4・1/2）

竈は西辺で検出した。b-b'・c-c' 断面によれば、竈は貼床を施す前に構築されている。竈の平面形は、住居内では方形に近い形状で、幅 1.24m、竪穴建物の外側ラインまでの距離 0.84m である。燃焼部は楕円形で長軸 1.00m、短軸 0.62m の範囲で検出した。竈袖部の裾幅は概ね 60 ～ 70cm程度である。SH7002 と同様、屋内では竈の袖は隅丸方形に巡り、焚口下部は竈構築土を土手状に施し、床面との境が明瞭になっている。

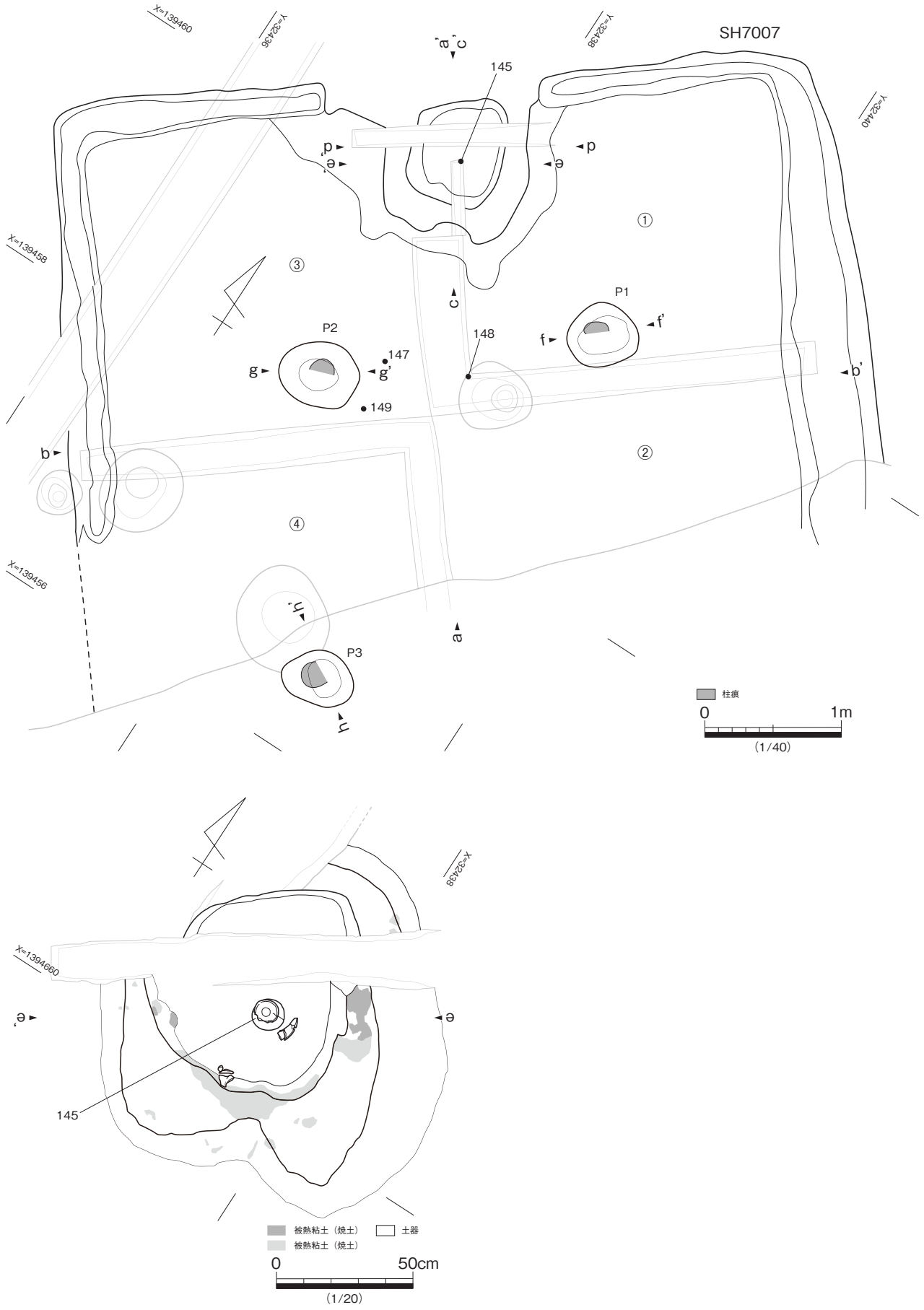
主柱穴は方形に 4 穴を検出した。柱穴間の距離は南北 1.33 ～ 1.44m、東西 1.31 ～ 1.47m、柱穴は円形で直径 32 ～ 40cm、深さ 15 ～ 30cm、柱痕跡の直径は 16 ～ 20cmである。

壁溝は南辺、西辺南半部、東辺南半部及び北東隅で検出しておらず、その他の場所では竪穴建物のラインに沿って検出した。断面観察により、貼床後に壁溝を掘削したことがわかる。幅 22cm、深さ 20cm 程度を測る。

埋土中からは須恵器、土師器、サヌカイト製石器、鉄滓、ふいご羽口などが出土した。

131・132 は竈内から出土した。131 須恵器壺。SH7008 との接合遺物である。6 世紀末（Ⅱ -4 期）頃。132 は土師器甕口縁部。立ち上がり部分が長く直立する。133 は壁溝から出土した遺物である。須恵器高杯脚部か。脚端部付近に穿孔が 2 ヶ所残る。残存個所により 3 ヶ所に穿孔があったと考えられる。134 は床面から出土した。須恵器杯身。6 世紀後半（Ⅱ -3 期）頃。135 ～ 144 は埋土中から出土した。135 ～ 139 は杯蓋。135・136 は SH7008 との接合遺物である。135・137 は肩部、口縁端部に段を有する。138 は頂部外面にカキ目を残す。6 世紀後半（Ⅱ -3 期）頃。141・142 は器種不明。142 は外面に櫛描き波状文を施す。143 はサヌカイト製石鏃の破損品か。144 はふいご羽口。鉄滓も出土しており、周辺で鍛冶に関わる行為が行われたと考えられる。

遺構の時期は、出土遺物から 6 世紀後半～末頃と考えられる。



第 50 図　SH7007 平面図（1/40）、竈遺物出土状況（1/20）

７区 SH7007（第 50 ～ 52 図）

７区南端付近で検出した。２面で検出した。東側約 1.6ｍの位置にはほぼ主軸方位を揃えて SH7002 がある。南東側 1/4 程度は SR7001 により消失する。方形で、北西―南東方向は 3.68ｍ以上、北東―南西方向は 5.90ｍ、主軸方位は N39.43° W、面積は 21.48㎡以上である。遺構面から 16㎝程度の深さで貼床面を検出した。貼床は竪穴建物の周縁部に 4㎝程度残るのみで、中央付近には残らない。

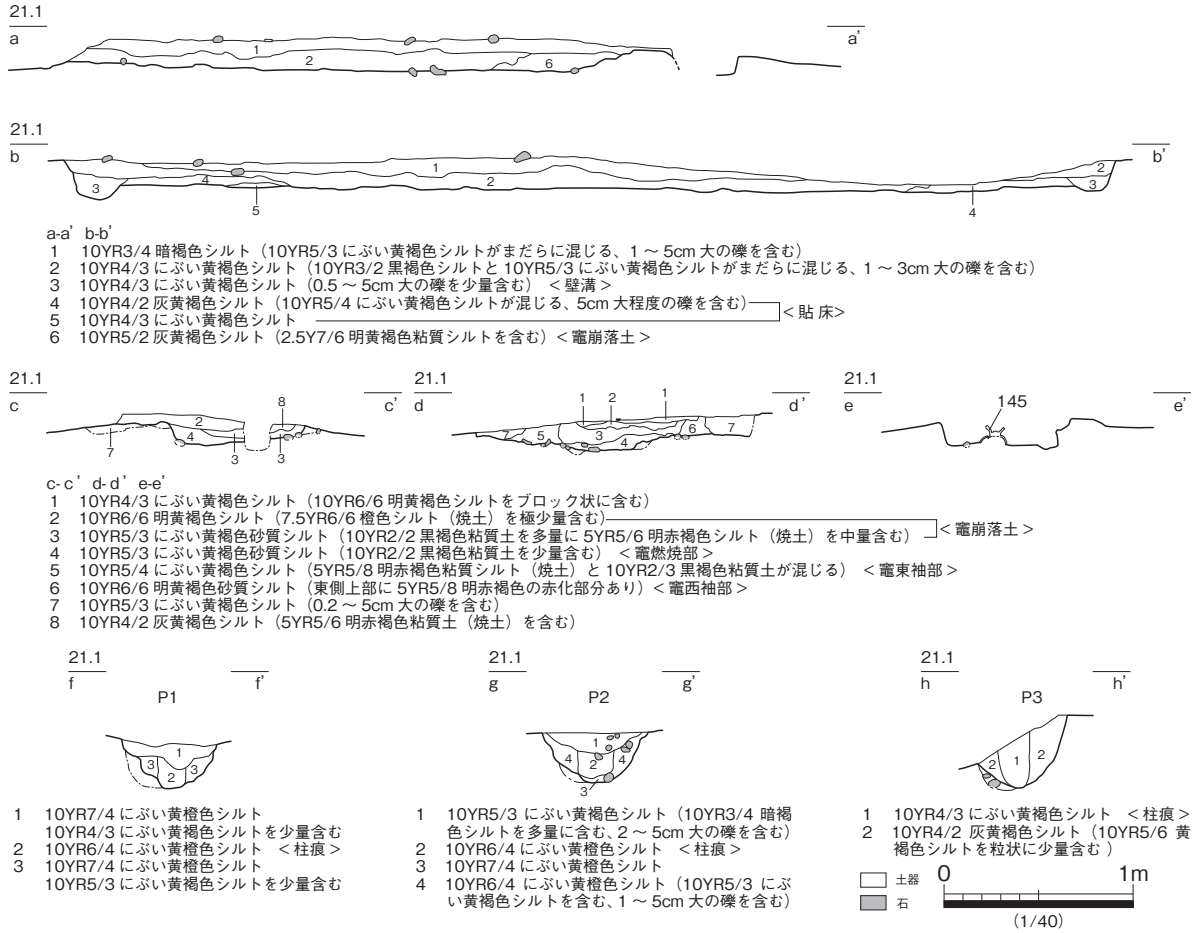
竈は北西に設置する。焚口付近では竈の袖部分が崩落しているが、竈の形状は概ね楕円形～隅丸方形を呈し、幅 1.5ｍ程度、建物内での奥行き 1.25ｍ程度、燃焼部は楕円形を呈し、長軸 0.8ｍ、短軸 0.7ｍ、竈の袖の幅は概ね 40 ～ 50㎝程度である。竈の構築土は焚口部分にも及んでおり、焚口部分下部に土手状に竈構築土を設け、燃焼部と床面の間が仕切られる。竈内部中央付近では須恵器高杯が逆向きに設置されていた。被熱して赤く変色しており、竈内で支脚として使用したと考えられる。

主柱穴は３穴検出した。配置から方形に４穴並ぶと考えられるが、南東部の１穴は SR7001 により消失したと考えられる。柱穴間の距離は南西 - 北東方向が 2.07ｍ、南東 - 北西方向が 2.25ｍ、柱穴は概ね円形で、直径 45 ～ 50㎝、深さ 26㎝程度、柱痕跡の直径は 18㎝程度である。

壁溝は検出範囲内では建物の外側ラインに沿って検出した。貼床の上面から掘削されることが断面観察からわかる。幅 20 ～ 60㎝程度、深さ 12㎝程度を測る。

埋土中からは須恵器、土師器、製塩土器、鉄滓、ふいご羽口が出土した。

SB7011 との前後関係については、SH7007 掘り下げ後に SB7011 柱穴が検出されていることから、SH7007 が新しい可能性が考えられよう。



a-a' b-b'
1　10YR3/4 暗褐色シルト（10YR5/3 にぶい黄褐色シルトがまだらに混じる、1 ～ 5cm 大の礫を含む）
2　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（10YR3/2 黒褐色シルトと 10YR5/3 にぶい黄褐色シルトがまだらに混じる、1 ～ 3cm 大の礫を含む）
3　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（0.5 ～ 5cm 大の礫を少量含む）＜壁溝＞
4　10YR4/2 灰黄褐色シルト（10YR5/4 にぶい黄褐色シルトが混じる、5cm 大程度の礫を含む）
5　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　＜貼床＞
6　10YR5/2 灰黄褐色シルト（2.5Y7/6 明黄褐色粘質シルトを含む）＜竈崩落土＞

c-c' d-d' e-e'
1　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（10YR6/6 明黄褐色シルトをブロック状に含む）
2　10YR6/6 明黄褐色シルト（7.5YR6/6 橙色シルト（焼土）を極少量含む）
3　10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト（10YR2/2 黒褐色粘質土を多量に 5YR5/6 明赤褐色シルト（焼土）を中量含む）＜竈崩落土＞
4　10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト（10YR2/2 黒褐色粘質土を少量含む）＜竈燃焼部＞
5　10YR5/4 にぶい黄褐色シルト（5YR5/8 明赤褐色粘質シルト（焼土）と 10YR2/3 黒褐色粘質土が混じる）＜竈東袖部＞
6　10YR6/6 明黄褐色砂質シルト（東側上部に 5YR5/8 明赤褐色の赤化部分あり）＜竈西袖部＞
7　10YR5/3 にぶい黄褐色シルト（0.2 ～ 5cm 大の礫を含む）
8　10YR4/2 灰黄褐色シルト（5YR5/6 明赤褐色粘質土（焼土）を含む）

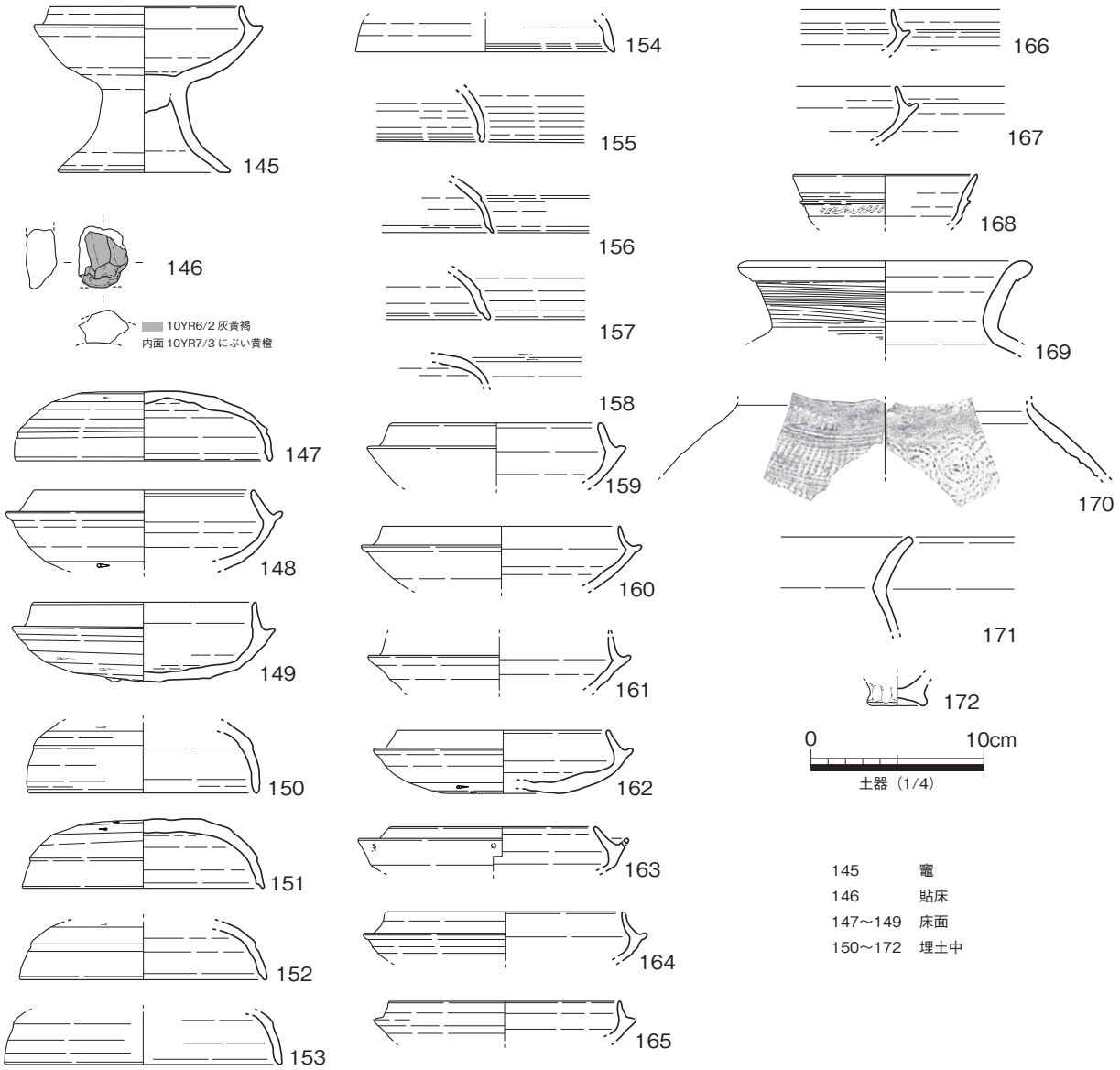
1　10YR7/4 にぶい黄橙色シルト
　10YR4/3 にぶい黄褐色シルトを少量含む
2　10YR6/4 にぶい黄橙色シルト　＜柱痕＞
3　10YR7/4 にぶい黄橙色シルト
　10YR5/3 にぶい黄褐色シルトを少量含む

1　10YR5/3 にぶい黄褐色シルト（10YR3/4 暗褐色シルトを多量に含む、2 ～ 5cm 大の礫を含む）
2　10YR6/4 にぶい黄橙色シルト　＜柱痕＞
3　10YR7/4 にぶい黄橙色シルト
4　10YR6/4 にぶい黄橙色シルト（10YR5/3 にぶい黄褐色シルトを含む、1 ～ 5cm 大の礫を含む）

1　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　＜柱痕＞
2　10YR4/2 灰黄褐色シルト（10YR5/6 黄褐色シルトを粒状に少量含む）

土器　石　0　1m　(1/40)

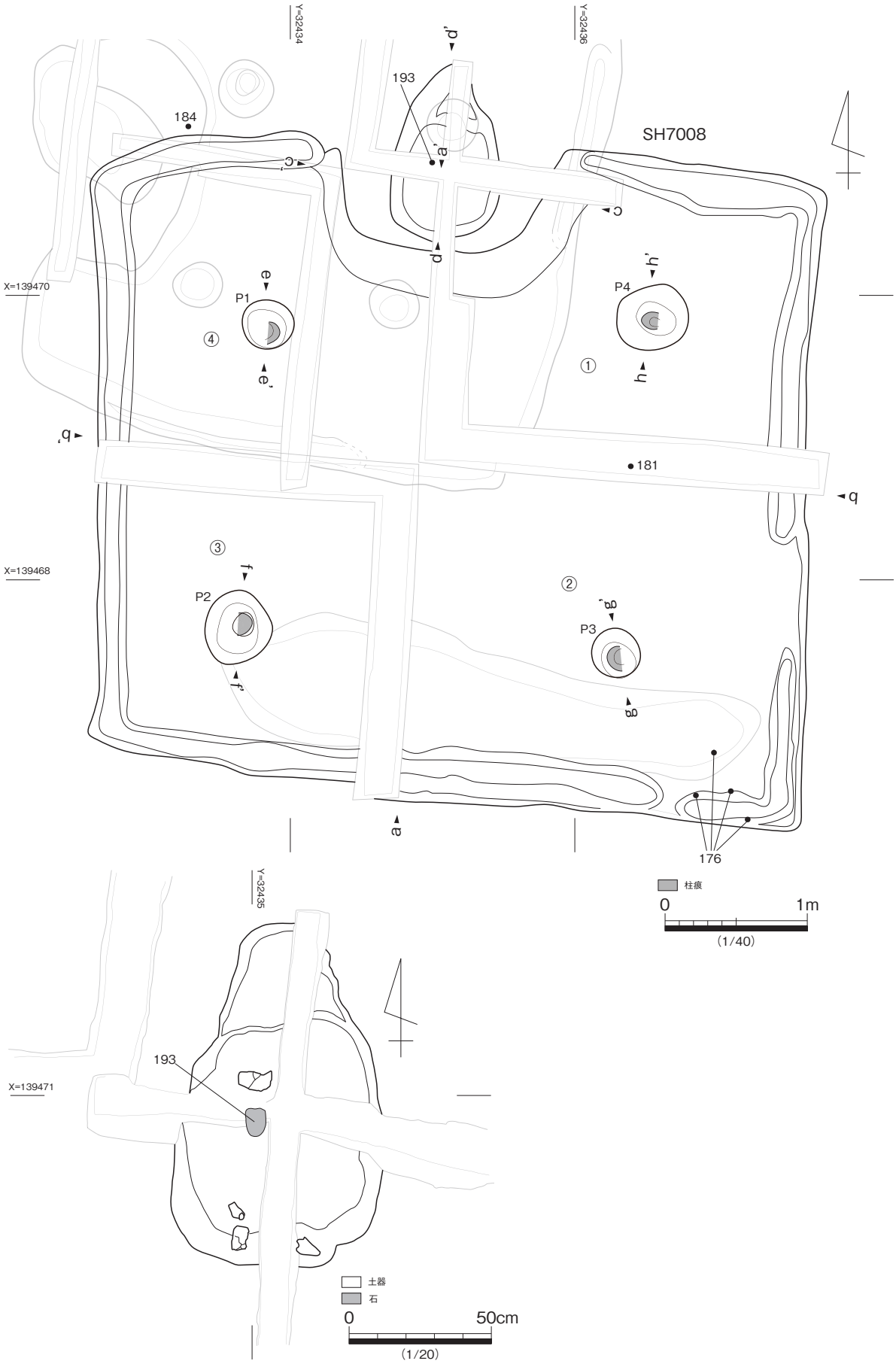
第 51 図　SH7007 断面図（1/40）



第 52 図　SH7007 出土遺物（1/4）

145 は竈から出土した。須恵器高杯。全体にやや厚手。赤く変色しており、2 次被熱によると考えられる。竈燃焼部内に逆向きに設置されて出土しており、支脚代わりに使用したと考えられる。7 世紀初頭（Ⅱ -5 期）。146 は貼床から出土した。ふいご羽口。147 ～ 149 は床面から出土した須恵器。147 は杯蓋。肩部と口縁端部に段を持つ。148・149 は杯身。6 世紀後半（Ⅱ -3 期）頃。150 ～ 172 は埋土中から出土した。150 ～ 170 は須恵器。150 ～ 158 は杯蓋。151 ～ 153・156 は肩部には緩い段を持つ。159 ～ 167 は杯身。163 は受部の 1 個所に穿孔が施される。6 世紀末（Ⅱ -4 期）頃。168 は薄手の口縁部で、中位に凸線、その下部は波状文に似せた斜め方向の刺突文を施す。廻口縁部。169・170 は甕。169 は頸部にカキ目を施す。6 世紀末～ 7 世紀初頭（Ⅱ -4 ～ 5 期）頃。171 は土師器甕。172 は製塩土器脚部。弥生時代後期～古墳時代初頭のもので、混入と考えられる。

遺構の時期は、出土遺物から 6 世紀末～ 7 世紀初頭頃と考えられる。



第 53 図　SH7008 平面図（1/40）、竈遺物出土状況（1/20）

7 区 SH7008（第 53 ～ 56 図）

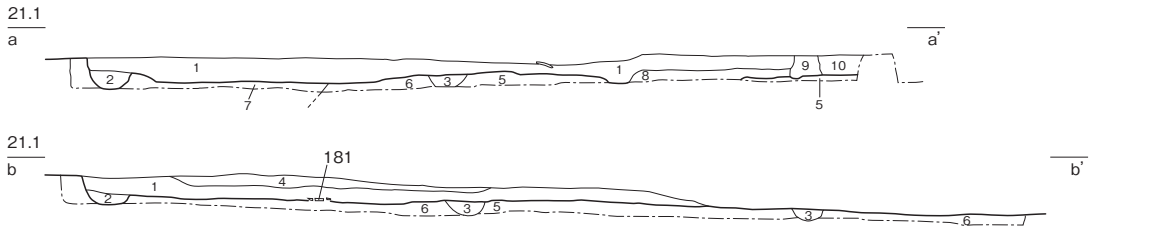
7 区中央付近で検出した。2 面で検出した。SH7003 と重複し、a-a'・b-b' 断面図から SH7003 より新しいことがわかる。方形で、南北 4.60m、東西 4.80m、主軸方位は N2.34° E、面積は 22.85㎡である。遺構面から床面までの深さは 12cm程度、貼床は北側付近で一部認められただけであった。

竈は北辺に備える。建物内では隅丸方形状に竈の構築土が検出された。竈の幅は 1.9m、建物内では奥行き 1.0mである。竈内の燃焼部は北辺がやや細い楕円形で、北半部は建物外で検出した。長軸 1.24m、短軸 0.84mを測る。竈袖部の裾幅は、50 ～ 58cm程度である。竈の構築土は焚口部分にも巡っており、焚口にも竈構築土を施し、土手状になっていたようである。竈内からは著しく被熱した支柱石と考えられる石が出土した。

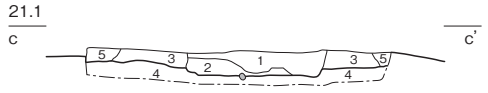
主柱穴は方形に配置する 4 穴を確認した。柱穴間の距離は南北 2.11 ～ 2.34m、東西 2.64 ～ 2.76m、柱穴は概ね円形で、直径 36 ～ 50cm、深さ 10 ～ 22cm、柱痕跡の直径は 16cm程度を測る。

壁溝は南・東部の一部を除き、建物の外側のラインに沿って検出した。幅 20 ～ 30cm、深さ 10cm程度を測る。南東隅付近では、須恵器提瓶が出土した。

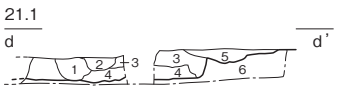
173 は竈から出土した。土師器甕。竈で使用されたものであろう。174 は床面の下部で検出した落ち込みから、175 は貼床から出土した。須恵器杯身。176 は 5 片以上が接合したもので、おもに壁溝から出土した。須恵器提瓶。片面は大きく破損する。6 世紀中（Ⅱ -2 ～ 3 期）頃。177 ～ 192 は埋土中から出土した。177 ～ 189 は須恵器。177 ～ 179 は杯蓋。肩部、口縁端部内面に緩い段を持つ。180 は摘み付蓋。



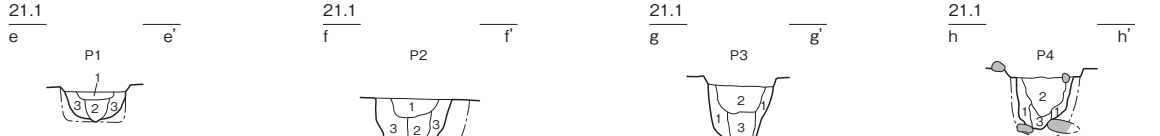
a-a' b-b'
1 10YR4/4 褐色シルト（3 ～ 8cm 大程度の礫を多量に含む）
2 10YR3/3 暗褐色シルト ＜壁溝＞
3 7.5YR4/4 褐色シルト <SH7003 壁溝＞
4 7.5YR4/6 褐色シルト
5 10YR3/2 黒褐色シルト（3 ～ 5cm 大程度の礫をまばらに含む ）<SH7003>
6 7.5YR4/6 褐色シルト（3cm 大程度の礫をまばらに含む）＜ベース＞
7 10YR3/3 暗褐色シルト ＜壁溝に先行する掘込＞
8 7.5YR7/8 黄橙色粘質土 ＜崩落粘土、または貼床＞
9 10YR6/6 明黄褐色粘質土 ＜竈袖部＞
10 10R3/6 明赤色粘質土 ＜竈燃焼部＞



1 10YR4/4 褐色シルトに崩落粘土（5 層）がブロック状に混じる
2 10R3/6 暗赤色粘質土 ＜竈燃焼部＞
3 10YR6/6 明黄褐色粘質土 ＜竈袖部＞
4 7.5YR3/3 暗褐色シルト <SH7003>
5 10YR6/6 明黄褐色粘質土に 7.5YR3/1 黒褐色シルトがまだらに混じる ＜竈崩落土＞



1 7.5YR4/4 褐色シルト
2 7.5YR6/8 橙色シルト
＜竈内埋土＞
3 10YR5/6 黄褐色シルトに 10YR4/4 褐色シルトがまだら状に混じる
4 10YR3/6 暗赤色粘質土に 7.5YR4/4 褐色シルトが混じる ＜竈燃焼部＞
5 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土 ＜煙道に崩落した粘土＞
6 10YR4/3 にぶい黄褐色シルトに 10YR7/6 明黄褐色粘質土がまだらに混じる 3cm 大程度の礫が混じる <SH7003>



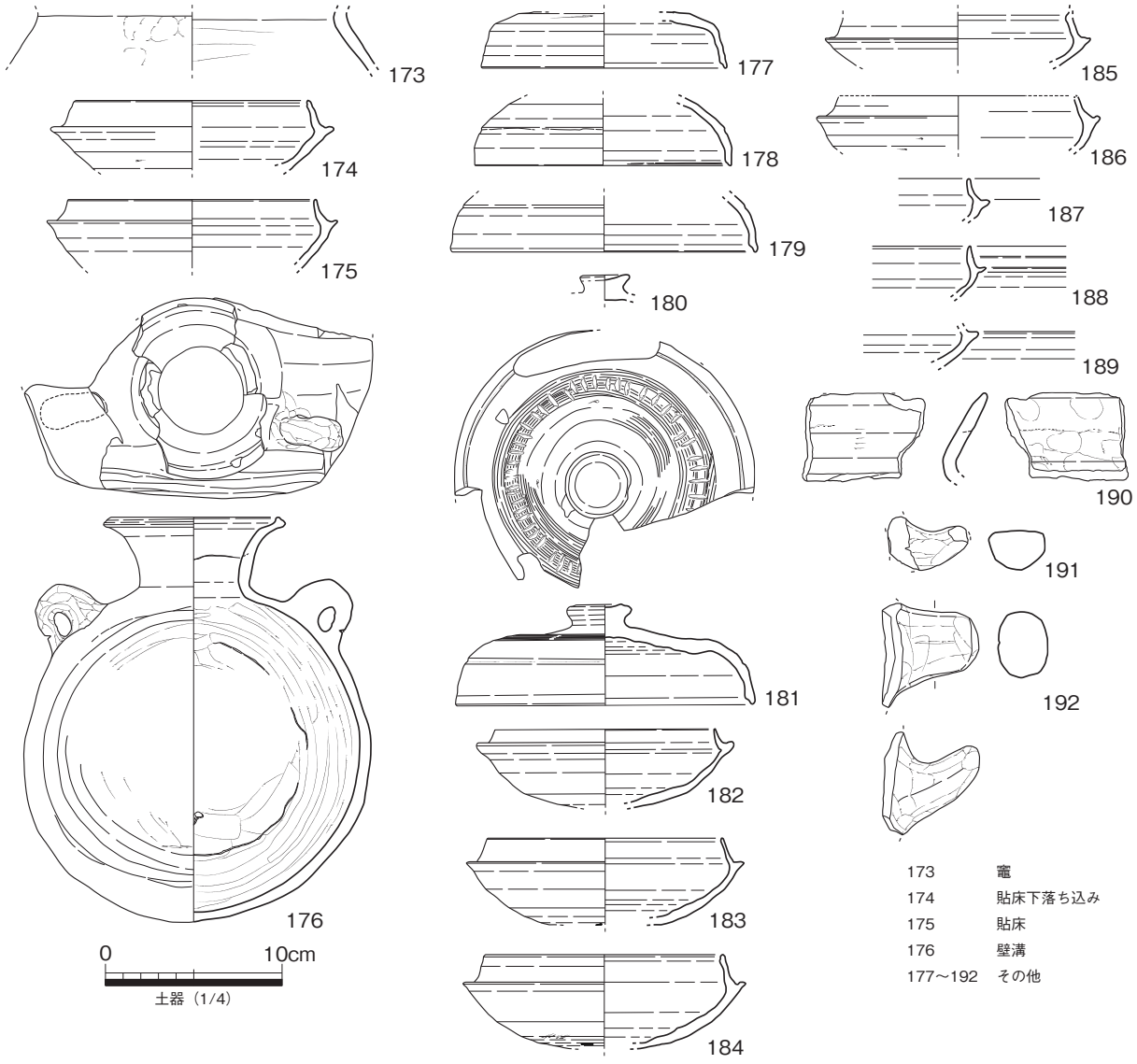
1 7.5YR5/4 にぶい褐色粘質土 ＜抜取痕＞
2 7.5YR6/4 にぶい橙色粘質土（2 ～ 3cm 大程度の礫を含む）＜柱 痕＞
3 7.5YR3/4 暗褐色シルト（3 ～ 5cm 大程度の礫が混じる）

1 7.5YR5/4 にぶい褐色シルト（2 ～ 3cm 大の礫を含む）＜抜取痕＞
2 7.5YR4/4 褐色シルト ＜柱痕＞
3 10YR4/4 褐色シルト（2 と比べると粘り気が若干強い 2cm 大程度の礫をまばらに含む）

1 10YR4/4 褐色シルト（5cm 大程度の礫を含む）
2 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土 ＜抜取痕＞
3 10YR3/4 暗褐色シルト（硬くしまりがある）＜柱痕＞

1 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
2 10YR3/2 黒褐色シルトに 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトがまだらに混じる（1 ～ 3cm 大程度の礫をまばらに含む）＜抜取痕＞
3 7.5YR5/3 にぶい褐色粘質土（掘方、抜き取り痕に比べてしまりが弱い）＜柱 痕＞

第 54 図　SH7008 断面図（1/40）



第 55 図　SH7008 出土遺物 1（1/4）

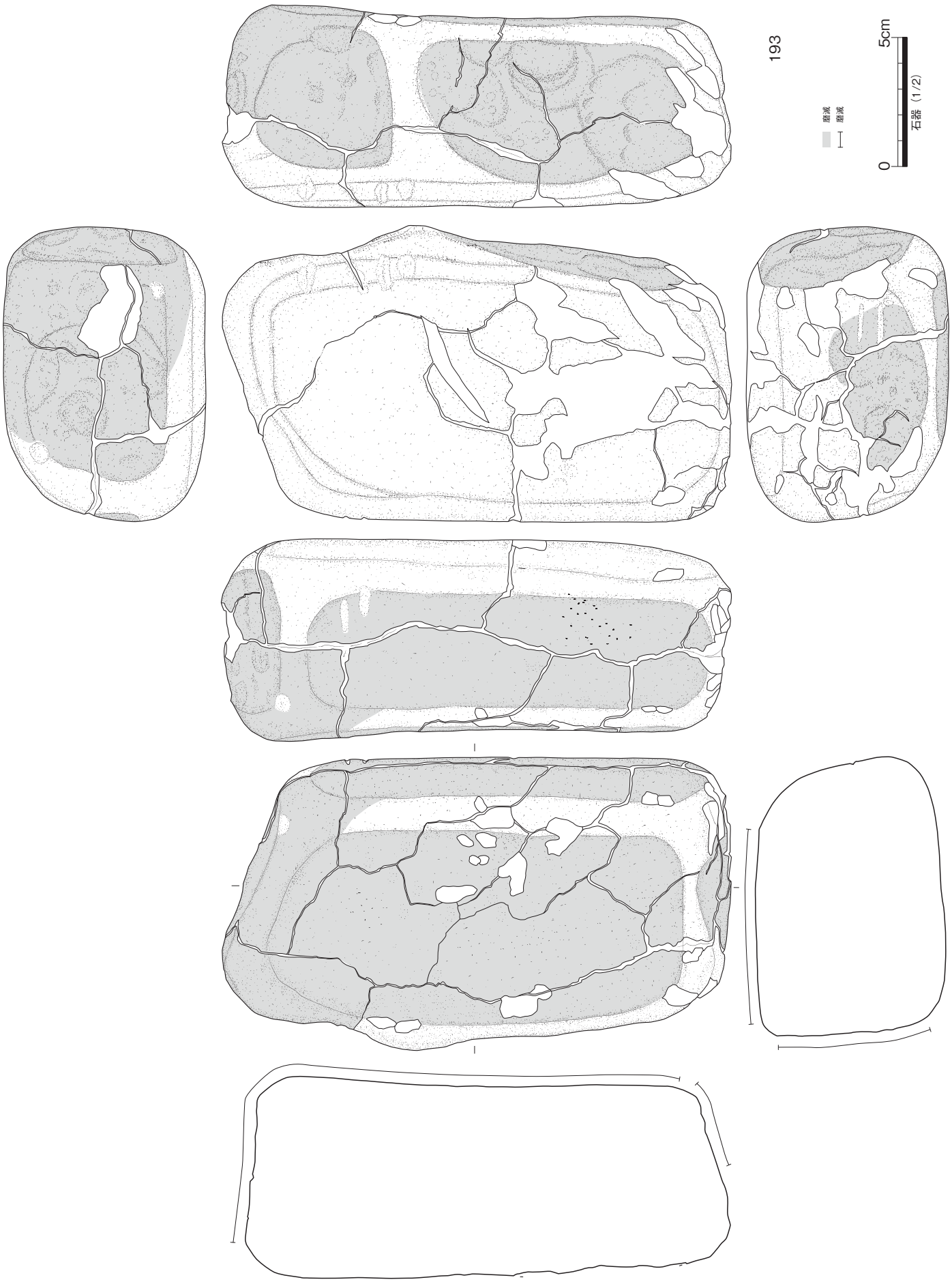
181 と同様の器形となるものか。181 は摘み付きでやや深い器形の蓋。外面には同心円状のカキ目と放射状の刺突痕が施される。有蓋高杯の蓋か。182 ～ 189 は杯身。6 世紀後半～ 7 世紀初頭（Ⅱ -3 ～Ⅱ -5 期）。190 は土師器甕口縁部。191・192 は土師器甕または甑把手。193 は竈内から出土した支柱石。砂岩を使用する、被熱痕、ひび割れが著しい。

遺構の時期は、出土遺物から 6 世紀後半～ 7 世紀初頭頃と考えらえる。

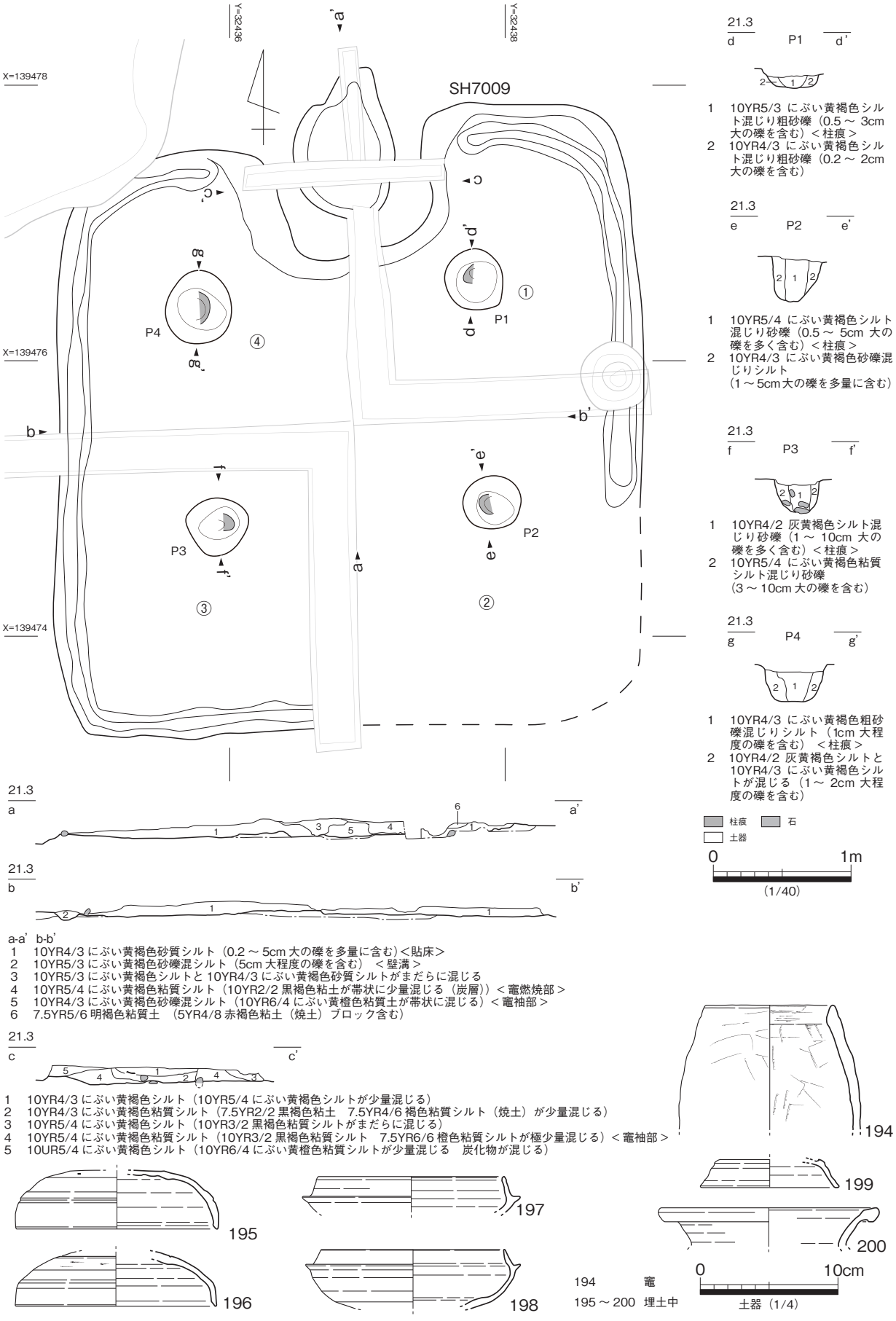
7 区 SH7009（第 57 図）

7 区北部付近で検出した。2 面で検出した。南東隅は削平により消失する。方形と考えられ、南北 3.22 m、東西 3.18m、主軸方位は N1.1° E、面積は 17.90㎡である。検出した竪穴建物の埋土は壁溝に切り込まれることから、検出面は貼床層上面と考えられ、この層は 6cm程度である。

竈は北辺で検出した。建物内では隅丸方形状に竈の構築土が検出された。竈の幅は 1.6m、建物内での奥行きは 1.04m、燃焼部は楕円形を呈し、長軸 1.05m、短軸 0.74mで、一部建物外でも検出した。竈袖部の裾幅は 50cm程度である。竈の構築土は焚口部分にも土手状に巡っており、床面との境が明瞭に



第 56 図　SH7008 出土遺物 2（1/2）



第 57 図　SH7009 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

なっている。

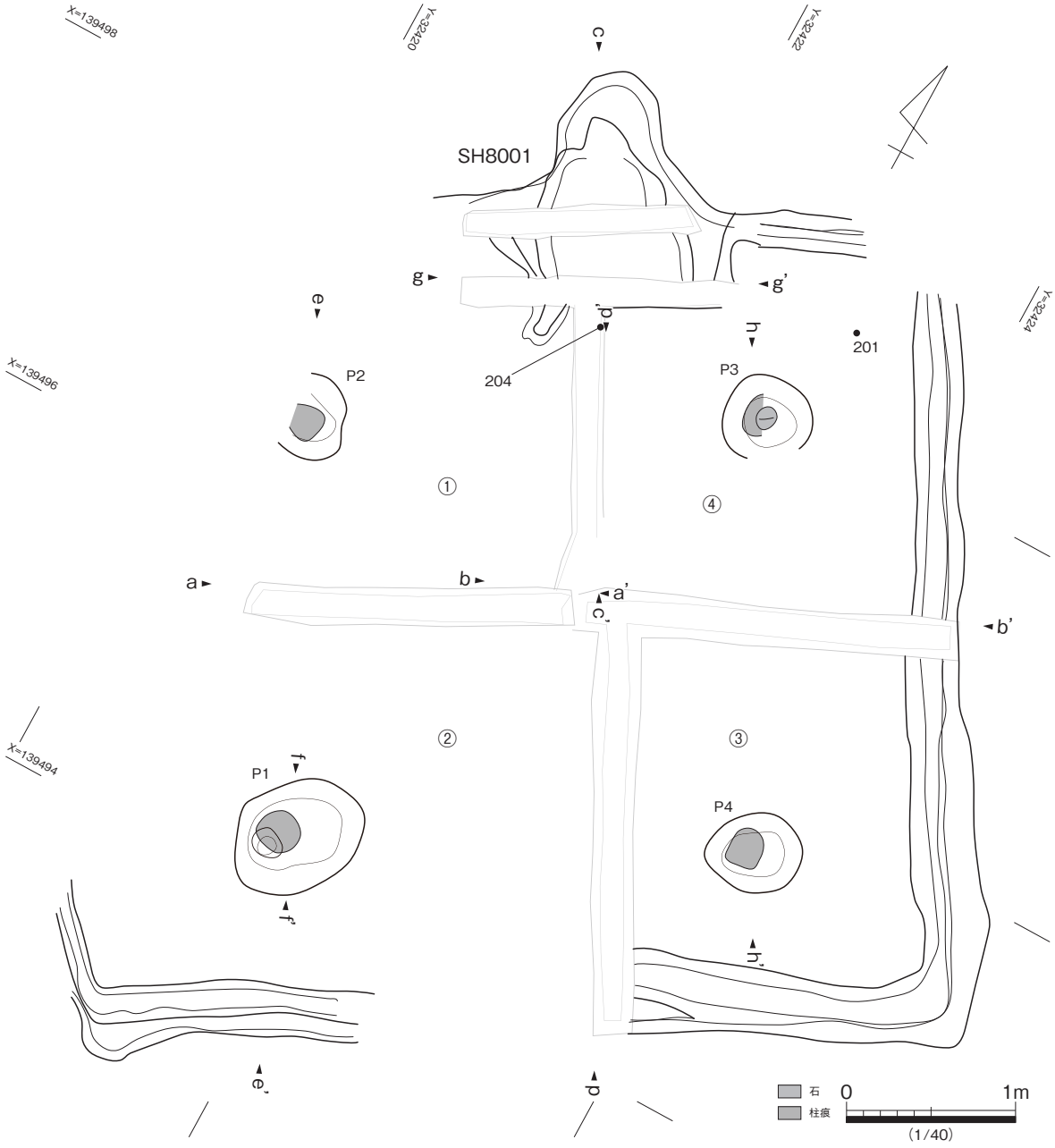
主柱穴は方形に配する 4 穴を検出した。柱穴間の距離は南北 1.59 ～ 1.67m、東西 2.01 ～ 2.05m、柱穴は円形で、直径 42 ～ 46cm、深さは概ね 22 ～ 30cm、柱痕跡の直径は 16cm程度を測る。

壁溝は検出範囲では全面で検出した。西半部は建物の外側のラインに沿って、東半部はやや内側で検出した。幅 14 ～ 22cm、深さ 8cmを測る。b-b’ 断面により貼床の後壁溝を掘り下げる。

194 は竈内から出土した。土師器蛸壺小片。竈内で使用されたものか。195 ～ 200 は埋土中から出土した須恵器。195･196 は杯蓋。肩部に退化した段を持ち、口縁端部にも緩い段を持つ。197･198 は杯身。199 は、口径が小さく、肩部分の稜が強い。蓋として図化した。壺の蓋か。200 は甕口縁部。

概ね 6 世紀後半（Ⅱ -3 期）頃。

遺構の時期は出土遺物により、6 世紀後半頃と考えられる。

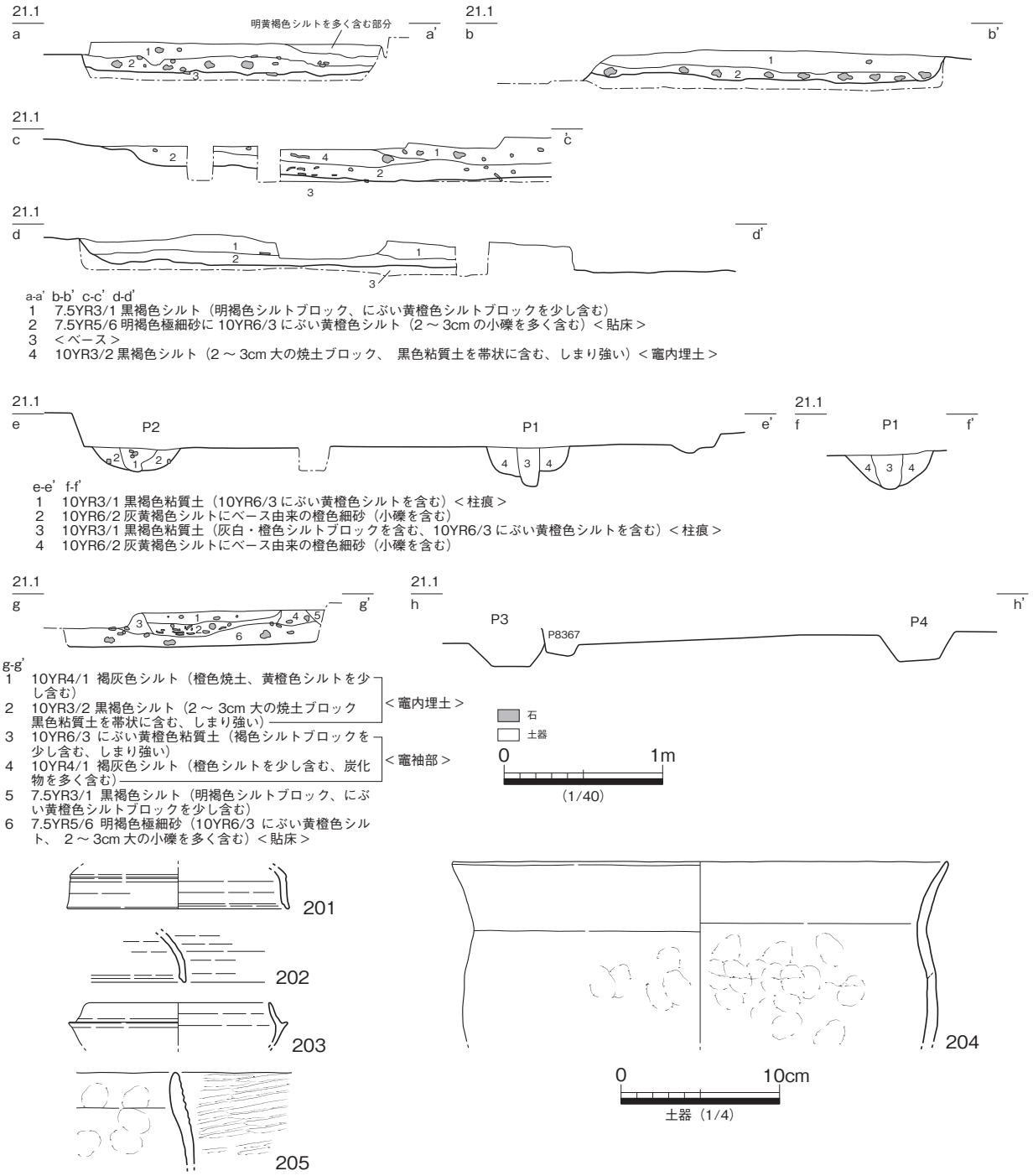


第 58 図　SH8001 平面図（1/40）

８区 SH8001（第 58・59 図）

８区南西部で検出した。２面で検出した。方形と考えられるが、北西部は調査区外へ延びる。南北 5.0m、東西 5.44m以上、主軸方位は N28.85° W、面積は 22.55㎡以上で、残存部分より 26.5㎡程度と考えられる。遺構面から概ね 14㎝程度の深さで貼床面を検出し、貼床層は厚さ４～６㎝程度を測る。

竈は北辺で検出した。建物内の形状は不明確であるが、幅 1.4m 程度、建物内での奥行きは 0.4m 程度、竈の構築土はほとんど残されていなかったが、残存部分では竈袖部の裾幅は 32㎝であった。７区で検出した竪穴建物とは異なり、焚口部分下部には竈構築土は認められない。竈内の燃焼部は楕円形を呈し、長軸 1.0m、短軸 0.9m を測る。

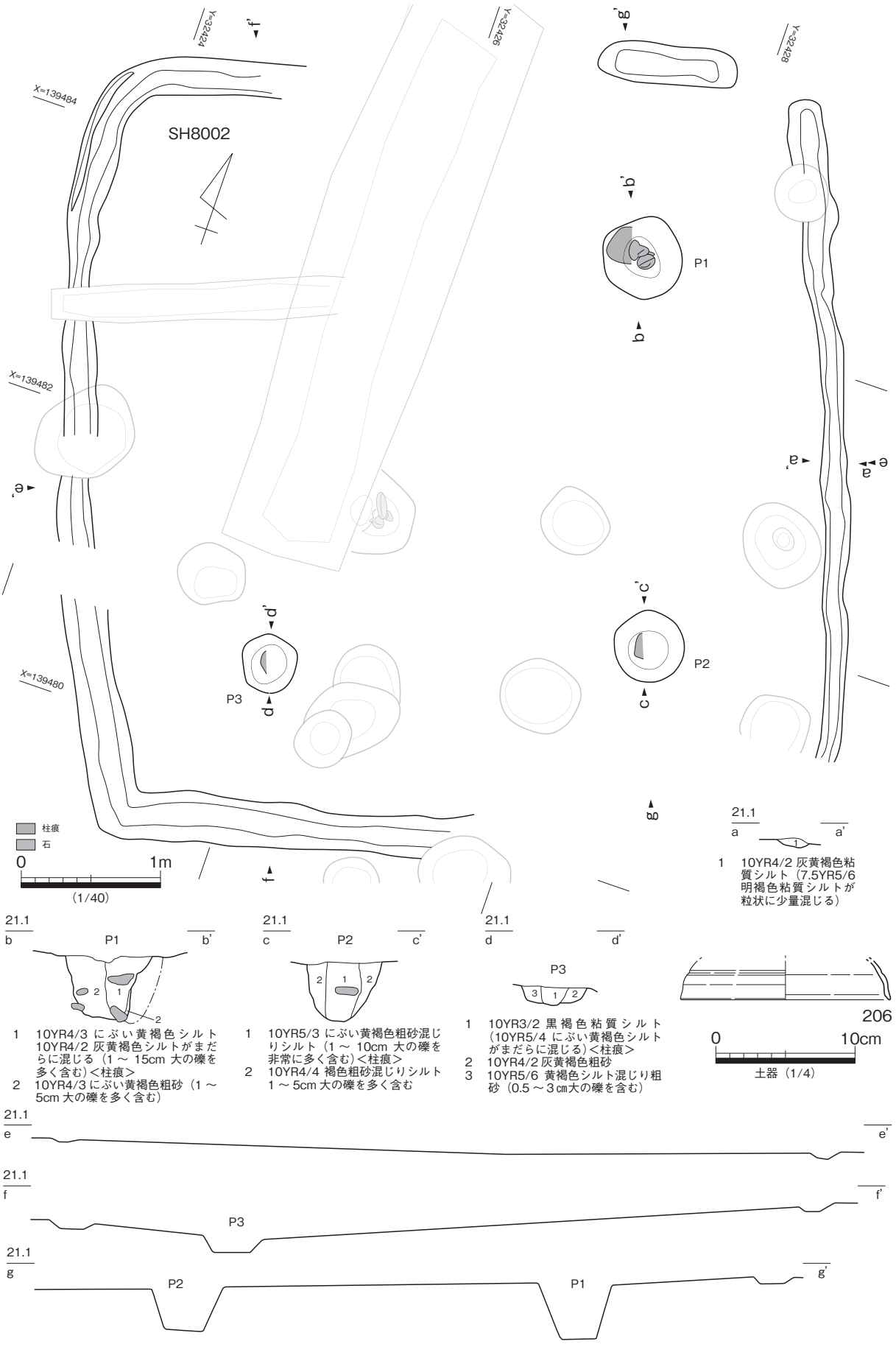


a-a' b-b' c-c' d-d'
1　7.5YR3/1 黒褐色シルト（明褐色シルトブロック、にぶい黄橙色シルトブロックを少し含む）
2　7.5YR5/6 明褐色極細砂に 10YR6/3 にぶい黄橙色シルト（2～3cm の小礫を多く含む）＜貼床＞
3　＜ベース＞
4　10YR3/2 黒褐色シルト（2～3cm 大の焼土ブロック、 黒色粘質土を帯状に含む、しまり強い）＜竈内埋土＞

e-e' f-f'
1　10YR3/1 黒褐色粘質土（10YR6/3 にぶい黄橙色シルトを含む）＜柱痕＞
2　10YR6/2 灰黄褐色シルトにベース由来の橙色細砂（小礫を含む）
3　10YR3/1 黒褐色粘質土（灰白・橙色シルトブロックを含む、10YR6/3 にぶい黄橙色シルトを含む）＜柱痕＞
4　10YR6/2 灰黄褐色シルトにベース由来の橙色細砂（小礫を含む）

g-g'
1　10YR4/1 褐灰色シルト（橙色焼土、黄橙色シルトを少し含む）
2　10YR3/2 黒褐色シルト（2～3cm 大の焼土ブロック黒色粘質土を帯状に含む、しまり強い）　＜竈内埋土＞
3　10YR6/3 にぶい黄橙色粘質土（褐色シルトブロックを少し含む、しまり強い）
4　10YR4/1 褐灰色シルト（橙色シルトを少し含む、炭化物を多く含む）　＜竈袖部＞
5　7.5YR3/1 黒褐色シルト（明褐色シルトブロック、にぶい黄橙色シルトブロックを少し含む）
6　7.5YR5/6 明褐色極細砂（10YR6/3 にぶい黄橙色シルト、 2～3cm 大の小礫を多く含む）＜貼床＞

第 59 図　SH8001 断面図（1/40）、出土遺物（1/4）



第 60 図　SH8002 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

主柱穴は方形に配置する４穴を検出した。柱穴間の距離は、南北 2.45 ～ 2.52m、東西 2.72 ～ 2.80m、柱穴は円形または楕円形で、長軸 58 ～ 84cm、短軸 46 ～ 62cm、深さ 22cm、柱痕跡の直径は 23cm程度である。

壁溝は全体で検出した。南部の西半部で 10cm程度内側で検出した以外は竪穴建物の外周ラインに沿って検出した。幅 20 ～ 30cm、深さ 6cm程度、貼床の上面から掘り込まれる。

埋土中からは須恵器、土師器甕、製塩土器等が出土した。

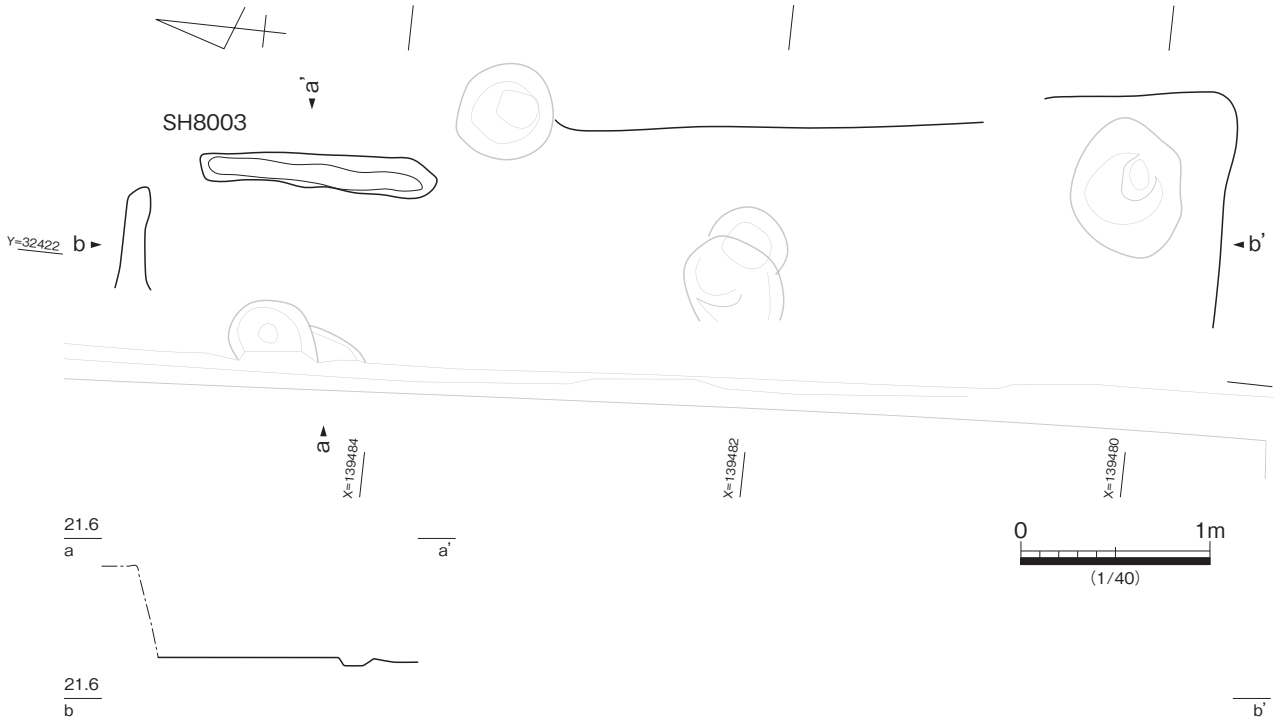
201 ～ 205 は埋土中から出土した。201 ～ 203 は須恵器。201･202 は杯蓋。203 は杯身。201 は肩部に、202・203 は口縁端部には段を持つ。6 世紀後半（Ⅱ -3 期）頃。204 は土師器甕。竈の前面で出土したもので、竈で使用されたと考えられる。205 は製塩土器。外面に平行タタキ痕を残す。

遺構の時期は出土遺物から 6 世紀後半頃と考えられる。

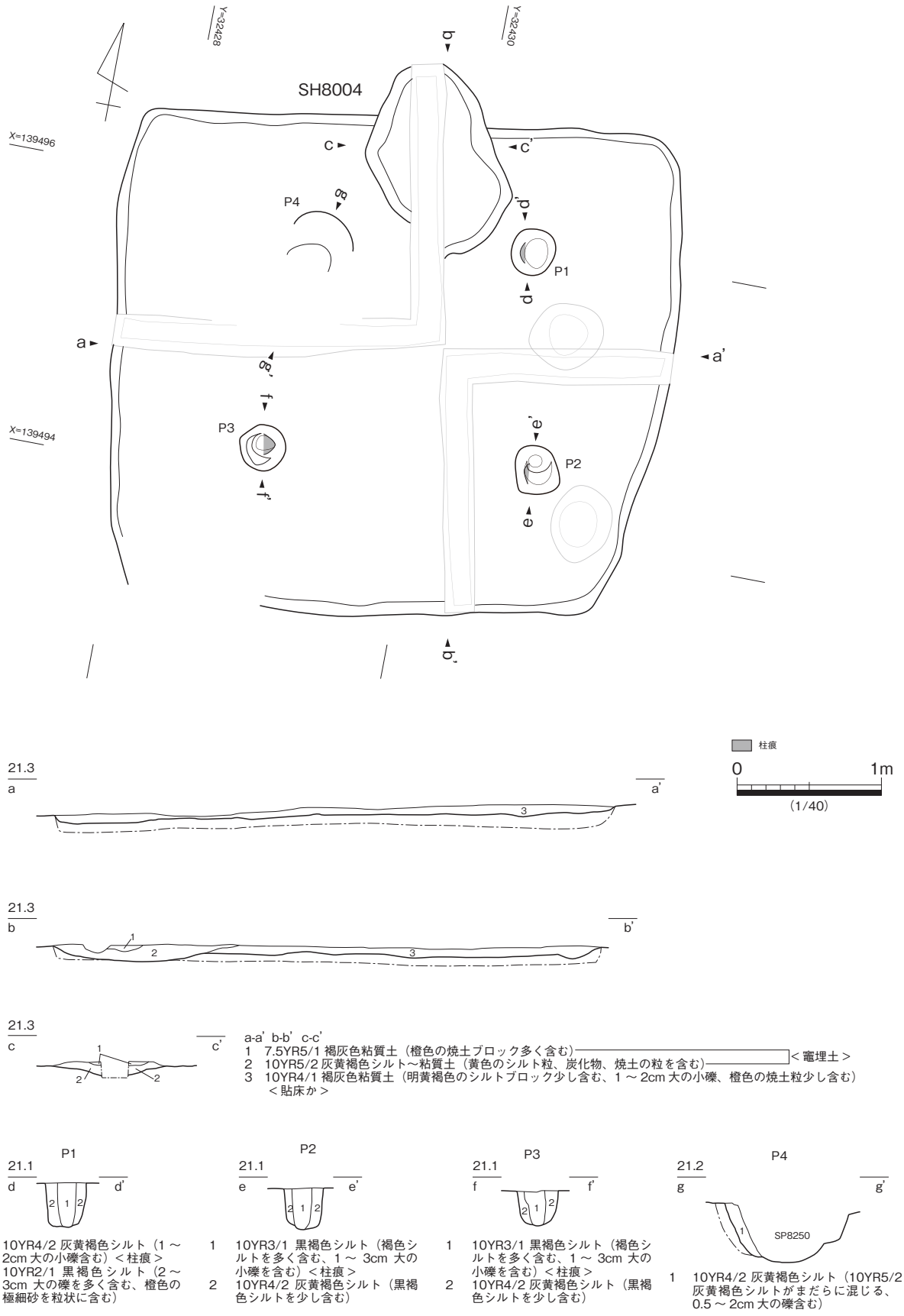
8 区 SH8002（第 60 図）

8 区南部で検出した。2 面で検出した。方形と考えられ、南北 5.64m、東西 5.62m、主軸方位は N22.5° W、面積は 31.27㎡である。削平が著しく、遺構面から 5cm程度しか残されておらず、竪穴建物の外周ラインは明確ではない。検出範囲では竈は検出されなかった。北側中央付近に攪乱が認められるが、攪乱の底の標高は建物の床面の標高とほぼ同一で、竈はなかった可能性が高い。

主柱穴は 3 穴を検出した。方形に配置すると考えられるが、北西隅の柱穴は検出できなかった。柱穴間の距離は南北 2.65m、東西 2.85m、柱穴は円形で直径 40 ～ 60cm、深さ 10 ～ 46cm、柱痕跡の直径は 20cm程度を測る。



第 61 図　SH8003 平・断面図（1/40）



第 62 図　SH8004 平・断面図（1/40）

壁溝は西辺、東辺、北辺の一部と南辺の西半部で検出した。幅 20 ～ 30cm、深さ 8cmを測る。

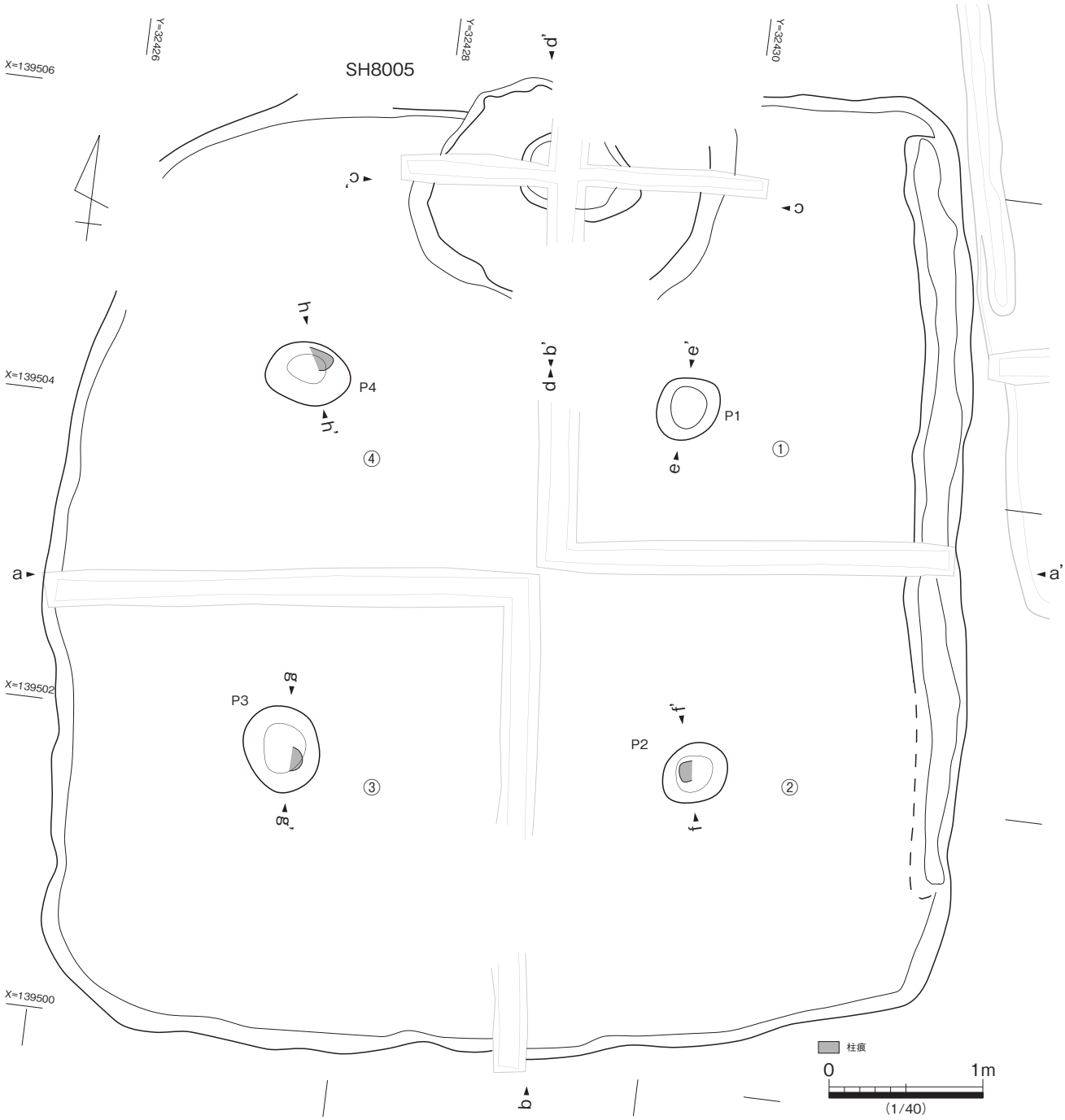
SH8002 内で SB7004・SB8016 を検出した。遺構の切合い関係により、SB7004 より古い。S8016 との前後関係は不明である。埋土中からは須恵器、土師器小片が出土したが、遺物量は少ない。

206 は須恵器杯蓋。6 世紀後半（Ⅱ -3）頃。

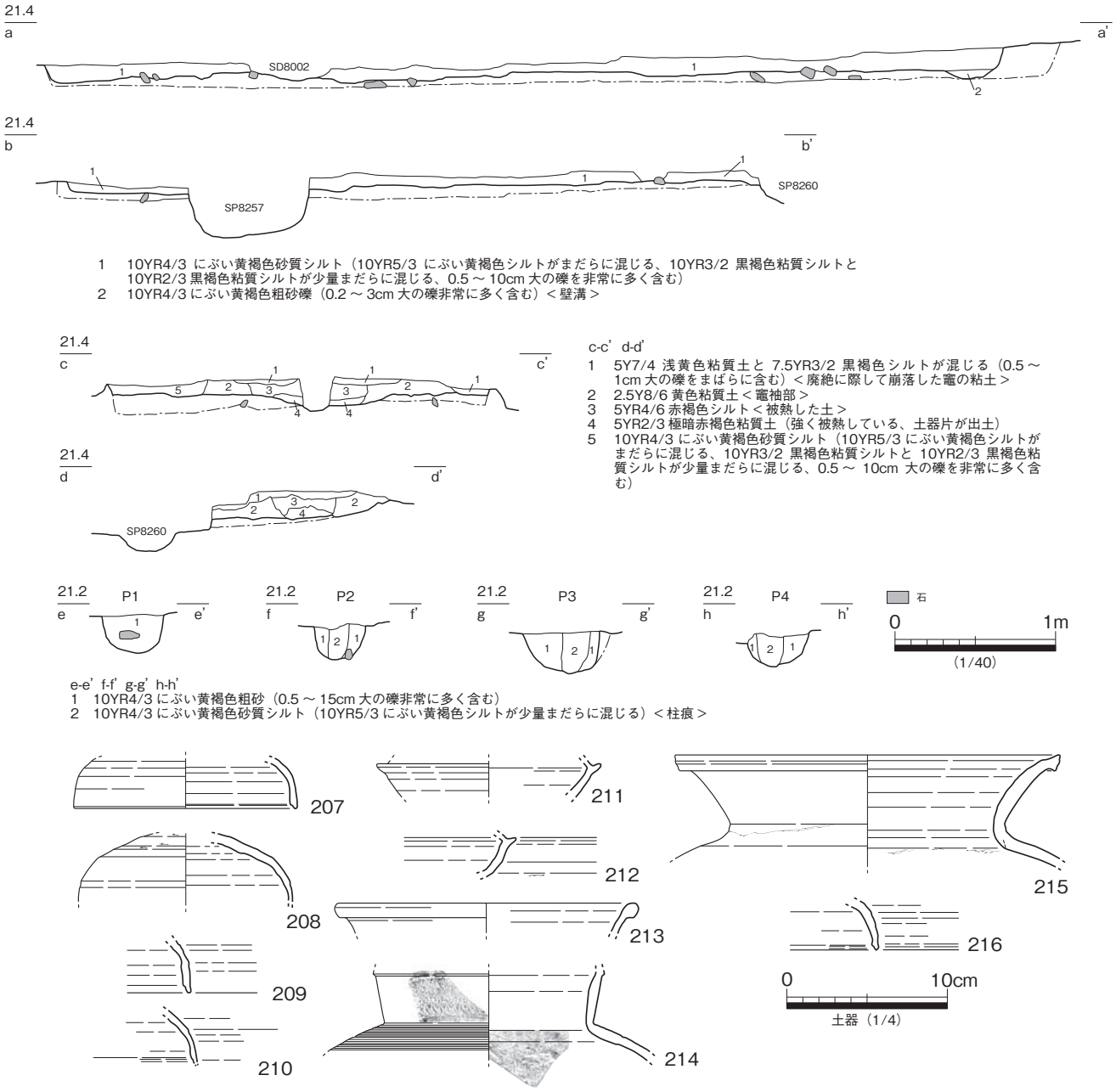
遺構の時期は、出土遺物により 6 世紀後半頃と考えられる。

8 区 SH8003（第 61 図）

8 区南部、SH8002 の西側約 0.6 ～ 1.3ｍの位置で検出した。2 面で検出した。方形と考えられるが、大半は西側の調査区外へ延びる。南北 5.88m、東西 1.3m以上、主軸方位は N6.65° Wで、面積は 7.39㎡



第 63 図　SH8005 平面図（1/40）



第 64 図　SH8005 断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

以上である。削平が著しく、遺構面からの掘り込みはほとんど残されていないが、8 区西壁土層断面から、深さ 14cmの埋土の下部に厚さ 8cmの貼床が観察できる。SB8006 を構成する柱穴に掘り込まれ、これより古い。

検出範囲では竈、主柱穴は検出することはできなかった。壁溝はわずかに北東部で検出したが、南東部では検出できなかった。検出範囲内では、幅 18cm、深さ 5cmを測る。埋土中からは出土遺物はなかった。

遺構の時期は不明であるが、他の竪穴建物と概ね同時期で 6 世紀後半～ 7 世紀初頭と考えられる。

8 区 SH8004（第 62 図）

8 区中央付近、SH8001 の南東側で検出した。2 面で検出した。方形であるが、南東隅はややいびつである。南北 3.44m、東西 3.86m、主軸方位は N11.21° W、面積は 12.61㎡である。遺構面から 6cm程度

の深さで床面を検出した。遺構検出時に確認した層は、b-b' 断面により、竈内の堆積土の下部に堆積することが確認され、貼床と考えられる。

北辺で竈を検出した。竈の構築土は残らず、燃焼部の窪みのみが残存する。燃焼部は長軸 1.32m、短軸 0.9mで、建物内では奥行 0.94m程度である。

主柱穴は方形に配する 4 穴を検出した。P4 は大部分を SB8008-SP8250 に破壊されるが、わずかに残存する。柱穴間の距離は南北 1.43 ～ 1.44m、東西 1.54 ～ 1.86m、柱穴は概ね円形で、直径 30 ～ 34cm、深さ 26 ～ 32cm、柱痕跡の直径は 15cmである。壁溝は検出できなかった。

遺構内からは須恵器杯身または杯蓋小片、土師器小片が出土した。遺物の出土量は少なかった。

遺構の時期は、周辺の状況と出土遺物から 6 世紀後半～ 7 世紀初頭頃と考えられる。

8 区 SH8005（第 63・64 図）

8区中央付近、SH8007の西側にほぼ接して検出した。2面で検出した。隅丸方形で、南北6.20m、東西5.91m、主軸方位は N6.12° W で、面積は 34.73㎡である。遺存状況は悪く、深さは 5 ～ 10cm程度が残る。

北辺で竈を検出した。竈は横に長い楕円形を呈し、残存状況が良好である。長軸 2.1m、短軸 1.9m、建物内での奥行は 1.3mで、一部建物外で検出した。竈袖部の裾幅は 70cm程度である。竈構築土は焚口部分でも途切れずに巡り、土手状になっている。燃焼部は東西に長く、長軸 6.5m、短軸 3.0m 程度である。a-a' 断面によれば、壁溝はベース面を掘り込んでいることから、貼床はなかったと考えられる。

主柱穴は方形に配置する 4 穴を検出した。柱穴間の距離は南北 2.37 ～ 2.48m、東西 2.45 ～ 2.65m、柱穴は楕円形で、長軸 46 ～ 56cm、短軸 38 ～ 50cm、深さ 20 ～ 24cm、柱痕跡の直径は 16cmである。

壁溝は東辺でのみ検出された。幅 28cm、深さ 6cmを測り、竪穴建物の東側のラインに沿って検出した。

埋土中からは須恵器杯身・杯蓋・甕片、土師器小片などが出土した。

207 ～ 215 は a-a'･b-b' 断面 1 層から出土したと考えられる須恵器。207 ～ 210 は杯蓋。211･212 は杯身。小破片。213 ～ 215 は甕。214 は頸部に波状文を施す。216 はその他の埋土中から出土した須恵器杯蓋。6 世紀末～ 7 世紀初頭（Ⅱ -4 ～Ⅱ -5）頃。

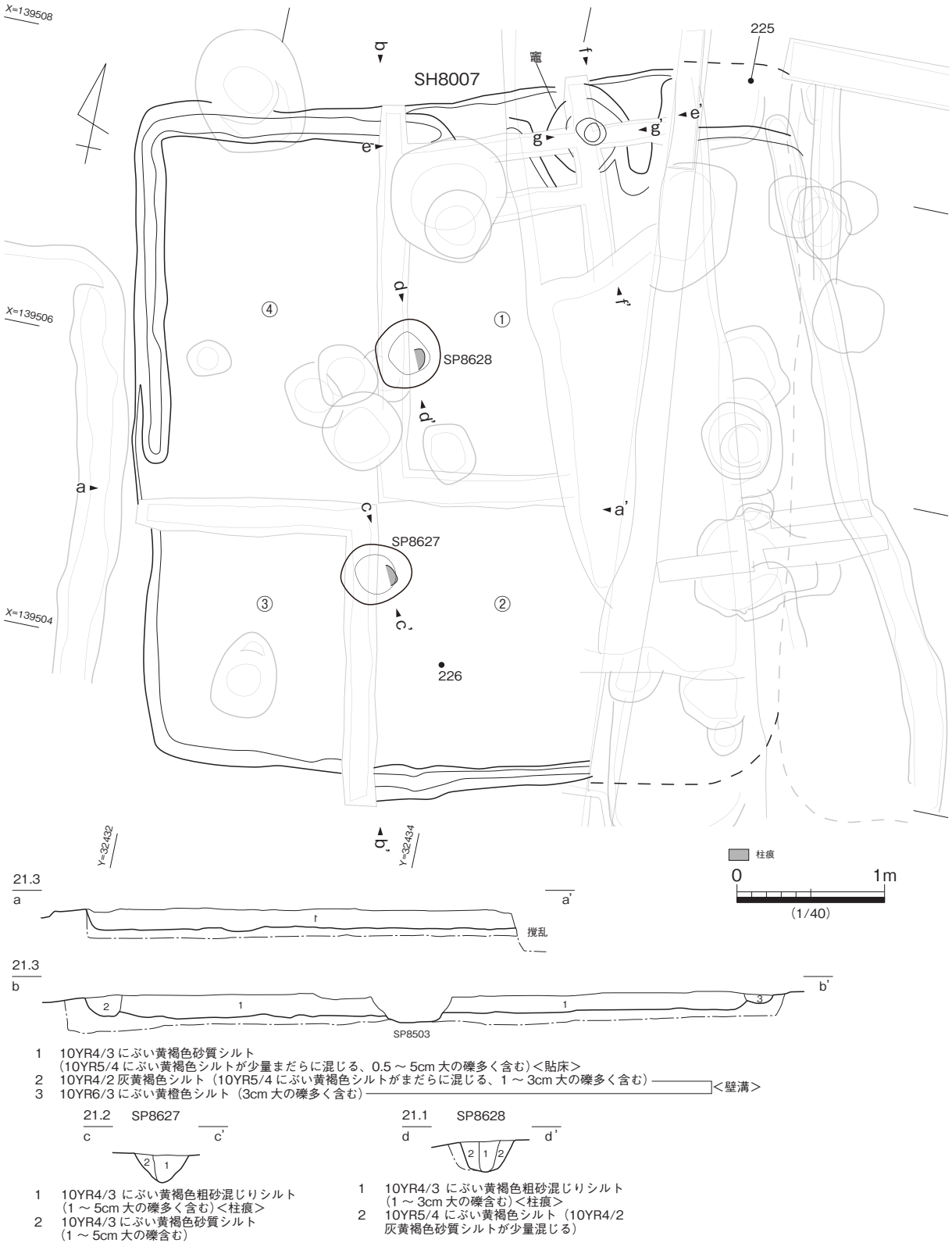
遺構の時期は、出土遺物により 6 世紀末～ 7 世紀初頭頃と考えられる。

8 区・12 区 SH8007（第 65・66 図）

8区と12区にまたがって検出した。8区では2面で検出した。12区では検出面が低く、遺存状態が悪かった。SH8005 の東側にほぼ接する。SH11001 とわずかに重複し、SH11001b-b' 断面により SH11001 より新しい。南北 4.66m、東西 4.52m 以上、主軸方位 N14.75° W、面積は 20.53㎡である。深さは、検出面から 12 ～ 16cmでベースである。検出面から壁溝が掘り込まれているので、この面は貼床面である可能性が高い。

竈は北辺の東に寄った位置で検出した。楕円形の形状を呈する。最大幅 1.06m、奥行き 0.7m の範囲で、竈袖部の裾幅は 35cm程度である。燃焼部は隅丸方形に近い形状で、軸長 0.62m を測る。燃焼部中央付近に土師器甕が据えられていた。

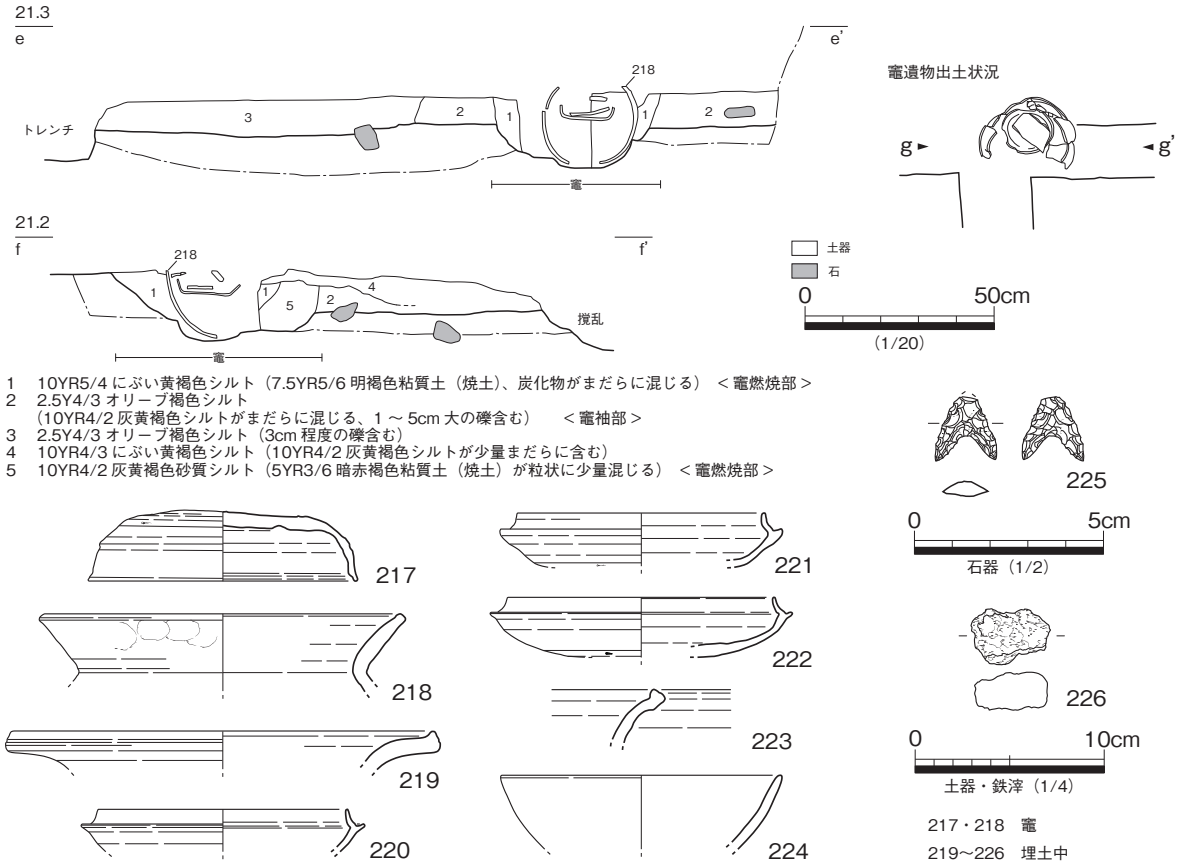
主柱穴は西側では 2 穴が西側ラインに沿って配置されると考えられるが、東側の柱穴は明確ではない。柱穴間の距離は南北 1.53mである。柱穴は概ね円形で、直径 30 ～ 50cm程度、深さ 20cm程度、柱痕跡の直径は 12cm程度と考えられる。



第 65 図　SH8007 平・断面図 1（1/40）

壁溝は北西部と南辺中央付近で検出した。b-b' 断面により貼床面の上面から掘り込まれたと考えられる。幅 18 ～ 20㎝、深さ 6 ～ 14㎝を測る。

竈内からは、土師器甕、須恵器杯蓋、埋土中からは須恵器杯蓋・杯身・甕、鉄滓などが出土した。竈



第 66 図　SH8007 断面図２（1/40）、竈遺物出土状況（1/20）、出土遺物（1/4・1/2）

内埋土、竈崩落土を水洗選別したところ、炭化物の他、磁着鉄を検出したが、粒状滓や鍛造剥片は認められなかった。

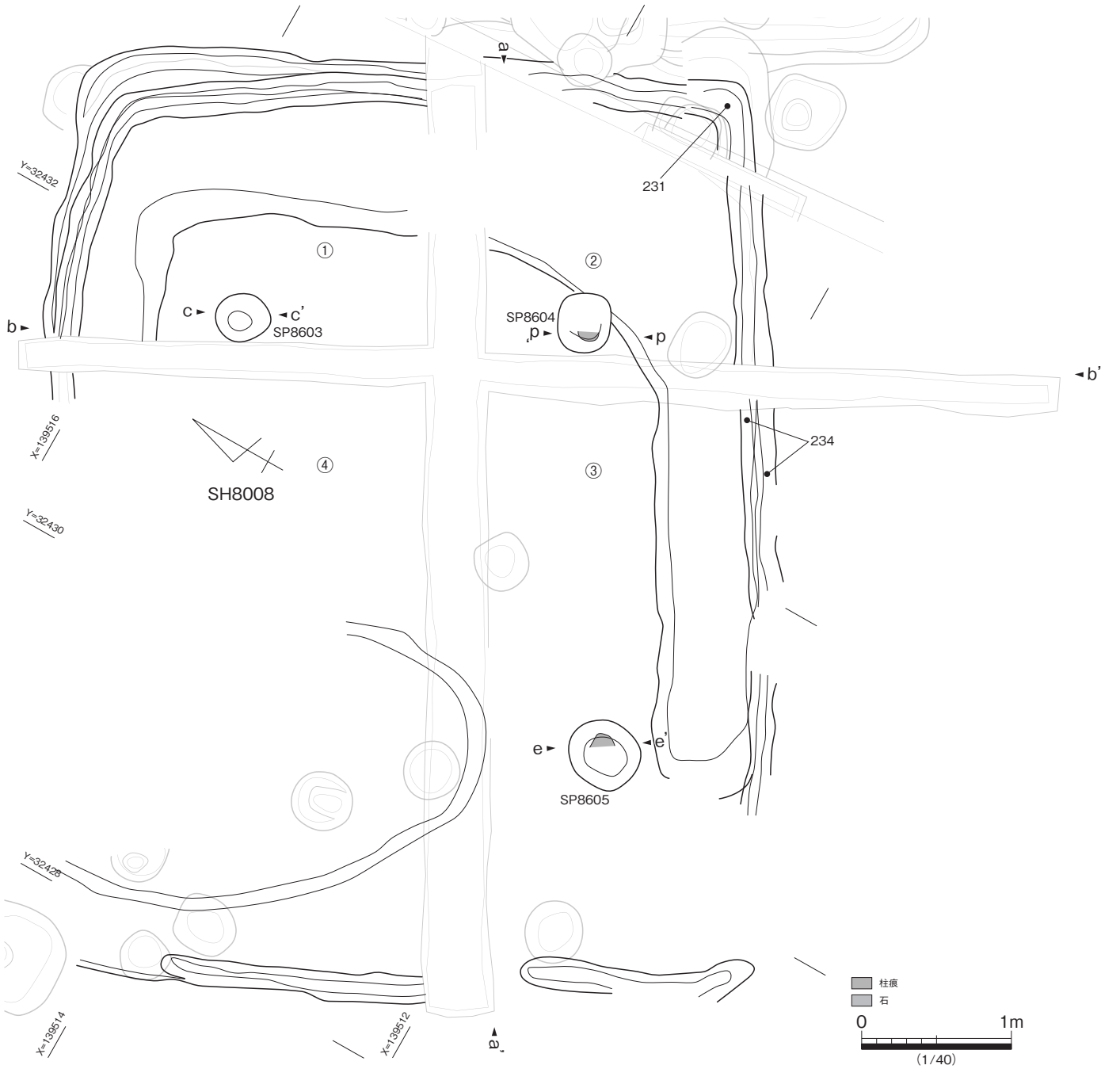
217・218 は竈内から出土した。217 は須恵器杯蓋。6 世紀後半（Ⅱ -3 期）頃。218 は土師器甕。e-e' 断面によれば、体部の形状を残したまま出土しているが、体部までは復元に至らず、口縁部しか図化できなかった。219 ～ 226 は埋土中から出土した。219 は弥生土器広口壺。弥生時代後期後半。混入遺物。220 ～ 223 は須恵器。220 ～ 222 は杯身。6 世紀末～ 7 世紀初頭（Ⅱ -4 ～ 5 期）頃。223 は甕口縁部小片。224 は土師器杯。225 はサヌカイト製石鏃。凹基式。226 は鉄滓。

遺構の時期は、出土遺物の時期や SH11001 より新しいことから、6 世紀末～ 7 世紀初頭と考えられる。埋土からは鉄滓が出土しており、鍛冶行為にかかわる遺構の可能性がある。

8 区・11 区 SH8008（第 67・68 図）

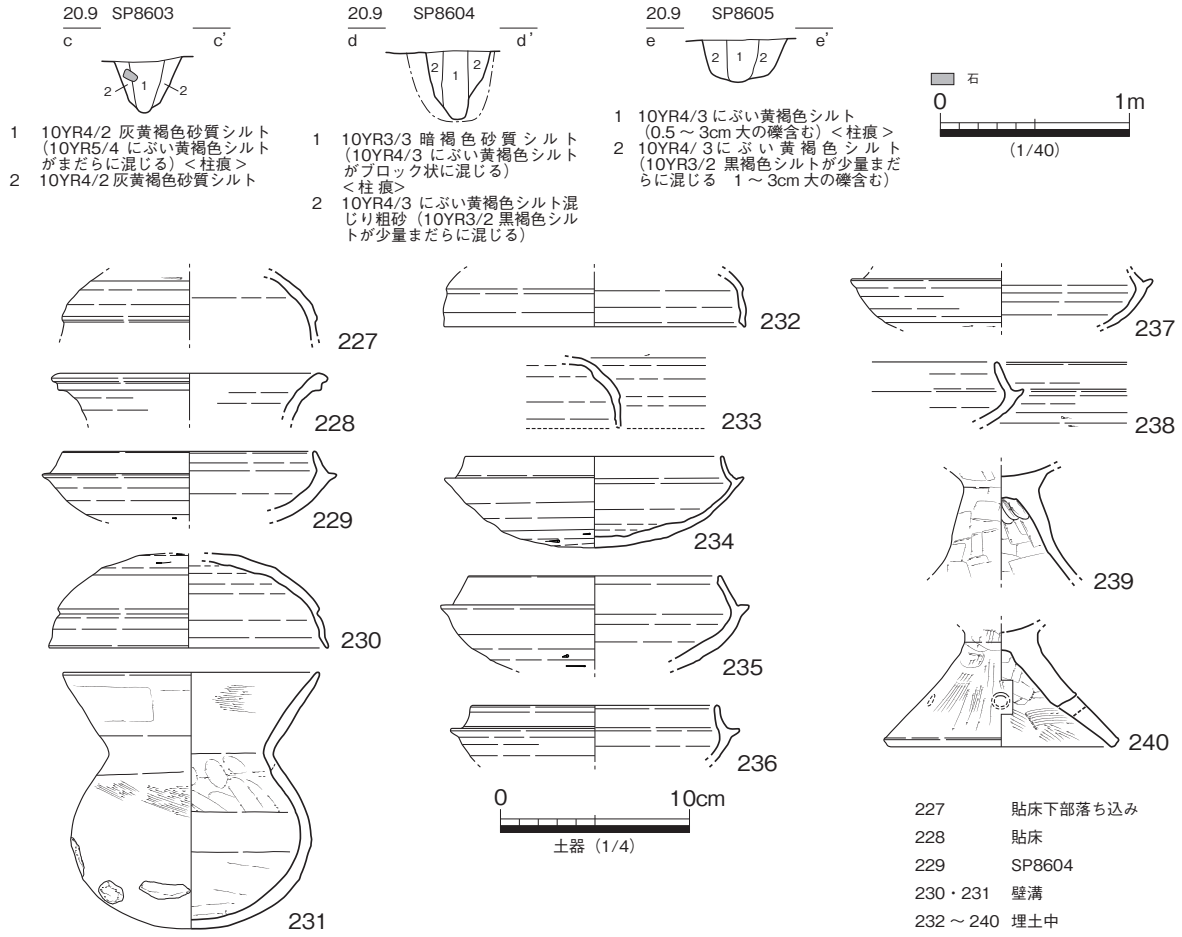
8 区北寄りで検出した。南東隅はわずかに 11 区まで及ぶ。2 面で検出した。北西側を SX8009 により大きく破壊される。隅丸長方形を呈し、南北 4.92m、東西 6.26m、主軸方位 N28.76° W、面積は 30.83 ㎡である。北・南辺では幅 56.5cm程度、東辺では幅 92.5cm程度、深さはいずれも 12cm程度の落ち込みがコの字型に巡る。東辺側では貼床を施す前に埋め立てを、北･南辺側では貼床層と同じ土で充填する。貼床層は深さ 5 ～ 10cm程度である。西部にも楕円形の深さ 10cm程度の落ち込みが認められる。

竈は検出しなかった。しかし、建物の北辺を含む北西部の約 2/3 が後世の遺構である SX8009 により破壊されていることから、この部分に竈が構築された可能性は考えられる。



1 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト（10YR7/6 明黄褐色粘質土、10YR6/3 にぶい黄橙色シルトを極少量ブロック状で含む、0.5 ～ 10cm 大の礫多く含む）
2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト（10YR7/6 明黄褐色粘質土が少量ブロック状に混じる、0.5 ～ 5cm 大の礫含む）＜貼床＞
3 10YR3/2 黒褐色砂質シルト
（10YR5/3 にぶい黄褐色シルトが少量まだらに混じる） ＜壁溝＞
4 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
（10YR3/3 暗褐色砂質シルトがまだらに混じる）
5 10YR3/2 黒褐色砂質シルト（10YR4/4 褐色粘質シルトがまだらに混じる）
6 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト（10YR7/6 明黄褐色粘質土が少量ブロック状に混じる）
7 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト（10YR7/6 明黄褐色粘質土をブロック状に含む） ＜SP8601＞
8 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト（10YR7/3 にぶい黄橙色粘質シルトがまだらに混じる）
9 10YR3/3 暗褐色砂質シルト（10.5 ～ 3cm 大の礫含む）
10 10YR3/2 黒褐色砂質シルト（10YR4/3 にぶい黄褐色シルトが少量まだらに混じる、0.5 ～ 3cm 大の礫多く含む） ＜SP8602＞

第 67 図　SH8008 平・断面図 1（1/40）



第 68 図　SH8008 断面図２（1/40）、出土遺物（1/4）

主柱穴は、SX8009 により破壊されたと考えられる北西部を除き 3 穴を検出した。方形に 4 穴を配置したと考えられる。柱穴間の距離は南北 2.33m、東西 2.94m、柱穴は楕円形で、長軸 36 ～ 48cm、短軸 32 ～ 40cm、深さ 22 ～ 36cm、柱痕跡の直径は 16cmである。

壁溝は、SX8009 により破壊された部分を除き、全体で検出した。幅 24cm、深さ 12cmで、断面観察により貼床の上面で壁溝を掘削したことがわかる。

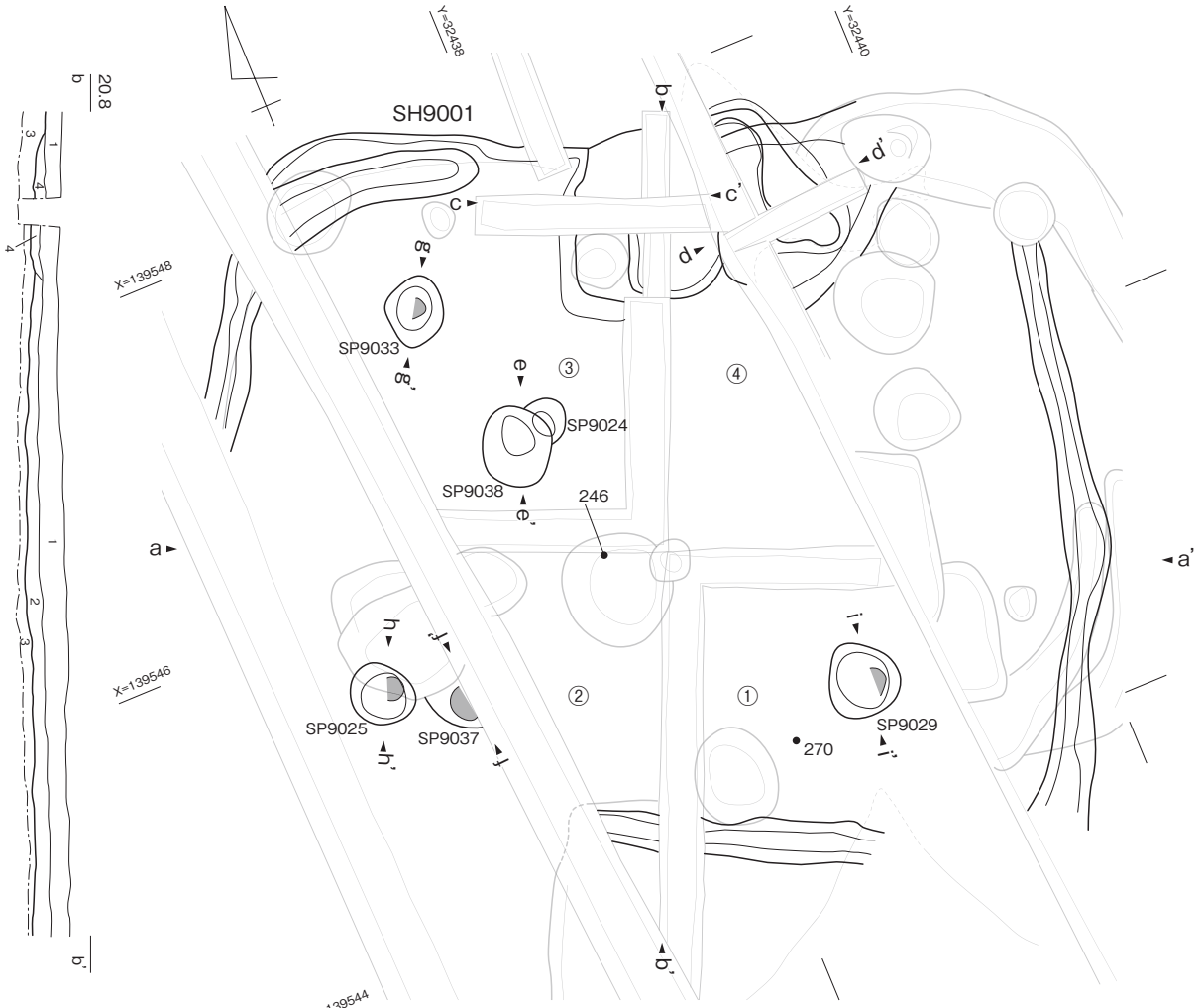
埋土中からは須恵器杯蓋、杯身、土師器高杯、甕などが出土した。竈の埋土を水洗選別したところ、炭化物の他、磁着鉄を検出したが、粒状滓や鍛造剝片は認められなかった。

227 は貼床下部の落ち込み部分から出土した遺物。須恵器杯蓋。肩部に段を持つ。228 は貼床から出土した須恵器甕。229 は南東の主柱穴 SP8604 から出土した須恵器杯身。7 世紀初頭（Ⅱ -4 期）頃。230・231 は壁溝から出土した。230 は須恵器杯蓋。肩部に段を持ち、口縁端部はわずかに段を持つ。6 世紀後半（Ⅱ -3 期）頃。231 は土師器壺。体部には焼成破裂痕が残る。232 ～ 240 は埋土中から出土した。232 ～ 238 は須恵器。232・233 は杯蓋。234 ～ 238 は杯身。概ね 6 世紀後半～末（Ⅱ -3 ～ 4 期）。239・240 は土師器高杯脚部。

遺構の時期は、出土遺物から 6 世紀後半～末頃と考えられる。

9 区・1 区 SH9001（第 69・70 図）

9 区中央付近と 1 区にまたがって検出した。9 区では 2 面で検出した。隅丸方形を呈すると考えられ



a-a’　b-b’
1　7.5YR3/3 暗褐色細砂
2　7.5YR5/3 にぶい褐色極細砂に 10YR8/8 黄橙色粘土がまだらに混じる　＜貼床＞
3　＜ベース＞
4　2.5YR3/2 暗赤褐色細砂　＜竈燃焼部＞

20.8
c　c’

1　7.5YR3/3 暗褐色細砂
2　7.5YR8/8 黄橙色粘土に 7.5YR5/3 にぶい褐色細砂が混じる＜竈袖部＞
3　2.5YR3/2 暗赤褐色細砂　＜竈燃焼部＞
4　7.5YR5/3 にぶい褐色極細砂に 10YR8/8 黄橙色粘土がまだらに混じる　＜貼床＞
5　＜ベース＞

20.8
d　d’

1　2.5YR3/6 暗赤褐色粘質土と 10YR7/8 黄橙色粘質土にブロックが混じる　＜竈崩落土＞
2　5 YR3 / 6暗赤褐色粘質土と 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土がまだらに混じる　＜竈燃焼部＞
3　10YR5/6 黄褐色粘質土に 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土が筋状に混じる　＜竈袖部＞
4　10YR5/8 黄褐色粘質土と 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土がまだらに混じる　＜竈壁崩落土＞
5　10YR3/4 暗褐色粘質土　＜貼床＞
6　10YR4/6 褐色粘質土シルト　＜ベース＞

柱痕
石
0　1m
(1/40)

SP9037

20.5
e　SP9038　e’

1　7.5YR4/4 褐色シルトに 7.5YR8/8 黄橙色粘土ブロックが混じる

20.5
f　f’

1　7.5YR4/2 灰褐色シルト　＜柱痕＞
2　7.5YR2/2 黒褐色シルト
3　7.5YR3/3 暗褐色細砂

20.5
g　SP9033　g’

1　10Y R7/2 にぶい黄橙色粗砂と 10YR3/1 黒褐色粗砂が混じる（少量のベースブロック含む）＜抜取痕＞
2　10YR7/1 灰白色細砂　＜柱痕＞
3　10YR4/2 灰黄褐色粗砂と 10YR7/1 灰白色細砂が混じる

20.5
h　SP9025　h’

1　7.5YR3/2 黒褐色シルト　＜柱痕＞
2　5YR4/3 にぶい赤褐色極細砂

20.5
i　SP9029　i’

1　10YR3/3 暗褐色極細砂　＜柱痕＞
2　10YR3/1 黒褐色細砂（1 ～ 2cm 大の礫をまばらに含む）

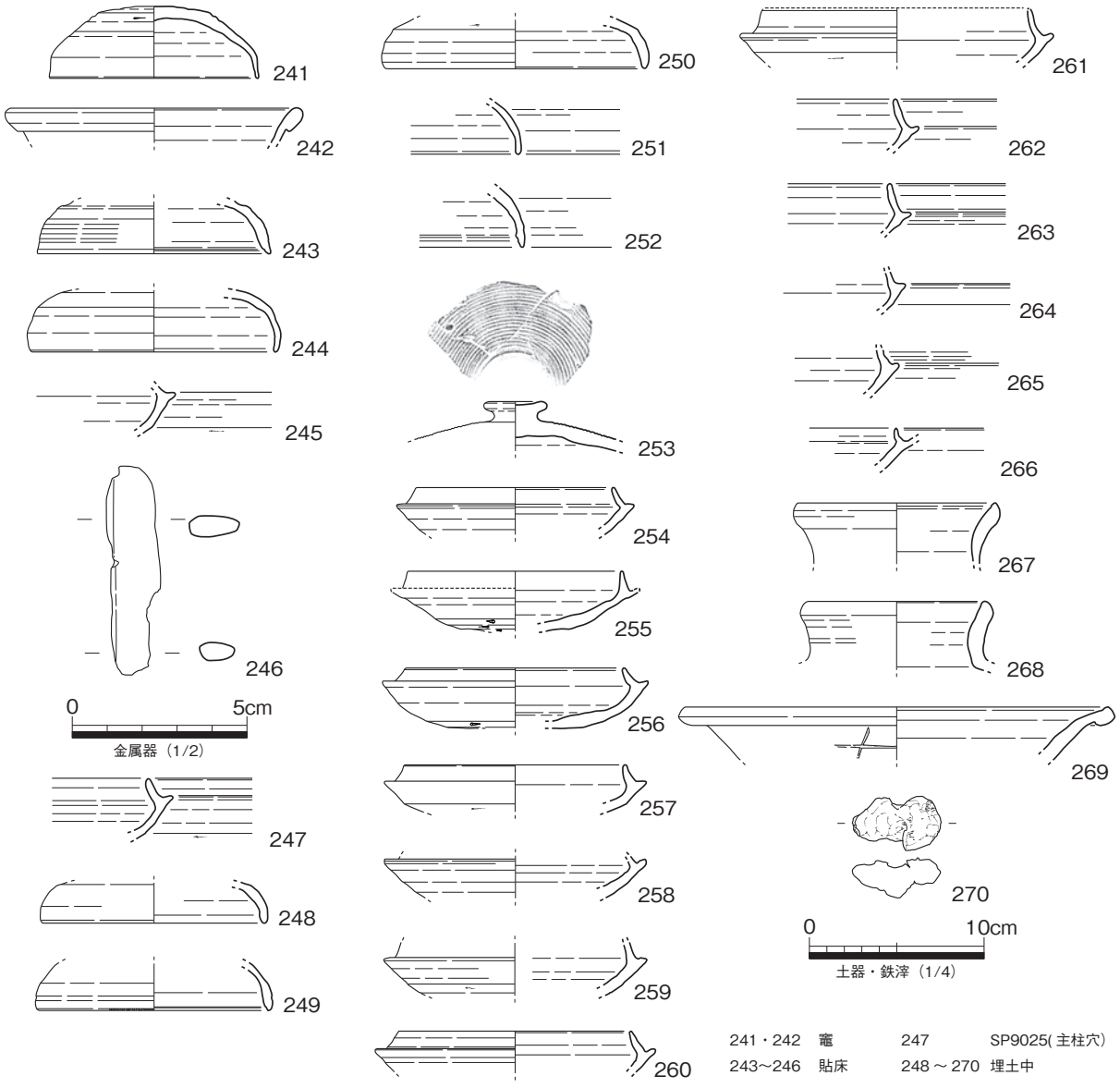
第 69 図　SH9001 平・断面図（1/40）

るが、南西部では攪乱により壊され、北東隅付近は後世の遺構により壊される部分が多かった。南北 3.82m、東西 4.64m、主軸方位は N23.65° E、面積は 16.71㎡である。b-b' 断面では南側の壁溝は認められず貼床面が連続しているが、平面プランで検出した壁溝のラインをもとに規模を算出した。地表面から 14cm程度の深さで貼床面を検出し、８～ 10cm程度の貼床を施す。

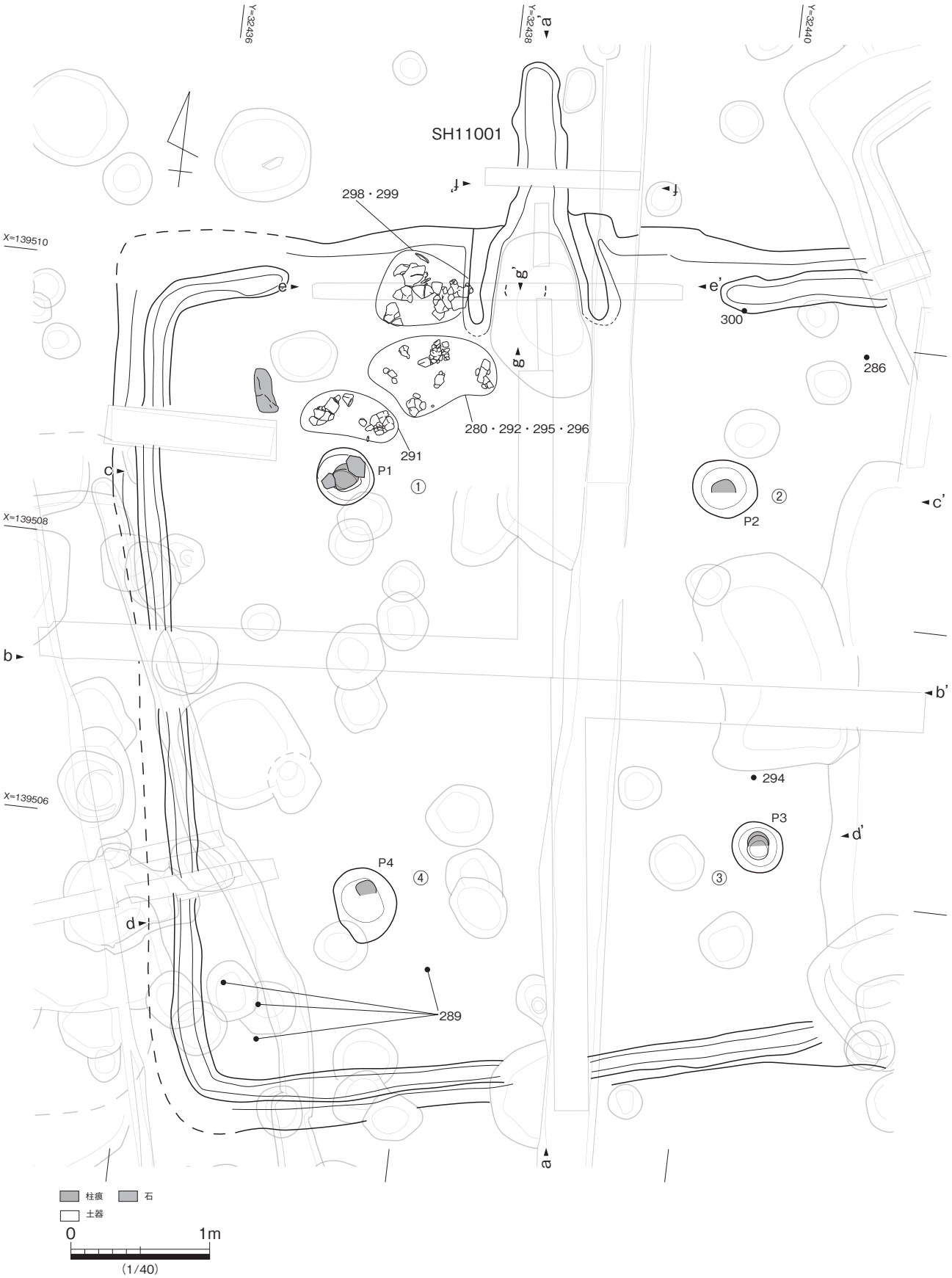
竈は北辺で検出した。貼床後に設置されたことが b-b' 断面からわかる。建物内では隅丸方形を呈し、幅約 0.9mを検出したが、東側のラインは不明瞭で全体の幅はわかりにくい。竈の想定中心ラインから反転させれば概ね 1.3m程度であったと考えられる。建物内での奥行きは 0.9m、燃焼部は楕円形を呈し、長軸 0.8m、幅 0.4mを測る。竈袖部の裾幅は 42cm程度である。

主柱穴は、調査時には SP9024・SP9037 としたが、遺構の配置からは SP9033、SP9025、SP9029 の可能性があると考える。いずれも竪穴建物の埋土の掘り下げ後に検出されているもので、齟齬はないと考える。柱穴間の距離は南北 2.08m、東西 2.48m、柱穴は楕円形、不整円形で、長軸 36 ～ 42cm、短軸 30 ～ 40cm、深さ 21 ～ 40cm、柱痕跡の直径は 14cm程度である。

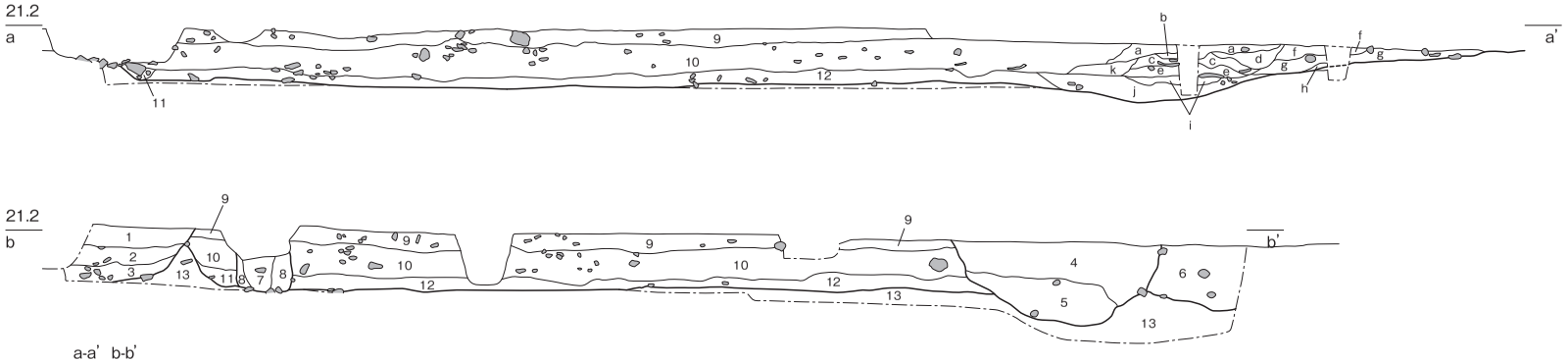
壁溝は、南側と東側は外周のラインに沿う。幅 22 ～ 24cm、深さは３～ 7cm程度である。しかし、b-b'



第 70 図　SH9001 出土遺物（1/4・1/2）



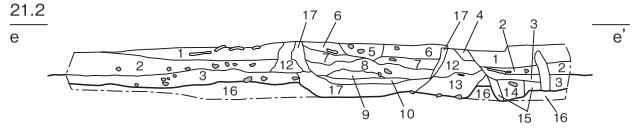
第 71 図　SH11001 平面図（1/40）



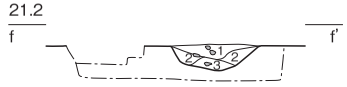
a-a' b-b'

1 10YR6/1 褐灰色シルト混じり細砂（1.0 ～ 5.0cm 大の礫を含む、黄褐色シルトブロックを含む）
2 10YR6/1 褐灰色シルト混じり細砂（1.0 ～ 3.0cm 大の礫を含む、白色中粒砂を少量含む）
3 10YR4/2 灰黄褐色シルト混じり細砂（1.0 ～ 5.0cm 大の礫を含む、白色中粒砂を含む）
<SH8007>
4 10YR4/1 褐灰色シルト混じり極細砂～細砂（1.0 ～ 3.0cm 大の礫を含む、炭化物細片を含む）
5 10YR4/2 灰黄褐色シルト混じり極細砂～細砂（1.0 ～ 5.0cm 大の礫を含む、黒褐色シルトブロックを少量含む、黄褐色シルトブロックをわずかに含む）
<SX12005>
6 10YR3/2 黒褐色シルト混細砂（1.0 ～ 5.0cm 大の礫を含む、黄褐色シルトブロックをわずかに含む、白色中粒砂、炭化物細片をわずかに含む） <SX12007>
7 10YR5/1 褐灰色シルト～細砂（1.0 ～ 3.0cm 大の礫を含む、炭化物細片を含む）
8 10YR5/2 灰黄褐色シルト混じり細砂（1.0 ～ 5.0cm 大の礫を含む）
<SP12010>
9 10YR5/1 褐灰色シルト混じり細砂（0.3 ～ 1.0cm 大の礫を少量含む、白色中粒砂をわずかに含む）＜第 1 層＞
10 10YR5/2 灰黄褐色シルト混じり細砂（1.0 ～ 3.0cm 大の礫を少量含む、黄褐色をシルトブロック（焼土を含む）を少量含む）＜第 2 層＞
11 10YR6/1 褐灰色シルト混じり細砂（1.0 ～ 5.0cm 大の礫を少量含む、白色中粒砂を含む）＜壁溝＞
12 10YR6/3 にぶい黄橙色シルト～細砂（1.0 ～ 3.0cm 大の礫を含む、黒褐色シルトブロックをまだらに含む）＜貼床＞
13 10YR6/2 灰黄褐色シルト混じり細砂（1.0 ～ 5.0cm 大の礫を多く含む）＜ベース＞

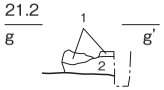
a e-e' 断面 6 層
b g-g' 断面 1 層
c e-e' 断面 7 層
d 7.5YR6/2 灰褐色シルト～細砂（焼土ブロックを少量含む）
e e-e' 断面 8 層
f f-f' 断面 1 層
g f-f' 断面 2 層
h f-f' 断面 4 層
i e-e' 断面 10 層
j e-e' 断面 11 層
k e-e' 断面 17 層
＜竈＞



1 a-a' b-b' 断面 9 層＜第 1 層＞
2 a-a' b-b' 断面 10 層＜第 2 層＞
3 a-a' b-b' 断面 12 層＜貼床＞
4 10YR7/6 明黄褐色粘質土 ＜竈壁＞
5 10YR7/2 にぶい黄橙色シルト～極細砂（0.3 ～ 1.0cm 大の礫を少量含む、焼土ブロックを含む）＜土器内＞
6 7.5YR5/2 灰褐色シルト（炭化物片を含む、焼土ブロックを多く含む）＜竈崩落土＞
7 7.5YR4/1 褐灰色シルト（炭化物片、焼土ブロックを含む、白色中粒砂を少量含む）
8 5YR7/3 にぶい橙色シルト（焼土）
9 5YR6/2 灰褐色シルト混じり細砂（1.0 ～ 3.0cm 大の礫を含む、炭化物片を含む）
＜竈天井崩落土＞
10 5YR6/2 灰褐色シルト混じり細砂（被熱による赤変あり）
11 7.5YR5/1 褐灰色シルト混じり細砂（黒褐色シルトブロックを含む）
12 10YR7/3 にぶい黄橙色シルト ＜竈袖部＞
13 10YR5/1 褐灰色シルト混じり細砂（0.5 ～ 1.0cm 大の礫を含む）
14 10YR5/1 褐灰色シルト～細砂（1.0 ～ 3.0cm 大の礫を含む）
15 10YR5/2 灰黄褐色シルト混じり細砂（0.5 ～ 1.0cm 大の礫を含む）
＜未検出ピット＞
16 a-a' b-b' 断面 13 層 ＜ベース＞
17 5YR5/3 にぶい赤褐色シルト ＜焼土＞



1 10YR5/2 灰黄褐色シルト混じり細砂（1.0 ～ 3.0cm 大の礫を少量含む）
2 10YR5/1 褐灰色シルト混じり細砂（白色中粒砂を含む）
＜天井崩落土＞
3 10YR6/2 灰黄褐色シルト～細砂（0.3 ～ 0.5cm 大の礫を少量含む、炭化物片を含む）
＜煙道＞



1 2.5YR5/6 明赤褐色シルト（炭化物片、土器片をわずかに含む）
2 5YR4/1 褐灰色シルト（中粒砂～粗砂をわずかに含む、0.3 ～ 0.5cm 大の礫を少量含む）

石
土器
0 1m
(1/40)

第 72 図 SH11001 断面図 1 （1/40）

断面では壁溝の明瞭な痕跡は認められなかった。

埋土中からは、須恵器杯身・杯蓋・甕・壺片、土師器片、鉄器、鉄滓が出土した。竈内の焼土・灰層からは炭化物とともに磁着鉄が出土したが、粒状滓や鍛造剥片は認められなかった。遺物量はやや多い。

241 は竈崩落土から、242 は竈部分のトレンチから出土した須恵器。241 は杯蓋。242 は甕口縁部。243 ～ 246 は貼床から出土した。243 ～ 245 は須恵器。243・244 は杯蓋。245 は杯身。246 は鉄器。棒状鉄片か。247 は SP9025（南西主柱穴）の柱痕から出土した遺物。須恵器杯身。248 ～ 270 は埋土中から出土した。248 ～ 269 は須恵器。248 ～ 252 は杯蓋。いずれもなだらかな肩部を持つ。253 は摘みが付く。頂部にはカキ目が認められる。254 ～ 266 は杯身。267 は提瓶口縁部。268 は壺口縁部。269 は甕口縁部。頸部に十字のヘラ描きがある。270 は鉄滓。緻密な滓で、銅を含有する。分析試料。須恵器は概ね 7 世紀初頭（Ⅱ -5 期）頃と考えられる。杯身の立ち上がりの退化が進むものが多い。

遺構の時期は、出土遺物から 7 世紀初頭頃と考えられる。棒状鉄片や鉄滓が出土しており、鍛冶行為に関わる行為が行われていた可能性が考えられる。

11 区 SH11001（第 71 ～ 75 図）

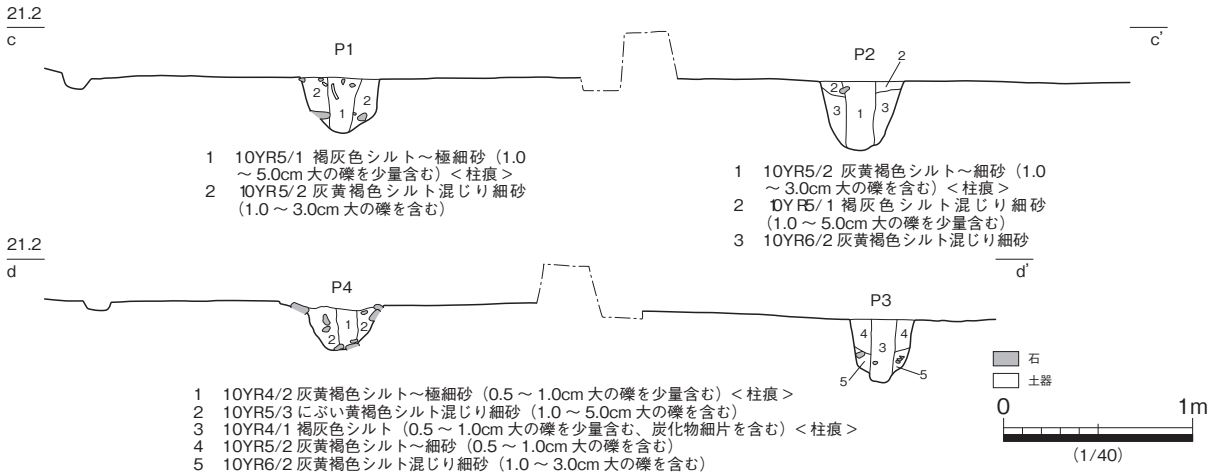
11 区で検出した。隅丸方形を呈するが、東端部付近は後世の掘り込みなどにより検出することはできなかった。南北 6.24m、東西 5.68m以上（竈の中心線までの距離から推定すれば 6.30m）、主軸方位は概ね N8° W、面積は 33.43㎡以上である。地表面から 26㎝の深さで貼床面を検出し、貼床層は 8㎝程度を測る。

竈は北辺で検出した。煙道は建物の外側で幅 0.36m、検出長 1.2m を測る。建物の内側では e-e' 断面により両側の袖部を確認した。竈の最大幅 2.2m、奥行き 1.6m、竈袖部の裾幅は 45㎝程度である。建物内では、貼床の後、長軸 1.2m、短軸 1.0m、深さ 8㎝の楕円形状に燃焼部を掘り窪める。

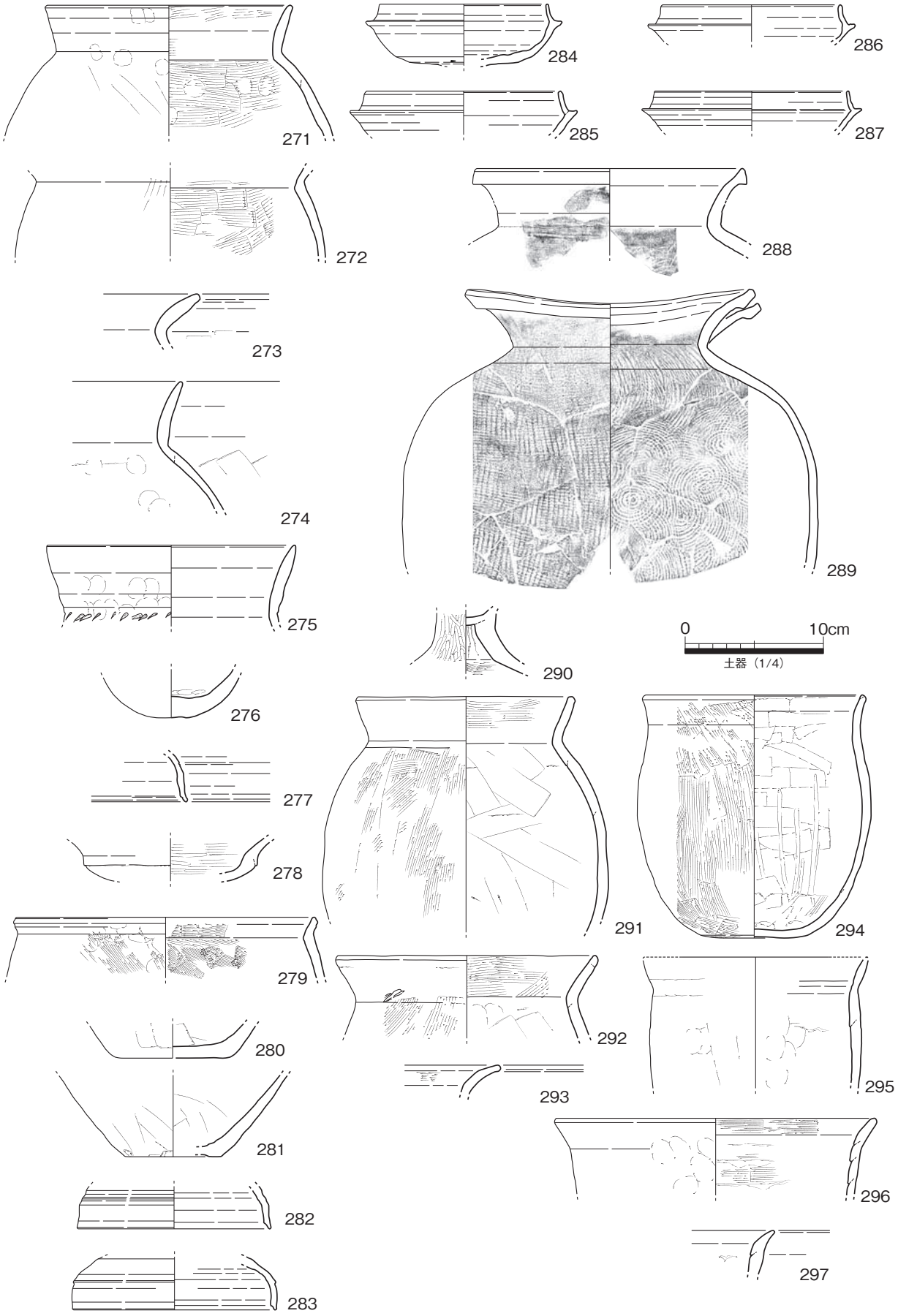
主柱穴は方形に配置する 4 穴を検出した。柱穴間の距離は南北 2.65 ～ 3.03m、東西 2.76 ～ 2.89m、柱穴は概ね円形で、直径 36 ～ 44㎝、深さ 24 ～ 38㎝、柱痕跡の直径は約 16㎝である。

壁溝は西辺と南辺、北辺の竈以外の部分である両端付近で検出した。a-a' 断面により、貼床を施した後掘り下げたことがわかる。SH11001 外側のラインから約 10 ～ 20㎝内側で、幅 18 ～ 20㎝、深さ 6㎝を測る。

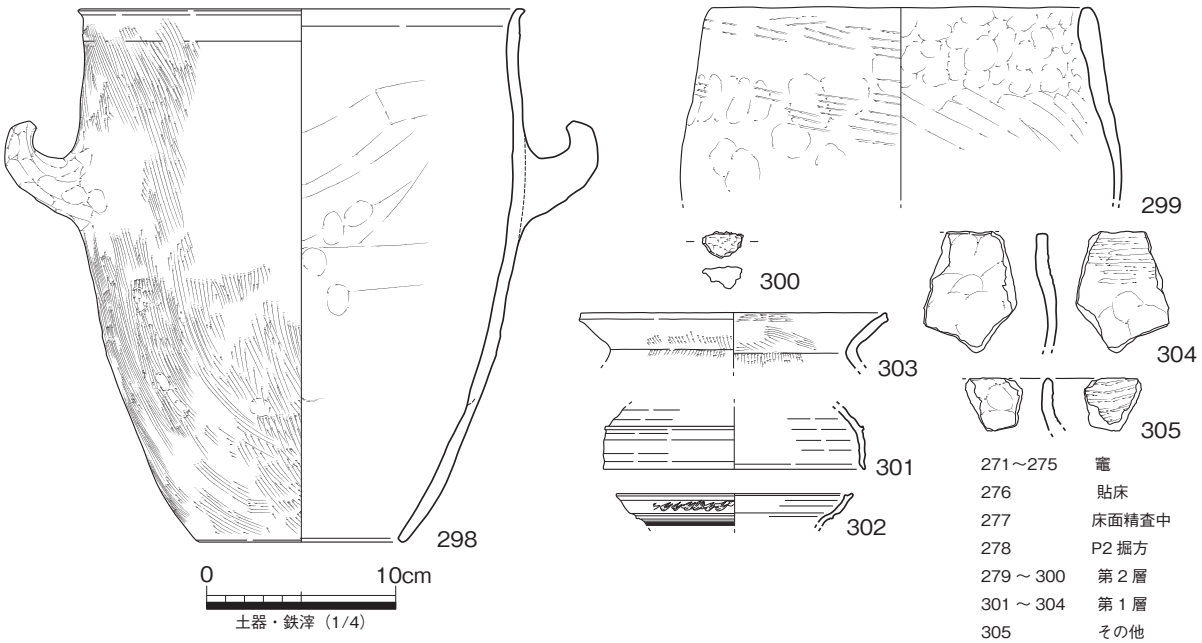
竈の南西部付近を中心に、須恵器、土師器、製塩土器、鉄滓小片など多数の遺物が出土した。



第 73 図　SH11001 断面図 2（1/40）



第 74 図　SH11001 出土遺物 1（1/4）



第 75 図　SH11001 出土遺物２（1/4）

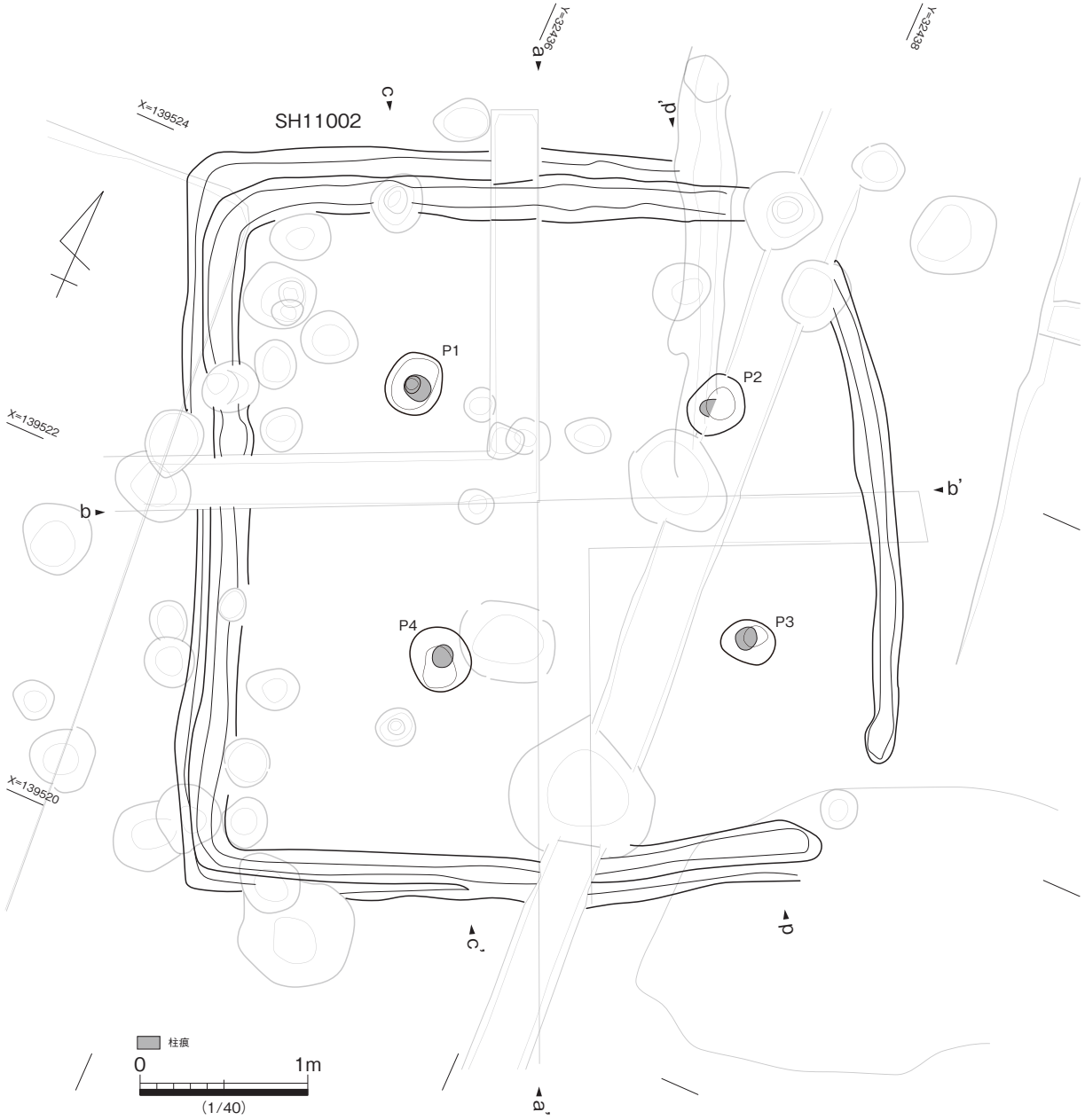
271 ～ 275 は竈から出土した遺物。いずれも土師器甕。276 は貼床層から出土した弥生土器底部。277 は床面精査中に出土した須恵器杯蓋。口縁端部に段を有する。278 は主柱穴 P2 掘方から出土した。土師器高杯。279 ～ 300 は第 2 層（a-a'・b-b' 断面第 10 層）から出土した。279 ～ 281 は弥生土器。279 は鉢小片。280・281 は壺または甕の底部。平底を呈する。282 ～ 289 は須恵器。282・283 は杯蓋。肩部に緩い稜または段を持ち、口縁端部内面には段を持つ。284 ～ 287 は杯身。288・289 は甕。288 は口縁端部を断面 3 角形に仕上げ、頸部から体部にかけてカキ目を施す。289 は口縁端部を外側へ肥厚させる。歪みが著しい。須恵器は概ね 6 世紀後半（Ⅱ -3）頃と考えられる。290 ～ 298 は土師器。290 は高杯脚部。291 ～ 297 は甕。291 ～ 293 が頸部と体部の境をくの字に屈曲させるのに対し、294 ～ 297 は寸胴に近く、頸部と体部の境の屈曲は明瞭ではない。295 ～ 297 は体部に粘土紐の継ぎ目が観察できる。298 は甑。299 は製塩土器。外面に平行タタキを施し、内面は指ナデ痕が顕著に残る。300 は鉄滓。出土位置は壁溝に近いが、出土レベル値からは第 2 層に相当する。301 ～ 304 は第 1 層（a-a'・b-b' 断面第 9 層）から出土した。301・302 は須恵器。301 は杯蓋。肩部に段を持つ。302 は鍔口縁部。外面に斜め方向の刺突文を施す。波状文を意識した施文か。303 は土師器甕口縁部。304 は製塩土器。299 に似ており、同一個体の可能性もある。305 は層位不明の埋土中から出土した製塩土器小片。299・304 と似ており、同一個体の可能性がある。

遺構の時期は、出土遺物により 6 世紀後半と考えられる。他の竪穴建物に比べ、土師器の出土が多い。

11 区 SH11002（第 76・77 図）

11 区中央付近で検出した。方形で、南北 4.51ｍ、東西 4.69 ｍ、主軸方位は N24.6° W、面積は 17.95 ㎡である。北東隅と南東隅は途切れて検出されず、東辺付近は、埋土は削平され壁溝のみが検出された。削平を受けた南東部を除き、地表面から 9㎝程度で貼床面を検出した。貼床層は 5㎝程度を測る。竈や炉となる施設はなかった。

主柱穴は方形に配する 4 穴を検出した。柱穴は貼床の上面から検出された。柱穴間の距離は南北 1.42



第 76 図　SH11002 平面図（1/40）

～ 1.69m、東西 1.84 ～ 1.89m、柱穴は円形または不整円形で、長軸 30 ～ 38cm、短軸 24 ～ 38cm、深さ 12 ～ 16cm、柱痕跡の直径は 12cm程度である。

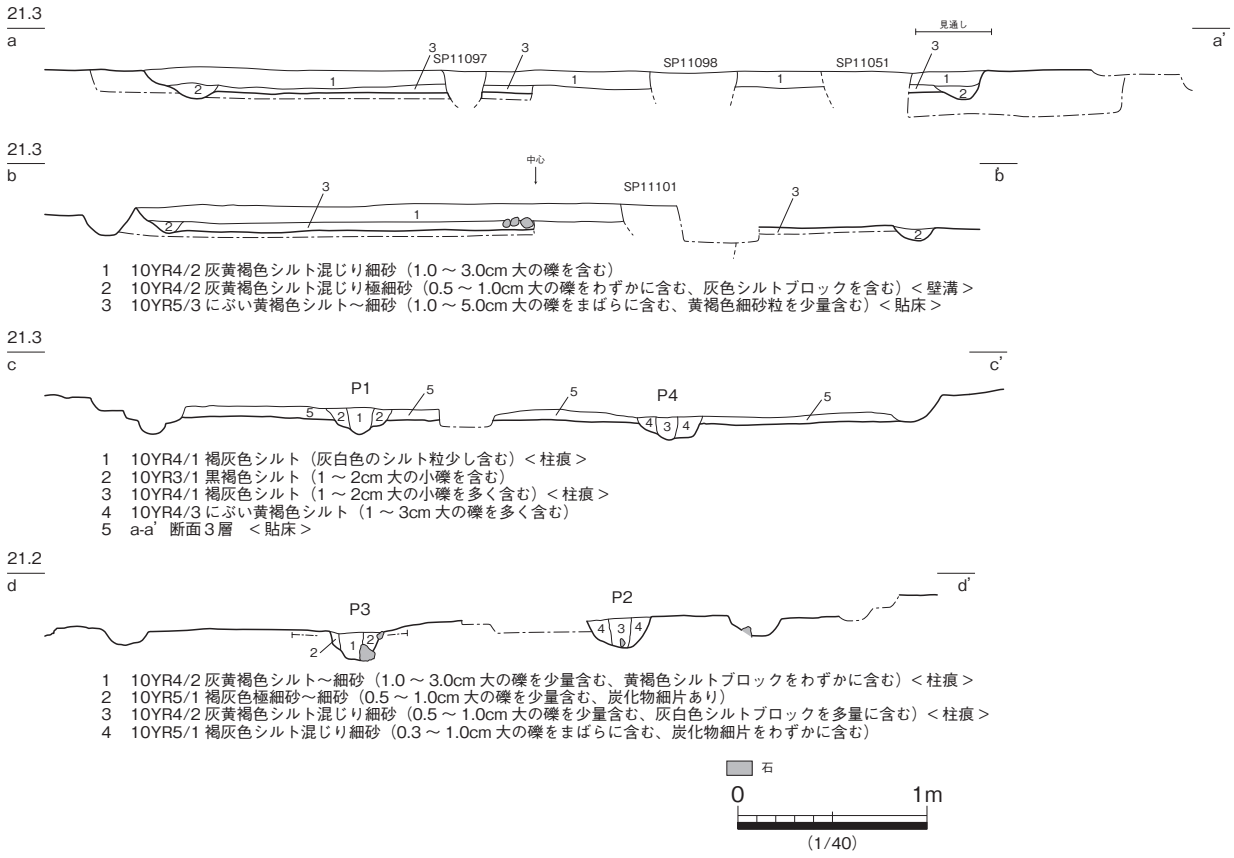
壁溝は 4 周で検出された。貼床面の上面から掘削される。幅 20cm、深さ 6 ～ 8cm、竪穴建物の外周ラインから 10 ～ 20cm程度内側で検出された。

埋土中からは須恵器杯身または杯蓋小片、土師器小片が出土したが、出土量は少なかった。。

遺構の時期の詳細は不明であるが、周辺の状況から、他の竪穴建物と同様 6 世紀後半～ 7 世紀初頭頃と考えられる。

11 区 SH11007（第 78・79 図）

11 区やや南寄りで検出した。SH8008 の東側にほぼ接して検出し、主軸方位もほぼ同じである。



第 77 図　SH11002 断面図（1/40）

SH11008 と重複し、これより新しい。南北 5.13m、東西 5.42m、主軸方位は N28.77° W、面積は 26.54㎡以上で、26.94㎡程度と考えられる。遺構面から 8cmの深さで貼床面を検出した。貼床層は 7cm程度を測る。

竈や炉となる施設は検出されなかった。主柱穴は方形に配置されると考えられる 3 穴を検出した。南西に想定される柱穴は、SB8017 を構成する柱穴により消失した可能性が高い。柱穴間の距離は、南北 1.71m、東西 1.98m、柱穴は概ね円形で、直径 34 ～ 40cm、深さ 22 ～ 26cm、柱痕跡の直径は 13cm程度である。

壁溝は、建物のラインから 10 ～ 20cm程度内側で 4 辺とも検出し、貼床層の上面から掘り下げられた。幅 20 ～ 25cm程度、深さ 10cmを測る。

埋土中からは、土師器高杯などの小片、須恵器杯身・甕片などが出土したが、出土量は少なかった。

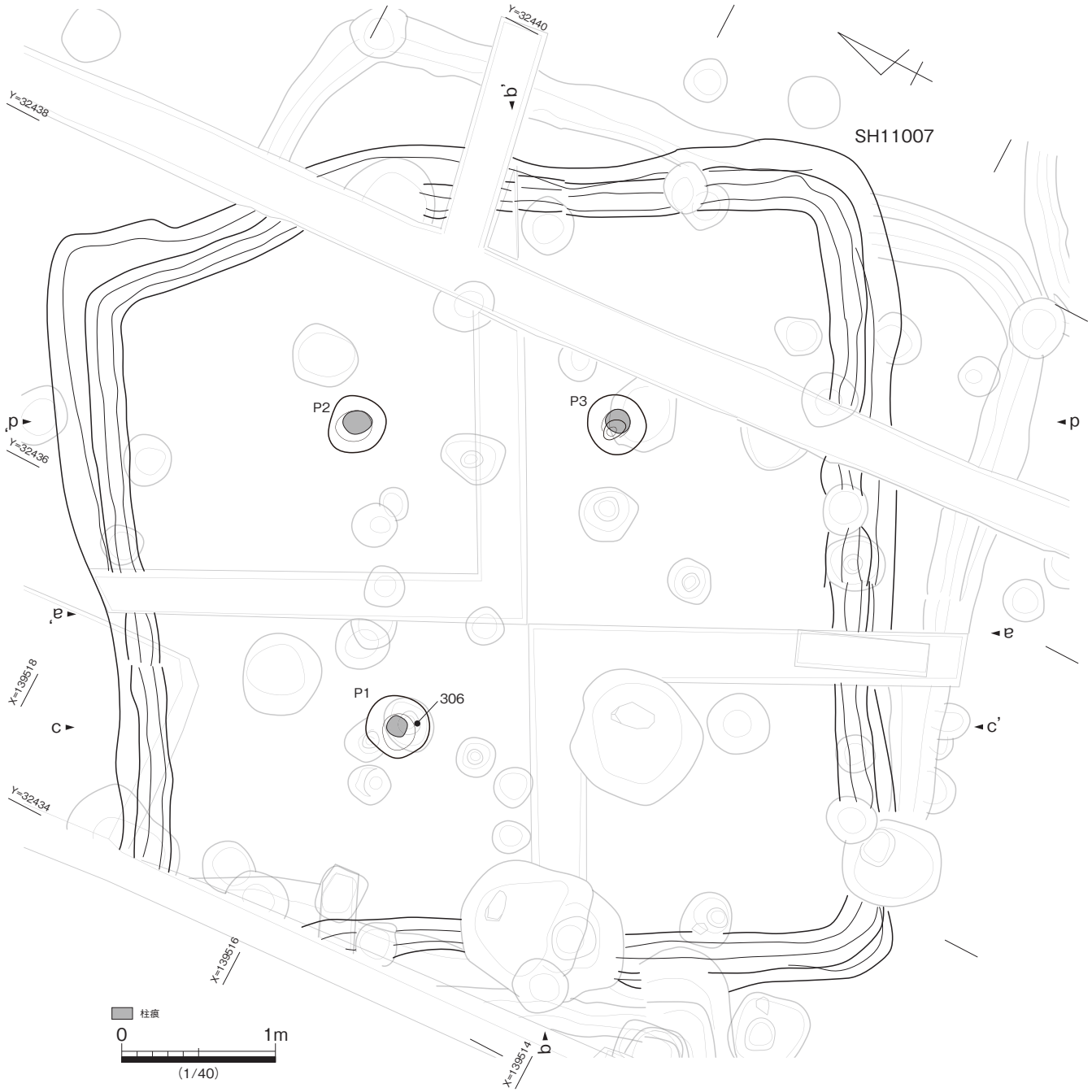
306 は P1 掘方から出土した。須恵器杯身小片。6 世紀後半（Ⅱ -3 期）頃か。

遺構の時期は、6 世紀後半頃の遺物が出土しているが、SH11007 の大部分は SH11008 を破壊しており、遺物はこれに伴う可能性もあろう。周辺の検出状況から 6 世紀後半～ 7 世紀初頭と考えられる。

11 区 SH11008（第 80・81 図）

11 区 SH11007 に重複して検出した。遺構の前後関係により SH11008 の方が古く、大半が SH11007 により消失する。概ね南北 5.15m、東西 5.10m、主軸方位 N 13.05° W、面積は SH11007 と同程度と考えられる。遺構面から 6 ～ 9cmの深さで貼床面を検出した。貼床層は 7cm程度を測る。

竈や炉となる施設は検出しなかった。主柱穴は方形に配置する 4 穴を検出した。柱穴間の距離は南北 2.38 ～ 2.41m、東西 2.19 ～ 2.33m、柱穴は円形で直径 37cm程度、深さ 22 ～ 28cm、柱痕跡の直径は 10



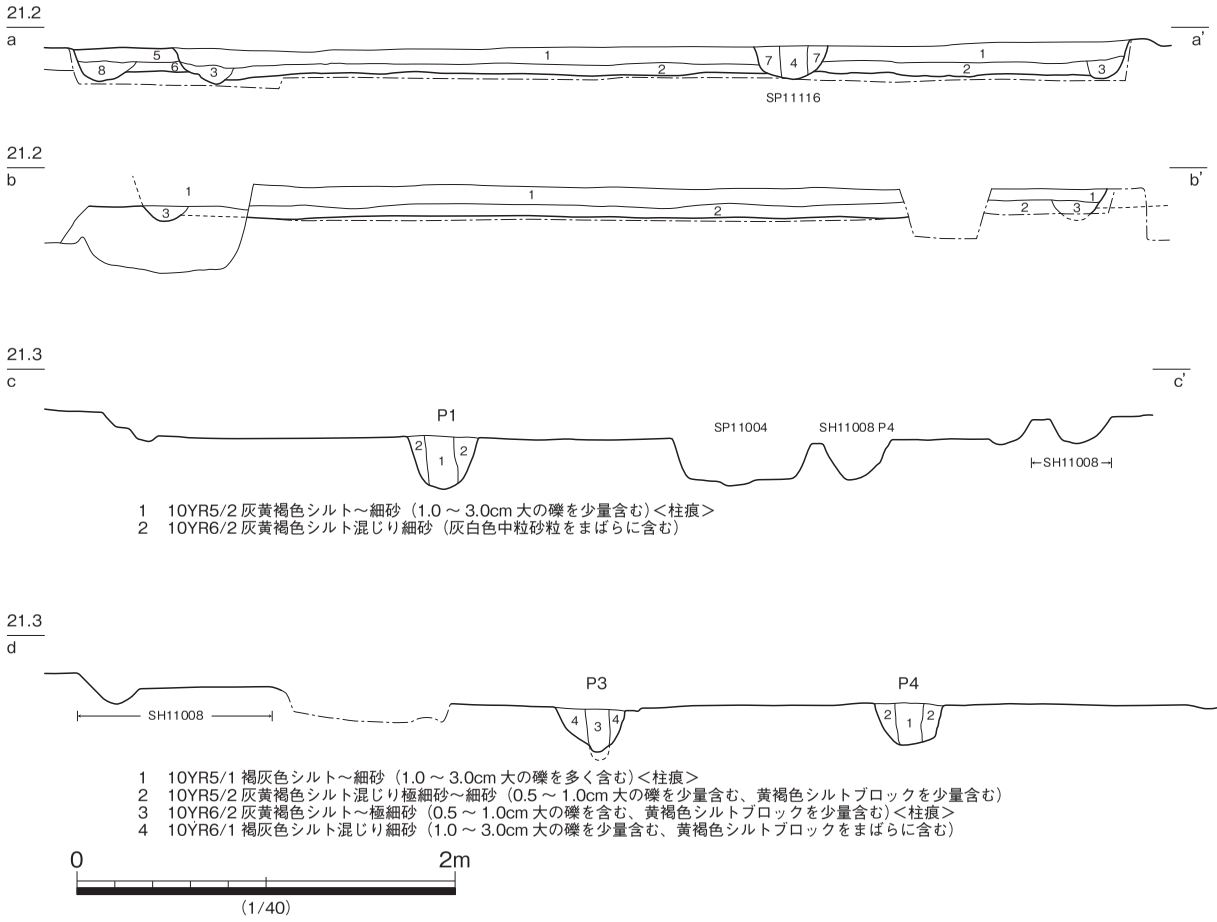
第 78 図　SH11007 平面図（1/40）

～ 16cmである。

壁溝は、SH11007 による破壊を免れた部分では全体で検出した。貼床面の上面から掘り下げられる。幅約 20cm、深さ 10cm程度を測る。

埋土中からは土師器甕片が出土した。遺物の出土量は少なかった。

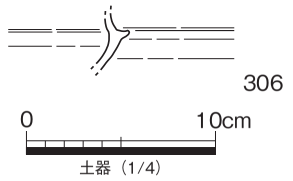
遺構の時期は SH11007 より古いが、規模、形状が類似しており、SH11007 とそれほど時期差はないであろう。周辺の検出状況から 6 世紀後半～ 7 世紀初頭と考えられる。



a-a' b-b'
1 10YR4/1 褐灰色シルト混じり細砂（0.5 ～ 1.0cm 大の礫をまばらに含む、灰白色シルトブロックを含む）
2 10YR6/2 灰黄褐色シルト～細砂（0.5 ～ 1.0cm 大の礫を含む、黄褐色シルトブロックを多く含む）＜貼床＞
3 10YR4/1 褐灰色シルト混じり極細砂～細砂（灰白色シルトブロックを含む）＜壁溝＞
4 10YR5/1 褐灰色シルト混じり細砂（0.5 ～ 1.0cm 大の礫を少量含む）＜SP11116 柱痕＞
5 10YR5/2 灰黄褐色シルト混じり極細砂～細砂（0.5 ～ 1.0cm 大の礫を少量含む）<SH11008>
6 10YR5/1 褐灰色シルト混じり細砂（1.0 ～ 3.0cm 大の礫を含む、灰褐色シルトブロックを含む）＜SH11008 貼床＞
7 10YR4/2 灰黄褐色シルト混じり極細砂（0.5 ～ 0.5cm 大の礫を含む、炭化物細片をわずかに含む）＜SP11116>
8 10YR4/2 灰黄褐色シルト混じり極細砂～細砂（1.0 ～ 1.5cm 大の礫を少量含む、黄褐色シルトブロックをまばらに含む）
＜SH11008 壁溝＞

1 10YR5/2 灰黄褐色シルト～細砂（1.0 ～ 3.0cm 大の礫を少量含む）＜柱痕＞
2 10YR6/2 灰黄褐色シルト混じり細砂（灰白色中粒砂粒をまばらに含む）

1 10YR5/1 褐灰色シルト～細砂（1.0 ～ 3.0cm 大の礫を多く含む）＜柱痕＞
2 10YR5/2 灰黄褐色シルト混じり極細砂～細砂（0.5 ～ 1.0cm 大の礫を少量含む、黄褐色シルトブロックを少量含む）
3 10YR6/2 灰黄褐色シルト～極細砂（0.5 ～ 1.0cm 大の礫を含む、黄褐色シルトブロックを少量含む）＜柱痕＞
4 10YR6/1 褐灰色シルト混じり細砂（1.0 ～ 3.0cm 大の礫を少量含む、黄褐色シルトブロックをまばらに含む）



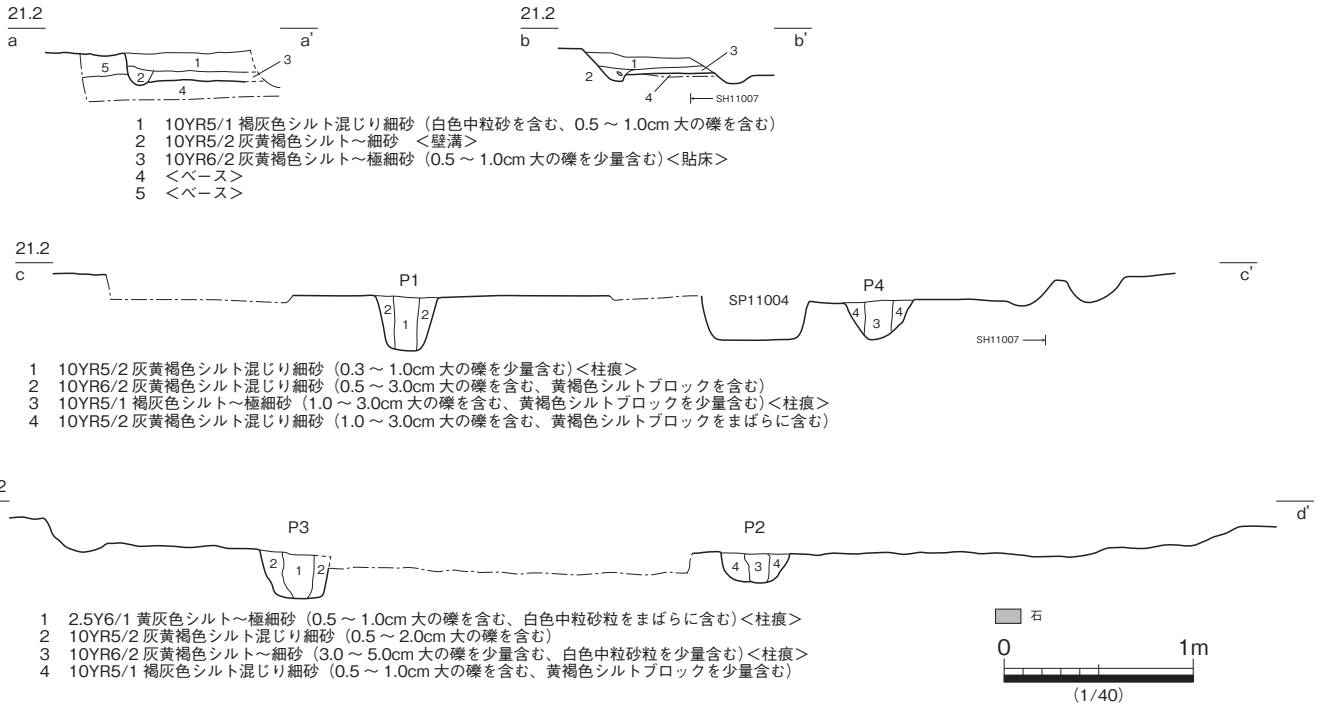
第 79 図　SH11007 断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

第 80 図　SH11008 平面図（1/40）

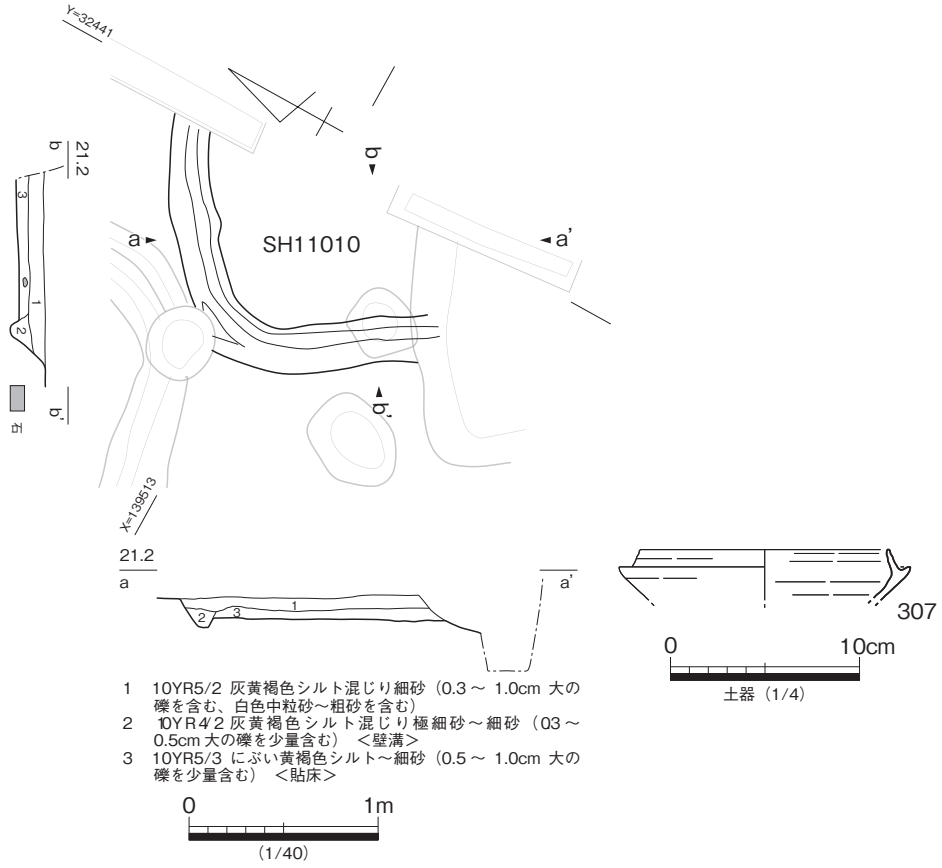
11 区 SH11010（第 82 図）

11 区 SH11008 の東南隅に接して検出した竪穴建物の一部である。北西隅のみ検出したが、1 区側では検出できなかった。また、南側の大部分は SH1501 により消失する。1 区東壁土層でも該当する層位は認められず、東西方向の範囲は SH1501 の中に収まると考えられる。南北 1.3m 以上、東西 1.2m 以上、主軸方位は、残存部分では N29.13° W である。

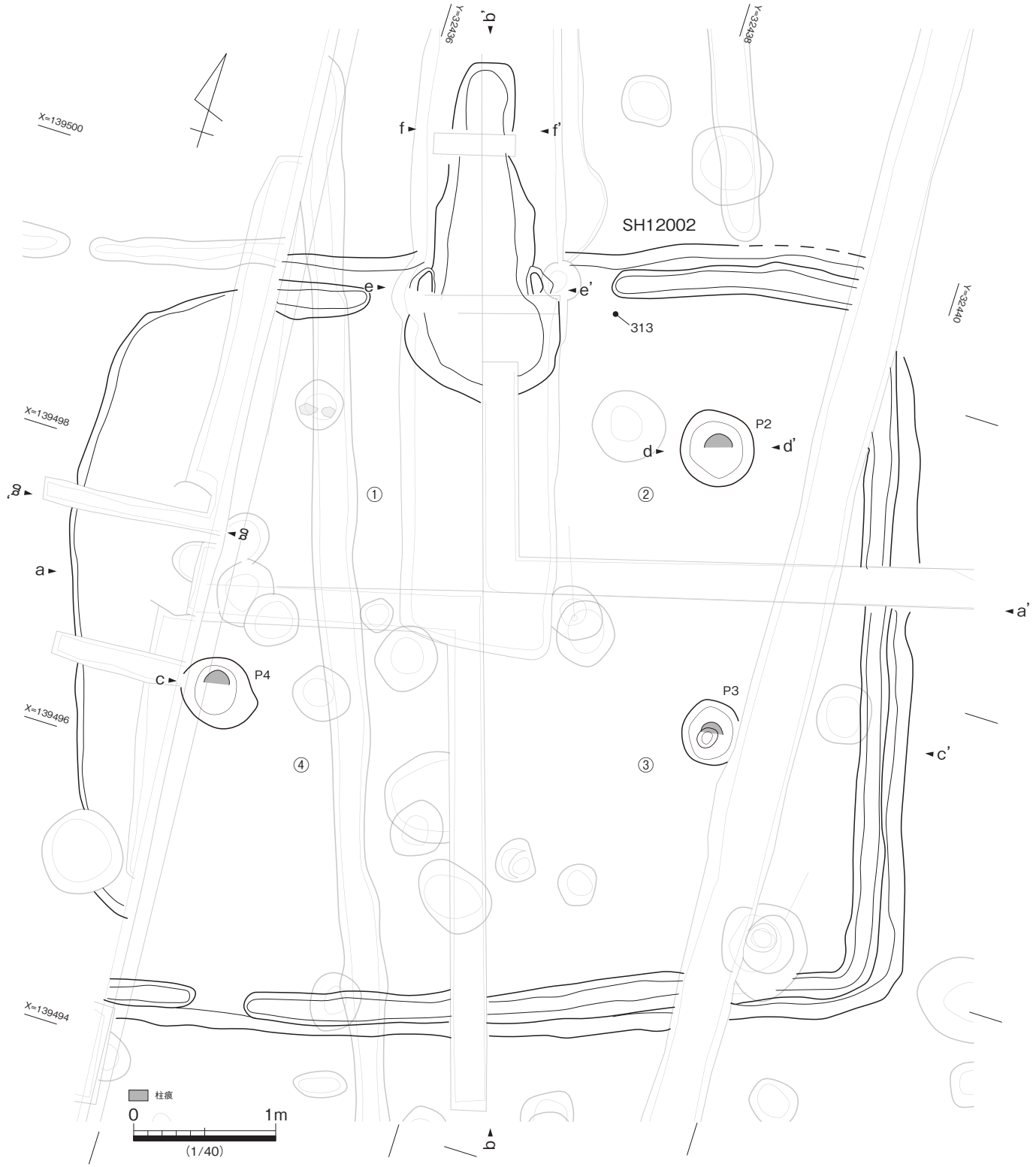
遺構面から 6 ～ 8cmの深さで貼床面を検出した。貼床層は約 6cmを測る。壁溝は建物の外側ラインに



第 81 図　SH11008 断面図（1/40）



第 82 図　SH11010 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）



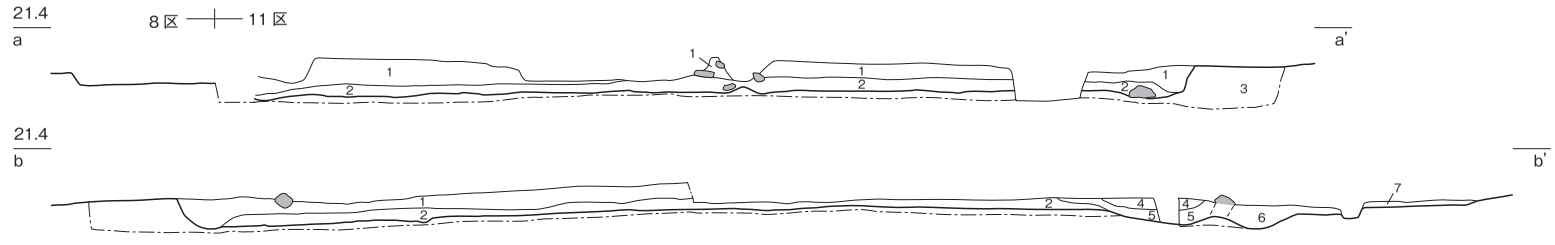
第 83 図　SH12002 平面図（1/40）

沿って検出した。貼床の上面から掘り込まれる。幅約 20㎝、深さ 10㎝を測る。

埋土中からは土師器・須恵器杯身小片が出土した。

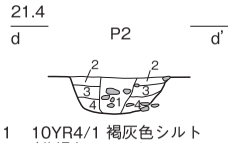
307 は須恵器杯身。6 世紀末（Ⅱ -4 期）頃と考えられる。

遺構の時期は、出土遺物により 6 世紀末と考えられる。

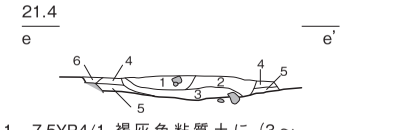


a-a' b-b'
1 10YR4/1 褐灰色シルト（2 ～ 3cm 大の黄褐色シルトブロックを含む、1 ～ 2cm 大の礫含む）
2 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト（2 ～ 3cm 大の礫少し含む、灰白色のシルト粒含む） ＜貼床＞
3 ＜ベース＞
4 2.5Y5/6 黄褐色粘質土（焼土ブロックを含む）
5 7.5YR3/2 黒褐色粘質土（焼土ブロックを含む）
6 7.5YR4/2 灰褐色粘質土（黄褐のシルトブロックを含む）
7 10YR4/1 褐灰色シルト（黄褐シルトブロックを含む）
＜竈＞

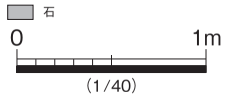
1 10YR4/2 灰黄褐色極細砂（2 ～ 5cm 大の礫少し含む）
2 10YR4/2 灰黄褐色細砂（3 ～ 5cm 大の礫多く含む）
＜柱痕＞
3 10YR3/2 黒褐色シルト（1 ～ 2cm 大の礫少し含む）
4 10YR4/1 褐灰色シルト（にぶい黄橙色のシルトブロック含む）
5 10YR5/1 褐灰色極細砂（1 ～ 2cm 大の小礫少し含む） ＜柱痕＞
6 10YR6/1 褐灰色シルト（黄橙色シルト粒を少し含む、1 ～ 2cm 大の礫少し含む）



1 10YR4/1 褐灰色シルト（黄褐色シルトと 3 ～ 5cm 大の礫多く含む） ＜柱痕＞
2 10YR3/1 黒褐色シルト（黄褐色のシルト粒少し含む）
3 10YR5/1 褐灰色シルト（2 ～ 4cm 大の礫少し含む）
4 10YR3/1 黒褐色シルト（黄褐色のシルトブロック、1 ～ 3cm 大の礫多く含む）

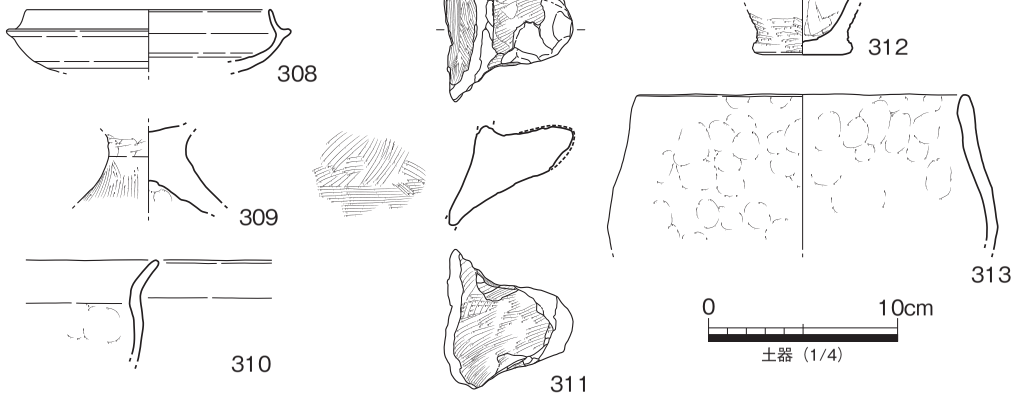


1 7.5YR4/1 褐灰色粘質土に（3 ～ 5cm 大の黄色、橙色の粘質土を多く含む（煙道））
2 7.5YR5/2 灰褐色粘質土（2 ～ 3cm 大程の橙色の粘質土ブロックを多く含む）
3 7.5YR3/1 黒褐粘質土（1cm 大程の橙色の粘質土を含む）
＜燃焼部＞
4 7.5YR8/1 灰白色粘質土に褐灰色細粒シルトを少し含む
5 7.5YR6/1 褐灰色シルト（黄灰色の粘質土ブロックを含む）
＜竈袖部＞
6 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト（2 ～ 3cm 大の礫少し含む、灰白色のシルト粒を含む） ＜貼床＞

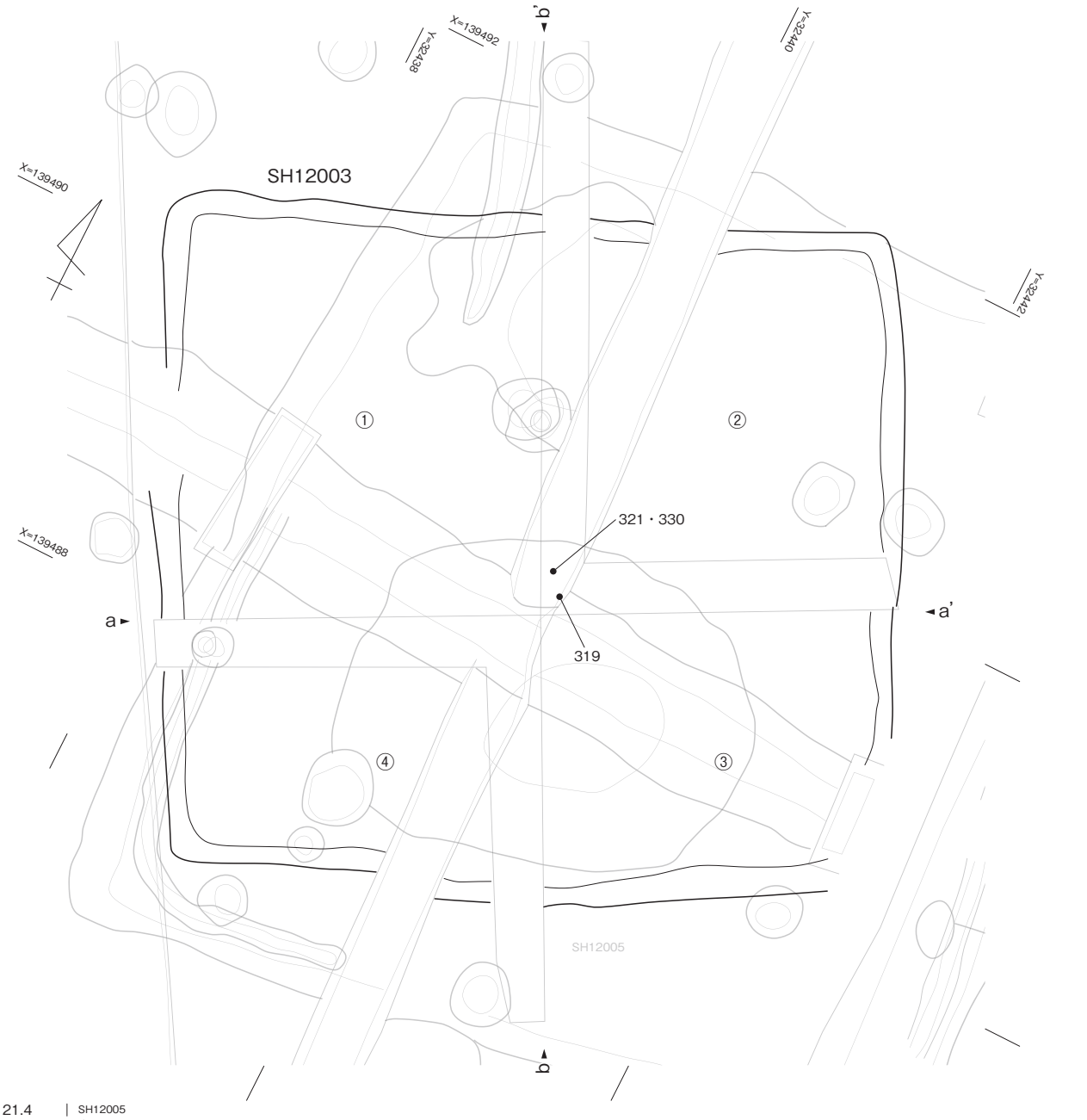


1 10YR4/1 褐灰色シルト（10YR3/1 黒褐色のシルトブロック、2 ～ 3cm 大の礫少し含む）

1 10YR4/3 にぶい黄褐色シルトに 7.5YR5/4 にぶい黄褐色粘質土（焼土）、7.5YR4/3 褐色粘質土（焼土）がまだらに混じる
2 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 0.5 ～ 2cm 大の礫含む



第 84 図　SH12002 断面図（1/40）、出土遺物（1/4）



1　10YR7/3 にぶい黄橙色シルト（3 ～ 4cm 大の礫少し含む、遺物・炭化物を比較的多く含む）
2　10YR4/3 にぶい黄褐色シルトに黒褐のシルトブロック（1 ～ 5cm 大の礫を含む）
3　10YR5/3 にぶい黄褐色シルトに黒褐のシルトブロック（炭化物を含む）
4　10YR5/1 褐灰色細砂粒混じりシルト（黄褐のシルトブロックを少し含む、1cm 大程の礫を含む）
5　10YR3/1 黒褐色極細砂（2 ～ 3cm 大の黄褐のシルトブロックをわずかに含む、1 ～ 5cm 大の礫を含む（所により多い）、遺物含む）
6　7.5YR4/3 褐色極細砂（1 ～ 3cm 大程の礫を含む（7 層とよく似る））
7　7.5YR4/2 灰褐色極細砂（1cm 大程の礫を含む、遺物含む）
8　SH12005 壁溝
9　ベース
<SH12005>

第 85 図　SH12003 平・断面図（1/40）

12 区・8 区 SH12002（第 83・84 図）

12 区北部と 8 区にまたがって、SH11001 の 3.5m南側で検出した。8 区では 2 面で検出した。8 区と 12 区の境付近の SH12002 の南西隅の角がややずれるが、建物規模は検出範囲が多い 12 区に合わせて記述する。南北 5.91m、東西 5.53m、主軸方位は N16.54° W、面積は 31.16㎡である。遺構面から 10cm 程度の深さで貼床面を検出した。貼床層は約 6cmを測る。

北側に竈を構築する。竈の袖部は、建物ライン際の内側で僅かに検出したのみで、建物内では燃焼部と考えられる楕円形の落ち込み、建物外では煙道の痕跡として隅丸長方形の落ち込みが認められた。残存する竈の幅は 1.0m、残存長は 0.2m、袖部の裾幅は 15cm程度、建物内に残る燃焼部の落ち込みは楕円形で、長軸 1.1m、短軸 0.9m、深さ 6 ㎝程度を測る。建物外で検出した煙道の痕跡は延長 1.34m、幅 0.45 ～ 0.7m、深さは 3cm程度である。

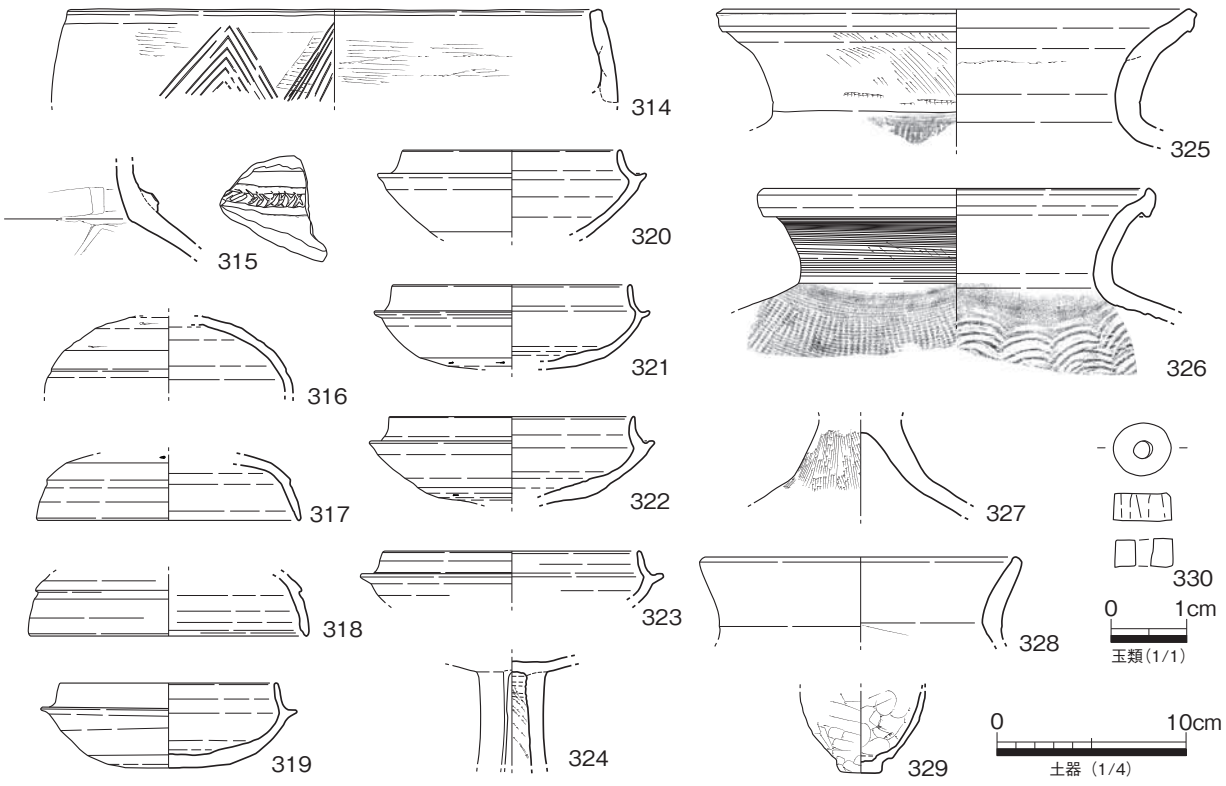
主柱穴は方形に 4 穴が配置されたと考えられるが、北西の 1 穴は検出していない。柱穴間の距離は南北 2.06m、東西 3.56m、柱穴は円形で、直径 44 ～ 50cm、深さ 14 ～ 22cm、柱痕跡の直径は 16cm程度である。

壁溝は 8 区に相当する西側以外の北･東･南辺で、建物の外側ラインの 10 ～ 15cm程度内側で検出した。a-a' ・ b-b' 断面から、貼床の上面から掘り下げたと考えられる。幅 18 ～ 24cm、深さ 8cmを測る。

埋土中からは須恵器杯身・甕片、土師器甕・高杯片、製塩土器などが出土した。SH11001 と同様土師器の割合が多めである。

308 ～ 313 はいずれも埋土中から出土した遺物である。308 は須恵器杯身。6 世紀末（Ⅱ -4 期）頃。309 ～ 311 は土師器。309 は高杯脚部。310 は甕。311 は甕または甑の把手。312 は弥生土器底部。外面に平行タタキを施す。313 は製塩土器。内外面ともに指押さえ痕が顕著である。

遺構の時期は、出土遺物により 6 世紀末頃と考えられる。



第 86 図　SH12003 出土遺物（1/4・1/1）

第 87 図　SH12004 平・断面図（1/40）

12 区 SH12003（第 85・86 図）

12 区南端付近で検出した。2 面で検出した。SH12005 を掘り込み、これより新しい。方形で南北 4.24 m、東西 4.51m、主軸方位は N27.27 ° W、面積は 18.61㎡である。遺構面から深さ 14㎝程度で床面を検出した。貼床層は認められなかった。

竈は検出しなかった。平面的な広がりは明らかではないが、a-a'、b-b' 断面によれば、中央やや南寄りの位置で東西約 0.64m、南北約 0.26m、深さ 6㎝の範囲で炭化物を含む掘り込みが認められる。主柱穴および壁溝も検出しておらず、建物に付随する施設はなにも確認できなかった。

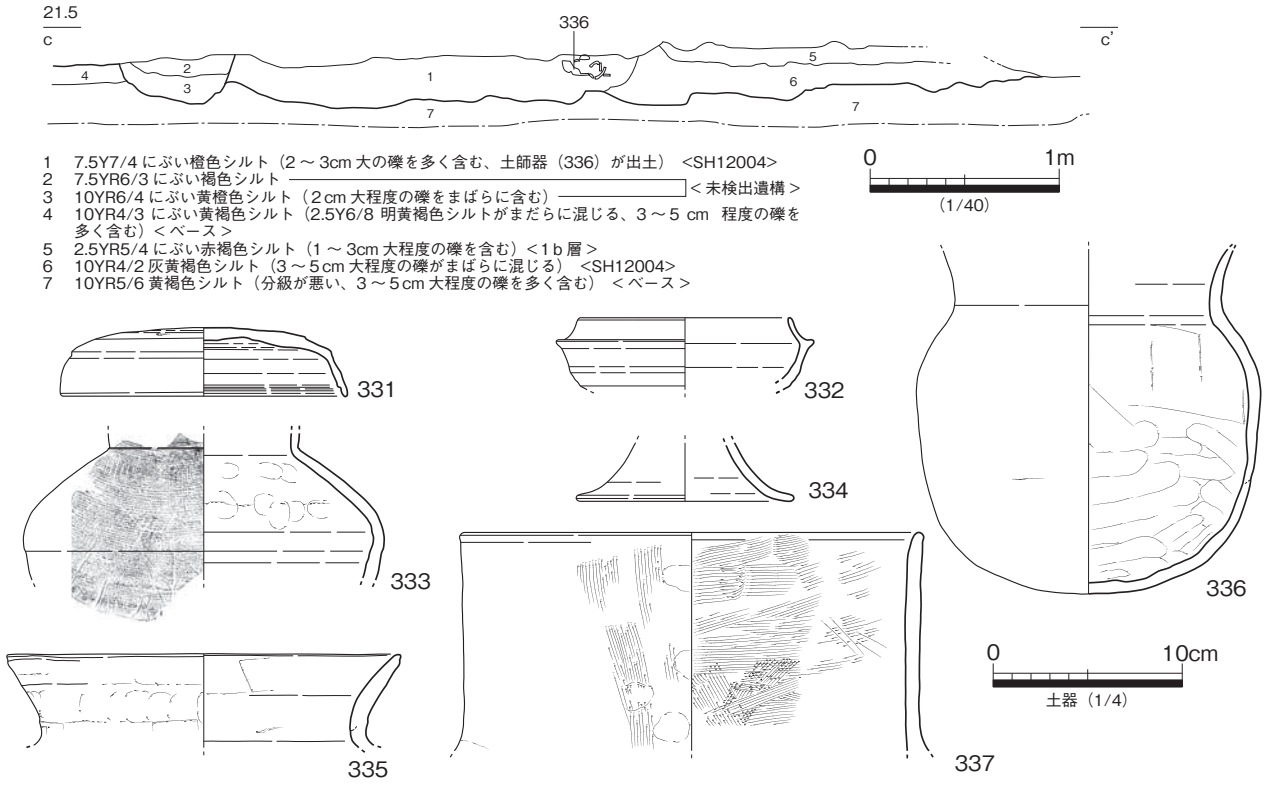
埋土中からは弥生土器、須恵器杯蓋・杯身・甕、製塩土器などが出土した。出土遺物量はやや多い。

314 ～ 330 は埋土中から出土した。314・315 は弥生土器壺。314 は二重口縁の立ち上がり部分で、外面に鋸歯状のヘラ描きを施す。315 は頸部に突帯を巡らせ、突帯上に綾杉状のヘラ描き文を施す。弥生時代後期後半。316 ～ 326 は須恵器。316 ～ 318 は杯蓋。316 は 7 世紀初頭（Ⅱ -5）頃。317・318 は肩部にわずかに段を付けるが、形骸化が著しい。口縁端部内面には段はほとんど認められない。6 世紀後半（Ⅱ -3 期）頃。319 ～ 323 は須恵器杯身。6 世紀後半～末（Ⅱ -3 ～ 4 期）頃。324 は長脚の高杯脚部と杯部の連結部付近。脚部には長方形の透かし孔が 2 ヶ所に認められる。外面には自然釉が認められる。325・326 は甕。325 は頸部にハケ目状の工具痕が残る。326 は頸部にタタキ後カキ目を施す。327 ～ 329 は土師器。327 は高杯。328 は甕。329 はミニチュア鉢。330 は臼玉。滑石製。

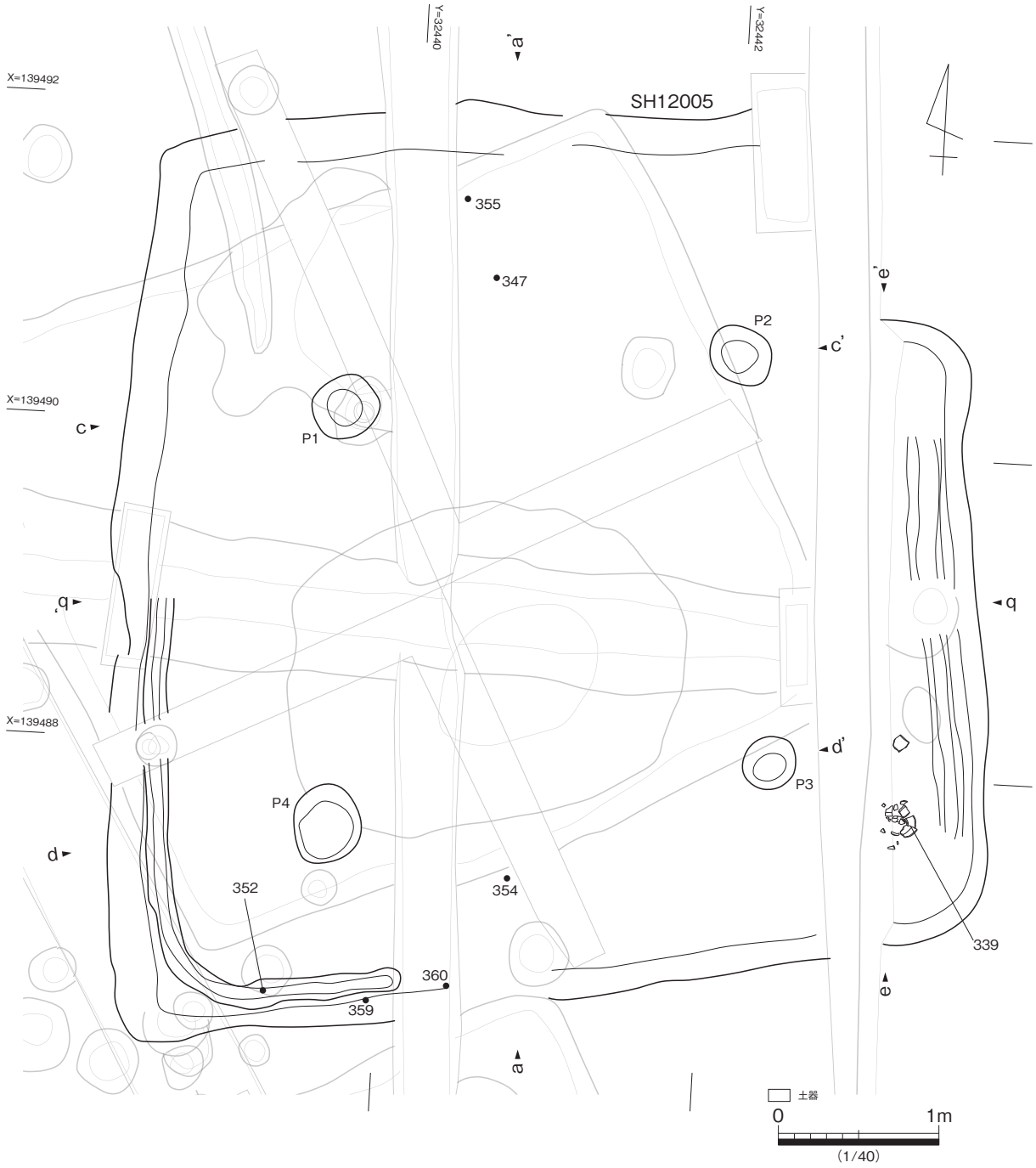
SH12005 を掘り込むことを考え併せれば、遺構の時期は、出土遺物から 7 世紀初頭と考えられる。

12 区 SH12004（第 87・88 図）

12 区南端付近で検出した。2 面で検出した。隣接する 7 区では検出できず、壁面での確認にとどまった。方形で南北 3.89m 以上、東西 5.56m、主軸方位は N28.15° W で、面積は 19.65㎡以上である。遺構



第 88 図　SH12004 断面図（1/40）、出土遺物（1/4）



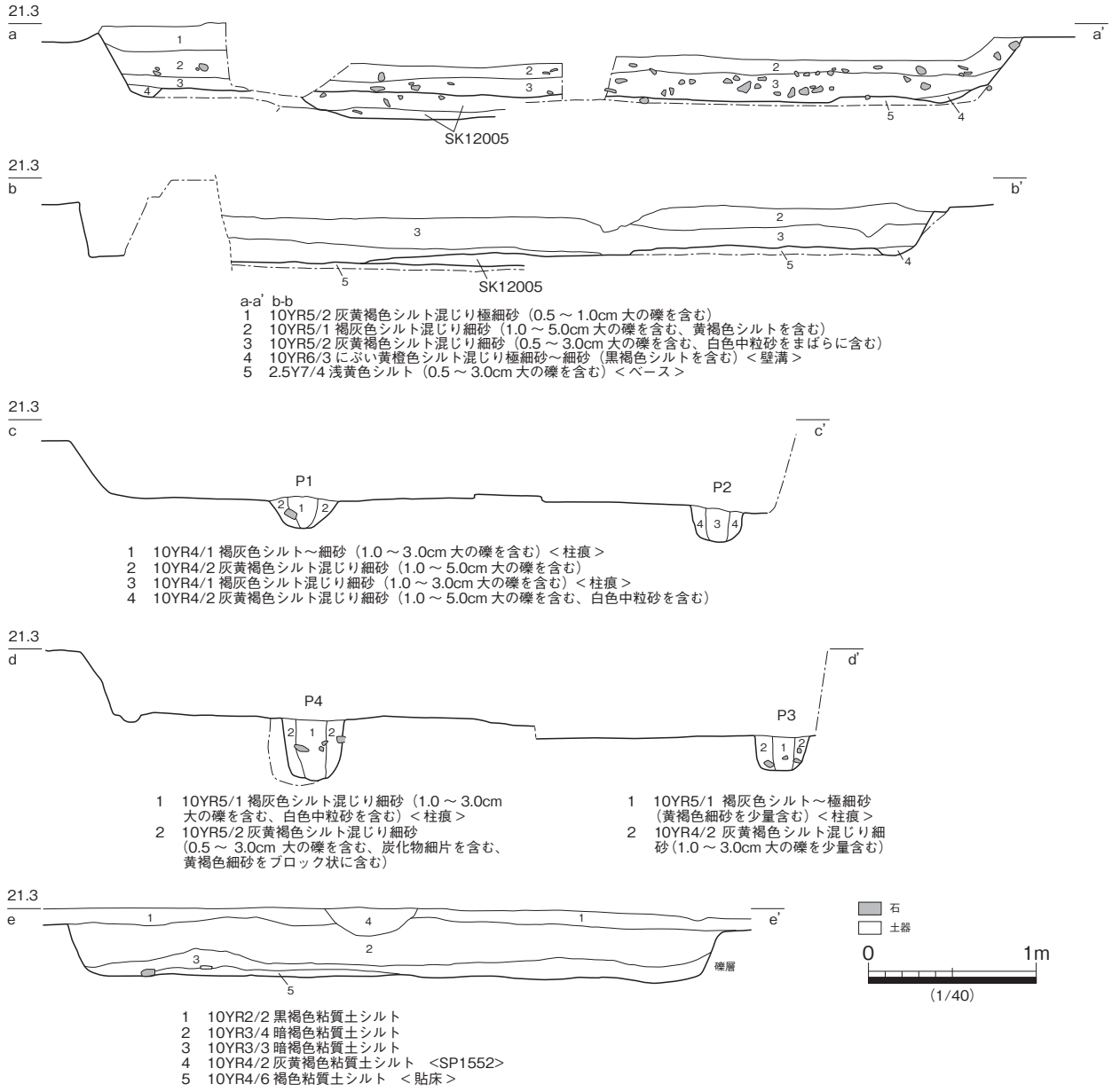
第 89 図　SH12005 平面図（1/40）

面から 10㎝程度の深さで床面を検出した。貼床は認められなかった。

建物に伴う竈、主柱穴、壁溝は検出されなかった。埋土中からは、須恵器杯蓋･杯身などが出土した。

331 ～ 337 は埋土中から出土した。331 ～ 333 は須恵器。331 は杯蓋。肩部、口縁端部内面にはわずかに段を持つ。332 は杯身。6 世紀後半～末（Ⅱ -3 ～ 4 期）頃。333 は壺。体部は縦方向タタキ後カキ目を施す。7 世紀前半（Ⅱ -6 期）頃か。334 ～ 337 は土師器。334 は高杯。335・336 は甕。336 は 7 区の調査中に 7 区北壁断面から出土したものである。337 は甑。把手部分がわずかに残る。

333 はやや新しい時期を示すと考えられるが、遺構の時期は、概ね 6 世紀末～ 7 世紀初頭頃と考えら



第 90 図　SH12005 断面図（1/40）

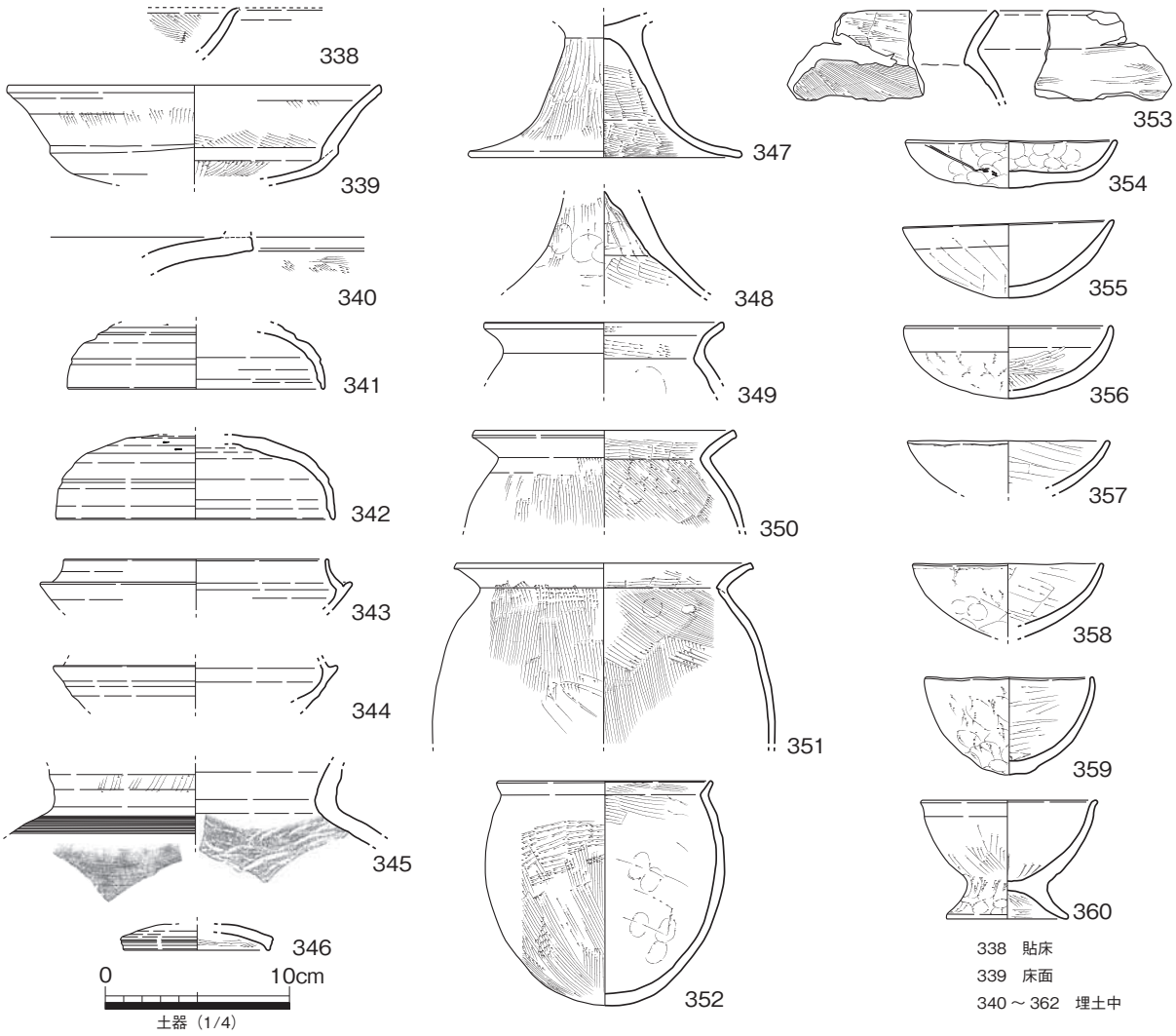
れる。

12 区・1 区 SH12005（第 89 ～ 92 図）

12 区南部で検出した。2 面で検出した。SH12003 と重複して検出し、これに掘り込まれる。東接する 1 区へわずかに伸びるが、北側のラインはやや合致しなかった。方形で、南北 5.45m、東西 5.25m、主軸方位は N1.37° W で、面積は 29.06㎡である。遺構面から 40cm程度の深さで床面を検出した。貼床の可能性がある層位は、e-e' 断面で認められる。竈は検出しなかった。

主柱穴はやや歪んだ方形に配置する 4 穴で、柱穴間の距離は南北 2.55 ～ 2.61m、東西 2.44 ～ 2.83m を測る。柱穴は概ね円形で、直径 32 ～ 46cm、深さ 18 ～ 36cm、柱痕跡の直径は 14 ～ 18cmである。壁溝は南西部と東辺で、建物のラインから 20cm程度内側で検出した。幅 16cm、深さ 6cmを測る。

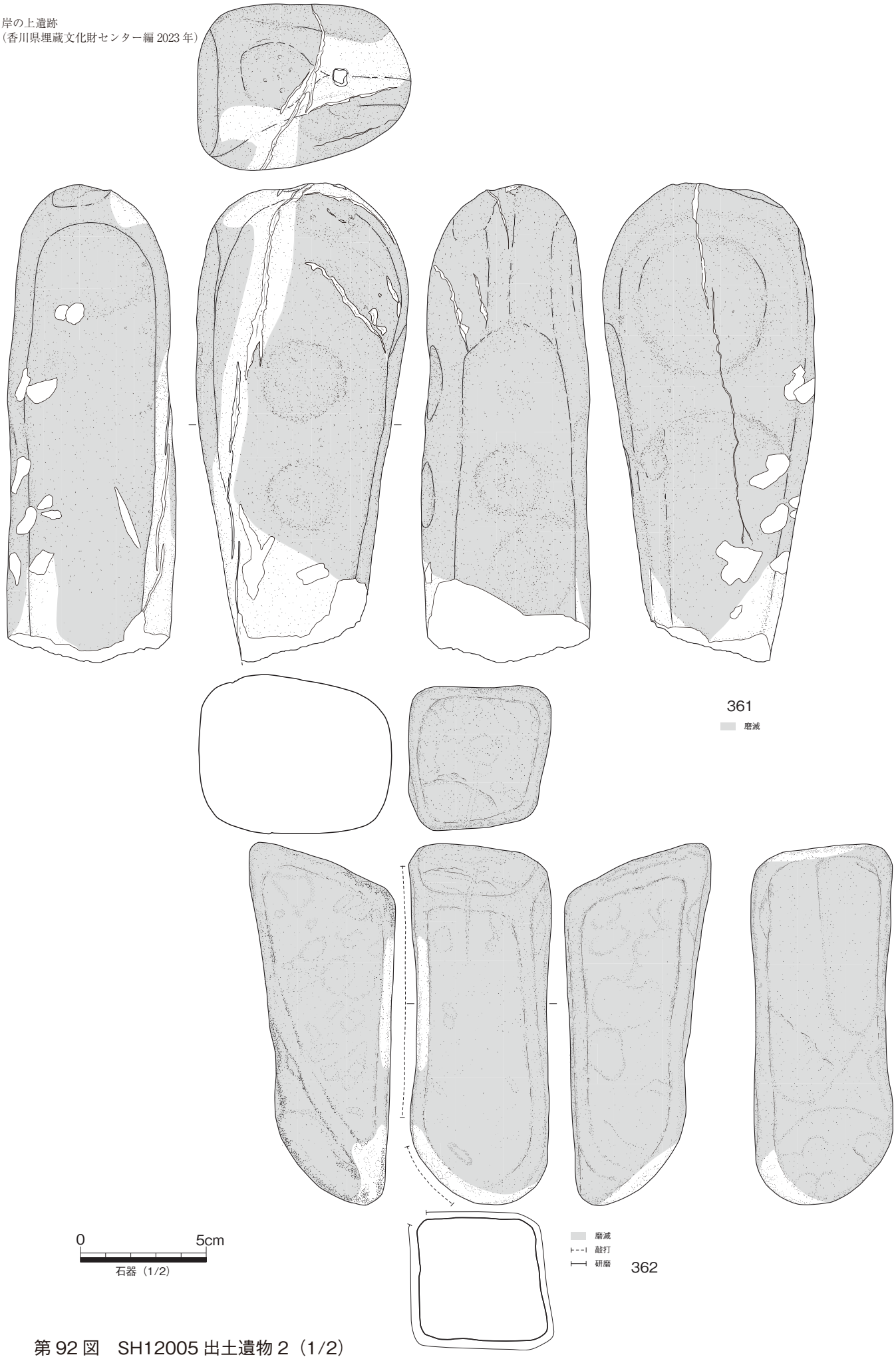
埋土中からは弥生土器、須恵器、土師器、鉄滓などが出土した。



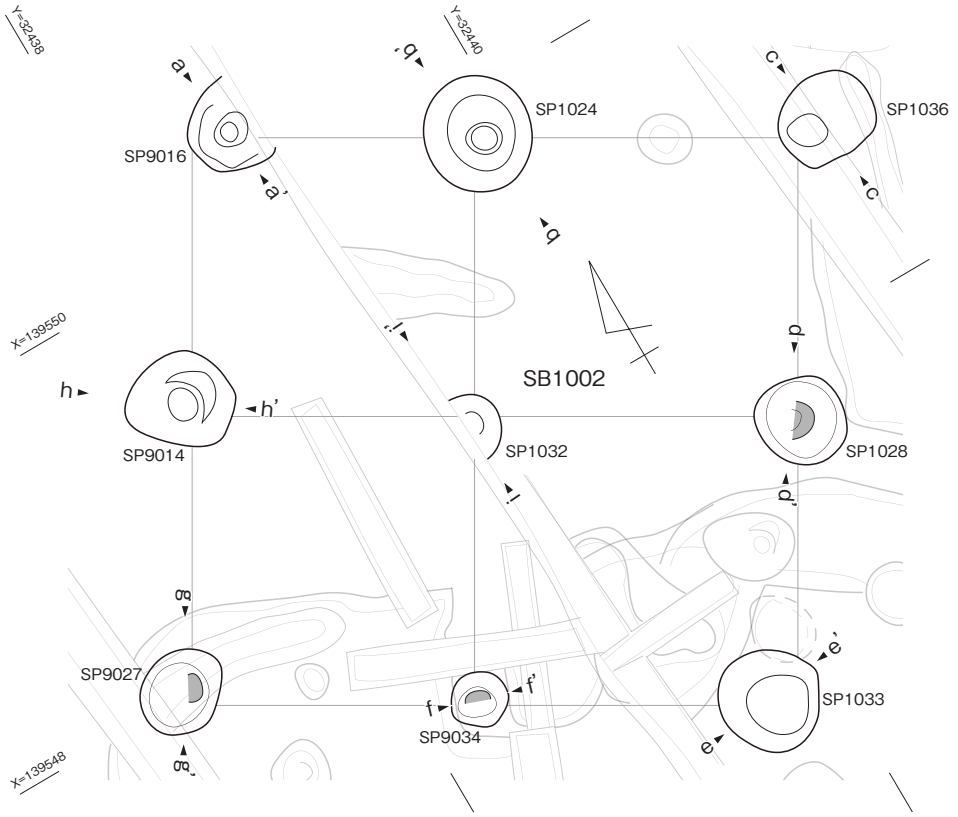
第 91 図　SH12005 出土遺物 1（1/4）

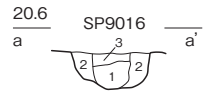
338 は貼床層から出土した。弥生土器鉢小片。339 は床面から出土した。弥生土器高杯杯部。内外面には縦方向のヘラ磨きが施される。弥生時代後期後半。340 ～ 362 は埋土中から出土した。340 は弥生土器壺口縁部小片。端部上面に剥離痕が認められ、二重口縁壺であったと考えられる。弥生時代終末期。341 ～ 345 は須恵器。341・342 は杯蓋。肩部外面と口縁端部内面に段を持つ。343・344 は杯身。6 世紀後半～末（Ⅱ -3 ～ 4）頃。345 は甕。頸部に縦方向のタタキ痕を残し、体部はカキ目を施す。346 は土師器蓋。径が小さいもの。347 ～ 360 は弥生土器。347･348 は高杯脚部。349 ～ 353 は甕。352 はやや小型。350・351 は同一個体の可能性もある。354 は手捏ねの皿状の器形。指押さえ痕が顕著で、歪みがある。355 ～ 359 は鉢。360 は台付鉢。概ね弥生時代終末期。弥生土器は弥生時代後期後半～終末期と考えられるが、埋土中から須恵器も一定量出土することから、混入と考えられる。361・362 は砂岩。全体に摩滅痕が認められ、砥石として使用したと考えられる。

遺構の時期は、出土遺物から 6 世紀後半～末頃と考えられる。

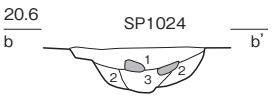


第 92 図　SH12005 出土遺物 2（1/2）

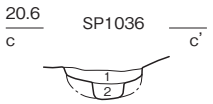




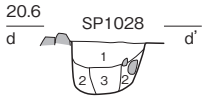
1　7.5YR3/3 暗褐色粗砂　＜柱痕＞
2　7.5YR4/2 灰褐色細砂
3　7.5YR6/2 灰褐色粗砂　＜柱痕＞



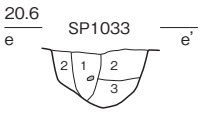
1　10YR3/4 暗褐色小礫混じりシルト＜1b 層＞
2　10YR3/2 黒褐色粘質シルト（礫 1cm 大の小礫混じる）
3　10YR2/3 黒褐色粘質シルト（10YR4/3 にぶい黄褐色がまだらに混じる）＜柱痕＞



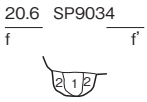
1　10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト（ごく少量の礫 1 ～ 2cm 大を含む）
2　10YR3/3 暗褐色（粘土質シルト砂を含む）＜柱痕＞



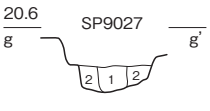
1　10YR3/3 暗褐色粘質土（5mm 大の小礫が混じる）＜1b 層＞
2　10YR3/4 暗褐色粘質土（1cm 大の小礫混じる）
3　10YR2/3 黒褐色粘質土（5mm 大の小礫混じる）＜柱痕＞



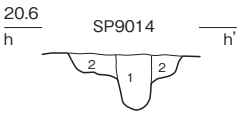
1　10YR3/3 暗褐色粘質シルト（3cm 大の小礫混じる）＜柱痕＞
2　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト
3　10YR3/2 黒褐色粘質シルト



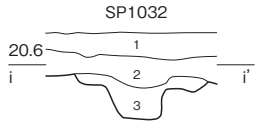
1　5YR6/1 褐灰色粗砂　＜柱痕＞
2　5YR2/2 黒褐色極粗砂



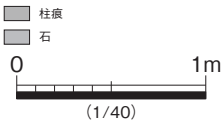
1　7.5YR5/3 にぶい褐色極細砂　＜柱痕＞
2　7.5YR3/1 黒褐色極細砂



1　7.5YR4/2 灰褐色極細砂＜柱 痕＞
2　7.5YR4/3 褐色細砂



1　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土（1cm 大礫含む）<1a 層＞
2　10YR2/3 黒褐色（2 ～ 5cm 大礫含む）<1b 層＞
3　10YR3/3 暗褐色（5 ～ 1cm 大礫含む）

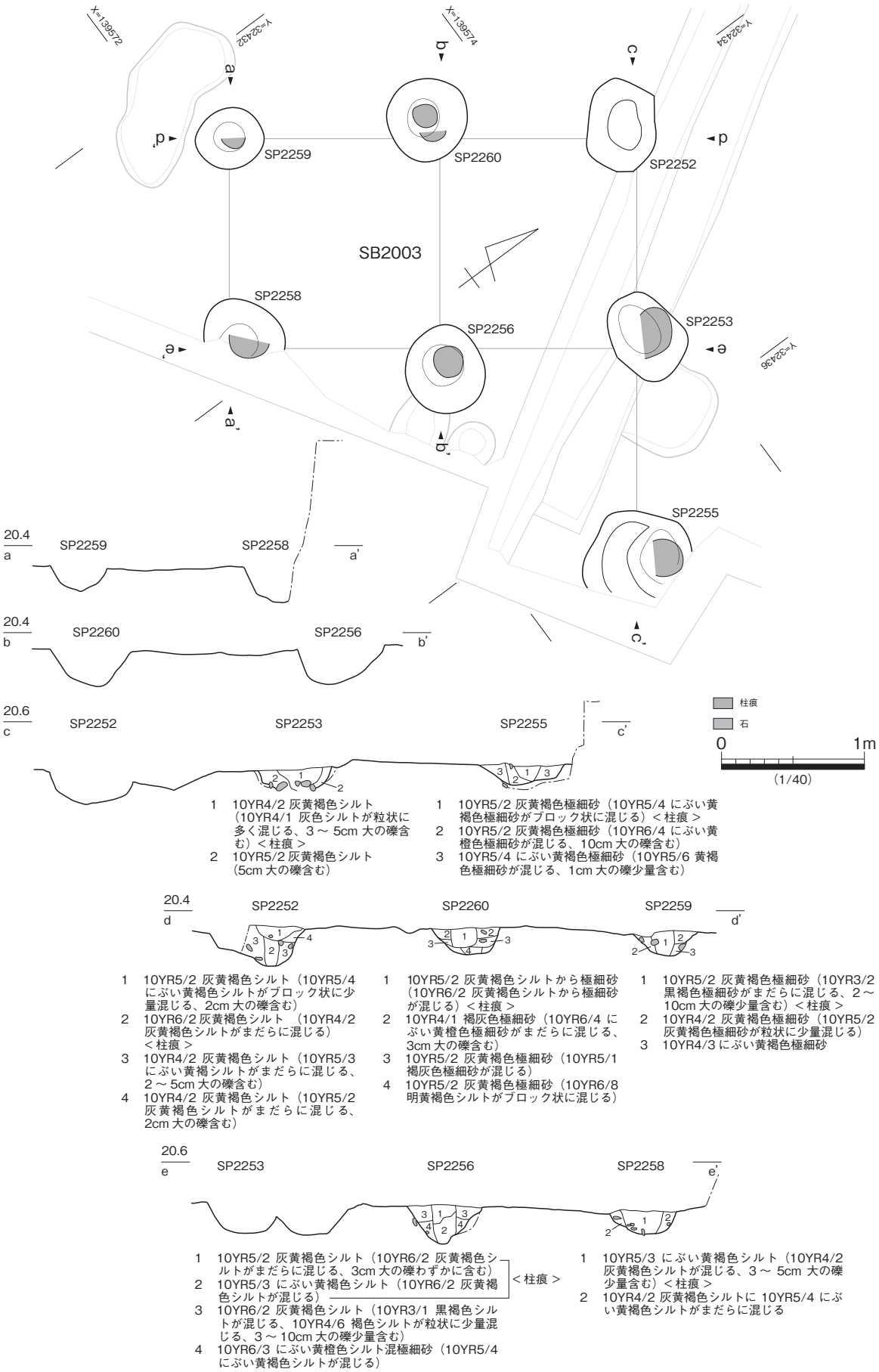


第 93 図　SB1002 平・断面図（1/40）

②掘立柱建物

1 区・9 区 SB1002（第 93 図）

1 区北部と 9 区北部にまたがって検出した掘立柱建物である。9 区では 2 面で検出した。やや方位は異なるが、約 2.7m 西側に同規模の総柱建物 SB9001 がある。SH9001 と重複する柱穴は、SH9001 の掘



第 94 図　SB2003 平・断面図（1/40）

り下げ後に検出しており、SH9001 より古いと考えられる。2 間× 2 間の総柱建物で、東西方向 3.16m、南北方向 3.02m を測る。主軸方位は南北方向で N35.26° E、面積は 9.36㎡である。柱間は、東西方向は 1.35 ～ 1.75m、南北方向は 1.50 ～ 1.52mで、東西方向はやや不揃いである。柱穴は円形または不整円形で、概ね長軸 30 ～ 60cm、短軸 30 ～ 60cm、深さ 16 ～ 26cm、柱痕跡の直径はほぼ 16 ～ 20cmである。

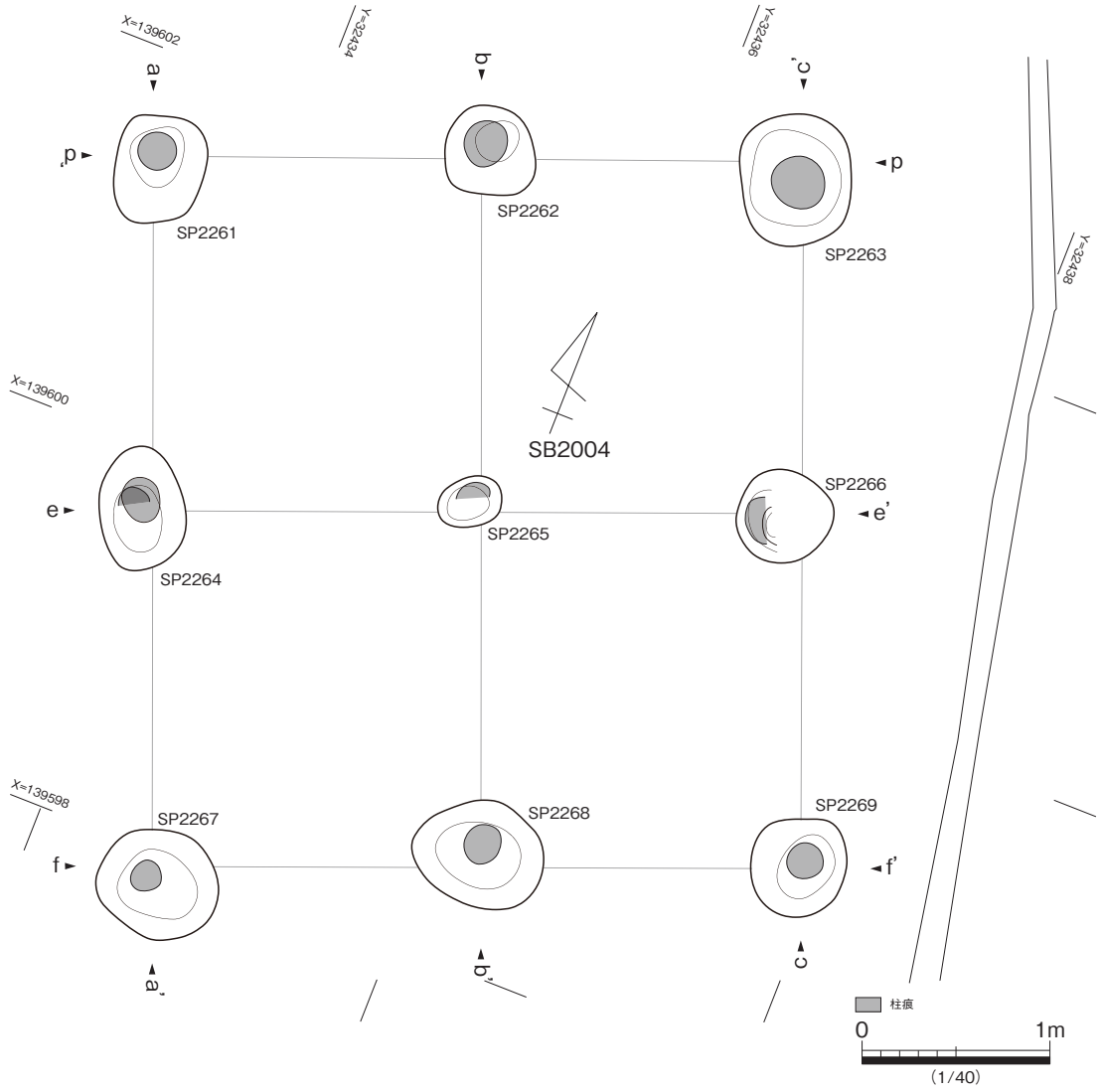
柱穴の埋土中からは須恵器甕片、土師器片が出土した。

遺構の時期は、9 区で 2 面で検出したこと、SH9001 より古いことから、7 世紀初頭以前と考えられる。

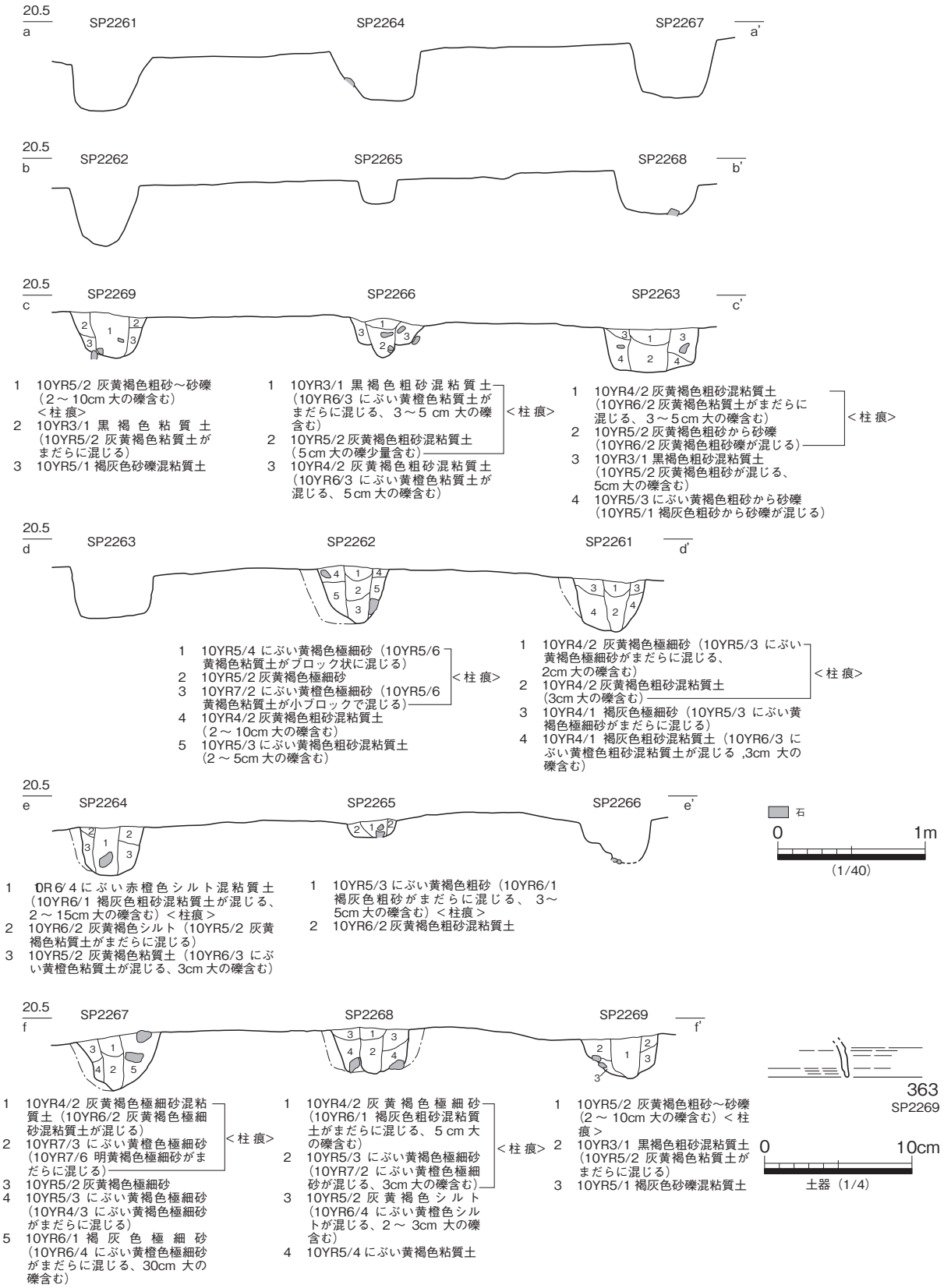
2 区 SB2003（第 94 図）

2 区南部で検出した。2 面で検出した遺構である。南側は調査区外へ延びるため、全体の規模は明らかではない。2 間以上× 2 間の総柱建物と考えられる。北西 - 南東方向は 3.02m 以上、北東 - 南西方向は 2.82m、主軸方位は N32.83° W で、面積は 8.46㎡以上を測る。柱間は東西方向が 1.50 ～ 1.53m、南北方向が 1.40mで、概ね均等である。柱穴は円形または楕円形で、長軸 46 ～ 80cm、短軸 46cm、深さ 12 ～ 26cm、柱痕の直径は 15cm程度である。埋土中からは須恵器杯蓋または杯身片・甕片、土師器小片が出土した。

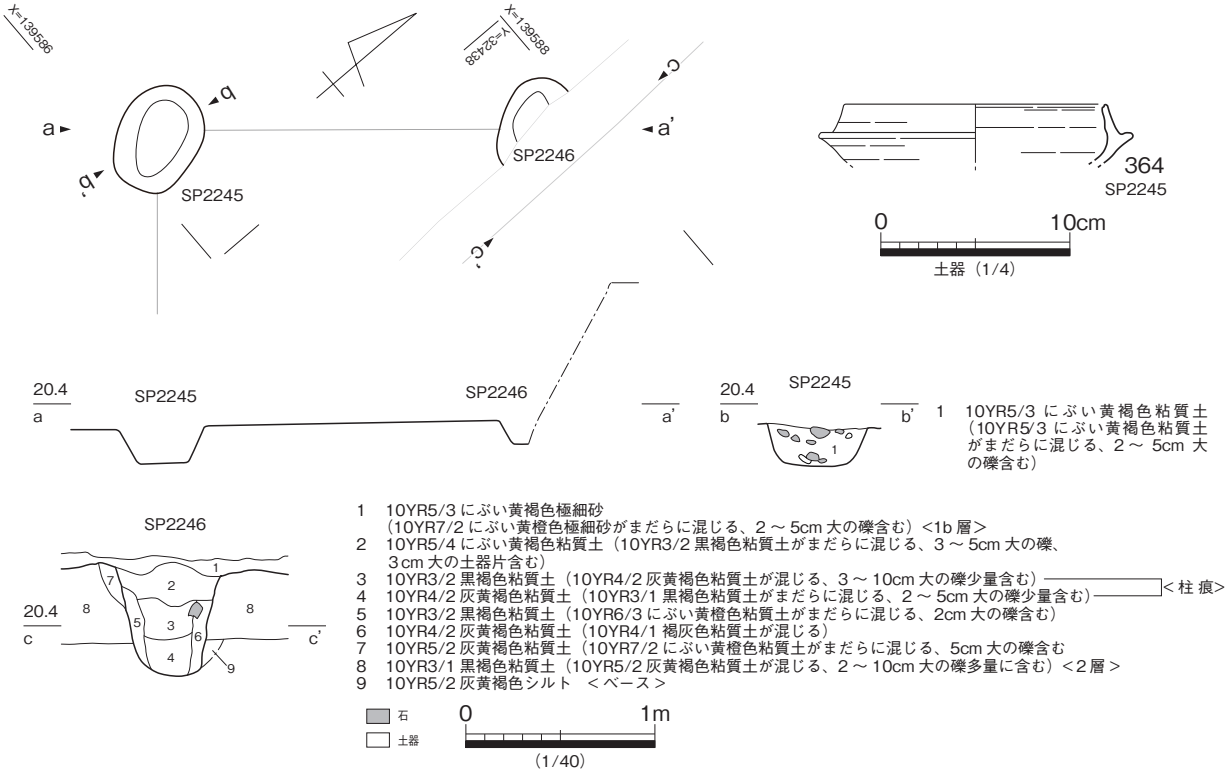
遺構の時期は、2 面で検出したことから、6 世紀後半～ 7 世紀前半以前と考えられる。



第 95 図　SB2004 平面図（1/40）



第 96 図　SB2004 断面図（1/40）、出土遺物（1/4）



第 97 図　SB2005 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

2 区 SB2004（第 95・96 図）

2 区北部で検出した。2 面で検出した遺構である。2 間× 2 間の総柱建物で、東西方向は 3.47 ～ 3.57m、南北方向は 3.63 ～ 3.92m、主軸方位は N21.12° W、面積は 13.29㎡である。南北方向の柱列は西側がやや長い。柱間は、東西方向は 1.71 ～ 1.86m、南北方向は 1.79 ～ 1.96 mである。柱穴は概ね楕円形・円形で、長軸 48 ～ 70cm、短軸 46 ～ 60cm、深さ 28 ～ 34cmを測る。中央の柱穴のみ長軸 36cm、短軸 26cm、深さ 16cmで規模が小さい。柱痕跡は 16 ～ 20cm程度である。

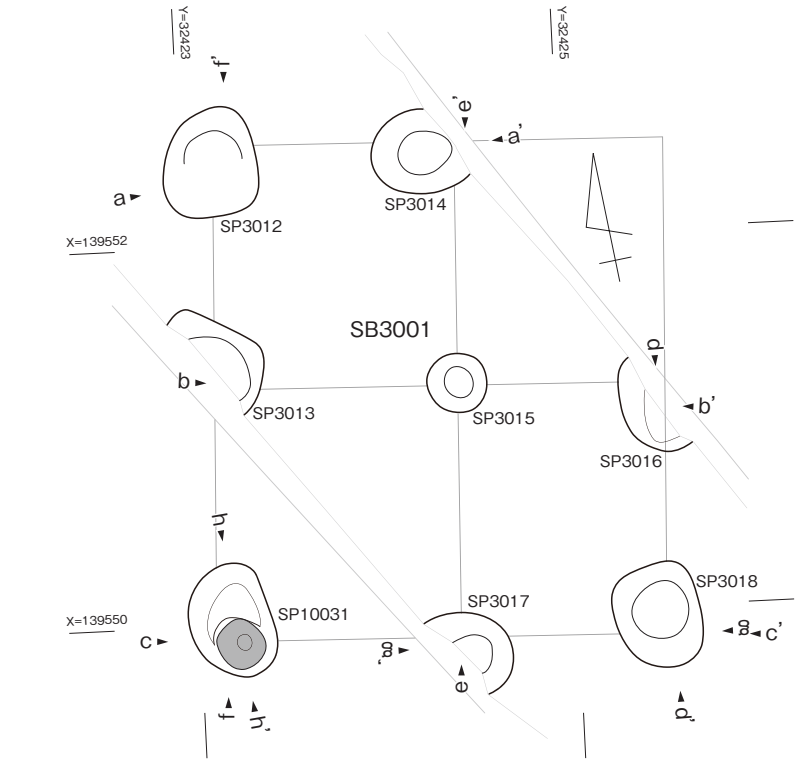
柱穴埋土中からは須恵器杯蓋または杯身片、その他須恵器片、土師器片が出土した。

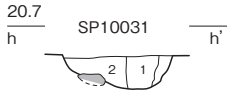
363 は SP2269 から出土した。須恵器杯蓋小片。肩部と口縁端部内面に緩い段を持つ。6 世紀後半頃か。

遺構の時期は、2 面で検出したことから、6 世紀後半～ 7 世紀前半頃と考えられる。出土遺物を考え併せれば 6 世紀後半頃と考えられる。

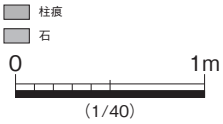
2 区 SB2005（第 97 図）

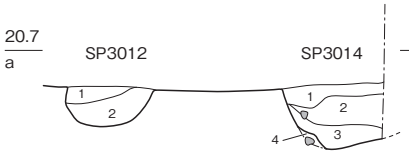
2 区南部で検出した。2 面で検出した遺構である。2 穴を検出したのみであるが、周囲に他に柱穴がないことや、検出した位置から、調査区外で掘立柱建物を構成する柱穴が存在する可能性が考えられることから、掘立柱建物とした。柱穴は南西・北東側柱穴列のうち 2 穴を検出したと考え、他の柱穴は調査区外へ延びると考えられる。桁行 1 間以上、柱列の長さは南西 - 北東方向は 1.95m 以上、北西 - 南東方向は 1.81m 以上、主軸方位は N37.82° E、面積は 2.05㎡以上である。柱穴は楕円形で、長軸 56cm、短軸 44cm、柱痕跡は 26cmである。柱穴の深さは、地表面からは 20cm程度であるが、西側壁面で観察できる SP2246 土層断面からは 58cmであった。



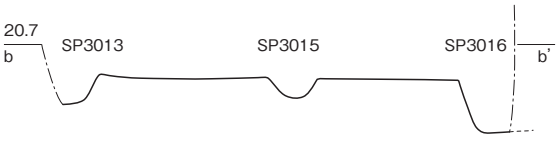


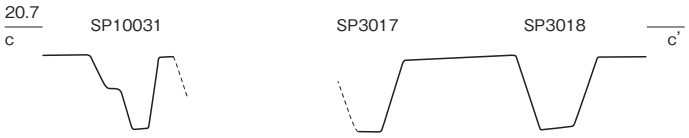
1 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト（10YR4/3 にぶい黄褐色シルトが混じる）＜柱痕＞
2 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂礫混じりシルト（0.5 ～ 3 ㎝大の礫が混じる）

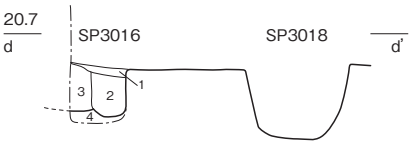




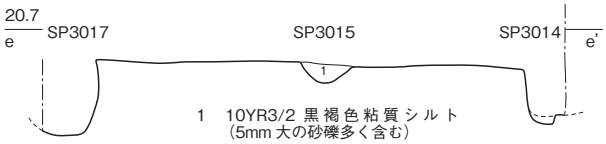
1 10YR2/3 黒褐色礫混じり粘質土（10YR7/8 黄橙色粘土及び 0.5 ～ 1 cm 大の砂礫を若干含む）
2 10YR4/3 にぶい黄褐色礫混じり粘質シルト（10YR7/8 黄橙色粘土及び 0.5 ～ 1 cm 大の砂礫を若干含む）
3 10YR5/3 にぶい黄褐色礫混じり粘質シルト（10YR7/8 黄橙色粘土及び 0.5 ～ 1 cm 大の砂礫を若干含む、下場の窪み柱根の当たりか？）
＜抜取痕＞
4 10YR5/2 灰黄褐色礫混じりシルト ＜ベース＞



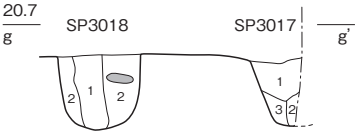




1 10YR2/3 黒褐色礫混じり粘質土（5 ～ 10 ㎜大の鎖礫若干含む）＜抜取痕＞
2 10YR3/3 暗褐色礫混じり粘質シルト（5 ～ 10 ㎜大の鎖礫若干含む）＜柱痕＞
3 10YR4/3 にぶい黄褐色礫混じり粘質シルト（5 ～ 10 ㎜大の砂礫若干含む）
4 ＜ベース＞

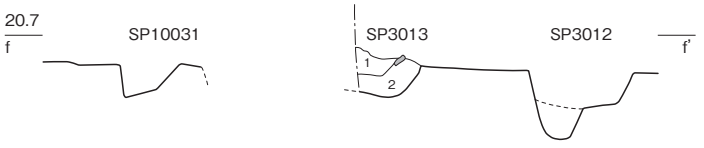


1 10YR3/2 黒褐色粘質シルト（5mm 大の砂礫多く含む）



1 10YR4/3 にぶい黄褐色礫混じりシルト（10YR6/8 明黄褐色シルト小ブロックと 5 mm 大程度の砂礫を若干含む）＜柱痕＞
2 10YR5/3 にぶい黄褐色礫混じりシルト（10mm 大の小礫を多含する）

1 10YR5/3 にぶい黄褐色礫混じりシルト ＜抜取痕＞
2 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト ＜柱痕＞
3 10YR5/4 にぶい黄褐色礫混じりシルト



1 10YR2/3 黒褐色礫混じり粘質土（10YR7/8 黄橙色粘土及び 0.5 ～ 1 cm 大の砂礫を若干含む）
2 10YR4/3 にぶい黄褐色礫混じり粘質シルト（10YR7/8 黄橙色粘土及び 0.5 ～ 1cm 大の砂礫を若干含む）
＜抜取痕＞

第 98 図　SB3001 平・断面図（1/40）

検出した２穴の柱穴の規模や検出状況から、SB2003・SB2004 と同様の２間×２間程度の総柱建物となる可能性が考えられよう。埋土中からは須恵器片、土師器片、焼土が出土した。

364 は SP2245 から出土した。須恵器杯身片。6 世紀後半頃。

遺構の時期は、２面で検出したことや出土遺物の時期から、6 世紀後半頃と考えられる。

３区・10 区 SB3001（第 98 図）

３区と 10 区にまたがって検出した。２面で検出した遺構である。北東隅の柱穴は検出できなかった。２間×２間の総柱建物で、東西方向は 2.24m、南北方向は 2.53 ～ 2.56m、主軸方位は N8° E で面積は 5.70㎡である。柱間は、東西方向は西側が 1.15 ～ 1.16m、東側が 1.08 ～ 1.09m、南北方向は北側が 1.23m、南側は 1.30 ～ 1.33m で、柱間にややばらつきはあるものの柱通りは揃う。柱穴は概ね楕円形で、長軸 55 ～ 60㎝、短軸 43 ～ 47㎝、深さ 18 ～ 40㎝で、中央の柱のみやや規模が小さく、直径 32㎝、深さ 10㎝を測る。柱痕跡の直径 14 ～ 16㎝である。柱穴埋土中からは、焼成不良の須恵器甕片、杯蓋または杯身片、土師器片が出土した。

建物の時期は、２面で検出していることから、6 世紀後半～７世紀前半頃と考えられる。

３区 SB3002（第 99 図）

３区北部で検出した。２面で検出した遺構である。北西半は調査区外へ延びる。SB3002 を構成する柱穴は SH3001・3002 の掘削後に検出しており、SH3001・3002 より古いと考えられる。

東側と南側の柱穴列を２間ずつ検出した。中央部分にはやや小規模な柱穴を検出しており、２間以上×２間以上の総柱建物となると考えられる。東西方向は 3.93m以上、南北方向は 3.38m以上、主軸方位は N12.6° E で、面積は 8.69㎡以上、２間×２間とすれば 13.27㎡程度である。柱間は、東西方向が 1.60 ～ 1.78m、南北方向が 1.93 ～ 2.00m、柱穴は円形に近く、側柱は長軸 47 ～ 72㎝、短軸 47 ～ 65㎝、深さ 12 ～ 48㎝、柱痕跡の直径は 16㎝で、束柱は楕円形で長軸 42㎝、短軸 38㎝、深さ 10㎝である。東南隅の SP3031 が小さいのは、SH3001 の下面で検出したことによる。建物の全容は明らかではないが、SB9001 と同様の２間×２間の総柱建物である可能性が考えられよう。

埋土中からは須恵器杯身片・壺片、土師器片、サヌカイト片が出土した。

365 は SP3030 から出土した須恵器杯身。SD3003 との接合遺物である。SD3003 は SP3030 を切り込む遺構であるので、もともと SP3030 に由来するものであろう。6 世紀末（Ⅱ -4 期）頃。

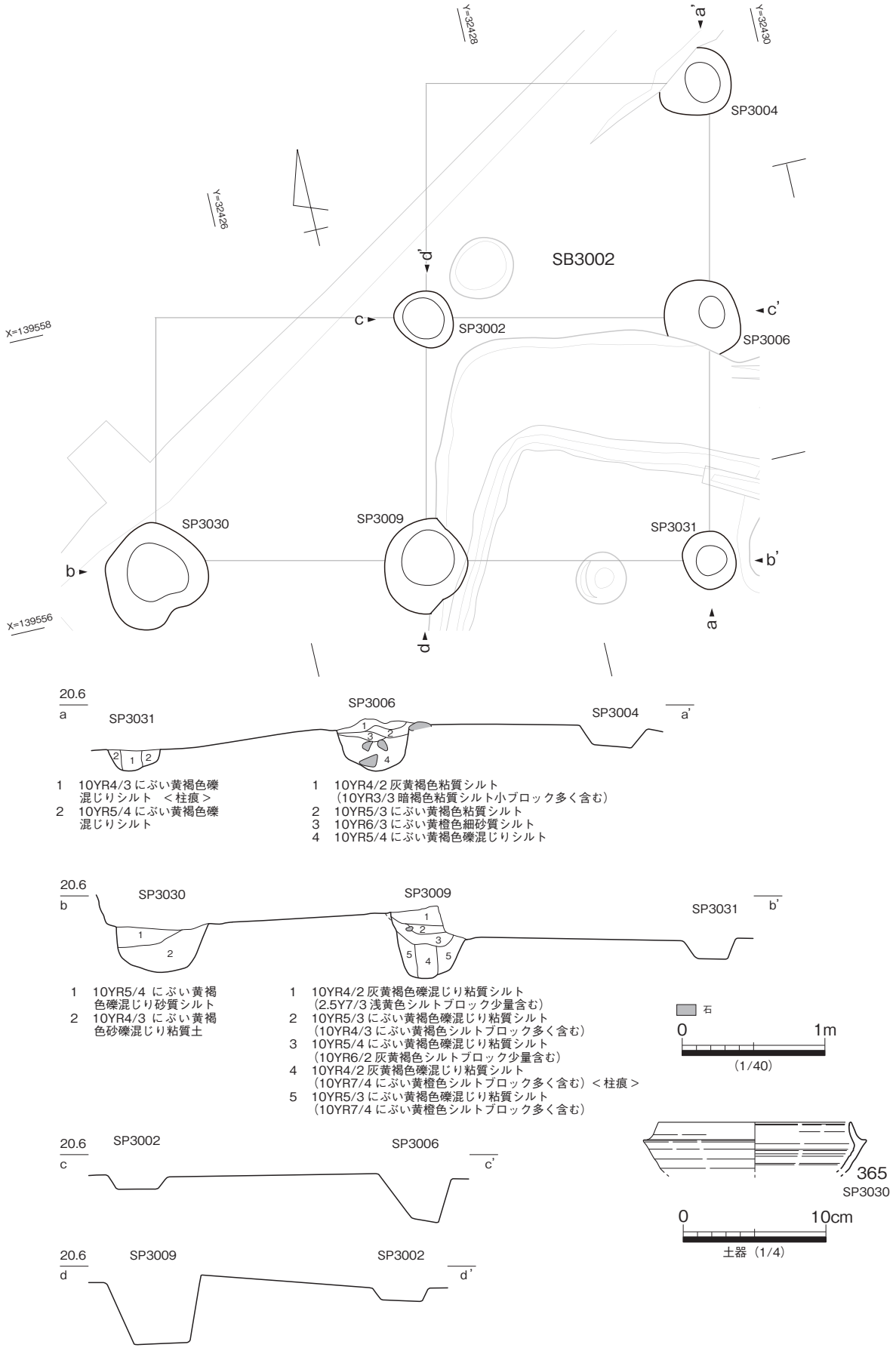
遺構の時期は、２面で検出したこと、出土遺物の時期から、6 世紀末頃と考えられる。

７区 SB7001（第 100・101 図）

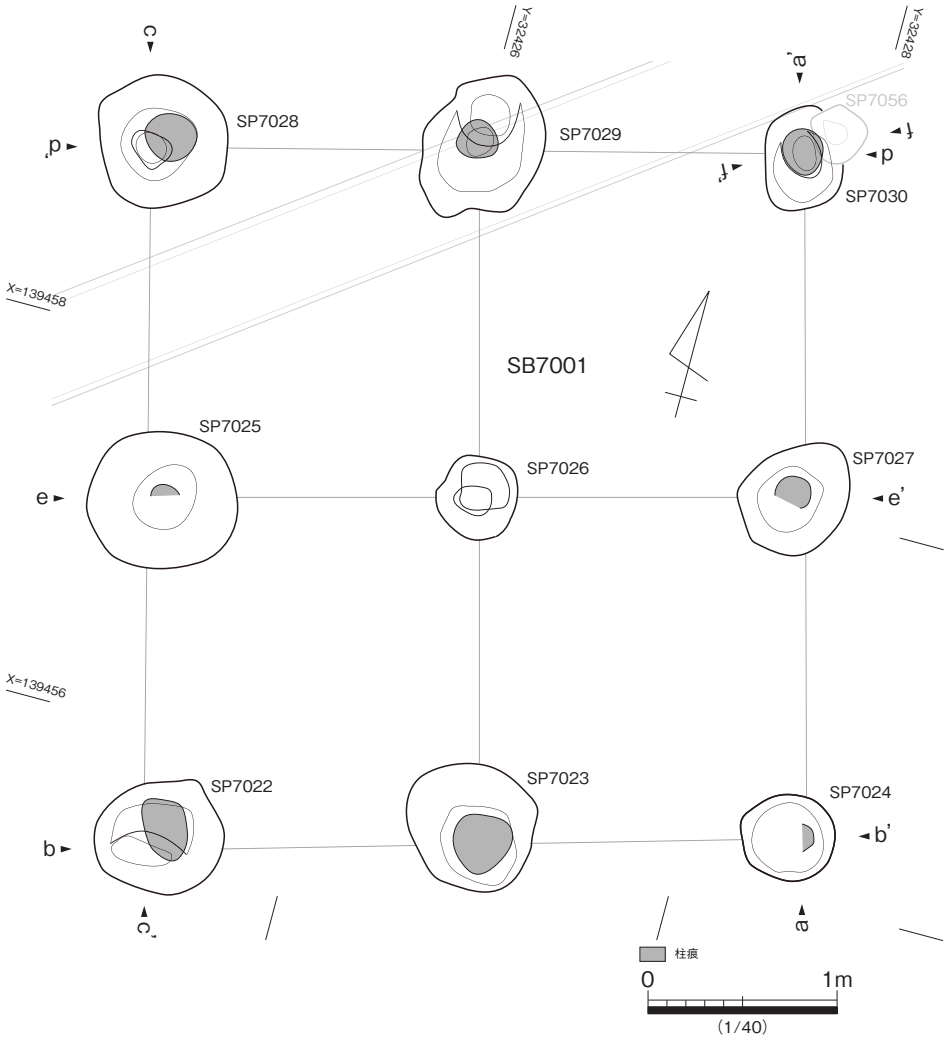
７区南部で検出した。２面で検出した遺構である。SB7006 の 1.5 ～ 2.0m北側にやや方角を西偏させて隣接して立地する。２間×２間の総柱建物で、東西 3.36 ～ 3.40m、南北 3.65m、主軸方位は N14.56° W、面積は 12.34㎡である。柱間は東西方向が 1.66 ～ 1.74m、南北方向は北から 1.88m・1.77m である。柱穴は概ね円形または楕円形で、側柱の規模は直径 53 ～ 80㎝、深さ 48 ～ 66㎝、柱痕跡は 18 ～ 22㎝、束柱は円形で、直径 42㎝、深さ 42㎝、柱痕跡の直径は 25㎝である。

柱穴埋土からは、須恵器杯蓋または杯身、土師器甕片が出土した。

366 は SP7024 から出土した須恵器甕。367･368 は SP7029 から出土した須恵器杯身。6 世紀末（Ⅱ -4）頃。



第 99 図　SB3002 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）



第 100 図　SB7001 平面図（1/40）

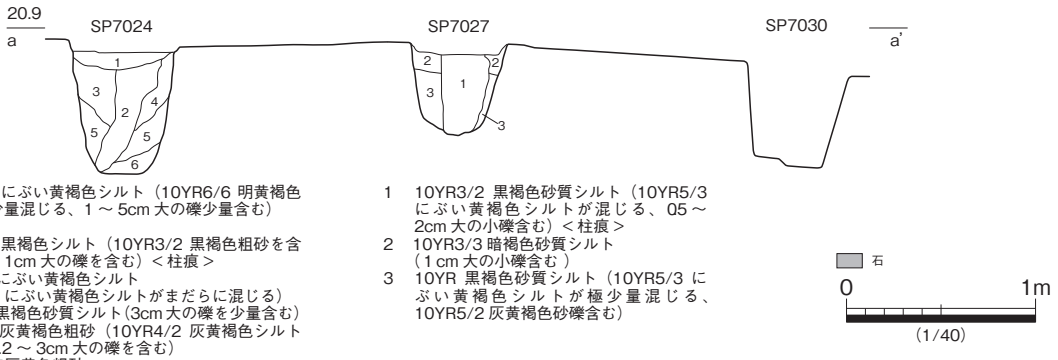
遺構の時期は、2 面で検出したこと、出土遺物の時期から、6 世紀末頃と考えられる。

7 区 SB7002（第 102・103 図）

7 区西側中央付近で検出した。2 面で検出した遺構である。SB7008 の北西隅の柱穴を SB7002 の南西隅の柱穴 SP7041 が掘り込むと考えられ、SB7008 より新しい。3 間 × 2 間の南北棟の掘立柱建物で、桁行 4.33m、梁間 3.80m、主軸方位は桁方向で N32.55° E、面積は 16.96㎡である。柱間は桁方向が 1.33 ～ 1.58m、梁方向が 1.80 ～ 2.00m、柱穴は楕円形・不整円形で、長軸 80 ～ 122cm、短軸 66 ～ 88cm、深さ 44 ～ 66cm、柱痕跡の直径は 20cm程度である。柱穴の規模は周辺の建物に比べて大きい。南から 2 列目の梁筋の中央付近に直径 16.3cm、深さ 3cm程度の柱穴を検出した。束柱としても小さいが、SB7002 に係る柱穴の可能性もあろう。

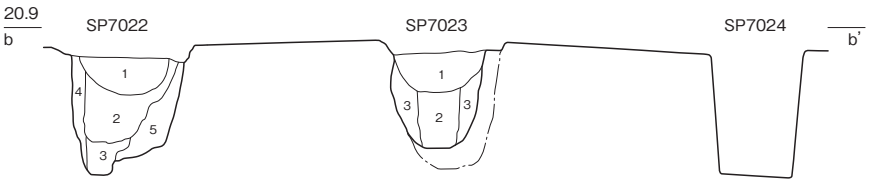
柱穴埋土中からは須恵器杯身片・甕片、土師器片、サヌカイト片、焼土塊などが出土した。焼土塊は SX7004 又は SK7002 に由来する可能性が考えられる。

369 ～ 371 は SP7036 から出土した須恵器。369・370 は杯身。いずれも口縁端部は欠損する。371 は甕。7 世紀中頃。372 は SP7040 から出土したサヌカイト製石鏃。凹基式。端部 3 カ所いずれも欠損する。373 は SP7060 から出土した須恵器杯身。口縁端部は欠損する。



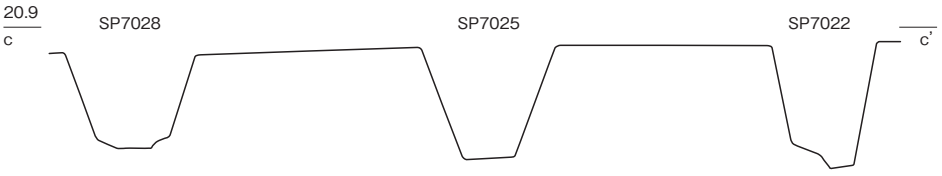
1 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（10YR6/6 明黄褐色シルトが少量混じる、1 ～ 5cm 大の礫少量含む）＜抜取痕＞
2 10YR2/2 黒褐色シルト（10YR3/2 黒褐色粗砂を含む、0.1 ～ 1cm 大の礫を含む）＜柱痕＞
3 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト（10YR4/3 にぶい黄褐色シルトがまだらに混じる）
4 10YR3/2 黒褐色砂質シルト(3cm 大の礫を少量含む)
5 10YR4/2 灰黄褐色粗砂（10YR4/2 灰黄褐色シルトを含む、0.2 ～ 3cm 大の礫を含む）
6 2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂

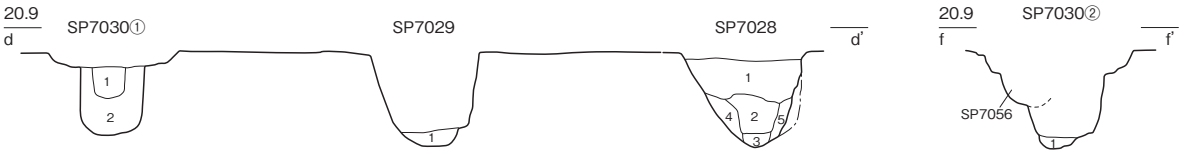
1 10YR3/2 黒褐色砂質シルト（10YR5/3 にぶい黄褐色シルトが混じる、05 ～ 2cm 大の小礫含む）＜柱痕＞
2 10YR3/3 暗褐色砂質シルト（1 cm 大の小礫含む ）
3 10YR 黒褐色砂質シルト（10YR5/3 にぶい黄褐色シルトが極少量混じる、10YR5/2 灰黄褐色砂礫含む）



1 10YR6/2 灰黄褐色シルト（10YR4/2 灰黄褐色シルトがまだらに混じる）
2 10YR3/2 黒褐色シルト（10YR6/4 にぶい黄橙色シルトが粒状に極少量混じる）
＜抜取痕＞
3 10YR2/2 黒褐色粘質土 ＜柱痕＞
4 2.5Y5/3 黄褐色砂質土
5 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土（10YR5/8 黄褐色粘質土がまだらに混じる、10YR4/2 灰黄褐色シルトを含む）

1 10YR3/2 黒褐色シルト（10YR5/3 にぶい黄褐色シルトが混じる、0.2 ～ 3cm 大の礫含む）＜抜取痕＞
2 10YR4/2 灰黄褐色砂礫混じりシルト（10YR6/4 にぶい黄橙色シルトを極少量含む）＜柱痕＞
3 10YR5/3 にぶい黄褐色砂礫（1 ～ 3cm 大の礫を多く含む）



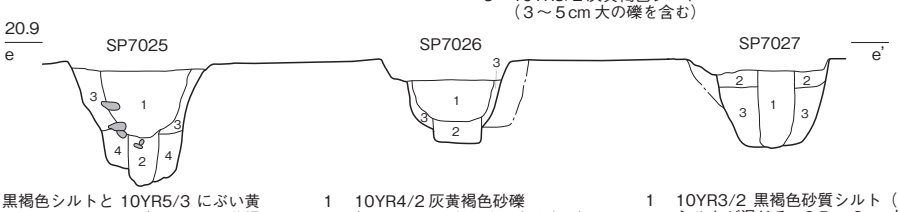


1 10YR3/3 暗褐色シルト（0.5 ～ 3cm 大の礫が少量混じる）＜柱痕＞
2 10YR3/2 黒褐色シルトと 10YR6/4 にぶい黄橙色シルトがまだらに混じる（1 ～ 5cm 大の礫が混じる）
※ 柱痕は斜めに入る ②の 1 層から①の 1 層へ北から南

1 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト（10YR3/2 黒褐色粘質シルトと 10YR6/4 にぶい黄橙色シルトが粒状に含まれる）＜柱痕＞

1 10YR4/2 灰黄褐色シルト（5cm 大の礫含む）
2 10YR5/3 にぶい黄褐色シルトと 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
＜抜取痕＞
3 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト（10YR2/2 黒褐色粘質シルトを少量含む）＜柱痕＞
4 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト（10YR3/2 黒褐色シルトと 10YR6/4 にぶい黄橙色シルトがまだらに混じる）
5 10YR5/2 灰黄褐色シルト（3 ～ 5 cm 大の礫を含む）

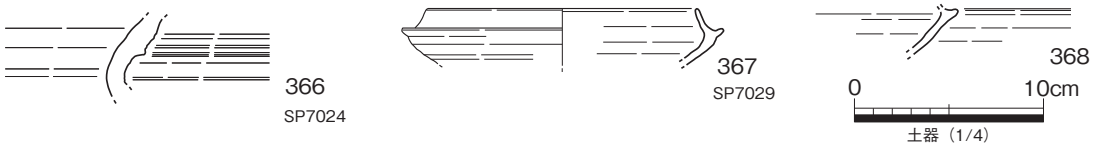
1 SP703010①に同じ



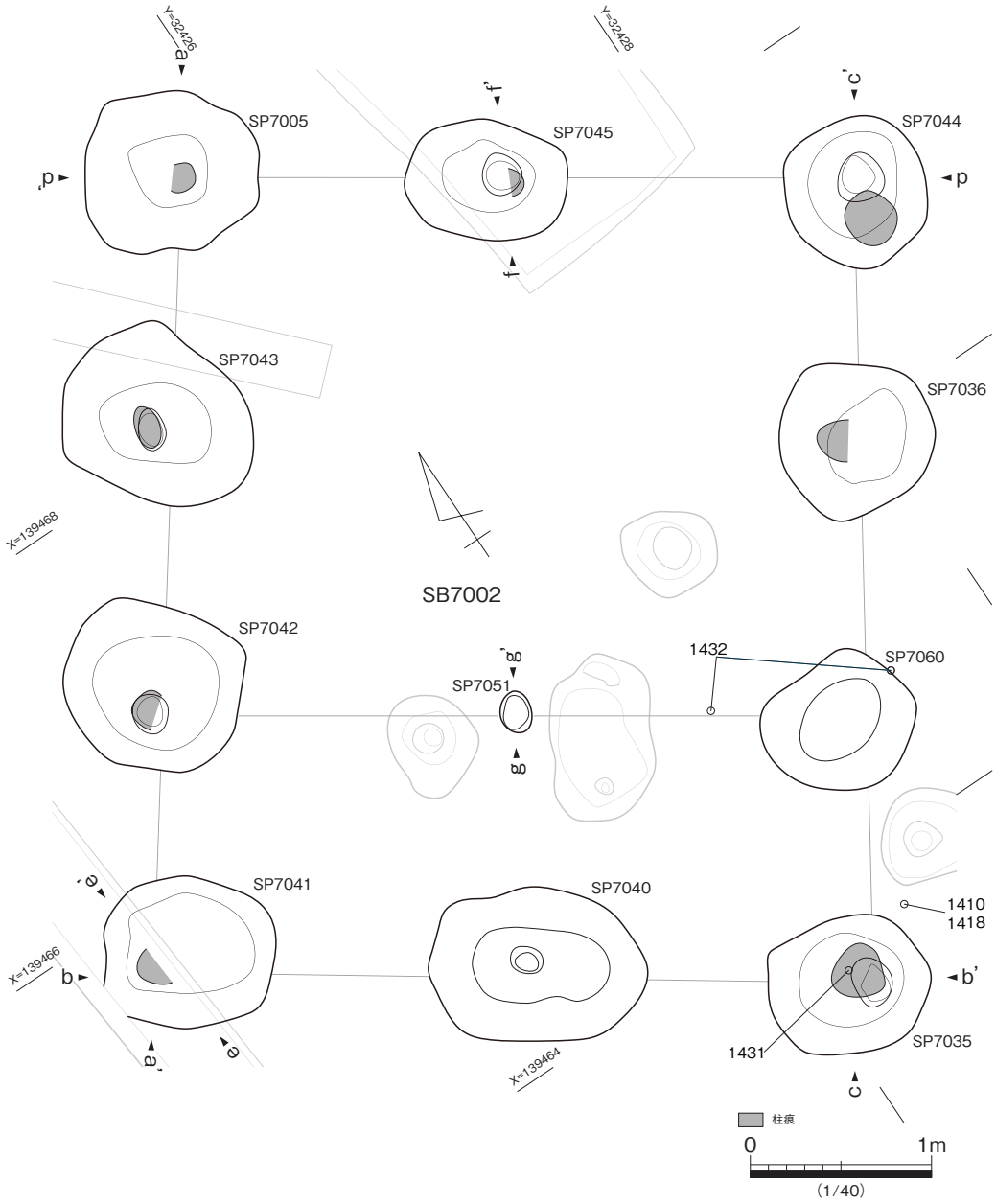
1 10YR3/2 黒褐色シルトと 10YR5/3 にぶい黄褐色シルトがまだらに混じる（10YR5/6 黄褐色シルトが粒状に混じる）＜抜取痕＞
2 10YR4/2 灰黄褐色シルト（1 ～ 3 cm 大の礫を含む）＜柱痕＞
3 2.5Y5/3 黄褐色砂質シルト
4 2.5YR6/4 にぶい黄色粘質シルトと 10YR4/2 灰黄褐色シルトが混じる

1 10YR4/2 灰黄褐色砂礫（ 0.2 ～ 3cm 大の礫を多く含む）
2 10YR3/2 黒褐色砂礫（1 ～ 3cm 大の礫を多く含む）＜柱痕＞
3 10YR5/2 灰黄褐色砂礫混じりシルト（1cm 大の礫を多く含む）

1 10YR3/2 黒褐色砂質シルト（10YR5/3 にぶい黄褐色シルトが混じる、0.5 ～ 2cm 大の小礫含む）＜柱痕＞
2 10YR3/3 暗褐色砂質シルト（1cm 大の小礫含む ）
3 10YR 黒褐色砂質シルト（10YR5/3 にぶい黄褐色シルトが極少量混じる、10YR5/2 灰黄褐色砂礫含む）



第 101 図　SB7001 断面図（1/40）、出土遺物（1/4）



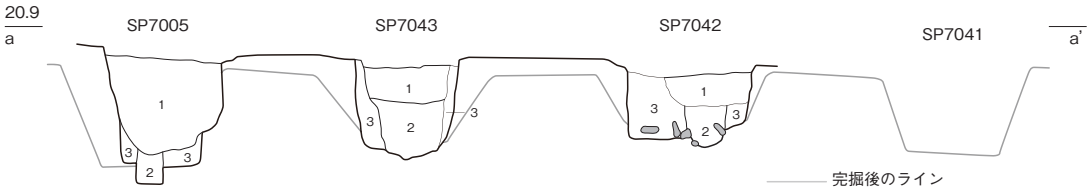
第 102 図　SB7002 平面図（1/40）

SB7002 直上の包含層 1b 層からは、甕片が多く出土し、2 個体が復元できた。遺物の記述は、第 3 章第 3 節 -5 遺構に伴わない遺物　7 区 1b 層出土遺物　で行うが、これらの甕は SB7002 に由来する遺物かもしれない。

遺構の時期は、2 面で検出したこと、柱穴内の出土遺物から、7 世紀前半～中頃と考えられるが、SB7008 より新しく、SB7008 と規模が類似する総柱建物よりは新しい時期が想定される。

7 区 SB7004（第 104・105 図）

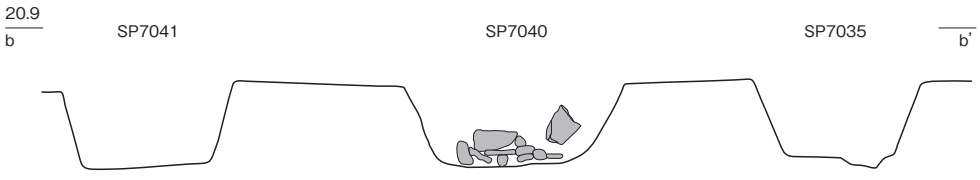
7 区北部で検出した。2 面で検出した遺構である。南に隣接する SB7002 と方位が類似し、約 1.8m 西に接する SB8006 と方向、柱筋が近い。SH8002、SB8016 と重複し、これらを掘り込む。3 間 × 2 間の東西棟の総柱建物で、桁行 4.28m、梁間 3.93m、主軸方位は梁間方向で N28.69° E、面積は 16.82㎡である。

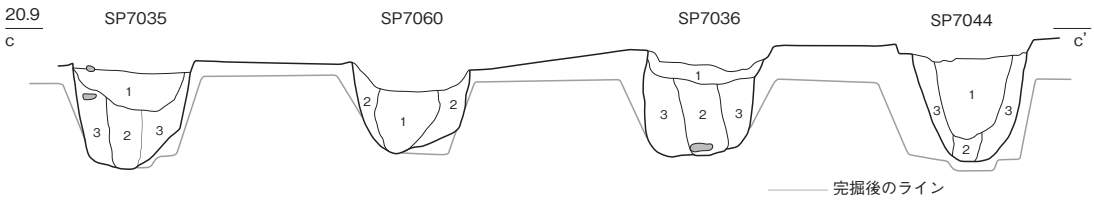


1 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト（10YR6/6 明黄褐色シルトが粒状に多く混じる）＜抜取痕＞
2 10YR4/2 灰黄褐色シルト（10YR6/3 にぶい黄橙色シルトが粒状に混じる）＜柱痕＞
3 10YR3/2 黒褐色粘質シルト（10YR6/3 にぶい黄橙色シルトがブロック状に混じる）

1 10YR3/3 暗褐色シルト（10YR7/4 にぶい黄橙色シルトが粒状に中量に混じる）＜抜取痕＞
2 10YR3/2 黒褐色シルトと 10YR7/3 にぶい黄橙色シルトがまだらに混じる＜抜取痕＞
3 10YR6/4 にぶい黄橙色シルト（10YR4/3 にぶい黄褐色シルトが少量混じる）

1 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（10YR7/3 にぶい黄橙色シルトが粒状に混じる）＜抜取痕＞
2 10YR6/4 にぶい黄橙色シルト（10YR7/3 にぶい黄橙色シルトと 10YR4/2 灰黄褐色シルトがまだらに混じる）＜柱痕＞
3 10YR6/4 にぶい黄橙色シルト（10YR4/2 灰黄褐色シルトがまだらに混じる）



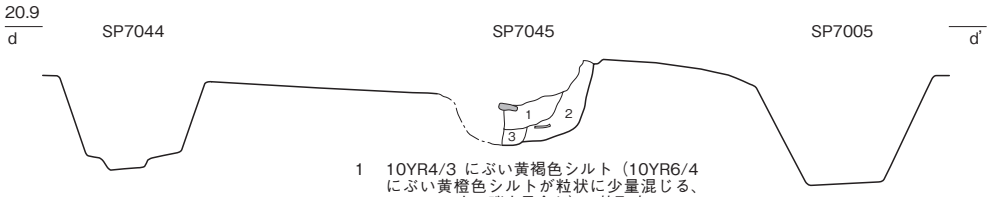


1 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（10YR6/3 にぶい黄橙色シルトが粒状に中量まだらに混じる）＜抜取痕＞
2 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（10YR6/3 にぶい黄橙色シルトが粒状に少量混じる）＜柱痕＞
3 10YR3/3 暗褐色シルトと 10YR6/4 にぶい黄橙色シルトがまだらに混じる

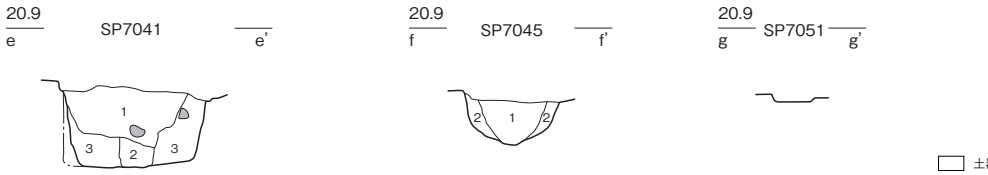
1 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（10YR5/3 にぶい黄褐色シルトと 10YR3/3 暗褐色粘質シルトが混じる）＜抜取痕か＞
2 10YR4/3 にぶい黄褐色シルトと 10YR6/4 にぶい黄橙色シルトがまだらに混じる

1 10YR4/3 にぶい黄褐色シルトと 10YR6/3 にぶい黄橙色シルトがまだらに混じる（1 ～ 5 cm 大の礫を多く含む）＜抜取痕＞
2 10YR3/3 暗褐色シルト ＜柱痕＞
3 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（10YR6/3 にぶい黄橙色シルトがブロック状に多く混じる）

1 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（10YR5/4 にぶい黄褐色シルトがまだらに混じる、2 ～ 3cm 大の礫少量含む）＜抜取痕＞
2 10YR3/3 暗褐色シルト＜柱痕＞
3 10YR5/3 にぶい黄褐色シルトと 10YR4/2 灰黄褐色シルトがまだらに混じる

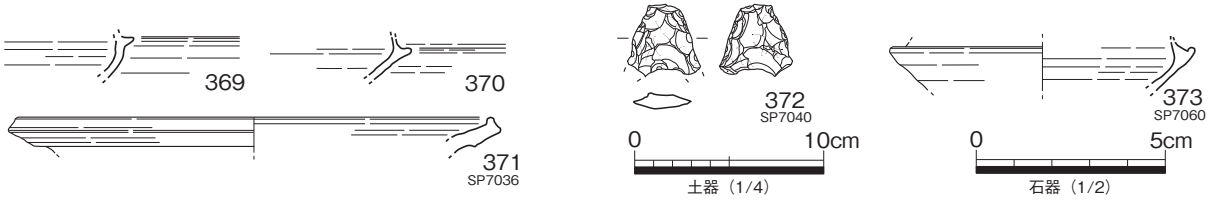


1 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（10YR6/4 にぶい黄橙色シルトが粒状に少量混じる、3 ～ 5cm 大の礫少量含む）＜抜取痕＞
2 10YR3/3 暗褐色シルト（10YR6/4 にぶい黄橙色シルトをブロック状に含む、1～5cm 大の礫を含む）
3 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト＜柱痕＞

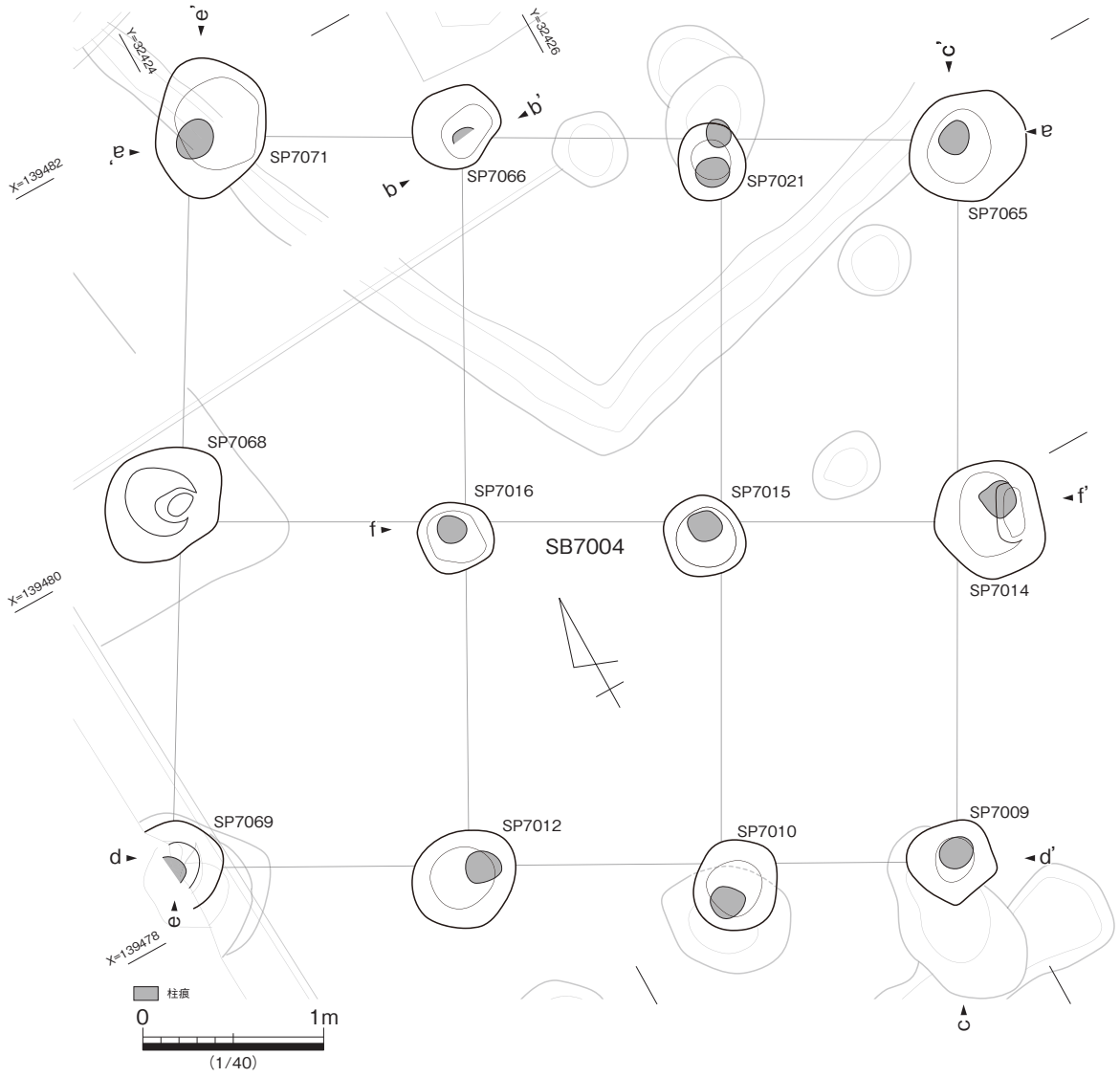


1 10YR5/2 灰黄褐色シルト（2.5Y6/3 にぶい黄色シルトがまだらに少量混じる）＜抜取痕＞
2 10YR3/2 黒褐色シルトと 2.5Y7/3 浅黄色シルト＜柱痕＞
3 10YR6/6 明黄褐色粘質シルト（10YR4/2 黄褐色シルトが帯状に少量混じる）

1 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（10YR5/3 にぶい黄褐色シルトと 10YR3/3 暗褐色粘質シルトが混じる）＜抜取痕か＞
2 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（10YR6/4 にぶい黄橙色シルトがまだらに混じる）



第 103 図　SB7002 断面図（1/40）、出土遺物（1/4・1/2）



第 104 図　SB7004 平面図（1/40）

柱間は桁方向が西から 1.54 ～ 1.56m、1.4m、1.32 ～ 1.34m、梁方向が北から 1.98m、1.95mで、概ね柱筋が揃う。柱穴は円形または不整円形で、梁方向の側柱が大きい傾向がある。梁方向の側柱は長軸または直径 62 ～ 80cm、短軸 60 ～ 66cm、深さ 20 ～ 28cm、柱痕跡の直径は 24cm、その他の側柱は直径 40 ～ 62cm、深さ 18 ～ 30cm、束柱は直径 40 ～ 44cm、深さ 2cm、柱痕跡は 14 ～ 16cmである。

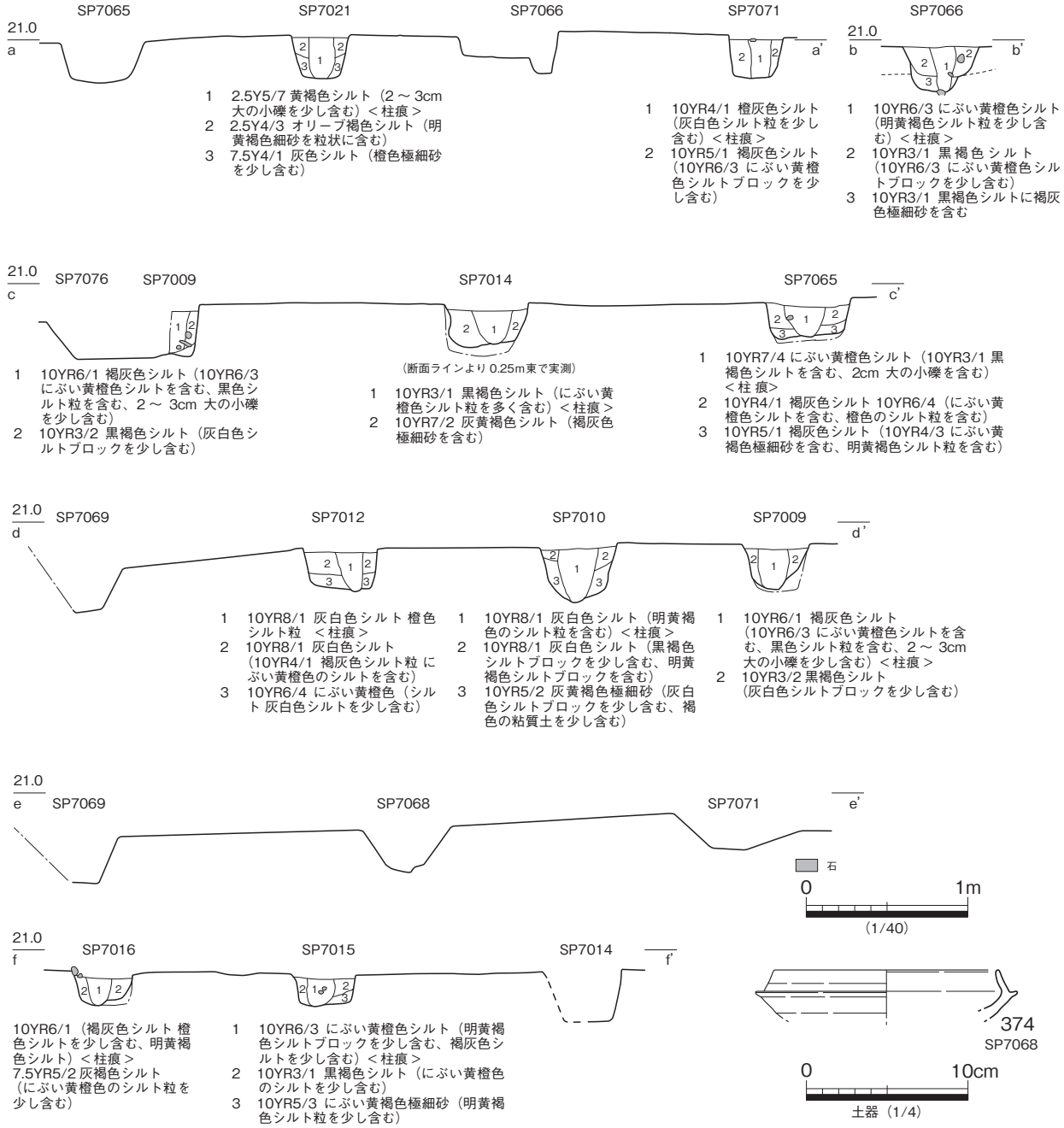
埋土中からは須恵器杯身、甕、土師器小片が出土した。

374 は SP7068 から出土した須恵器杯身。6 世紀後半～末（Ⅱ -3 ～ 4 期）頃。

遺構の時期は、柱穴からの出土遺物は 6 世紀末頃であるが、建物規模や周辺の検出状況から 7 世紀代まで下る可能性も考えられる。

7 区 SB7005（第 106 図）

7 区北部で検出した。2 面で検出した遺構である。SB7004 の南側で検出した。西半部は調査区外へ延

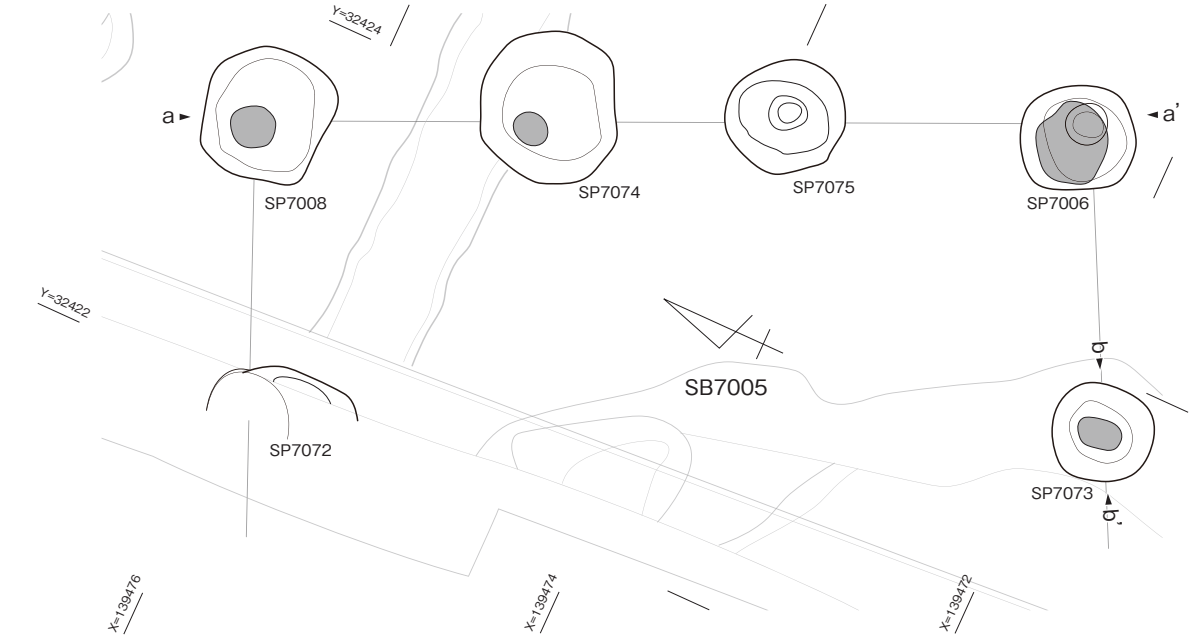


第 105 図　SB7004 断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

びる。b -b' 断面から、重複する SX7004 の掘削後に検出したと考えられる。3 間× 2 間以上の掘立柱建物で、東西 2.2m以上、南北 4.42m、主軸方位は N25.28 ° W で、面積は 11.94㎡以上である。柱間は東西方向は 1.64m、南北方向で 1.40 ～ 1.56mである。柱穴は概ね隅丸方形または不整円形で、軸長 52 ～ 80cm、深さ 42 ～ 50cm、柱痕跡の直径は 20 ～ 24cmである。

柱穴の埋土中からは須恵器杯蓋・杯身・甕、土師器片が出土した。須恵器杯蓋片には、焼成不良の破片が含まれていた。

375・376 は SP7006 から出土した須恵器。375 は杯蓋。口縁端部内面には段を持つ。376 は甕口縁部小片。外側へわずかに肥厚させる。377 ～ 384 は SP7008 から出土した須恵器。377 ～ 379 は杯蓋。肩



1　10YR6/1 褐灰色シルト（明黄褐色のシルト粒を少し含む）
2　10YR6/1 褐灰色粘質土 明黄褐色のシルト粒（10YR3/1 黒褐色のシルトを少し含む）
3　10YR3/2 黒褐色シルト（灰白色粗粒シルトを少し含む ）＜柱痕＞
4　10YR4/1 褐灰色シルト（灰白色シルトブロックを少し含む）
5　10YR4/1 褐灰色シルト（明黄褐色のシルトブロック粒を少し含む、灰白色極細砂を少し含む）
6　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト＜柱痕＞
7　10YR5/6 黄褐色シルト

＜抜取痕＞

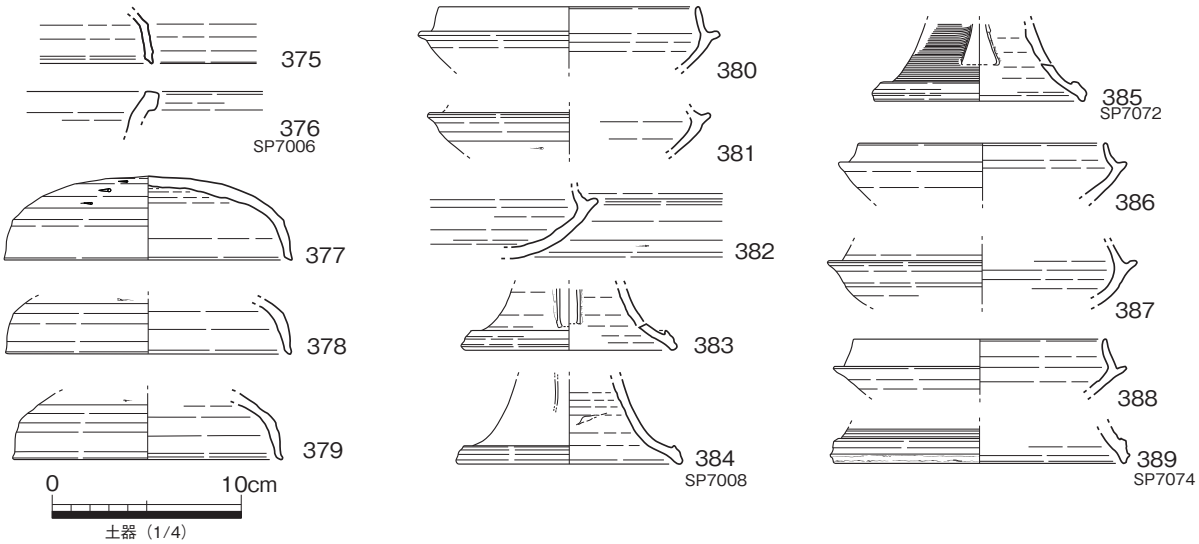
1　10YR4/2 灰黄褐色シルト（10YR5/4 にぶい黄褐色シルトが少量混じる）＜柱痕＞
2　10YR5/6 黄褐色シルト

1　10YR6/4 にぶい黄褐色シルトと 10YR5/3 にぶい黄褐色　＜柱痕＞
2　10YR5/6 黄褐色シルト（2cm 大の礫を含む）

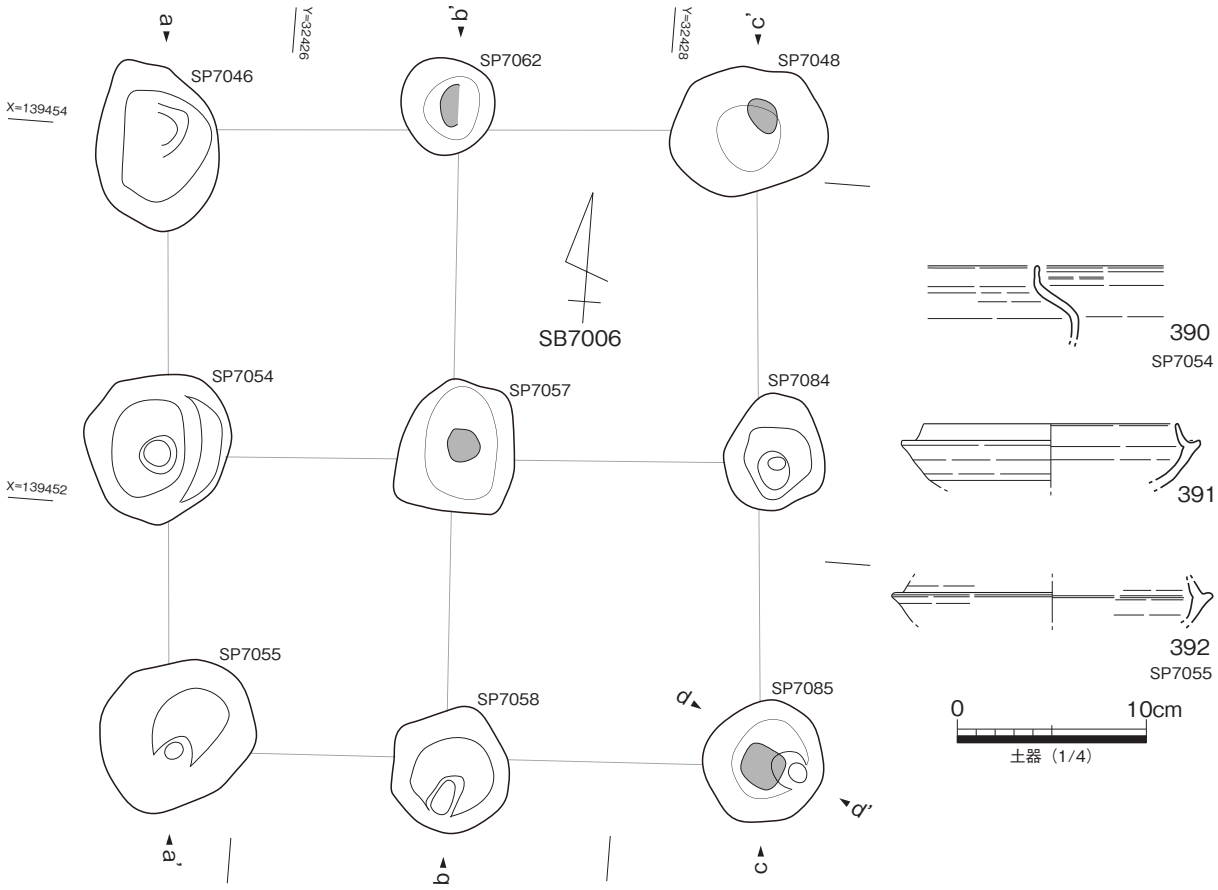
1　10YR4/3 灰黄褐色シルト（10YR5/6 黄褐色シルトが少量混じる ）
2　10YR3/3 暗褐色シルト＜柱 痕＞

1　10YR4/2 灰黄褐色シルト（10YR6/6 明黄褐色シルトが粒状に極少量混じる）
2　10YR3/2 黒褐色シルト（10YR5/6 黄褐色シルトが粒状に極少量混じる）＜柱痕＞
3　2.5Y6/8 明黄褐色シルト（2.5Y7/3 浅黄色シルトがまだらに混じる、10YR4/3 にぶい黄褐色シルトを含む）

柱痕　土器　石
0　1m
(1/40)



第 106 図　SB7005 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）



第 107 図　SB7006 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

部はやや丸みを帯び、口縁端部の段は顕著ではない。6 世紀後半～末（Ⅱ -3 ～ 4 期）頃。380 ～ 382 は杯身。383・384 は高杯。いずれも長方形の透かし穴が 1 カ所残存する。385 は SP7072 から出土した須恵器高杯。脚部にはカキ目が施され、長方形の透かし孔が 1 カ所残存する。386 ～ 389 は SP7074 から出土した須恵器。386 ～ 388 は杯身。6 世紀後半～末（Ⅱ -3 ～ 4）頃。389 は高杯脚部小片。

6 世紀後半～末頃の遺物が出土しているが、建物規模から 7 世紀代まで下るとしたい。

7 区 SB7006（第 107 図）

7 区南端付近で検出した。2 面で検出した遺構である。SB7001 の 1.4 ～ 2m南側で柱筋を概ね揃えた位置で検出した。2 間× 2 間の総柱建物で、東西方向は 3.24m、南北方向は 3.48m、主軸方位は N5.41° W、面積は 11.28㎡である。柱間は東西方向が 1.60 ～ 1.64m、南北方向が北から 1.82m /1.66mで、柱通りはよく、柱間も均等に近い。柱穴は円形または不整円形で、長軸 50 ～ 90cm、短軸 50 ～ 78cm、深さ 30 ～ 60cm、柱痕跡の直径は 16 ～ 18cm程度である。柱穴埋土からは須恵器杯身、甕、土師器片が出土した。

390 は SP7054 から出土した須恵器壺小片。391・392 は SP7055 から出土した須恵器杯身。概ね 6 世紀末（Ⅱ -4 期）頃。

遺構の時期は、2 面で検出したことや出土遺物から 6 世紀末頃と考えられる。

7 区 SB7007（第 108・109 図）

7 区南端で検出した。2 面で検出した遺構である。東南部は調査区外へ延びる。3 間以上× 2 間以上の総柱建物と考えられる。東西方向は 4.95m以上、南北方向は 3.73m以上、主軸方位は南北方向で N6.41° E、面積は 18.29㎡以上である。柱間は東西方向が西側から 1.78m、1.4m、1.72m、南北方向は北から 1.86m、1.87mである。柱穴は円形、隅丸方形で、側柱は長軸 60 ～ 82cm、短軸 52 ～ 70cm、深さ 28 ～ 48cm、柱痕跡の直径は 18cmである。束柱はわずかに小さめで、長軸 56cm、短軸 48cm、深さ 20cm、柱痕跡の直径は 15cmである。SB7007 を構成する SP7067・SP7080 は SX7003 の上面から掘り下げられており、SB7007 は SX7003 より新しい。

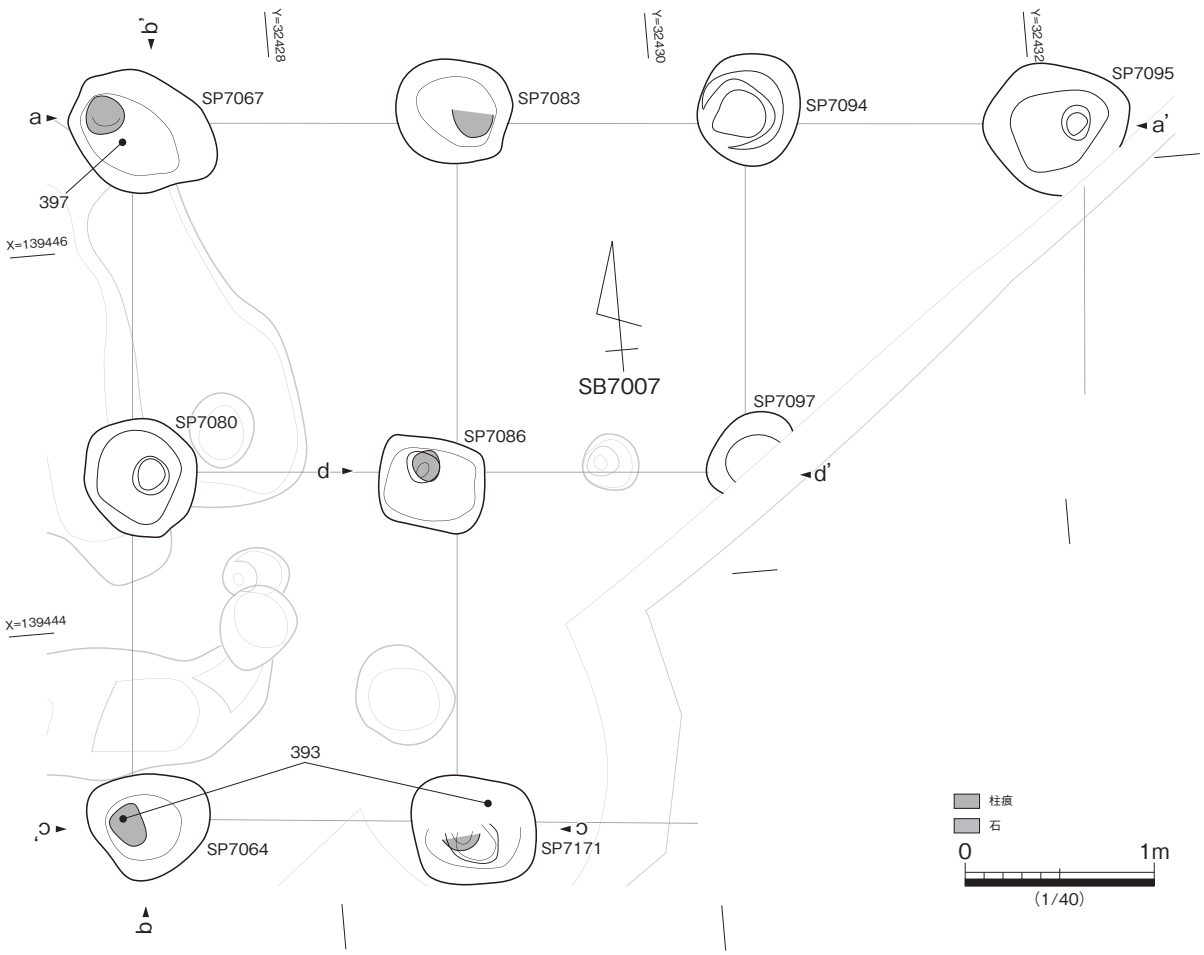
柱穴埋土中からは須恵器杯蓋、杯身、甕、土師器、鉄滓などが出土した。須恵器には、土師質の焼成のものも認められた。出土した鉄滓は、SX7003 に由来する可能性が高い。

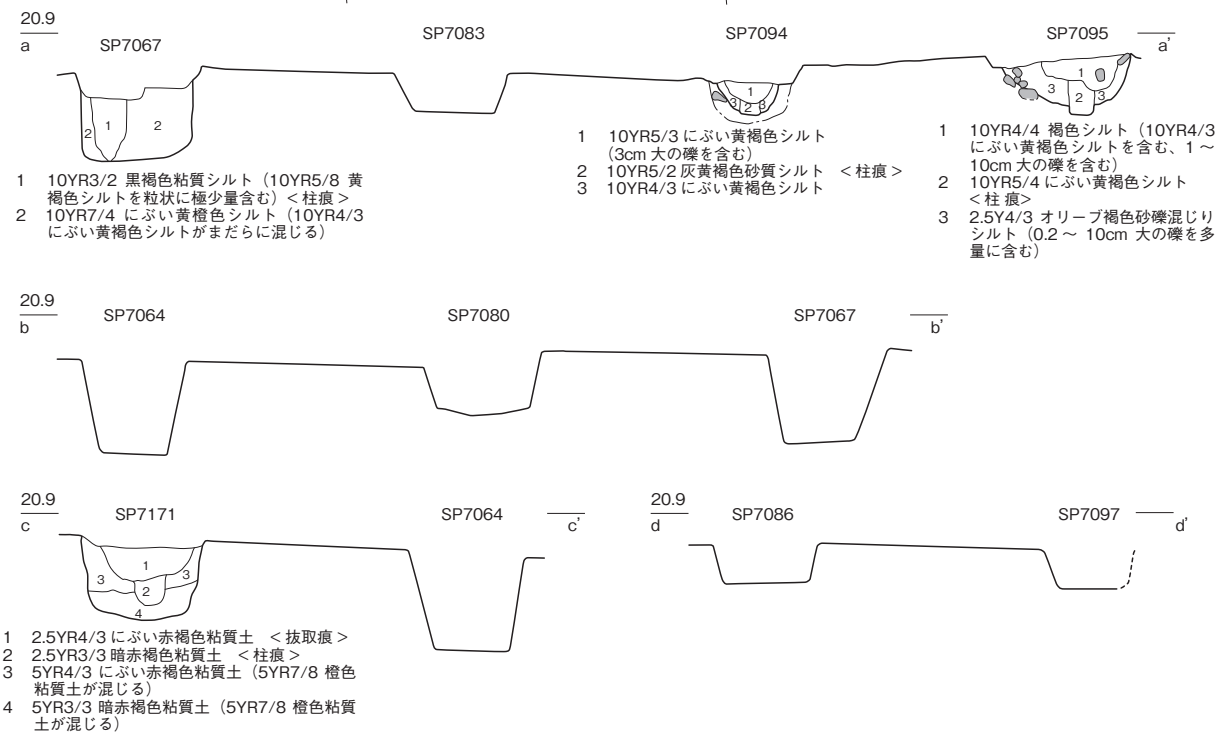
393・394 は SP7064 から出土した須恵器。393 は SP7171 との接合資料で杯蓋。394 は杯身。395 ～ 397 は SP7067 から出土した。395･396 は須恵器。395 は杯蓋。肩部には段が形骸化した緩い凹線が巡る。396 は杯身。397 は鉄滓。SP7067 は SX7003 と重複しており、SX7003 からの混入も考えられる。398 は SP7083 から出土した須恵器杯蓋。399 は SP7094 から出土した須恵器杯身。400 は SP7095 から出土した須恵器杯身。外面受け部に他の須恵器の溶着痕が残る。401・402 は SP7171 から出土した。401 は須恵器杯蓋。402 は土師器甕または甑把手。出土遺物は概ね 6 世紀後半（Ⅱ -3 期）頃と考えられる。

遺構の時期は、2 面で検出したことや出土遺物、SX7003 より新しいこと等から、6 世紀末以降と考えられる。

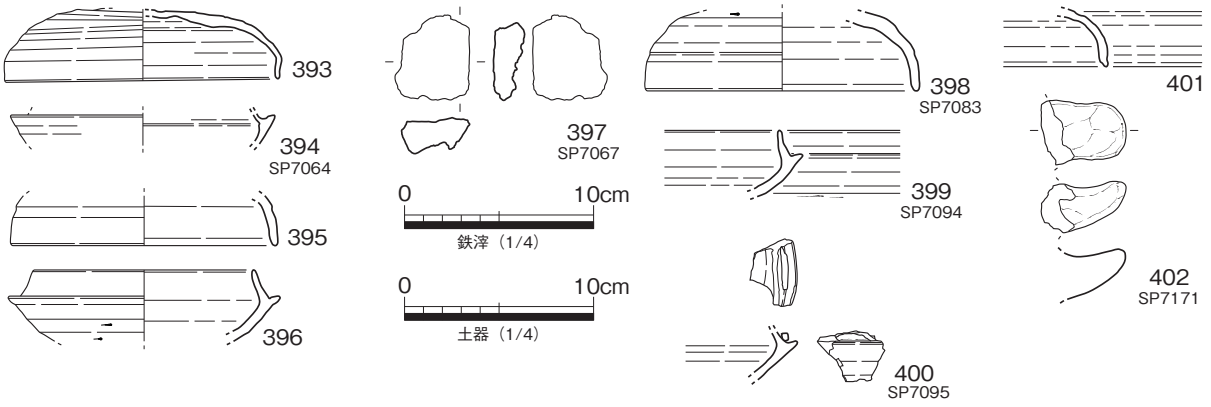
7 区 SB7008（第 110 図）

7 区中央西端付近で検出した。2 面で検出した。2 間× 2 間の南北棟の側柱建物で、桁行 4.35m、梁間 3.53





第 108 図　SB7007 平・断面図（1/40）



第 109 図　SB7007 出土遺物（1/4）

m、主軸方位は N7.12° W、面積は 15.35㎡である。柱間は桁行 2.16 ～ 2.19m、梁間は西から 1.83/1.70m、柱穴は円形または不整円形で、長軸 50 ～ 74cm、短軸 42 ～ 50cm、深さ 22 ～ 61cm、柱痕跡は直径 18cm 程度である。北西隅の柱穴は SB7002 南西隅柱穴に掘り込まれて消失したと考えられ、SB7002 より古いと考えられる。

柱穴埋土中からは土師器小片が出土しただけであった。

遺構の時期は、2 面で検出したことから、6 世紀後半～ 7 世紀中頃と考えられる。側柱建物と総柱建物の差はあるものの、建物規模や配置から SB7001・SB7006 との関連性が窺えることから、これらと同時期と考えられる。

7 区 SB7009（第 111 図）

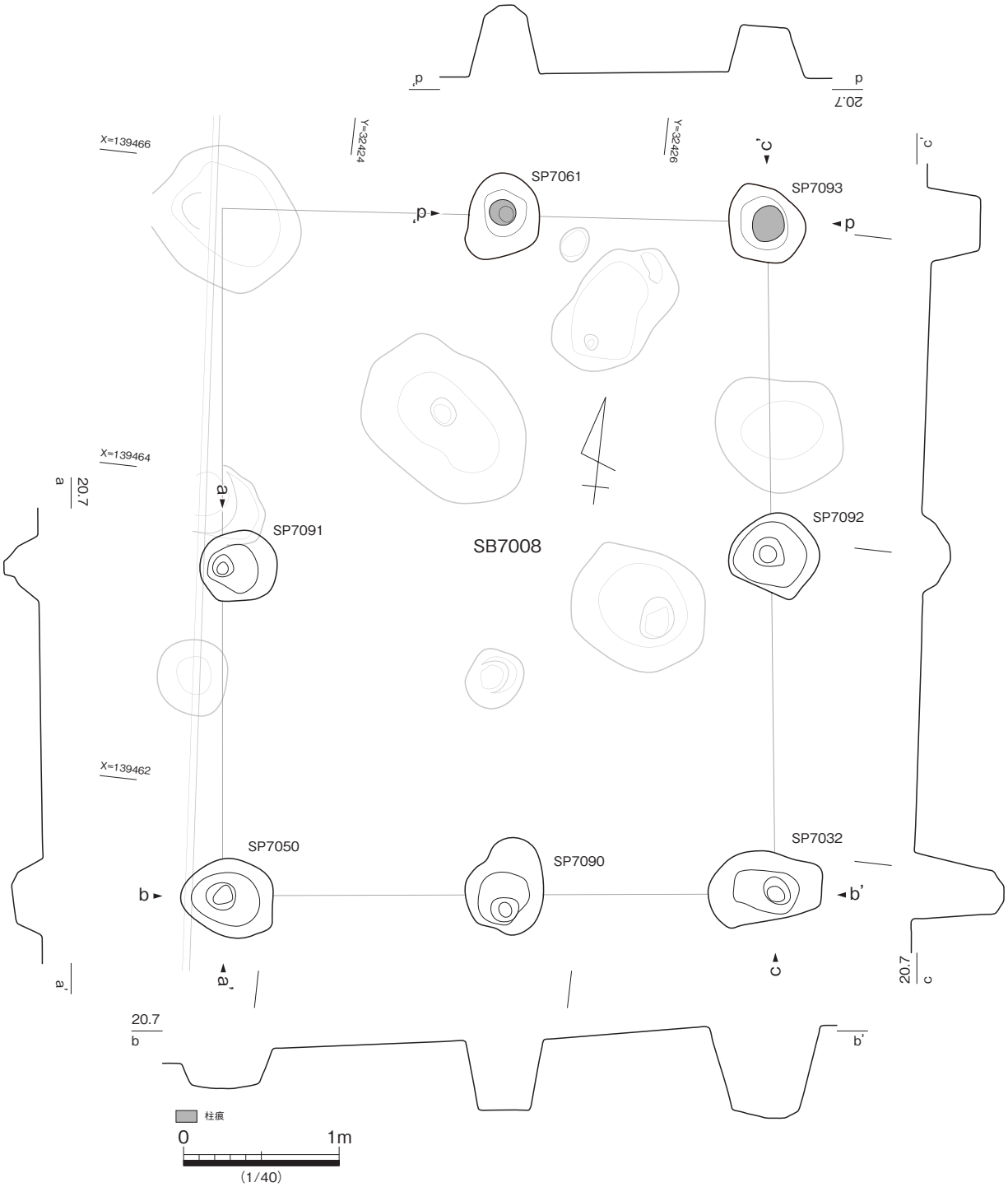
7 区中央付近東寄りで検出した。2 面で検出した遺構である。2 間× 2 間の側柱建物である。SH7002 と重複し、SH7002 より新しいことは SH7002b-b' 断面より確認できる。東西方向は 3.65m、南北方向は 3.38m で、ほぼ正方形を呈する。主軸方位は N2.22° E、面積は 12.34㎡である。柱間は東西方向が 1.81 ～ 1.84m、南北方向が 1.64 ～ 1.74m、柱穴は円形または不整円形で、長軸 56 ～ 75cm、短軸 50 ～ 67cm、深さ 26 ～ 44cm、柱痕跡の直径は 18cmであった。建物の規模は他の 2 間× 2 間の総柱建物と類似している。柱穴埋土中からは須恵器、土師器、鉄滓などが出土した。

403 は SP7100 から出土した須恵器杯蓋。口縁端部はやや外反し、肩部は段を持たずなだらかである。6 世紀末（Ⅱ -4 期）頃。404 は SP7015 から出土した土師器甕。寸胴に近い形態である。

遺構の時期は、2 面で検出したこと、SH7002 より新しいこと、出土遺物から 6 世紀末頃以降と考えられる。

7 区 SB7010（第 112 図）

7 区北東寄りで検出した。2 面で検出した遺構である。桁行 3 間×梁間 2 間の東西棟の掘立柱建物である。桁方向は 4.40m、梁方向は 3.62m・3.80m を測り、西側柱列がやや長い。主軸方位は梁方向で N12.56° E、面積は 16.32㎡である。柱間は、桁方向が 1.26 ～ 1.64m、梁方向が 1.76 ～ 1.98m でややばらつきがあるが、桁方向では中央の柱間がやや狭い傾向にある。柱穴は円形または不整円形で、攪乱により上面を削平されている北西隅およびその東隣の柱穴を除けば、長軸 50 ～ 66cm、短軸 48 ～ 58cm、深さ 16 ～ 20cm程度、柱痕跡の直径は 16 ～ 20cm程度である。埋土中からは須恵器甕・高杯、土師器甕な

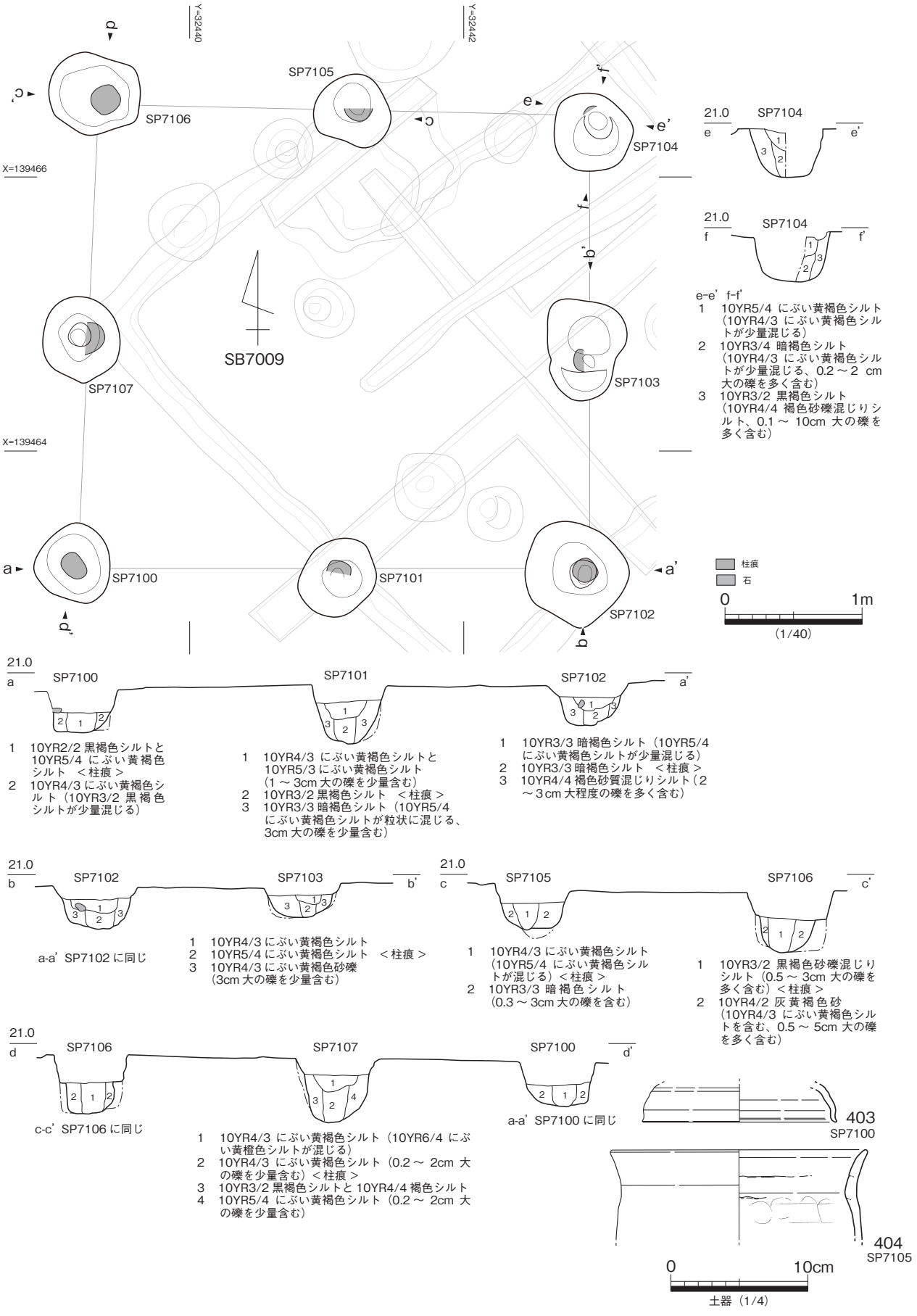


第 110 図　SB7008 平・断面図（1/40）

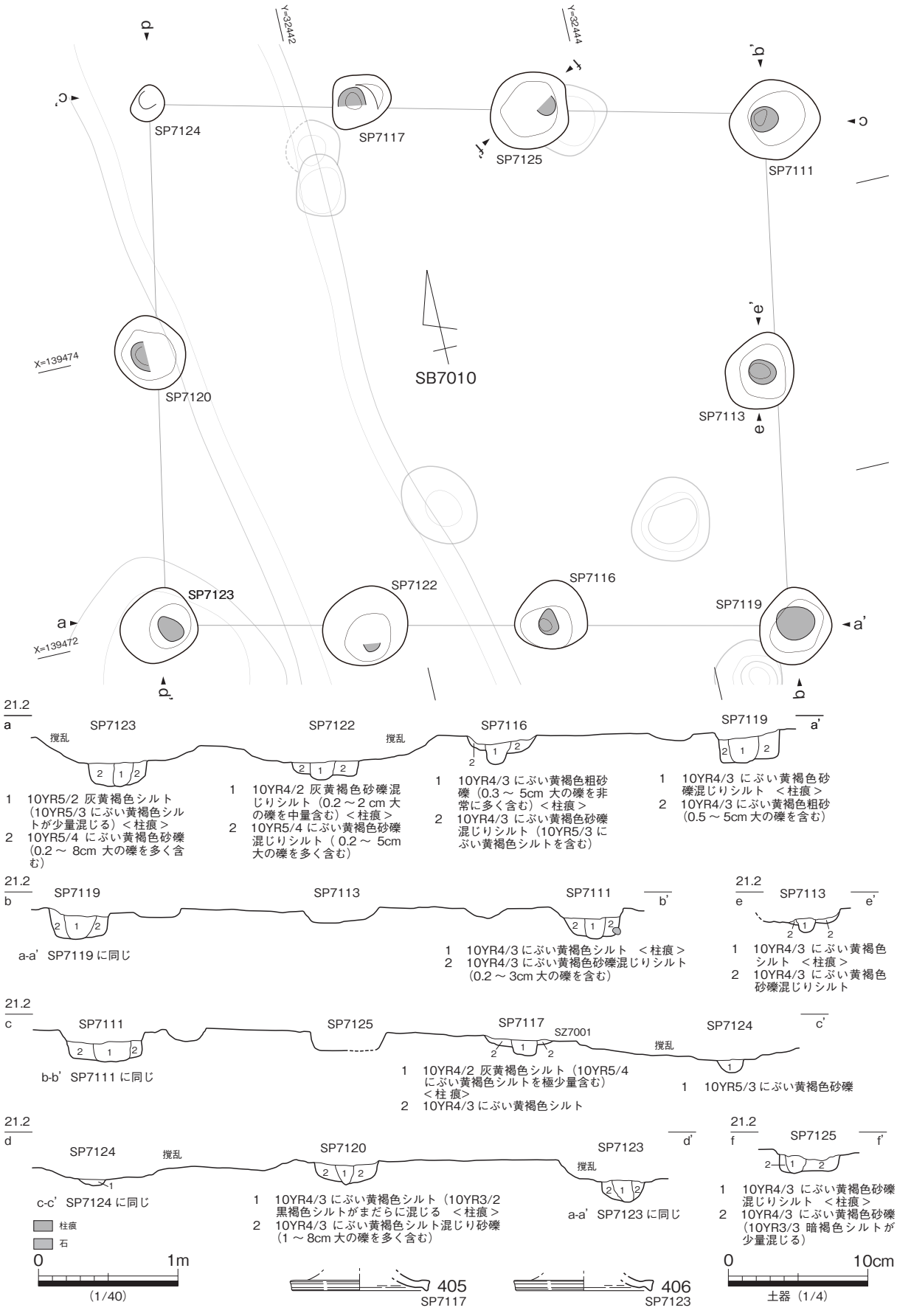
どが出土した。須恵器には焼成不良の個体が見られた。

405 は SP7117 から、406 は SP7123 から出土した。ともに須恵器高杯脚部。接合はしなかったが、同一個体の可能性もある。7 世紀中（Ⅱ -6 ～Ⅲ -1 期）頃。

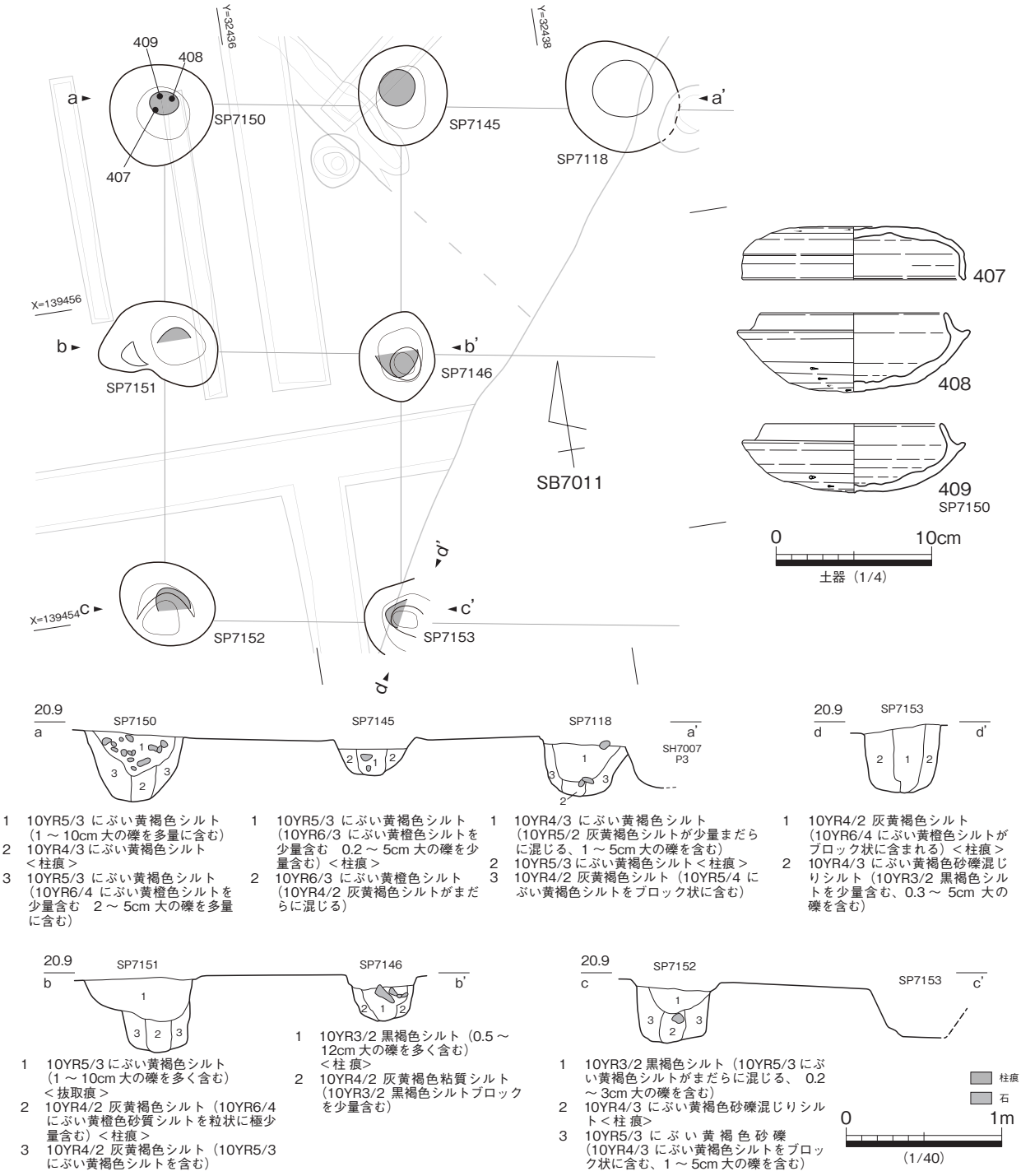
遺構の時期は、2 面で検出したこと、出土遺物の時期から、7 世紀代中頃と考えられる。



第 111 図　SB7009 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）



第 112 図　SB7010 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）



第 113 図　SB7011 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

7 区 SB7011（第 113 図）

7 区南部東寄りで検出した。2 面で検出した遺構である。東南側は SR7001 により破壊される。SH7007 と重複し、この掘削後に検出している。東西方向は 2 間以上×南北方向は 2 間であるが、周囲の掘立柱建物の検出状況から、2 間× 2 ～ 3 間の総柱建物になると考えられる。東西方向は 3.0m 以上、南北方向は 3.30m、主軸方位は N7.38° E で、面積は 7.05㎡以上、2 間× 2 間とすれば 9.9㎡程度である。

柱間は東西方向は 1.48 ～ 1.54m、南北方向は 1.60/1.70mである。柱穴は円形または楕円形で、長軸 61 ～ 76cm、短軸 46 ～ 70cm、深さ 24 ～ 48cm、柱痕跡の直径は 16 ～ 18cmである。柱穴埋土中からは須恵器、土師器片が出土した。北西隅の柱穴である SP7150 からは完形の須恵器杯身が 2 点、1/2 程度残存する杯蓋が 1 点出土した。土器埋納などの意図をもって埋納された可能性があろう。

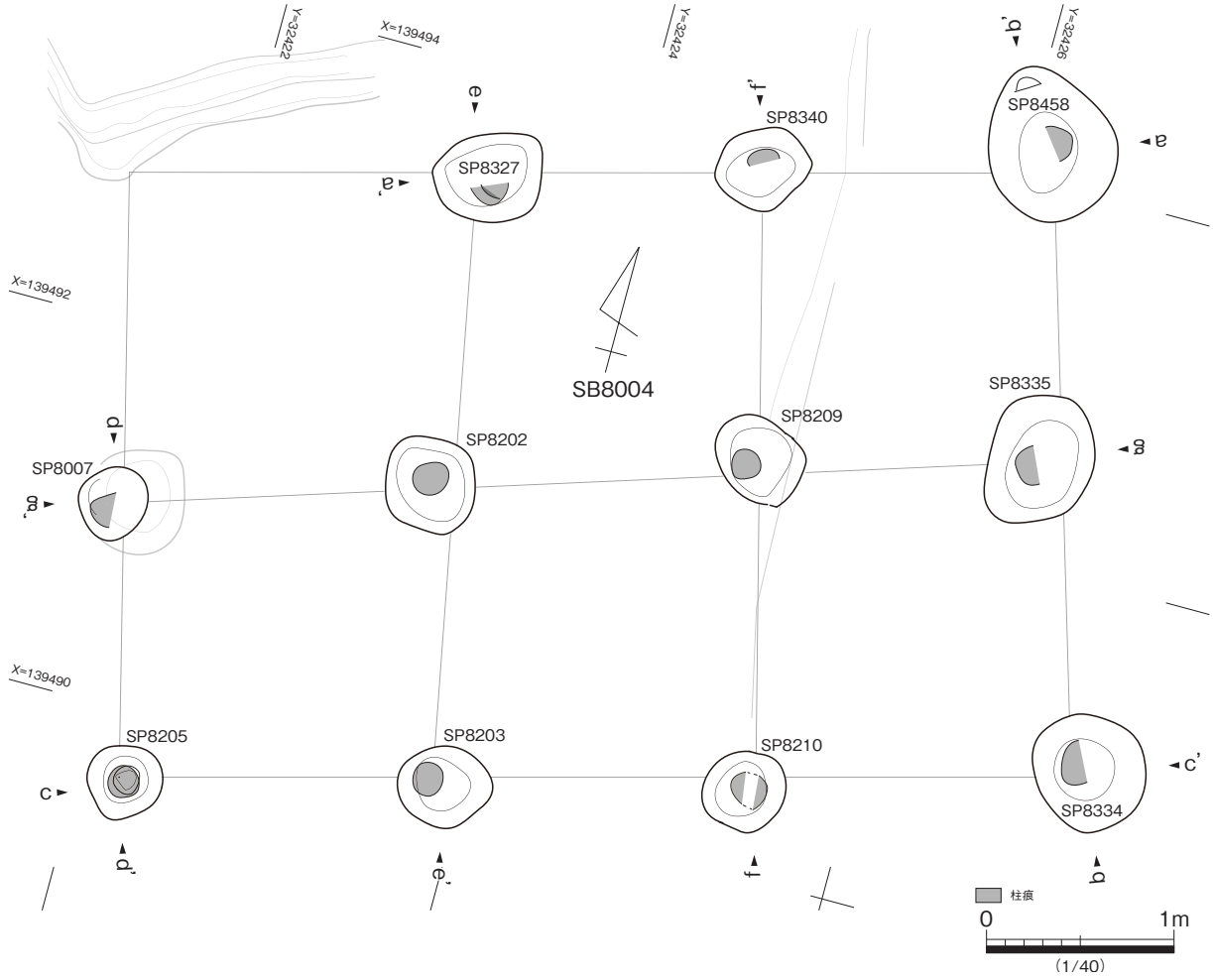
407 ～ 409 は SP7150 から出土した須恵器。407 は杯蓋。408・409 は杯身。杯身は 2 点ともほぼ完形。408 は焼成状況が悪く、409 は土器の器壁に気泡を多く含む。6 世紀後半（Ⅱ -3 期）頃。

遺構の時期は、2 面で検出したことや出土土器の時期から、6 世紀後半と考えられる。

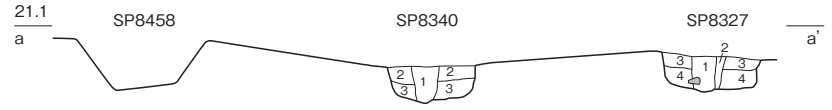
8 区 SB8004（第 114・115 図）

8 区南部で検出した。2 面で検出した遺構である。3 間× 2 間の東西棟で、北西隅の柱穴は検出できなかった。西から 2 列目の柱穴の柱通りはやや良くない。SH8001 とは、位置関係からは北西隅でわずかに重複するが、北西隅の柱穴は検出しておらず、前後関係は明らかではない。桁行は南側柱穴列で 5.07m、梁間 3.20m、主軸方位は N16.45° W、面積は 16.16㎡である。柱間は、桁行北側柱穴列の中央が 1.38mで短いほかは、1.62 ～ 1.74m、梁間 1.56 ～ 1.66m、柱穴は円形または不整円形で、長軸 40 ～ 84cm、短軸 38 ～ 60cm、深さは概ね 16 ～ 38cm、柱痕跡の直径は 16 ～ 20cm程度である。柱穴からは土師器甕小片などが出土した。

遺構の時期は、2 面で検出したことから 7 世紀代中頃以前と考えられる。

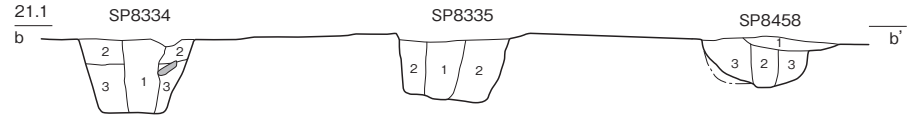


第 114 図　SB8004 平面図（1/40）



1　10YR5/3 にぶい黄褐色シルト（10YR4/4 褐色シルトがまだらに混じる）＜柱痕＞
2　10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト
3　10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト（10YR3/2 黒褐色シルトが少量混じる）

1　10YR3/2 黒褐色粗砂（10YR5/3 にぶい黄褐色シルトが少量まだらに混じる）＜柱痕＞
2　10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト
3　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（10YR3/3 暗褐色粗砂がまだらに混じる）
4　10YR3/2 黒褐色粗砂混じりシルト（10YR4/2 灰黄褐色シルトが少量まだらに混じる）



1　10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト（10YR4/4 褐色シルトがまだらに混じる、0.5 ～ 3cm 大の礫含む）＜柱痕＞
2　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（10YR5/2 灰黄褐色シルトがまだらに混じる）
3　10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト（10YR3/3 暗褐色砂質シルトが少量まだらに混じる、0.2 ～ 10cm 大の礫含む）

1　10YR4/2 灰黄褐色シルト（10YR5/4 にぶい黄褐色シルトが少量まだらに混じる、0.2 ～ 3cm 大の礫含む）＜柱痕＞
2　10YR4/2 灰黄褐色シルト（10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト）

1　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（10YR5/2 灰黄褐色シルトが粒状に少量混じる）
2　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（2.5Y5/2 暗灰黄色シルトが少量混じる）＜柱痕＞
3　10YR5/4 にぶい黄褐色シルト（10YR4/2 灰黄褐色シルト層がまだらに混じる、0.2 ～ 3cm 大の礫含む）

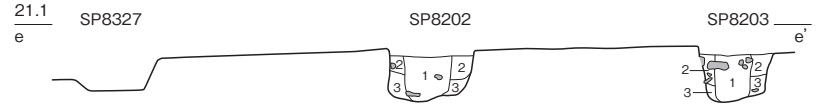
1　10YR3/2 黒褐色粘質シルト（にぶい黄褐色シルトブロックを少し含む、橙色シルト粒小礫を少し含む）＜柱痕＞
2　10YR4/1 褐灰色シルト（黄褐色シルトブロックを少し含む、2 ～ 3cm 大の小礫を少し含む）
3　10YR4/2 灰黄褐色極細砂（褐色シルトブロックを含む）

1　10YR3/2 黒褐色粘質シルト（にぶい黄褐色シルトブロックを少し含む、橙色シルト粒、小礫を少し含む）＜柱痕＞
2　10YR2/2 黒褐色粘質シルト（橙色シルト、にぶい黄褐色シルトを多く含む）
3　10YR6/3 にぶい黄橙色シルト（ベース由来の黄褐色シルト粒を少し含む、褐色細砂を少し含む）

1　10YR3/2 黒褐色シルト（10Y5/4 にぶい黄褐色シルトブロックを少し含む）＜柱痕＞
2　10YR3/2 黒褐色シルト（橙色シルトとにぶい黄褐色シルトブロック多くを含む）

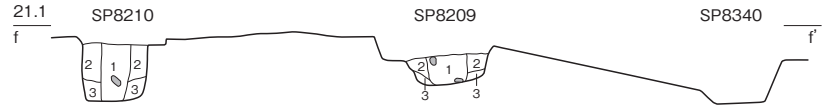
1　10YR4/1 褐灰色シルト（橙色シルト粒、黄橙色シルトブロックを少し含む）＜柱痕＞
2　10YR3/1 黒褐色シルト（10YR7/4 にぶい黄橙色シルトを含む）
3　10YR4/2 灰黄褐色細粒シルト

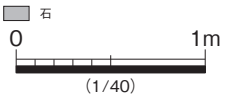
1　10YR3/2 黒褐色粘質シルト（にぶい黄褐色シルトブロックを少し含む、橙色シルト粒、小礫を少し含む）＜柱痕＞
2　10YR4/1 褐灰色シルト（黄褐色シルトブロックを少し含む、2 ～ 3cm 大の小礫を少し含む）
3　10YR4/2 灰黄褐色極細砂（褐色シルトブロックを含む）



1　10YR3/1 黒褐色シルト（10YR2/4 にぶい黄橙色シルトを含む）＜柱痕＞
2　10YR3/1 黒褐色シルト（橙色シルト粒を少し含む、1 ～ 2 cm 大の小礫を含む）
3　10YR5/3 にぶい黄褐色極細砂（明黄褐色シルトを少し含む）

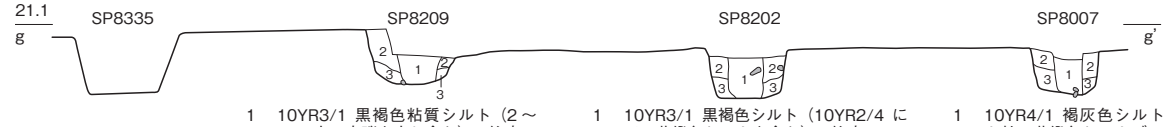
1　10YR3/2 黒褐色粘質シルト（にぶい黄褐色シルトブロックを少し含む、橙色シルト粒、小礫を少し含む）＜柱痕＞
2　10YR2/2 黒褐色粘質シルト（橙色シルト、にぶい黄褐色シルトを多く含む）
3　10YR6/3 にぶい黄橙色シルト（ベース由来の黄褐色シルト粒を少し含む、褐色細砂を少し含む）





1　10YR2/1 黒色粘質シルト（2.5Y6/4 にぶい黄色シルトブロックを少し含む）＜柱痕＞
2　10YR4/1 褐灰色シルト（にぶい黄色シルトブロックを含む、1 ～ 3cm 大の小礫を含む）
3　10YR4/1 褐灰色シルト（にぶい黄色シルトブロックを多く含む、ベース由来の褐色細砂を少し含む）

1　10YR3/1 黒褐色粘質シルト（2 ～ 3cm の小礫を少し含む）＜柱痕＞
2　2.5Y6/3 にぶい黄色細粒シルト（橙色シルト粒、1 ～ 2cm の小礫をわずかに含む）
3　10YR4/1 褐灰色シルト

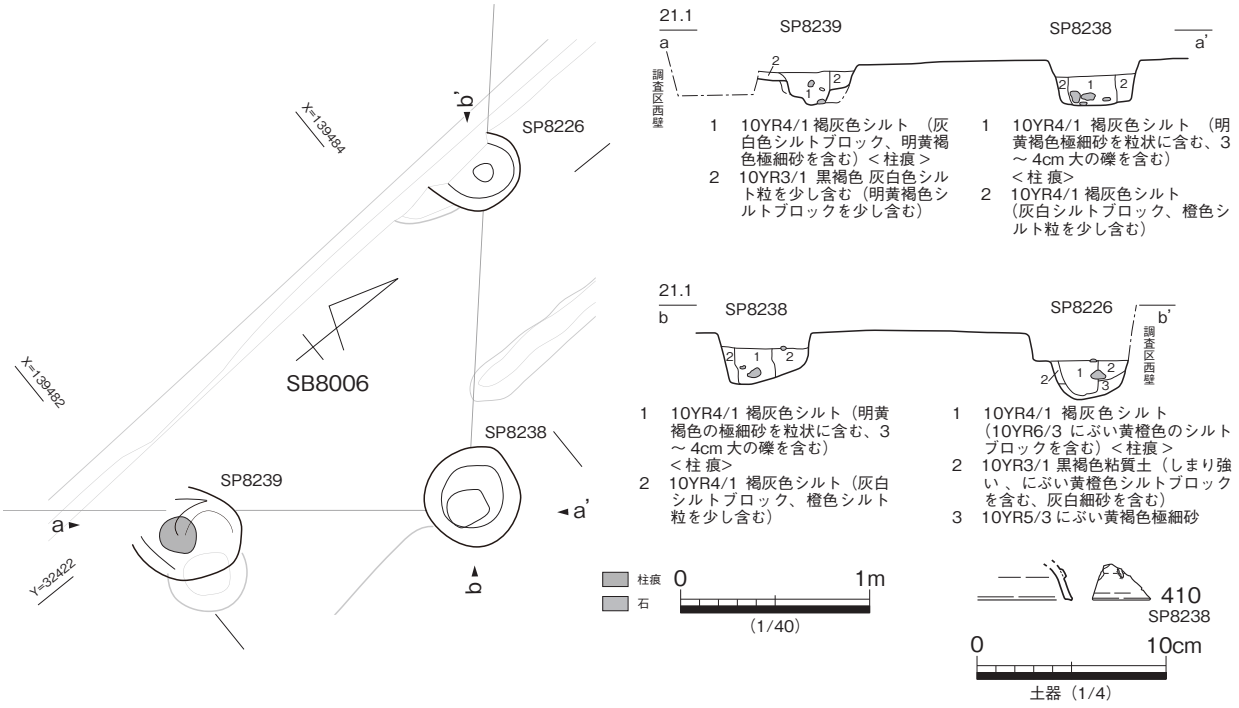


1　10YR3/1 黒褐色粘質シルト（2 ～ 3cm 大の小礫を少し含む）＜柱痕＞
2　2.5Y6/3 にぶい黄色細粒シルト（橙色シルト粒、1 ～ 2cm 大の小礫をわずかに含む）
3　10YR4/1 褐灰色シルト

1　10YR3/1 黒褐色シルト（10YR2/4 にぶい黄橙色シルトを含む）＜柱痕＞
2　10YR3/1 黒褐色シルト（橙色シルト粒を少し含む、1 ～ 2cm 大の小礫を含む）
3　10YR5/3 にぶい黄褐色極細砂（明黄褐色シルトを少し含む）

1　10YR4/1 褐灰色シルト（橙色シルト粒、黄橙色シルトブロックを少し含む）＜柱痕＞
2　10YR3/1 黒褐色シルト（10YR7/4 にぶい黄橙色シルトを含む）
3　10YR4/2 灰黄褐色細粒シルト

第 115 図　SB8004 断面図（1/40）



第 116 図　SB8006 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

8 区 SB8006（第 116 図）

8 区南西端で検出した。南西部は調査区外へ延びる。2 面で検出した遺構である。東側には、主軸方位がほぼ同じで、北側の柱筋が近い位置にある SB7004 があり、関連性が窺える建物である。SH8003 と重複し、SH8003 より新しいことが調査区西壁土層断面図からわかる。1 間 × 1 間を検出した。SB7004 との関連を考えれば、2 間 × 3 間程度の総柱建物となる可能性があろう。南東 - 北西方向は 1.85 m以上、南西 - 北東方向は 1.58m以上、主軸方位は N38.79° E、面積は 2.93㎡以上である。柱穴の形状は円形または楕円形で、長軸 50 ～ 60cm、短軸 40 ～ 50cm、深さ 22 ～ 28cmで、柱痕跡の直径は 20cmである。柱穴埋土中からは須恵器杯蓋片が出土した。

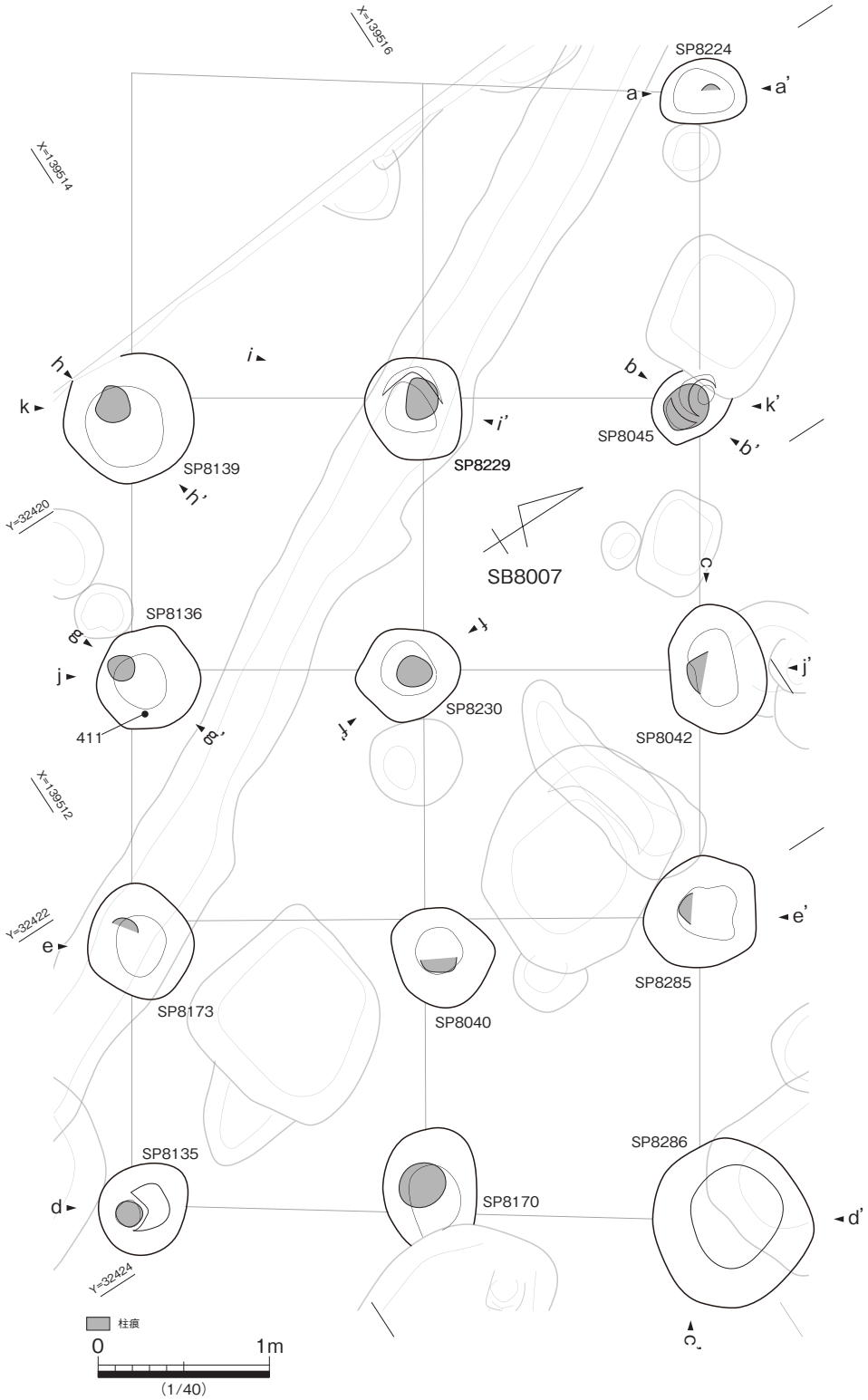
410 は SP8238 から出土した須恵器杯蓋。外面に他の須恵器が溶着する。6 世紀後半頃。

遺構の時期は、2 面で検出したこと、SH8003 より新しいこと、SB7004 との関係から、7 世紀前半～7 世紀代中頃以前と考えられる。

8 区 SB8007（第 117・118 図）

8 区中央西寄りで検出した。2 面で検出した遺構であるが、検出場所には 2 層の堆積のみで 1b 層の堆積は認められない。西側は調査区外へ延びる。4 間以上 × 2 間の総柱建物である。北西側の梁間部分の南西側 2 穴は調査区外へ延びると考えられる。桁行は 6.5m以上、梁間 3.4m、主軸方位は梁間方向で N32.95° E、面積は 22.1㎡以上である。柱間は桁行 1.52 ～ 1.58mで、北東側柱列の北西から 1 間目のみ 1.82 mで他より長いため、北隅の柱穴は、SB8007 と柱筋を揃える別の建物の可能性も考えられる。梁間は 1.7mである。柱穴は円形、不整円形、隅丸方形で、長軸 56 ～ 94cm、短軸 52 ～ 86cm、深さ 26 ～ 60cm、柱痕跡の直径は 16 ～ 20cmである。

411 は SP8136 から出土した須恵器杯蓋。肩部には緩い段、口縁端部内面には段を有する。6 世紀後半（Ⅱ



第 117 図　SB8007 平面図（1/40）

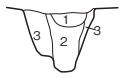
-3 期）頃。

遺構の時期は、出土遺物の時期は 6 世紀代後半頃であるが、建物規模を 4 間以上× 2 間の掘立柱建物に復元できることから、建物規模により 7 世紀中頃、正方位建物群が出現する直前の建物群になる可能性があろう。

21.2 a SP8224 a'

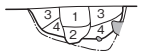
1 10YR4/2 灰黄褐色極細砂混じりシルト（1 ～ 3cm 大の礫を少量含む）＜抜取痕＞
2 10YR3/2 黒褐色粘質土（0.5 ～ 1cm 大の礫を中量含む）＜柱痕＞
3 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（3 ～ 5cm 大の礫を中量含む）

21.2 b SP8045 b'



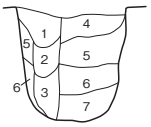
1 2.5Y7/3 浅黄色シルト（黄灰色シルトブロック 橙色シルト粒を含む）
2 2.5Y7/3 浅黄色シルト（黒褐色シルト粒、橙色シルト粒を少し含む）＜柱痕＞
3 2.5Y4/2 暗灰黄色極細砂（黒色極細砂を粒状に含む、明黄褐色シルトを少し含む）

21.2 f SP8230 f'



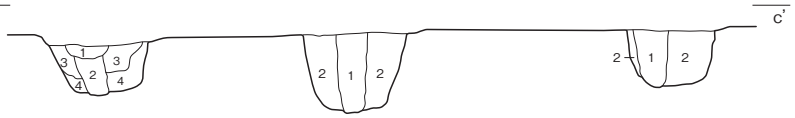
1 10YR3/4 暗灰色粘質土（5mm 大の礫を少量含む）
2 10YR4/2 灰黄褐色粘質土（5mm 大の礫をわずかに含む）＜柱痕＞
3 10YR3/3 暗褐色粘質土（10YR4/2 灰黄褐色粘質土がまだらに混じる、2cm 大の礫を少量含む）
4 10YR4/4 褐色粘質土（10YR4/2 灰黄褐色粘質土が混じる、2cm 大の礫をわずかに含む）

21.2 g SP8136 g'



1 10YR5/4 にぶい黄褐色黄褐色シルト（7.5YR5/6 明褐色粘質土が小ブロックで中量混じる）
2 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト（10YR7/2 にぶい黄橙色が混じる、10YR4/6 褐色粘質土が小ブロックで少量混じる）
3 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土（10YR4/6 褐色粘質土がまだらに混じる）＜柱痕＞
4 10YR4/4 褐色シルト（1 ～ 3cm 大の礫が中量混じる）
5 10YR4/6 褐色砂礫混じり粘質土（1cm 大の礫を多く含む）
6 10YR4/6 褐色砂礫混じり粘質土（3cm 大の礫を中量含む）
7 10YR4/4 褐色砂礫混じり粘質土（5cm 大の礫を中量含む）

21.2 c SP8042 SP8285 SP8286 c'



1 10YR7/3 にぶい黄橙色シルト（10YR5/4 にぶい黄褐色シルトが少量まだらに混じる）
2 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト（10YR4/2 灰黄褐色粗砂が少量まだらに混じる、2 ～ 3cm 大の礫を含む）＜柱痕＞
3 10YR6/2 灰黄褐色粗砂混じりシルト（0.2 ～ 5cm 大の礫を含む）
4 10YR5/3 にぶい黄褐色シルトと 10YR4/4 褐色シルトがまだらに混じる

1 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト（10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂混じりシルトがまだらに混じる 0.5 ～ 3cm 大の礫を多く含む）＜柱痕＞
2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト（0.5 ～ 5cm 大の礫を多く含む）

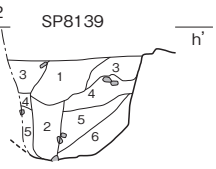
1 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト（10YR6/3 にぶい黄橙色シルトが少量まだらに混じる、0.2 ～ 2cm 大の礫を多く含む）＜柱痕＞
2 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト（0.2 ～ 5cm 大の礫を多く含む）

21.2 d SP8135 SP8170 SP8286 d'

1 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト（0.2 ～ 3cm 大の礫を多く含む）＜柱痕＞
2 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂礫混じりシルト（10YR3/2 黒褐色粗砂がまだらに混じる、0.2 ～ 3cm 大の礫を多く含む）

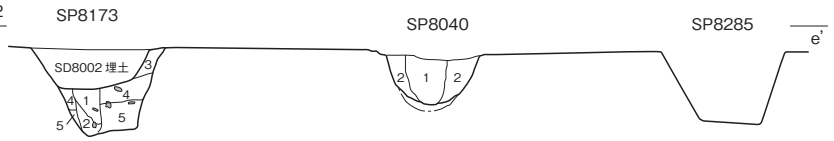
1 10YR6/4 にぶい黄橙色粘質シルト（10YR5/8 黄褐色シルトが粒状に少量まだらに混じる、固くしまる）
2 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト（10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂混じりシルトがまだらに混じる、0.2 ～ 5cm 大の礫を含む）＜柱痕＞
3 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂礫混じりシルト（0.5 ～ 5cm 大の礫を含む）

21.2 h SP8139 h'



1 10YR6/4 にぶい黄橙色粘質土（10YR5/8 黄褐色粘質土が小ブロックで少量混じる）
2 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト（10YR5/2 灰黄褐色シルトが混じる）＜柱痕＞
3 10YR5/2 灰黄褐色粘質土（10YR3/4 暗褐色粘質土が混じる）
4 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂混じりシルト（2cm 大の礫を中量含む）
5 10YR4/4 褐色シルト（3cm 大の礫を少量含む）
6 10YR4/4 褐色粗砂混じり粘質土（2cm 大の礫を少量含む）

21.2 e SP8173 SP8040 SP8285 e'



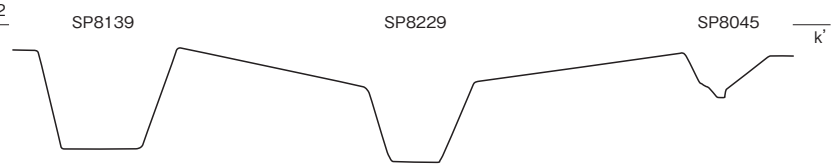
1 10YR5/8 にぶい黄褐色シルト（10YR4/4 褐色粘質土が混じる）
2 10YR3/3 暗褐色粗砂混じり粘質土（1cm 大の礫を少量含む）＜柱痕＞
3 10YR4/2 灰黄褐色シルト（2cm 大の礫を中量含む）
4 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂混じりシルト（0.5 ～ 5cm 大の礫を多く含む）
5 10YR4/2 灰黄褐色粘質土（3cm 大の礫を多く含む）

1 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト（10YR6/3 にぶい黄橙色シルトがまだらに混じる）＜柱痕＞
2 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト（10YR6/3 にぶい黄橙色シルトと 10YR6/4 にぶい黄橙色シルトが少量まだらに混じる、1 ～ 5cm 大の礫を多く含む）

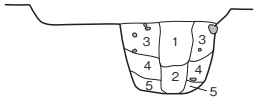
0 1m
（1/40）

21.2 j SP8136 SP8230 SP8042 j

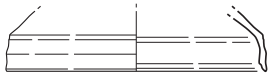
21.2 k SP8139 SP8229 SP8045 k'



21.2 i SP8229 i'



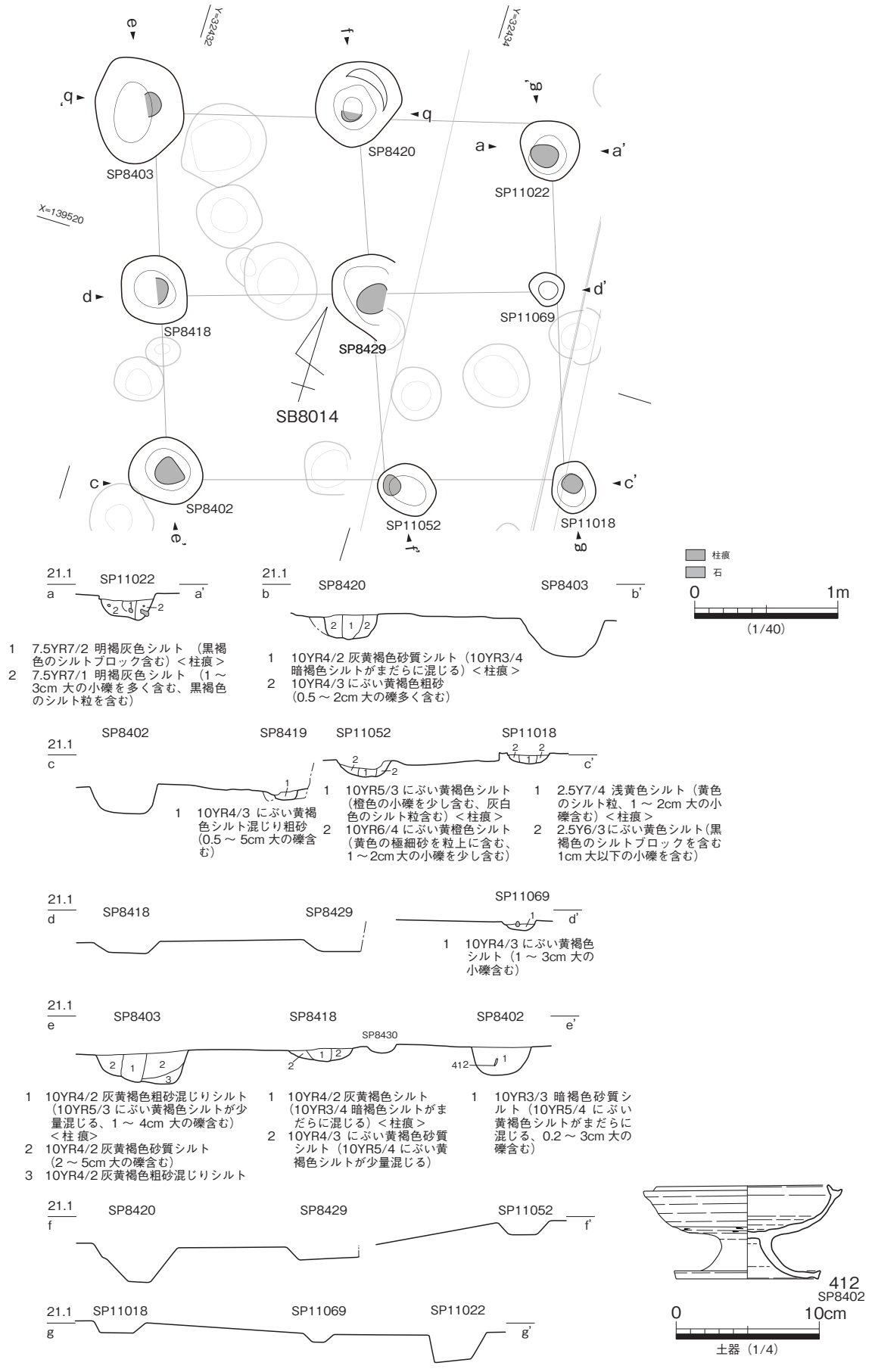
1 10YR6/4 にぶい黄橙色粘質土（10YR5/8 黄褐色粘質土小ブロックで中量混じる）
2 10YR6/2 灰黄褐色粘質土（10YR6/4 にぶい黄橙色粘質土がまだらに混じる、10YR5/6 黄褐色粘質土小ブロックが少量混じる）＜柱痕＞
3 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂混粘質土（10YR5/2 灰黄褐色粘質土が混じる、1cm 大の礫中量含む）
4 10YR3/4 暗褐色極細砂混粘質土（10YR6/2 灰黄褐色粘質土がまだらに混じる、3cm 大の礫を少量含む）
5 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土混粗砂



411
SP8136

0 10cm
土器（1/4）

第 118 図　SB8007 断面図（1/40）、出土遺物（1/4）



1　7.5YR7/2 明褐灰色シルト （黒褐色のシルトブロック含む）＜柱痕＞
2　7.5YR7/1 明褐灰色シルト （1 ～ 3cm 大の小礫を多く含む、黒褐色のシルト粒を含む）

1　10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト（10YR3/4 暗褐色シルトがまだらに混じる）＜柱痕＞
2　10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂 (0.5 ～ 2cm 大の礫多く含む)

1　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト混じり粗砂 (0.5 ～ 5cm 大の礫含む)

1　10YR5/3 にぶい黄褐色シルト（橙色の小礫を少し含む、灰白色のシルト粒含む）＜柱痕＞
2　10YR6/4 にぶい黄橙色シルト（黄色の極細砂を粒上に含む、1 ～ 2cm 大の小礫を少し含む）

1　2.5Y7/4 浅黄色シルト（黄色のシルト粒、1 ～ 2cm 大の小礫含む）＜柱痕＞
2　2.5Y6/3 にぶい黄色シルト（黒褐色のシルトブロックを含む 1cm 大以下の小礫を含む）

1　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（1 ～ 3cm 大の小礫含む）

1　10YR4/2 灰黄褐色粗砂混じりシルト（10YR5/3 にぶい黄褐色シルトが少量混じる、1 ～ 4cm 大の礫含む）＜柱痕＞
2　10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト（2 ～ 5cm 大の礫含む）
3　10YR4/2 灰黄褐色粗砂混じりシルト

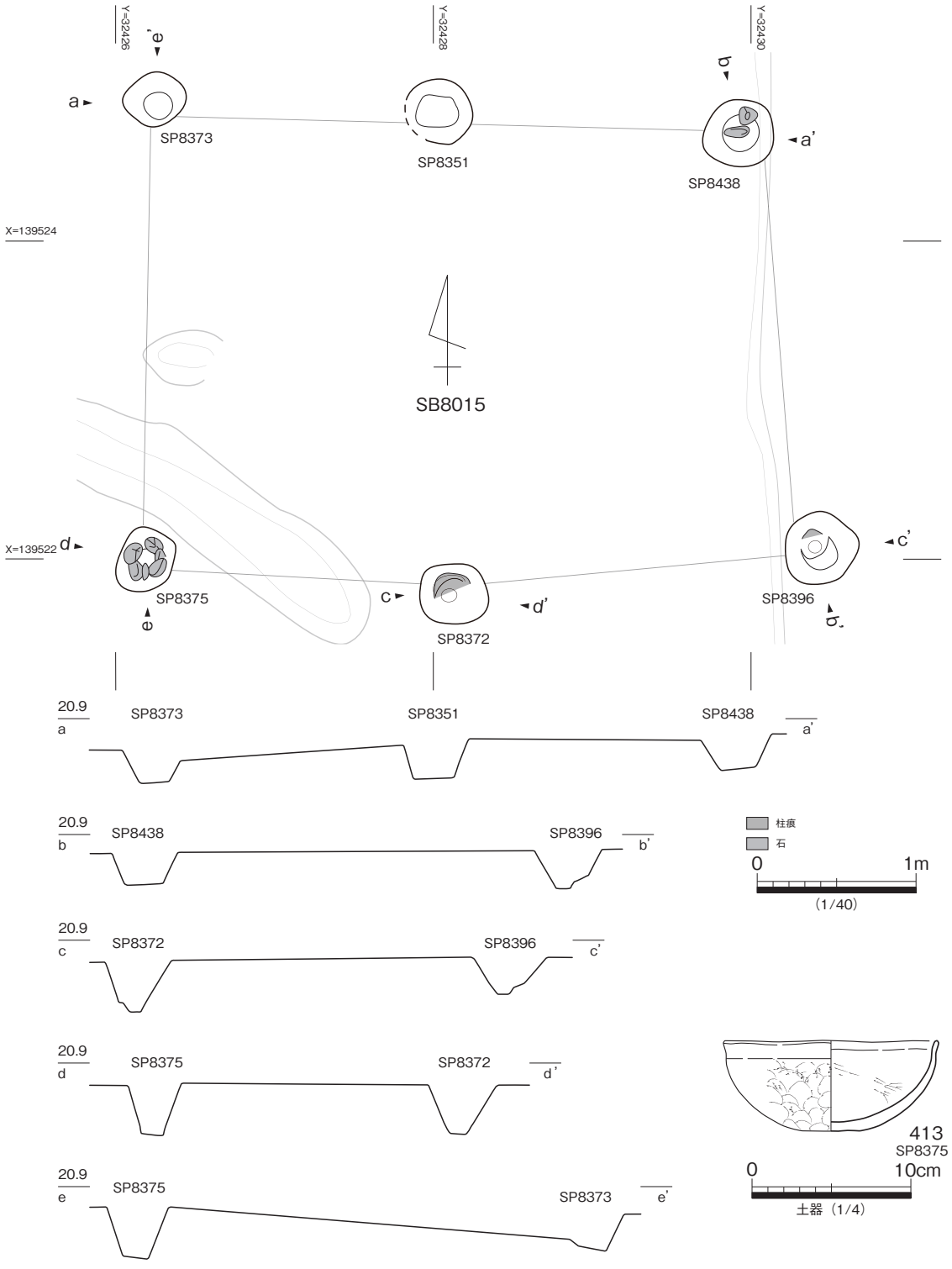
1　10YR4/2 灰黄褐色シルト（10YR3/4 暗褐色シルトがまだらに混じる）＜柱痕＞
2　10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト（10YR5/4 にぶい黄褐色シルトが少量混じる）

1　10YR3/3 暗褐色砂質シルト（10YR5/4 にぶい黄褐色シルトがまだらに混じる、0.2 ～ 3cm 大の礫含む）

第 119 図　SB8014 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

8 区・11 区 SB8014（第 119 図）

8 区と 11 区にまたがって検出した。8 区では 2 面で検出した遺構である。2 間× 2 間の総柱建物で、柱通りはやや悪い。東西方向が 2.77 ～ 2.80m、南北方向が 2.50 ～ 2.62m、主軸方位が N18.30 W、面積は 7.11㎡である。主軸方位は西南に隣接する SH8008 と近い。柱間は、東西方向が 1.25 ～ 1.50m、南北方向が 1.18m～ 1.34m、柱穴の形状は概ね不整円形で、8 区では長軸 52cm～ 74cm、短軸 45 ～ 60cmであ



第 120 図　SB8015 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

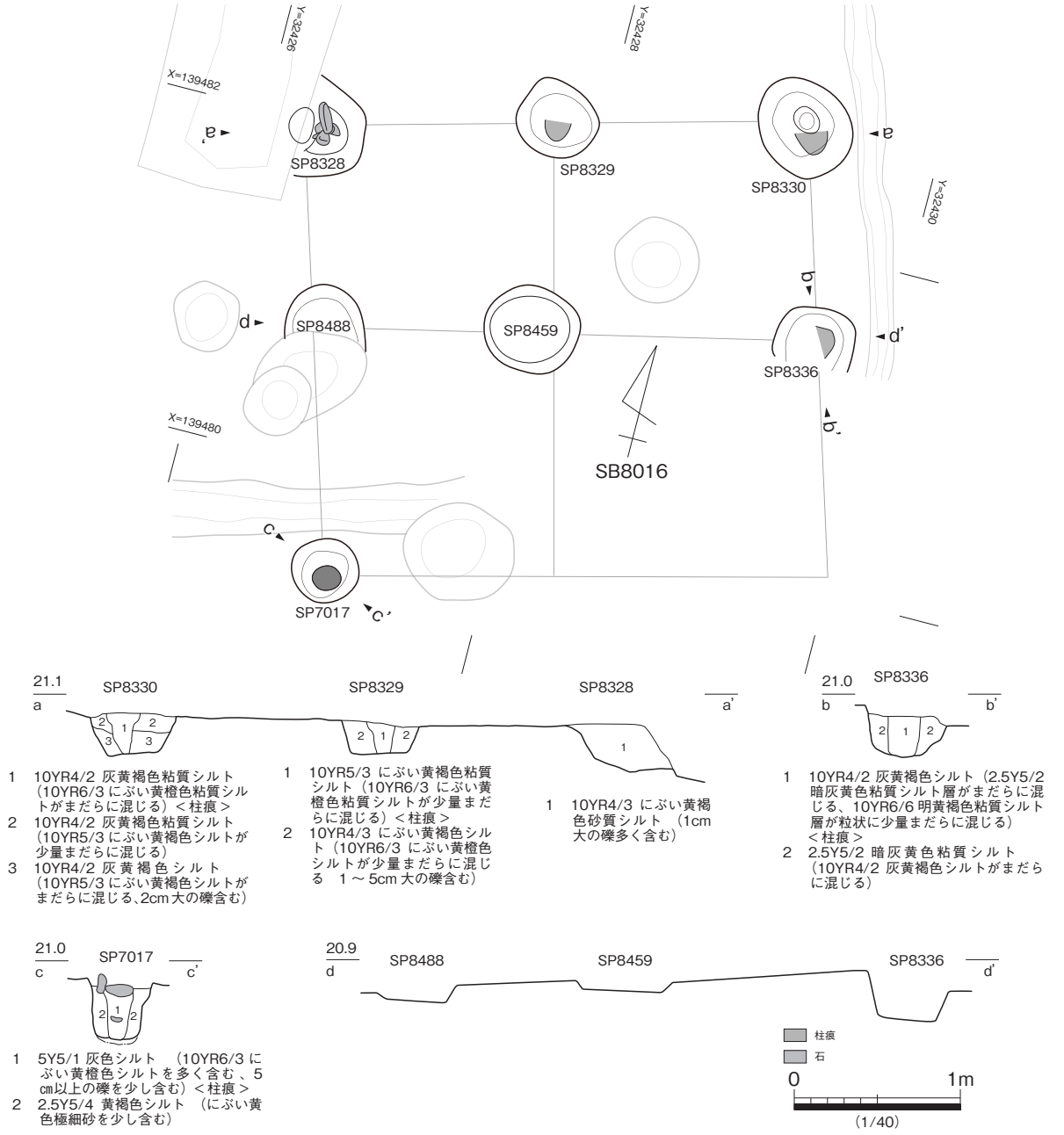
るが、11 区では長軸 24cm～ 45cm、短軸 22 ～ 40cm程度で小さめである。深さ 10 ～ 19cm、柱痕跡の直径は 21cm程度である。

412 は SP8402 から出土した須恵器高杯。１/2 以上残存する。7 世紀初頭（Ⅱ -5）頃。

遺構の時期は、2 面で検出したことや柱穴からの出土遺物の時期から、7 世紀初頭頃と考えられる。

8 区 SB8015（第 120 図）

8 区中央付近で検出した。2 面で検出した遺構である。桁行 2 間×梁間 1 間の掘立柱建物である。南側の柱筋の中央の柱穴はやや南へ寄り、東側の柱列は北側の柱列に対し直角よりやや開く。桁行は 3.78 m～ 4.16m、梁間は 2.66 ～ 2.94m、主軸方位は柱列によりばらつきがあるが、梁方向でＮ 1.55° Ｅ～Ｎ



第 121 図　SB8016 平・断面図（1/40）

9.93° W を指し、面積は 11.15㎡程度と考えられる。桁行の柱間は 1.76 ～ 2.45m、梁間は 2.66m～ 2.94m、柱穴の形状は概ね円形で、直径 36 ～ 46㎝、深さ 18 ～ 32㎝、柱痕跡の直径は 15㎝程度である。

413 は SP8375 から出土した土師器杯。

遺構の時期は、2 面で検出したこと、出土遺物から 6 世紀後半頃と考えられる。

8 区・7 区 SB8016（第 121 図）

8 区と 7 区の境付近で検出した。2 面で検出した。柱穴の前後関係から SB7004 より古い。SH8002 とは重複関係にあるが、周辺の遺構の遺存状態は非常に悪く、SH8002 床面と同一面で遺構を検出しており、SH8002 との遺構の前後関係は不明である。2 間× 2 間の総柱建物が想定されるが、南側柱穴列の東 2 穴は未検出である。東西方向は 3.00m、南北方向は 2.68m、主軸方位は N15.76° W、面積は 8.04㎡である。柱間は東西方向が 1.50m、南北方向は北から 1.26m、1.42mである。柱穴は概ね円形・不整円形で、長軸 46 ～ 62㎝、短軸 40 ～ 52㎝、深さ 18 ～ 36㎝、柱痕跡の直径は 16 ～ 20㎝である。埋土中からは須恵器杯蓋または杯身片、土師器片が出土した。

遺構の時期は、2 面で検出したことから 7 世紀中頃以前と考えられる。

8 区・12 区 SB8018（第 122 図）

8 区と 12 区に跨って検出した。8 区では 2 面で検出した。最大で桁行 6 間、梁間 3 間の東西棟の掘立柱建物を想定したが、東側の梁間の中間の 2 穴および北側桁行の柱穴が 2 穴未検出であることや、柱穴規模に比べ建物規模が大きいことから、柱通りが揃う西半部のみが該当部分で、桁行 3 間、梁間 2 間の南北棟に復元される掘立柱建物の可能性もある。ただし、この場合は東側柱穴列の中央 2 穴が未検出となる。SH12002 と重複し、これを掘り込む。SH8004 の掘り下げ後柱穴を検出していることが c-c' 断面、i-i' 断面からわかるが、SH8004 の断面図には SB8018-SP8490 断面の記載はなく、SH8004 埋土の土層も薄いため、前後関係ははっきりしない。

桁行 6 間、梁間 3 間を想定した場合、桁行 9.61m～ 9.63m、梁間 4.17m～ 4.42m、主軸方位は梁方向でN 12.87° W、面積は 41.34㎡となる。

桁行 3 間、梁間 2 間を想定した場合、桁行 4.17m、梁間 3.45m、主軸方位 N13.05° W、面積は 14.38㎡である。

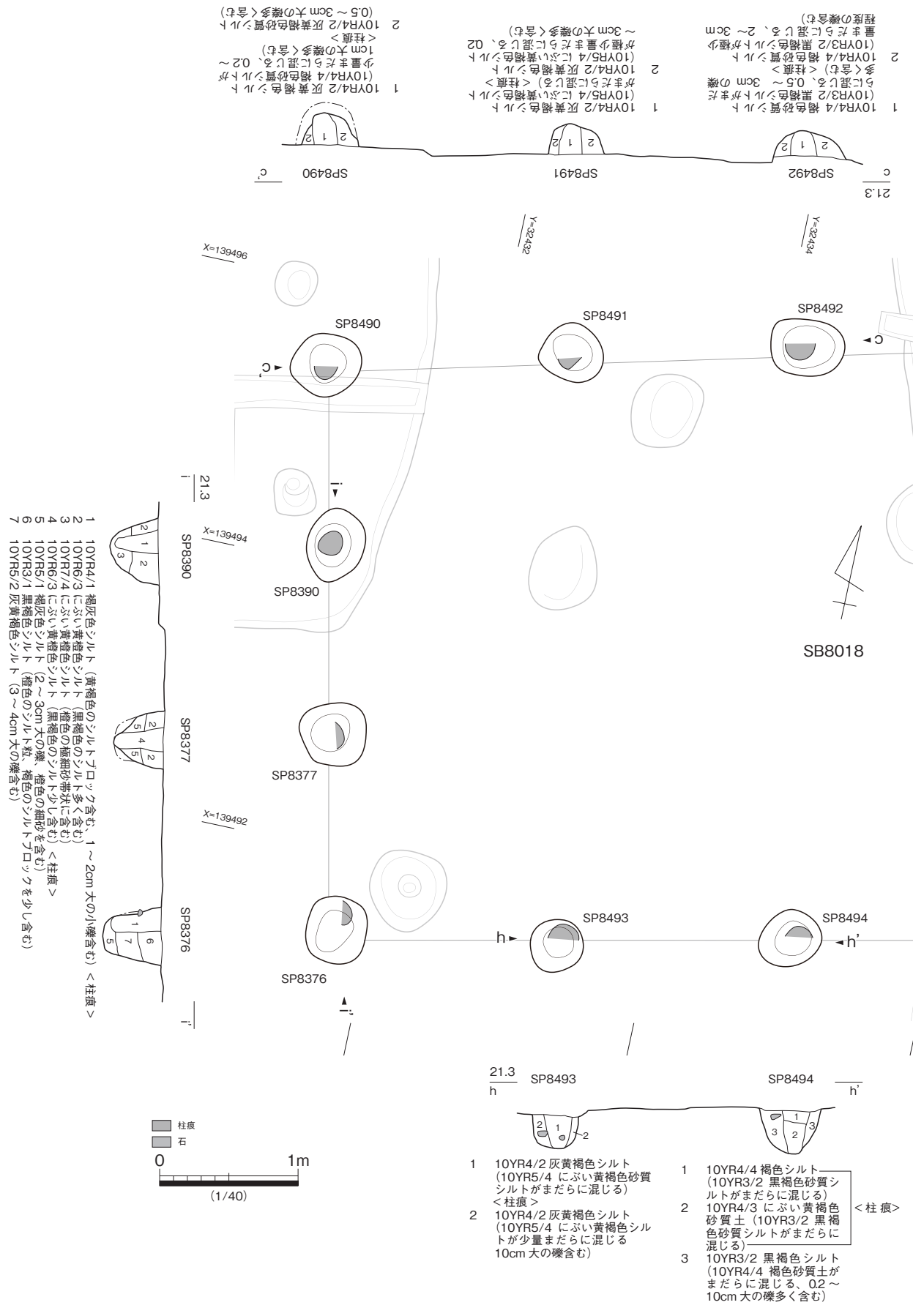
柱間は南北方向が 1.30 ～ 1.47m、東西方向は、2 間の場合は 1.70 ～ 1.80m、6 間を想定すれば 1.34m～ 1.80m、柱穴の形状は概ね不整円形で、長軸 38 ～ 54㎝、短軸 36㎝～ 46㎝、深さ 12 ～ 45㎝、柱痕跡の直径は 17㎝程度である。柱穴埋土中からは須恵器、土師器片の他、鉄滓片が出土した。

414 は SP8491 から出土した須恵器甕口縁部。外面頸部にわずかにカキ目が観察できる。415 は SP12118 から出土した土師器甕口縁部。416 は SP12081 から出土した鉄滓小片。

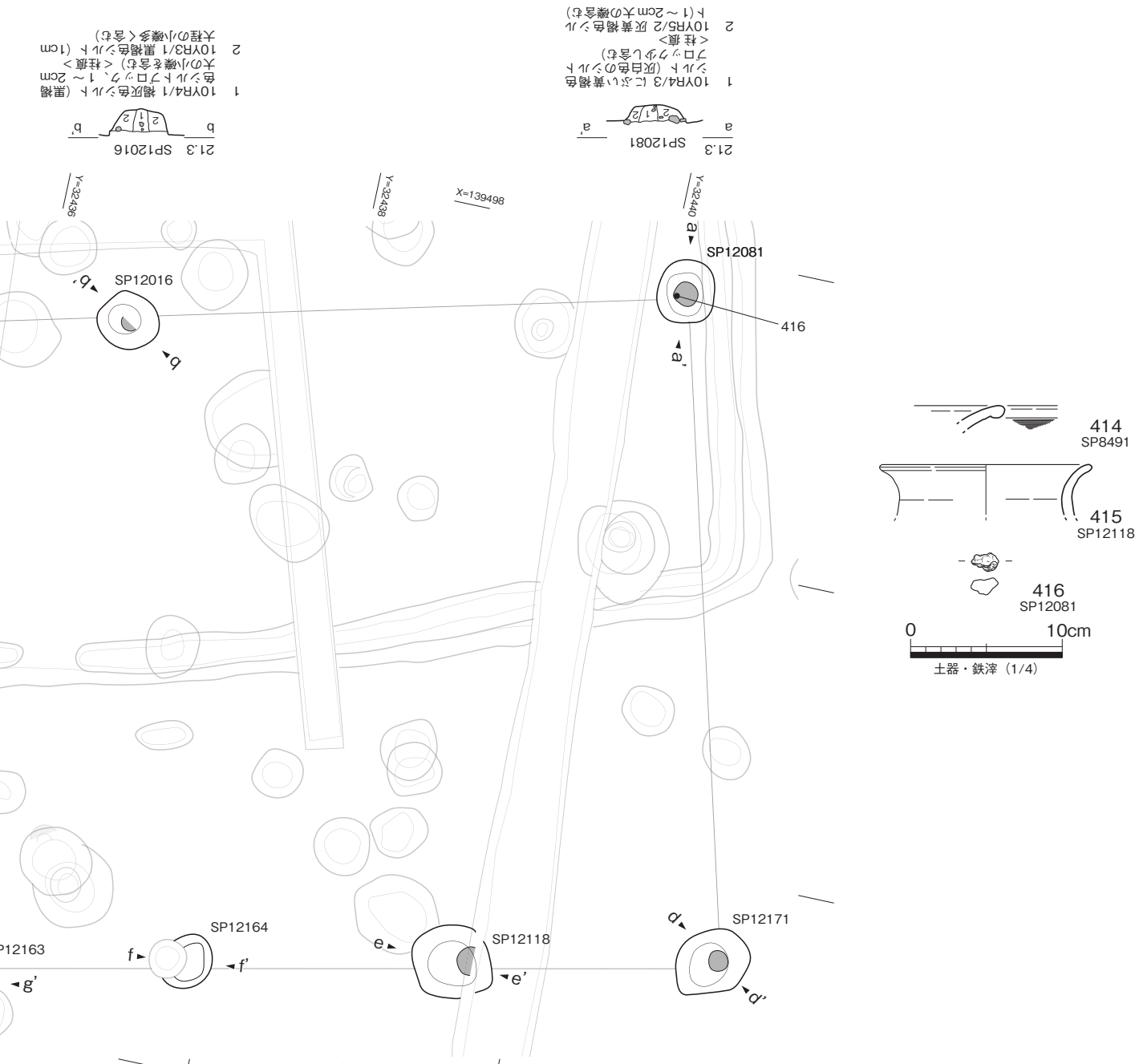
遺構の時期は、2 面で検出したこと、SH12002 より新しいことから、6 世紀末～ 7 世紀中頃と考えられる。

8 区・12 区 SB8019（第 123・124 図）

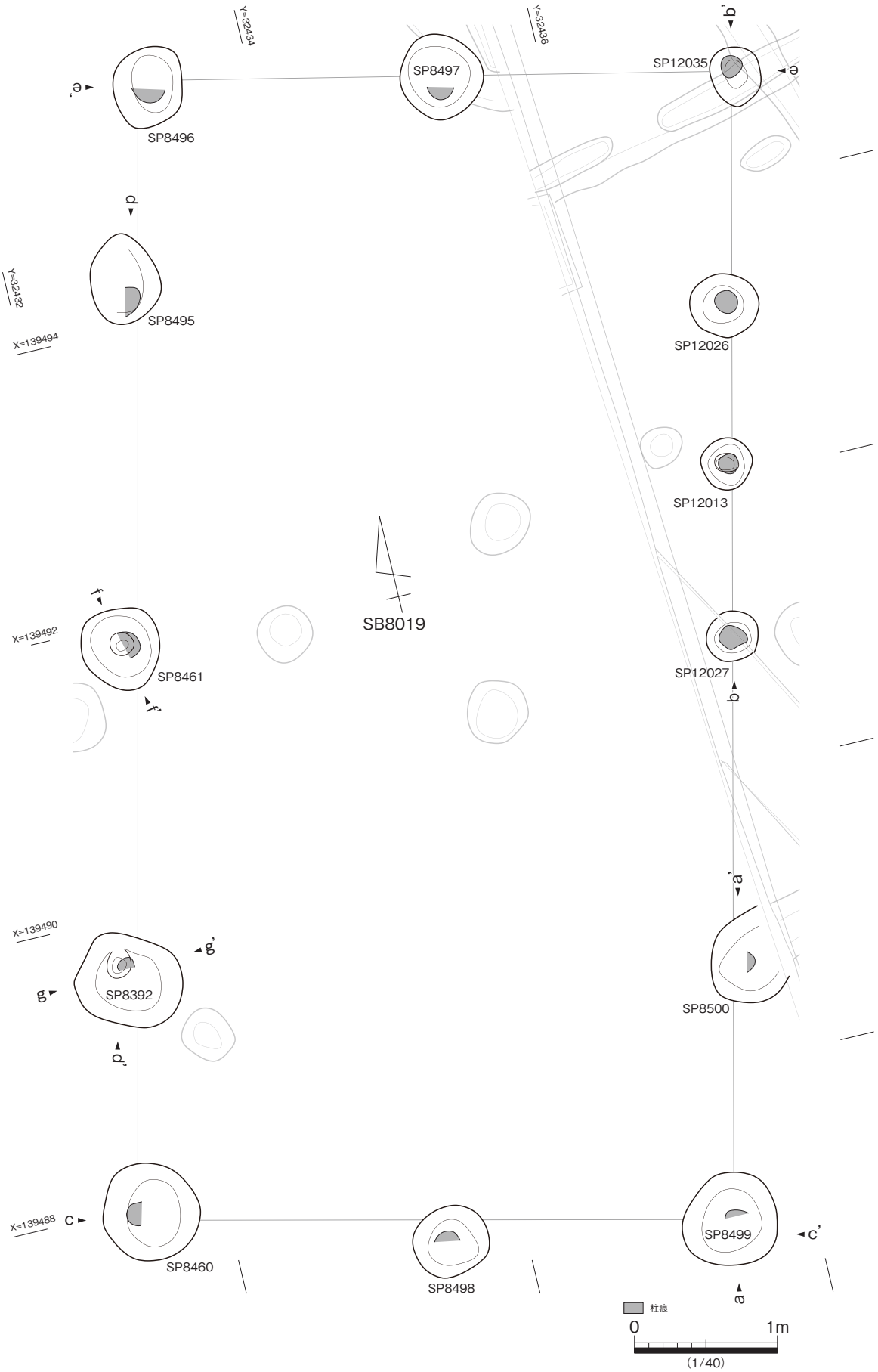
8 区と 12 区にまたがって検出した。8 区では 2 面、12 区では 1 面で検出し、掘立柱建物に復元することは不適当とも考えられるが、柱筋が通ること、調査時にもこの建物が復元されていること、建物方位が 1 面の遺構と合わないことや柱穴数が 8 区の方が多いことからこの項で報告する。遺構の重複関係



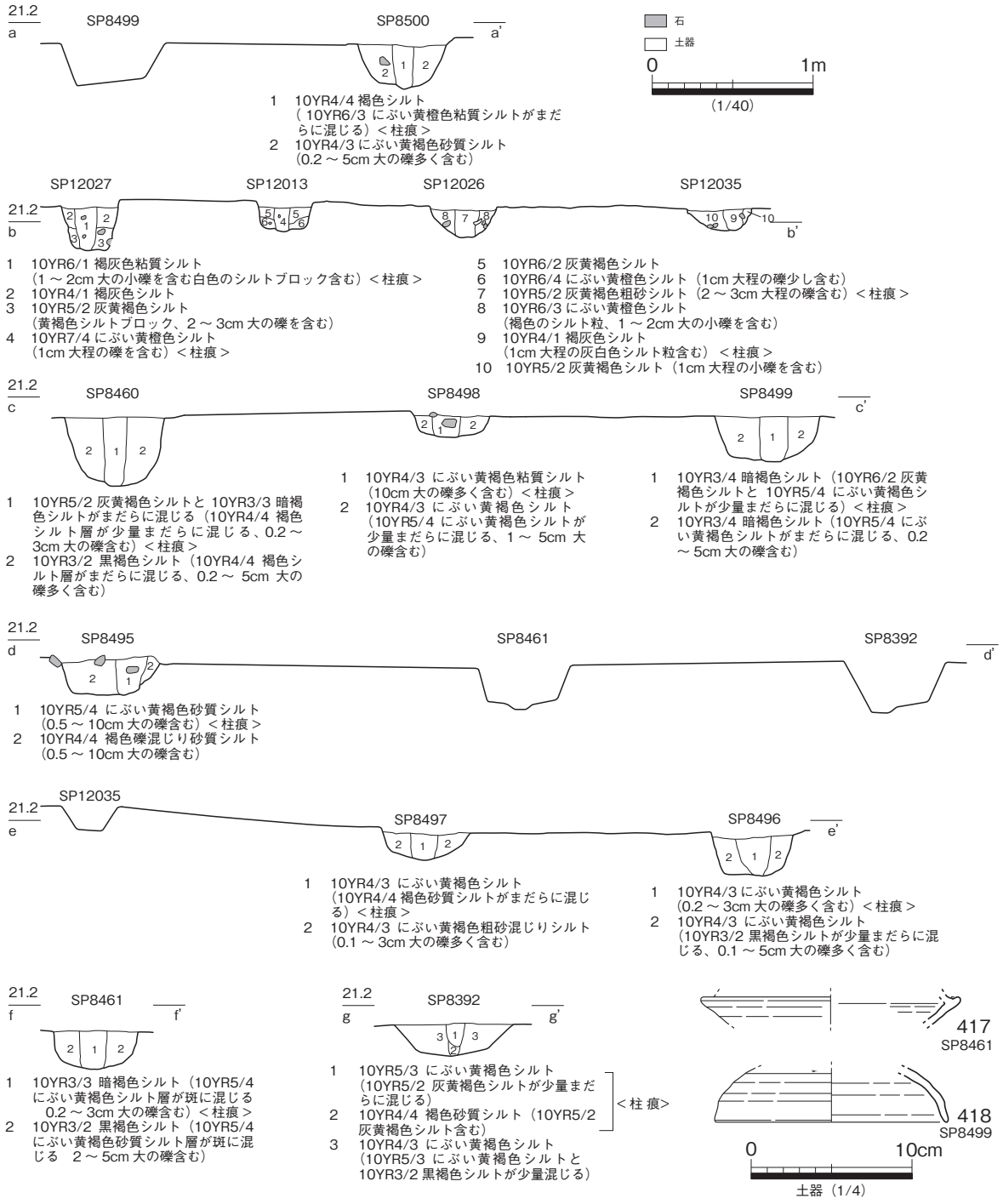
第 122 図　SB8018 平・断面



面図（1/40）、出土遺物（1/4）



第 123 図　SB8019 平面図（1/40）



第 124 図　SB8019 断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

から、SH12002 より新しい。桁行 4 間、梁間 2 間の南北棟で、桁行 7.93m ～ 8.16m、梁間 4.15m ～ 4.20 m、主軸方位は N12.92° E、面積は 33.57㎡である。柱間は、桁行が、両端 1.50m ～ 1.97m、中央が 2.24 m ～ 2.45m、梁間は 2.0m ～ 2.2mであるが、東側の桁行柱列では、北から 2 穴目と 3 穴目の間に 1 穴存在する可能性もある。柱穴の形状は円形・楕円形・隅丸方形で、長軸 50cm ～ 72cm、短軸 46cm ～ 68cmを測るが、12 区で検出した柱穴はやや小さい。深さ 15 ～ 42cm、柱痕跡の直径は 16cm ～ 20cmである。柱穴埋土中からは須恵器小片が出土した。

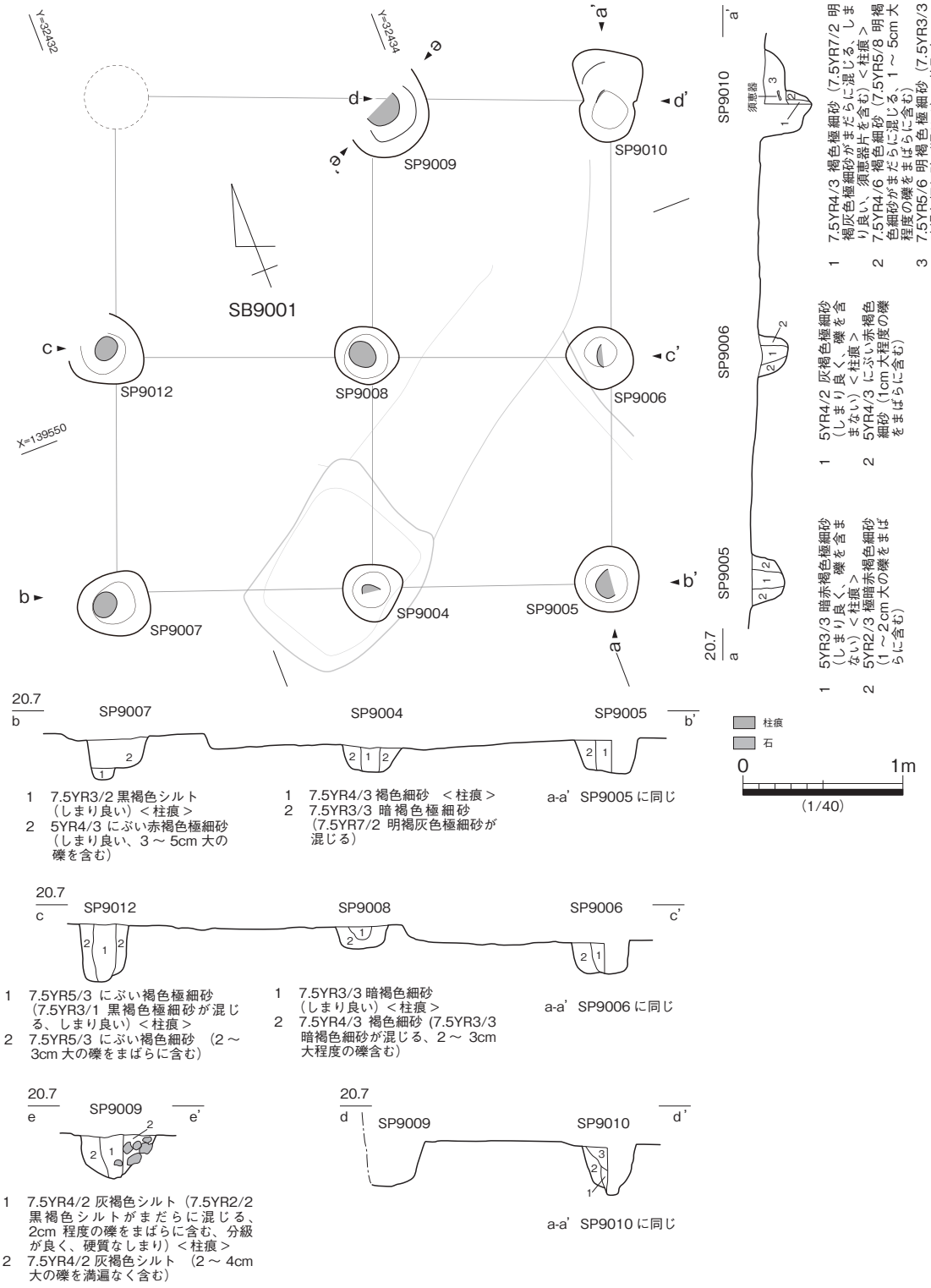
417 は SP8461 から出土した須恵器杯身小片。418 は SP8499 から出土した須恵器杯蓋小片。いずれも

7 世紀初頭（Ⅱ -5 期）頃と考えられる。

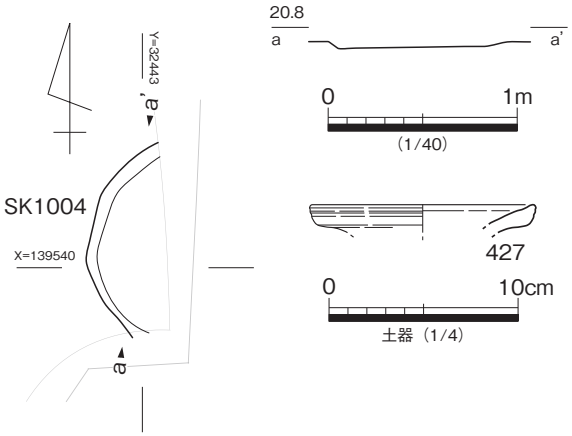
遺構の時期は、2 面で検出したことや出土遺物の時期から、7 世紀初頭～中頃と考えられる。

9 区 SB9001（第 125 図）

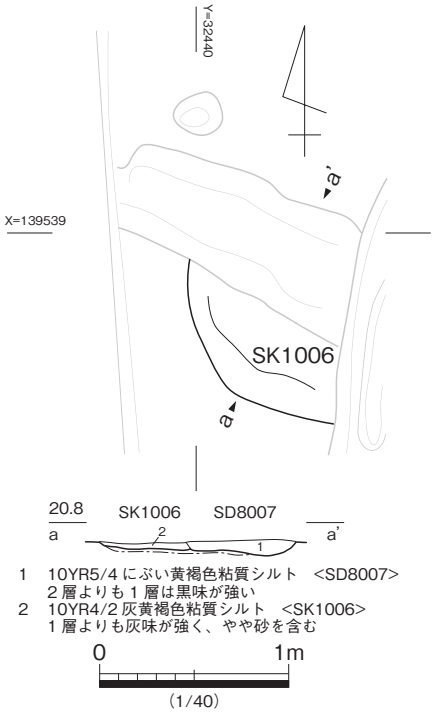
9 区北端付近で検出した。2 面で検出した。やや方位が異なるが、約 2.7m東側に、同規模の総柱建物



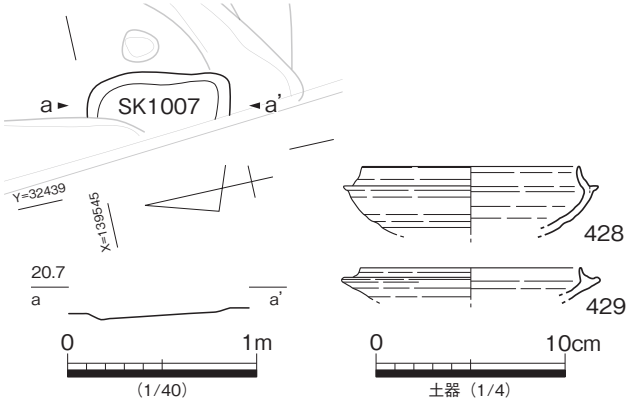
第 125 図　SB9001 平・断面図（1/40）



第 126 図　SK1004 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）



第 127 図　SK1006 平・断面図（1/40）



第 128 図　SK1007 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

SB1002 がある。2 間 × 2 間の総柱建物で、わずかに東西方向の柱列が長い。東西方向 3.20m、南北方向 2.98m、主軸方位は N19.98° E、面積は 9.54㎡である。柱間は東西方向が 1.54m ～ 1.66m、南北方向は 1.45 ～ 1.58m、柱穴は円形または不整円形で、長軸 38cm～ 58cm、短軸 34 cm～ 40cm、深さ 12 ～ 36cm、柱痕跡の直径 14 cm程度である。柱穴埋土中からは須恵器杯蓋または杯身片、土師器片、鉄滓が出土した。

遺構の時期は、2 面で検出したことから、7 世紀中頃以前と考えられる。

③土坑

1 区 SK1004（第 126 図）

1 区北部付近で検出した。東側大部分は調査区外へ延びる。1 区東壁断面によれば、2 面よりも下の層から掘り込まれており、2 層の深い部分である可能性もある。円形と考えられ、残存部分の長軸は 1.04m、幅 0.41m、深さは 2 ～ 3cm程度と考えられる。埋土中からは、須恵器片が出土した。

427 は須恵器。提瓶口縁部。

遺構の時期は、出土遺物により 6 世紀中頃～後半と考えられる。

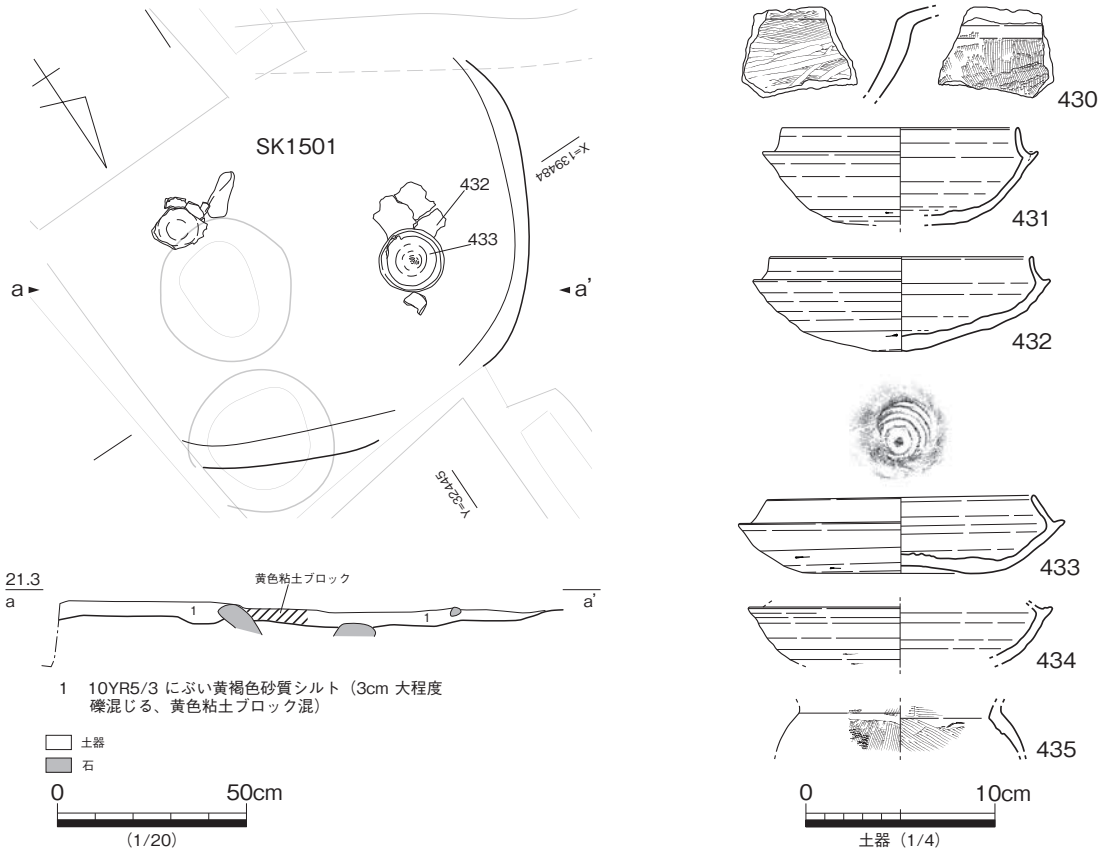
1 区 SK1006（第 127 図）

1 区やや北寄りで検出した。遺構の重複関係により、SD8007 及び SH1106 より古い。不整形で、長軸 0.86m 以上、短軸 0.50m 以上、深さ 3cmを測る。埋土中からは出土遺物はなかった。

遺構の時期は、SD8007 および SH1106 より古いことから、6 世紀末以前である。

1 区 SK1007（第 128 図）

1 区北部で検出した。SH9001 の内部で検出した。SH9001 との関係は明らかではない。埋土中からは須恵器、土師器が出土した。



第 129 図　SK1501 平・断面図（1/20）、出土遺物（1/4）

428・429 は須恵器。428 は杯身。6 世紀後半（Ⅱ -3 期）頃、429 は杯身。7 世紀前半（Ⅱ -6 期）頃。

遺構の時期は、出土遺物から 7 世紀前半頃と考えられる。

1 区 SK1501（第 129 図）

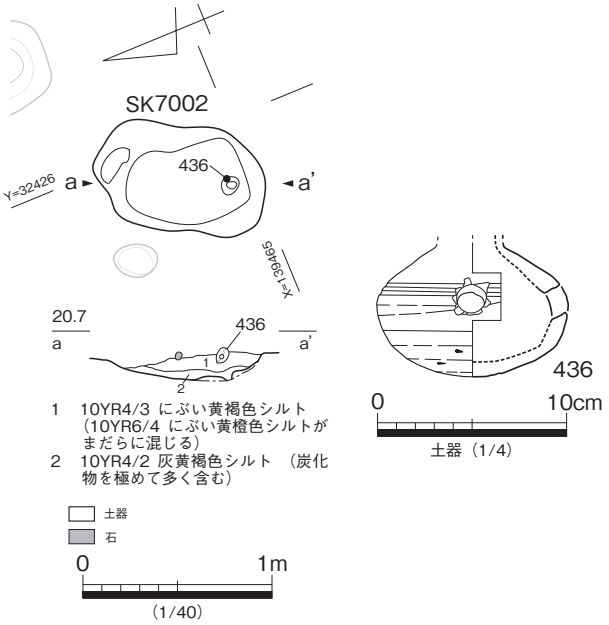
1 区南端部で検出した。包含層の堆積が認められない場所で、検出面はベース面と考えられる。南西部は撹乱により消失し、南東部では検出できなかった。楕円形又は隅丸方形を呈すると考えられ、長軸 1.3m以上、短軸 1.0m以上、深さ 7cmである。埋土には黄色粘土のベースブロックが混じる。遺構の底部からは須恵器杯身がまとまって出土した。

430 は弥生土器鉢。弥生時代後期後半。431 ～ 434 は須恵器杯身。口径 12.5 ～ 14cm程度を測る。433 は底部内面に同心円の当て具痕が残る。6 世紀後半（Ⅱ -3 期）。435 は弥生土器または土師器甕。

遺構の時期は、出土遺物により 6 世紀後半頃と考えられる。

7 区 SK7002（第 130 図）

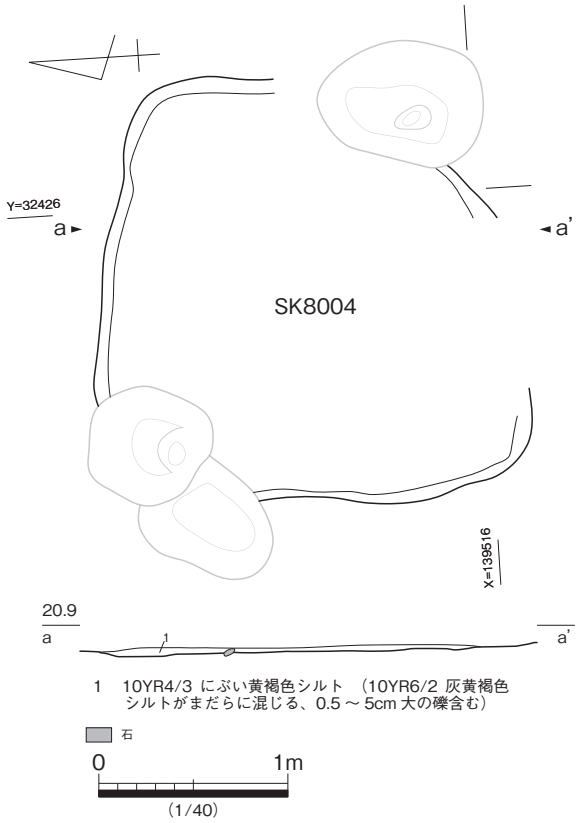
7 区中央西寄りで検出した。2 面で検出した。不整円形で、長軸 0.92m、短軸 0.55m、深さ 12cmを測る。遺構の主軸方位は N34.87° E である。遺構の南西端付近には直径 9 cmの小穴が見られる。底部には厚さ 5cm程度の炭化物を多量に含む層がある。埋土中からは須恵器、土師器片、鉄滓片が出土した。土坑の底部に多量の炭化物が認められることや、鉄滓片が出土したことから、鍛冶行為に関わる遺構である可能性がある。



第 130 図　SK7002 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

436 は須恵器蹴。体部やや上方に沈線が巡る。7 世紀前半（Ⅱ -6 期）頃。埋土の上部から出土した。

遺構に時期は、2 面で検出したことや出土遺物から、7 世紀前半頃と考えられる。

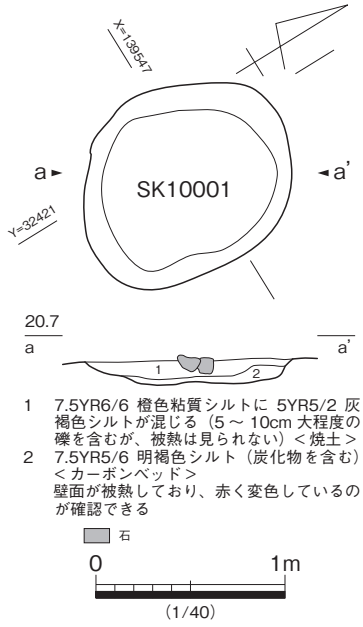


第 131 図　SK8004 平・断面図（1/40）

8 区 SK8004（第 131 図）

8 区中央付近で検出した。2 面で検出した。不整形で、長軸 2.26m、短軸 2.18m、深さ 2 ㎝である。埋土中からは土師器小片が出土した。

遺構の時期は、2 面で検出したことから、7 世紀中頃以前と考えられる。

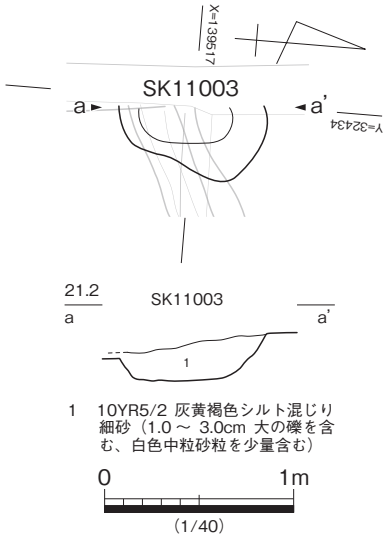


第 132 図　SK10001 平・断面図（1/40）

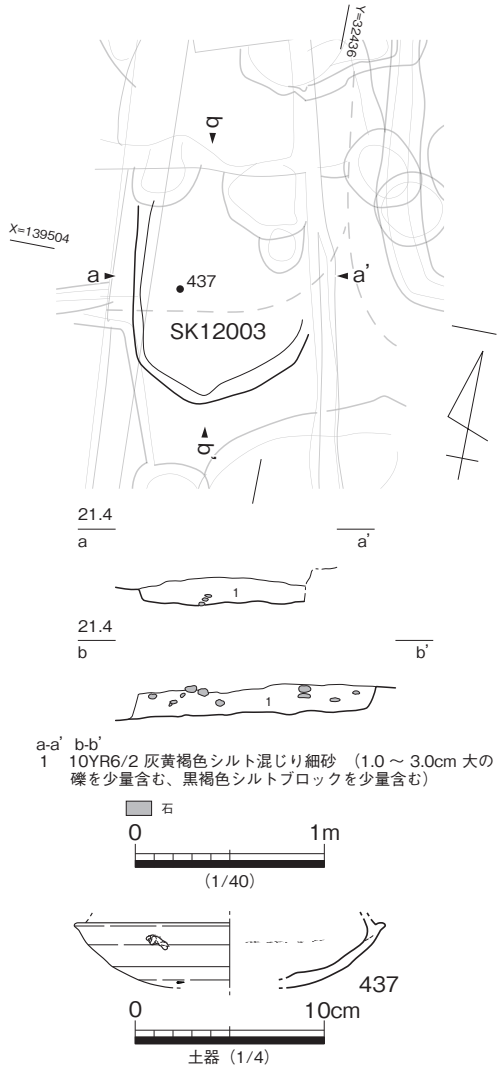
10 区 SK10001（第 132 図）

10 区北部で検出した。2 面で検出した。楕円形を呈し、長軸 1.12m、短軸 1.02m、深さ 12㎝を測る。壁面は被熱により赤く変色し、底部には厚さ 2 ～ 6㎝程度炭化物が堆積している。炭化物層の上層は焼土が堆積する。埋土中からは炭化物の他、磁着鉄が確認されたが、粒状滓や鍛造剝片は認められなかった。埋土の堆積状況や周辺の遺構検出状況から鍛冶行為にかかわる遺構の可能性がある。埋土中からは土師器片、サヌカイト片が出土した。

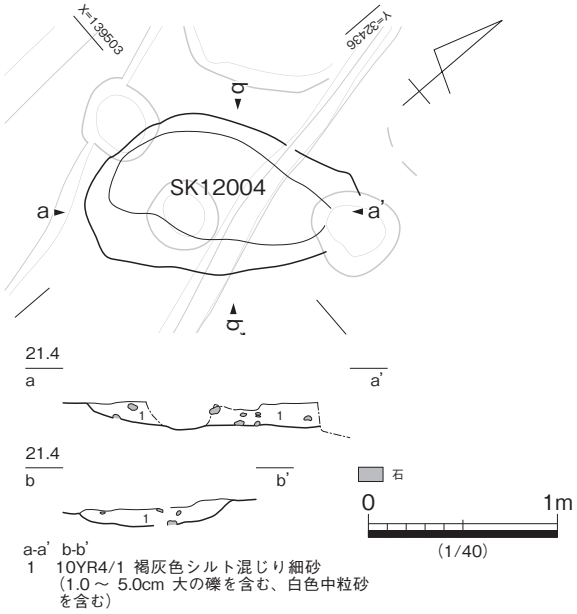
埋土中の炭化物は、樹種同定の結果マツ属であることが分かった。マツ属は火力が強く、優れた燃料



第 133 図　SK11003 平・断面図（1/40）



第 134 図　SK12003 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）



第 135 図　SK12004 平・断面図（1/40）

材であった。（第 4 章第 3 節）。

遺構の時期は、2 面で検出したことから、6 世紀後半～ 7 世紀初頭頃と考えられる。

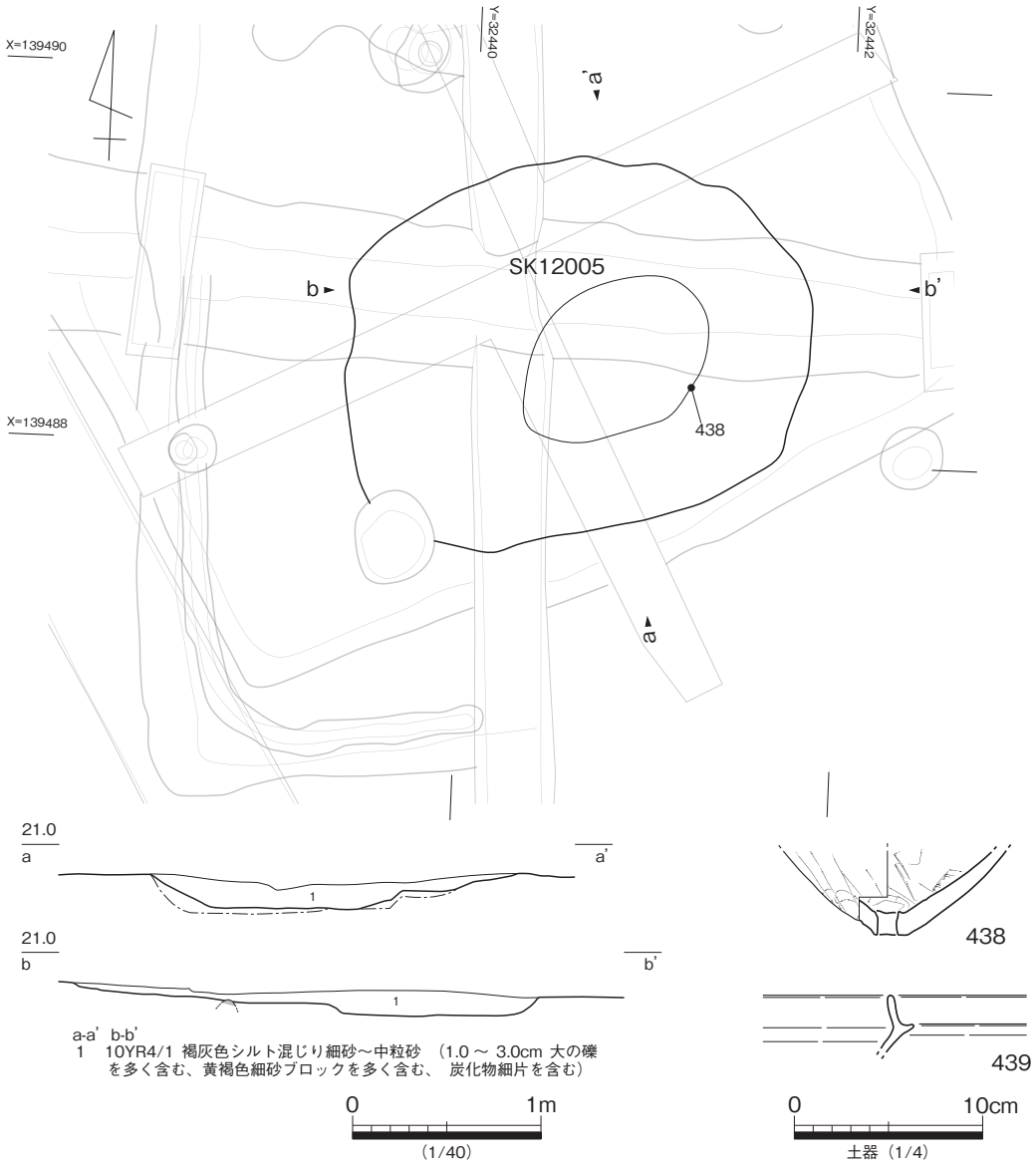
11 区 SK11003（第 133 図）

11 区南西部で検出した。2 面で検出した。SH11007 と重複する。前後関係は明らかではないが、SH11007 と重複する側の検出面のレベルが SH11007 の底のレベルに近いことから、SH11007 の掘削後に SK11003 を検出したと考えられ、SK11003 が古い可能性が高いと考えられる。西側に隣接する 8 区では検出していない。不整円形と考えられ、南北方向は 0.76m、東西方向は 0.39m 以上、深さは 20cm を測る。埋土中からは遺物は出土しなかった。

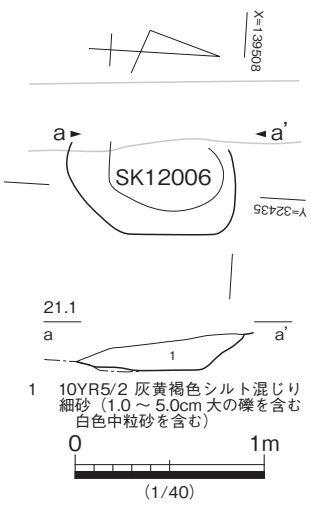
遺構の時期は、SH11007 より古い可能性が考えられることから、6 世紀後半～末頃と考えられる。

12 区 SK12003（第 134 図）

12 区北西部で検出した。2 面で検出した。SH8007 と重複する位置関係であるが、8 区と 12 区にまたがる SH8007 の平面プランは 12 区では明確ではなく、SH8007 との前後関係は明らかではない。北側は 1 面で検出したピット、攪乱により消失する。楕円形と考えられ、長軸 1.20m 以上、短軸 0.92m 程度、深さ 13cm



第 136 図　SK12005 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）



第 137 図　SK12006 平・断面図（1/40）

を測る。埋土中からは須恵器杯身、土師器が出土した。

437 は須恵器杯身。外面に須恵器胎土の小片が溶着する。6 世紀後半頃。

遺構の時期は、2 面で検出したことや出土遺物から、6 世紀後半頃と考えられる。

12 区 SK12004（第 135 図）

12 区北部で検出した。2 面で検出した。西半部は攪乱の除去後に検出した。長楕円形で、長軸 1.45m、短軸 0.83m、深さ 10cmを測る。埋土中からは磁器片が出土しているが、2 面から掘り込まれる遺構であることから、攪乱からの混入と考えられる。

遺構の時期は、2 面で検出したことから、7 世紀中頃以前と考えられる。

12 区 SK12005（第 136 図）

12 区南部で検出した。ベース上で検出した。SH12003・SH12005 と重複するが、SH12003 断面には表現されておらず、SH12003・SH12005 の下面で検出されたと考えられる。楕円形で、長軸 2.54m、短軸 1.98m、深さ 12㎝程度である。埋土中からは弥生土器底部穿孔土器、須恵器片、土師器甕が出土した。

438 は弥生土器。底部穿孔土器。弥生時代後期後半。439 は須恵器杯身小片。6 世紀末頃。

遺構の時期は、SH12005 より古いことや出土した須恵器から、6 世紀末頃と考えられる。

12 区 SK12006（第 137 図）

12 区北西端付近で検出した。検出場所では 1b 層の堆積は認められるものの 2 層の堆積は認められず、ベース上で検出した。西接する 8 区では検出していない。楕円形と考えられ、長軸 0.86m、短軸 0.48m 以上、深さ 17㎝である。埋土中からは遺物は出土しなかった。

遺構の時期は、遺構の検出面から、7 世紀中頃以前と考えられる。

④炉等

3 区 SF3001（第 138 図）

3 区北東隅で検出した。2 面で検出した。長軸 0.50m、短軸 0.37mの不整円形の範囲で炭化物の集中部が検出された。その中央付近では、長軸 0.26m、短軸 0.21mの楕円形の範囲で、炭化物層の上面に黄色粘土の広がりが認められ、その東半部では、粘土の被熱痕が認められた。断面観察によれば、最深部が 7㎝程度で底部が東側へ傾斜する。土坑の底には、厚さ 1.5 ～ 2.5㎝の炭化物層が認められ、カーボンベッドとしたと考えられる。その上面で東部から中央部では 5㎜大の炭化材を多く含む層があり、その上位には、中央部から西部にかけてカーボンベッドや炭化物層を覆うように明黄褐色粘土が堆積する。炭化物層を敷いた後、その上部の西半部に明黄褐色粘土を置き、置いた粘土の東半部で火を使う作業を行ったと考えられ、東半部の炭化物層の上部の粘土層の部分は被熱痕が認められた。カーボンベッド部分、明黄褐色粘土部分ともに鉄滓の小片が出土した。埋土中からは土器は出土しなかった。鍛冶炉と考えられる。

440 ～ 444 は鉄滓。440 は分析試料。分析の結果、ふいご羽口先端の溶融物が付着していたことが分かった。

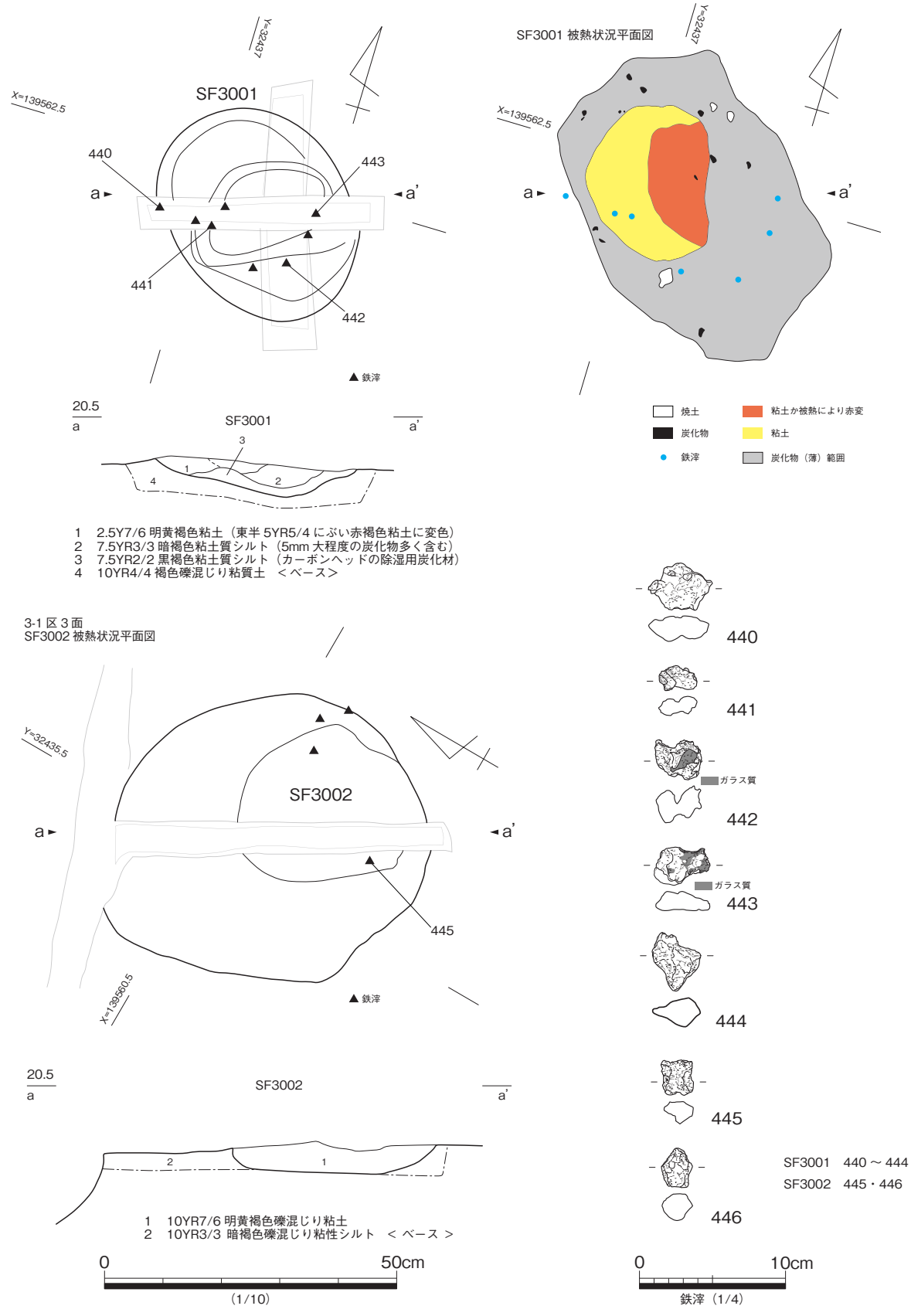
遺構の時期は、2 面から出土したこと、鍛冶炉であることから 6 世紀後半～ 7 世紀初頭頃と考えられる。

3 区 SF3002（第 138 図）

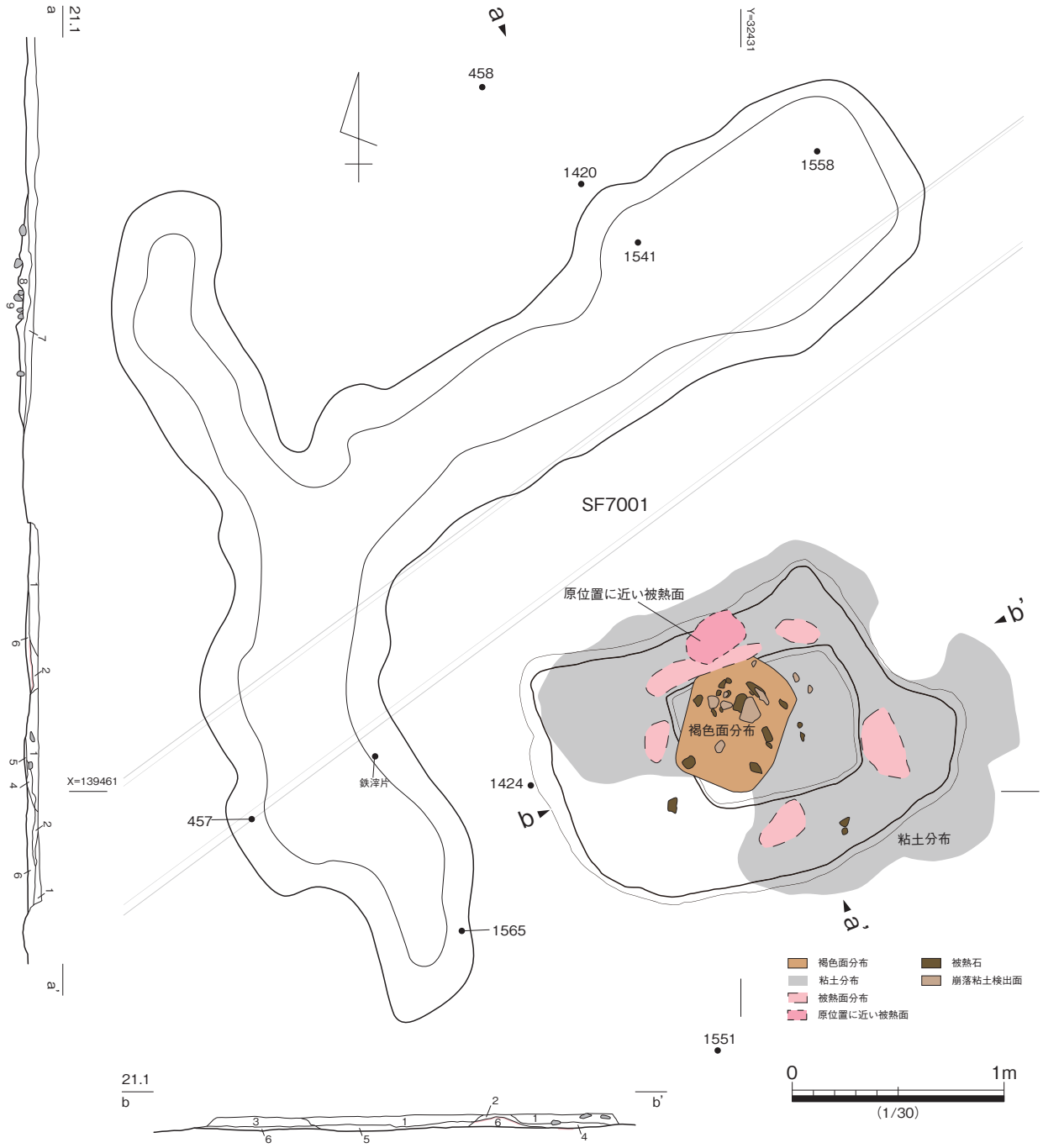
3 区北西部、SF3001 の南西約 2.1mで検出した。2 面で検出した。楕円形で、長軸 0.56m、短軸 0.49m、深さ 5cm を測る。埋土中からは土師器小片がわずかに出土したほか、鉄滓の小片が出土した。鍛冶炉を想定して調査を行ったが、SF3001 と近接し、鉄滓の小片が出土したことからこれと関連した遺構と考えられるものの、遺構内には炭化物や被熱痕が認められなかった。鍛冶炉として調査を行い、埋土は SF3001 と類似するが、鍛冶炉として使用はされなかった可能性があろう。

445・446 は鉄滓。

遺構の時期は、2 面で検出したこと、SF3001 との関連が考えられることから、6 世紀後半～ 7 世紀初頭頃と考えられる。



第 138 図　SF3001・SF3002 平・断面図（1/10）、出土遺物（1/4）



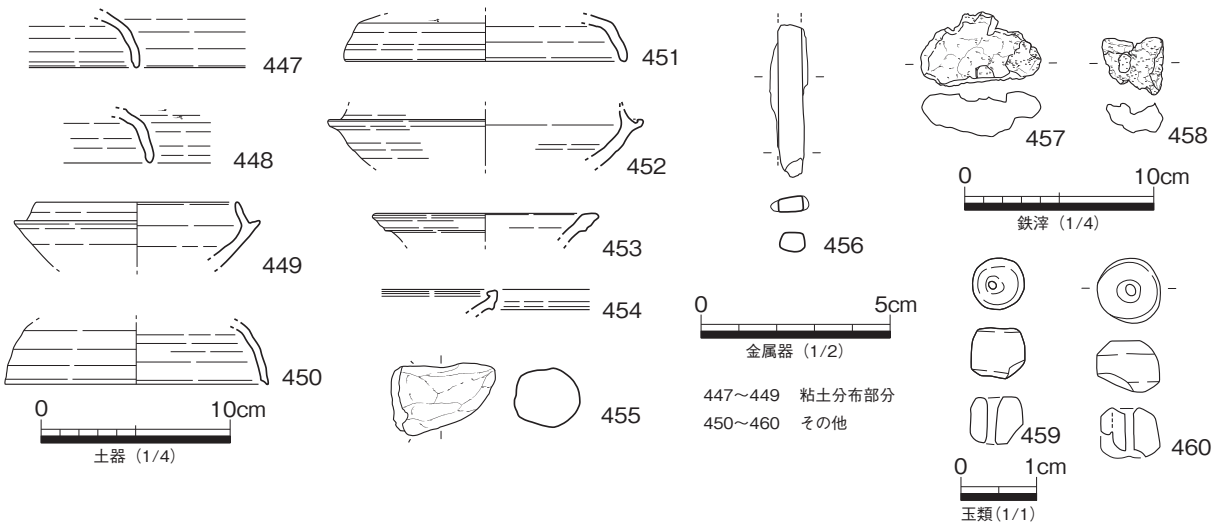
1　10YR5/4 にぶい黄褐色シルトと 2.5Y5/4 黄褐色シルトがまだらに混じる（ Mn 粒を多く含む）<1b 層 >
2　2.5Y6/6 明黄褐色粘質土（Mn 粒を多く含む、5YR3/6 暗赤褐色粘質土に一部変化）
3　10YR5/3 にぶい黄褐色シルト（2.5Y5/4 黄褐色シルトが少量混じる、Mn 粒を多く含む）
4　2 層と同一　＜崩落粘土＞
5　2.5YR4/1 暗赤灰色シルト（一部で確認、土手の中に置かれたものだと考えられる）＜褐色面＞
6　粘土
7　10YR6/2 灰黄褐色砂質シルトと 10YR6/8 明黄褐色砂質シルトがまだらに混じる <1b 層 >
8　10YR5/3 にぶい黄褐色シルトに 10YR6/2 灰黄褐色シルトと 10YR3/4 暗褐色シルトがまだらに混じる
（SF7001 北側にある SF7001 に伴う遺構）
9　10YR5/2 灰黄褐色シルト（10YR2/3 黒褐色土含む、8cm 大までの礫を含む）<2 層 >

第 139 図　SF7001 平・断面図（1/30）

7 区 SF7001（第 139・140 図）

7 区中央付近で検出した。２面で検出した。古代の遺構面である 1b 層が遺構を覆う。被熱痕が認められる炉と考えられる遺構とその北西を囲う溝状遺構を一体として考える。

遺構の検出にあたっては、平面プランで下部に置いた粘土や被熱痕跡の範囲を見極め、土層断面で高



第 140 図　SF7001 出土遺物（1/4・1/2・1/1）

まりを確認した。土手状の高まりを隅丸長方形に巡らせ、土手の内側は長方形の平坦面とする。土手の下部には粘土が認められ、土手内部の西半部には褐色土が分布する。土手外縁の北東は崩落のため凹んだような形状を示す。土手の外側は、長軸２ｍ程度、短軸 1.35m、内側は、長軸 0.80m、短軸 0.60mである。土手部分の下幅は西側が 0.70m、東側が 0.54m、北側が 0.32m、南側が 0.42mで、土手状部分の残存高は６㎝程度である。土手状の部分を造る前に下部に粘土を置き、土手の内側の平坦面の部分には一部に被熱を窺わせる暗赤灰色シルトが堆積する。被熱面は土手上面でよく認められた。内側の平坦面には顕著な被熱痕は認められず、被熱した石がやや集中して出土した。土手内では石の上面で作業を行ったのであろう。遺構の検出状況や鉄滓が出土したことから鍛冶炉として使用されたと考えられる。

炉の北側 0.9m、西側 0.4mには、炉を囲うような位置で溝状遺構を検出した。炉の北側部分で検出長 3.4m、深さ 6㎝、西側部分で検出長 2.3m、深さ２㎝程度で、屈曲部付近から北方向へ 1.8m、深さ 2㎝の溝状遺構が延びる。埋土中からは須恵器、土師器のほか、鉄器、鉄滓、土玉が出土した。

447 ～ 449 は土手状の高まりの下部に貼られた粘土中から出土した須恵器。447・448 は杯蓋。449 は杯身。器壁に気泡が入り、形状が歪つである。6 世紀末（Ⅱ -4 期）頃。450 ～ 460 はその他から出土した。450 ～ 454 は須恵器。450・451 は杯蓋。452 は杯身。6 世紀後半～末（Ⅱ -3 ～ 4 期）頃。453 は口径がやや小さめで、提瓶の口縁部か。454 は甕口縁部小片。455 は土師器甑または甕の把手。456 は鉄器。棒状鉄片か。457・458 は鉄滓。457 はふいご羽口先端の溶融物が付着する。459・450 は土玉。

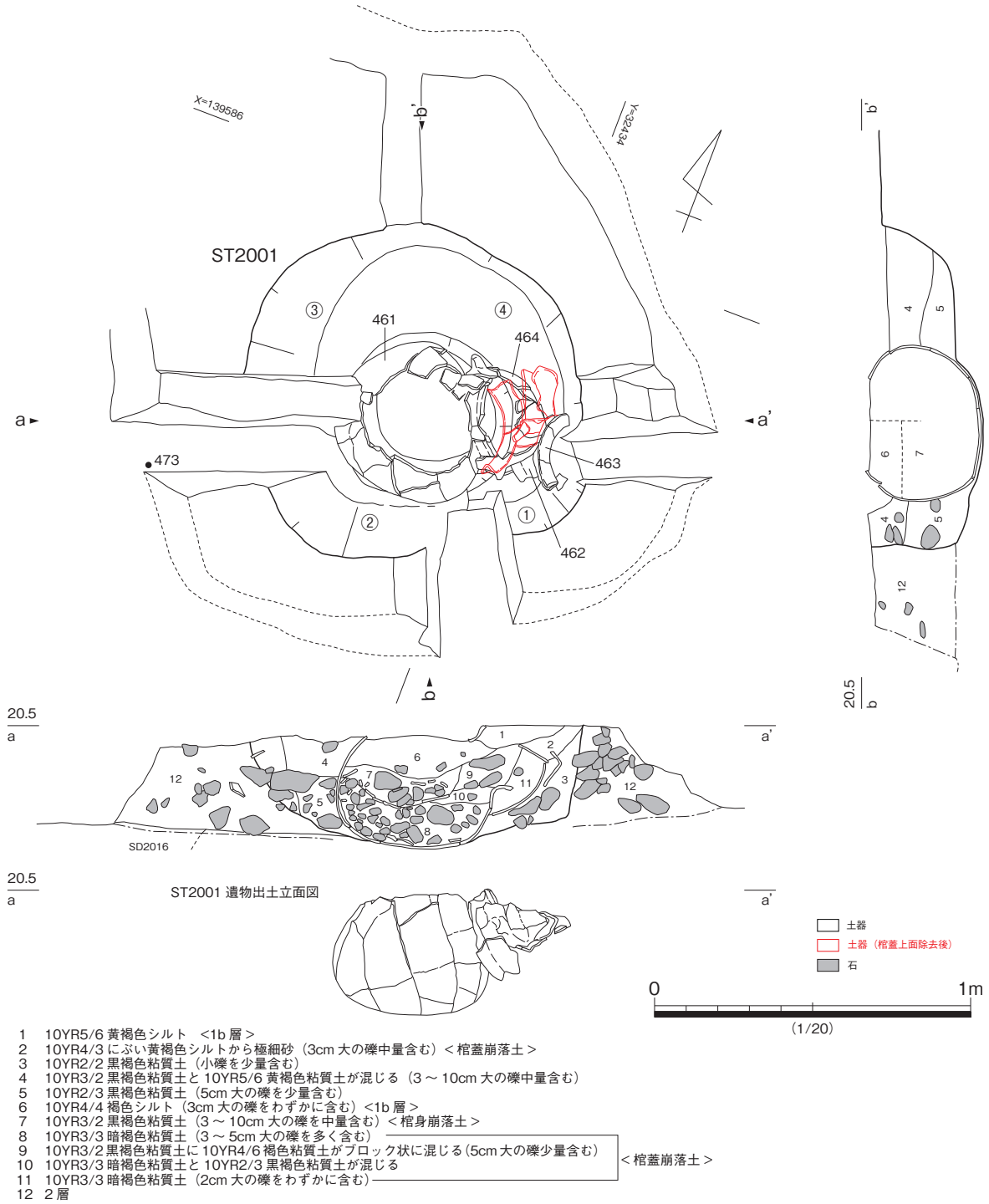
遺構の時期は、2 面で検出したことや出土遺物から、6 世紀末頃と考えられる。

⑤墓

2 区 ST2001（第 141 ～ 143 図）

２区南東部で検出した。2 面で検出した。2 層を掘り込み、1b 層に覆われる。円形に近い隅丸方形を呈し、軸長 1.05m、深さ 35㎝、主軸方位は W22.75° S である。遺構内には、直径 25㎝、胴部径 50㎝を測る須恵器甕が、北東側に口縁を向けて横向きに設置されていた。甕の口縁には、土師器把手付甕が被せられていた。甕内部からは土器破片以外の遺物は出土しなかった。

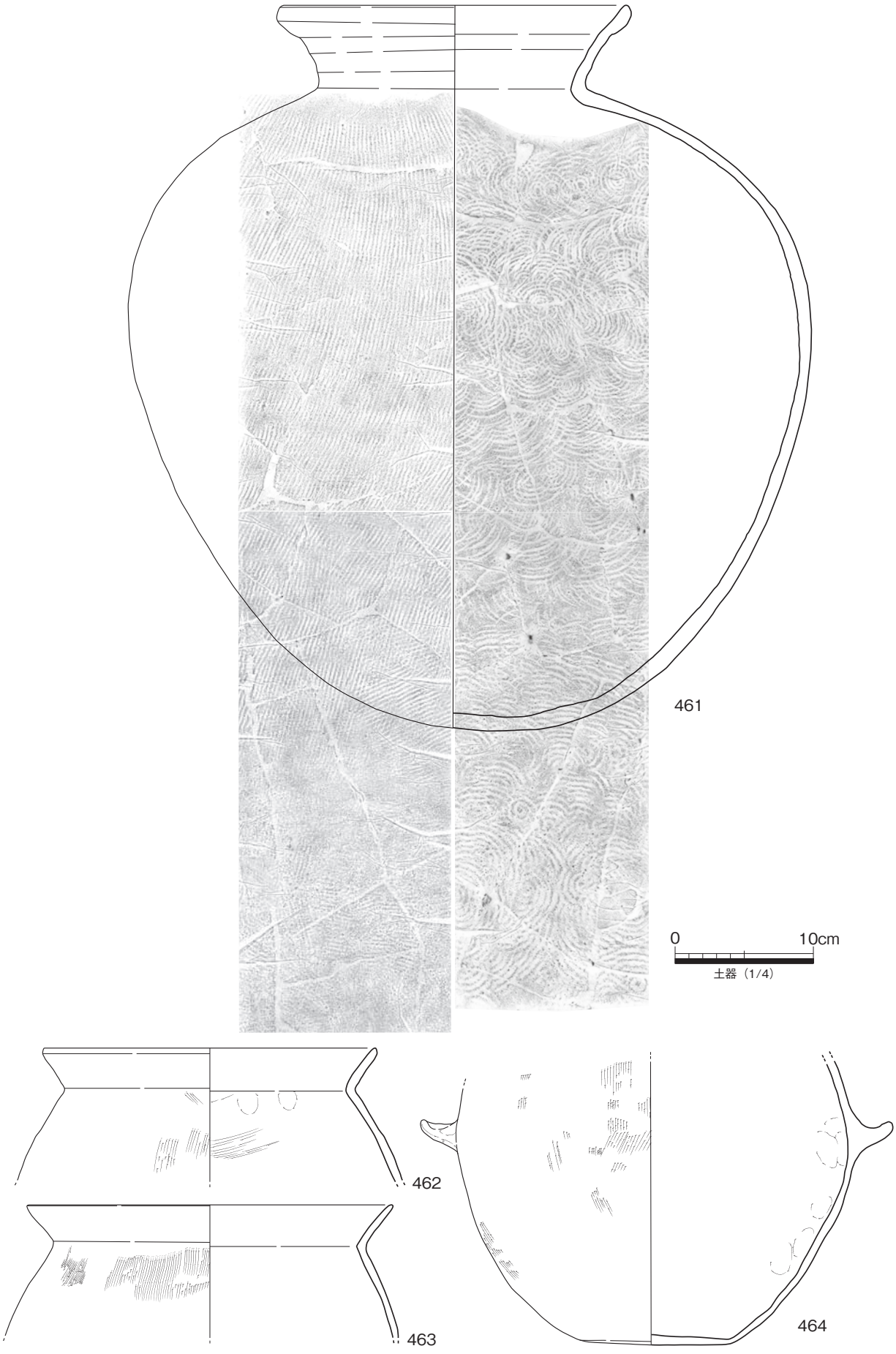
461 ～ 464 は ST2001 内に設置されたと考えられる。461 は須恵器甕。口縁部外面を肥厚させる。棺



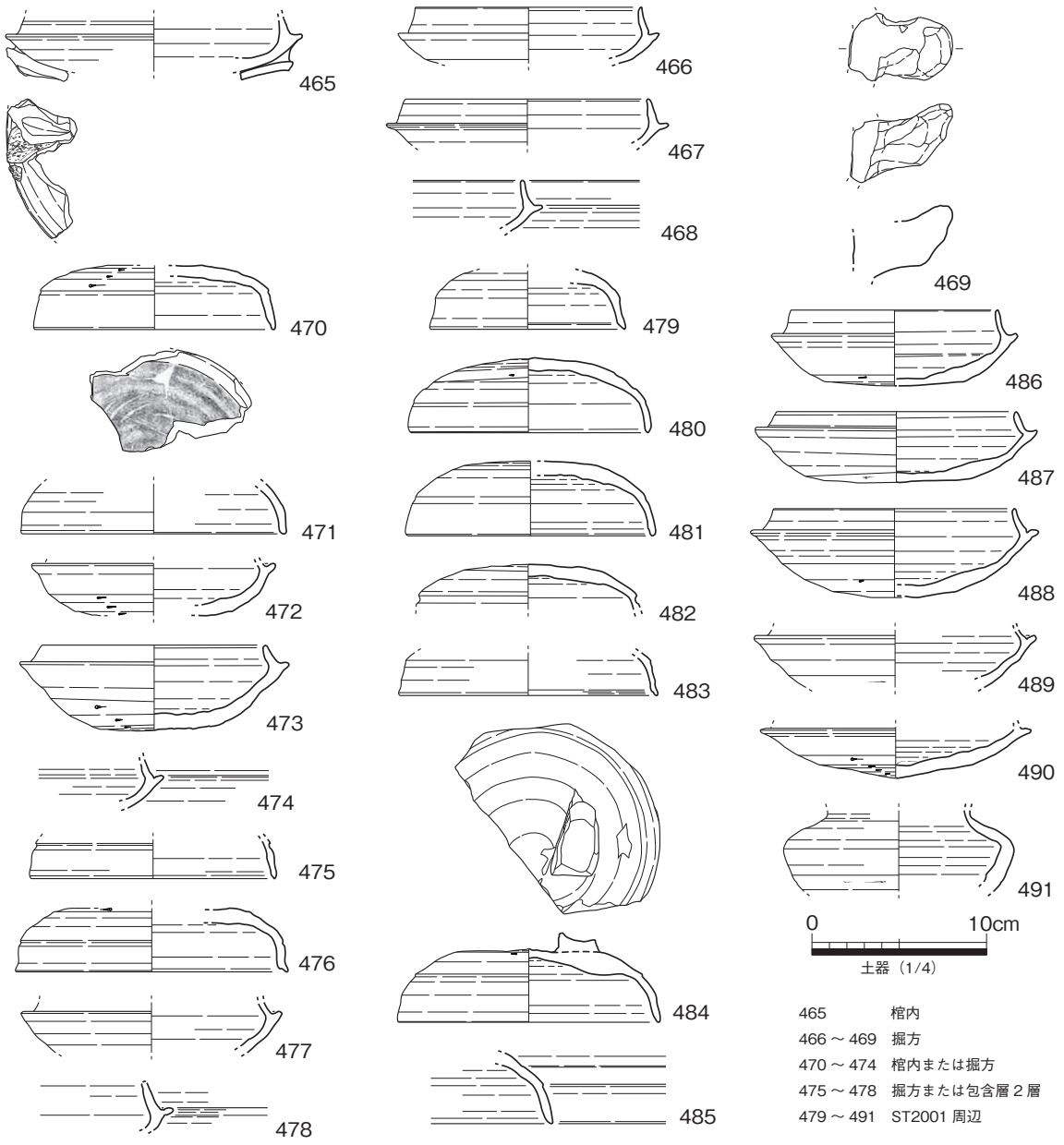
1　10YR5/6 黄褐色シルト　<1b 層 >
2　10YR4/3 にぶい黄褐色シルトから極細砂（3cm 大の礫中量含む）< 棺蓋崩落土 >
3　10YR2/2 黒褐色粘質土（小礫を少量含む）
4　10YR3/2 黒褐色粘質土と 10YR5/6 黄褐色粘質土が混じる（3 ～ 10cm 大の礫中量含む）
5　10YR2/3 黒褐色粘質土（5cm 大の礫を少量含む）
6　10YR4/4 褐色シルト（3cm 大の礫をわずかに含む）<1b 層 >
7　10YR3/2 黒褐色粘質土（3 ～ 10cm 大の礫を中量含む）< 棺身崩落土 >
8　10YR3/3 暗褐色粘質土（3 ～ 5cm 大の礫を多く含む）
9　10YR3/2 黒褐色粘質土に 10YR4/6 褐色粘質土がブロック状に混じる（5cm 大の礫少量含む）
10　10YR3/3 暗褐色粘質土と 10YR2/3 黒褐色粘質土が混じる　< 棺蓋崩落土 >
11　10YR3/3 暗褐色粘質土（2cm 大の礫をわずかに含む）
12　2 層

第 141 図　ST2001 平・断・立面図（1/20）

身と考えられる。7 世紀前半～中（Ⅱ -6 期）頃。462 ～ 464 は土師器甕。棺蓋と考えられる。462 ～ 464 は接合しなかったが、同一個体の可能性が高い。465 は土層図 a-a' 断面 8 層、須恵器甕内の埋土から出土した。須恵器杯身。底部には他の須恵器の破片が溶着する。466 ～ 469 は遺構の掘方から出土した。466 ～ 468 は須恵器杯身。6 世紀後半（Ⅱ -3 期）頃。469 は土師器甕または甑把手。464 とは把手の形状が異なるので、別個体と考えられる。470 ～ 474 は棺内または掘方から出土した須恵器。包含層 1b 層の遺物も含まれる可能性があると考えられる。470・471 は杯蓋。470 は内面頂部に工具根を残す。



第 142 図　ST2001 出土遺物 1（1/4）



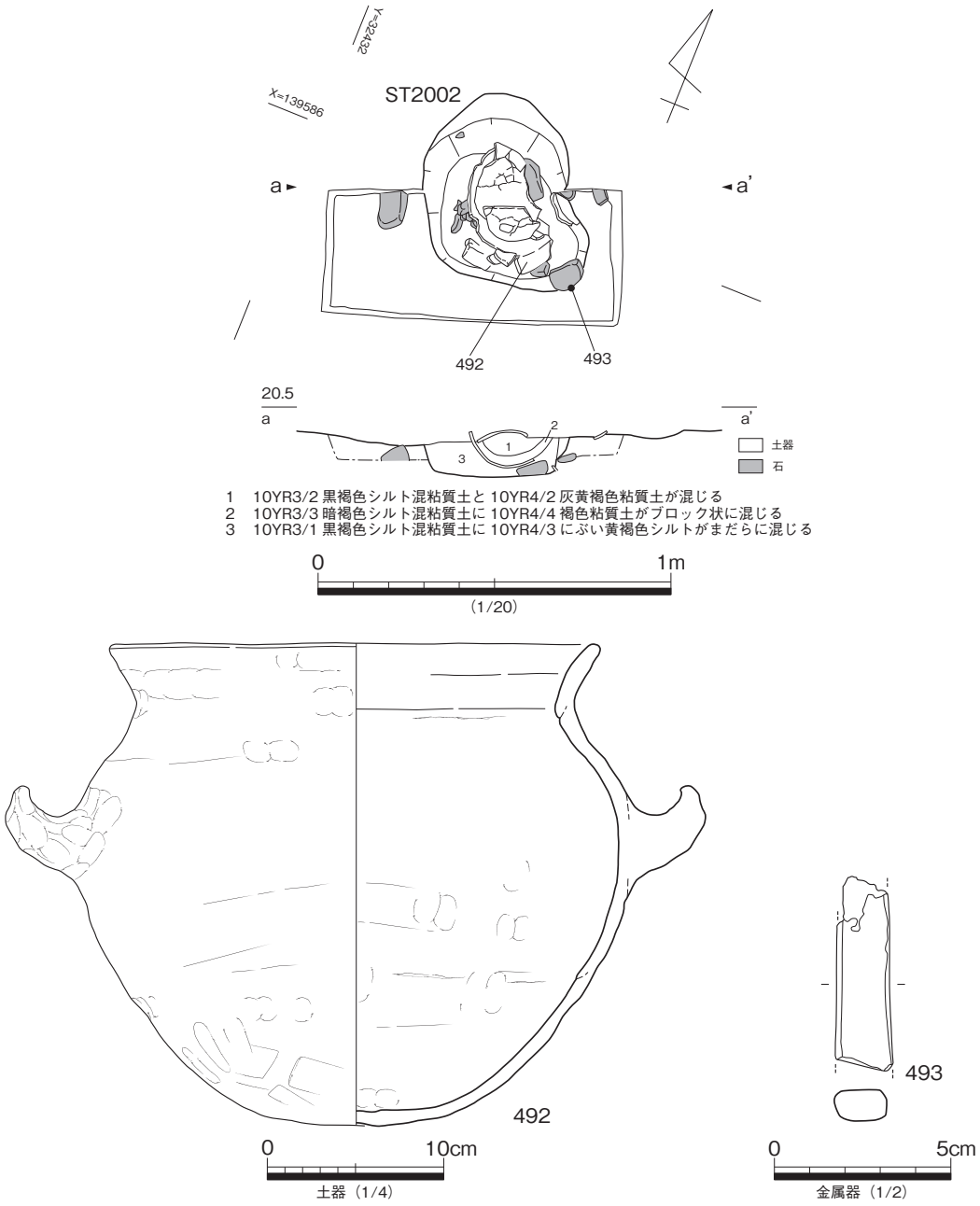
第 143 図　ST2001 出土遺物２（1/4）

焼成不良。472 ～ 474 は杯身。6 世紀末（Ⅱ -4）頃。475 ～ 478 は ST2001 掘方と包含層 2 層が混じる。いずれも須恵器。475・476 は杯蓋。肩部外面に、段が形骸化したような緩い凹線が巡る。477・478 は杯身。6 世紀後半～末（Ⅱ -3 ～ 4）頃。479 ～ 491 は周辺の上面精査中に出土した須恵器で、包含層 2 層の遺物が多く含まれると考えられる。479 は口径が小さく、壺の蓋と考えられる。480 ～ 485 は杯蓋。484 は頂部に他の土器片が溶着する。器壁に気泡が入る。486 ～ 490 は杯身。6 世紀後半～ 7 世紀初頭（Ⅱ -3 ～ 5）頃と考えられる。491 は壺。6 世紀末頃。

遺構の時期は、埋められた甕から 7 世紀前半～中頃と考えられる。

2 区 ST2002（第 144 図）

2 区南東部、ST2001 の北西 0.5ｍの位置に接して検出した。不整円形で、長軸 0.55ｍ、短軸 0.42ｍ、深さ 12㎝を測る。遺構内には、口縁を東～東南へ向けて土師器把手付甕を設置する。遺構の南東肩付



第 144 図　ST2002 平・断面図（1/20）、出土遺物（1/4・1/2）

近からは棒状鉄片が出土した。位置関係から ST2001 とは何らかの関連がる遺構と考えられよう。埋土中からは、土器小片以外の遺物は出土しなかった。

492 は土師器把手付甕。ST2001 で出土した 462 ～ 464 と概ね同時期と考えられる。493 は棒状鉄片。

遺構の時期は、棺身となった甕が ST2001 の棺蓋である甕と同時期と考えられ、7 世紀前半～中頃頃と考えられる。

⑥性格不明遺構

1 区 SX1001（第 145 図）

1 区北部で検出した。不定形の落ち込みに付随する溝状の落ち込みである。長軸 1.16m、幅 0.44m、

深さ 10㎝を測る。攪乱を挟んで SH1104 の竈に突き当たる位置関係で、SH1104 から東では検出していないが、埋土中には焼土や被熱痕などは認められず、竈に関連する遺構ではなく SH1104 より古い遺構と考えられる。埋土中からは須恵器杯蓋が出土した。

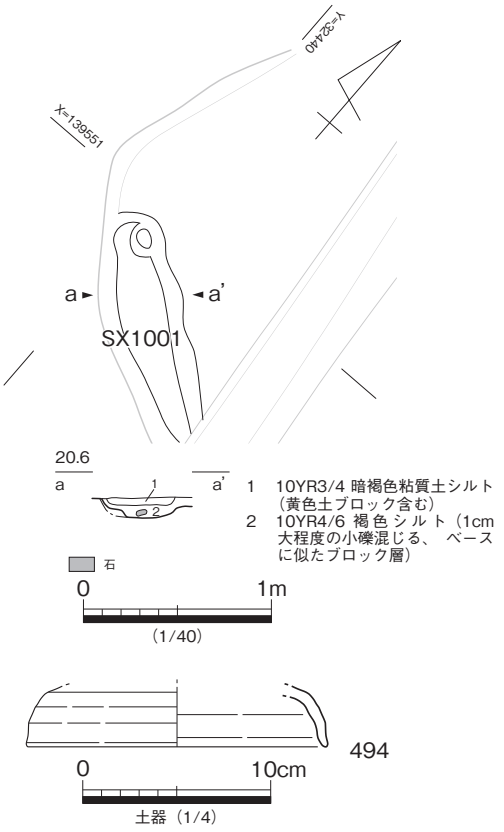
494 は須恵器杯蓋。肩部や口縁端部には段はなく、6 世紀後半～末（Ⅱ -3 ～ 4）頃と考えられる。

遺構の時期は、出土遺物や SH1104 に切られることから 6 世紀後半頃と考えられる。

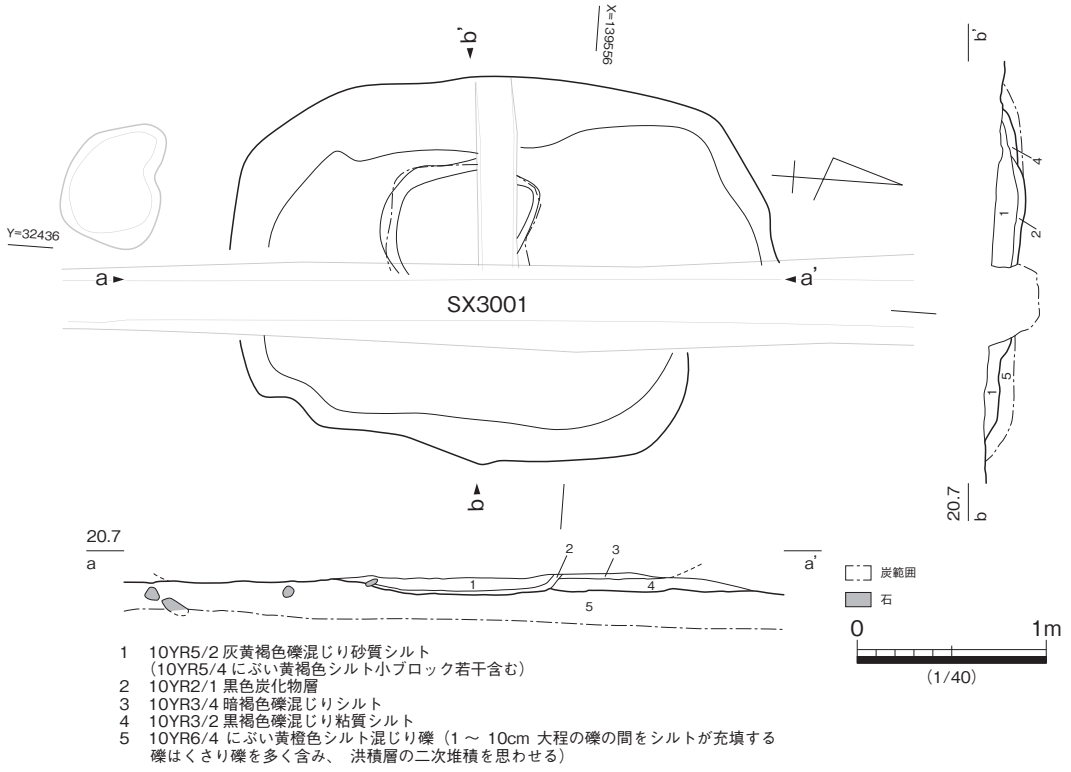
3 区 SX3001（第 146 図）

3 区東部で検出した。2 面で検出した。楕円形で、長軸 2.20m、短軸 1.80m、深さは 14㎝である。浅い落ち込み状の遺構で、底部に約 1m × 1mの隅丸方形の範囲で炭化物層が堆積する。埋土中からは弥生土器または土師器小片、須恵器小片が出土した。鉄滓や鉄製品などの遺物は出土しなかったが、最下層に炭化物層が認められることや、SF3001・3002 が近接することから、これらに関連する遺構の可能性が考えられる。

遺構の時期は、2 面で検出したこと、SF3001・SF3002 との関連が考えられることから、6 世紀後半～ 7 世紀初



第 145 図　SX1001 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）



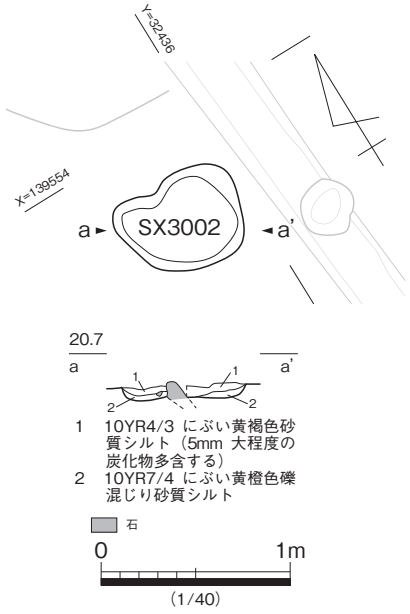
第 146 図　SX3001 平・断面図（1/40）

頭頃と考えられる。

3 区 SX3002（第 147 図）

3 区東部、SX3001 の南側約 0.4mの位置で検出した。2 面で検出した。不整形で、長軸 0.78m、短軸 0.54m、深さ 6cmを測る。埋土上層には炭化物を多く含む。埋土中からは弥生土器または土師器小片が出土した。SX3001 同様、鉄滓等は出土しなかったが、埋土中に炭化物層が認められることから、焼成に関わる遺構と考えられる。

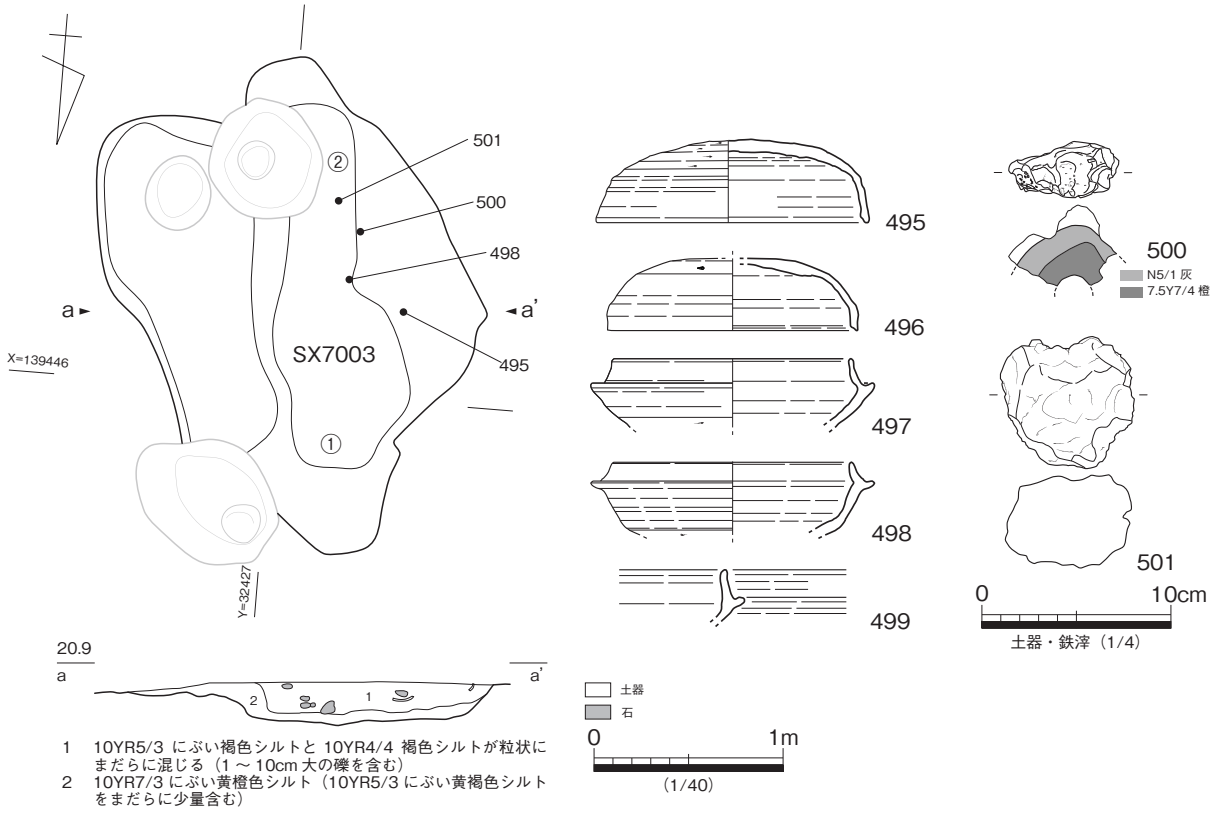
2 面で検出したこと、SX3001 や SF3001・SF3002 と関連する可能性が考えられることから、遺構の時期は、6 世紀後半頃～ 7 世紀初頭と考えられる。



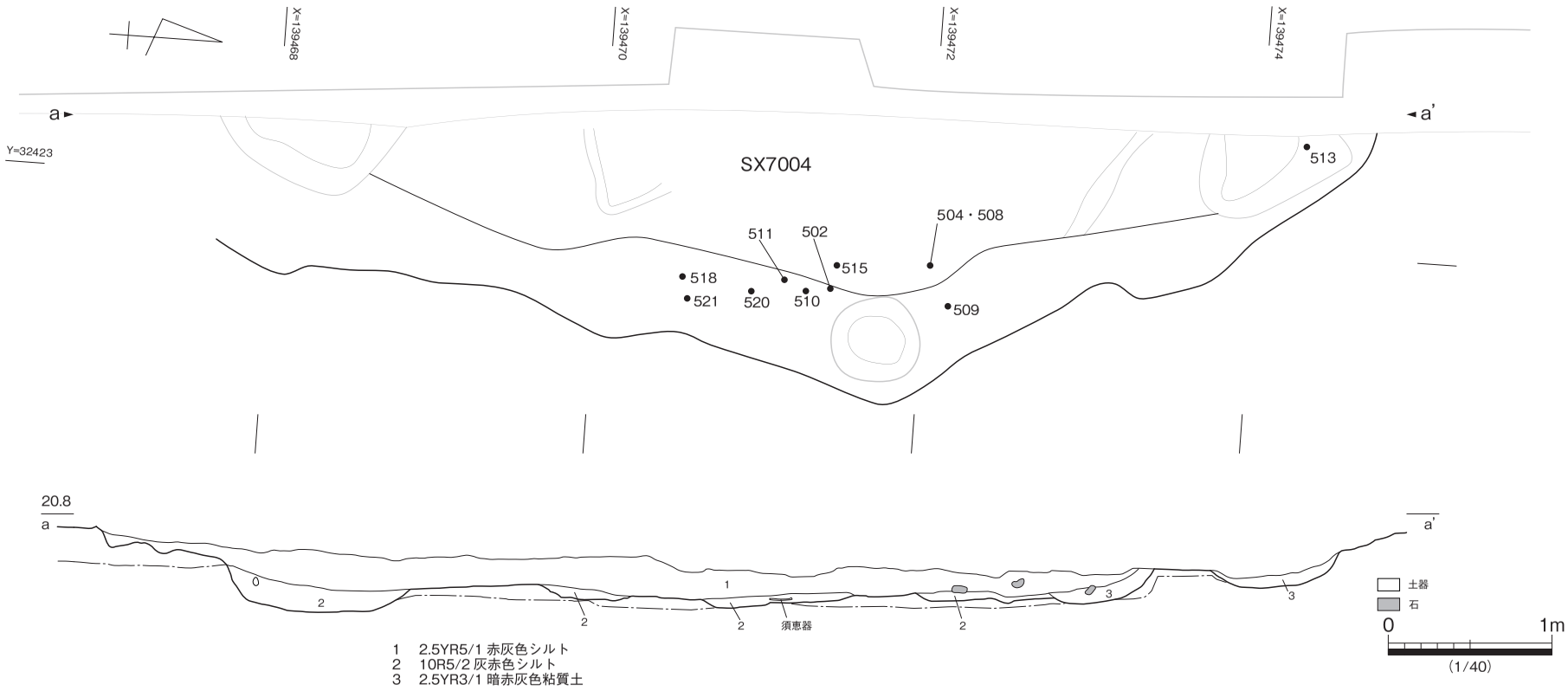
第 147 図　SX3002 平・断面図（1/40）

7 区 SX7003（第 148 図）

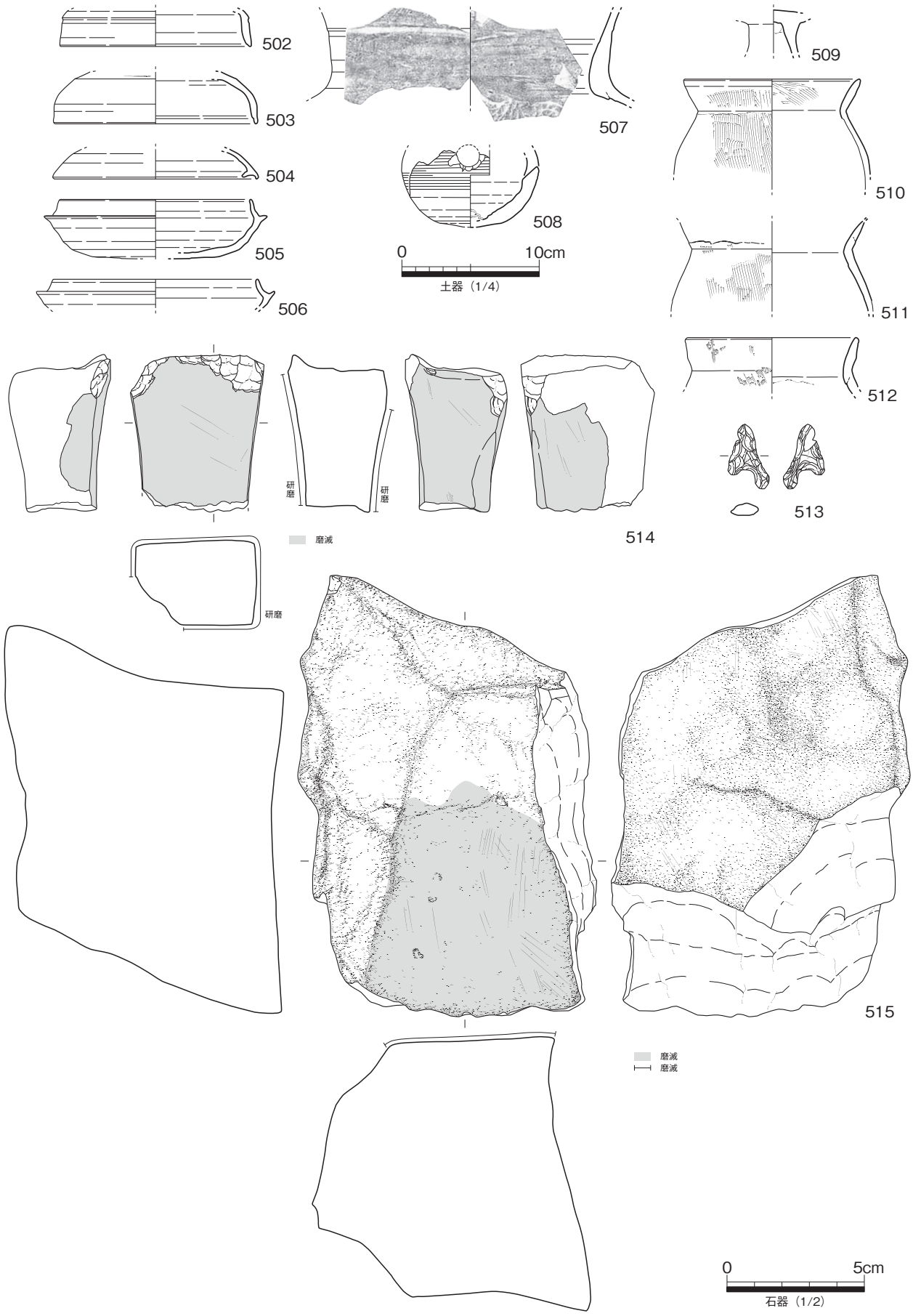
7 区南端付近で検出した。2 面で検出した。SB7007 を構成する柱穴により一部を切り込まれる。不整形で、西側が深い段掘り状の遺構である。長軸 2,60m、短軸 1.69m、深さは東側が 6 ㎝、西側が 24cmである。埋土からは須恵器、土師器片が一定量出土した他、ふいご羽口、鉄滓片が出土した。埋土中には礫が多く含まれていたが、炭化物や焼土等は認められず、遺構内で鍛冶



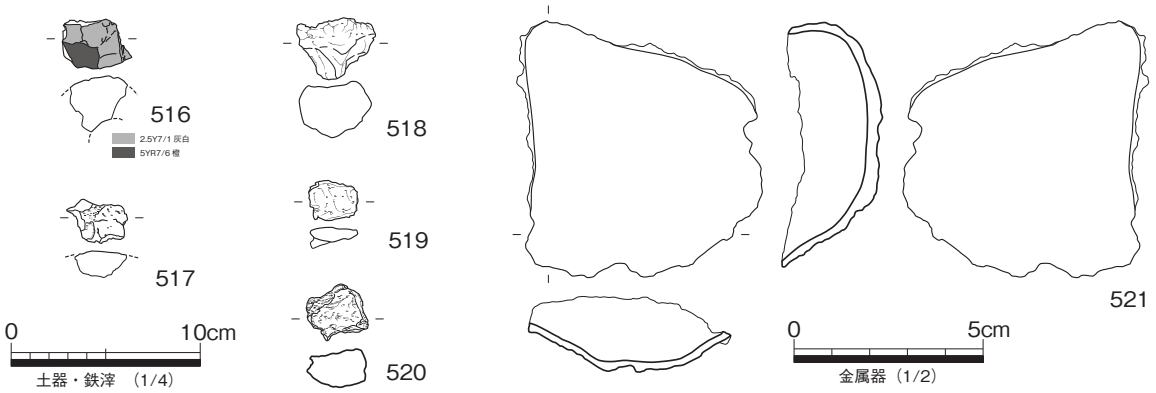
第 148 図　SX7003 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）



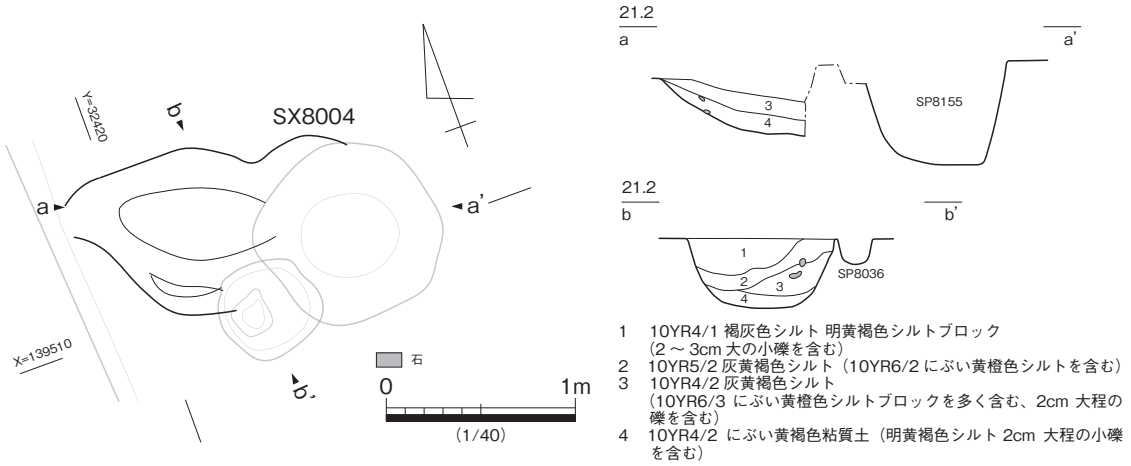
第 149 図　SX7004 平・断面図（1/40）



第 150 図　SX7004 出土遺物 1（1/4・1/2）



第 151 図　SX7004 出土遺物２（1/4・1/2）



第 152 図　SX8004 平・断面図（1/40）

行為は行われなかったと考えられるが、近辺で鍛冶行為を行っていたことを窺わせ、周辺から廃棄されたものの可能性があろう。

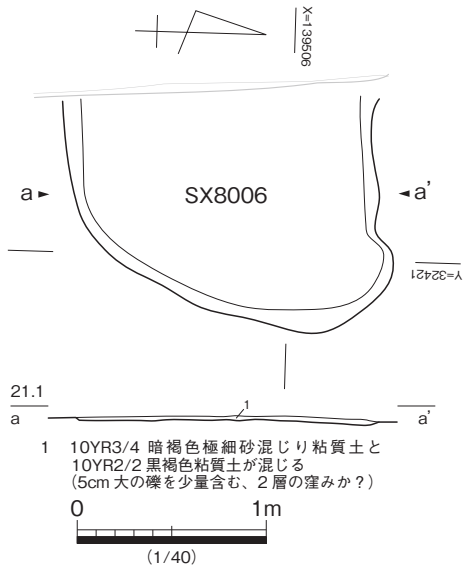
495 ～ 499 は須恵器。495･496 は杯蓋。497 ～ 499 は杯身。いずれも 6 世紀後半～末(Ⅱ -3 ～ 4 期)頃。500 はふいご羽口片。外面は溶融する。501 は鉄滓。

遺構に時期は、２面で検出したこと、出土遺物から 6 世紀後半～末頃と考えられる。

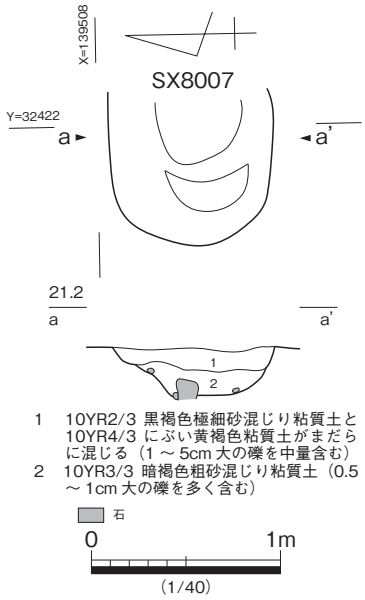
7 区 SX7004（第 149 ～ 151 図）

7 区西端中央付近で検出した。2 面で検出した。SB7005 を構成する柱穴は SX7004 掘削後に検出している。大半は調査区外へ延びると考えられる。南北方向は 7.20m以上、東西方向は 1.34m以上、深さは 34cm程度である。埋土は赤灰色・灰赤色シルトなど赤みがある埋土で、被熱を窺わせる。埋土中には炭化物は含まれないが、調査区外に炭化物層が広がる可能性もあろう。埋土からは須恵器、土師器片の他、ふいご羽口小片、砥石、鉄滓がやや多く出土した。遺構の大半が調査区外へ延びるため、性格は明らかではないが、鍛冶加工関連の遺物が多く出土していることから、鍛冶に関わる遺構と考えられる。

502 ～ 508 は須恵器。502・503 は杯蓋。504 は杯身の可能性もあろうが、蓋として図化した。505・506 は杯身。507 は甕。頸部に沈線が 1 条残される。508 は𤭯。体部中ほどはカキ目が施される。6 世



第 153 図　SX8006 平・断面図（1/40）



第 154 図　SX8007 平・断面図（1/40）

紀後半頃。504 は 7 世紀中頃まで下ると考えられるが、他は 6 世紀末～ 7 世紀初頭（Ⅱ -4 ～ 5）頃。509 ～ 512 は土師器。509 は高杯。510 ～ 512 は甕。513 はサヌカイト製石鏃。凹基式。514 は砥石。2 面には全体に、他の 2 面には一部に磨滅痕が認められる。流紋岩。515 は砂岩。1 面に磨滅痕が認められる。516・517 はふいご羽口または炉壁。518 は鉄塊系遺物。硫化鉄の影響を受ける。分析試料。519・520 は鉄滓。521 は薄く椀状の鉄。内面には砂がこびりつく。

遺構の時期は、2 面で検出したこと、須恵器の時期から、6 世紀末～ 7 世紀初頭と考えられる。

8 区 SX8004（第 152 図）

8 区北寄り西端で検出した。2 面で検出した。1 面検出遺構である SP8036･8155 により掘り込まれる。不整円形で、南側は段掘り状を呈する。長軸 1.53m以上、短軸 0.87m、深さは深い部分が 36.6cm、南側の浅い部分は 11.1cmを測る。埋土中からは遺物は出土しなかった。

2 面から掘り込まれていることから、遺構の時期は、7 世紀中頃以前である。

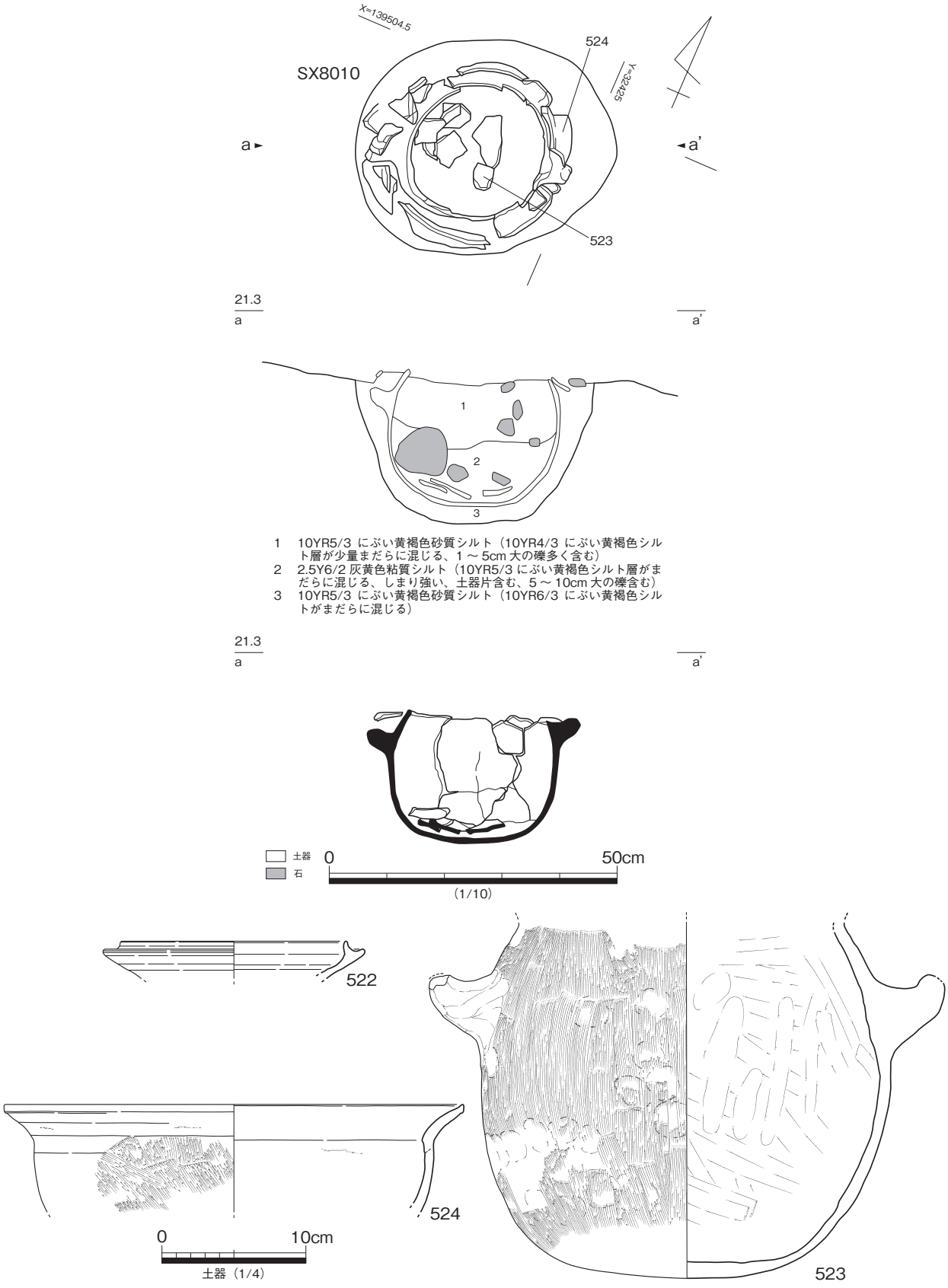
8 区 SX8006（第 153 図）

8 区中央部東寄りで検出した。2 面で検出した。西側は側溝の掘り込みにより消失する。不整形で東西方向が 1.23m、南北方向が 1.60m、深さ 4 cmを測る。遺構深度が浅いことや埋土から包含層 2 層の窪みである可能性がある。埋土中からは遺物は出土しなかった。

2 面で検出したことから、遺構の時期は 7 世紀中頃以前である。

8 区 SX8007（第 154 図）

8 区中央付近西寄りで検出した。2 面で検出した。東部では検出できなかった。楕円形と考えられ、西側が 1 段高い形状である。長軸 0.89m以上、短軸 0.86m、深さは浅い部分 24.9cm、深い部分が 32.4cm を測る。埋土中からは遺物は出土しなかった。



第 155 図　SX8010 平・断・立面図（1/10）、出土遺物（1/4）

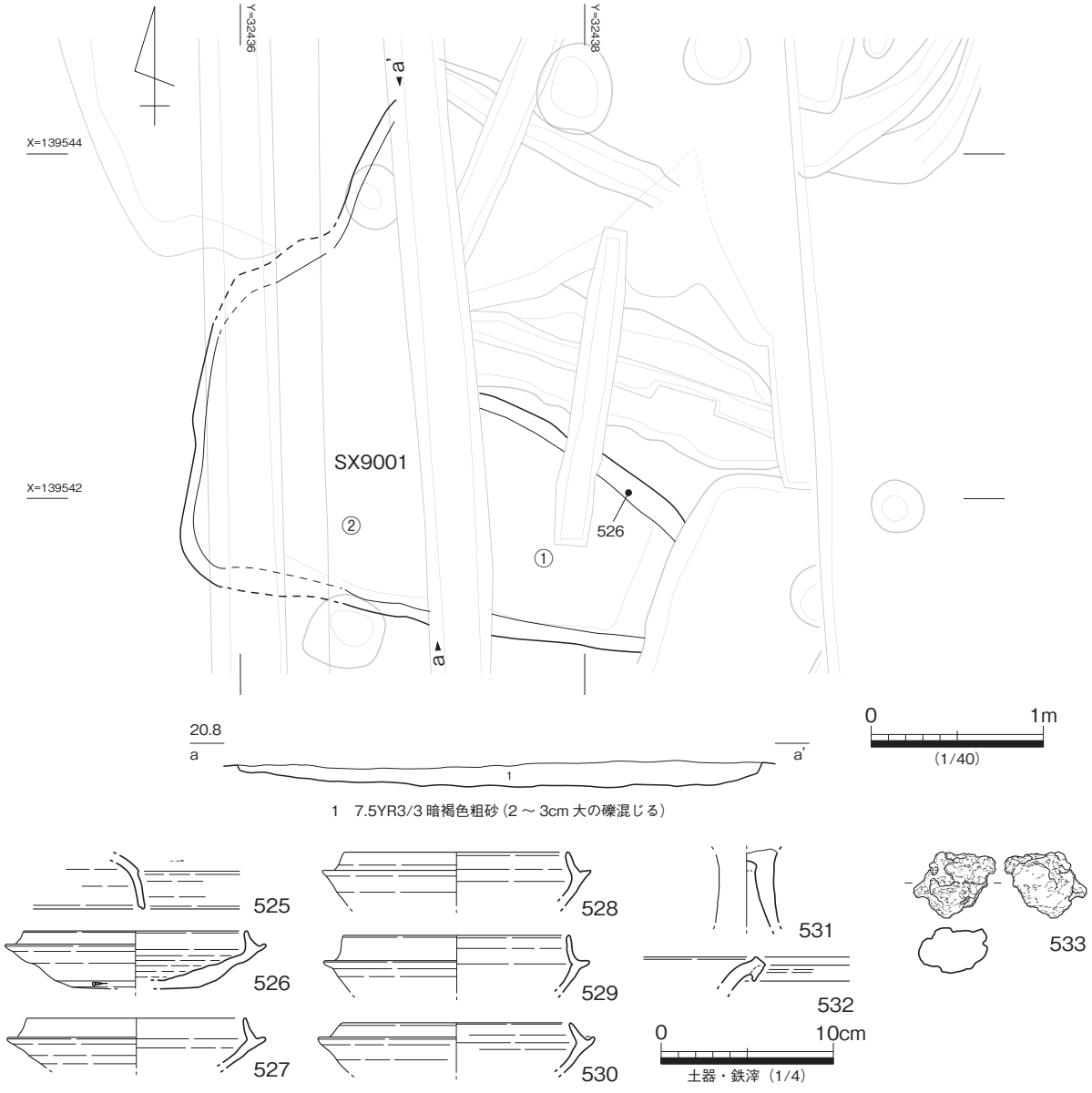
遺構の時期は、2 面で検出したことから 7 世紀中頃以前である。

8 区 SX8010（第 155 図）

8 区中央やや西寄り付近、SH8005 の西側約 0.8m の位置で検出した。2 面で検出した。概ね円形で、直径 0.40 ～ 0.45m、深さ 24cmを測る。遺構の内部には土師器把手付甕が埋納され、埋土上半部には多量の礫が埋められていた。埋土中からは、別個体と考えられる甕の口縁部が出土しており、蓋としていたと考えられる。埋土中からは須恵器片が出土した。

522 は須恵器杯身として図化したが、杯蓋の可能性もある。7 世紀前半（Ⅱ -6 期）。523 は埋納されていた土師器把手杯甕。口縁部は欠損する。524 は甕口縁部。浅い器形で、523 とは別個体である。

遺構の時期は、出土した須恵器や埋納された土師器甕の時期から、7 世紀前半～中頃と考えられる。



第 156 図　SX9001 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

９区 SX9001（第 156 図）

９区北部で検出した。２面で検出した。SX9003 と重複する。両者の前後関係は明確ではないが、SX9001a-a' 断面には SX9003 の埋土は認められず、SX9003 より新しい可能性が考えられる。東部は後世の落ち込みにより消失する。北部は SX9003 や SH9001 と重複し、平面ラインが明らかではない。南北方向は 3.17m程度、東西方向は 2.98m程度、深さは 12㎝程度である。埋土中からは、須恵器杯身･杯蓋･甕・高杯片が出土したほか、鉄滓片が出土した。鉄滓片は、SX9003 に由来する可能性が高い。

525 ～ 530 は須恵器。525 は杯蓋小片。肩部外面にはわずかに段を持つ。526 ～ 530 は杯身。６世紀末～７世紀初頭（Ⅱ -4 ～ 5）頃。531 は土師器高杯。532 は須恵器甕口縁部小片。533 は鉄滓。

遺構の時期は、出土遺物から６世紀末～７世紀初頭頃と考えられる。

９区 SX9003（第 157 ～ 160 図）

９区南部付近で検出した。２面で検出した。西側で隣接する８区および東側で隣接する１区では痕跡を認めることはできなかった。９区東壁土層図（第 25 図）により、SH9001 より古い。調査時には、この竈の南約 2.46m で検出した柱穴を主柱穴のうちの１穴、竈から 3.80m 南側で検出した溝を壁溝とした竪穴建物として調査を行ったが、竪穴建物に関するこれ以外の遺構が未検出であることや南側で検出した壁溝のラインから類推すれば、当遺跡の他の竪穴建物と異なり隅丸方形に復元しづらいこと、検出した竈を中心として壁溝や主柱穴とした遺構をもとに全体を復元すると面積が 50 ～ 55㎡程度が見込まれ、検出した他の竪穴建物と比べて大規模な竪穴建物になることから、竪穴建物の竈ではなく、炉としての機能を持つ遺構を考えたい。挿図中の凡例は調査時の記録に拠った。

炉の主軸方位は N70.85° W を示す。長軸 1.93m以上、短軸 0.72m、深さ 13㎝で溝状に延びる。９区東壁土層図では、燃焼部部分はほとんど認められず、９区内で概ね完結すると考えられる。西側は明確ではないが、SX9001 より西では検出されていないので、それより西は延びないと考えらえる。

遺構の東 2/3 程度が炉の中心部分と考えられ、長軸 0.85m程度、短軸 0.65m程度と考えられる。燃焼部分は炭化物や被熱土層が堆積した範囲が想定されよう。最下部には被熱をうかがわせるにぶい赤褐色粗砂層、その上部には炭化物層が認められる。炭化物層の上位には黄橙色粘土が堆積する。黄褐色粘土層の上面には黄橙粘土層に最下層のにぶい赤褐色粗砂が混じる層が堆積する。炉の構造は SF3001 に類似すると考えられる。埋土中の炭化物はコナラ属の樹木であった。

埋土中からは須恵器杯蓋片の他、鉄滓の小片が出土した。

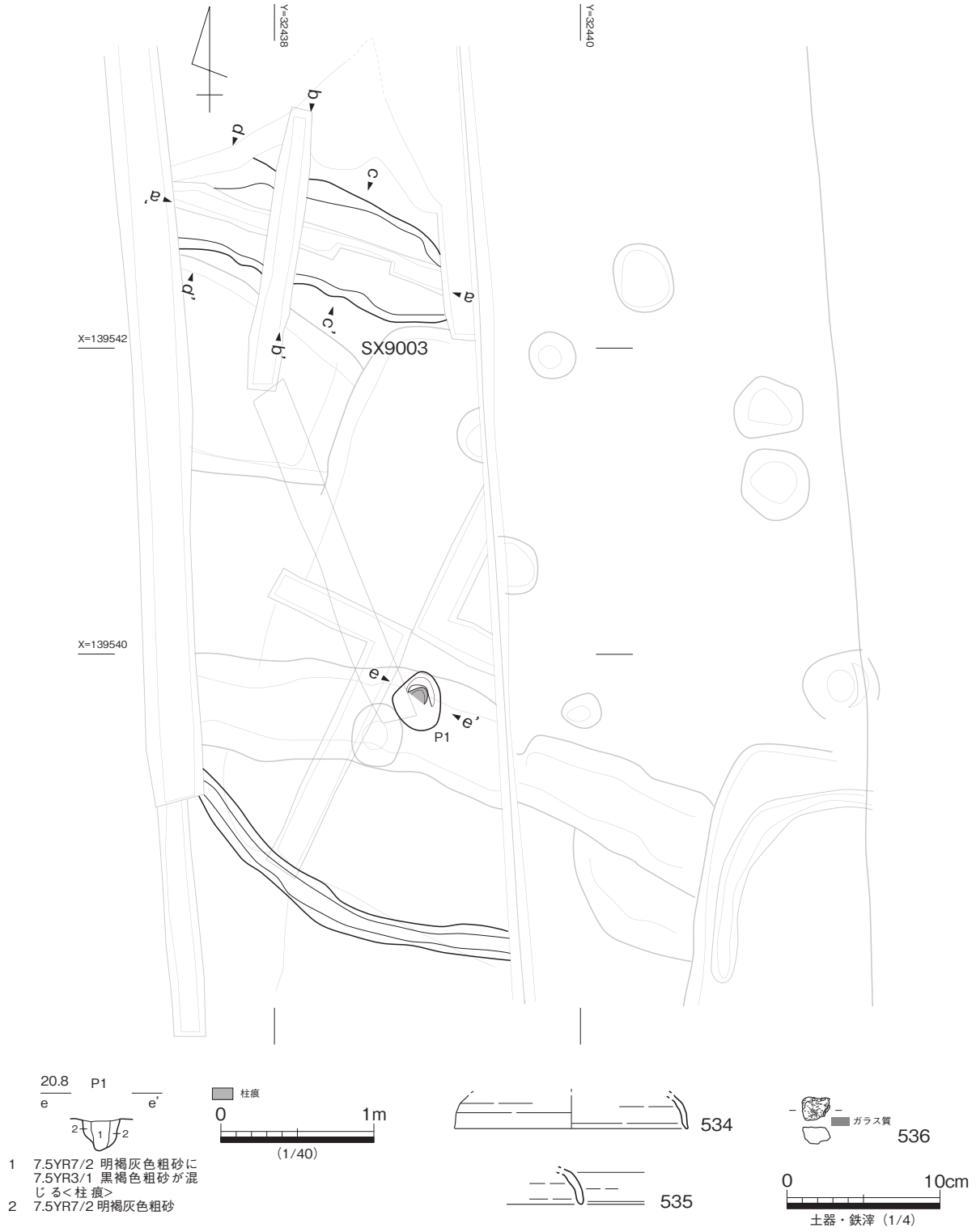
534 は炉埋土中、535 は炉部分精査中に出土した。須恵器杯蓋。小片。６世紀末（Ⅱ -4 期）頃。536 は SX9003 肩付近から出土した。鉄滓小片。一部にガラス質化が認められ、ふいご羽口の溶融物が付着する。

遺構の時期は、出土遺物から６世紀末頭と考えられる。

12 区 SX12004（第 161 図）

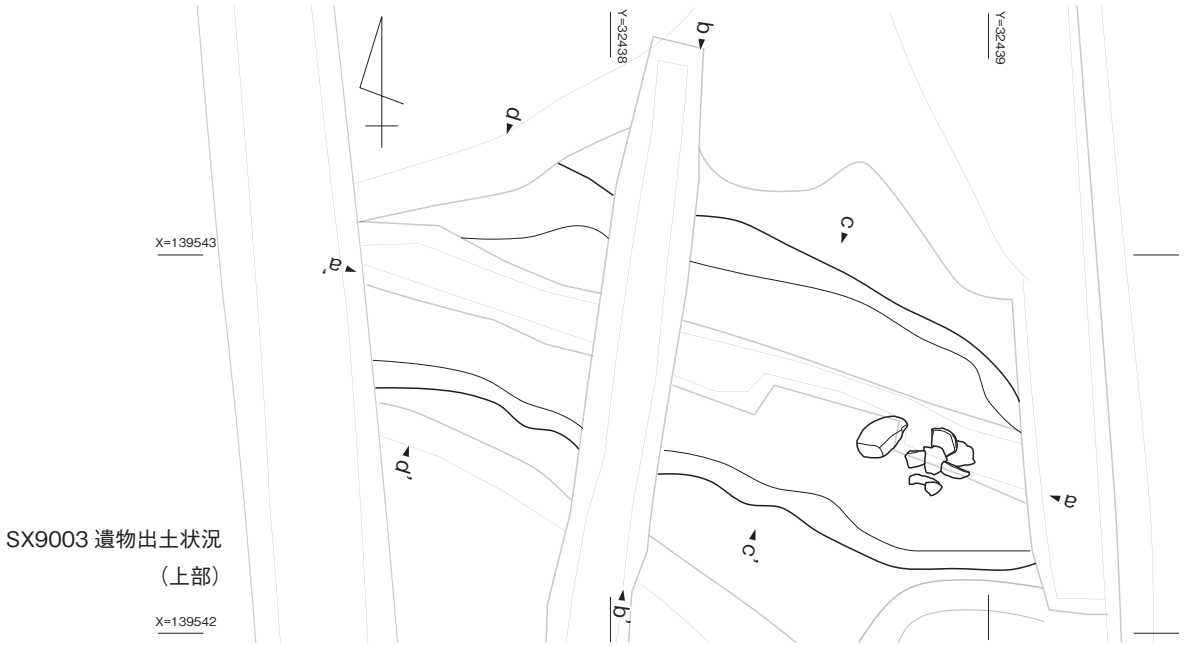
12 区南部で検出した。２面で検出した。SH12004 と重複し、これを掘り込むことが SH12004b-b' 断面からわかる。また、SK12002 により上面を削平される。楕円形で、長軸 1.19m、短軸 0.92m、深さ７㎝を測る。埋土中からは土師器小片が出土した。

遺構の時期は、２面で検出したことから、７世紀中頃以前と考えられる。

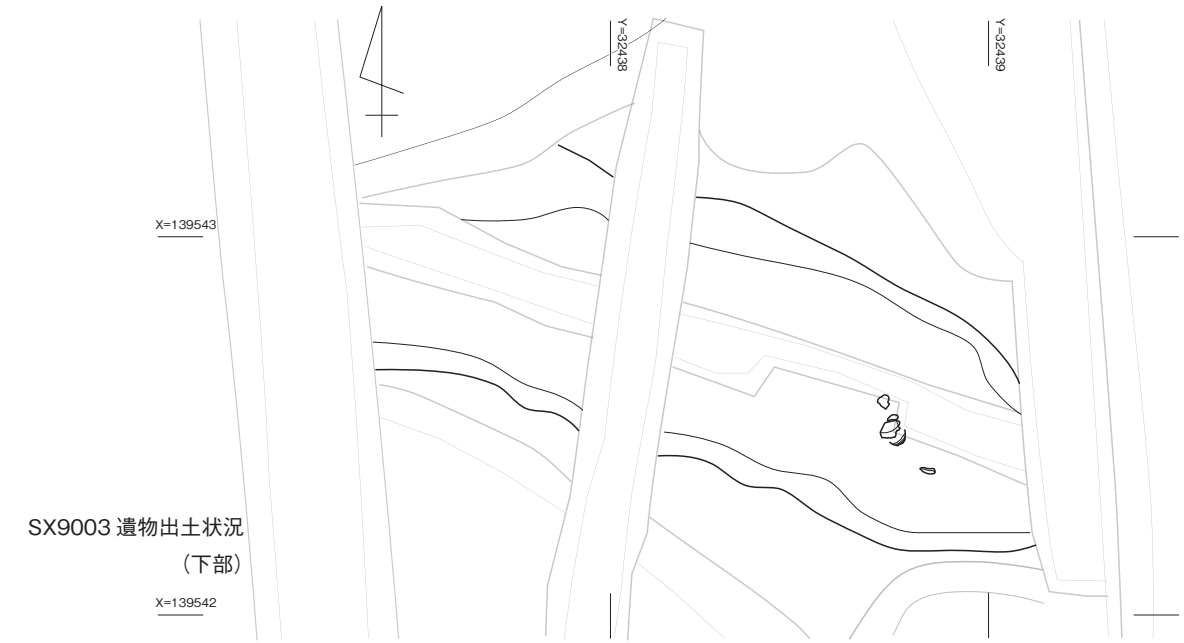


第 157 図　SX9003 平・断面図 1（1/40）、出土遺物（1/4）

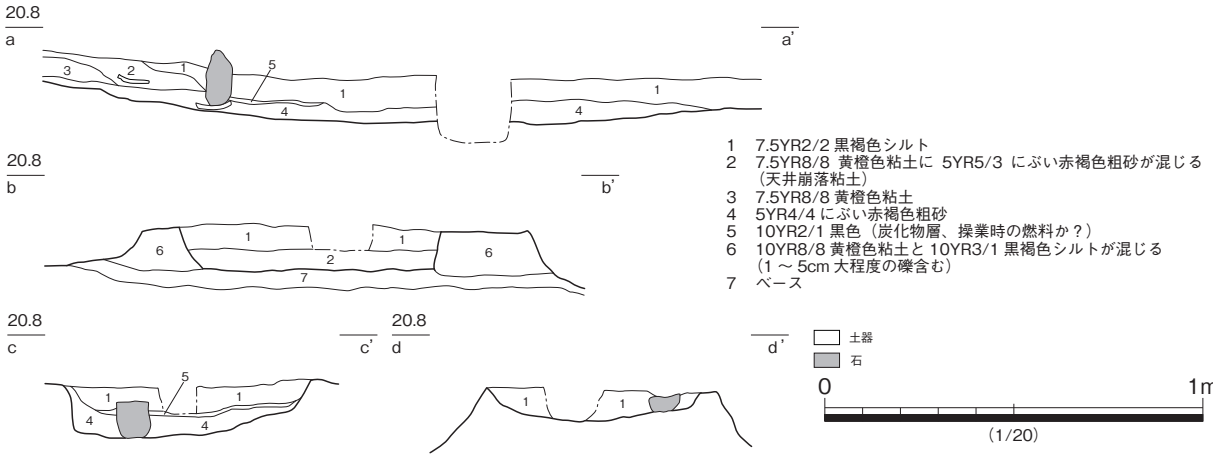
第 158 図　SX9003 被熱範囲・崩落土除去後（1/20）



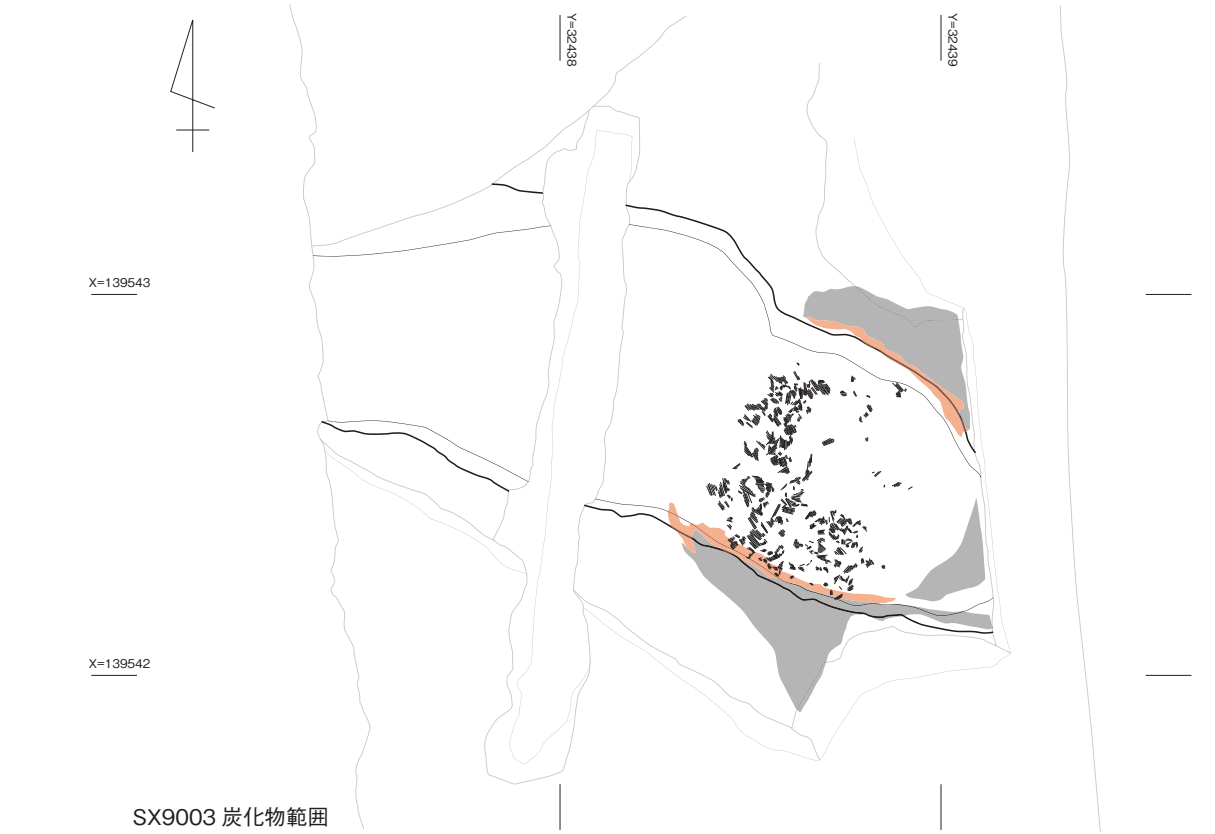
SX9003 遺物出土状況
（上部）



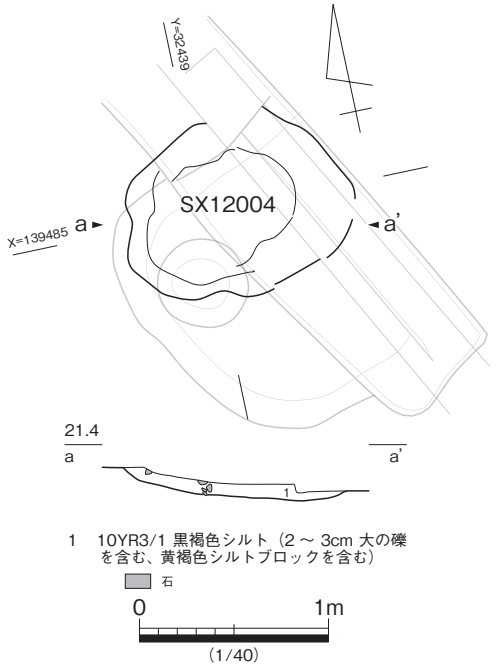
SX9003 遺物出土状況
（下部）



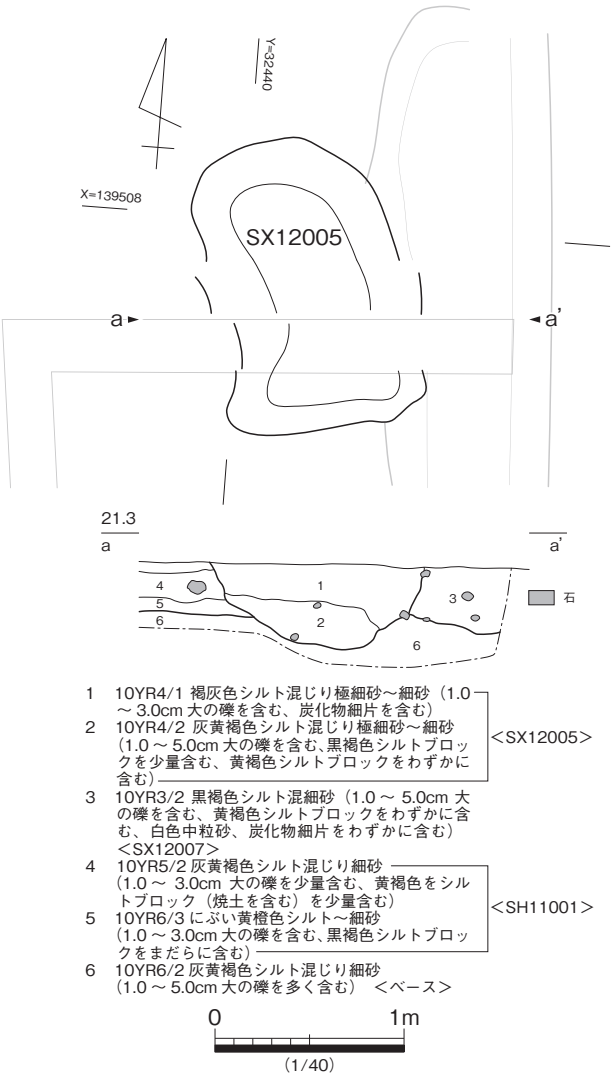
第 159 図　SX9003 平・断面図 2（1/20）



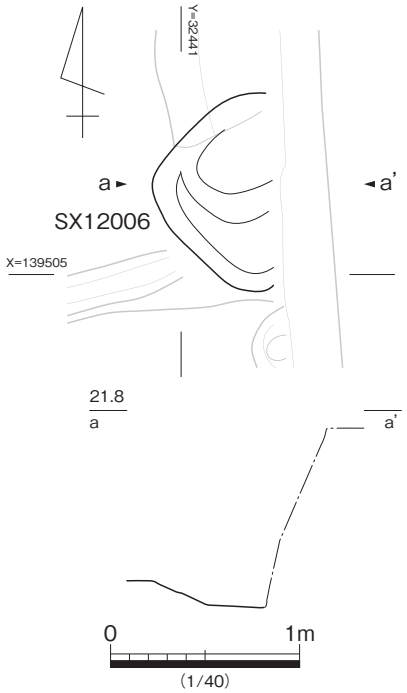
第 160 図　SX9003 炭化物範囲・完掘状況（1/20）



第 161 図　SX12004 平・断面図（1/40）



第 162 図　SX12005 平・断面図（1/40）



第 163 図　SX12006 平・断面図（1/40）

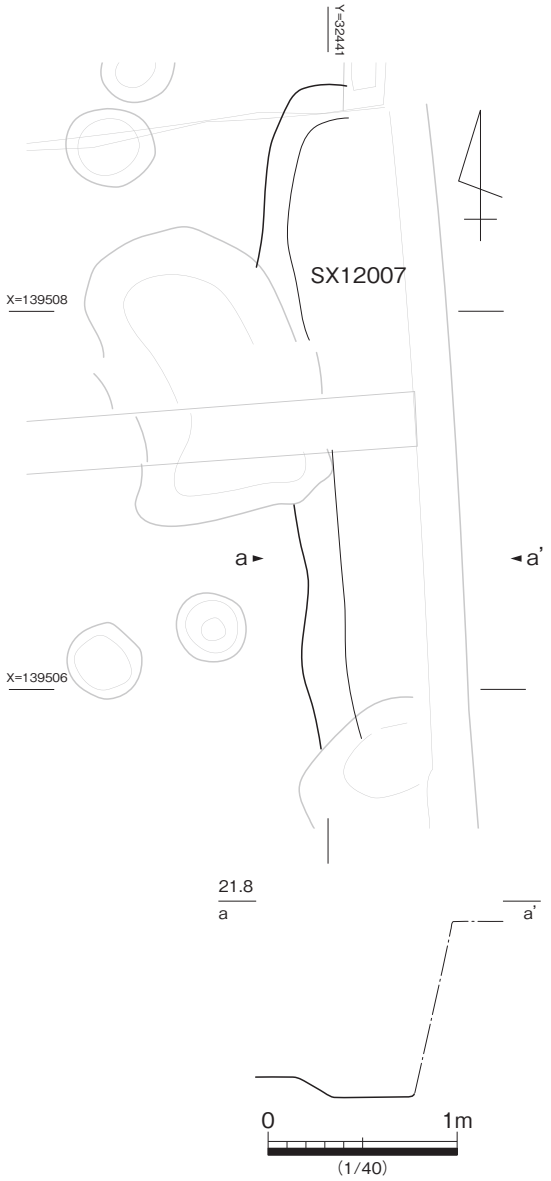
12 区 SX12005（第 162 図）

12 区北端付近で検出した。2 面で検出した。SH11001 と重複し、これを掘り込む。ややいびつな隅丸方形で、長軸 1.53m、短軸 1.01m、深さ 18㎝を測る。埋土中からは須恵器甕小片、土師器小片が出土した。

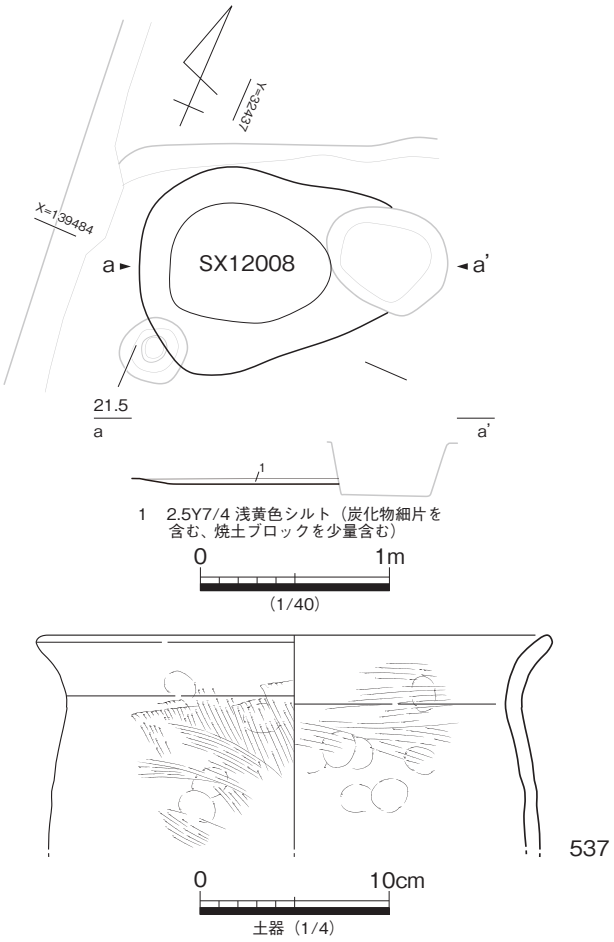
遺構の時期は、2 面で検出したこと、SH11001・SX12007 より新しいことから、6 世紀末～ 7 世紀前半頃と考えられる。

12 区 SX12006（第 163 図）

12 区北部で検出した。2 面で検出した。SH11001 と重複関係にあるが、遺構の前後関係は明らかではない。平面形状は不明で、北西―南東方向は 1.01m以上、南西―北東方向は 0.65m以上、北側が一段深く、深さは北側が 16.7㎝、南側が 2.9㎝である。埋土中からは須恵器杯身または杯蓋片、土師器小片が出土した。



第 164 図　SX12007 平・断面図（1/40）



第 165 図　SX12008 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

遺構の時期は、2 面で検出したことから 7 世紀中頃前半以前である。

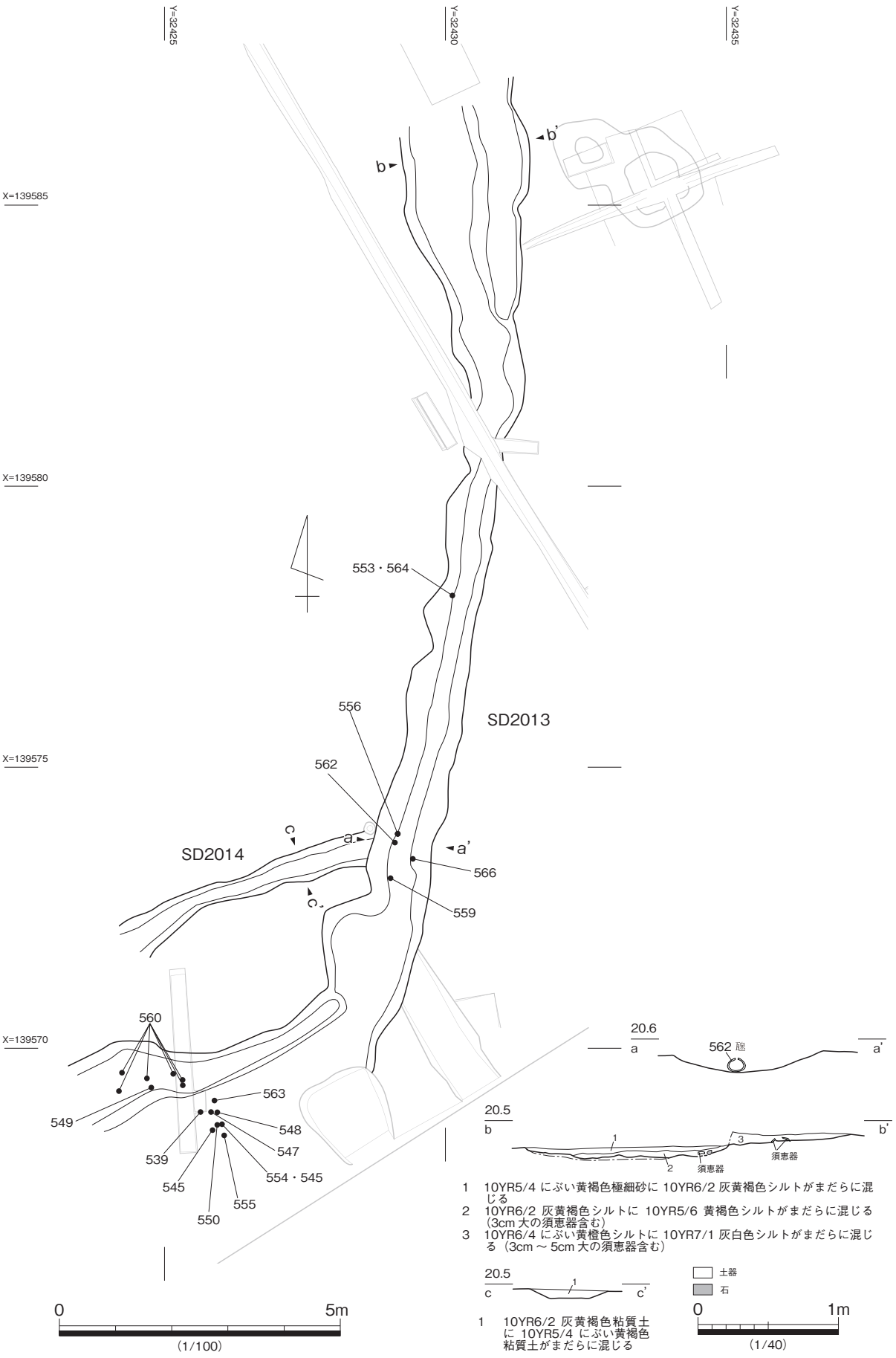
12 区 SX12007（第 164 図）

12 区北部で検出した。2 面で検出した。SH11001、SX12005 と重複し、SH11001 を掘り込み、SK12005 に掘り込まれる。隣接する 1 区では検出していない。長楕円形で、長軸 3.40m、幅 0.68m 以上、深さ 14cmを測る。埋土からは土師器小片が出土した。

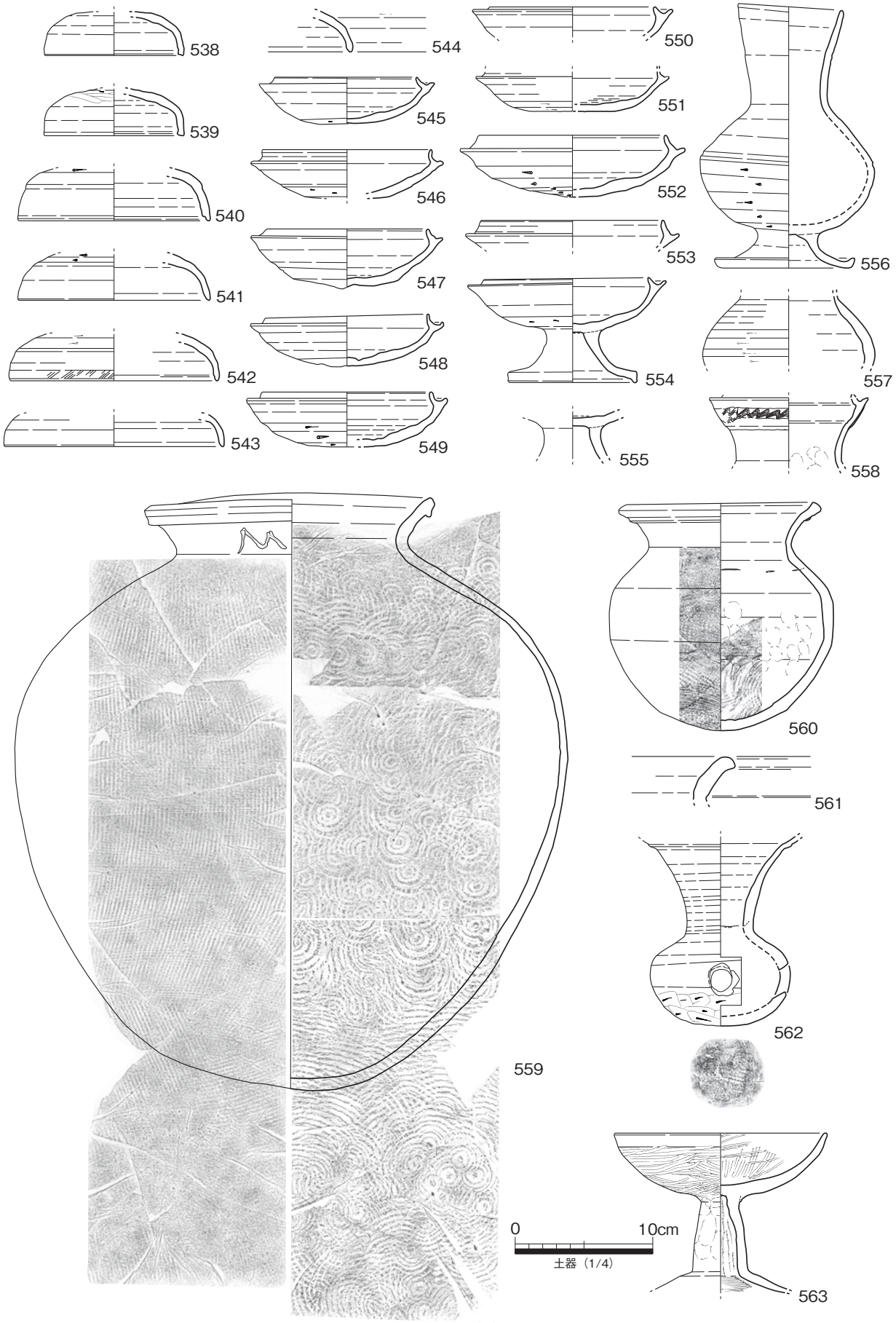
遺構の時期は、2 面で検出したこと、SH11001 より新しく SX12005 より古いことから、6 世紀末～ 7 世紀前半頃と考えられる。

12 区 SX12008（第 165 図）

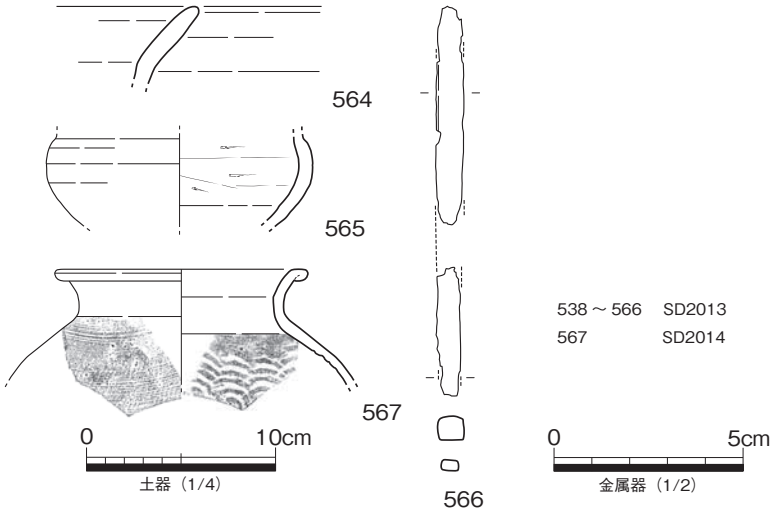
12 区南部で検出した。2 面で検出した。SH12004 と重複し、SH12004 掘削後に検出したので



第 166 図　SD2013・SD2014 平・断面図（1/100・1/40）



第 167 図　SD2013 出土遺物 1（1/4）



第 168 図　SD2013 出土遺物 2、SD2014 出土遺物（1/4・1/2）

SH12004 より古いと考えられる。不整円形で、長軸 1.39m、短軸 1.06m、深さは検出面から 7.3cmを測る。埋土には炭化物細片、焼土ブロックを含む。埋土中からは土師器甕片が出土した。

537 は土師器甕。

遺構の時期は、2 面で検出したこと、SH12004 より古いことから、出土遺物から 6 世紀後半頃と考えられる。

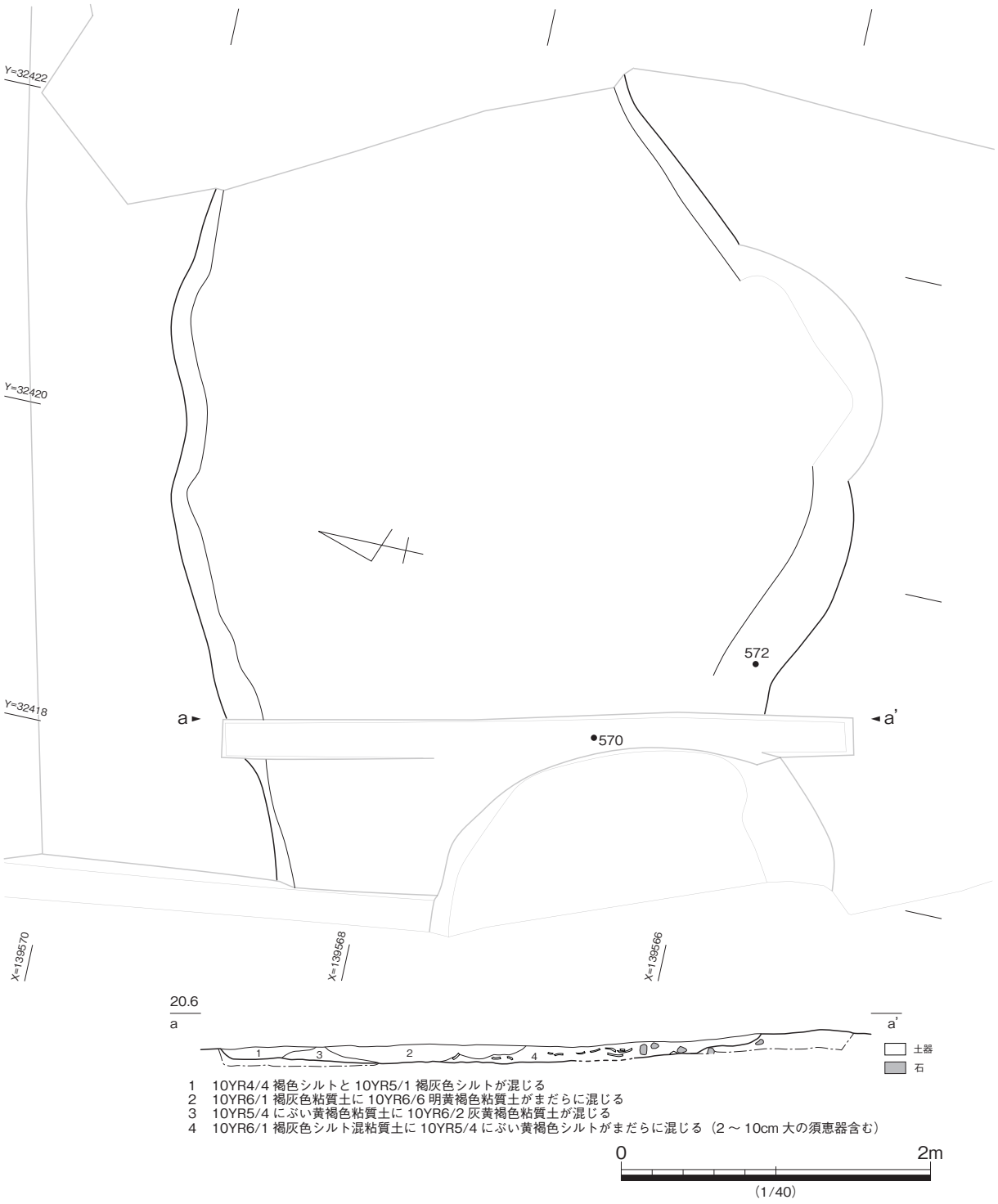
⑦溝・自然流路

2 区 SD2013（第 166 ～ 168 図）

2 区南部で検出した。2 面で検出した。やや弧を描きながら概ね真北方向を指し、南端付近では条里地割とほぼ同じ方向へ向けて西へ屈曲する。検出長約 21.7m、幅は一定しないが 0.7 ～ 2.2m、深さ 12cm程度を測る。屈曲部よりやや北側で西へ延びる SD2014 と接する。SD2014 は SD2013 の東側では検出されなかったことから、SD2014 は SD2013 から分岐する溝であろう。また、SD2013 の西端近くからトレンチを挟んで検出した SD2028 は、幅が広くなるものの、遺構の連続性から SD2013 に続く可能性があろう。

埋土中から、特に南側屈曲部付近からは多量の須恵器が出土した。

538 ～ 562 は須恵器。538･539 は口径が小さく、口縁端部を四角く仕上げる蓋で、壺の蓋と考えられる。6 世紀末（Ⅱ -4 期）頃。540 ～ 544 は杯蓋。540 は肩部・口縁端部内面にわずかに段を持つ。541 ～ 544 は肩部が滑らかで、口縁端部は丸く収める。542 は口縁端部外面に斜め方向の刻み目を施す。545 ～ 553 は杯身。7 世紀初頭～前半（Ⅱ -5 ～ 6 期）頃。554・555 は低脚の高杯。556 は脚付長頸壺。557 は、孔部分は残らないものの𤭯体部と考えられる。558 は𤭯口縁部。頸部上半に波状文を施す。口縁端部は返りがあり、端部は欠損する。559 ～ 561 は甕。559･560 はほぼ完形に復元できる。559 は頸部に「M」字状のヘラ描きを施す。やや歪みが認められる。562 は𤭯。底部外面にタタキ状の圧痕が残る。須恵器は概ね 7 世紀初頭～前半（Ⅱ -5 ～ 6 期）頃と考えられる。563 ～ 565 は土師器。563 は高杯。内面には放射状、外面には 4 分割のヘラ磨きが施される。564 は甕口縁部。565 は壺体部。内面にはヘラ削りを施す。566 は棒状鉄片。



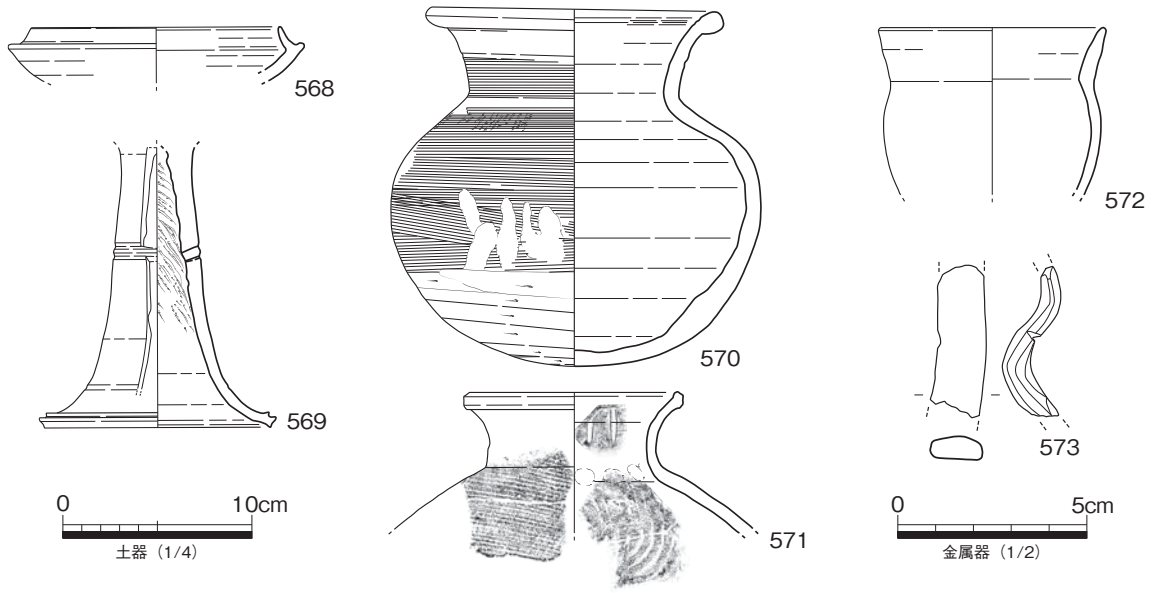
第 169 図　SD2028 平・断面図（1/40）

遺構の時期は、出土遺物から 7 世紀初頭～前半頃と考えられる。

2 区 SD2014（第 166・168 図）

2 区南端付近で検出した。2 面で検出した。SD2013 の南部屈曲部付近から西へ延びる。SD2013 から東では検出されず、SD2013 から分岐する溝と考えられる。検出長 4.7m、幅 53 ～ 68cm、深さ 5 ～ 7cm を測る。埋土中からは須恵器甕片が出土した。

567 は須恵器甕。



第 170 図　SD2028 出土遺物（1/4・1/2）

遺構の時期は 2 面で検出したことや SD2013 と同時併存と考えられること、出土遺物から、SD2013 と同様、7 世紀初頭～前半頃と考えられる。

2 区 SD2028（第 169・170 図）

2 区南西部で検出した。2 面で検出した。SD2013 の西へ連続する位置関係で検出したが、幅が広くなる。検出長約 5m、幅 4.32m、深さ 10cmで、埋土中に礫や土器片を含む。埋土中からは須恵器、土師器、鉄器が出土した。

568 ～ 571 は須恵器。568 は杯身。焼成不良で土師器の色調。7 世紀初頭（Ⅱ -5 期）頃。569 は高杯脚部。上下 2 段の方形の透かし孔を 2 ヶ所に施す。内面には絞り目が顕著に残る。570・571 は甕。ともに焼成不良。571 は頸部内面に 2 条の縦方向のヘラ描きを残す。窯印か。572 は土師器甕。573 は棒状折曲鉄器。

遺構の時期は、2 面で検出したことや SD2013 との関連性、出土遺物から、7 世紀初頭～前半頃と考えられる。

2 区 SD2015（第 171 図）

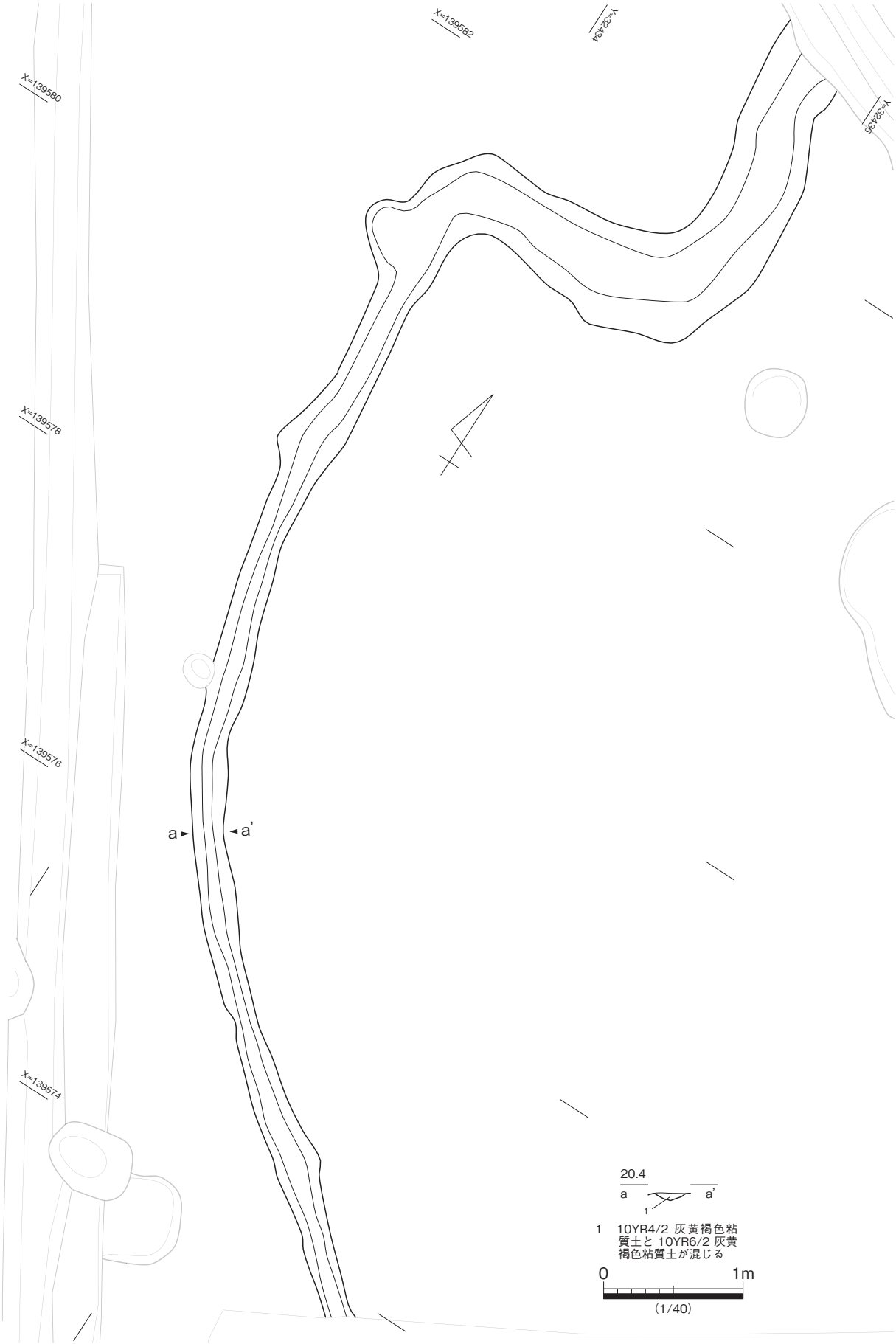
2 区南部で検出した。2 面で検出した。南東から北方向へ延び、東・北へ直角に屈曲した後、SD2016 により壊される。SD2016 の北東側には、やや位置がずれるものの、溝幅が近似する SD2017 が検出されており、これに続く可能性も考えられる。検出長約 12m、幅は中央部～南部で 24cm、SD2016 に近い北部で 74cm、深さ 6cmを測る。

埋土中からは土師器小片が出土しただけであった。

遺構の時期は、2 面で検出したこと、SD2016 との前後関係から 6 世紀後半以前と考えられる。

2 区 SD2016・SD2019（第 172・173 図）

2 区南部で検出した。2 面で検出した。東側の調査区外から西北西へ延び、SD2020 付近でほぼ直角



第 171 図　SD2015 平・断面図（1/40）

に屈曲して南南西へ向く。トレンチを挟んで西側で検出した SD2019 は SD2016 から連続する可能性が高い。遺構の重複関係により、SD2015･2017 より新しい。検出長 13m、幅は屈曲より東側は 50 ～ 60cm、西側は 32 ～ 50cm、深さ 30cmを測る。

埋土中からは弥生土器、須恵器、土師器が出土した。

574 は弥生土器底部。575 ～ 582 は須恵器。575・576 は杯蓋。ともに肩部に緩い段を持ち、口縁端部は窪ませる。575 は頂部外面に他の須恵器の溶着痕がある。577 ～ 581 は杯身。582 は甕。口縁端部外面はわずかに肥厚する。概ね 6 世紀後半（Ⅱ -3 期）。583 は土師器把手付甕。

遺構の時期は、2 面で検出したことや出土遺物により 6 世紀後半頃と考えられる。

2 区 SD2017（第 172 図）

2 区南東部で検出した。2 面で検出した。検出長 2.8m、幅 47 ～ 53cm、深さ 13cmを測る。東は調査区外へ、西は SD2016 により壊され、これより南では検出していないが、やや西側で SD2016 により壊される SD2015 があり、これに連続する可能性が考えられる。埋土中からは須恵器小片が出土したのみであった。

遺構の時期は、2 面で検出したこと、SD2016 との前後関係や連続すると考えられる SD2015 の時期から、6 世紀後半以前と考えられる。

2 区 SD2018（第 174 図）

2 区南東隅で検出した。2 面で検出した。南、東肩は調査区外へ延びる。検出長 6.1m、幅 42 ～ 93cm以上、深さ 3cm程度を測る。埋土からは土師器小片が出土しただけであった。

遺構の時期は、2 面で検出したことから、7 世紀中頃以前と考えられる。

2 区 SD2020・SD2021（第 175 図）

2 区中央付近で検出した。2 面で検出した。形状は不定形で、南南東から北北西へ向く。二股の溝で、北から 1.7m付近で合流する。検出長は、東側は 7.4m、西側は 2.6m、幅は北端付近で 2.2m、二股に分かれる部分は東側が 0.75m程度、西側が 0.45m、深さ 10cm程度を測る。埋土中から須恵器杯身が出土した。

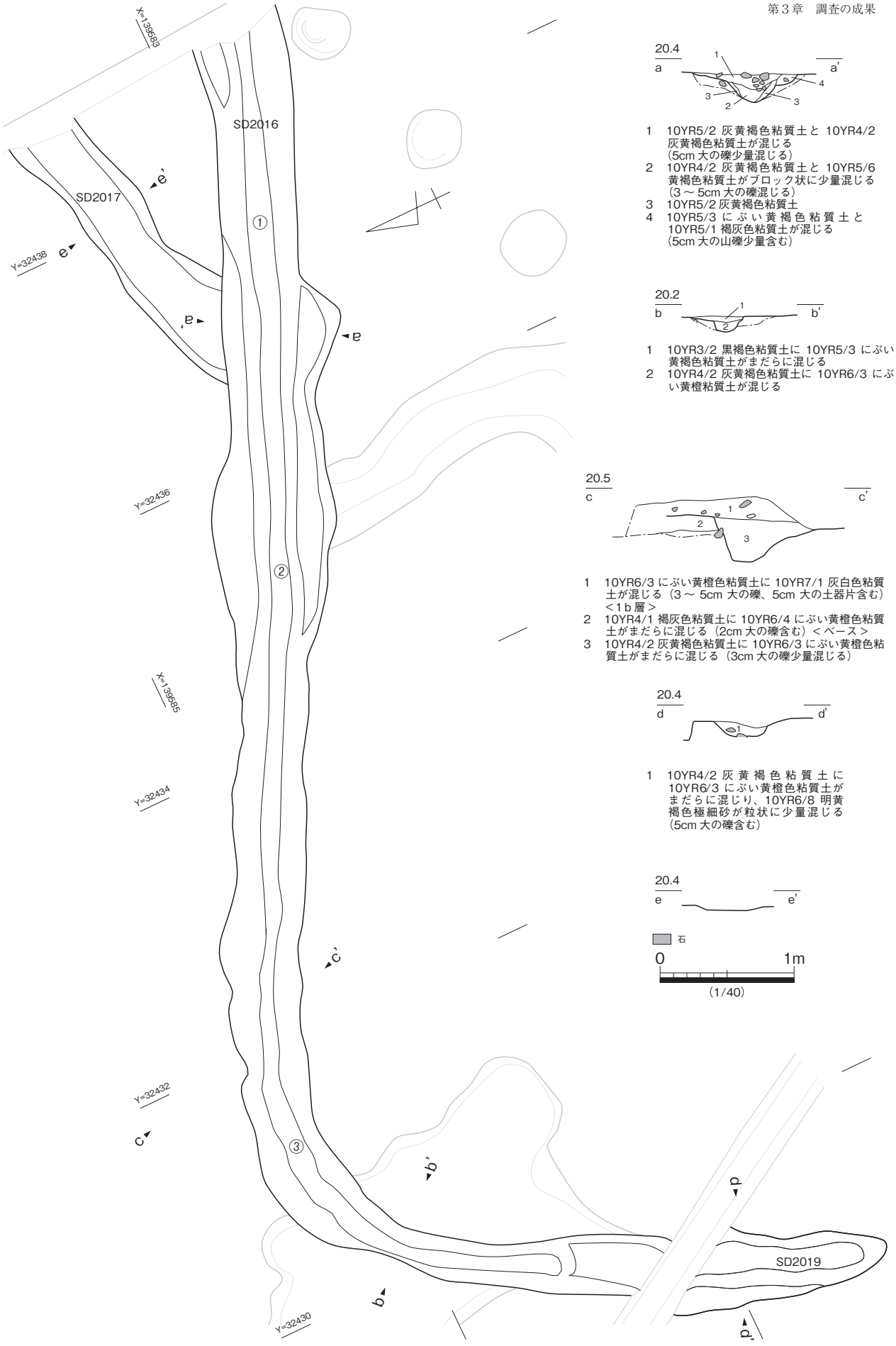
SD2021 は SD2020 の南西部に接して検出した。検出長 2.5m、幅 0.77m、深さ 3cm程度を測る。SD2020 西側の溝との角度は約 60°、SD2016 の西半部とほぼ平行する。SD2020 と関連の深い遺構と考えられる。埋土からは出土遺物はなかった。

584・585 は SD2020 から出土した須恵器杯身。6 世紀後半（Ⅱ -3 期）頃。

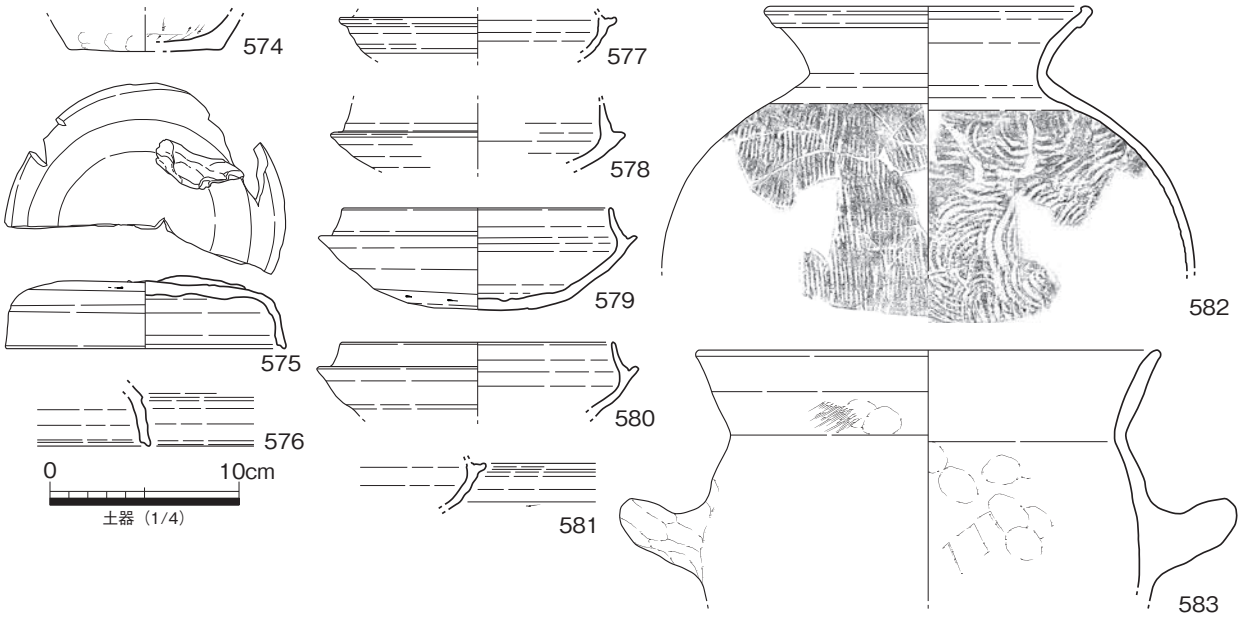
遺構の時期は、2 面で検出したことや出土遺物により 6 世紀後半頃と考えられる。

2 区 SR2001（第 176・177 図）

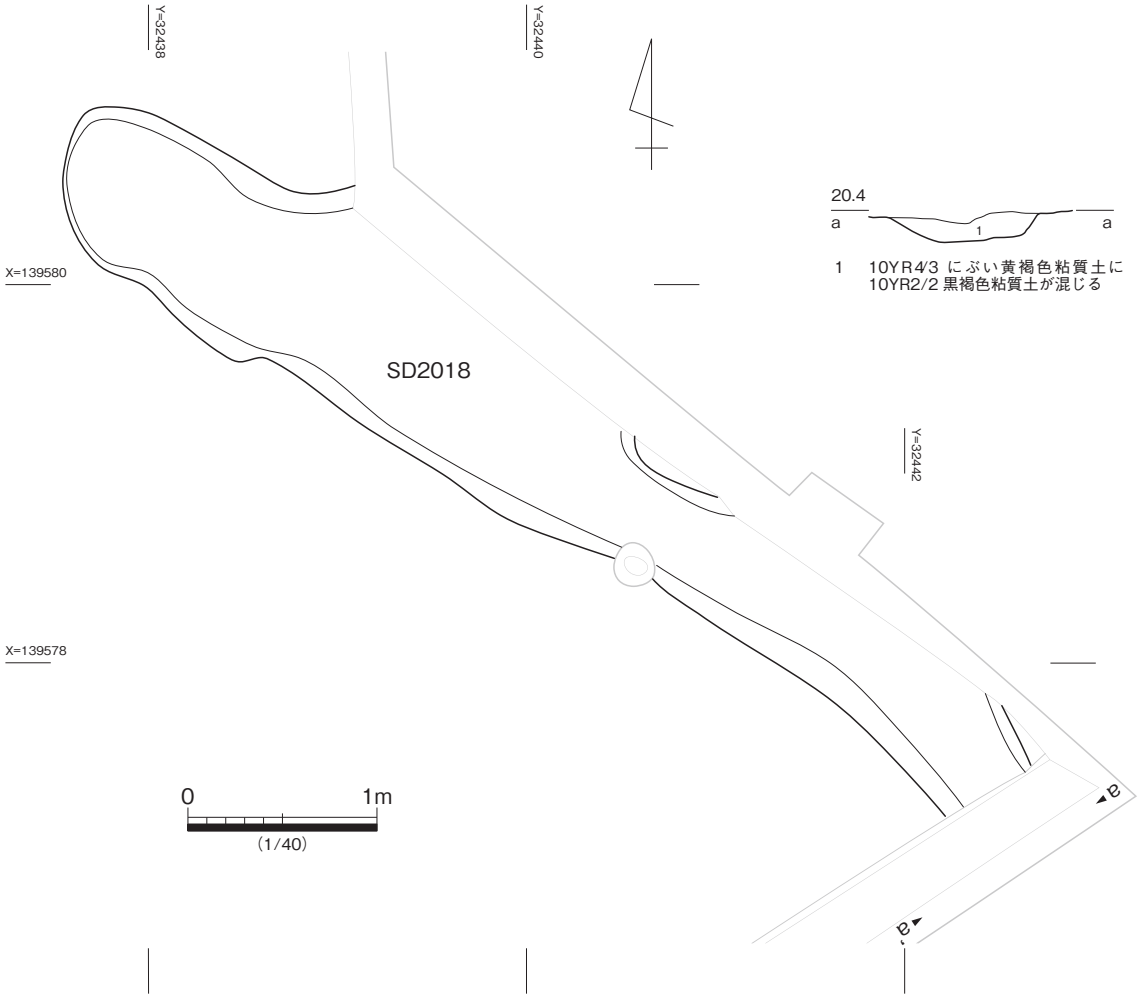
2 区北西部で検出した。2 面で検出した。南東側の肩を検出し、北西側は調査区外へ延びる。検出幅 9.63m、深さは 20cm程度である。包含層 2 層上面に堆積する。埋土は、下位がマンガンを含む灰黄褐色粘土、上位がマンガンを含む褐灰色シルト層である。このうち、褐灰色シルト層に畦畔上の盛り上がりが認められた。SR2001 の埋没した後に水田耕作に利用されたものと考えられる。2 区北壁・西壁においても同一の層位・レベルから畦畔状の盛り上がりが認められた。植物珪酸体分析を行った結果、イネ



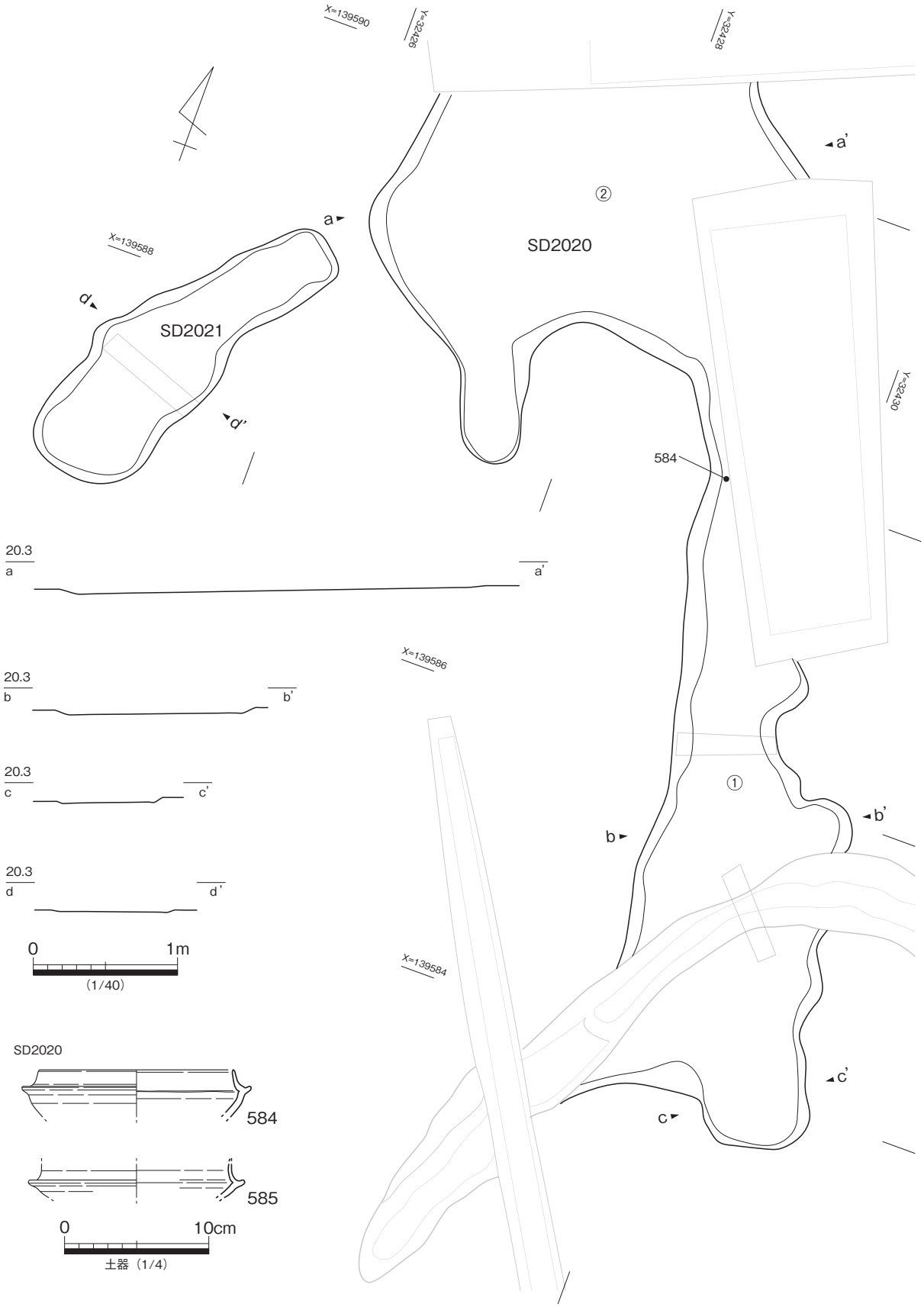
第 172 図　SD2016・SD2017・SD2019 平・断面図（1/40）



第 173 図　SD2016 出土遺物（1/4）



第 174 図　SD2018 平・断面図（1/40）



第 175 図　SD2020・SD2021 平・断面図（1/40）、SD2020 出土遺物（1/4）

の花粉量は少なく、周辺はヨシが繁茂する湿地であったことが判明した。少量ながらイネ花粉が検出されたことから、耕作地は近隣に所在する可能性が指摘された（第 4 章　第 3 節参照）。埋土中からは須恵器、土師器片が出土した。

「岸の上遺跡Ⅰ」では、4 区から 5 区で古墳時代終末期の畦畔を検出している。ここでも自然科学分析の結果はイネの花粉量は少なく、近隣に耕作地があった、又は水田は短期間で放棄された可能性が指摘された。SR2001 と「岸の上遺跡 1」報告された 4 ・ 5 区の水田はほぼ同じ時期で同様の性格を持つと考えられる。

埋土中からは須恵器片などが出土した。

586・587 は須恵器杯身。586 は調査時の取り上げ層位は最上層である。587 の取り上げ層位は黒色粘土層で、SR2001 下部の包含層 2 層に相当する層から出土したと考えられる。いずれも 7 世紀初頭（Ⅱ -5 期）頃。

遺構の時期は、7 世紀初頭頃と考えられる。

2 区 SD2022・SD2023（第 176・177 図）

2 区北東隅部で検出した。2 面で検出した。いずれも SR2001 北部の東肩に平行して検出した。

SD2022 は SR2001 の東肩から約 3.7m 東南側で検出した。主軸方位は SR2001 東肩とほぼ同じである。検出長 6.3m、幅 0.55m、深さ 2㎝程度を測る。埋土中からは遺物は出土しなかった。

SD2023 は SD2022 の北西側約 3.8m で検出した。主軸方位は SR2001 の東肩や SD2022 とほぼ同じである。検出長 7.2m、幅 0.4 ～ 1.0m、深さ 6 ～ 10㎝を測る。SD2023 と SR2001 の前後関係は明らかではないが、SD2023 の底のレベルが、SR2001 南東側ライン際の下場のレベルより高いことから、SR2001 埋没後に掘削された可能性が高いと考える。

埋土中からは須恵器壺・甕片が出土した。

588 は SD2023 から出土した。須恵器短頸壺。体部にはカキ目が施される。

遺構の時期は、SR2001 上面で検出したことから 7 世紀初頭以降と考えられる。

2 区 SD2024・SD2029（第 176・177 図）

2 区北端付近で検出した。2 面で検出した。SD2024 は SR2001 の東肩から約 1.5m 北西側で検出した。検出長 9.2m、幅 0.50 ～ 0.65m、深さ 10㎝程度を測る。埋土中からは、摩滅した土師器甕体部片が一定量出土した。

SD2029 は SR2001 の内部でほぼ真北方向を指す。北側は攪乱により消失し、南側は SD2024 より南では検出できなかった。検出長 2.3m、幅 0.52m、深さ 7.2㎝である。埋土中からは出土遺物はなかった。

SD2024・SD2029 は、調査時には SR2001 より先に掘り下げられており、これらは SR2001 の埋没後のものであろう。

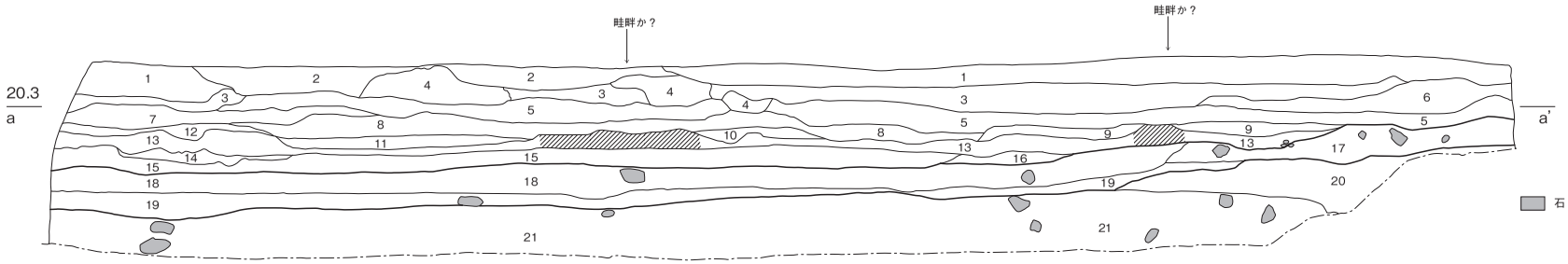
遺構の時期は、SR2001 より新しいと考えられることから、7 世紀初頭以降と考えられる。

2 区 SD2025（第 176・177 図）

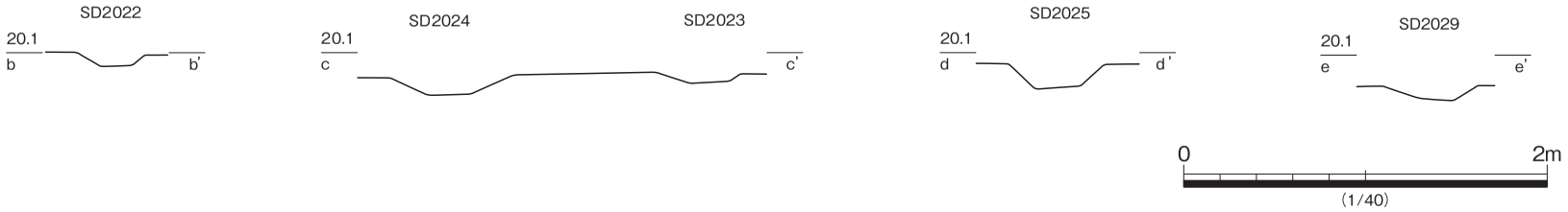
2 区北部で検出した。2 面で検出した。ほぼ南北方向から、溝の中程で北西方向へ屈曲する。SR2001 の東肩から北西では検出されず、SR2001 より古い、または同時併存と考えられる。検出長約 9.0m、幅 0.70m 程度、深さ 11.3㎝程度を測る。

埋土中からは、土師器小片、サヌカイト製石鏃が出土した。

第 176 図　SR2001・SD2022 ～ SD2025・SD2029 平面図（1/200）

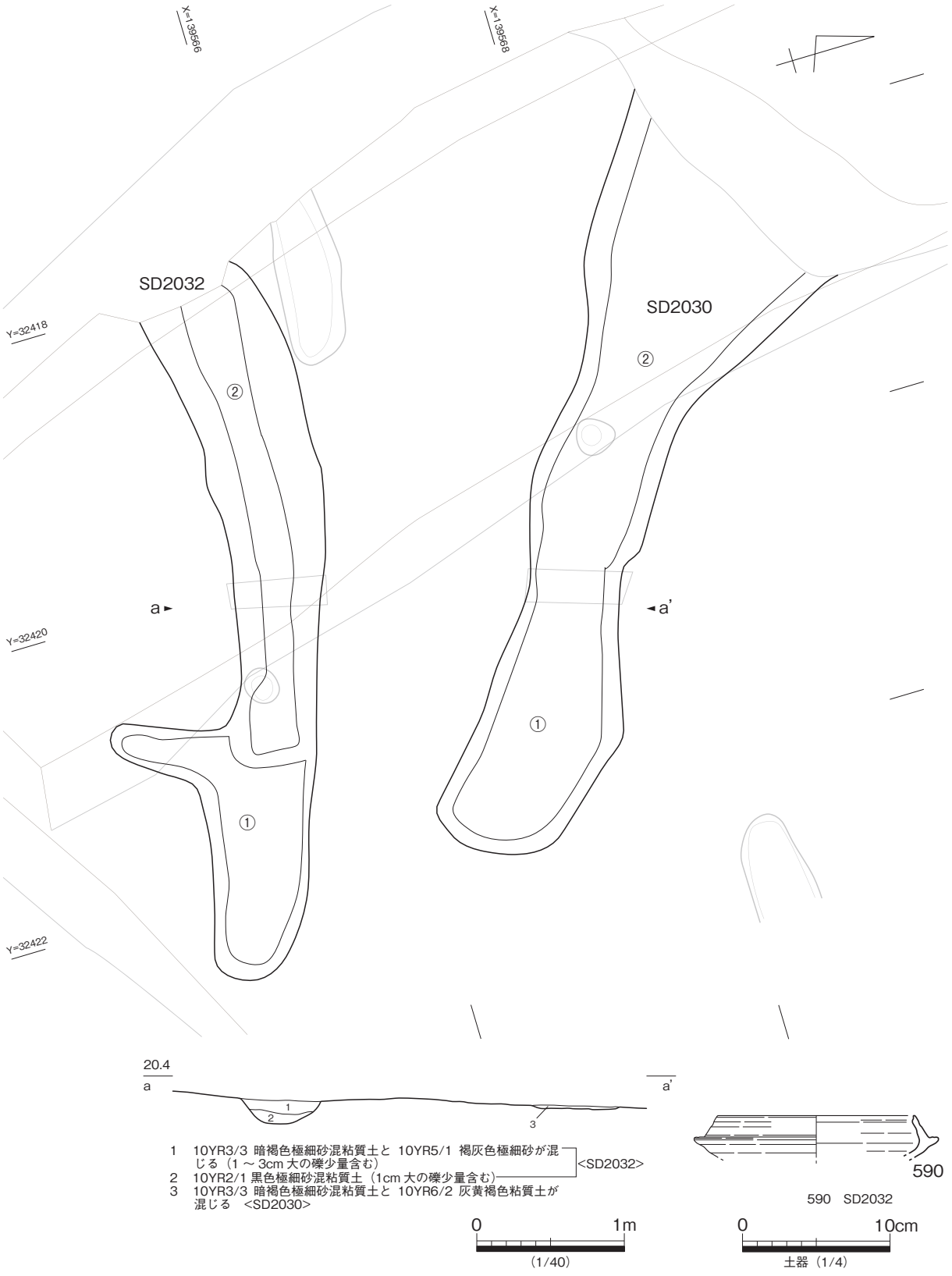


1　10YR5/3 にぶい黄褐色シルト（10YR4/4 褐色シルトが粒状に多量に混じる、Mn 含む）
2　10YR5/2 灰黄褐色シルト（Mn 多く含む）
3　10YR5/4 にぶい黄褐色シルト（砂質強い、Mn 含む、1 層に類似する）
4　10YR8/2 灰白色シルト（Mn 含む）
5　10YR5/2 灰黄褐色シルト（Mn 含む）
6　2.5Y6/1 黄灰色シルト混じり細砂
7　10YR6/3 にぶい黄橙色シルト（Mn 少量含む）（3 層に類似する）
8　10YR5/3 にぶい黄褐色砂（10YR6/2 灰黄褐色シルトがブロック状に少量混じる）
9　2.5Y7/4 浅黄色シルト（Mn 含む、砂質強い）
10　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（Mn 含む）
11　10YR6/3 にぶい黄橙色粘質土（10YR6/3 にぶい黄橙色、砂が 5cm 大程度のブロック状で混じる、Mn 含む）
12　10YR5/3 にぶい黄褐色細砂
13　10YR5/1 褐灰色シルト（Mn 含む（耕土層？）、褐灰色粘質土の小ブロックを多く含む）
14　10YR5/2 灰黄褐色粘質土（Mn 少量含む、15 層のブロックが多量に入る）
15　10YR5/2 灰黄褐色粘土（上層 2cm 程度、 金属系の着色あり、Mn 含む、18 層のブロックが多量に入る）　<SR2001>
16　10YR5/2 灰黄褐色粘土（Mn 含む、15 層に比べ、18 層のブロックが大）
17　10YR3/2 黒褐色礫混じり黒褐色粘土（10YR6/8 明黄褐色粘質土が 1 ～ 2cm 大程度小ブロックで少量混じる、3 ～ 15cm 程度礫中量混じる）
18　7.5YR2/2 黒褐色粘土（5 ～ 10cm 大程度礫少量含む）　<2 層 >
19　7.5YR4/2 灰褐色粘質土（Mn 含む）
20　2.5Y7/4 浅黄色シルト（15 ～ 7cm 大程度礫少量混じる）
21　2.5Y7/4 浅黄色小礫層（3 ～ 15cm 大程度の中礫多量に含む）　< ベース >



586・587　SR2001
588　SD2023
589　SD2025

第 177 図　SR2001・SD2022 ～ SD2025・SD2029 断面図（1/40）、出土遺物（1/4・1/2）



第 178 図　SD2030・SD2032 平・断面図（1/40）、SD2032 出土遺物（1/4）

589 はサヌカイト製石鏃。凹基式。

遺構の時期は、SR2001 との関係から、7 世紀初頭前後頃と考えられる。

2 区 SD2030・SD2032（第 178 図）

2 区南西隅で検出した。2 面で検出した。2 条はやや方向は異なるものの、1.7 ～ 3.5mの間隔をあけて、並んで検出した。

SD2030 は検出長 1.9m、幅 0.56m、深さ 2cm程度を測る。北西側は SR2001 により消失する。埋土中からは、須恵器、土師器小片が出土した。

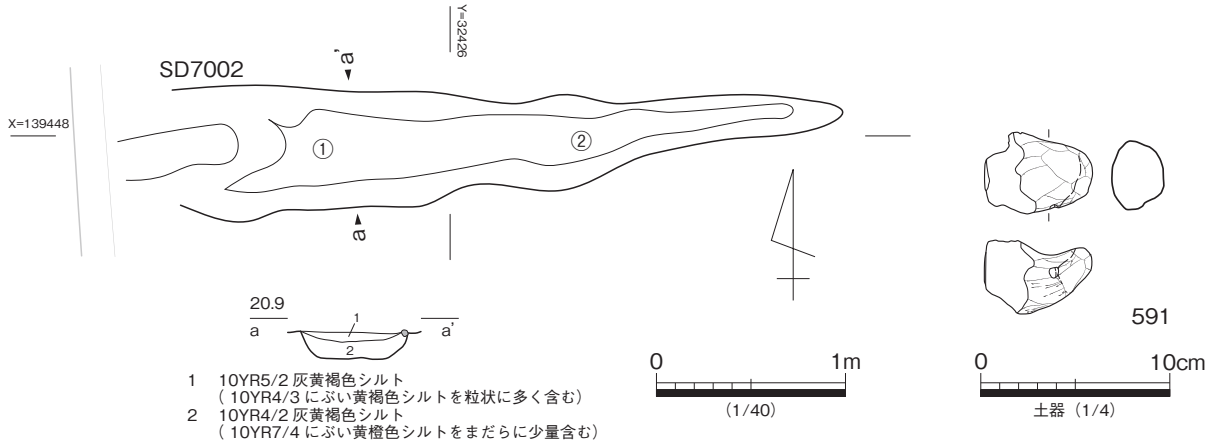
SD2032 は検出長 1.9m、幅 0.54m、深さ 18cmを測る。西側は調査区外へ延びる。東から約 1.4mの場所で南へ直角に分岐し、0.8m程度延びる。埋土中からは、須恵器杯身・甕、土師器片が出土した。

590 は SD2032 の埋土中から出土した須恵器杯身片。6 世紀後半（Ⅱ -3 期）頃。

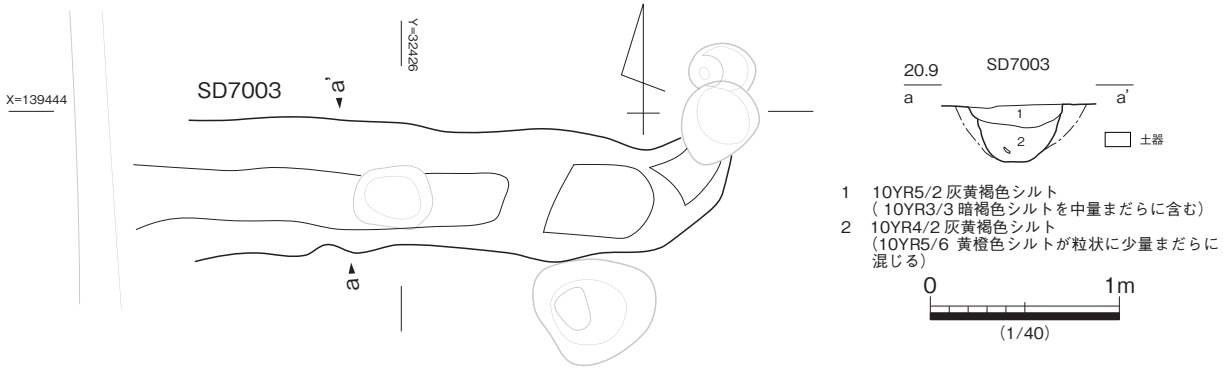
遺構の時期は、出土遺物から 6 世紀後半頃と考えられる。

7 区 SD7002（第 179 図）

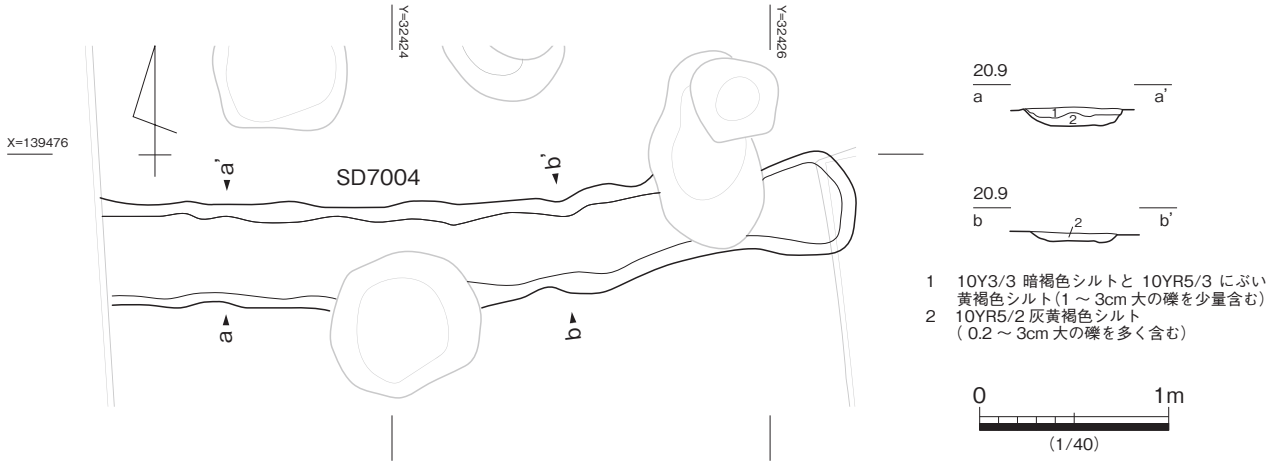
7区南端付近で検出した。2面で検出した。西側は調査区外へ延びる。検出長3.87m、幅0.56m、深さ14cm、



第 179 図　SD7002 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）



第 180 図　SD7003 平・断面図（1/40）



第 181 図　SD7004 平・断面図（1/40）

主軸方位はW2.74° Sである。芯々距離で南側4.36mには、ほぼ平行して同規模のSD7003が位置しており、関連する遺構である可能性があろう。埋土中からは、須恵器杯身・甕片、土師器甕または甑の把手が出土した。

591 は土師器甕または甑の把手。

遺構の時期は、2 面で検出したことから、7 世紀中頃以前と考えられる。

7 区 SD7003（第 180 図）

7区南端付近で検出した。2面で検出した。西側は調査区外へ延びる。検出長3.49m、幅0.48m、深さ30cm、主軸方位は真東西方向である。東端付近でわずかに北側へ屈曲する。芯々距離で北側 4.36mには、ほぼ平行して SD7002 が位置しており、関連する遺構の可能性がある。埋土中からは須恵器杯身、土師器片が出土した。

遺構の時期は、2 面で検出したことから、SD7002 と同様 7 世紀中頃以前と考えられる。

7 区 SD7004（第 181 図）

7 区北部で検出した。2 面で検出した。西側は調査区外へ延びる。検出長 3.97m、幅 44 ～ 50cm、深さ 4 ～ 10cm、主軸方位は W5.23° S である。SD7002・SD7003 とはやや離れているものの、主軸方位や検出位置から、類似する遺構とも考えられる。

埋土中からは土師器小片が出土した。

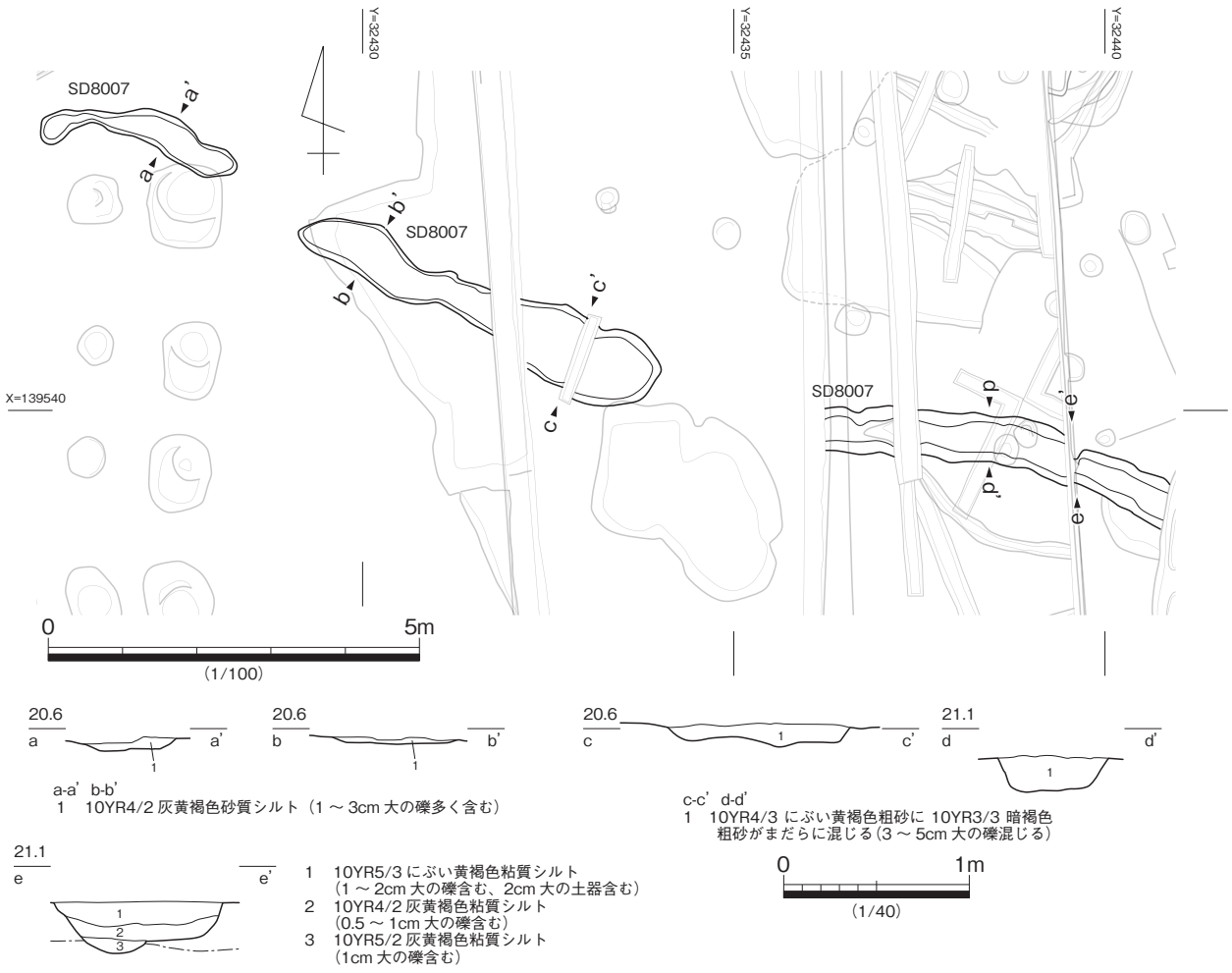
遺構の時期は、2 面で検出したことから、7 世紀中頃以前と考えられる。

8 区・11 区 SD8007（第 182 図）

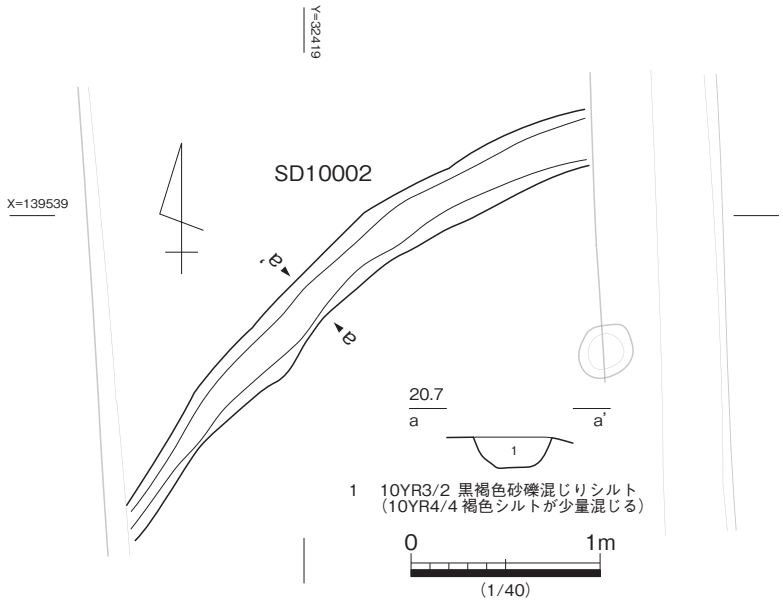
1 区から 8 区にかけて検出した溝状遺構である。8 区では 2 面で検出した。概ね東南東から西北西へ向くが、西端でやや南向きに屈曲する。西側ほど溝底部のレベルが低い。延長 6.4 m、幅 0.60 ～ 0.92m、東半部では、検出面から深さ 18 ～ 28cm程度を測るが、西半部では途切れ途切れに検出し、遺構の遺存状況は悪い。

埋土中からは土師器小片が出土したのみである。

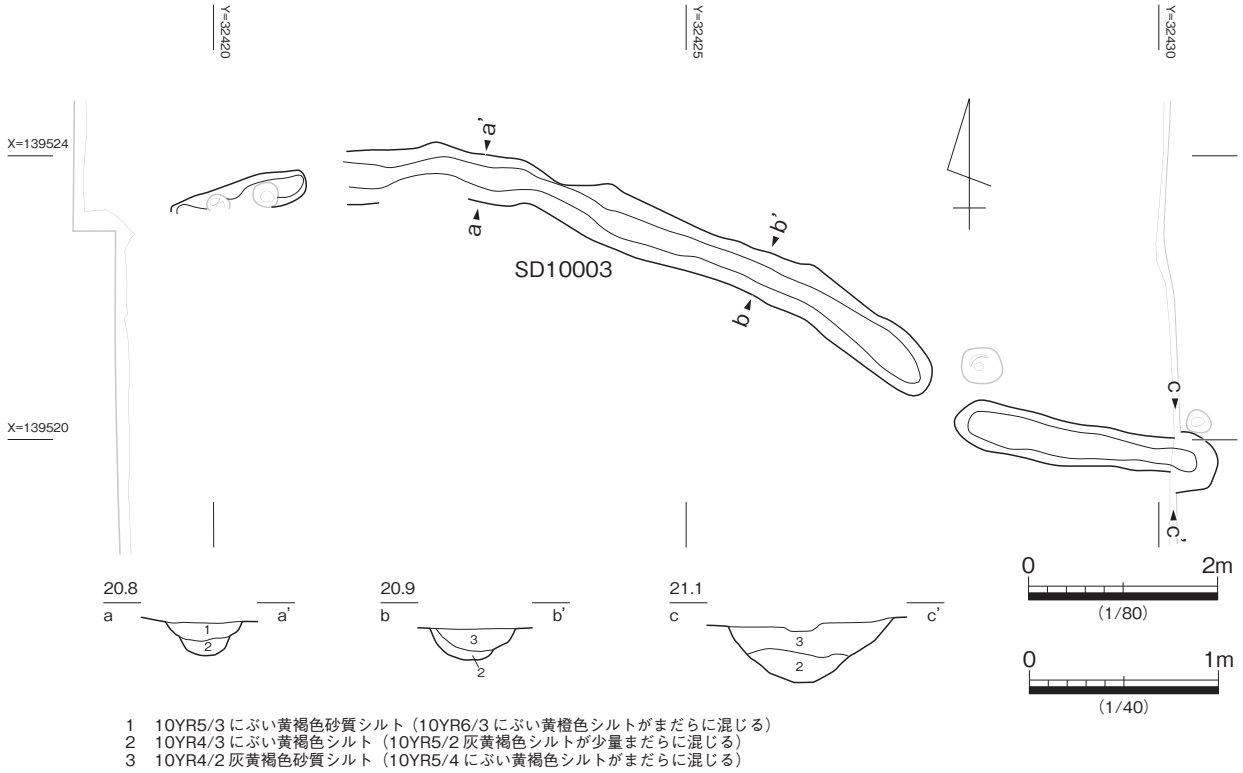
2 面で検出したことから、7 世紀中頃以前と考えられる。



第 182 図　SD8007 平・断面図（1/100・1/40）



第 183 図　SD10002 平・断面図（1/40）



1　10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト（10YR6/3 にぶい黄橙色シルトがまだらに混じる）
2　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（10YR5/2 灰黄褐色シルトが少量まだらに混じる）
3　10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト（10YR5/4 にぶい黄褐色シルトがまだらに混じる）

第 184 図　SD10003 平・断面図（1/80・1/40）

10 区 SD10002（第 183 図）

10 区南部で検出した。2 面で検出した。隣接する 8 区では検出していない。緩く弧を描く形状で、検出長は 3.30m、幅 0.42m、深さ 16cmである。埋土中からは出土遺物はなかった。

遺構の時期は、2 面で検出したことから、7 世紀中頃以前と考えられる。

10 区・8 区 SD10003（第 184 図）

10 区南端部から 8 区にかけて途切れ途切れで検出した。2 面で検出した。西側は調査区外へ延びる。緩く蛇行しながら東から西へ向く。検出長 11.84m、幅 0.40 ～ 0.76m、深さ 17 ～ 28cmを測る。埋土中からは出土遺物はなかった。

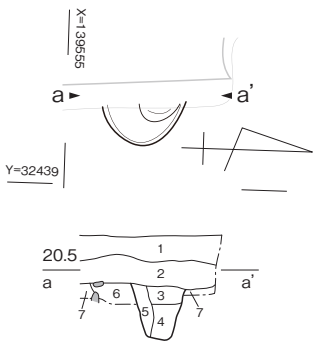
遺構の時期は、2 面で検出したことから、7 世紀中頃以前と考えられる。

⑧柱穴（第 185 ～ 200 図）

各調査区で、掘立柱建物、柵列の一部に復元できなかった柱穴を掲載した。掲載した柱穴は、断面図を作成した、または実測可能な遺物が出土した柱穴とした。2・3・7 ～ 12 区では 2 面で検出した柱穴を掲載した。1 区では検出面が明確ではなく、時期は遺構の重複関係と出土遺物に依ったが、各調査区の 1 面の遺構群からも古墳時代の遺物が多く出土することから、出土遺物に依ったものについては古代以降の柱穴である可能性も考えられる。11・12 区でベース上で検出した柱穴については、1 面遺構面を除去したのちに検出したものであるため、この項で報告する。

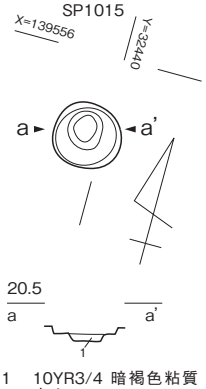
記述が煩雑になるため、一覧表を作成した。遺構の詳細については平面図を、遺物の詳細については、観察表を参照されたい。

SP1013



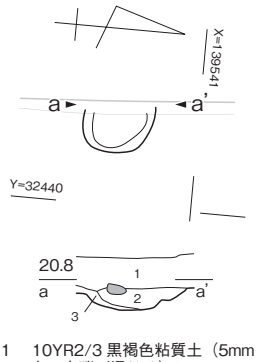
1 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土（5mm 大小礫が混じる）に 10YR4/4 褐色小礫シルトが小ブロックに少量混じる
2 10YR3/3 暗褐色粘質土（1cm 大の礫混じる）に 10YR4/4 褐色小礫混シルトの小ブロックが少量混じる
3 10YR3/4 暗褐色粘質土に 10YR4/3 にぶい黄褐色がブロック状に混じる ┐
4 10YR2/3 黒褐色粘質シルト（小礫が少量混じる） ┘ ＜柱痕＞
5 10YR3/4 暗褐色小礫混じり粘質土に 10YR4/6 褐色の小礫（1cm 大程度）混じる
6 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土に 10YR4/6 褐色の小礫がまだらに中量混じる ＜ベース＞
7 10YR4/4 褐色粘質土シルト ＜ベース＞

SP1015



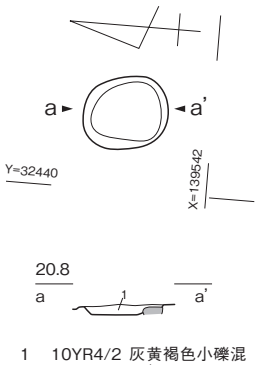
1 10YR3/4 暗褐色粘質土と 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土が半々に混じる ＜柱痕＞

SP1016



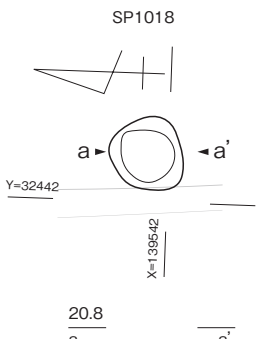
1 10YR2/3 黒褐色粘質土（5mm 大の小礫が混じる）に 10YR4/2 灰黄褐色粘質土が網目状に混じる
2 10YR4/2 灰黄褐色小礫混じりシルトに 10YR3/4 暗褐色粗砂混じり粘質土が筋状に混じる
3 10YR4/4 褐色小礫混じりシルト（10YR5/2 灰黄褐色がまだらに混じる）

SP1017



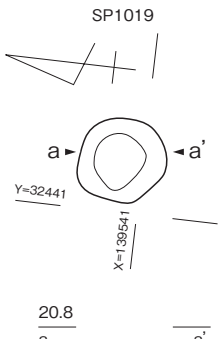
1 10YR4/2 灰黄褐色小礫混じりシルト（10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土の小ブロックが少量混じる）

SP1018



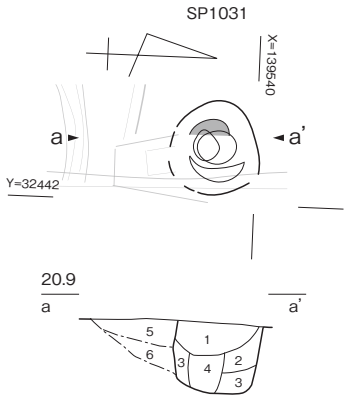
1 10YR4/2 灰黄褐色小礫混じり粘質土（10YR5/6 黄褐色粗砂混じりシルトが小ブロックで混じる）

SP1019



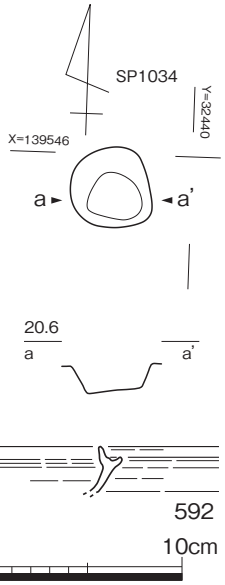
1 10YR4/2 灰黄褐色小礫混じりシルト（10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土の小ブロックが少量混じる）

SP1031



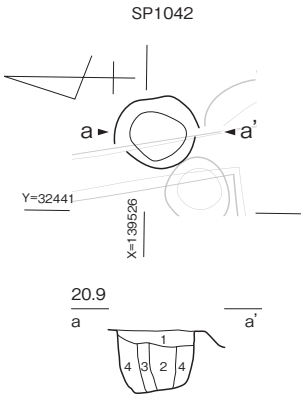
1 10YR3/4 暗褐色粗砂
2 10YR4/2 灰黄褐色粘質土シルト
3 10YR4/3 にぶい黄褐色（1cm 大の小礫混じる）
4 10YR3/2 黒褐色粘質シルト ＜柱痕＞
5 10YR2/2 黒褐色シルト（5mm 大の小礫混じる） ┐
6 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト（1cm 大の小礫混じる） ┘ ＜ベース＞

SP1034



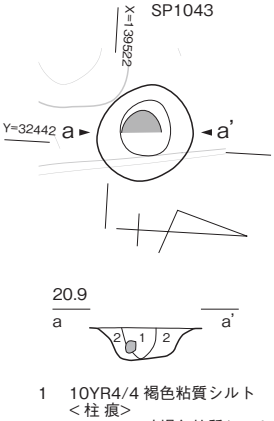
土器（1/4）

SP1042



1 10YR4/2 灰黄褐色シルト質粘土（ごく少量のベースブロックを含む
2 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト（ベースブロックを含む） ┐
3 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト（暗褐色粘土ブロックを含む） ┘ ＜柱痕＞
4 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト（礫 3 ～ 5cm 大を含む）

SP1043

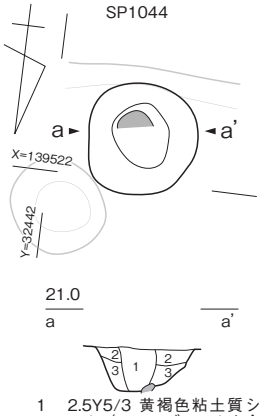


1 10YR4/4 褐色粘質シルト ＜柱痕＞
2 10YR3/4 暗褐色粘質シルト

柱痕
石
0
1m

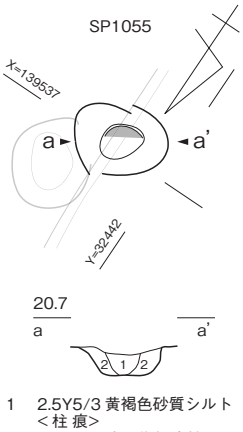
(1/40)

SP1044



1 2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルト（ベースブロックを含む）＜柱痕＞
2 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土質シルト（礫 1 ～ 2cm 大を含む）
3 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト（礫 1 ～ 3 cm 大を含む）

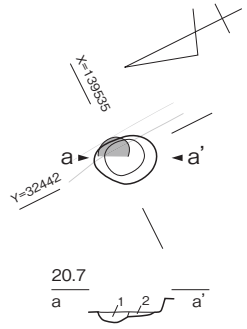
SP1055



1 2.5Y5/3 黄褐色砂質シルト ＜柱痕＞
2 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト（ごく少量の礫 1 ～ 3cm 大を含む）

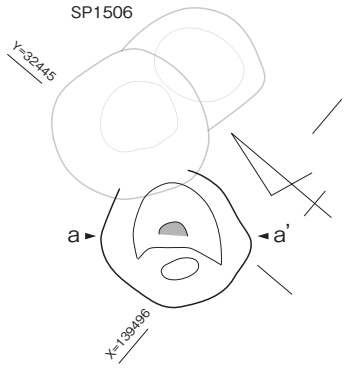
第 185 図　1 区ピット（古墳時代）平・断面図 1（1/40）、出土遺物 1（1/4）

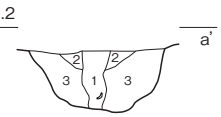
SP1059



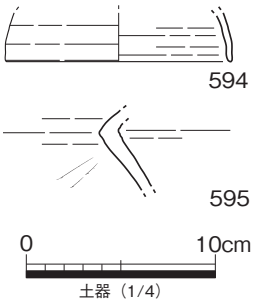
1　2.5Y3/1 黒褐色粘土質シルト
（1 ～ 2cm 大の礫を少量含む）
＜柱痕＞
2　2.5Y5/4 黄褐色粘土質シルト
（0.5 ～ 1cm 大の礫を少量含む）

SP1506

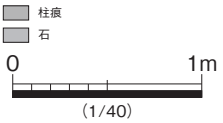




1　10YR6/4 にぶい黄橙色粘質シルト　＜柱痕＞
2　10YR5/4 にぶい黄褐色シルト質
（礫混）
3　10YR3/4 暗褐色粘質シルト質
（2 ～ 5cm 大の礫含む）

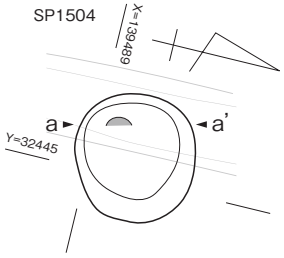


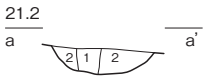
土器（1/4）



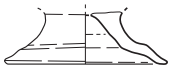
（1/40）

SP1504



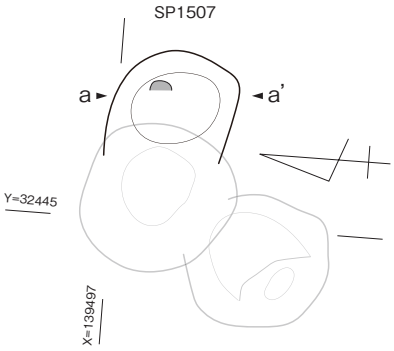


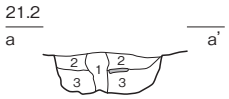
1　10YR6/3 にぶい黄橙色
シルト質　＜柱痕＞
2　10YR4/3 にぶい黄褐色
シルト質



593

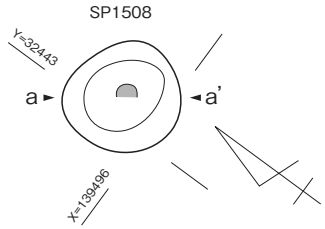
SP1507

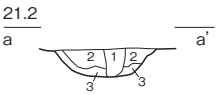




1　10YR5/4 にぶい黄褐色シルト質　＜柱痕＞
2　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質
（6cm 大程の礫含む）
3　10YR3/4 暗褐色粘質シルト
（小礫含む）

SP1508



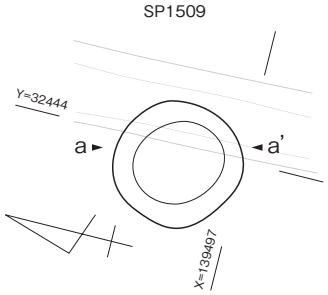


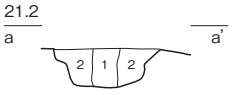
1　10YR6/3 にぶい黄橙色シルト質　＜柱痕＞
2　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質
（1 ～ 3cm 大の礫含む）
3　10YR5/4 にぶい黄褐色シルト質
（礫混）

596

鉄滓（1/4）

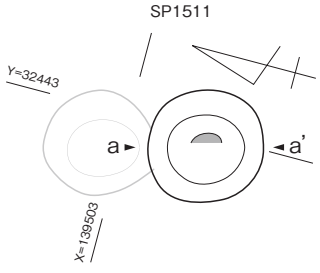
SP1509





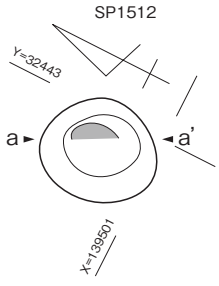
1　10YR4/4 褐色シルト質　（2 ～
7cm 大の礫含む）＜柱痕＞
2　10YR6/4 にぶい黄橙色シルト
（礫混）

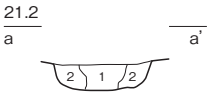
SP1511



1　10YR3/4 暗褐色粘質シルト
＜柱 痕＞
2　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質
シルト

SP1512

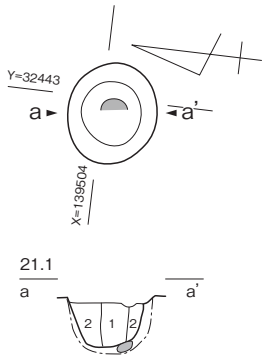




1　10YR5/4 にぶい黄褐色粘質
シルト＜柱痕＞
2　10YR6/4 にぶい黄橙色シル
ト（礫混）

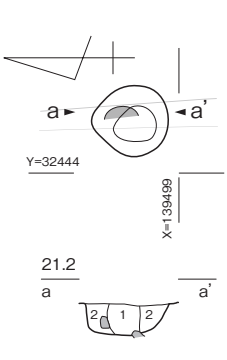
第 186 図　１区ピット（古墳時代）平・断面図２（1/40）、出土遺物２（1/4）

SP1514



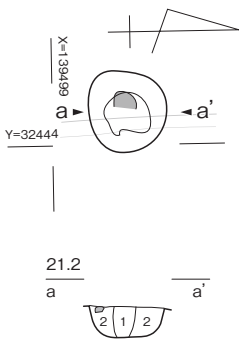
1　10YR3/3 暗褐色粘質色シルト
＜柱 痕＞
2　10YR3/4 暗褐色粘質シルト

SP1516



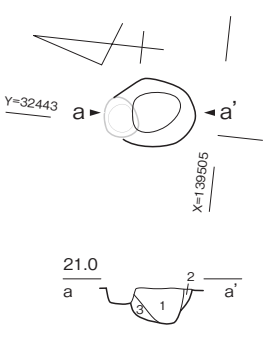
1　10YR4/2 灰黄褐色粘質土シルト（2 ～ 3cm 大の礫含む）＜柱痕＞
2　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土シルト

SP1517



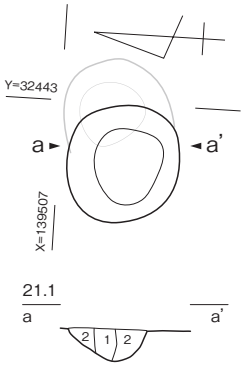
1　10YR4/4 褐色粘質シルト
＜柱 痕＞
2　10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト

SP1519



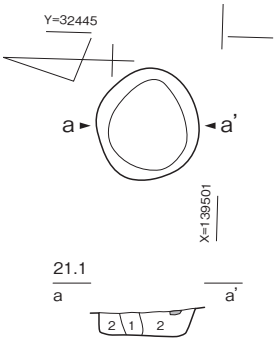
1　10YR3/4 暗褐色粘質シルト
＜抜取痕＞
2　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト
3　10YR4/4 褐色粘質シルト

SP1520

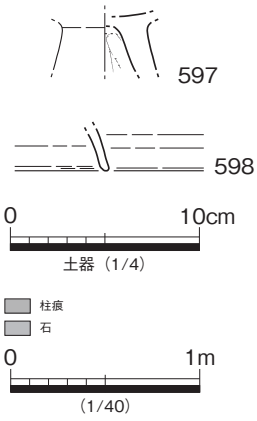


1　10YR4/4 褐色粘質土シルト　＜柱痕＞
2　10YR3/4 暗褐色粘質土シルト

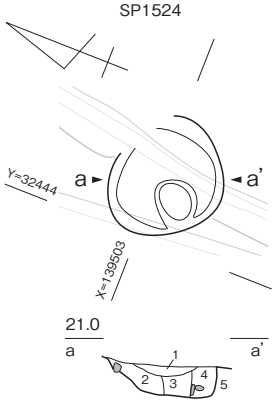
SP1523



1　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト　＜柱痕＞
2　10YR3/3 暗褐色粘質シルト

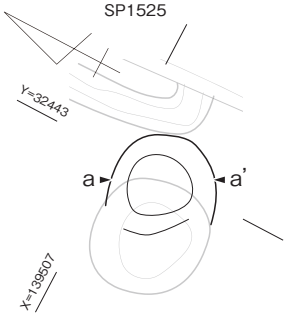


SP1524



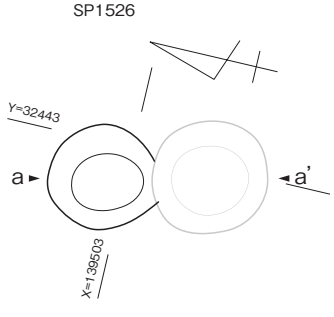
1　10YR3/3 暗褐色シルト
2　10YR3/4 暗褐色シルト
3　10YR2/2 黒褐色シルト
（5cm 大の礫含む）
＜柱痕＞
4　10YR3/2 黒褐色シルト
（4cm 大の礫含む）
5　10YR2/3 黒褐色シルト
<SH1502>

SP1525



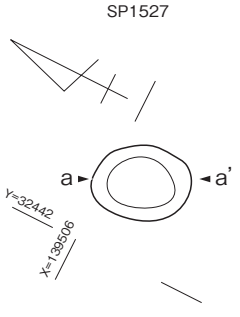
1　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
2　10YR3/3 暗褐色粘質シルト　＜柱痕＞
3　10YR3/4 暗褐色シルト

SP1526



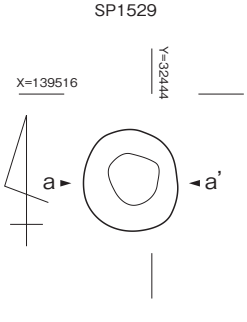
1　2.5Y8/6 黄色粘質シルト　＜柱痕＞
2　10YR5/3 にぶい黄褐色粘質シルト
3　10YR6/6 明黄褐色粘質シルト
4　10YR5/6 黄褐色粘質シルト　＜ベース＞

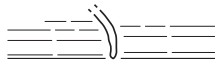
SP1527



1　10YR3/3 暗褐色粘質シルト　＜柱痕＞
2　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト
3　10YR6/6 明黄褐色粘質シルト　＜ベース＞

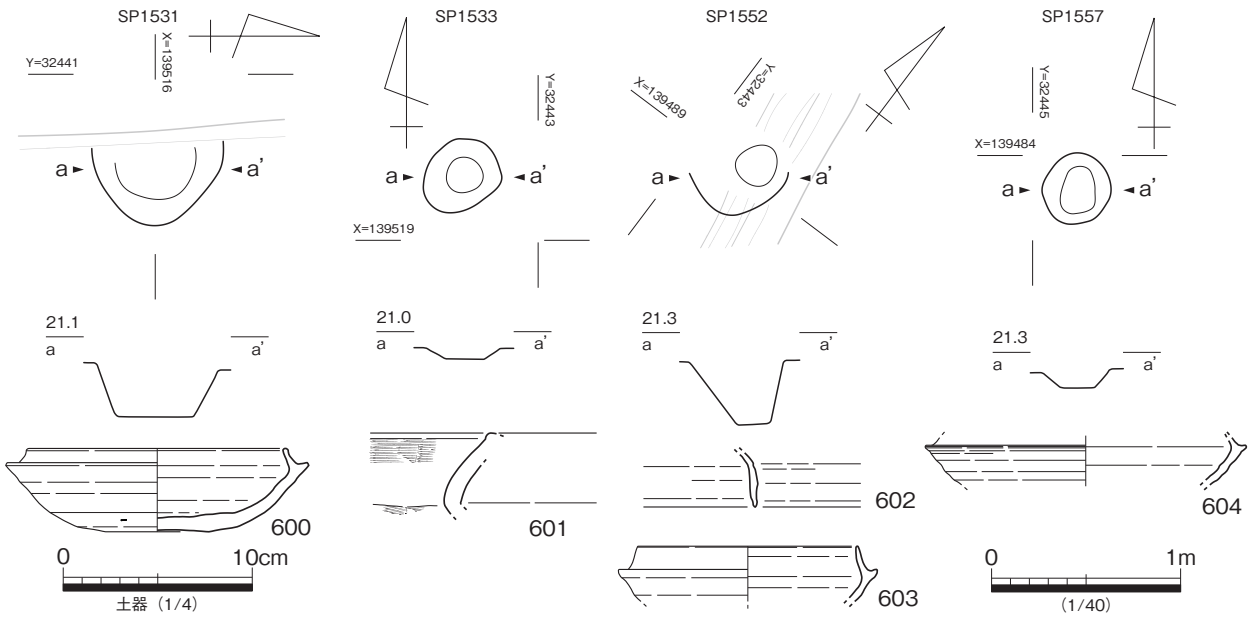
SP1529





599

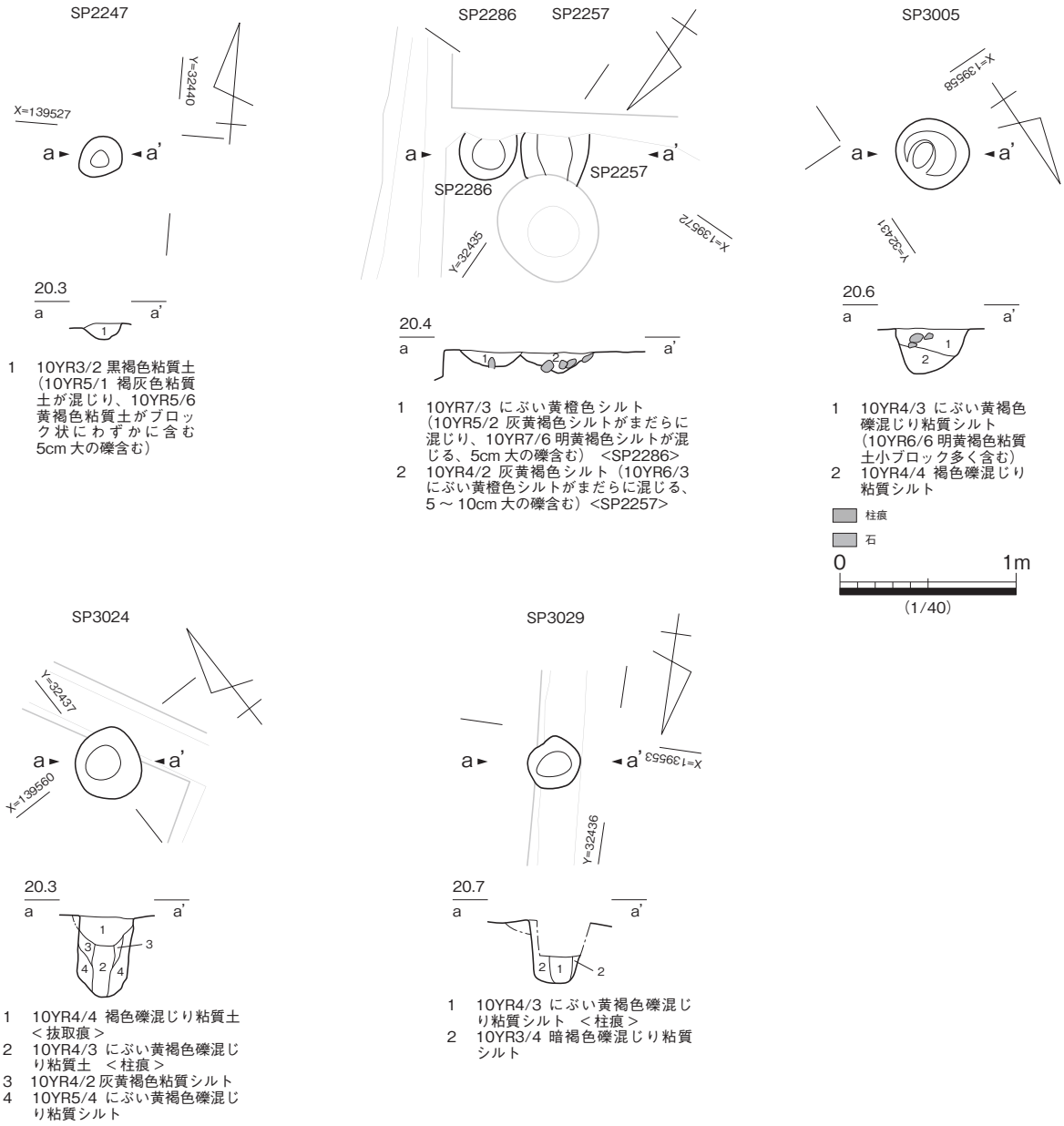
第 187 図　1 区ピット（古墳時代）平・断面図 3（1/40）、出土遺物 3（1/4）



第 188 図　１区ピット（古墳時代）平・断面図４（1/40）、出土遺物４（1/4）

第２表　報告ピット一覧（古墳時代）1

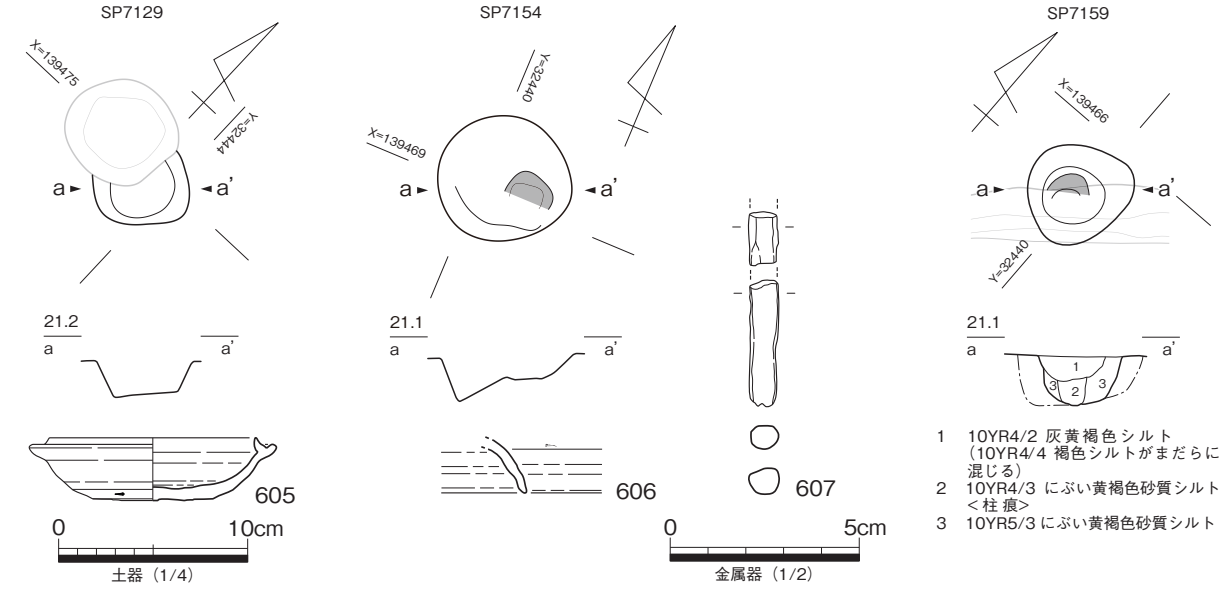
区名	遺構名 (SP 番号)	面	平面形	規模 (cm) (長軸×短軸)	深さ (cm)	掲載遺物 (報文番号)	その他の出土遺物
1 区	1013	−	−	44 × 21	29		土師器小片
1 区	1015	−	円形	36	8		須恵器・土師器小片
1 区	1016	−	−	37 × 24	11		
1 区	1017	−	楕円形	46 × 38	5		
1 区	1018	−	円形	40	8		
1 区	1019	−	円形	45	9		
1 区	1031	−	円形	49	37		土師器小片
1 区	1034	2	円形	43	15	592(須恵器杯身)	
1 区	1042	2	円形	45	34		土師器小片
1 区	1043	−	円形	51	17		土師器小片
1 区	1044	−	円形	59	24		土師器小片
1 区	1055	2	楕円形	50 × 40	16		
1 区	1059	2	楕円形	33 × 25	13		
1 区	1504	2	円形	69	14	593(須恵器台付壺)	須恵器甕片　土師器小片
1 区	1506	2	円形	79	35	594(須恵器杯蓋) 595（土師器甕）	土師器小片
1 区	1507	−	楕円形	64 × 61	22		土師器小片
1 区	1508	2	円形	63	15	596(鉄滓)	土師器小片
1 区	1509	−	円形	69	21		須恵器・土師器小片
1 区	1511	−	円形	61	18		須恵器甕片　土師器小片
1 区	1512	−	円形	62	16		土師器小片
1 区	1514	2	円形	54	27		土師器小片
1 区	1516	−	円形	41	17		須恵器・土師器小片
1 区	1517	−	円形	43	16		土師器小片
1 区	1519	−	楕円形	43 × 36	19		
1 区	1520	−	円形	62	17		
1 区	1523	2	円形	59	15	597(土師器高杯) 598(須恵器杯蓋)	土師器甕片
1 区	1524	2	円形	62	18		土師器小片
1 区	1525	−	−	57 × 55	24		
1 区	1526	−	円形	59	23		須恵器杯身または杯蓋　土師器小片
1 区	1527	−	楕円形	53 × 40	14		須恵器甕片　土師器小片
1 区	1529	2	円形	54	16	599(須恵器杯蓋)	須恵器甕片　土師器小片
1 区	1531	2	−	69 × 44	28	600(須恵器杯身)	須恵器・土師器小片
1 区	1533	2	円形	43	6	601(土師器甕)	須恵器甕片　土師器小片
1 区	1552	−	−	52 × 36	34	602(須恵器杯蓋) 603(須恵器杯身)	土師器小片
1 区	1557	2	円形	38	10	604(須恵器杯身)	

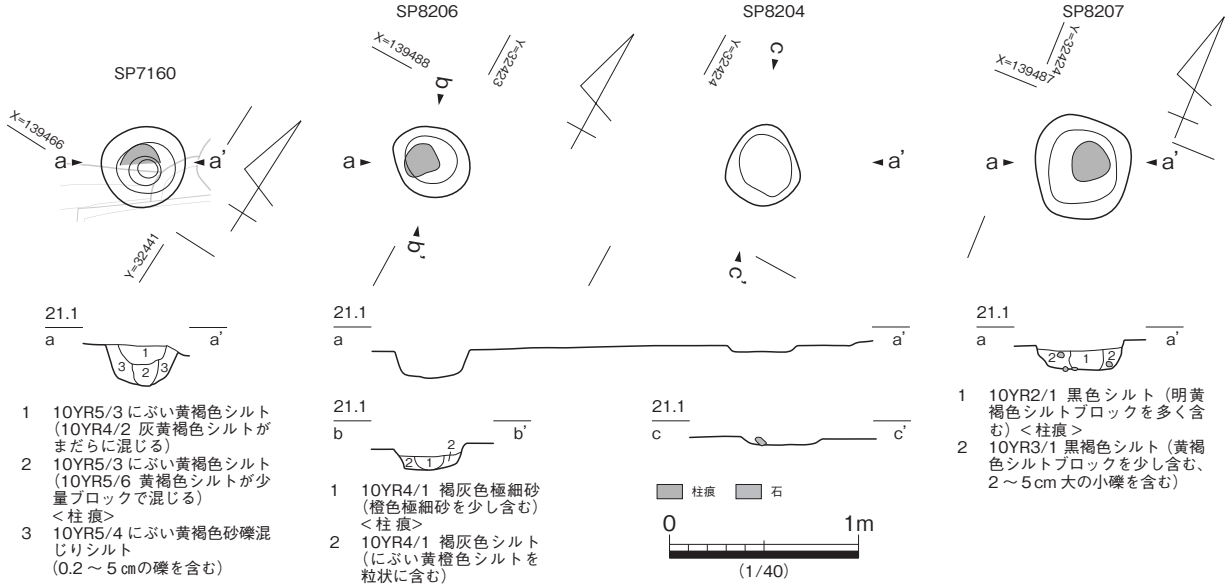


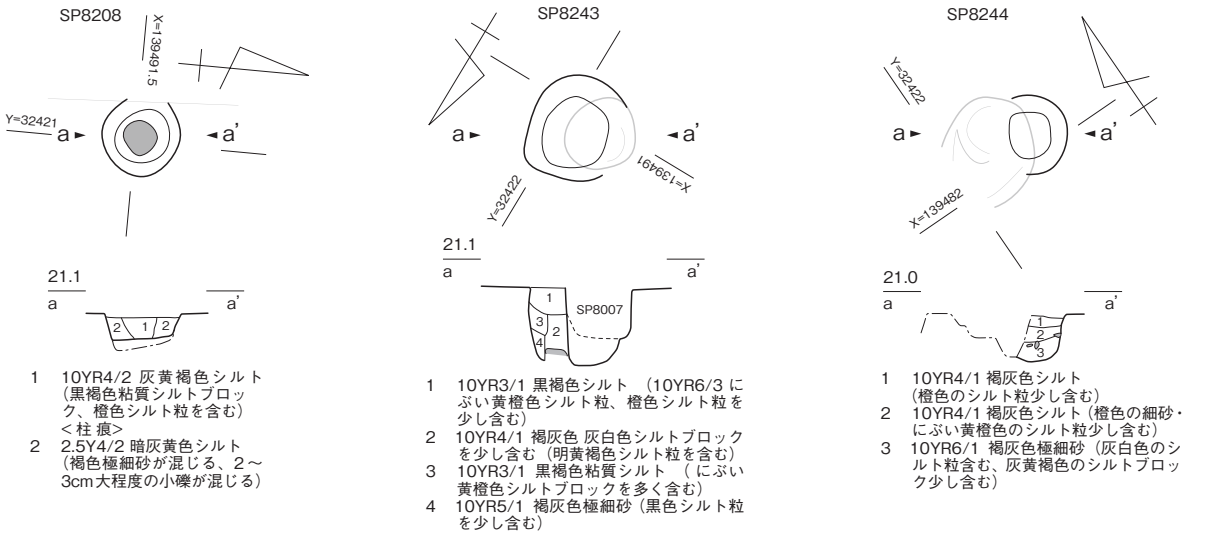
第 189 図　2 区・3 区ピット（古墳時代）平・断面図（1/40）

第 3 表　報告ピット一覧（古墳時代）2

区名	遺構名 (SP 番号)	面	平面形	規模 (cm) (長軸 × 短軸)	深さ (cm)	掲載遺物 (報文番号)	その他の出土遺物
2 区	2247	3	円形	26	9		
2 区	2257	3	−	38 × 30	11		
2 区	2286	3	円形	33	9		
3 区	3005	3	円形	41	25		須恵器杯身または杯蓋　土師器小片
3 区	3024	3	円形	41	46		須恵器・土師器小片
3 区	3029	3	円形	30	36		須恵器・土師器小片
7 区	7129	2	不整円形	50 × 38	20	605(須恵器杯身)	
7 区	7154	2	円形	68	24	606(須恵器杯蓋) 607(棒状鉄片)	
7 区	7159	2	円形	57	27		
7 区	7160	2	円形	44	21		

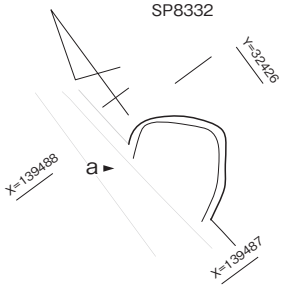






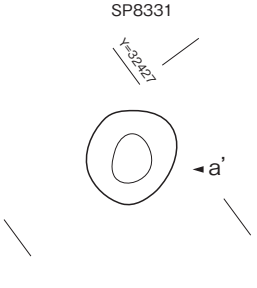
第 190 図　７区・８区ピット（古墳時代）平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4・1/2）

SP8332



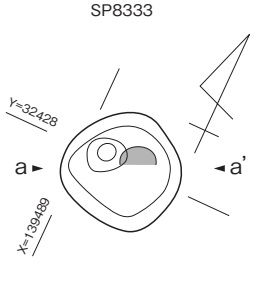
1 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂混じりシルト（3cm 大の礫多く含む）

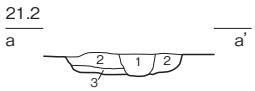
SP8331



1 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト（1 ～ 2cm 大の礫多く含む）

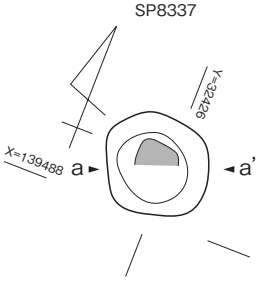
SP8333





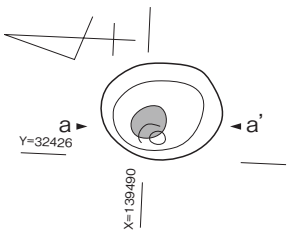
1 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト（0.2 ～ 3cm 大の礫含む）＜柱痕＞
2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト（10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルトがまだらに混じる）
3 10YR4/4 褐色砂質シルト（2cm 大の礫含む）

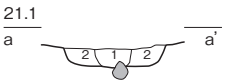
SP8337



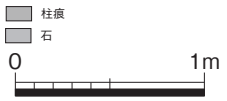
1 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂（0.5 ～ 3cm 大の礫多く含む）＜柱痕＞
2 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂（10YR4/4 褐色シルトが少量混じる、0.5 ～ 3cm 大の礫含む）

SP8338

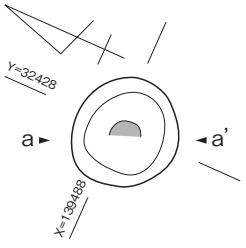


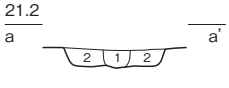


1 10YR4/4 褐色砂質土層（0.2 ～ 10cm 大の礫多く含む）＜柱痕＞
2 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂（0.2 ～ 5cm 大の礫多く含む）



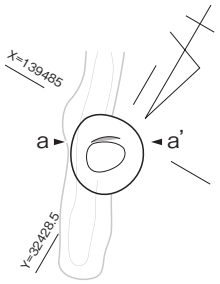
SP8339

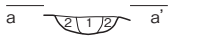




1 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト（10YR4/2 灰黄褐色シルトがまだらに混じる）＜柱痕＞
2 10YR4/3 にぶい黄褐色シルトと 10YR3/3 暗褐色シルトがまだらに混じる（0.2 ～ 3cm 大の礫含む）

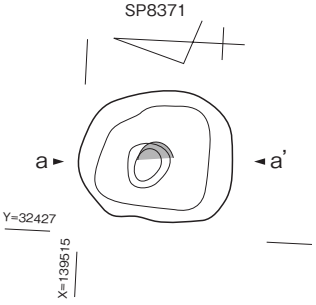
SP8341





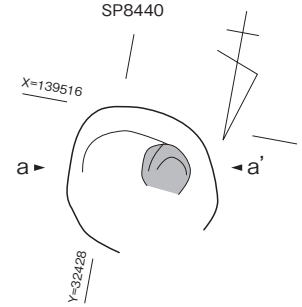
1 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト層（10YR5/4 にぶい黄褐色シルトが少量まだらに混じる）＜柱痕＞
2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルトと 10YR3/3 暗褐色シルト（1 ～ 3cm 大の礫含む）

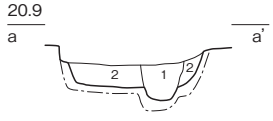
SP8371



1 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト（10YR6/2 灰黄褐色シルトが少量まだらに混じる、1 ～ 3cm 大の礫含む）＜柱痕＞
2 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト（10YR6/2 灰黄褐色シルトがまだらに混じる。2cm 大程度の礫含む）

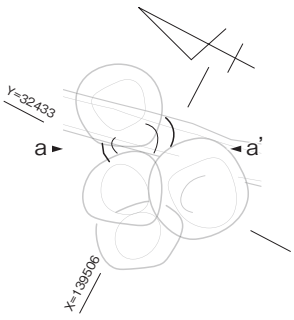
SP8440

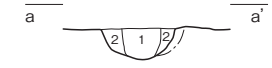




1 10YR5/3 にぶい黄褐シルト（10YR7/2 にぶい黄橙色シルトと 10YR4/6 褐色シルトが少量まだらに混じる）＜柱痕＞
2 10YR4/4 褐色シルト（10YR6/3 にぶい黄橙色シルトがまだらに混じる、1 ～ 3cm 大の礫含む）

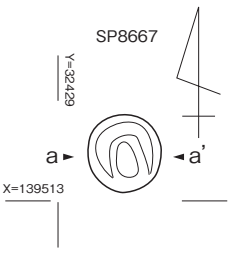
SP8654

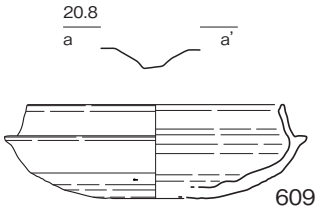




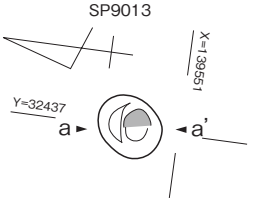
1 10YR3/2 黒褐色粗砂層（10YR4/3 にぶい黄褐色シルトがまだらに混じる、1 ～ 10cm 大の礫多く含む）＜柱痕＞
2 10YR4/2 灰黄褐色粗砂混じりシルト（1 ～ 10cm 大の礫含む）

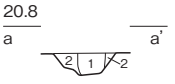
SP8667





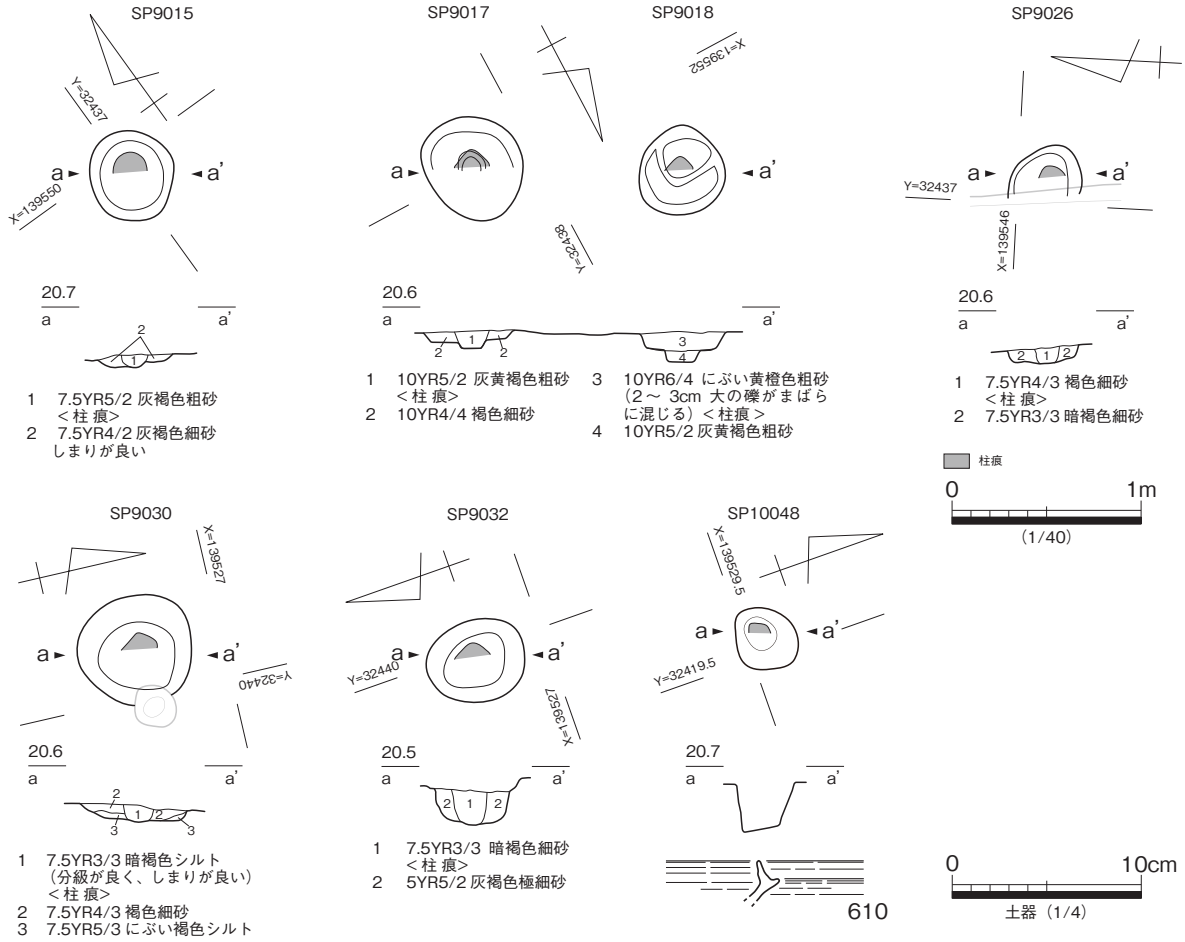
SP9013





1 10RY6/6 明黄褐色細砂＜柱痕＞
2 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂

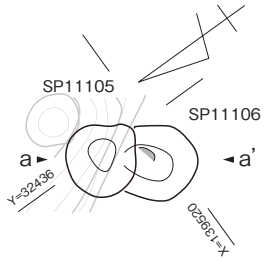
第 191 図　8 区ピット（古墳時代）平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）
9 区ピット（古墳時代）平・断面図 1（1/40）

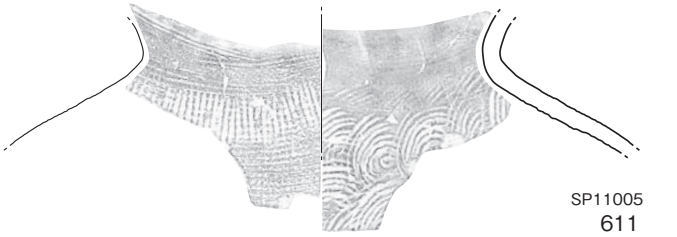


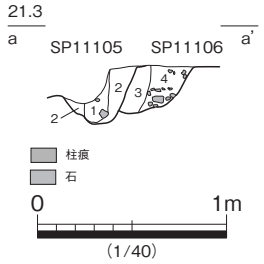
第 192 図　９区ピット（古墳時代）平・断面図２（1/40）
10 区ピット（古墳時代）平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

第４表　報告ピット一覧（古墳時代）３

区名	遺構名 (SP 番号)	面	平面形	規模 (cm) (長軸×短軸)	深さ (cm)	掲載遺物 (報文番号)	その他の出土遺物
8 区	8204	2	円形	43	5		
8 区	8206	2	円形	43	15		
8 区	8207	2	隅丸方形	53 × 51	15		
8 区	8208	2	円形	41	15		
8 区	8243	2	不整円形	55 × 47	41		
8 区	8244	2	円形	42	25		
8 区	8331	2	円形	51	11		
8 区	8332	2	隅丸方形	53 × 52	6		
8 区	8333	2	不整円形	64 × 63	11		
8 区	8337	2	不整円形	55 × 54	13		
8 区	8338	2	楕円形	64 × 52	12		
8 区	8339	2	円形	58	11		
8 区	8341	2	円形	42	10		
8 区	8371	2	隅丸方形	81 × 70	39	608(須恵器杯身)	
8 区	8440	2	不整円形	81 × 77	29		
8 区	8654	2	−	39 × 16	16		
8 区	8667	2	円形	41	11	609(須恵器杯身)	
9 区	9013	2	円形	36	12		
9 区	9015	2	円形	49	7		
9 区	9017	2	円形	57	9		
9 区	9018	2	円形	47	16		
9 区	9026	2	−	38 × 28	10		
9 区	9030	2	円形	60	10		
9 区	9032	2	円形	52	25		
10 区	10048	2	円形	36	26	610(須恵器杯身)	

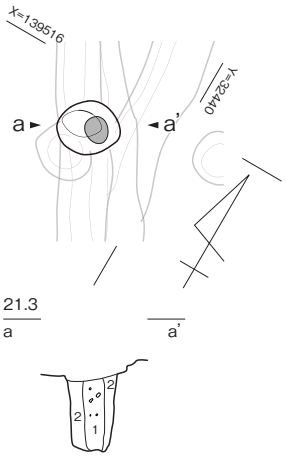






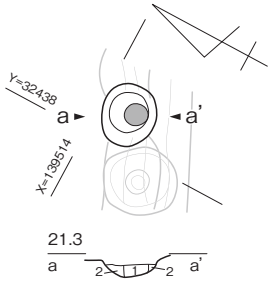
SP11105
1 10YR4/2 灰黄褐色シルト～極細砂（黄色シルトブロックを含む）
2 10YR5/2 灰黄褐色シルト混じり極細砂～細砂（0.5 ～ 1.0cm 大の礫を含む、黄褐色シルトブロックを含む）
SP11106
3 10YR4/1 褐灰色シルト～細砂（0.5 ～ 1.0cm 大の礫を含む、黄褐色シルトブロックを少量含む）
4 10YR5/1 褐灰色シルト混じり極細砂～細砂（1.0 ～ 5.0cm 大の礫を多量に含む、白色中粒砂粒をまばらに含む）

SP11107



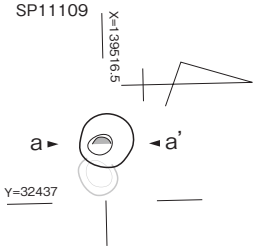
1 10YR8/3 浅黄橙色シルト（黒褐色のシルト粒含む、 2cm 大程の炭化物、土器片多く含む） ＜柱痕＞
2 10YR7/3 にぶい黄橙色シルト（1cm 大程の礫、灰黄褐色のシルト粒含む）

SP11108



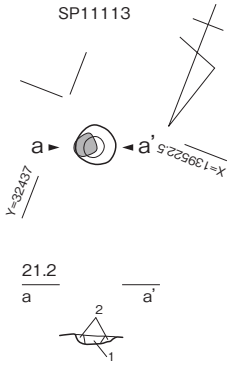
1 10YR5/1 褐灰色シルト～極細砂（1.0 ～ 3.0cm 大の礫を少量含む）＜柱痕＞
2 10YR6/2 灰黄褐色シルト混じり細砂（0.5 ～ 3.0cm 大の礫を含む、黄褐色シルトブロック含む）

SP11109



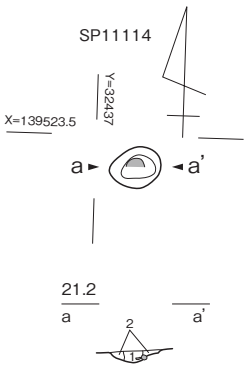
1 10YR4/1 褐灰色シルト～極細砂（0.5 ～ 1.0cm 大の礫を含む、黄褐色シルトブロックを多く含む）＜柱痕＞
2 10YR5/2 灰黄褐色シルト混じり細砂（0.3 ～ 0.5cm 大の礫を少量含む、黄褐色中粒砂をわずかに含む）

SP11113



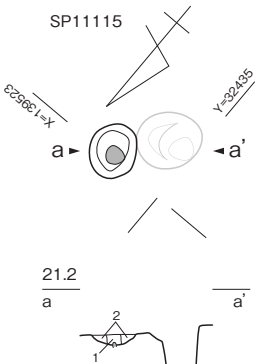
1 10YR5/1 褐灰色シルト混じり細砂（炭化物細片をわずかに含む）＜柱痕＞
2 10YR5/2 灰黄褐色シルト混じり細砂（黄褐色シルトブロックを含む、白色中粒砂をまばらに含む）

SP11114



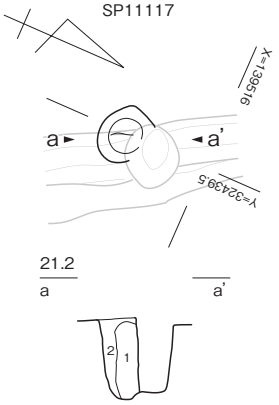
1 10YR5/1 褐灰色シルト～極細砂（黄褐色シルトブロックを含む、黒色シルトブロックを少量含む）＜柱 痕＞
2 10YR5/2 灰黄褐色シルト混じり細砂（0.5 ～ 1.0cm 大の礫を含む、白色中粒砂をわずかに含む）

SP11115



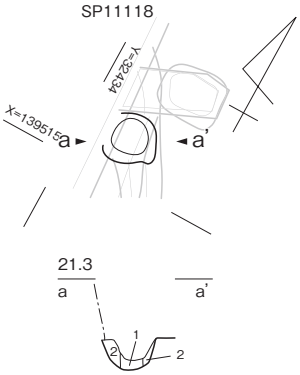
1 10YR5/2 灰黄褐色シルト～細砂（黄褐色シルトブロックを含む）＜柱痕＞
2 10YR4/1 褐灰色シルト混じり細砂（0.5 ～ 1.0cm 大の礫を含む、白色中粒砂をまばらに含む）

SP11117



1 10YR5/1 褐灰色シルト～極細砂（炭化物細片をわずかに含む、白色中粒砂～粗砂を含む）＜柱痕＞
2 10YR5/2 灰黄褐色シルト混じり細砂（黄褐色シルトブロックを多く含む、0.5 ～ 1.0cm 大の礫を含む）

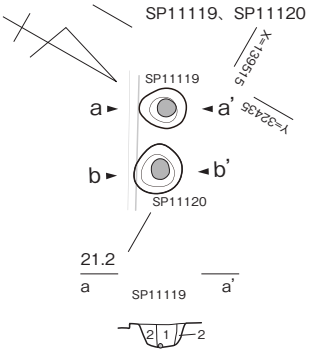
SP11118



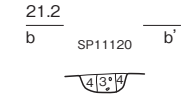
1 10YR4/2 灰黄褐色シルト～細砂（炭化物細片をわずかに含む）＜柱痕＞
2 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト混じり細砂（黒褐色のシルトブロックを少量含む）

第 193 図　11 区ピット（古墳時代）平・断面図 1（1/40）、出土遺物 1 （1/4）

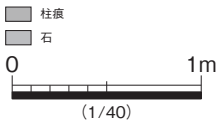
SP11119、SP11120



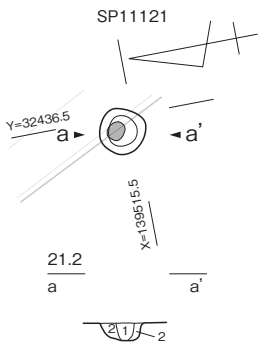
1　10YR5/1 褐灰色シルト～極細砂（灰色シルトブロックを含む）＜柱痕＞
2　10YR5/2 灰黄褐色シルト混じり細砂（黒色シルトブロックを含む、1.0 ～ 1.5cm 大の礫を少量含む）



3　10YR5/2 灰黄褐色シルト混じり細砂（1.0 ～ 1.5cm 大の礫を少量含む）＜柱痕＞
4　10YR6/2 灰黄褐色シルト混じり細砂（0.5 ～ 1.0cm 大の礫を含む、黒色中粒砂粒をまばらに含む）

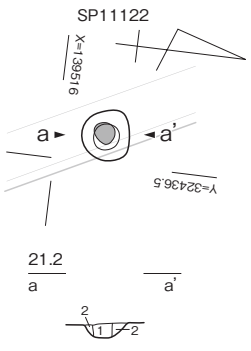


SP11121



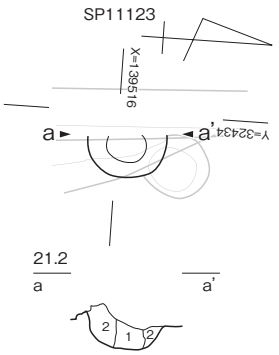
1　10YR5/1 褐灰色シルト～細砂（0.5 ～ 1.0cm 大の礫を少量含む、黄褐色シルトブロックを少量含む）＜柱痕＞
2　10YR5/2 灰黄褐色シルト混じり細砂（1.0 ～ 3.0cm 大の礫を含む、灰白色中粒砂粒をまばらに含む）

SP11122



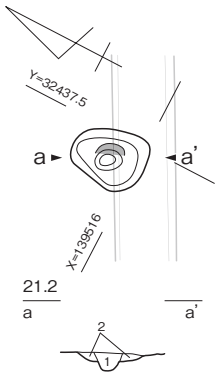
1　10YR5/2 灰黄褐色シルト～極細砂（灰色シルトブロックを含む）＜柱痕＞
2　10YR6/2 灰黄褐色シルト混じり細砂（0.5 ～ 1.0cm 大の礫を含む）

SP11123



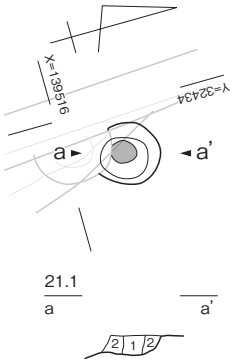
1　10YR5/3 にぶい黄褐色細砂（0.3 ～ 0.5cm 大の礫を少量含む）＜柱痕＞
2　10YR5/2 灰黄褐色シルト混じり細砂（0.5 ～ 1.0cm 大の礫を含む）

SP11124



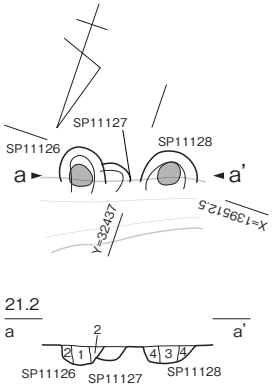
1　10YR6/2 灰黄褐色シルト～極細砂（1.0 ～ 3.0cm 大の礫を含む）＜柱痕＞
2　10YR5/2 灰黄褐色シルト混じり細砂（0.3 ～ 0.5cm 大の礫を少量含む）

SP11125



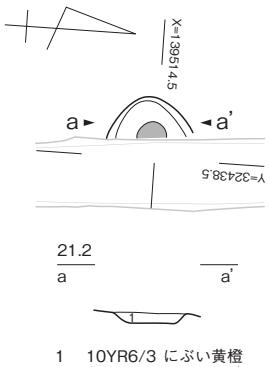
1　10YR6/3 にぶい黄橙色シルト混じり細砂～中粒 砂＜柱 痕＞
2　10YR7/2 にぶい黄橙色シルト混じり細砂

SP11126、SP11127、SP11128



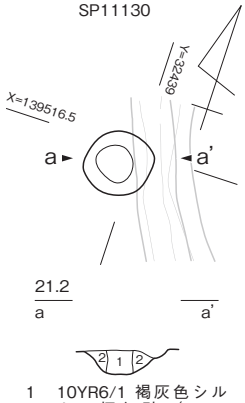
1　10YR5/1 褐灰色シルト～細砂（白色中粒砂をわずかに含む）＜柱 痕＞
2　10YR5/2 灰黄褐色シルト混じり細砂（0.3 ～ 0.5cm 大の礫を少量含む）
3　10YR6/2 灰黄褐色シルト～細砂（0.3 ～ 0.5cm 大の礫をわずかに含む）＜柱痕＞
4　10YR6/1 褐灰色シルト～細砂

SP11129



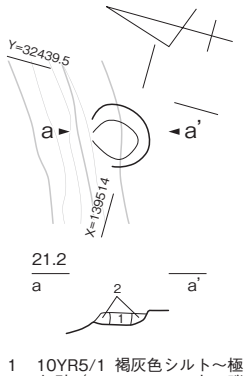
1　10YR6/3 にぶい黄橙色シルト混じり細砂（0.5 ～ 1.0cm 大の礫を含む、白色中粒砂粒をまばらに含む）

SP11130



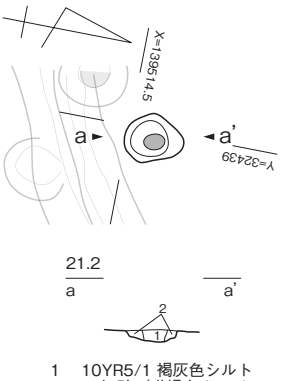
1　10YR6/1 褐灰色シルト～極細砂（0.5 ～ 1.0cm 大の礫を少量含む）＜柱痕＞
2　10YR6/2 灰黄褐色シルト混じり細砂（10 ～ 3.0cm 大の礫を含む、白色中粒砂をわずかに含む）

SP11131



1　10YR5/1 褐灰色シルト～極細砂（0.5 ～ 1.0cm 大の礫をまばらに含む）＜柱痕＞
2　10YR6/2 灰黄褐色シルト混じり細砂（0.5 ～ 1.0cm 大の礫を少量含む、黄褐色シルトブロックをまばらに含む）

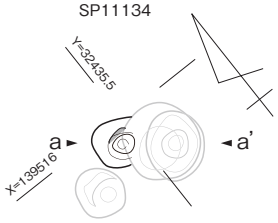
SP11132

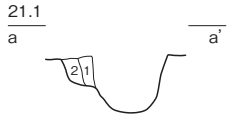


1　10YR5/1 褐灰色シルト～細砂（黄褐色シルトブロックを少量含む）＜柱 痕＞
2　10YR6/1 褐灰色シルト混 じ り 細 砂（0.5 ～ 1.0cm 大の礫を少量含む、黄褐色シルトブロックを多量に含む）

第 194 図　11 区ピット（古墳時代）平・断面図２（1/40）

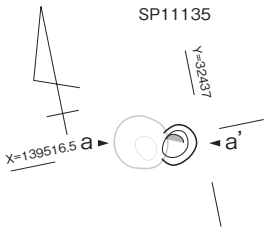
SP11134





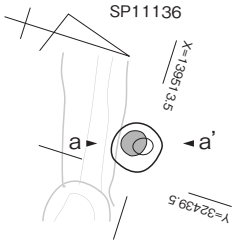
1 10YR4/2 灰黄褐色シルト～細砂（0.5 ～ 1.0cm 大の礫を含む、黄褐色シルトブロックを少量含む）
2 2.5Y6/1 黄灰色シルト混じり細砂（0.5 ～ 3.0cm 大の礫を含む）

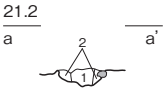
SP11135



1 10YR4/1 褐灰色シルト～極細砂（0.5 ～ 1.0cm 大の礫を少量含む、白色中粒砂～粗砂をわずかに含む）
2 2.5Y5/1 黄灰色シルト混じり細砂（黄褐色シルトブロックをわずかに含む）

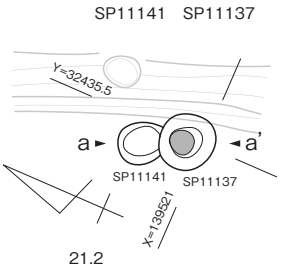
SP11136

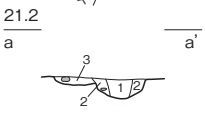




1 10YR4/2 灰黄褐色シルト～細砂（1.0 ～ 3.0cm 大の礫を含む、白色中粒砂をまばらに含む）＜柱痕＞
2 10YR5/1 褐灰色シルト混じり細砂（0.5 ～ 1.0cm 大の礫を含む）

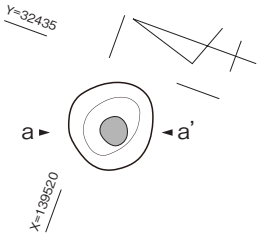
SP11141　SP11137



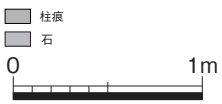


1 10YR5/2 灰黄褐色シルト～細砂(0.5 ～ 3.0cm 大の礫を含む。黒色シルトブロックを少量含む）<SP11137 柱痕 >
2 10YR6/2 灰黄褐色シルト混じり細砂（1.0 ～ 3.0cm の礫を含む、白色中粒砂粒を少量含む）<SP11137>
3 10YR5/2 灰黄褐色シルト混じり細砂（1.0 ～ 3.0cm 大の礫を含む）<SP11141>

SP11139

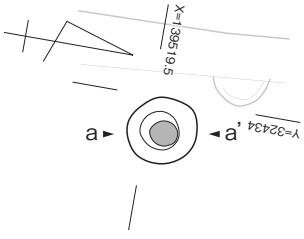


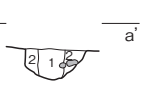
1 10YR4/2 灰黄褐色シルト～極細砂（灰白色シルトブロックを含む）＜柱痕＞
2 10YR5/1 褐灰色シルト混じり細砂（1.0 ～ 3.0cm 大の礫を少量含む）



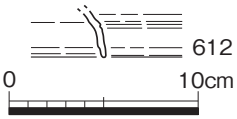
（1/40）

SP11140



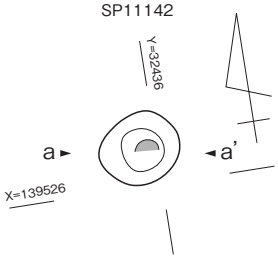


1 10YR4/2 灰黄褐色シルト～極細砂（0.5 ～ 1.0cm 大の礫を少量含む）＜柱痕＞
2 10YR5/2 灰黄褐色シルト～細砂(0.5～1.0cm大の礫を含む。灰色シルトブロックを含む）



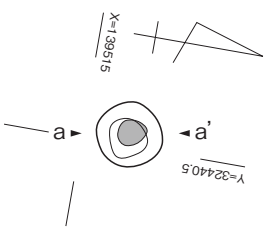
土器（1/4）

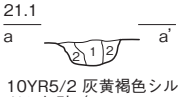
SP11142



1 10YR4/2 灰黄褐色シルト混じり極細砂～細砂（1.0 ～ 3.0cm の礫を含む、白色中粒砂を少量含む）＜柱痕＞
2 10YR5/2 灰黄褐色シルト混じり細砂（0.5 ～ 3.0cm 大の礫を含む、黒褐色シルトブロックを多く含む）

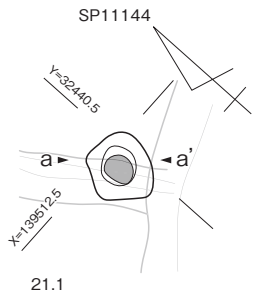
SP11143





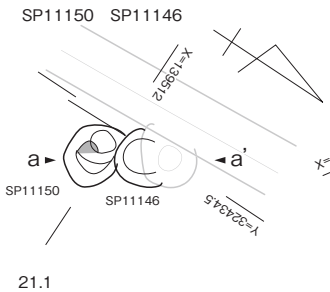
1 10YR5/2 灰黄褐色シルト混じり細砂（0.5 ～ 1.0cm 大の礫を少量含む）＜柱痕＞
2 10YR6/2 灰黄褐色シルト混じり細砂（1.0 ～ 3.0cm 大の礫を含む、黄褐色シルトブロックを含む）

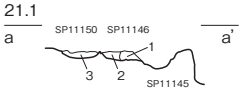
SP11144



1 10YR4/2 灰黄褐色シルト混じり細砂（0.5 ～ 1.0cm 大の礫を含む）＜柱痕＞
2 10YR5/2 灰黄褐色シルト混じり細砂（0.5 ～ 1.5cm 大の礫を含む、黄褐色シルトブロックをまばらに含む）

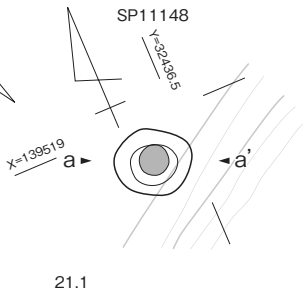
SP11150　SP11146





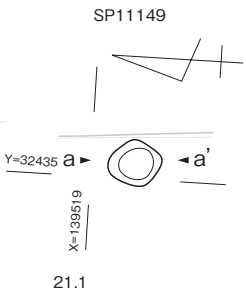
1 10YR6/2 灰黄褐色シルト混じり細砂(炭化物細片を少量含む)
2 10YR5/2 灰黄褐色シルト混じり細砂（0.5 ～ 1.0cm 大の礫を少量含む、黄褐色シルトブロックをまばらに含む）
3 10YR5/2 灰黄褐色シルト～細砂（1.0 ～ 3.0cm 大の礫を少量含む、黒褐色シルトブロックを含む）

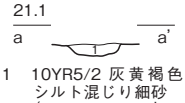
SP11148



1 10YR4/2 灰黄褐色シルト～極細砂（1.0 ～ 3.0cm 大の礫を含む、黄褐色シルトブロックを含む）＜柱痕＞
2 10YR5/2 灰黄褐色シルト混じり細砂（1.0 ～ 3.0cm 大の礫を含む、黄褐色シルトブロックを多く含む）

SP11149

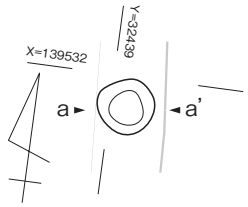


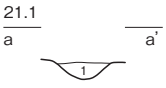


1 10YR5/2 灰黄褐色シルト混じり細砂（0.5 ～ 1.5cm 大の礫を含む、黄褐色シルトブロックを多量に含む）

第 195 図　11 区ピット（古墳時代）平・断面図 3（1/40）、出土遺物 2（1/4）

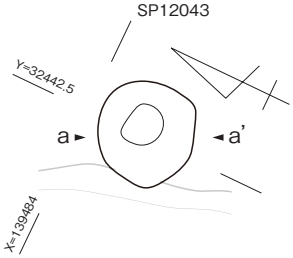
SP11151

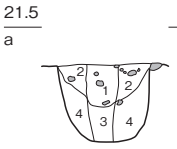




1　10YR4/2 灰黄褐色シルト～極細砂（0.5 ～ 1.0cm 大の礫を少量含む）

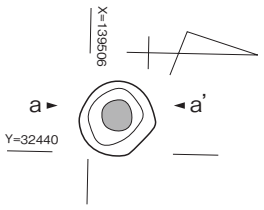
SP12043





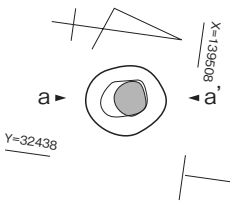
1　10YR8/1 灰白色シルト（黄橙色シルトブロックを含む）＜柱痕＞
2　10YR6/4 にぶい黄橙色シルト（褐灰色シルトブロックを含む、1～ 2cm 大の小礫含む）
3　10YR5/1 褐灰色シルト～極細砂（0.1 ～ 0.5cm 大の礫を含む）＜柱痕＞
4　10YR5/2 灰黄褐色シルト混じり細砂（0.1 ～ 1.0cm 大の礫を多く含む）

SP12049



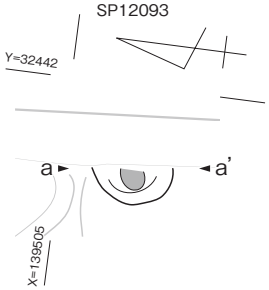
1　10YR4/2 灰黄褐色シルト（1.0 ～ 5.0cm 大の礫をわずかに含む、白色中粒砂粒をわずかに含む）＜柱痕＞
2　10YR4/1 褐灰色シルト混じり細砂（0.3 ～ 0.5cm 大の礫を含む）

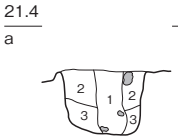
SP12092



1　10YR7/2 にぶい黄橙色シルト～極細砂（0.5 ～ 1.0cm 大の礫を含む）＜柱痕＞
2　10YR6/2 灰黄褐色シルト混じり細砂（1.0 ～ 3.0cm 大の礫を含む、黒褐色シルトブロックを含む）

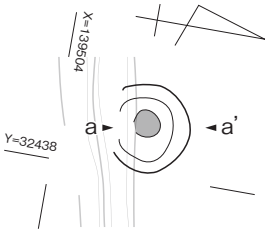
SP12093

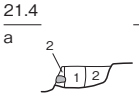




1　10YR7/4 にぶい黄橙色シルト（1cm 大の小礫少し含む）＜柱痕＞
2　10YR5/3 にぶい黄褐色シルト
3　10YR4/2 灰黄褐色シルト（灰白色のシルトブロック含む）

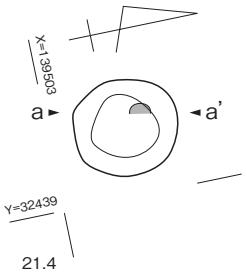
SP12094





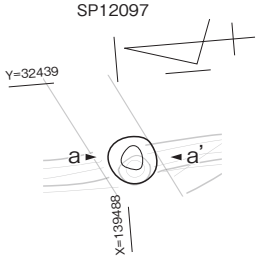
1　10YR6/2 灰黄褐色シルト～極細砂（0.5 ～ 1.0cm 大の礫を小礫を含む、黒褐色シルトブロックを少量含む）＜柱痕＞
2　10YR5/2 灰黄褐色シルト混じり細砂（0.5 ～ 2.0cm 大の礫を少量含む、黒褐色シルトブロックを含む）

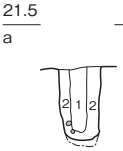
SP12096



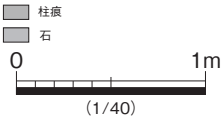
1　10YR6/2 灰黄褐色シルト～極細砂（白色中粒砂を含む）＜柱痕＞
2　10YR5/2 灰黄褐色シルト混じり細砂（1.0 ～ 5.0cm 大の礫を多く含む）

SP12097

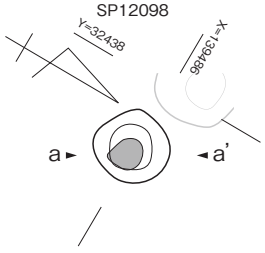


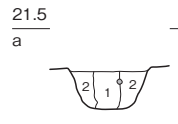


1　10YR8/2 灰白色シルト（黄褐色シルト粒含む）＜柱痕＞
2　10YR8/3 浅黄橙色シルト（褐灰色のシルトブロック含む）



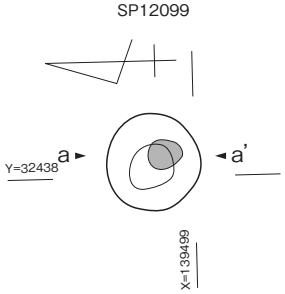
SP12098





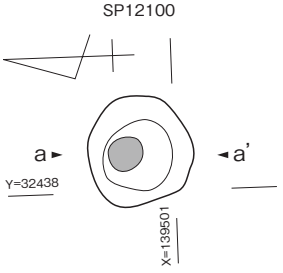
1　10YR7/2 にぶい黄橙色シルト（橙色のシルト粒含む）＜柱痕＞
2　10YR5/2 灰黄褐色シルト（1cm 大程の小礫を少し含む、褐灰色のシルトブロック少し含む）

SP12099



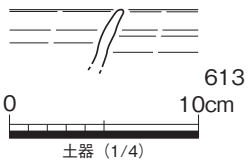
1　10YR6/2 灰黄褐色シルト～極細砂（0.3 ～ 0.5cm 大の礫を少し含む、白色中粒砂を少し含む）＜柱痕＞
2　10YR6/2 灰黄褐色シルト混じり細砂（1.0 ～ 5.0cm 大の礫をまばらに含む、炭化物細片を少し含む）

SP12100



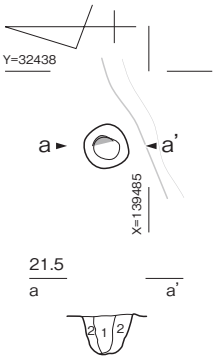
1　10YR7/2 にぶい黄橙色シルト～極細砂（0.3 ～ 1.0cm 大の礫を含む）＜柱痕＞
2　10YR6/2 灰黄褐色シルト～細砂（1.0 ～ 3.0cm 大の礫を含む、炭化物細片を含む）

包含層 1b 層由来のシルト含む



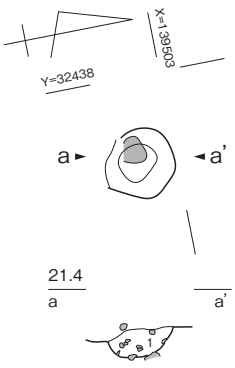
第 196 図　11 区ピット（古墳時代）平・断面図 4(1/40)
12 区ピット（古墳時代）平・断面図 1(1/40)、出土遺物 1（1/4）

SP12101



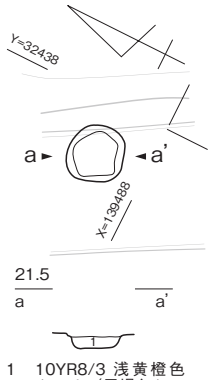
1 10YR6/3 にぶい黄橙色粘質シルト（1cm 大程の小礫少し含む）＜柱痕＞
2 10YR6/4 にぶい黄橙色シルト（褐灰色のシルトを含む）

SP12102



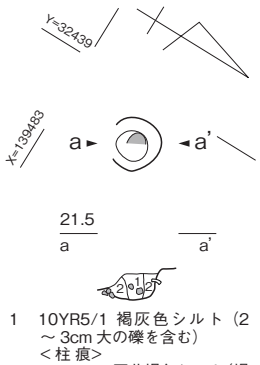
1 10YR4/1 褐灰色シルト混じり細砂（3.0 ～ 5.0cm 大の礫を多量に含む）

SP12103

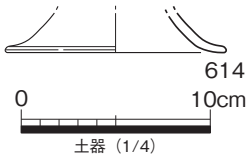


1 10YR8/3 浅黄橙色シルト（黒褐色シルトブロックを含む、1cm 大程の小礫を含む）

SP12104

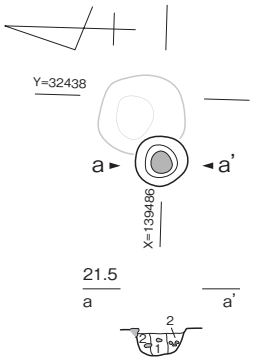


1 10YR5/1 褐灰色シルト（2 ～ 3cm 大の礫を含む）＜柱痕＞
2 10YR5/2 灰黄褐色シルト（褐灰色のシルトブロック含む）



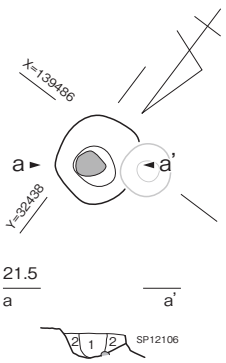
土器（1/4）

SP12106



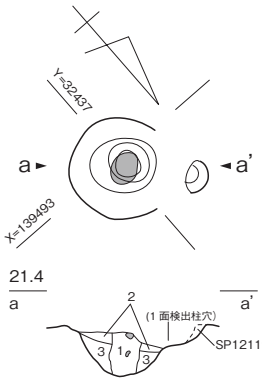
1 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト（1 ～ 2cm 大の礫を少し含む）＜柱痕＞
2 10YR4/1 褐灰色シルト（黄褐色シルトブロックを含む）

SP12107



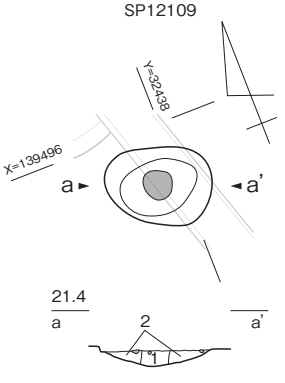
1 7.5YR4/4 褐色シルト（黒褐色シルト粒含む、1 ～ 2cm 大の礫含む）＜柱痕＞
2 7.5YR3/3 暗褐色シルト（1cm 大の小礫含む）

SP12108　SP12119



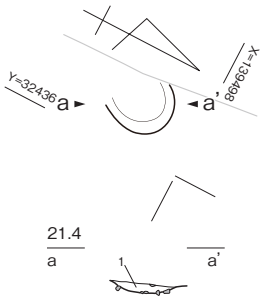
1 10YR7/3 にぶい黄橙色シルト（1 ～ 2cm 大の小礫を含む）＜柱痕＞
2 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（黄橙色シルトブロックを含む）
3 10YR4/1 褐灰色シルト（1cm 大程の小礫含む）

SP12109



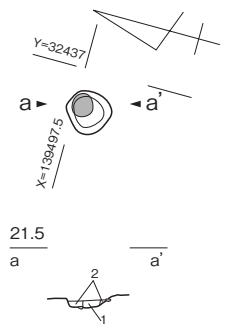
1 10YR7/2 にぶい黄橙色シルト（1.0 ～ 3.0cm 大の礫を含む、白色シルト（被熱あり）ブロックを少量含む）＜柱痕＞
2 10YR6/1 褐灰色シルト混じり細砂（1.0 ～ 3.0cm 大の礫を含む、炭化物細片をわずかに含む）

SP12110



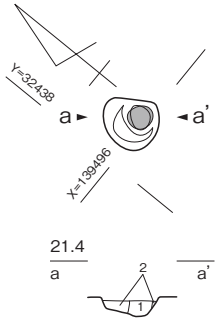
1 10YR8/2 灰白色シルト（焼土ブロックを含む、黒褐色シルトブロックを少量含む）

SP12111



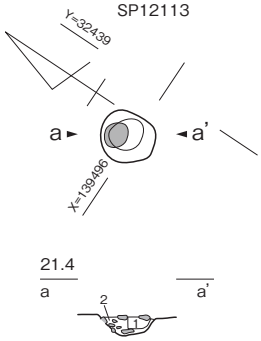
1 10YR7/2 にぶい黄橙色シルト混じり細砂（0.5 ～ 1.0cm 大の礫を含む、白色中粒砂を含む）
2 10YR6/2 灰黄褐色シルト混じり細砂（0.3 ～ 0.5cm 大の礫を少量含む）

SP12112

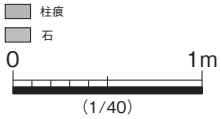


1 10YR8/2 灰白色シルト（炭化物細片を含む）＜包含層 1b 層由来のシルト＞＜柱痕＞
2 10YR7/2 にぶい黄橙色シルト混じり細砂（1.0 ～ 5.0cm 大の礫を含む）

SP12113



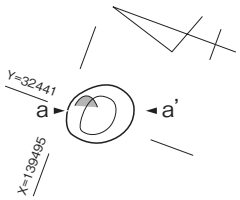
1 10YR7/2 にぶい黄橙色シルト（0.3 ～ 0.5cm 大の礫を含む）
2 10YR6/2 灰黄褐色シルト混じり細砂（1.0 ～ 5.0cm 大の礫を含む）

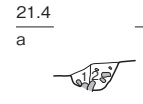


（1/40）

第 197 図　12 区ピット（古墳時代）平・断面図 2（1/40）、出土遺物 2（1/4）

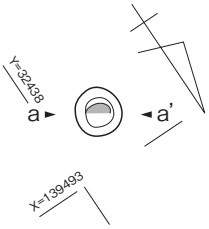
SP12120

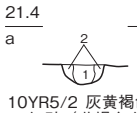




1　10YR6/6 明黄褐色シルト　＜柱痕＞
2　10YR3/1 黒褐色シルト（黄橙色シルトブロックを多く含む、1～2cm 大の礫含む）

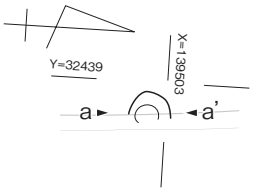
SP12122

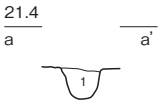




1　10YR5/2 灰黄褐色シルト～細砂（黄褐色細砂粒を少量含む）＜柱痕＞
2　10YR5/1 褐灰色シルト混じり細砂　（1.0～ 5.0cm 大の礫を含む、白色細砂粒を少量含む）

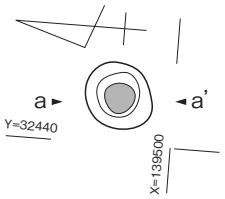
SP12123

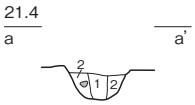




1　10YR6/2 灰黄褐色シルト～極細砂（0.3～0.5cm 大の礫を少量含む）

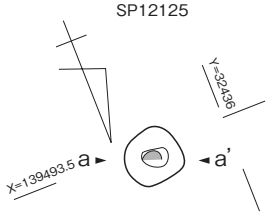
SP12124

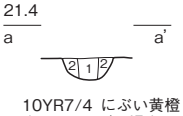




1　10YR4/1 褐灰色極細砂～シルト（1～ 3cm 大の礫を含む）＜柱痕＞
2　10YR5/1 褐灰色（2～ 3cm 大の黄褐色シルトブロックを少し含む、黄色のシルト粒少し含む）

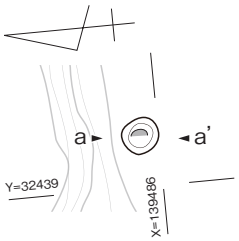
SP12125

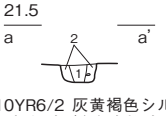




1　10YR7/4 にぶい黄橙色シルト（黒褐色シルトブロックを含む）＜柱痕＞
2　10YR4/1 褐灰色シルト（1cm 大以下の小礫含む）

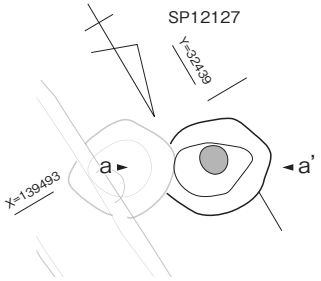
SP12126

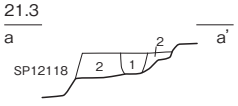




1　10YR6/2 灰黄褐色シルト～極細砂（白色中粒砂をわずかに含む）＜柱痕＞
2　10YR6/2 灰黄褐色シルト混じり細砂（1.0～ 3.0cm 大の礫を含む、炭化物細片を少量含む）

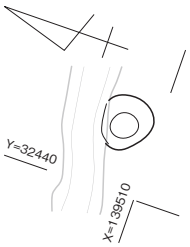
SP12127

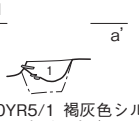




1　10YR4/1 褐灰色シルト（1～ 3cm の礫を少し含む）＜柱痕＞
2　10YR4/1 褐灰色シルト（2～ 3cm の礫を含む、黄橙色シルトブロックを少し含む）

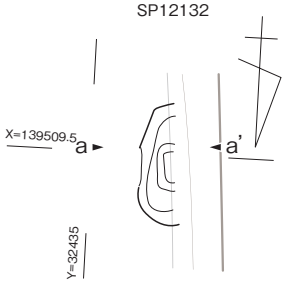
SP12131

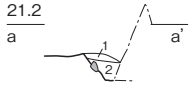




1　10YR5/1 褐灰色シルト～極細砂（1.0～ 3.0cm 大の礫を含む、黄褐色シルトブロックを含む）

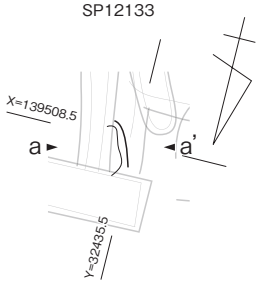
SP12132





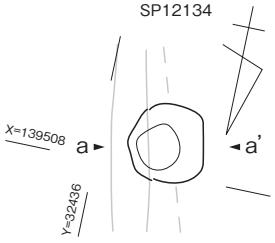
1　10YR4/1 褐灰色シルト（白色中粒砂を含む、黄褐色シルトブロックを少量含む）
2　10YR6/2 灰黄褐色シルト混じり細砂（炭化物細片を含む、0.5～ 1.0cm 大の礫を少量含む）

SP12133



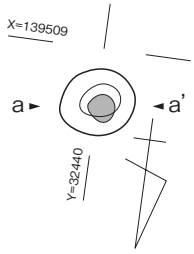
1　10YR5/1 褐灰色シルト混じり細砂（0.5～ 1.0cm 大の礫を少量含む）

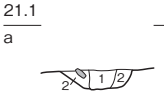
SP12134



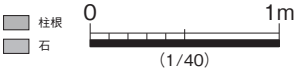
1　10YR5/2 灰黄褐色シルト～極細砂（1.0～ 3.0cm 大の礫を少量含む、白色中粒砂をわずかに含む）＜柱痕＞
2　10YR5/1 褐灰色シルト～細砂（0.5～ 3.0cm 大の礫を含む、ベースブロックを含む）

SP12135



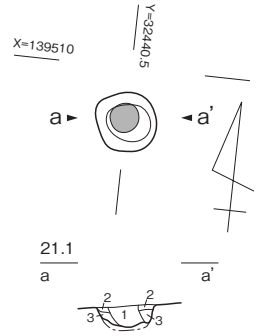


1　10YR4/2 灰黄褐色シルト～細砂（1.0～ 3.0cm 大の礫を含む、白色中粒砂を含む）＜柱痕＞
2　10YR5/1 褐灰色シルト混じり細砂（1.0～ 3.0cm 大の礫を含む、黄褐色ブロックを少量含む）



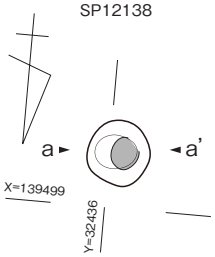
第 198 図　12 区ピット（古墳時代）平・断面図３（1/40）

SP12136



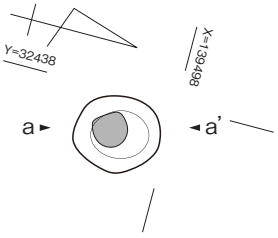
1 10YR4/2 灰黄褐色シルト（白色中粒砂を含む、ベースブロックを少量含む）＜柱痕＞
2 10YR4/1 褐灰色シルト混じり細砂（白色シルトブロックを少量含む）
3 10YR5/2 灰黄褐色シルト混じり細砂（黒褐色シルトブロックを少量含む）

SP12138



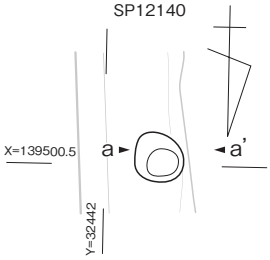
1 10YR7/2 にぶい黄橙色シルト（黄褐色シルトブロックを少し含む）＜柱痕＞
2 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト（黄褐色シルト粒5cm 大以上の礫含む）

SP12139



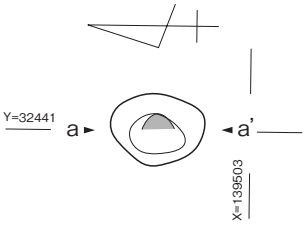
1 7.5YR7/4 にぶい橙色シルト（灰白色シルト粒含む）
2 7.5YR8/4 浅黄橙色シルト（黄褐色シルトブロックを含む、1 ～ 2cm 大の礫を含む）

SP12140



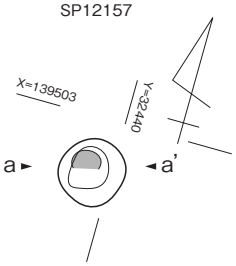
1 10YR6/2 灰黄褐色シルト混細砂（10 ～ 5.0cm 大の礫を多量に含む、黄褐色シルトブロックを含む）

SP12156



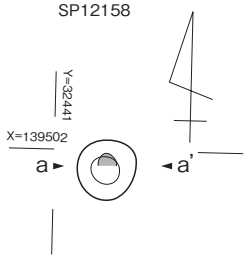
1 10YR4/1 褐灰色シルト～極細砂（0.3 ～ 1.0cm 大の礫を含む）＜柱痕＞
2 10YR4/2 灰黄褐色シルト混じり細砂（0.5 ～ 1.0cm 大の礫を少量含む）

SP12157



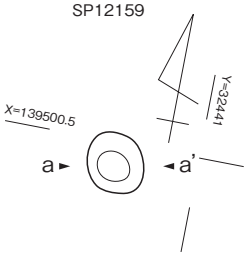
1 10YR5/2 灰黄褐色シルト～細砂（0.5 ～ 1.0cm 大の礫を含む、黄褐色シルトブロックを含む）＜柱痕＞
2 10YR6/2 灰黄褐色シルト混じり細砂（0.5 ～ 3.0cm 大の礫を少量含む）

SP12158



1 10YR4/1 褐灰色シルトから極細砂（0.5 ～ 1.0cm 大の礫を少量含む）＜柱痕＞
2 10YR5/1 褐灰色シルト混じり細砂（0.3 ～ 1.0cm 大の礫を少量含む）

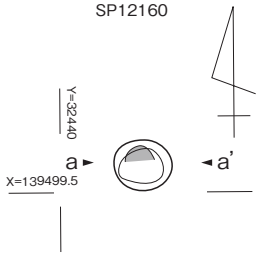
SP12159



1 10YR5/2 灰黄褐色シルト混じり細砂（1.0 ～ 5.0cm 大の礫を多量に含む）

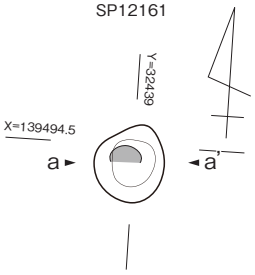
柱根
石
0
1m
（1/40）

SP12160



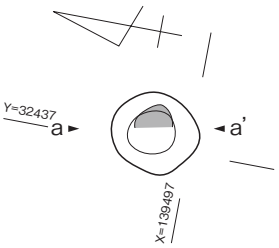
1 10YR5/2 灰黄褐色シルト～極細砂（1.0 ～ 5.0cm 大の礫を含む）＜柱痕＞
2 10YR5/2 灰黄褐色シルト混じり細砂（0.5 ～ 3.0cm 大の礫を含む）

SP12161



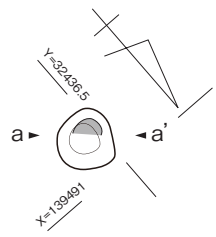
1 10YR6/3 にぶい黄橙色シルト～極細砂（0.5 ～ 1.0cm 大の礫を含む、白色中粒砂を含む）＜柱痕＞
2 10YR5/1 褐灰色シルト混じり細砂（0.5 ～ 1.0cm 大の礫を少量含む、白色中粒砂を少量含む）

SP12162



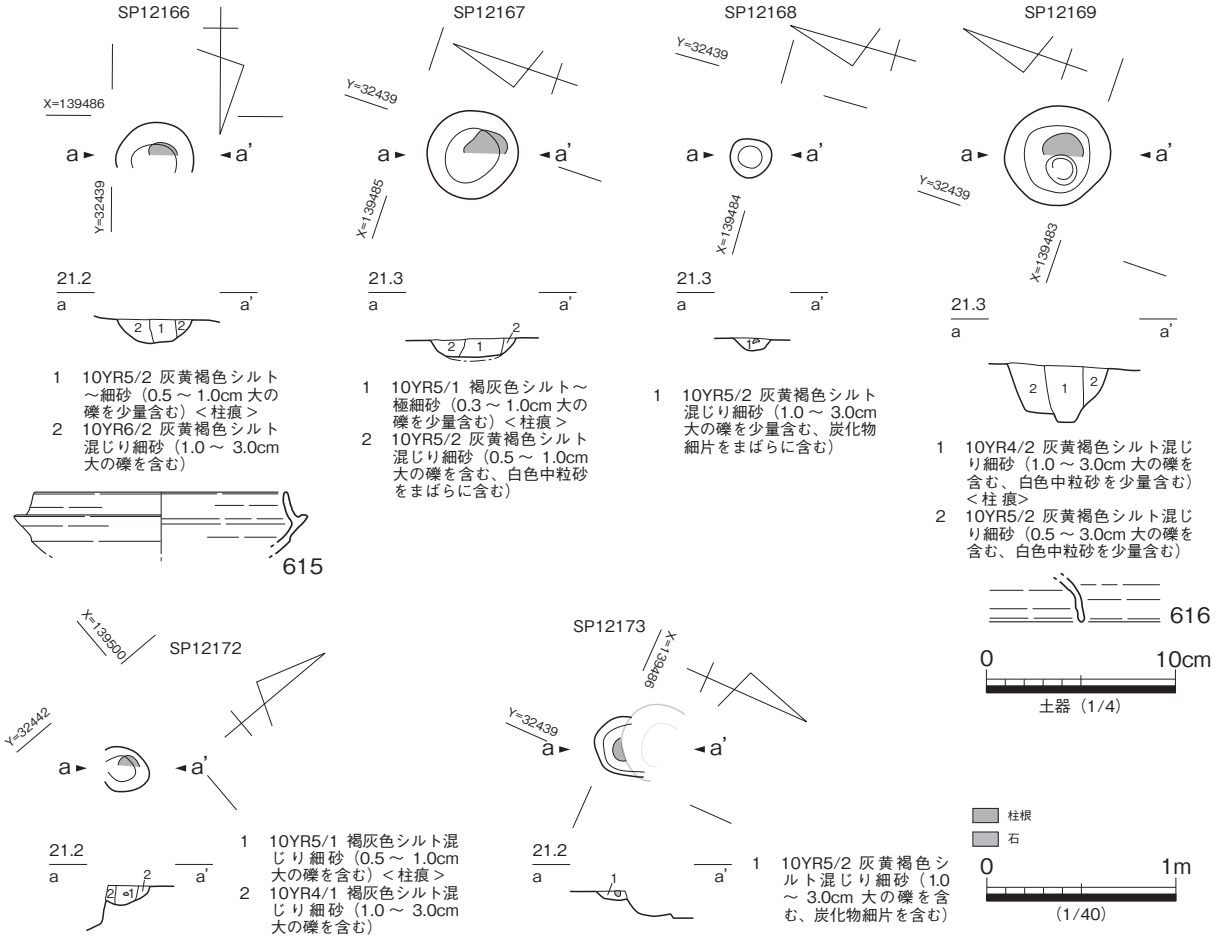
1 10YR4/2 灰黄褐色シルト混じり細砂（1.0 ～ 5.0cm 大の礫を含む）＜柱痕＞
2 10YR5/2 灰黄褐色シルト混じり細砂（0.5 ～ 5.0cm 大の礫を多く含む）

SP12165



1 10YR5/2 灰黄褐色シルト混じり細砂（0.5 ～ 3.0cm 大の礫を含む、炭化物細片を少量含む）＜柱痕＞
2 10YR5/1 褐灰色シルト混じり細砂（0.5 ～ 1.0cm 大の礫を少量含む、黄褐色シルトブロックを少量含む）

第 199 図　12 区ピット（古墳時代）平・断面図 4（1/40）



第 200 図　12 区ピット（古墳時代）平・断面図５（1/40）、出土遺物３（1/4）

第５表　報告ピット一覧（古墳時代）４

区名	遺構名 (SP 番号)	面	平面形	規模 (cm) (長軸×短軸)	深さ (cm)	掲載遺物 (報文番号)	その他の出土遺物
11 区	11105	2	円形	41	30	611(須恵器甕)	土師器小片
11 区	11106	2	−	40 × 39	30		土師器小片
11 区	11107	2	楕円形	34 × 29	48		須恵器甕片　土師器小片
11 区	11108	2	円形	33	11		土師器小片
11 区	11109	2	円形	28	11		
11 区	11113	2	円形	21	5.6		
11 区	11114	2	楕円形	27	6		
11 区	11115	2	円形	29	6		
11 区	11117	2	円形	31	43		須恵器杯身または杯蓋　土師器小片
11 区	11118	2	円形	30	17		
11 区	11119	2	楕円形	25 × 21	13		
11 区	11120	2	円形	26	10		
11 区	11121	2	円形	24	10		
11 区	11122	2	円形	27	8		
11 区	11123	2	円形	42	21		
11 区	11124	2	楕円形	40 × 33	10		
11 区	11125	2	円形	33	10		
11 区	11126	2	−	23 × 21	11		
11 区	11127	2	−	14 × 10	8		
11 区	11128	2	−	30 × 19	10		
11 区	11129	2	−	45 × 22	7		
11 区	11130	2	円形	37	13		
11 区	11131	2	円形	34	31		
11 区	11132	2	不整円形	32 × 26	7		
11 区	11134	2	−	26 × 23	15		
11 区	11135	2	円形	22	6		
11 区	11136	2	円形	25	9		

第６表　報告ピット一覧（古墳時代）５

区名	遺構名 (SP 番号)	面	平面形	規模 (cm) (長軸×短軸)	深さ (cm)	掲載遺物 (報文番号)	その他の出土遺物
11 区	11137	ベース上	円形	31	10		
11 区	11139	ベース上	円形	47	15		須恵器杯身または杯蓋　土師器小片
11 区	11140	ベース上	円形	38	17	612(須恵器杯蓋)	土師器小片
11 区	11141	ベース上	円形	24	5		
11 区	11142	ベース上	円形	41	16		
11 区	11143	ベース上	円形	35	14		
11 区	11144	ベース上	不整円形	38 × 34	10		
11 区	11146	ベース上	−	31 × 23	7		
11 区	11148	ベース上	楕円形	40 × 34	11		
11 区	11149	ベース上	円形	29	7		
11 区	11150	ベース上	不整円形	36 × 29	5		須恵器杯身または杯蓋
11 区	11151	2	円形	30	9		須恵器甕片・土師器小片
12 区	12043	2	不整円形	54 × 53	41		
12 区	12049	2	円形	41	18		土師器小片
12 区	12092	2	円形	43	14		須恵器・土師器小片
12 区	12093	2	円形	43	35		
12 区	12094	2	円形	46	12		
12 区	12096	2	円形	55	25		
12 区	12097	2	円形	26	39		須恵器甕片・土師器小片
12 区	12098	2	円形	41	22		
12 区	12099	2	円形	52	19		須恵器杯身または杯蓋　土師器小片
12 区	12100	2	不整円形	61 × 56	19	613(須恵器杯)	須恵器杯身または杯蓋　土師器小片
12 区	12101	2	円形	24	21		
12 区	12102	2	円形	38	16		土師器小片
12 区	12103	2	円形	33	8		
12 区	12104	2	円形	28	17	614(土師器高杯)	
12 区	12106	2	円形	28	15		土師器小片
12 区	12107	2	円形	47	16		土師器小片
12 区	12108	2	円形	52	27		須恵器甕・杯身または杯蓋 土師器小片　サヌカイト片
12 区	12109	2	楕円形	57 × 42	11		土師器小片
12 区	12110	2	−	35 × 24	8		
12 区	12111	2	円形	24	6		
12 区	12112	2	不整円形	30 × 28	10		土師器小片
12 区	12113	2	円形	29	11		土師器小片
12 区	12119	2	−	17 × 12	10		
12 区	12120	2	楕円形	37 × 30	15		須恵器甕片　土師器小片
12 区	12122	2	円形	26	10		
12 区	12123	2	円形	22	18		
12 区	12124	2	円形	38	18		土師器小片
12 区	12125	2	円形	32	12		
12 区	12126	2	円形	20	11		土師器小片
12 区	12127	2	不整円形	58 × 50	19		
12 区	12131	2	円形	29	12		土師器小片
12 区	12132	2	隅丸方形	64 × 23	14		土師器小片
12 区	12133	2	−	26 × 10	27		土師器小片
12 区	12134	2	不整円形	42 × 40	36		須恵器甕片　土師器小片
12 区	12135	2	円形	41	11		土師器小片
12 区	12136	2	円形	34	11		
12 区	12138	2	円形	35	12		
12 区	12139	2	楕円形	46 × 41	8		
12 区	12140	2	円形	29	40		土師器小片
12 区	12156	ベース上	楕円形	49 × 38	19		須恵器杯身または杯蓋 土師器小片
12 区	12157	ベース上	円形	36	12		土師器小片
12 区	12158	ベース上	円形	32	16		
12 区	12159	ベース上	円形	35	16		土師器小片
12 区	12160	ベース上	円形	30	15		土師器小片
12 区	12161	ベース上	楕円形	42 × 38	14		土師器小片
12 区	12162	ベース上	円形	45	17		
12 区	12165	ベース上	円形	33	21		
12 区	12166	ベース上	円形	41	13	615(須恵器杯身)	土師器小片　サヌカイト片
12 区	12167	ベース上	円形	48	10		
12 区	12168	ベース上	円形	21	7		
12 区	12169	ベース上	円形	56	30	616(須恵器杯蓋)	須恵器・土師器小片
12 区	12172	ベース上	楕円形	25 × 24	10		土師器小片　サヌカイト片
12 区	12173	ベース上	−	31 × 25	5		土師器小片